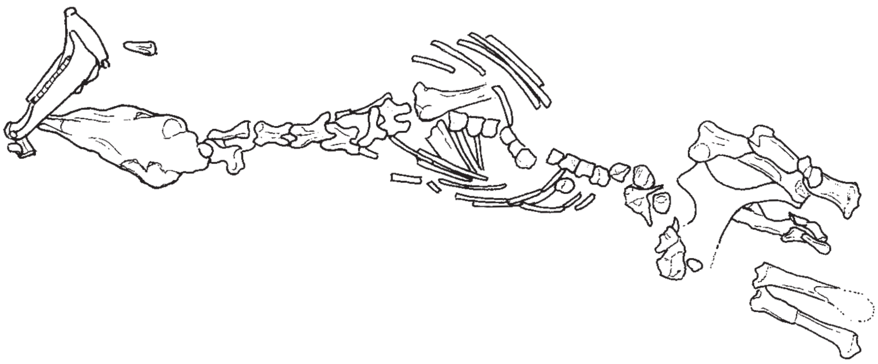
太宰府市の文化財　第107集

# 太宰府条坊跡 40

－第217・224次調査－



平成21(2009)年

太宰府市教育委員会

# 大宰府条坊跡第 217 次調査

第 217 次調査区全景（上が北）

五条構口の石垣（217SA040）検出状況（北西より）

224SD050 茶灰色砂質土獣骨出土状況（西から）

224SD050 黒灰色粘質土人骨・獣骨出土状況（東から）

# 序

本報告書は、共同住宅ならびに店舗建設に伴い太宰府市五条２丁目にて平成 13、14、15 年度に実施した大宰府条坊跡第 217、224 次調査の報告書です。

調査地域は、大宰府条坊跡の北東に位置し、調査の結果、この二つの調査地においては条坊の平安時代の京極大路と考えられる左郭 12 坊路が検出されています。また、この側溝からは多量の人骨を含む動物遺体が検出されるなど、古代後半期における当地域での土地利用状況や周辺での生活の有様を考える上で重要な所見を得ることができました。また、江戸時代においては、この場所が宰府宿の玄関口としての五条の構い口があった場所であり、宰府六座が展開した商工業者の居住区域でもあって、それにまつわる遺構や遺物も発見されており、宿の構造を考える上で貴重な所見を得ることができました。

本書が、学術研究はもとより文化財への理解と認識を深める一助となり、広く活用されることを心より願います。

最後になりましたが、当該調査に対しご理解頂きました皆様をはじめ、関係諸機関の皆様方に心よりお礼を申し上げます。

平成 21 年３月

太宰府市教育委員会

教育長　關　敏治

# 例　言

1．本書は太宰府市五条２丁目にて平成 13、14、15 年度に実施した大宰府条坊跡第 217、224 次調査の報告書である。

2．遺構の実測には、国土調査法第 II 座標系を利用した。したがって本書に示される方位は特に注記のない限り G.N.（座標北）を示し、本文中に記される遺構の角度もこれを基準としたものである。

3．本書に掲載される遺構番号は､以下の要領で理解される｡なお遺構の性格を表記する記号については、SA 柵列跡、SB 掘立柱建物跡、SD 溝、SF 道路状遺構、SI 住居跡、SK 土坑、ST 墳墓、SX その他の遺構 などであり、略号として以下のように記載している。

条　217　SX　001

遺跡名　調査次数　遺構種別　遺構番号

　また、CD-ROM に収納している遺物写真のうち条坊 224 次の骨については、収納遺物との対照のために略号を「50 黒灰色土 / 原図 2/23/045」のように注記している。記載内容は、遺構番号と土色 / 現場実測図番号 / 現場取上げ番号 / 整理番号である。これは Tab224-2 と対照できるようになっている。

4．遺構の実測及び写真撮影は調査担当者の他、森若知子、長直信、文化財写真工房（代表　岡紀久夫）が行った。

5．各調査地点の全体図は手測りによる実測図からデジタルトレースを行い浄書した。

6．遺構の空中写真撮影は（有）空中写真企画（代表、檀睦夫）が行った。

7．出土品の科学分析は（株）パリノ・サーヴェイに委託した。

8．出土した金属製品の保存処理は下川可容子、安芸朋江が行った。

9．遺物の実測は、調査・報告担当者のほか、木戸雅美、久家春美、福井円、森部順子、森田レイ子が行った。

10. 表入力・写真整理は市川晴美、瀬戸口みな子、福井が行った。

11. 遺物の整理接合・復元作業は馬場由美、住山景子、末永亜由子、が行った。また、出土した骨の整理は基礎作業を柳智子がおこない、獣骨を独立行政法人奈良文化財研究所松井章先生、人骨を九州大学比較社会文化研究院田中良之先生にご協力いただき、玉稿を賜った。

12. 遺物の写真撮影は山村信榮と柳が行った。

13. 図の浄書は、調査・報告担当者および遺物実測者が行った。

14. 本書に用いた分類は以下のとおり。

土器・・・・『大宰府条坊跡 II』（太宰府市の文化財第７集）1983

須恵器・・・『宮ノ本遺跡 II　－窯跡篇－』（太宰府市の文化財第 10 集）1992

陶磁器・・・『大宰府条坊跡 XV　－陶磁器分類－』（太宰府市の文化財 第 49 集）2000

瓦・・・・・『大宰府史跡出土軒瓦・叩打痕文字瓦型式一覧』 九州歴史資料館 2000

　　　　　『宝満山遺跡群 4』（太宰府市の文化財第７９集）2005

瓦質・土師質土器・・・「太宰府出土の瓦質土器」 山村信榮 『中世土器の基礎研究 VI』 1990

15. 執筆分担は目次に表記している。編集は、山村と柳がおこなった。

# 目　次

## Ⅰ. 調査地の歴史的環境

### a 条坊プランについて

大宰府は九州島の北辺にあって古代西海道を統括し、外交手続き上の窓口として制度的に位置づけられた任務を負った古代官衙であった。官庁としての大宰府跡は大野山裾の谷地を造成して建設された築地・回廊・南門・中門・4つの脇殿・正殿・後殿からなる朝堂院形式の建物群として知られ、政庁とその南側を西流する御笠川に挟まれた東西約700m、南北約250mの範囲を中心に官庁街たる曹司群が発見されている。御笠川以南には条坊が施工されていた。近年の調査で明らかになりつつある約90m方眼の街路からなる条坊跡の存在が有望となり、宮都を模した日本的な都城型の都市遺跡であると考えられるようになった。都市域の生成は7世紀後半代には諸所に整地が施され、8世紀には広範囲に亘って街路と正方位に制約を受けた掘立柱建物・井戸・土坑からなる生活遺構が出現している。条坊プランは延喜五年（905）に成立した『観世音寺資財帳』に見られる条坊表記から、中心街路を境に西が右郭、東が左郭と呼称され、南北22条東西24坊あったと想定されている。条坊区割りは平安時代に引き継がれる箇所も多々あるが、11世紀中頃以降に街路が完全に屋敷に占拠される箇所（条坊257次、推定左郭15条2坊）や11世紀後半に90mプランではなく推定郭外の条里型地割りに合致する街路を伴った屋敷地が一時的に成立するエリア（条坊222次、推定右郭12条11坊）など、平安後期のあり様はさまざまであり一つのモデルでは描ききれないのが実情である。

### b 新たな都市空間（斜行地割の成立）

条坊区画は緩慢に埋没し、一部では灌漑施設や耕作地の大畦畔となり土地にその痕跡を残す結果となったが、条坊北東域の左郭北辺においては条坊区割りを踏襲する形で13世紀代の都市的な空間が形成され、推定五条の旧京極大路の東外縁部では新たに北に対し約6度東に斜行する道路が12世紀代に出現している（条坊137次、太宰府市教委2003)。また、12世紀前半以降には大宰府天満宮の境内西側の連歌屋遺跡においては、現在の南北の基幹道路（通称「小鳥居小路」）に沿って北に対し約6度強東に斜行する大溝が連続して検出されている。この溝はかつての安楽寺天満宮の伝承や伝来する境内図から寺地の外郭線と考えられ、旧境内地内でもほぼ同時期に大規模な整地地業がおこなわれた痕跡があることから、平安後期に天満宮周辺が開発された際の基準的なラインであった可能性が考えられる（太宰府市教委2003)。条坊の五条京極付近から天満宮に至る間の調査では12世紀中頃以降の華南産白磁を伴う生活空間が広く存在したことが発掘調査により知られており、その生活遺構の集中は鎌倉時代にも継続する。先の連歌屋遺跡においては鎌倉期に属す掘立柱建物が北に対し約6度強東に斜行する平安期の方位を踏襲しており、さらに現況地割りの中にその振れを持つ複数の道筋を確認することが出来ることから、条坊北東域において12世紀代に東に斜行する条坊とは異なる新たな斜行地割による都市的な空間が成立したことが想定しうる。

この新たな都市的な空間成立の背景には、条坊域とは異なる原理が作用していたように思われる。正方位を採用しない背景にはこの条坊北東地区の谷状地形の長軸線が優先された結果と考えられ、その方向も北に行くほど2,3度ほど振れが大きくなる所見もあり、方画地割りの施行は困難であり、条坊の宅地班給のような街区の内包される面積を優先するような思想では説明がつかない。おそらくは通り筋の設定と通り同士の連接が優先事項であり、周辺の土地形状は緩慢に至近の道路や大溝の方位を利用する状況であったのではなかろうか。先の天満宮西の基準線は北に延長すれば天台宗に属す原山(無量寺)の「阿弥陀ヶ峰」の丘に至り、南には経筒の出土した「峰ノ薬師」の丘陵がそびえる。天満宮の周辺においては天満宮安楽寺の寺地の拡大整備に伴う可能性があることは先に述べたが、この空間には寺社の影響が大きく作用していた可能性が指摘できよう。

### c 五条

本報告の調査は道路拡張事業に伴うもので、調査を行った現況道路は政庁前面の東西道路にあたる 4 条路と 12 坊路（条坊井上案）が交差する地点にあり、現在も五条交差点として古代条坊地割と重複する場所である。左郭 12 坊路は『八幡宇佐宮御神領大鏡』康和 4 年（1102）条に記載される府中宇佐町に接する「京極大路」とも考えられる。ちなみに調査地区は 4 条路の南側で 5 条エリアに含まれる。

### d 宰府六座

このいわゆる五条交差点付近は中世後期から近世にかけての商職人が集住したエリアであり、そこには商工業の組織としての「六座」が存在していたことが「六座之記録」（高嶋文書）などの古文書からわかっている。六座とは米屋（古川家）、金屋（平井家）、小間物屋（安武家）、相物屋（古川家）、紺屋（船越家）、鍛冶屋（斉藤家）であり、この 6 軒の家々が同業者の頭として市場を支配していた。米屋は米の売買とともに金融業も兼ね、金屋は鋳物と瓦の生産、小間物屋は小間物一切を、相物屋は魚の類を、紺屋は染物を、鍛冶屋は切り物の類を生計の柱としていた。

### e 米屋古川家（屋号「米長」）

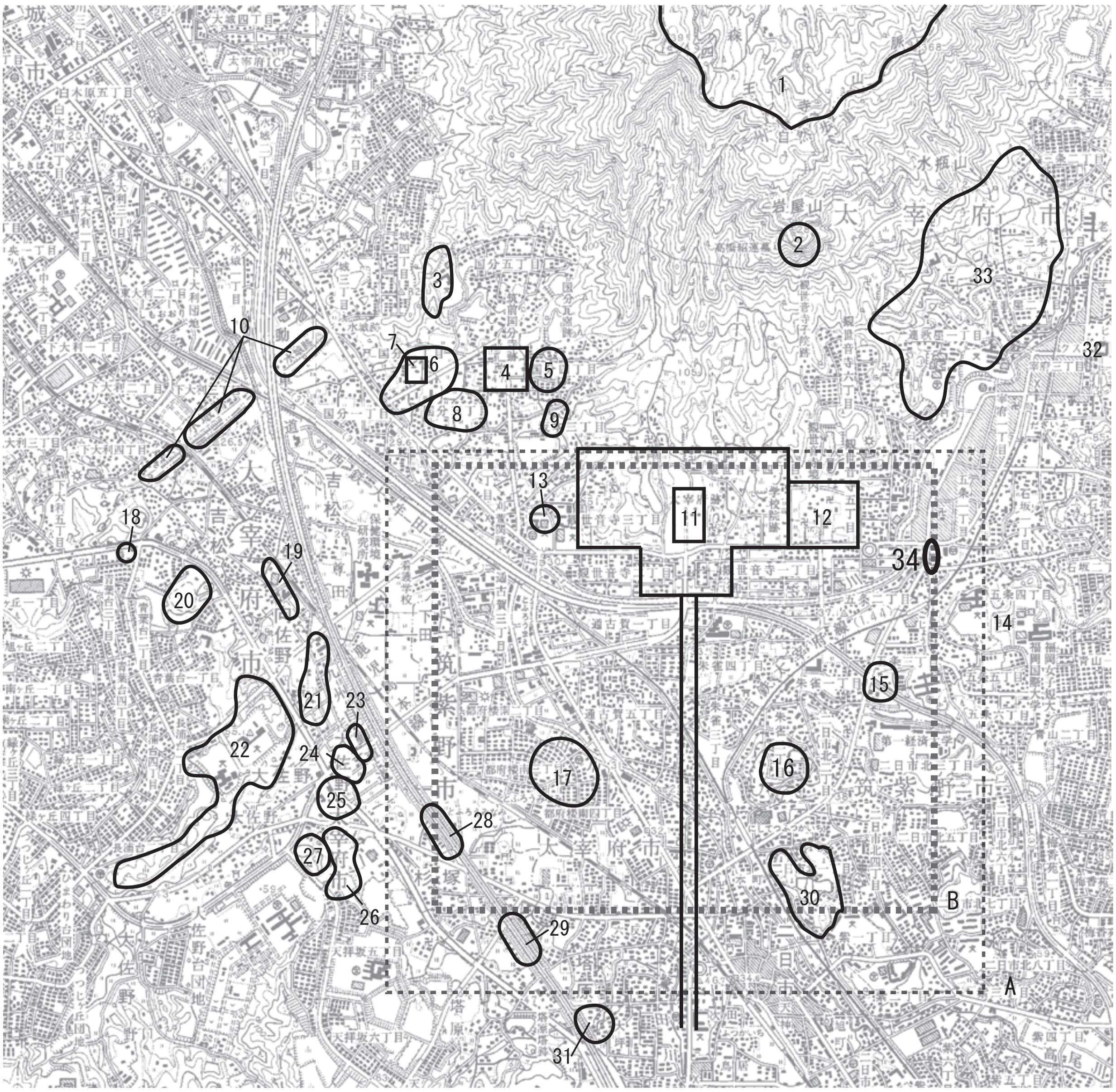
本報告の条坊 224 次調査地点は、六座のうちの米屋が地所としていた場所に当たる。米屋古川家は「六座之記録」によれば、穀物の類の相場を決めてきたが今では宰府の市で米の値段を決めている、と記載される家で屋号を「米長（こめちょう）」と言った。敷地内には「金掛けの梅」と呼ばれる道真伝説にまつわる梅が調査区に近い敷地の南西側にかつてあって、その傍らに金掛天満宮が祭られていた。現在ではその梅は枯れて社も東端へ移転しているが、太宰府天満宮の神幸式においてこの敷地の前で輿が止められるなど、天満宮とその門前の町衆としての六座との関係をつなぐ貴重な文化遺産となっている。

### f 御神幸式と「どんかんみち」

太宰府天満宮の神幸式は天満宮本殿から道真の居所であった南館（現在の榎社）までを往復するパレードであるが、縁起は康和 3（1101）年時の大宰府権帥大江匡房が夢想によって始めたとされる。往時都で盛んであった御霊会（現在の祇園祭）などの影響によって都市大宰府に導入された神事と思われる。この神幸のルートは天満宮を発して斜行ルートの中央を抜けて五条の交差点（条坊井上案では左郭 4 条 12 坊交差点）を抜けて本報告地点を通り、条坊左郭内を斜行し、右郭 12 条 1 坊の榎社（浄妙院）に至る。このルートは隊列の鳴り物から付けられたとされる「どんかんみち」という呼称を持った古道である。近世にはこのルートは二日市宿から宰府宿に至る日田街道の分岐道として位置付けられた公道であった。条坊 217 次地点はこの宰府宿の南側の玄関口として位置付けられ、五条口の名称で呼ばれ（太宰府旧蹟全図北では「タカハシ口」）、宿の入口施設としての石垣の上に白壁、その上に瓦を葺いた「構い口」と称される土塀（pla.6）がかつてあった。

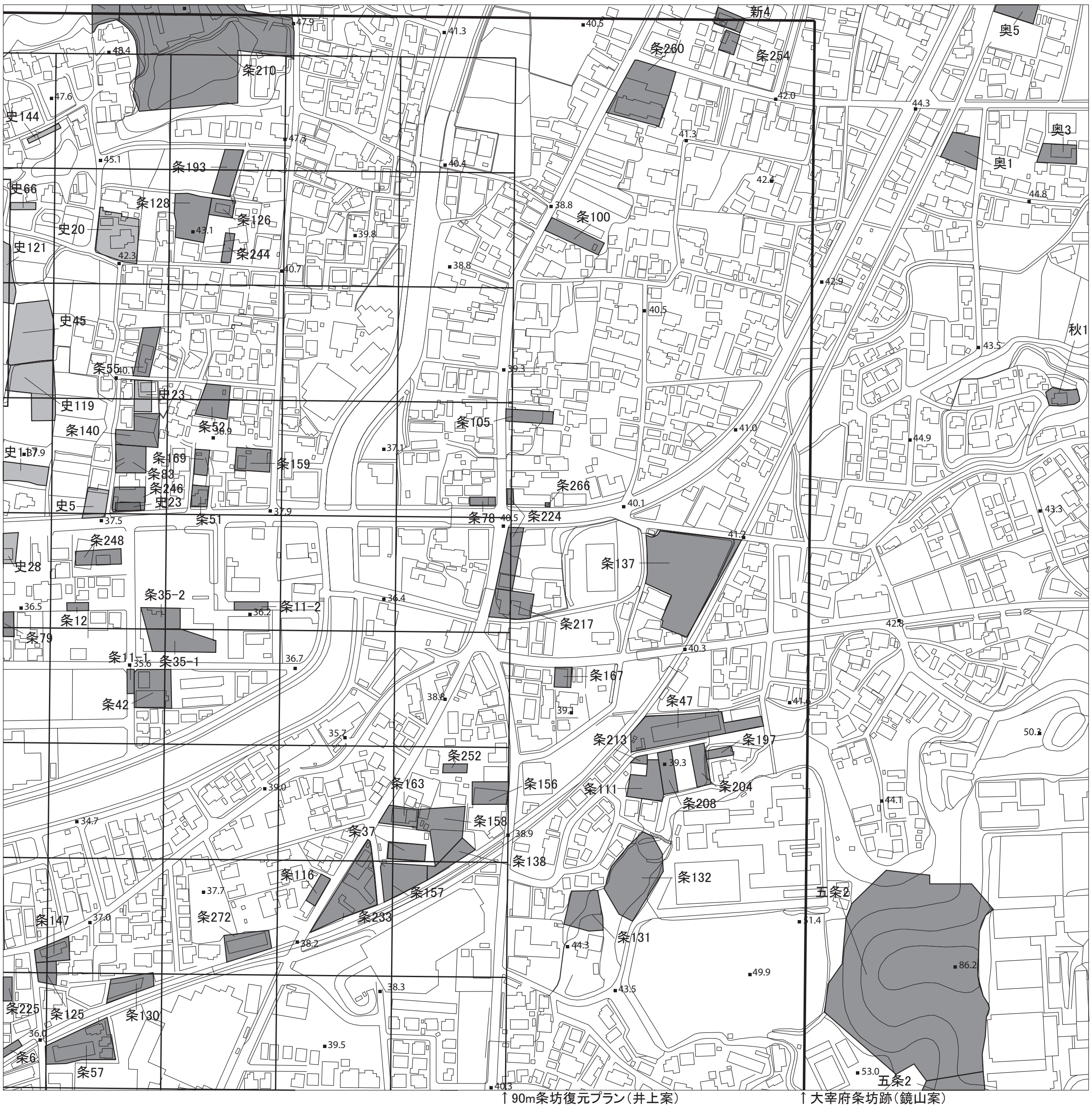
参考文献

井上信正 2001「大宰府の街区割りと街区成立についての予察」『条里制・古代都市研究会』17 号
太宰府市教育委員会 2003『連歌屋遺跡 1』
太宰府市 1993『太宰府市史　民俗資料編』
太宰府市 2004『太宰府市史　通史編 II』



1. 大野城跡
2. 岩屋城跡
3. 陣ノ尾遺跡
4. 筑前国分寺跡
5. 辻遺跡
6. 国分松本遺跡
7. 筑前国分尼寺跡
8. 国分千足町遺跡
9. 御笠団印出土地
10. 水城跡
11. 大宰府政庁跡
12. 観世音寺
13. 遠賀団印出土地
14. 五条遺跡（峯薬師）
15. 君畑遺跡
16. 般若寺跡
17. 市ノ上遺跡
18. 神ノ前窯跡
19. 原口遺跡
20. 篠振遺跡
21. 前田遺跡
22. 宮ノ本遺跡
23. 雛川遺跡
24. フケ遺跡
25. 尾崎遺跡
26. 脇道遺跡
27. 殿城戸遺跡
28. 剣塚遺跡
29. 唐人塚遺跡
30. 峯・峯畑遺跡
31. 桶田山遺跡
32. 太宰府天満宮（安楽寺跡）
33. 原遺跡
34. 条坊217, 224次（報告地点）
A　大宰府条坊跡（鏡山案）
B　大宰府条坊跡（井上案）

fig.1　大宰府とその周辺の遺跡（1/30,000）




↑90m条坊復元プラン（井上案）　↑大宰府条坊跡（鏡山案）

条○・・・大宰府条坊跡第○次調査
新○・・・新町遺跡　奥○・・・奥園遺跡
秋○・・・秋山遺跡　五条○・・・五条遺跡　（以上、太宰府市教委　調査分）
史○・・・大宰府史跡第○次調査　　　（以上、九州歴史資料館　調査分）

fig.2　周辺の調査区（1/5,000）

## Ⅱ．調査組織

調査を実施した平成 13 ～ 15 年度、および整理報告を行った平成 20 年度の調査組織は、以下の通りである。

(平成 13 ／ 2001 年度)

| | | |
|---|---|---|
| 総括 | 教育長 | 關　敏治 |
| 庶務 | 教育部長 | 白石純一 |
| | 文化財課長 | 木村和美 |
| | 文化財保護係長 | 和田敏信 |
| | 文化財調査係長 | 神原　稔 |
| | 事務主査 | 藤井泰人 |
| | 主任主事 | 大石敬介 |
| 調査 | 主任主査 | 城戸康利 |
| | 主任技師 | 山村信榮 |
| | | 中島恒次郎 |
| | | 井上信正（条坊 217 次調査担当） |
| | | 高橋　学 |
| | | 宮崎亮一 |
| | 技師（嘱託） | 下川可容子 |
| | | 森田レイ子 |
| | | 佐藤道文 |

(平成 14 ／ 2002 年度)

| | | |
|---|---|---|
| 総括 | 教育長 | 關　敏治 |
| 庶務 | 教育部長 | 白石純一 |
| | 文化財課長 | 木村和美 |
| | 文化財保護係長 | 和田敏信 |
| | 文化財調査係長 | 神原　稔 |
| | 事務主査 | 藤井泰人 |
| | 主任主事 | 大石敬介 |
| 調査 | 主任主査 | 城戸康利 |
| | 技術主査 | 山村信榮（条坊 224 次調査担当） |
| | | 中島恒次郎 |
| | 主任技師 | 井上信正 |
| | | 高橋　学 |
| | | 宮崎亮一 |
| | 技師（嘱託） | 下川可容子 |
| | | 森田レイ子 |
| | | 柳　智子（条坊 224 次調査担当） |
| | | 渡邊　仁 |

(平成 15 ／ 2003 年度)

| | | |
|---|---|---|
| 総括 | 教育長 | 關　敏治 |

| | | |
|---|---|---|
| 庶務 | 教育部長 | 白石純一 |
| | 文化財課長 | 木村和美 |
| | 文化財保護係長 | 和田敏信（～6月30日） |
| | | 久保山元信（7月1日～） |
| | 保護活用係長 | 久保山元信（10月1日～） |
| | 文化財調査係長 | 神原　稔（～9月30日） |
| | 調査係長 | 永尾彰朗（10月1日～） |
| | 事務主査 | 藤井泰人 |
| | 主任主事 | 大石敬介 |
| 調査 | 主任主査 | 城戸康利 |
| | 技術主査 | 山村信榮（条坊224次調査担当） |
| | | 中島恒次郎 |
| | 主任技師 | 井上信正 |
| | | 高橋　学 |
| | | 宮崎亮一 |
| | 技師（嘱託） | 下川可容子 |
| | | 森田レイ子 |
| | | 柳　智子（条坊224次調査担当） |
| | | 渡邊　仁 |

（平成20／2008年度）

| | | |
|---|---|---|
| 総括 | 教育長 | 關　敏治 |
| 庶務 | 教育部長 | 松田幸夫 |
| | 文化財課長 | 齋藤　廣之 |
| | 保護活用係長 | 菊武　良一 |
| | 調査係長 | 永尾彰朗 |
| | 主任主査 | 吉原慎一 |
| | | 齋藤実貴男 |
| 調査 | 主任主査 | 城戸康利 |
| | | 山村信榮（条坊224次整理報告担当） |
| | | 中島恒次郎 |
| | 技術主査 | 井上信正（条坊217次整理報告担当） |
| | 主任技師 | 高橋　学 |
| | | 宮崎亮一 |
| | 技師（嘱託） | 柳　智子（条坊224次整理報告担当） |
| | | 下高大輔 |
| | | 大塚正樹 |

また、調査･報告に際して以下の方々に御指導･ご教示をいただいた。田中良之･舟橋京子･端野晋平･岡崎健治・板倉有大（九州大学比較社会文化研究院）、松井章（独立行政法人奈良文化財研究所）、菊地大樹･石丸恵利子（京都大学）狭川真一（財団法人元興寺文化財研究所）、屋山洋（福岡市教育委員会）、森下恵介（奈良市教育委員会）・勝田至（芦屋大学）（以上、敬称略す。所属は調査時点）

## Ⅲ．各調査の概要

### Ⅲ -1　第 217 次調査

#### 1．調査環境

調査地は太宰府市五条２丁目 2461-1、2461-4 である。ここは県道筑紫野古賀線の五条交差点から南へ約 60 ～ 70 ｍの地点にあり、土地の南は西へと流れ下る藍染川で区切られている。

平成 12（2000）年９月 20 日に、県道拡幅に伴い対象地において共同住宅建築を行う、という内容で、文化財取扱いの問い合わせが本市教育委員会文化財課にあった。ここは周知の遺跡大宰府条坊跡に含まれており、確認調査を行うことで協議を行い、12 月 19 日に確認調査を行ったところ、現況地盤下約 50 ～ 60cm に埋蔵文化財があることがわかった。その後、原因者負担金により記録保存のための文化財調査を実施することとなった。なお対象地西側は福岡県那珂土木事務所による県道拡幅（147.42 ㎡）、東側は地権者によるマンション建設（404.18 ㎡）を行うため、費用はそれぞれに負担いただくが、調査は同時に行うことで合意を得た。調査は平成 13 年４月３日から７月６日で行った。調査面積は 315.3 ㎡で、調査は井上信正が担当した。

#### 2．層位等

調査区全面に茶色土層が堆積しており、この中に建物基礎などが散在している状況だった。これを除去すると調査面となった。表土上面から遺構面までは約 0.4 ～ 0.5 ｍ程度である。

地山については、SD015 東肩付近を境として東西で違いがある。

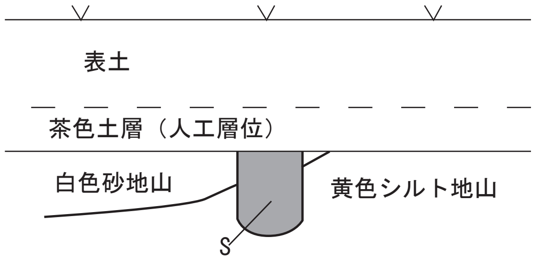



fig.3　大宰府条坊跡第 217 次調査　土層模式図

SD015 の東側は黄色シルト質の地山で、滞水時の水はけがあまり良くはない。このことから、この地山に掘削された東西溝 SD020 は排水が重要視されたことが想像される。溝底が東に向かって低くなっていることから、水は東に流れたことが窺える。

SD015 の西側は白色砂地山である。表面近くではこの上に茶白シルト～砂の地山層が堆積しているところもある。こちらは大変水はけが良く、多少の降水ならそのまま地中に吸い込むようだ。ただ、滞水あるいは流水がはじまると、この白色砂地山に達した遺構は壁面崩落しやすいことが調査の際に観察された。このことから、深く掘り下がった遺構が保全措置をとられずに継続的に開口状態が維持されていたとは想像しにくい。ただ、この地山に切り込む SD045・050 などの区画溝をみると、溝底が連続土坑状となっており一部が極端に深く掘り下がったものも観察される。この状態で開口していたのは、おそらく短期間であっただろうと想像がつく。そうすると、こうした溝底が連続土坑状となっているのは、溝浚えなどに伴う一時期の掘削による掘り込みと想定される。地下に水を逃すための臨時的な掘削かもしれない。通常は溝幅程度の深さ（連続土坑掘方上面付近）が開口していたのではないか。なお SD015 について、東肩が地山境界に沿うこと、他溝に比べて溝幅が広いことから、こうした水の作用による溝肩崩落により溝が広がったことも考えられる。後述のように、SD015 は SD020 と接続しており、SD020 が SD015 からの排水を担っていたことも想定され、これらが機能していた時は、溝内に滞水・流水作用があったことも考えられるところである。


fig.4　大宰府条坊跡第 217 次調査　全体遺構図（1/100）


fig.5　大宰府条坊跡第 217 次調査　遺構配置図（1/100）

### 3. 遺構

塀（五条構口の基礎石組み）

217SA040・060（fig.4・6、CD 写真 8 ～ 19）

調査区西端で検出した石組み遺構で、現道路に面して石垣が設けられている。ここは江戸時代の宰府町入口の一つ五条構口で、構口の白壁土塀が存在していた場所である。本遺構はその基礎部にあたるものである。南北長 3.4 m、東西幅 0.82 mを測る（SA040）。確認した範囲では、基礎部分には幅 0.7 ～ 0.8 m、高さ 0.3 m程度の腰石を 4 個を並べ、北端に長さ 0.6 m、幅 0.4 m、高さ 0.5 m程の巨石を置く。腰石の上にも幅 0.5 m強、奥行 0.3 ～ 0.4 m、高さ 0.3 m程度の石を 6 個分（1 個は欠失）並べている。石組みの中は 0.1 ～ 0.2 m程度の栗石が詰められている。栗石は南端から東へ 6.0 m伸びていることが観察され（SA060)、全体としてはL字形だったことが窺える。

昭和 30 年代に撮影された写真（吉塚太喜雄氏所蔵、pla.6）をみると、石垣が 3 段ほど築かれていたこと、その上に瓦葺白壁土塀が設けられていたことがわかる。ただ上部構造に関する遺物等は出土していない。

溝

217SD015（fig.4・7、CD 写真 20 ～ 22）

調査区中央で検出した南北溝である。検出長 10.5 m、幅 2.13 ～ 3.34 m、残りの良いところは深さ 0.5 m程度、北端は一段高くなり深さ約 0.3 mとなる。溝底はほぼ水平だが、後述のように SD020 との接合付近は若干低くなっている。溝は調査区北へさらに延びているが、南端は後世の削平もあって、調査区内で消失している。溝中央は東から延びる SD020 と接合している。この両遺構は各々の埋没時期に差があるため検出時には埋土に切りあいが確認されたが、同時に開口していた可能性がある。それは、接合部の溝底には SD015 に沿って南北に走行する土留めと見られる高まり（SX026）があって、SD015 溝底に堆積する淡灰シルト・黒褐色砂質土がこの高まり（SX026）上面まで堆積していたことから想定するものである。この付近が SD015 溝底では最も低いこと、この溝底の堆積が水の滞水作用で生じたものにみえることから、SD015 の水が SD020 へ流れ込むような機能的な関連があったことを想定している。

埋土は上から黒色土、淡茶色土に分かれ、順に遺物を取り上げた。黒色土には地山土等のブロック土塊は見られない。

本遺構の開削時期については、SD020 と機能的な関連があったことを鑑みると大宰府編年 XII 期（11c 後～ 12c 初）に遡ることが考えられる。開削時期を XII 期と想定できることは、本遺構が SD025（SF075 東側溝）の機能を踏襲して付け替えられたとの想定も補完するものとなろうか。遺構埋没時期については、出土遺物から大宰府編年 XIV・XV 期頃（12c 後半）とみられる。

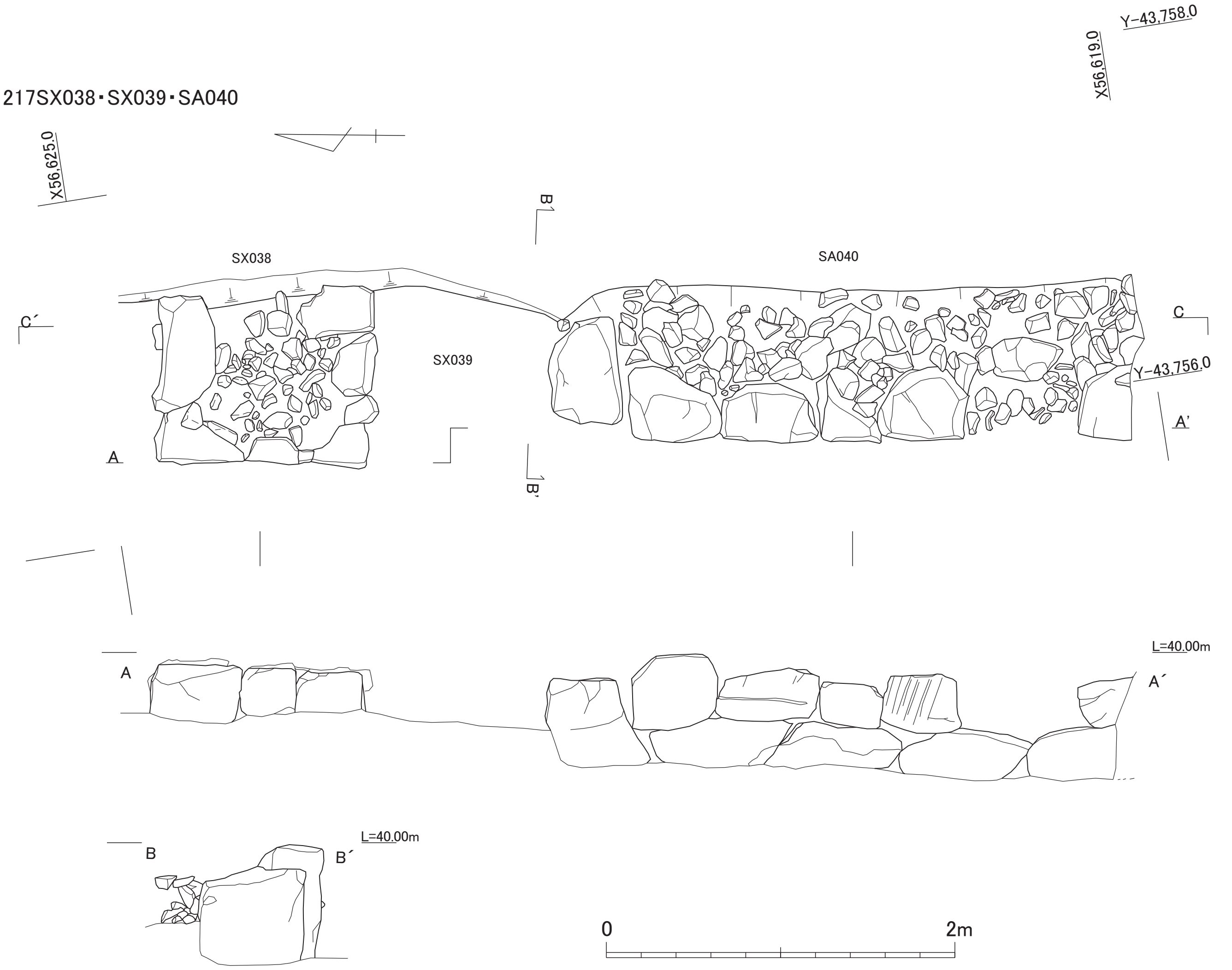
なお本遺構は、政庁 III 期の左郭 12 坊路新段階道路の東側溝（SF070 東側溝）と想定している。

217SD020（fig.4・7、CD 写真 23 ～ 27）

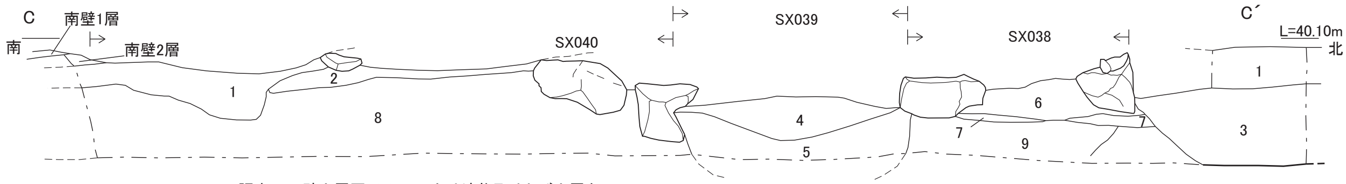
調査区北東で検出した東西溝である。検出長 8.7 m、幅 2.3 ～ 3.3 m。深さ最大約 0.8 m（東端）で、溝はさらに東へ延びている。溝底は東側がより低く、溝底中央の西端と東端では約 0.5 mの差がある。西端は SD015（SF070 東側溝）と接合している。SD015 の項で述べたように、本遺構と同時に開口しかつ機能的な関連があったことが想定される。SD015 と埋土に切り合いが認められることは、本遺構の方が SD015 より先に役目を終えたことを物語るものであろう。

埋土は上から黄黒色土、黄灰色土、灰色土に分かれ、順に遺物を取り上げた。溝底はやや砂を含む灰

217SX038・SX039・SA040

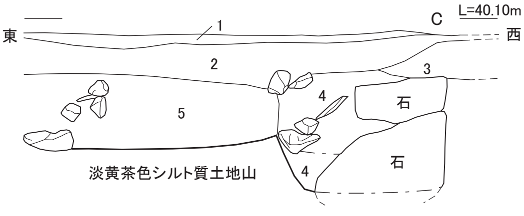



217SX038・SX039・SA040(構口)等土層図




調査区西壁土層図 ※< >内は遺物取り上げ土層名
1.茶色土 ・・・<表土>
2.明橙茶色土(やや灰色気味。濃橙色粘土を部分的に含) ・・・< 〃 >
3.暗茶灰色土(土器片含。木根部分的に含む。淡茶色シルトもブロック状に含。調査区南壁1層と同層) ・・・< 〃 >
4.暗茶色土(表土層の堆積) ・・・<SX040黄灰色土>
5.黒灰色土(推定文明18年板碑基礎跡。土器片含。炭化した木片を全体的に含) ・・・<SX039黒褐色土>
6.暗灰色土(推定庚申塔基壇跡。土器片含。炭を部分的に含) ・・・<SX038淡茶灰色土>
7.黄灰茶色粘質土 ・・・<SX038明茶色土>
8.礫+茶灰色土(構口基礎と裏込め石。土器・瓦片含。腐った草木片が観察できる。調査区南壁4層と同層) ・・・<SA040茶色土>
9.明灰茶色土(土器片・炭含)

217SA040・060(調査区南壁)土層図




調査区南壁土層図 ※< >内は遺物取り上げ土層名
1.明橙色土(調査区西壁3層と同層) ・・・<表土>
2.暗茶色土(黄色土塊わずかに含む) ・・・< 〃 >
3.茶色土(黄色土塊含む) ・・・< 〃 >
4.茶灰色土(構口基礎石垣と裏込め。調査区西壁8層と同層) ・・・<SA040茶色土>
4'.茶灰色土(4層と比べて礫がやや少ない) ・・・<SA040明茶色土>
5.暗灰色土(構造物基礎の裏込めとみられる。土器片・多量の礫含)・・・<SX060茶色土>

fig.6 217SX038・SX039・SA040 等実測図(1/40)

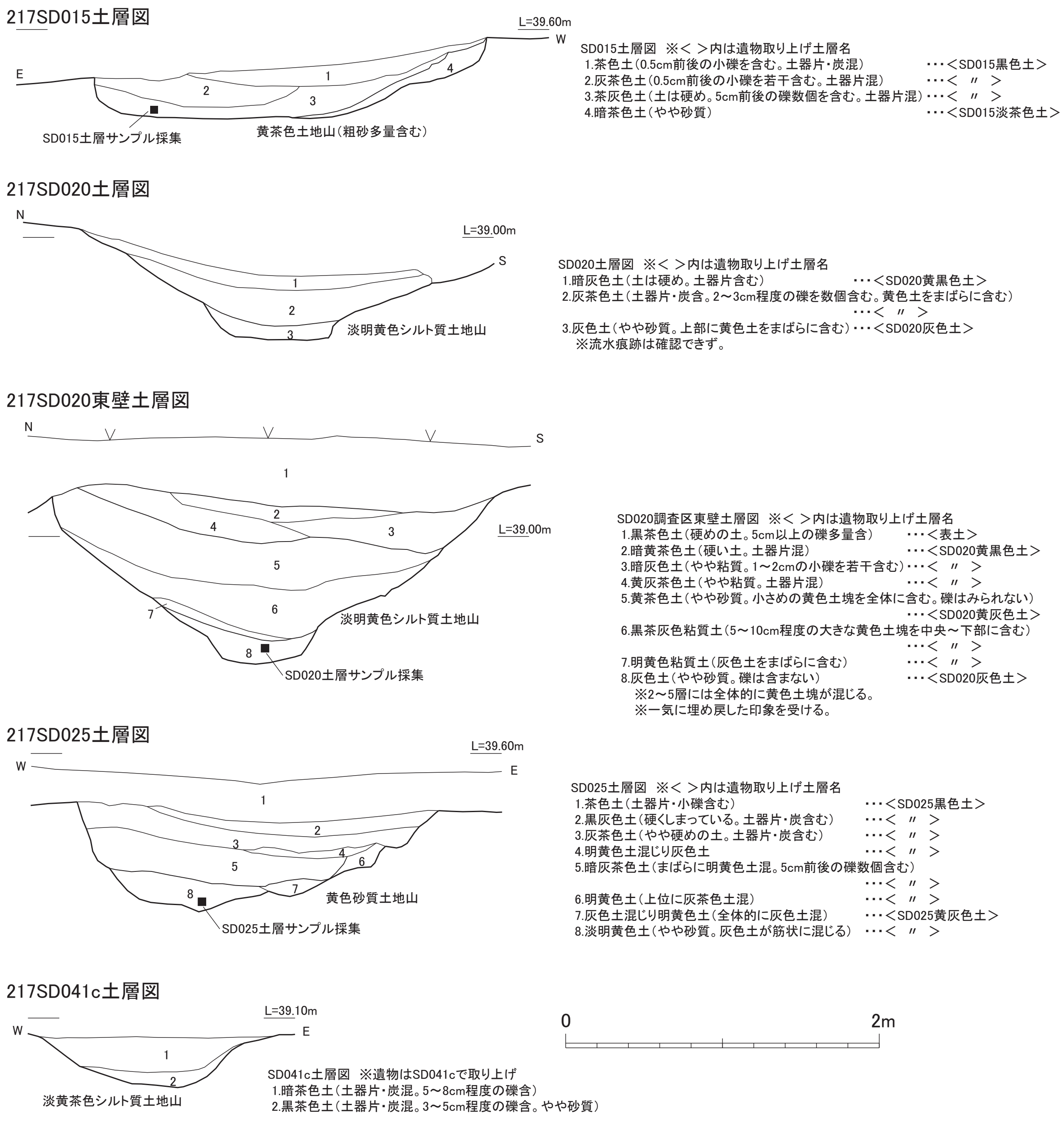



fig.7　第 217 次調査　土層図その 1（1/40）

色土が 10cm 程度の厚さで堆積しているが、その上は黄色地山土の塊を多く含む粘質土であり、人為的に埋め戻されたことを示すものである。

本遺構が機能した時期について、開削時期は大宰府編年 XII 期に埋没した SD025 埋土を切り込んでいることから大宰府編年 XII 期（11c 後～ 12c 初）とみて良いだろう。埋没時期は SD015 出土遺物をみると大宰府編年 XIV・XV 期（12c 後半）が下限となるが、本遺構埋土出土遺物を見る限りでは大宰府編年 XII 期におさまっている。このことから今のところ、比較的短期のうちに埋め戻されたと考えておく。

なお、この溝の東延長上約 130 mの地点では東西溝群が検出されている（大宰府条坊跡第 137 次調査、未報告）。本遺構が調査区より東側の土地区割りに関連する可能性は高いだろう（小結詳述）。

217SD025・029（fig.4・7、CD 写真 28 ～ 30）

調査区北東で検出した南北溝である。SD020 を越えて南で検出した SD029 も同一遺構とみている。検出長 7.58 m、幅 1.73 ～ 2.19 m。深さ最大約 0.5 m。溝底はほぼ水平である。溝は調査区北へさらに延びているが、南端は後世の削平等のため、調査区内で消失している。

埋土は上から黒色土、黄灰色土に分かれ、順に遺物を取り上げた。

出土遺物から本遺構の埋没時期は大宰府編年 XII 期（11c 後～ 12c 初）とみられる。溝機能時期はそれ以前である。

なお本遺構は、政庁 III 期の左郭 12 坊路古段階道路の東側溝（SF075 東側溝）と想定している。

217SD041（fig.4・7、CD 写真 31）

調査区西端で検出した溝である。北に対して東へ約 9°40′振れて走行しており、一見、現道路および構口石垣土塀とする SA040 とほぼ併行している。検出長 11.2 m、幅 1.2 ～ 1.5 m、深さ 0.1 m程度。連続土坑が重なったような溝で、所々に 0.3 ～ 0.4 m程度と窪んだ部分もある。わずかな埋土の違いもあったため調査時には SD041a ～ c と分けたが、一連の溝と捉えてよいだろう。ここからは 14 世紀後半頃の遺物が出土しており、遺構開削時期はこれ以降である。

217SD045（fig.4・8、CD 写真 32 ～ 39）

調査区中央で検出した直線的に延びる南北溝である。検出長 12.16 m、幅 1 ～ 1.2 m。溝底は、深さ 0.4 m程度の部分とそれより 0.1 m程の一段掘り下げた部分があり、溝底は連続土坑状になっている。溝さらえ等によるものか。溝はさらに調査区の南北へ延びている。

埋土は上から黒茶色土、灰茶色土、黒色粘土、そして溝底は灰褐色土と明灰茶色土に分かれ、順に遺物取り上げた。

溝開削時期については、SD050 灰茶色土層と切り合いがあることから、大宰府編年 XII 期（11c 後～ 12c 初）を上限とする。また埋没時期については、埋土出土遺物から大宰府編年 XIV 期（12c 中頃）とみられる。

なお本遺構は、政庁 III 期の左郭 12 坊路新段階道路の西側溝（SF070 西側溝）と想定している。

217SD047（fig.4、CD 写真 40）

調査区中央で検出した南北溝である。SD050 の東側に沿って検出された。埋土は灰茶色土である。ここから遺物は出土しなかった。

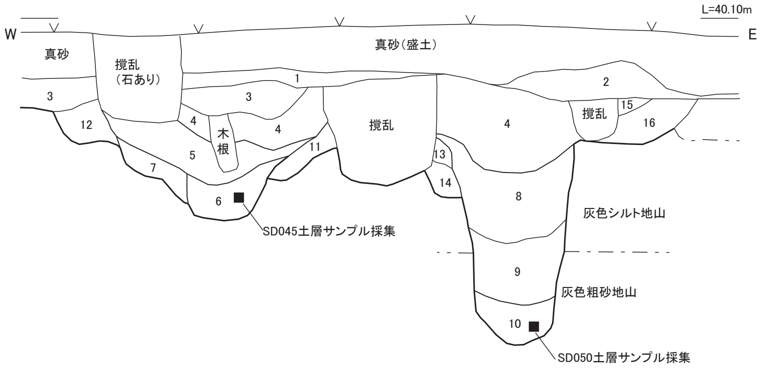
217SD048（fig.4・8、CD 写真 41 ～ 45、pla.3）

調査区中央で SD045・050 に挟まれた位置で検出した直線的に延びる南北溝である。検出長 9.77 m、検出最大幅 0.86 m。約 0.1 ～ 0.15 m程度の厚みで埋土があったが、掘り方が SD045・050 両遺構より浅かったため、実測図には溝底のみが表現されている。溝底はほぼ水平だが、若干北側が 0.1 m程度低い様子も窺える。溝は直進性が高いとみられ、さらに調査区の南北へ延びている。

埋土は暗灰茶色土である。灰色味がかったこの埋土は平安後期以降の遺構埋土（黒茶色系埋土）とは異なるもので、古い印象を受けるものである。

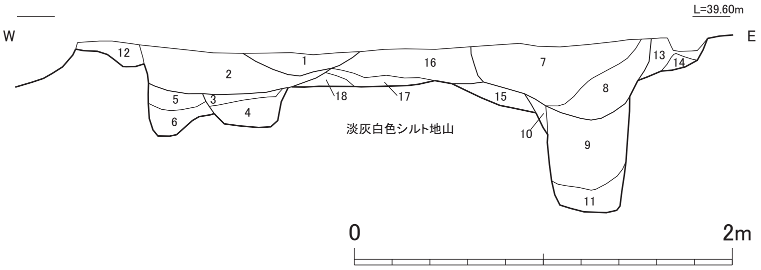
溝埋没時期については、埋土出土遺物の土師器小皿 a 1 点が大宰府編年 IX ～ X 期（10c 中～ 11c 初）の様相を示すためこれを埋没時期の上限とした。ただ、埋土は古い印象を受ける灰色系埋土であること、遺物の主体は大宰府編年 VIII ～ IX 期（10c）以前にあること、古い条坊側溝にみられるような直進性の高い溝であることから、開削時期は政庁 II 期に遡ることが想定される。こうしたことから、政庁 II

217SD045・048・050・052調査区北壁土層図



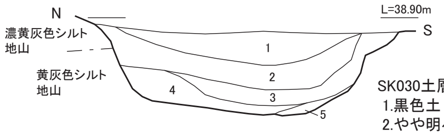

SD045・048・050・052(調査区北壁)土層図 ※＜ ＞内は遺物取り上げ土層名
1.黒色土(全体的に密に炭を含む) ・・・＜表土＞
2.黒茶色土(小礫を若干含む) ・・・＜ 〃 ＞
3.濃灰茶色土(土器片・炭含む。硬い土) ・・・＜ 〃 ＞
4.暗茶色土(上部4cm位の厚さで橙色の硬い土を含む。炭もまばらに含。下の土層図8層) ・・・＜SD050黒茶色土＞
5.上記2層と同層(2層よりやや濃い灰色) ・・・＜SD045灰茶色土＞
6.上記4層と同層(下層はやや砂質) ・・・＜SD045黒色粘土＞
7.上記5層と同層か(礫を数個含む) ・・・＜SD045灰褐色土＞
8.上記9層と同層 ・・・＜SD050茶黒色土＞
9.上記11層と同層 ・・・＜ 〃 ＞
10.やや暗い茶色土 ・・・＜SD050暗茶黒色土＞
11.濃茶灰色土(土器片・炭をごく少量含む。硬い土)
12.上記12層と同層(橙茶色砂を斑点状に含む)・・・＜SD052＞
13.上記10層と同層か(10層ほど砂質味はなく、茶色が強い) ・・・＜SD050またはSD064＞
14.上記15層と同層 ・・・＜SD064＞
15.明茶色シルト質土 ・・・＜SD047＞
16.上記13層と同層。やや暗い茶色シルト質土 ・・・＜ 〃 ＞

217SD045・048・050土層図(Hラインより南へ35～55cm付近)




SD045・048・050土層図 ※＜ ＞内は遺物取り上げ土層名
1.濃灰色土(土はやや硬め) ・・・＜SD045黒茶色土＞
2.やや淡い灰色土 ・・・＜SD045灰茶色土＞
3.灰茶色土 ・・・＜SD045黒色粘＞
4.灰色土(やや粘質) ・・・＜ 〃 ＞
5.明灰茶色土 ・・・＜SD045灰褐色土＞
6.明茶灰色土(やや砂質) ・・・＜ 〃 ＞
7.暗茶灰色土(土器片、炭を東に多く含む) ・・・＜SD050黒茶色土＞
8.茶色土(炭を上部にまばらに含む) ・・・＜ 〃 ＞
9.明茶色土(上部に炭を少量含む) ・・・＜SD050茶黒色土＞
10.灰茶色砂質土 ・・・＜ 〃 ＞
11.9層より明るい橙色がかった茶色土(粗砂を下方に含む)・・・＜ 〃 ＞
12.淡茶色シルト質土 ・・・＜SD052＞
13.橙茶色砂質～シルト質土 ・・・＜SD047＞
14.茶白色砂質～シルト質土 ・・・＜ 〃 ＞
15.淡灰茶色シルト(下方に橙色砂をごく少量含む) ・・・＜SD064＞
16.暗灰茶色土(東側に粗砂を部分的に含む) ・・・＜SD048＞
17.淡茶灰シルト(橙色土塊ごく少量含む) ・・・＜ 〃 ＞
18.白灰色シルト ・・・＜ 〃 ＞

217SK030土層図




SK030土層名 ※遺物はSK030黒灰色土で取り上げ
1.黒色土
2.やや明るい暗茶色土(黄色土塊、炭片含む)
3.暗茶色土(黄色土塊含む)
4.暗黒色土( 〃 )
5.淡茶灰色シルト+黄色シルト土塊

**fig.8 第 217 次調査 土層図その 2(1/40)**

期の左郭 12 坊路の側溝(SF080 側溝)と想定している。

217SD050(fig.4・8、CD 写真 46 ～ 55)

調査区中央で検出した南北溝である。検出長 10.55 m、幅 0.8 m程度を主体とする。深さ 0.3 ～ 0.9 mと全体的には北に向って深くなっている。溝底は連続土坑状になっており、溝底から 0.1 ～ 0.7 m掘り込んでいる。このため溝の深さが遺構検出面から 1.0 ～ 1.2 mに達する部分がある。壁面の地山はシルト・砂で大変脆く調査中も降水により崩落するほどであった。これを考えると、溝底が深く開口していたのは極めて短期であろう。おそらく溝さらえ等管理に関わる掘削痕跡跡と推察する。溝はさらに調査区の南北へ延びている。

埋土は上から黒茶色土、灰茶色土・茶黒色土、暗茶黒色土に分かれており、順に遺物取り上げた。なお最上層の黒茶色土は、遺構を覆う堆積層が沈み込んだもので、その一部は SD045 埋土も覆っていたことが土層観察されている(fig8 土層図)。このため黒茶色土は本遺構の埋没時期を推察するものとはなりえない。また灰茶色土は一部は溝の西側に広がって堆積しており、SD045 埋土と切り合い関係にある。

溝開削時期については、SD048 と切り合いがあることから、その埋没時期である大宰府編年 IX ～ X 期(10c 中頃～ 11c 前半)以降ということができる。また埋没時期については、埋土出土遺物から

大宰府編年 XII 期（11c 後～ 12c 初）とみられる。
　なお本遺構は、政庁 III 期の左郭 12 坊路古段階道路の西側溝（SF075 西側溝）と想定している。

217SD052（fig.4、CD 写真 56）

　調査区中央で検出した南北溝である。SD045 の西側に沿って検出された。ここから須恵器破片が一点のみ出土している。

217SD064（fig.4）

　調査区中央で検出した南北溝である。SD050 の西側に沿って検出され、SD048 にも先行することが土層観察された。埋土は淡灰茶色シルトである。ここから遺物は出土しなかった。

土坑

217SK001（fig.4）

　調査区東端で検出した。検出長 2.32 m、検出幅 0.25 ～ 0.48 m、検出深さ 0.5 m。ここから奈良時代の遺物が出土している。

217SK018・027・028（fig.7）

　調査区東端で検出した。南北に長軸をもつ。長さ 3.67 m、幅 1.13 m（SK027 部分は 1.50 m）、深さは北側 0.1 m、中央（SK027）0.6 m、南側 0.3 ～ 0.5 mである。当初全体を覆っていた埋土をSK018 として掘り下げたところ、北側は地山が露出したが、中央と南側がまだ埋土が残っており、またその中でも若干の埋土の違いを確認したため、中央部分を SK027、南側を SK028 として掘り下げを行った。ただ整理作業で SK027・028 の出土遺物に時期的な違いが認められないことが判明し、またそれぞれから出土した複数の遺物の間で接合関係にあることも判明した。このことから少なくともSK027・028 は同一契機で埋没したものと考えるに至った。複数の小土坑が南北に並んだような形態が想定される。

　埋土は上から黒茶色土（SK018）、黒色土（SK027）、やや茶色味を帯びた黒色土（SK028）と分かれることになる。なお埋土は比較的やわらかく堆積しており、地山等のブロック土塊がないことからも、埋め戻しがなされた様子を窺うことはできなかった。ここから出土した遺物は、大宰府編年 IV ～ V 期（8世紀後半）のまとまりがある。

　なお最上層の SK018 には平安期の土師器椀や中世の土師質土器すり鉢なども含まれている。このため SK018 は埋土沈み込みによる中世包含層堆積の可能性もある。

217SK030（fig.4・8、CD 写真 57）

　調査区東端で検出した遺構で、SD020 の南側に概ね平行して検出された。長軸 5.9 m、短軸 1.56 ～ 2.47 m、深さは 0.15 ～ 0.4 mで中央部は深さ約 0.5 m。

　埋土は黒灰色土である。

　遺構開削時期については、切り合い関係より SD029（SD025）埋没時期を上限とするため、大宰府編年 XII 期（11c 後～ 12c 初）である。埋没時期については、出土遺物より大宰府編年 XII 期とみられることから、SD020 と同様、比較的短期間のうちに埋められたことが考えられる。

217SK033（fig.9、CD 写真 58）

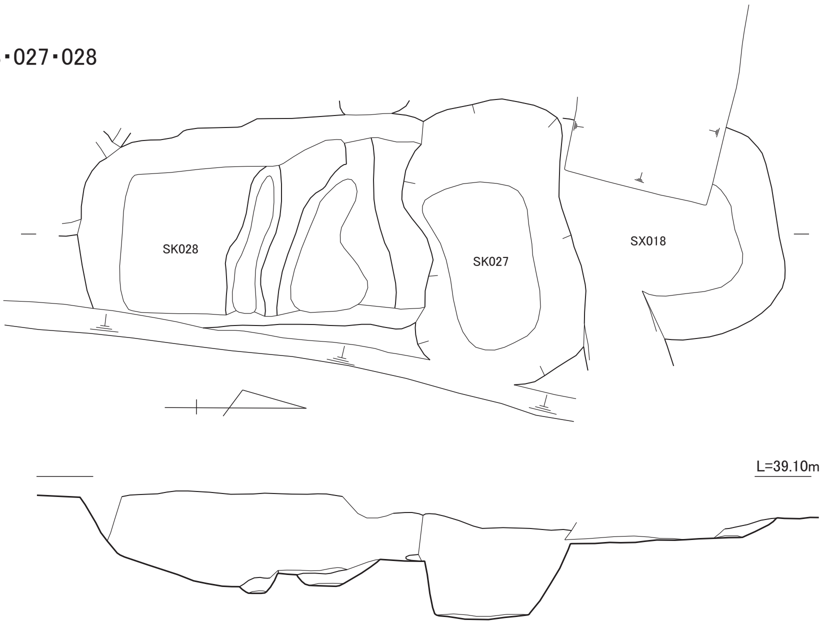
　調査区北西で検出した。3.2 × 2.2 mの不定形で、深さ 0.47 mを測る。

217SK036（fig.10、CD 写真 59）

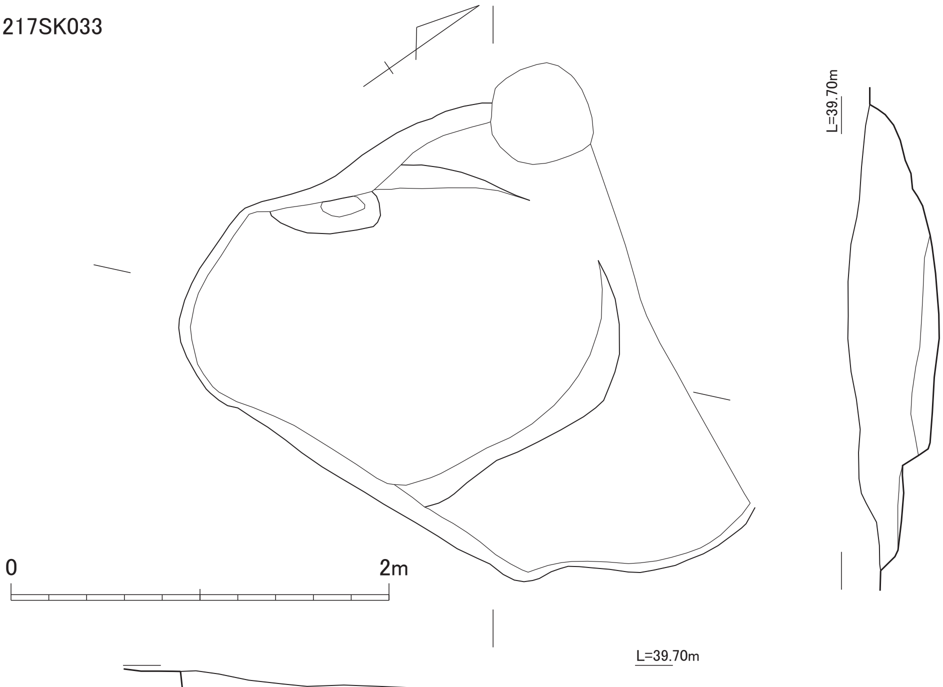
　調査区北西で検出した。平面プラン円形を呈す。1.64 × 1.72 m、深さ 0.45 mを測る。

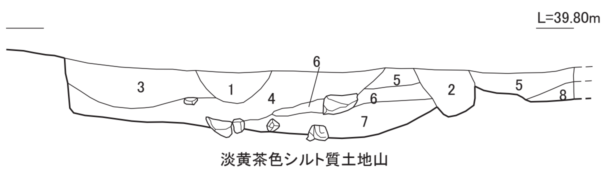
217SK049（fig.10、CD 写真 60）

217SK018・027・028




217SK033




SD033土層図　※遺物はSD033で取り上げ
1.茶色土（土器片混。0.5cm程度の粗砂をやや含む）
2.灰色土（土器片混。粗砂を多量に含み土はやわらかい）
3.茶灰色土（土器片混。2～3cmの炭塊含。上部に0.5cm程度の礫をやや含む）
4.暗茶色土（土器片多量含む。炭若干含む。10～30cmの礫を数個含む）
5.明茶色土（土器片混。土は硬め）
6.淡灰茶色土（淡茶色砂質土が全体的に混。土器片ごく少量みえる）
7.黒灰色土（土器片・炭混。やや砂混）
8.暗灰色土（土器片・炭混。やや砂混）
※7・8層は同層とみられる。

fig.9　第 217 次調査　土坑実測図その 1（1/40）

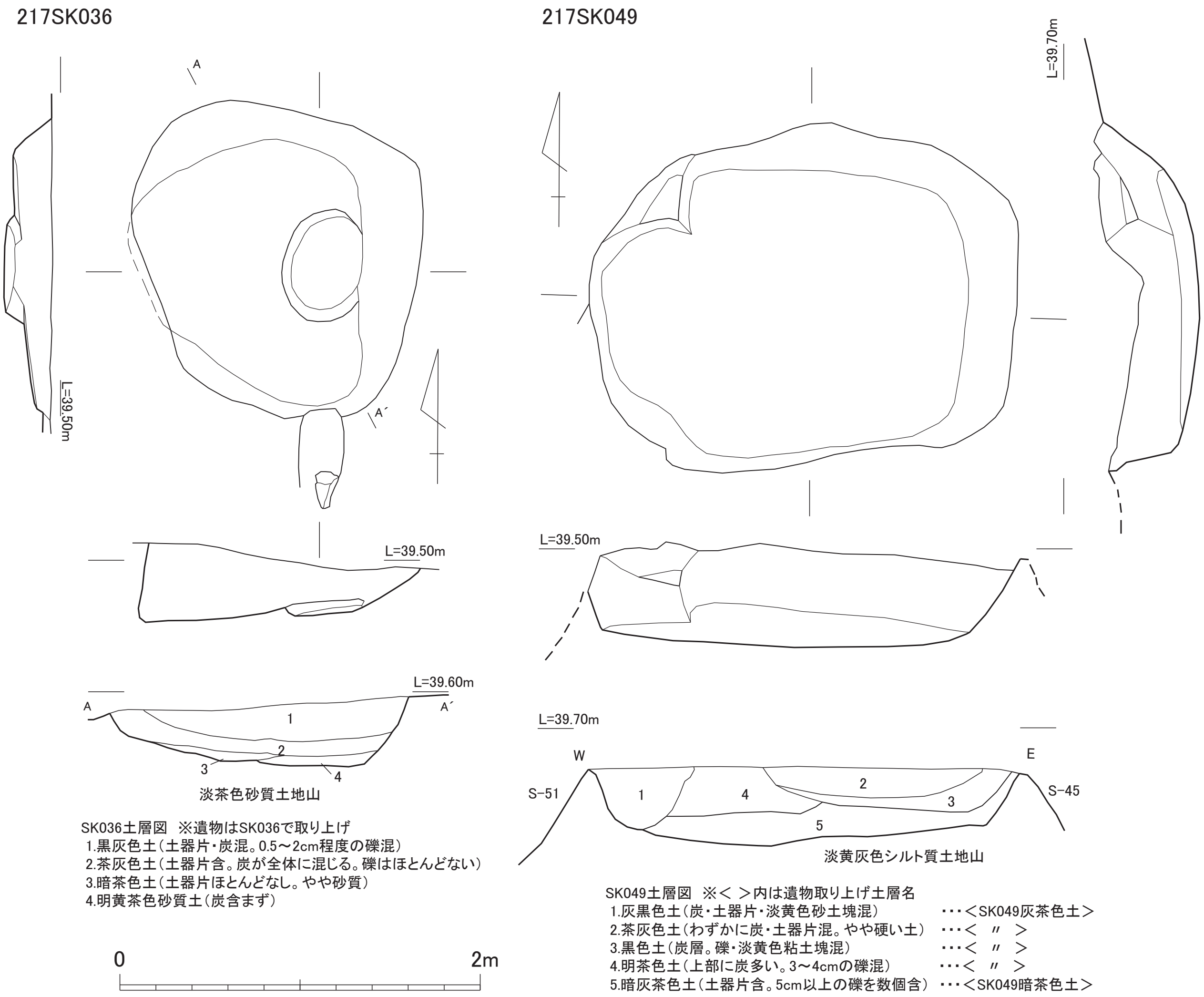



fig.10　第 217 次調査　土坑実測図その 2（1/40）

調査区西側で検出した。平面プラン楕円形を呈す。2.40 × 1.92 m、深さ約 0.5 mを測る。

217SK063（fig.4）

調査区南西で検出した。平面プラン円形を呈す。1.8 × 1.6 m、深さ約 0.4 mを測る。

217SK067（fig.4）

調査区西側で検出した。平面プラン円形を呈す。1.44 × 1.06 m、深さ約 0.5 mを測る。

道路

道路遺構については、通行痕跡・その範囲等の直接的な証拠を得たわけではないが、検出された溝群を側溝と認定し、その開削・埋没時期、切り合い関係などを総合して判断した。

217SF070（fig.4、CD 写真 61・62、pla.2）

政庁 III 期併行期新段階南北道路。SD045 を西側溝、SD015 を東側溝とする。道路路面幅（残存幅）は 3.3 m、側溝芯々間は 4.76 m、道路占有幅は約 7.69 mである。東側溝（SD015）の東には東西溝 SD020（SF065）がとりつくことが観察されるが、埋土に切り合い関係があり、東西溝 SD020 が先に埋められたことが窺える。道路敷設時期は、旧道路である SF075 廃絶直後と想定され、SF075 両

側溝埋没時期の大宰府編年 XII 期（11c 後～ 12c 初）と判断される。また本道路側溝埋没は大宰府編年 XIV・XV 期（12c 後半）で、この頃側溝の役目を終えたことを窺うことができるが、その後も小穴等の侵出は顕著ではなく、現在もこの延長上に道路が通っていることを鑑みると、その後も道路機能が保持されていたことは想定すべきと考える。

217SF075（fig.4、CD 写真 61・63、pla.2）

政庁 III 期併行期古段階南北道路。SD050 を西側溝、SD025 を東側溝とする。道路路面幅（残存幅）は 4.61 m、側溝芯々間は 6.18 m、道路占有幅は約 7.18 mである。道路敷設時期は明らかではないが、旧道路側溝と想定している SD048（SF080 関連）の側溝埋没時期が大宰府編年 IX ～ X 期とすると、その頃に遡ることも想定される。また側溝が埋没するのは大宰府編年 XII 期（11c 後～ 12c 初）で、その後 SF070 が新設されたと想定できる。

217SF080（fig.4、CD 写真 61・64、pla.2）

SD048 を溝とする境界・区画が想定される。ここでは便宜的に道路遺構と想定し、呼称するものである。SD048 付近にも SD047・052・064 等切り合い関係から周辺の溝群より古いと認められるものも散見される。SD048 以外は出土する遺物はほとんどないため具体的な機能・埋没時期を確定させることは困難だが、これらを含め、政庁 II 期併行期からこの場所で機能した区画溝があったものと想定できる。

その他の遺構

217SX005（fig.4、CD 写真 65）

調査区南東で検出した。概ね東西に走行する。検出長 13.7 m、幅約 1.2 m。深さ 0.1 ～ 0.6 m。途中に南へ溝が延びる箇所があり、その延長上は SX010 に切られている。近代以降の掘削である。この西延長上に SA060 が位置している。SA060 自体あるいはその位置と何らかの関連があったことも想定されようか。

217SX010（fig.4、CD 写真 65・66）

調査区南東端で検出した遺構である。東西に走行している可能性がある。検出長 16.6 m、検出幅 2.45 m。深さ最大約 1.0 m。調査区際で危険防止のため完掘に至っていないが、まだ深くなる様相がみられた。藍染川岸で川に平行していることもあり、護岸等に伴う掘り方と想定される。近現代の掘削である。

217SX022（fig.4）

SD015 埋土除去後に検出したたまり状の遺構である。

217SX026（fig.4、CD 写真 67・68）

SD015 と SD020 が接合する溝底で検出した土の高まりである。接合部に沿って南北に土が堆積している。この付近の SD015 溝底には水の滞水作用で堆積したとみられる淡灰シルト・黒褐色砂質土があり、それが本遺構の高まりの上面まで堆積していた。それは SD015 から SD020 へ流れ出す水を本遺構でせき止めたような印象を受けるものであった。これは SD015・020 の両溝が同時に開口していた時期があったことを示すものと考えている。

217SX032（fig.5）

SD045・048・050 等の埋土を切り込む小穴である。

217SX038（fig.6、CD 写真 69 ～ 72・74 ～ 78、pla.4・5）

調査区西端で検出した石組み遺構である。一辺を 2 ～ 3 個の花崗岩で方形に囲い、その中に土を入

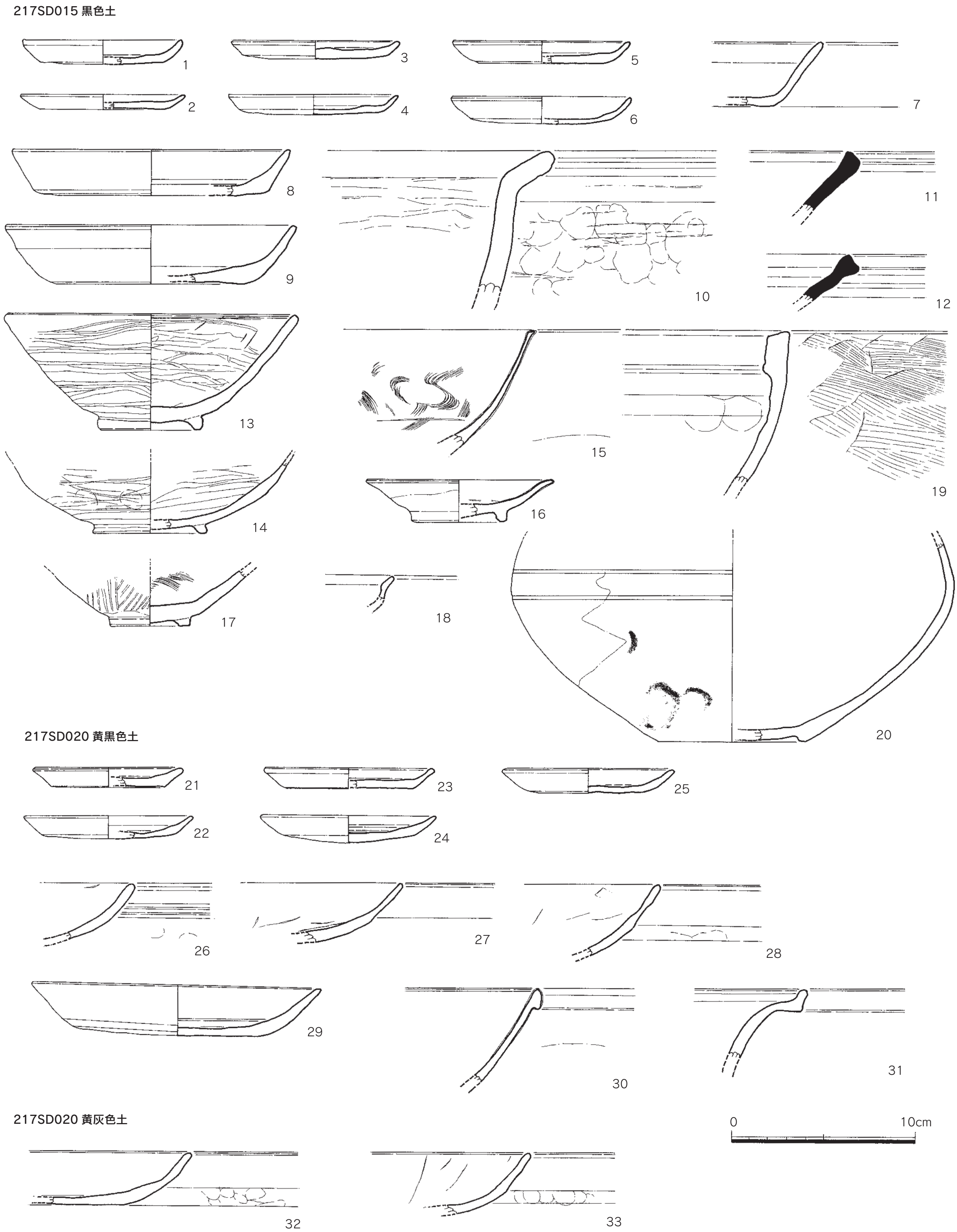



fig.11　第 217 次調査　溝出土遺物実測図その 1（1/3）

れ、上部に栗石を入れている。南北幅 1.2 m、東西幅（残存幅）1.02 m、高さは石一段のみを確認し 0.28 ～ 0.34 mを測る。この上に何かを置くために設けた基礎石組とみられる。これは西を通る道路に面しており、構口の石組基礎（SX040）と並んで設けられていることから両者の関連が想定される。ここには天明元年庚申塔が建っていたとされ、昭和 30 年代に撮影された写真（吉塚太喜雄氏所蔵 pla.6）にも構口石垣土塀の北脇に庚申塔が見えることから、塔の基礎石組みと想定している。ただ、庚申塔には施主記銘の台座があって写真にこの台座も写っているが、石組みはみえていない。また石組みの幅が 1.2 mに対して台座が 1.3 m程と若干大きいことも気になる点である。天明元年庚申塔のために設けられた石組みだったかは、課題として残る。

217SX039（fig.6、CD 写真 69 ～ 72・79、pla.4・5）

調査区西端に位置する。聞き取りによると、昭和 30 年代、おそらくここに文明 18 年銘板碑が置かれていたとのことであったが、特に遺構は確認されなかった。

217SX058（fig.5）

SD045 埋土に切り込む小穴群である。

（井上信正）

## 4．遺物

溝出土遺物

217SD015 黒色土出土遺物（fig.11、CD 写真 001 ～ 006）

土師器

小皿 a（1 ～ 6）　いずれも口縁部から底部が残存する小破片で、口径は 8.7cm ～ 9.8cm 復原される。底部切り離しは、1 が判然としないが、2・4 がヘラ切りで 3・5・6 は糸切りされる。すべて焼成良好。

坏 a（7・8）　7・8は、口縁部から底部の小破片。底部切り離しは 7 が糸切りで、8 がヘラ切り。7・8 ともに焼成良好。9 は口縁部から底部の約 1/3 弱の残存破片で、口径は 15.8cm に復原される。底部外面は糸切り。焼成良好である。

鍋（10）　口縁部から体部にかけての小破片。器高は 7.6cm を測り、体部内面にはミガキ状のナデと体部外面にはヨコナデと指頭痕がみられる。胎土は 5mm 以下の砂粒が多く含まれ、粗い。焼成は良好である。

須恵質土器

こね鉢（11・12）　いずれも口縁部の小破片。東播系と考えられる。胎土はやや粗く 11 は 2mm 以下、12 は 1mm 以下の砂粒を多く含む。焼成は良好。

瓦質土器

椀 c（13・14）　13 は口縁部から底部の約 1/2 が残存し、口径は 16.0cm。口縁部から底部の内面はミガキ b 後ミガキ c で調整され、外面は口縁部から体部までミガキ c と回転ナデで調整される。14 は体部から底部の約 1/4 が残存し、体部から底部の内面と体部外面がミガキ c で調整される。いずれも焼成は良好である。

白磁

椀（15）　口縁部から体部の小破片で、残存高は 6.35cm を計る。内面には櫛状文様と一条の沈線がみられる。黄色味のある透明釉が施釉される。Ⅴ -4 b 類。

皿（16）　口径 10.2cm、底径 5.2cm に復原され、内面から口縁部外面まで黄色味のある透明釉が施釉される。焼成良好。Ⅲ -1 類。

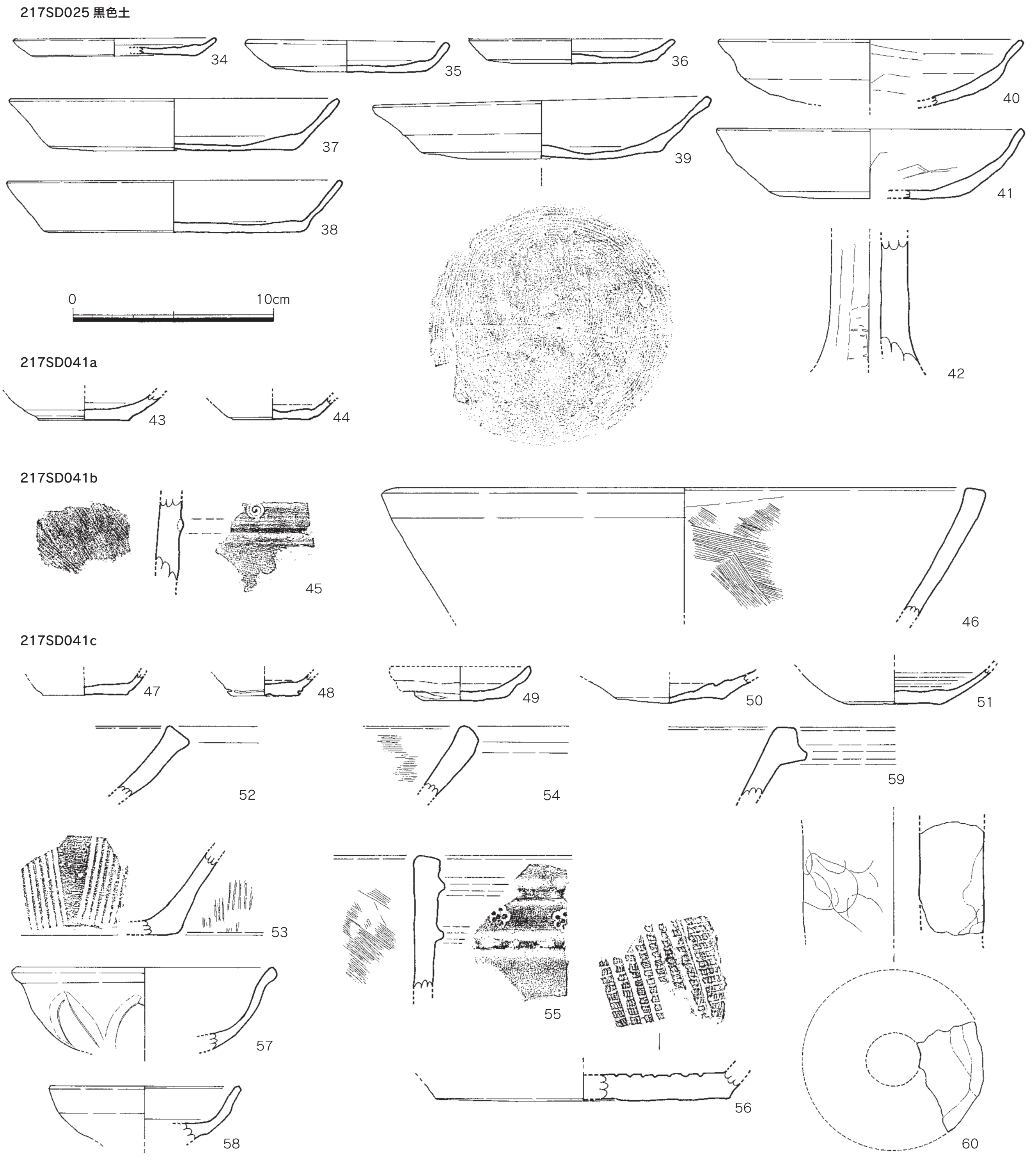



**fig.12　第 217 次調査　溝出土遺物実測図その 2（1/3）**

同安窯系青磁

椀（17）　体部から底部の小破片で、底径 4.3cm に復原される。内面は細かな櫛状文様、外面は大まかな櫛状文様で施される。緑灰色の釉を呈す。焼成良好。Ⅲ -1 b × c 類。

中国陶器

壺（18）　口縁部のみの小破片。内外面とも飴色の釉で施される。素地は緻密で、焼成良好。器高 1.5cm を計る。

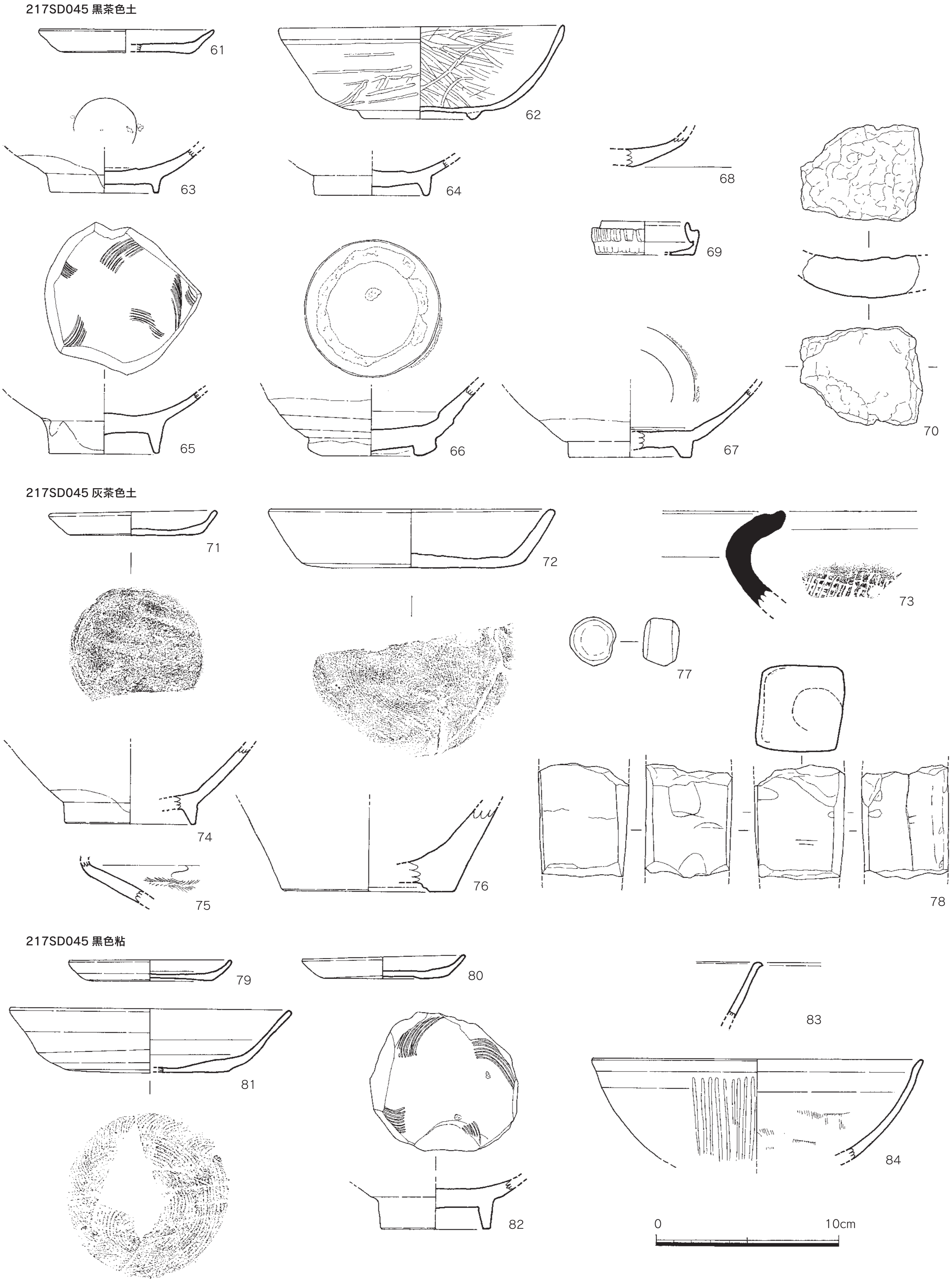



fig.13　第 217 次調査　溝出土遺物実測図その 3（1/3）

鉢（19）　口縁部の小破片で、残存高は 8.3cm を計る。外面は櫛目が施される。胎土は 2mm 以下の砂粒を多く含み、粗い。焼成は良好である。Ⅰ -1a 類。
耳壷（20）　体部から底部の小破片。残存高 10.8cm、底径は 8.0cm、胴部最大径は 24.0cm に復原される。全面が光沢のない淡黄色で施釉され、外面には茶色の鉄絵が施される。また、体部には二条の沈線もみられる。素地は緻密で、焼成は不良気味。Ⅴ -1 類である。
217SD020 黄黒色土出土遺物（fig.11、CD 写真 007 ～ 009）
土師器
小皿 a（21 ～ 25）　いずれも口縁部から底部の小破片。口径は 8.2cm ～ 10.4cm に復原される。底部切り離しは 21 が糸切りで、22 ～ 25 はヘラ切り。
丸底坏 a（26 ～ 28）　いずれも口縁部から底部の小破片。内面はミガキ b で調整され、26 と 28 の底部外面には底部押圧による指頭痕が観察できる。焼成は 26 がやや不良であるが、27・28 は良好。
坏 a（29）　口径 15.7cm、器高 2.75cm、底径 10.0cm を計る。底部切り離しはヘラ切り。胎土がやや粗く、形状に歪みを有す。焼成は良好。
白磁
椀（30）　口縁部の小破片。残存高は 5.2cm。内面から口縁部外面上位まで黄味色のある透明釉で施釉される。Ⅳ類。
緑釉陶器
壺（31）　口縁部の小破片。内外面とも緑色釉が薄くかけられる。焼成、還元ともに良好である。
217SD020 黄灰色土出土遺物（fig.11）
土師器
丸底坏（32・33）　いずれも口縁部から底部にかけての小破片。内面はミガキ b、底部外面には底部押圧による指頭痕がみられる。切り離しは不明。いずれも焼成良好。
217SD025 黒色土出土遺物（fig.12、CD 写真 010）
土師器
小皿 a（34 ～ 36）　いずれも口縁部から底部の残存破片。口径 10.1 ～ 10.2cm に復原される。底部切り離しは 35 が判然としないが、34・36 ヘラ切りである。すべて焼成良好。
坏 a（37 ～ 39）　いずれも口縁部から底部の残存破片で、口径 16.4 ～ 16.8cm、器高 2.6 ～ 2.9cm。いずれも底部切り離しはヘラ切り。39 の切り離しは条痕が入り一見糸切りに見えるが、糸の抜けが認められないため、ヘラ切りと判断している。焼成はすべて良好である。
丸底坏（40・41）　いずれも口縁部から底部の小破片で、口径 15.2 ～ 15.4cm に復原される。40・41 の順に全体の 1/5・1/3 程度残存する。どちらも内面ミガキ b が施され、焼成良好。
器台（42）　脚部の小破片。残存高は 6.0cm を計る。外面はケズリ、内面はナデで調整される。焼成良好。
217SD041a 出土遺物（fig.12）
土師器
坏 b（43）　底部の約 1/4 残存破片。底径は 4.6cm に復原される。底部切り離しは回転糸切り。
小皿 b × 坏 b（44）　底部の約 1/2 残存破片。底径は 3.9cm に復原される。底部切り離しは回転糸切りされる。胎土は緻密で、焼成良好。
217SD041b 出土遺物（fig.12、CD 写真 011・012）
瓦質土器
火舎（45）　体部の小破片。残存高は 4.15cm を計る。内面は細かな刷毛で調整され、外面には 2 条

の突帯と、渦巻き状のスタンプが観察できる。内面は淡灰橙色、外面は淡灰白黄色を呈す。胎土は緻密で、焼成は良好である。

土師質土器

鉢(46)　口縁部から体部の約 1/8 残存破片。内面は細かなハケ調整される。口径 30.0cm に復原され、残存高は 6.3cm。胎土には 3mm 以下の砂粒を多く含むが、緻密。焼成も良好である。内外面とも淡灰橙白色を呈す。

217SD041c 出土遺物（fig.12、CD 写真 011 ～ 014）

土師器

小皿ｂ（47 ～ 49）　47・48 は体部から底部、49 は口縁部から底部の残存破片で、49 は口径 7.0cm に復原できる。いずれも底部切り離しは回転糸切りであるが、49 の底部外面には一部ヘラ切りの痕跡も観察できる。

小皿ａ×坏ｂ(50)　底部の約 1/3 の残存破片。底径は 5.6cm に復原される。底部切り離しは回転糸切り。胎土は緻密で、焼成は良好である。

坏ｂ（51）　底部から体部の小破片。底径は 5.3cm に復原される。底部切り離しは回転糸切り。胎土は緻密で、焼成は良好である。

土師質土器

鉢（52）　口縁部の小破片。残存高 3.45cm。胎土は緻密で焼成は良好。外面の一部にススの付着がみられる。

すり鉢（53）　体部から底部の小破片。残存高 4.0cm。内面には単位不明のすり目と、外面には縦方向に粗いハケ調整が観察できる。胎土は混入物が少なく緻密で、焼成は良好。

瓦質土器

鉢（54）　口縁部の小破片。残存高 3.4cm。内面は横方向に細かなハケで調整される。内外面ともに口縁端部が灰色、他は淡灰白色を呈す。

火鉢（55）　口縁部から体部の小破片。内面は斜め方向の細かなハケで調整され、外面には二条の突帯とその間に花文スタンプが確認できる。外面下位は黒色化している。胎土には 0.5 ㎜未満の雲母粒子が多く含まれ、緻密。焼成は良好である。

国産陶器

おろし皿（56）　底部の約 1/6 残存破片。内面に格子状におろし目が確認できる。内面が暗橙褐色、体部外面は橙色、底部外面は淡灰黄白色から淡灰黄色を呈す。胎土には .0.5 ㎜未満の白色粒子、黒灰色粒子を少量含み、緻密。焼成は良好で、硬質である。古瀬戸焼とみられる。

龍泉窯系青磁

椀（57）　口縁部から体部の小破片。口径は 13.2cm に復原される。全面を淡い暗緑色の透明釉でやや厚めに施釉され、内外面には貫入もみられる。焼成良好。Ⅳ類。

坏（58）　口縁部から体部の小破片。口径は 9.5cm に復原される。内外面に淡い暗緑色の透明釉が施釉されるが、内面見込みは釉が掻き取られる。焼成良好。Ⅳ類。

石製品

石鍋（59）　口縁部の小破片。内面は淡暗赤灰色、外面は黒灰色から黒色を呈し、煤の付着がみられる。滑石製。

土製品

ふいご羽口（60）　内孔径 2.6cm、外円形 9.0cm に復原される。内面は淡灰橙色から橙色を呈すが、

外面は被熱により淡灰褐色、黒褐色、灰色、淡灰色に変色する部分がある。内外面ともナデ調整され、胎土は３㎜以下の砂粒を多く含み、やや緻密。焼成はやや良好である。

217SD045 黒茶色土出土遺物（fig.13、CD 写真 015 ～ 017）

土師器

小皿ａ（61）　口縁部から底部の約 1/2 残存破片。口径は 9.6cm、器高 1.3cm、底径 7.3cm に復原される。底部切り離しは糸切り。

瓦器

椀ｃ（62）　完形の資料。口径 15.6cm、器高 5.0cm、高台径 6.2cm を計る。内面は不定方向のミガキｃ、外面は体部から底部の一部にかけて横と斜め方向のミガキｃで調整される。全体は淡灰白色を呈すが、口縁部外面が灰黒色に変色していることから重ね焼きされたと考えられる。焼成良好で胎土には１㎜以下の砂粒を少量含む。底部切り離しは不明。

白磁

椀（63 ～ 67）　63・64 は体部から底部まで残存し、未分類の破片である。63 は底部の約 3/4 残存し、高台径は 6.0cm を計る。内面から高台の一部まで緑味のある灰白色の釉が施される。内面見込みには円形に段がつけられ、一部目跡と考えられる痕跡がみえる。64 は高台径 6.2cm に復原され、全体の 1/3 程度残存する。内面から体部外面上位にかけて淡緑灰色の光沢のある透明釉が施される。65 は高台から体部の小破片。内面には櫛状の文様がみられ、内面から高台外面の一部にかけて、淡灰白色の透明釉が施される。一部貫入もみられる。Ⅴ -4 類。66 は高台から体部の残存破片。高台径は 7.0cm。内面と高台部外面にかけて淡灰白色の透明釉がかけられるが、内面見込みの一部はほぼ輪状に釉が掻きとられ、重ね焼きによる目跡がみられる。また高台畳部にも付着物が観察できる。Ⅷ -2 × 3 類。67 は体部から底部の約 1/4 残存破片。高台径は 6.8cm に復原される。内面から体部外面の一部まで、緑味のある淡灰白色の釉が施されるが、内面見込みの一部は輪状に釉が掻き取られる。Ⅷ -2 × 4 類。に分類できる。すべて焼成良好。

龍泉窯系青磁

皿（68）　底部から体部の小破片。内面から底部の一部まで暗緑灰色の光沢のある釉がやや厚めに施される。焼成良好。Ⅰ -1 ａ類。

青白磁

合子身（69）　口縁部から底部の約 1/4 残存破片。口径 4.8cm、底径 5.4cm に復原され、器高は 1.8cm を計る。淡緑白色の透明釉で施釉されるが、受部と底部、体部の一部は施釉されない。外面は縦方向に線刻の文様がみられる。

その他の遺物

鉱滓（70）　現存長 6.7cm、幅 5.4cm、厚さ 2.1cm を計る。形状にやや湾曲がみられることから椀形滓の可能性がある。色調は淡茶褐色、暗茶褐色、黒灰色、褐灰色を呈す。

217SD045 灰茶色土出土遺物（fig.13、CD 写真 018・019）

土師器

小皿ａ（71）　口縁部から底部の約 2/3 残存。口径 9.2cm、器高 3cm、底径 7.4cm を計る。焼成は良好で、底部切り離しは条痕のあるヘラ切り。

坏ａ（72）　口縁部から底部の破片で、口縁部の約 1/5、底部の約 1/2 が残存する。底部切り離しは糸切り。焼成は良好である。

須恵質土器

甕（73）　口縁部の小破片。残存高 5.3cm。頸部が丸みを帯びて屈曲し、口縁端部内面に凹みが巡る。外面下位に格子状の叩きがみえる。焼成、還元ともに良好で、硬質。内面は青灰色、外面は暗青灰色を呈す。

白磁

椀（74）　体部から底部の小破片。高台径は 7.2cm に復原される。内面から外面は高台の一部まで暗緑灰色の光沢のある透明釉が施釉されるが、内面見込みは釉が一部輪状に掻き取られる。焼成良好。Ⅷ類。

越州窯系青磁

小壺（75）　肩部の小破片。内面は回転ナデされるが一部施釉され、外面には毛彫り状の文様がみられる。釉調は暗緑灰色の透明釉である。

中国陶器

耳壺（76）　体部から底部の小破片。底径 9.6cm に復原される。外面のみ暗緑灰色の釉で施釉され、内面は回転ナデされる。焼成は良好である。Ⅴ -2 類の可能性がある。

瓦類

瓦玉（77）現存長 2.5cm、幅 2.5cm、厚さ 1.8cm を計る。胎土には 1 ㎜以下の砂粒を少量含み、外面の色調は淡白褐色、断面は黒灰色を呈す。焼成良好。

土製品

棒状製品（78）　現存長 6.3cm、幅 4.7cm、厚さ 4.6cm を計る。調整は不明であるが、4 面形成される。淡褐白色を呈し、焼成は良好である。

217SD045 黒色粘土出土遺物（fig.13、CD 写真 020・021）

土師器

小皿 a （79・80）　いずれも口径 8.9cm、器高 1.1cm。79 の底径は 6.9cm、80 が 7.0cm を計る。底部切り離しはいずれも糸切りで、焼成は良好。80 は完形資料である。

坏 a （81）　口縁部から底部の残存破片。口径 15.4cm、器高 3.5cm、底径 9.1cm を計る。底部切り離しは条痕をもつヘラ切り。焼成良好。

白磁

椀（82・83）　82 は底部の残存資料で、底径は 6.0cm を計る。内面に櫛状の文様がみられ、内面から高台部まで淡緑灰色の光沢のある透明釉が施される。素地は淡灰白色を呈し、1 ㎜以下の砂粒をわずかに含み程度で緻密。焼成は良好である。Ⅴ -4 類。83 は口縁部の小破片。素地は淡褐白色を呈し、淡白褐色の微細な砂粒をわずかに含むのみで緻密。内外面は淡緑色を帯びた淡灰白色の光沢ある釉が施される。一部貫入あり。Ⅴ -4 類。

同安窯系青磁

椀（84）　口縁部から体部の小破片。口径は 18.2cm に復原される。外面にはやや幅広い縦の櫛目文と内面には櫛状の短い文様が観察できる。釉調は光沢のある暗緑灰色である。Ⅲ -1 b 類。

217SD048 出土遺物（fig.14、CD 写真 022・023）

土師器

小皿 a （85）　口縁部から底部の約 1/4 残存。口径 10.5cm、器高 1.6cm、底径 6.9cm に復原される。底部切り離しはヘラ切り。胎土はやや粗く、1 ㎜以下の金色雲母粒を多く含む。焼成良好。

椀 c（86）　体部から底部の約 1/4 の破片。高台径は 8.2 ㎝に復原される。椀部は丸く、高台はやや高い。底部内面には指頭圧痕と不定方向ナデの調整が観察できる。胎土は茶色粒を多く含み、やや粗い。焼成はやや良好。

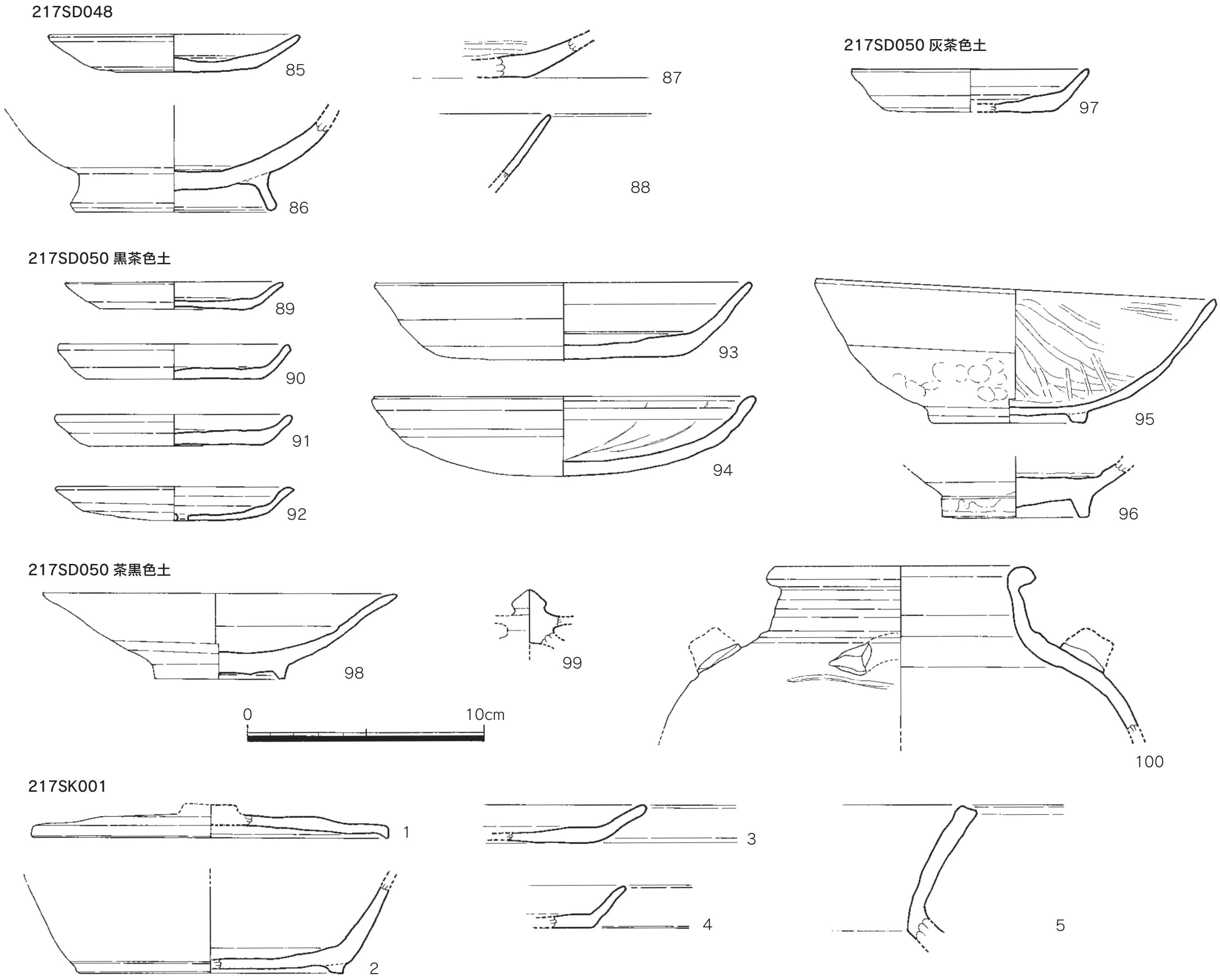



**fig.14　第 217 次調査　溝および土坑出土遺物実測図（1/3）**

黒色土器Ａ類

大椀×鉢（87）　底部の小破片。内面は回転ナデ後ミガキｃで調整され、外面は回転ヘラケズリされる。胎土は緻密で、焼成良好。

越州窯系青磁

椀（88）　口縁部の小破片。内外面とも緑灰色の釉が均一にかけられる。素地は緻密で 0.1 ㎜程度の黒色粒を若干含む。焼成良好。Ⅰ類。

217SD050 黒茶色土出土遺物（fig.14、CD 写真 024 ～ 027・030）

土師器

小皿ａ（89 ～ 92）　いずれも口縁部から底部の残存破片で、口径は 9.1 ㎝～ 10.0 ㎝。底部切り離しは 89・91 は条痕をもつヘラ切り、90 は糸切り、92 は回転ヘラ切り。92 はその後ナデで調整される。すべて焼成良好である。

坏ａ（93）　口縁部が 1/6 程度欠損する以外はほぼ残存する資料。口径 15.9 ㎝、器高 3.25 ㎝、底径 11.7 ㎝。底部切り離しは回転ヘラ切りされ、その後ナデで調整される。胎土は精良で緻密。焼成は良好である。

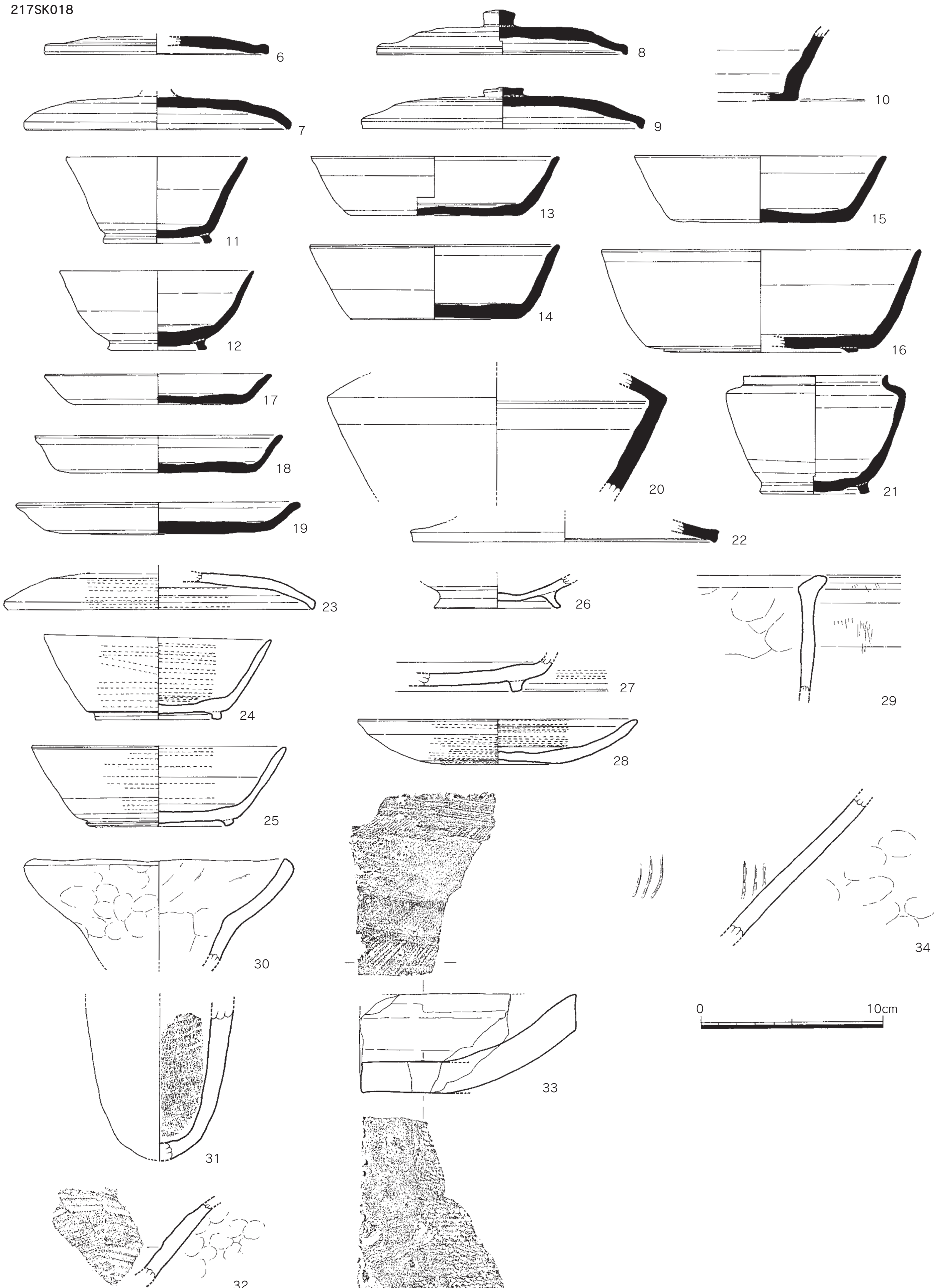



fig.15　第 217 次調査　土坑出土遺物実測図その 1（1/3）

丸底坏ａ（94） 口縁部から底部の約 1/2 残存し、口径は 16.2 ㎝に復原される。底部切り離しは回転ヘラ切りされ、その後丁寧にナデ調整される。内面にはミガキｂが観察できる。

瓦器

椀ｃ（95） 口縁部から底部の約 3/4 が残存。口径 16.9 ㎝、器高 5.65 ㎝、高台径 6.4 ㎝を計る。底部切り離しはヘラ切りされ、その後ナデ調整される。内面はミガキｃ、体部外面下位に成形時押圧のための指頭圧痕がみられる。内外面とも淡白灰色を呈すが、口縁部外面は重ね焼きのため黒灰色に変色する。胎土は軟質で緻密、焼成は良好である。

白磁

椀（96） 底部の残存破片。高台径 6.2 ㎝を計る。内面から高台部外面まで緑褐色味があり光沢のある透明釉がかかるが、内面見込みの一部は輪状に釉が掻き取られる。素地は灰色できめ細かい。Ⅷ類に該当する。

217SD050 灰茶色土出土遺物（fig.14）

土師器

小皿ａ（97） 底部 1/4、口縁部 1/6 が残存。口径は 10cm に復原される。底部切り離しはヘラ切りされ、その後ナデ調整される。胎土は白色雲母粒が多く混入し、緻密。焼成良好。

217SD050 茶黒色土出土遺物（fig.14、CD 写真 028・029）

白磁

椀(98) 底部 2/3、口縁部 1/8 が残存。口径は 14.4 ㎝に復原され、器高 3.65 ㎝、高台径 5.5 ㎝を計る。内面から体部外面下位まで緑味のある白濁釉がかかり、全体に細かな貫入がみられる。Ⅵ -1 ａ類。

中国陶器

蓋（99） つまみ部分の残存。内面はナデ調整、外面は薄い褐釉が施される。素地は淡茶灰色を呈し、きめ細かく硬質。胎土の特徴は A-2 群。

耳壺（100） 口縁部から肩部の残存破片。口径は 11.3 ㎝に復原される。欠損しているが、肩部の一部に耳の貼付け痕がみられ、その下部には横方向に波状の線刻も観察できる。内外面とも緑茶灰色の釉が薄く施釉され、素地は灰色で緻密である。Ⅴ類。

土坑出土遺物

217SK001 出土遺物（fig.14、CD 写真 031・032）

須恵器

蓋ｃ３（1） 口縁部から天井の約 1/5 残存。口径は 15.0 ㎝に復原される。天井部切り離しはヘラ切りされ、つまみは欠損するが、貼付け時の回転ナデ調整が確認できる。口縁部外面は重ね焼きのための変色化がみられる。焼成、還元ともに良好である。

坏ｃ(2) 体部から底部の約 1/3 が残存。高台径は 11.2 ㎝に復原される。底部切り離しはヘラ切りで、その後ナデ調整される。高台断面はほぼ直立した低い台形状を呈し、胎土は軟質で１㎜以下の砂粒を少量含む。焼成、還元ともに良好である。

皿ａ（3・4） いずれも底部から口縁部の小破片である。底部切り離しはヘラ切りで、その後ナデ調整される。３の胎土は茶褐色を呈し、土師質で還元はない。焼成良好。４は器高 1.8 ㎝で内外面とも灰青色を呈し、焼成、還元ともに良好である。

甕（5） 口縁部から体部上位の小破片。内外面とも回転ナデ調整される。焼成、還元ともに良好。

217SK018 出土遺物（fig.15、CD 写真 033 ～ 037）

須恵器

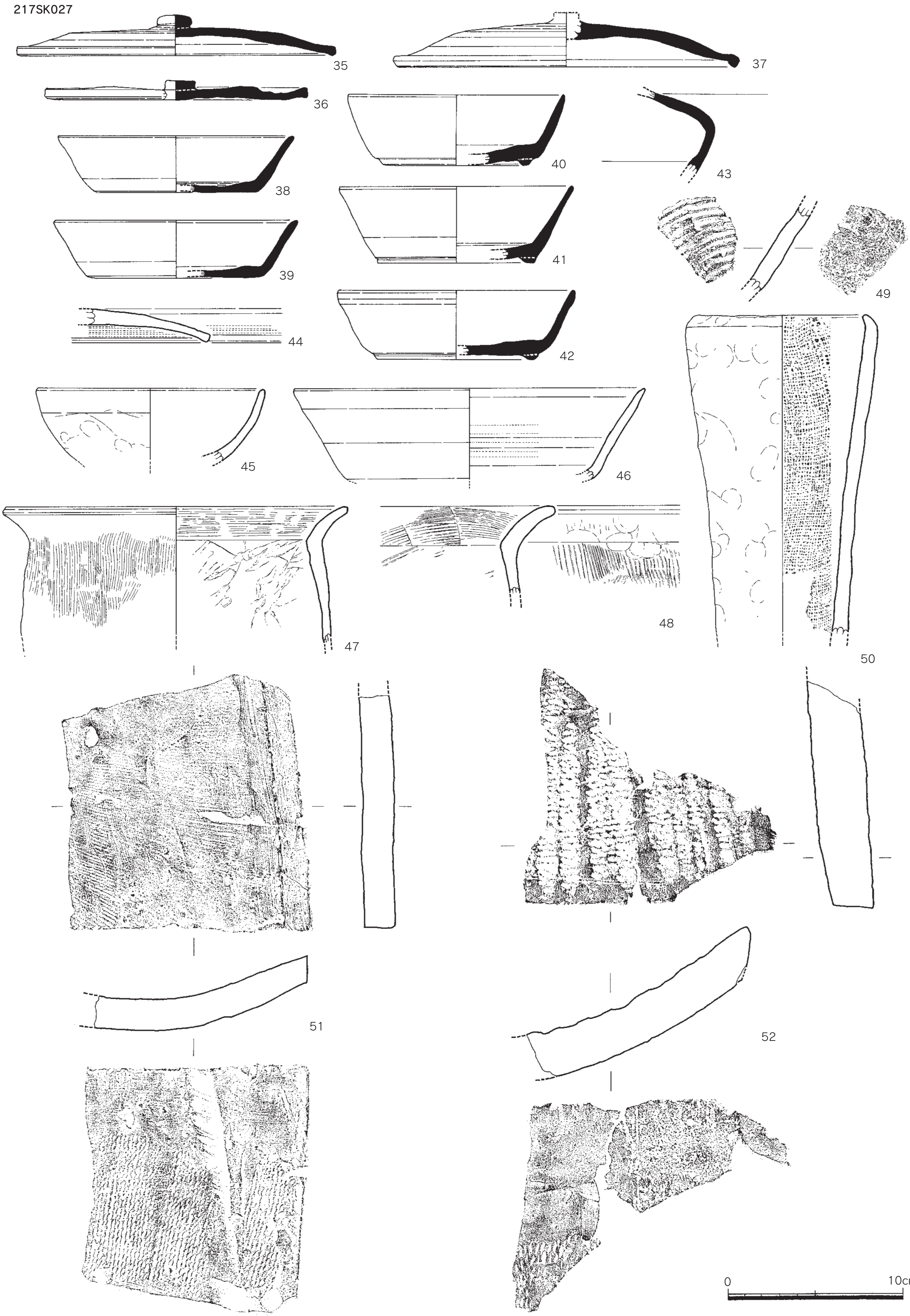



fig.16　第 217 次調査　土坑出土遺物実測図その 2（1/3）

蓋３（6）　口縁部から天井部までの約 3/8 残存する。口径 12.1cm、残存高 1.0cm、底径 9.6cm に復原される。天井部切り離しはヘラ切りで、その後ナデ調整される。口縁端部はやや丸みを帯びた断面三角形である。焼成還元ともに良好。

蓋ｃ３（7 ～ 9）　口径 13.6 ～ 15.6cm に復原される。7 はつまみ部分は欠損するが、天井部外面に貼付け時の回転ナデが確認できる。8・9 の口縁端部は小さな断面三角形を呈し、天井部切り離しは回転ヘラ切りされ、後にナデ調整される。つまみの形状は 8 が高めの円筒形状、9 は低めの擬宝珠形を呈す。7 ～ 9 とも焼成、還元ともに良好である。

小坏ｃ（11・12）　口径 10.0 ～ 10.7cm に復原される。いずれも口縁部から底部の残存資料で、やや外方に開いた断面四角形の高台を有す。底部切り離しは 12 については不明であるが、11 は回転ヘラ切り。12 の体部外面には別個体の付着がみられ、重ね焼きされたと考えられる。体部形状は 11 がほぼまっすぐ立ち上がるが、12 は丸みを帯びる。

坏ａ（13 ～ 15）　いずれも口縁部から底部の残存資料。口径 13.6 ～ 13.8cm、器高 3.3 ～ 4.1cm に復原される。底部切り離しは 13・15 がヘラ切りされ、15 はその後不定方向ナデで焼成される。14 はヘラ切りの可能性があるが不明瞭。いずれも口縁部で重ね焼きによる色調に変化がみられる。いずれも焼成、還元は良好。

大坏ｃ（16）　口縁部から底部で口縁部は約 1/8、底部は約 1/3 残存。口径は 17.6 ㎝、器高 5.6cm に復原される。高台はやや外方にはねた小さな断面四角形を呈し、体部外面下位はやや明瞭に屈曲する。胎土は 2 ㎜以下の白色砂粒をやや多く含み、軟質。焼成はやや良好で、還元不良。

皿ａ（17 ～ 19）　すべて口縁部から底部の破片資料。口径は 12.5 ㎝～ 15.6 ㎝。底部は回転ヘラ切りされ、17 はその後ナデ、18・19 は不定方向ナデで調整される。17・18 の口縁部は重ね焼きによる変色がみられる。焼成はすべて良好で、還元は 17・18 が良好で 19 がやや良好である。

壺（10）　底部から体部の小破片。底部と体部の境目はほぼ垂直に屈曲し、内面と体部外面は回転ナデ調整される。底部切り離しは不明であるが、板状圧痕が観察できる。肥後系か。

壺ｂ（20）　肩部を含む体部破片。肩部はほぼ外方に直角に屈曲する形状である。内外面とも回転ナデ調整。胎土は緻密で、焼成、還元ともに良好。

小壺（21）　口縁部から底部の残存資料。高台はやや外方に傾く断面四角形で貼付けられる。底部切り離しは回転ヘラ切り、その後ナデで調整される。肩部上位が外方にほぼ直角に小さく張り出す形状を呈す。焼成、還元ともに良好。

高坏（22）　蓋３の可能性もあるが、高坏脚端部として報告した。底径は 16.5 ㎝に復原され、内外面とも回転ナデされる。焼成良好で還元は不良。

土師器

蓋ｃ３×高坏（23）　口縁部から天井部の小破片。天井部外面につまみ接合のための回転ナデがみられる。内外面ともにミガキａで仕上げられる。口径 16.7 ㎝、天井径 12.0 ㎝。なお復原によると、つまみがかなり大きく復原されることになるため、高坏の皿部の可能性も考えられようか。

土師器

坏ｃ（24・25）　口縁部から底部の残存資料。24 は口径 12.5cm、器高 4.4cm。25 は口径 14.0cm、器高 4.5cm。いずれも高台は貼付けられ、24 はほぼ直立、25 は外方にはねた断面四角形の形状を呈す。24 は内面から体部外面、25 は高台部以外全てをミガキａで調整される。24・25 ともに焼成良好。淡黄茶色～灰茶色を呈す。

椀ｃ(26)　底部の約 1/3 残存破片。高台径は 7.0 ㎝に復原される。底部切り離しは回転ヘラ切りされ、

その後回転ナデで調整される。焼成良好。
坏ｃ×皿ｃ（27） 底部の小破片。底部は回転ヘラ削りされ、貼付け高台は直立した断面四角形の形状である。内面にはミガキａがみられる。焼成良好。
坏ｄ（28） 口縁部から底部の約2/5残存。口径15.4㎝、底径6.7㎝に復原され、器高2.45㎝を計る。浅型の形状である。体部外面下位から底部にかけて回転ヘラケズリされており、内外面ともミガキａで仕上げられている。焼成良好。
小甕ａ（29） 口縁部の約1/6。内面は不定方向の削り調整、外面は摩耗が著しいが、縦方向の刷毛調整が観察できる。胎土には５㎜以下の砂粒を多く含み緻密。焼成良好である。
製塩土器
焼塩壺（30～32） いずれも手捏ね成形。30は口縁部の約1/6。口径は14.8㎝に復原されるが、若干の歪みがある。内面は工具を使用したナデ調整、外面は成形のための指頭圧痕が観察できる。胎土には1㎜以下の白色・透明砂粒と0.3㎜以下の雲母粒を多く含み緻密。Ⅱ-ｂ類。31は体部から底部の小破片。内面は細かな布目痕が観察できる。胎土には0.5～1.5㎜の角閃石が小量含まれる。Ⅱ類。32は口縁部の一部の小破片と考えられ、外面は指頭圧痕、内面に横、斜め方向の叩き目が確認できる。胎土は2㎜以下の白色砂粒と1㎜以下の雲母粒を多く含み、きめが粗い。Ⅱ類。30～32のすべてが焼成良好である。
瓦製品
平瓦（33） 現存長8.3㎝、厚さ1.7㎝を計る。凸面には一部縄目叩がみられる。胎土は須恵質で硬質。焼成良好である。
土師質土器
すり鉢（34） 体部小破片。内面にやや幅広いすり目と不定方向ナデ、外面には成形時の指頭圧痕が観察できる。胎土は軟質で、きめ細かい。焼成良好。
217SK027出土遺物（fig.16、CD写真038～041）
須恵器
蓋ｃ３（35～37） 35はほぼ完形の資料。口径18.25㎝、器高2.3㎝、天井径12.4㎝を計る。天井部は回転ヘラ切りされ、貼付けられたつまみはやや低い擬宝珠形を呈す。また口縁端部は丸味のある断面三角形である。焼成、還元ともに良好。36･37はいずれも口縁部から天井部まで1/3程度残存し、口縁端部は小さな断面三角形を呈す。36は口径14.8㎝に復原される。低い擬宝珠形のつまみが貼り付けられ、天井部は回転ヘラ切り調整である。37は口径19.8㎝に復原される。つまみ部分は欠損するが、貼付け時の回転ナデがみられ、天井部は部分的にヘラ削りされる。いずれも焼成還元良好。
坏ａ（38・39） 38は口径13.6㎝、39は口径14.0㎝に復原される。いずれも底部切り離しはヘラ切りで、その後38が回転ナデ、39がナデで調整される。体部下位の形状はやや明瞭に屈曲する。38・39ともに焼成良好。
坏ｃ（40～42） いずれも口縁部から底部の残存。口径は12.4㎝～13.5㎝に復原される。
底部切り離しは、40が不明、41・42はヘラ切りされ、その後41は回転ナデ、42はナデ調整される。高台の形状は40～42とも低い断面台形で、41・42はやや外方に傾く形状である。いずれも焼成、還元ともに良好。
小壺（43） 肩部の小破片。ほぼ直角に外方に張り出す形状。内外面ともに回転ナデされる。胎土は緻密で、焼成、還元ともに良好。
土師器

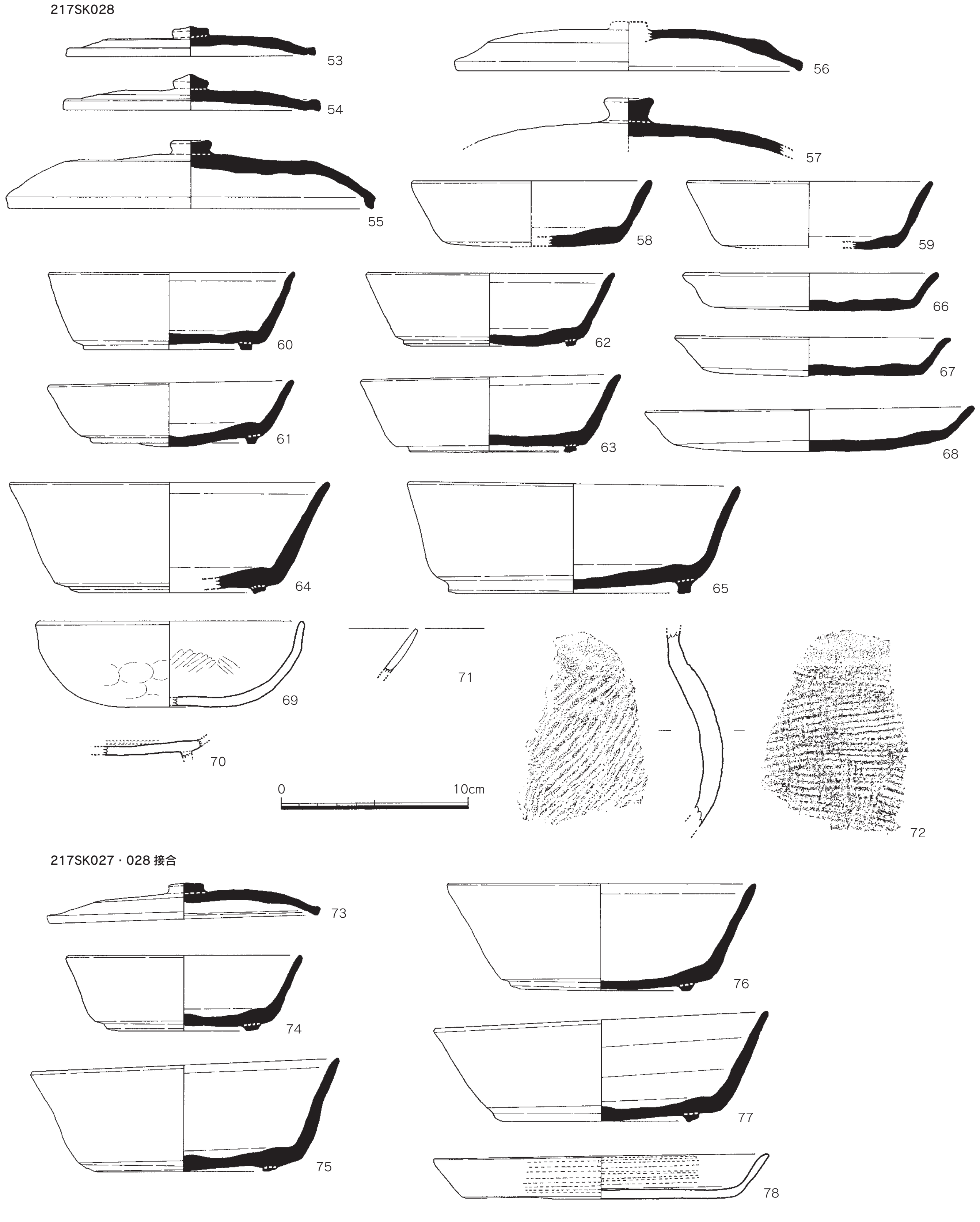



**fig.17　第 217 次調査　土坑出土遺物実測図その 3（1/3）**

蓋 3（44）　口縁部を含む小破片。外面は回転ヘラ削り後粗いナデで調整されるが、口縁部にミガキａがみられる。内面もミガキａで調整される。焼成良好。

坏（45・46） 45 は口縁部から体部の約 1/4 残存する。口径 13.2cm に復原され、残存高は 4.1cm を計る。外面には削り調整後粗いナデで調整され、指頭圧痕がみられる。手持ち成形の可能性あり。46 は口縁部から体部の 1/6 が残存。口径 20.2 ㎝に復原される。全体的に摩耗気味であるが、体部内面にミガキａの調整がみられる。いずれも胎土は緻密で焼成良好。

甕ａ（47・48） いずれも口縁部から体部の小破片で、口縁部と体部内面の境目は明瞭な屈曲がみられる。47 は口縁部内面が横方向の刷毛調整と体部内面は削り調整され、体部外面には縦方向の細かな刷毛目が観察できる。48 は口縁部内面に斜め方向に刷毛目がみられ、体部内面はケズリ調整、体部外面には縦方向の刷毛調整後ナデにより調整される。いずれも胎土はやや粗いが、焼成は良好。

製塩土器

焼塩壺（49・50） 49 が小破片、50 が口縁部 1/2 と体部の一部が残存。49 の内面は工具で削り調整され､外面は手捏ね調整による指頭圧痕がみられる。胎土は 1 ㎜以下の金雲母粒と黒色粒子を多く含み、やや粗い。50 の外面も同じく指頭圧痕と、内面には布目の痕跡が確認できる。口径は 11.0 ㎝に復原される。胎土は緻密。49・50 ともに焼成良好である。

瓦製品

平瓦（51･52） 51 は現存長 12.3 ㎝､厚さ 1.8 ㎝を計る。凸面は縄目叩き調整され､胎土はやや粗い。須恵質。焼成良好である。52 は現存長 14.9 ㎝、厚さ 2.8 ㎝を計り、凸面は一部縄目調整がみられる。凹面には模骨もしくは置き台の痕跡もみられ、それが縄を巻いたものであったことが観察される。胎土は 2 ㎜以下の砂粒を多く含み、やや粗い。焼成は良好。

217SK028 出土遺物（fig.17、CD 写真 042 ～ 046）

須恵器

蓋ｃ３（53 ～ 56） いずれも口縁部から天井部までの残存破片で、口径は 13.4 ㎝～ 19.8 ㎝。天井部切り離しはヘラ切りされ、その後ナデで調整される。また、口縁端部に重ね焼きによる色調の変化もみられる。53 ～ 55 は擬宝珠形のつまみを有すが、56 はつまみが欠損し、接合のための回転ナデ調整のみ観察できる。いずれも硬質で焼成、還元ともに良好。

蓋ｃ（57） 体部から天井部の小破片。やや高めのつまみが貼付けられ、天井部外面は回転ヘラケズリされる。焼成、還元ともに良好。

坏ａ（58・59） どちらも口縁部から底部破片。58 は約 1/3 残存。口径は 12.8 ㎝、器高 3.5cm に復原される。59 は底部が約 1/2 と口縁部が若干残る程度で、口径 13.1cm、器高 3.5cm に復原される。いずれも焼成、還元ともに良好。

坏ｃ（60 ～ 65） すべて口縁部から底部の残存破片。60 ～ 63 が口径 13.1cm ～ 13.9cm、器高 3.4 ～ 4.1cm に復元される。64・65 はやや大きく、口径 17.6 ～ 17.8cm、器高 5.9cm に復原される。底部切り離しは不明である。63 を除いてすべてヘラ切りされ、その後ナデ調整される。高台の形状もすべて低い断面台形を呈し､62･64 はやや外方に跳ね上げた形状である。すべて焼成､還元良好である。

皿ａ（66 ～ 68） すべて口縁部から底部の残存破片。口径 13.6 ～ 17.6cm、器高 2.0 ～ 2.3cm に復原される。底部切り離しはヘラ切りで､67･68 はその後ナデ調整される。いずれも焼成､還元ともに良好。

土師器

坏ａ×皿ｂ（69） 口縁部から底部の約 1/2。口径は 14.3 ㎝に復原され、器高は 4.6 ㎝。手持ち成形と考えられ、体部外面に指頭圧痕がみられ、内面には斜め方向にミガキｃが観察できる。

坏ｃ×皿ｃ（70） 底部の小破片。底部外面は回転ヘラ削りされ、内面にはミガキａがみられる。焼成良好。

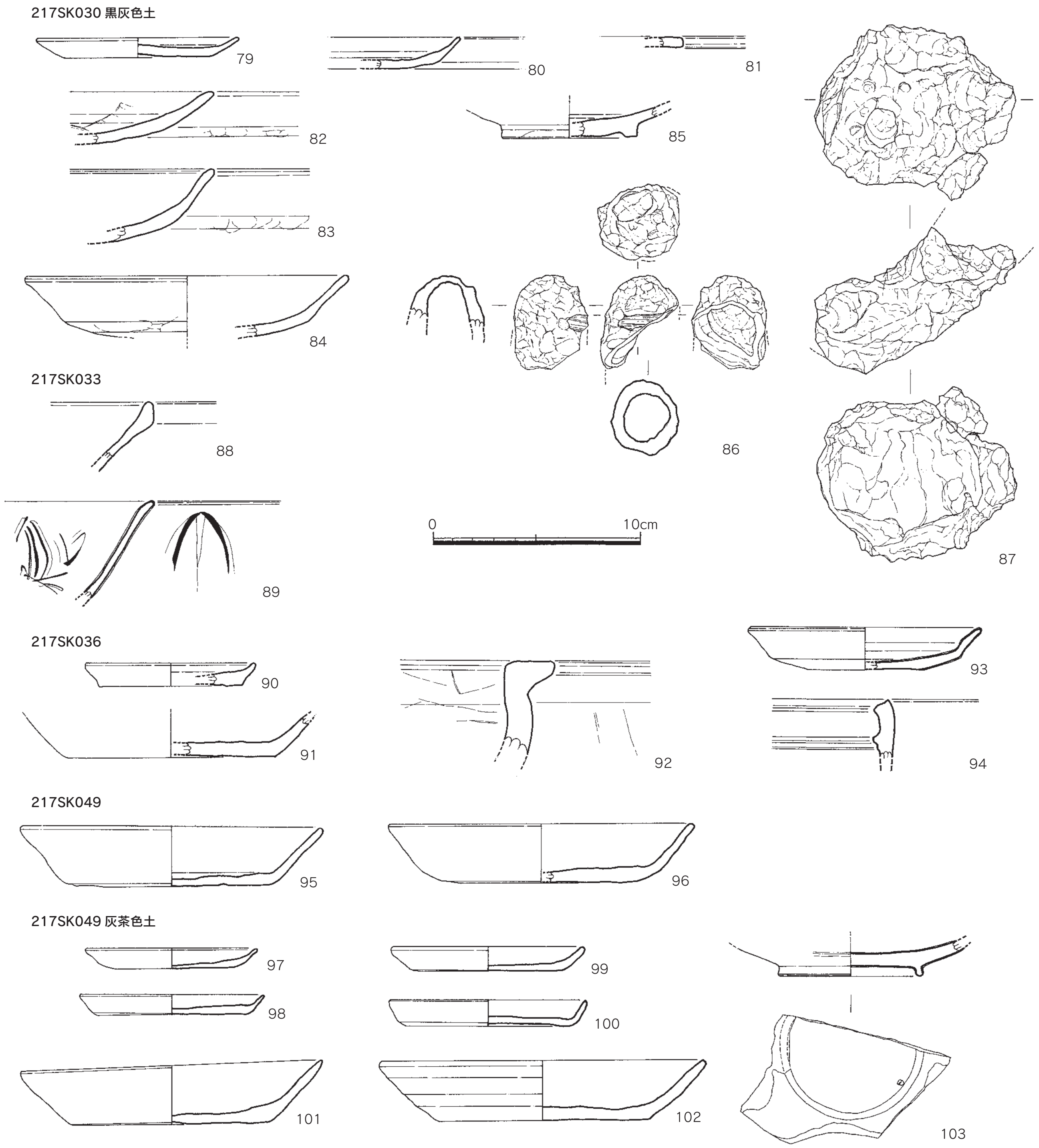



fig.18　第 217 次調査　土坑出土遺物実測図その 4（1/3）

越州窯系青磁

椀×坏（71）　口縁部の小破片。暗緑灰色の光沢のある薄い釉で施釉される。貫入あり。I 類。

製塩土器

煎熬土器（72）　小破片。内面は当て具による調整で、外面には叩き痕がみられる。内外面とも茶褐色を呈す。焼成良好。

217SK027・028 出土遺物（fig.17、CD 写真 047）

須恵器

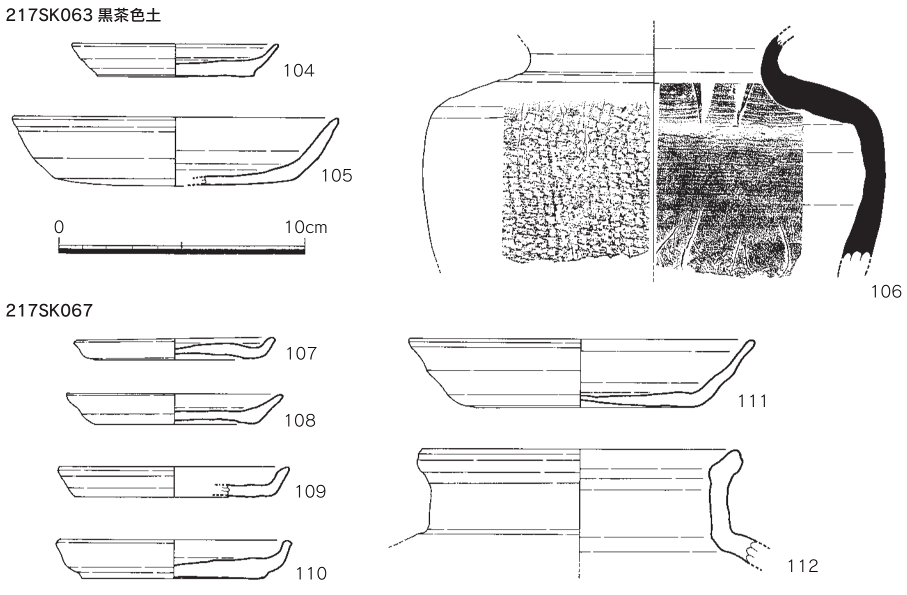



fig.19　第 217 次調査　土坑出土遺物実測図その 5（1/3）

蓋 c 4（73）　口縁部が約 1/8 欠損。口径 14.6cm、器高 1.9cm。擬宝珠形の低いつまみを有し、天井部はヘラ切りされ、その後ナデ調整される。口縁端部はほぼ丸みをおびて形状の簡略化がみえる。また重ね焼きによる変色が内外面に観察できる。焼成、還元ともに良好。

坏 c（74 ～ 77）　いずれも口縁部から底部の残存破片。口径は 12.6 ～ 17.9 ㎝で底部切り離しはヘラ切り、その後回転ナデやナデでの調整がみられる。74・75・77 には重ね焼きに伴なう変色化がみられる。焼成、還元すべて良好。

皿 a（78）　底部約 7/8、口縁部約 2/3 が残存。底部は回転ヘラケズリされ、内面から体部外面までミガキ a で仕上げられる。焼成良好。

217SK030 黒灰色土出土遺物（fig.18、CD 写真 048 ～ 051）

土師器

小皿 a（79・80）　いずれも口縁部から底部の破片。底部切り離しはヘラ切りで、その後 79 はナデ、80 は不定方向ナデで調整される。いずれも焼成良好。

小皿 a2（81）　口縁部の小破片。口縁端部内面には沈線が観察できる。胎土は緻密で、焼成良好。

土師器

丸底坏（82 ～ 84）　いずれも口縁部から底部の小破片。底部切り離しは 82・83 がヘラ切り、84 が糸切りで、いずれもその後ナデ調整される。また、82 ～ 84 に共通して、内面はヨコナデとミガキ b 調整、体部外面下位に底部押圧の指頭圧痕が観察できる。いずれも焼成良好。

緑釉陶器

皿（85）　底部の残存資料。内面と高台部外面にかけて緑灰色の釉がかかる。高台径は 6.6 ㎝に復原される。素地は緻密で焼成良好である。京都系。

その他の遺物

鋳型（86）　残存長 4.4 ㎝、幅 3.9 × 3.4 ㎝、厚さ 0.5 ～ 0.7cm を計る。外面中央に幅 0.3 ㎝、深さ 0.1 ㎜弱の凹線が二条観察できる。外面に被熱に変色化や破裂痕、ガラス質の部分がみられる。中子の可能性がある。

鉱滓（87）　現存長 7.0 ㎝、幅 9.7 ㎝、厚さ 4.7 ㎝、重さ 347.9 g を計る。湾曲する形状から椀型滓の可能性がある。外面は茶色～茶灰色、内面は黒褐色、暗緑灰色を呈す。

217SK033 出土遺物（fig.18）

須恵質土器

こね鉢（88）　口縁部の小破片。胎土は 1 ㎜以下の砂粒を多く含み、粗い。焼成良好。東播系。

龍泉窯系青磁
椀（89） 口縁部から体部の小破片。外面にやや幅広の連弁文と内面には草花文が確認できる。青味を帯びた緑色が内外面に施釉される。焼成良好。II - c 類。
217SK036 出土遺物（fig.18）
土師器
小皿 a（90） 口縁部から底部の約 1/4 弱が残存する。小片のため計測値はやや不安があるが、口径 8.3cm、器高 1.1cm に復元している。底部切り離しはヘラ切り。内面見込みに一条の沈線がみられる。焼成良好。
坏 a（91） 体部から底部の約 1/4。底部切り離しは糸切り。底径は 10.0 ㎝に復原される。胎土はやや緻密、焼成は良好である。
鍋（92） 口縁部の小破片。残存高は 4.6cm を計る。内面はヘラケズリ、外面に工具によるナデが縦方向に観察できる。胎土はやや緻密で、白色砂粒、黒色粒などの混入物が多い。焼成良好。
同安窯系青磁
皿（93） 口縁部から底部の約 1/4 残存。口径 11.4 ㎝、底径 5.2 ㎝に復原され、器高は 2.05 ㎝を計る。底部外面には黒褐色の付着物がみられる。内面から体部外面まで、暗黄灰色の釉が施釉される。焼成良好。I -2 a 類。
中国陶器
鉢（94） 口縁部の小破片。内面に突帯が二条みられ、内外面はヨコナデ調整される。外面は暗灰色、内面は暗灰色、黒暗灰色を呈す。胎土やや粗く、焼成良好。I -1 b 類。
217SK049 出土遺物（fig.18、CD 写真 052・053）
坏 a（95・96） それぞれ口径は 14.6 ㎝、14.8 ㎝、底径は 10.1 ㎝、9.4 ㎝に復原され、器高はいずれも 2.9 ㎝を計る。底部切り離しはどちらも糸切り。焼成良好。
217SK049 灰茶色土出土遺物（fig.18、CD 写真 054・055）
土師器
小皿 a（97 ～ 100） 口縁部から底部の 1/3 ～ 1/4 程度の残存破片。口径 8.4 ～ 9.6cm。底部切り離しは全て糸切りで、98 はその後ナデ調整される。すべて焼成良好である
坏 a（101・102） 101 は約 2/3 残存し、口径 14.6cm、器高 2.8cm を計る。102 は 1/4 残存し、口径 15.8cm、器高 2.9cm を計る。いずれも底部切り離しは糸切りで、焼成は良好である。
緑釉陶器
皿（103） 底部から体部の約 1/2。高台畳付けを除いて全体に光沢のある淡緑黄色の釉が薄く施される。また内面見込みには目跡らしきものと、底部外面にはトチン跡と考えられる痕跡がみられる。京都系。
217SK063 黒茶色土出土遺物（fig19、CD 写真 056、057）
須恵器
壺（106） 頸部から体部にかけての破片で、肩が張った壺である。内面と肩部外面は回転ナデ、体部外面には叩きを施す。焼成、還元ともに良好。
土師器
小皿 a（104） 底部 2/5、口縁部 1/6 が残存。口径 8.4cm、器高 1.35cm を計る。底部切り離しは糸切りである。胎土はきめ細かい。焼成良好。
坏 a（105） 口縁部から底部の約 2/5 が残存。口径 13.2cm、器高 2.8cm を計る。底部切り離しは糸切りで、胎土はきめ細かく、焼成は良好である。口縁部に歪みを生じる。

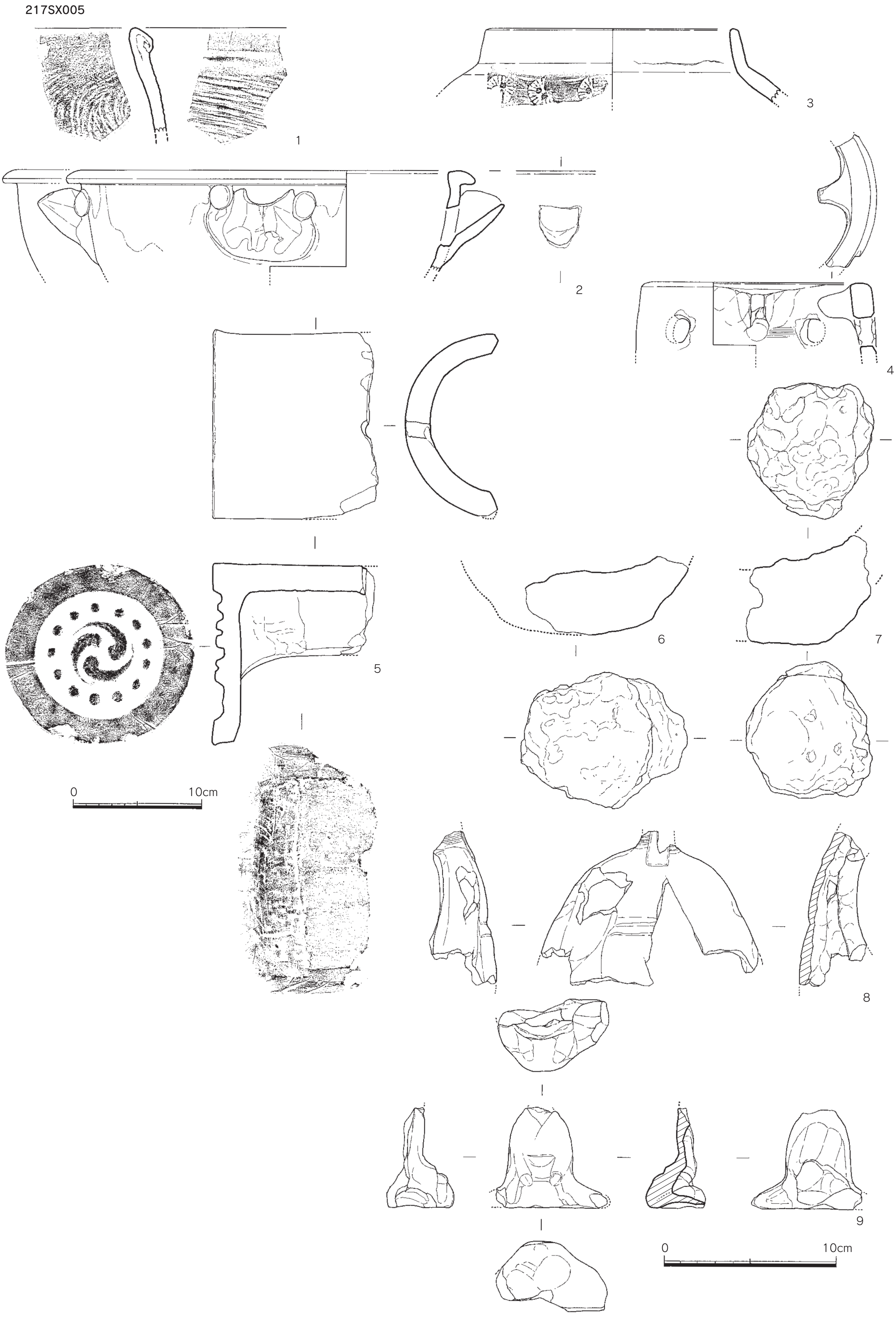



fig.20　第 217 次調査　その他の遺構出土遺物実測図その 1（5 は 1/4、その他は 1/3）

217SK067 出土遺物（fig19、CD 写真 058・059）

土師器

小皿 a （107 ～ 110）　いずれも口縁部から底部の残存で、107 はほぼ完形の資料。口径は 8.2 ㎝から 9.5 ㎝。底部切り離しはすべて糸切りである。

坏 a （111）　口縁部が 1/5、底部は全形残存する。口径 14.0c m、器高 2.8cm を計る。底部切り離しはヘラ切りで、焼成は良好。

中国陶器

壺（112）　口縁部の約 1/4 残存。口径は 13.2 ㎝に復原される。内外面に褐色釉が薄く施釉される。胎土は粘質で白色砂粒を含む。焼成良好。

その他の遺構出土遺物

217SX005 出土遺物（fig.20、CD 写真 060 ～ 065）

須恵器

甕（1）　口縁部の小破片。内面は同心円状の当て具痕と外面は横方向の叩目がみられる。口縁部は玉縁成形。胎土は緻密で焼成、還元良好。近世遺物の可能性がある。

国産陶器

雲助（2）　口縁部と注ぎ口を含む体部の小破片。口径は 23.8 ㎝に復原される。注ぎ口が貼付けて設けられ、その後全面に暗茶褐色の釉がかけられており、口縁部平端部は釉剥ぎされる。焼成良好。

瓦質土器

風炉（3）　口縁部から体部の小破片。口径は 14.6 ㎝に復原される。体部外面には三つの菊花文のスタンプが観察できる。外面は暗灰色、内面は灰色を呈し、胎土は緻密。焼成は良好である。また、内面に粘土の繋ぎ目らしき痕跡がみられる。焼成良好。

涼炉（4）　口縁部から体部の一部。口径は 13.2 ㎝に復原され、体部に二箇所、内径 1.6 ㎝ほどの穿孔部がみられる。内外面ともの黒色から黒灰色を呈す。胎土は緻密で焼成は良好。

瓦製品

軒丸瓦（5）　残存長 12.9 ㎝、幅 12.9 ㎝、厚さ 2.0 ㎝、瓦当径は 14.2 ～ 14.3 ㎝を計る。瓦当には巴文が確認できる。また丸瓦部凸面には釘等で固定するための穿孔の一部がみられる。胎土は緻密。焼成は良好で瓦質である。

土製品

人物像（8・9）　男性貴人束帯像の背中の部分で、頸から胴体の部分まで残存する。残存長 9.0 ㎝、幅 12.6 ㎝を計る。外面はナデ、内面は指頭圧で調整され、側面には外の部位を接合する面もみられる。内外面とも淡灰橙褐色を呈す。胎土は緻密で焼成良好。

9 は着物をきた女性正座坐像の正面部分で、肩から脚の部分まで残存する。残存長 5.8 ㎝、幅 6.4 ㎝を計る。外面はナデ調整､内面は指頭圧による調整がなされる。着物の袖の一部に接合面も観察できる。胎土は緻密で焼成良好。全面暗橙褐色を呈す。

その他の遺物

鉱滓（6・7）　いずれも椀型滓。6 は 7.9 × 9.6 ㎝、厚さ 3.5 ㎝を計る。下面には径 9cm 程の円形の型跡が観察される。内外面とも暗茶褐色から黄茶褐色を呈す。7 は 8.0 × 7.3 ㎝､厚さ 6.45 ㎝を計り、内面が淡黄褐白色から暗茶褐色、外面が黄茶褐白色、灰褐色、灰色を呈す。

217SX010 出土遺物（fig.21、CD 写真 066 ～ 073）

土師器

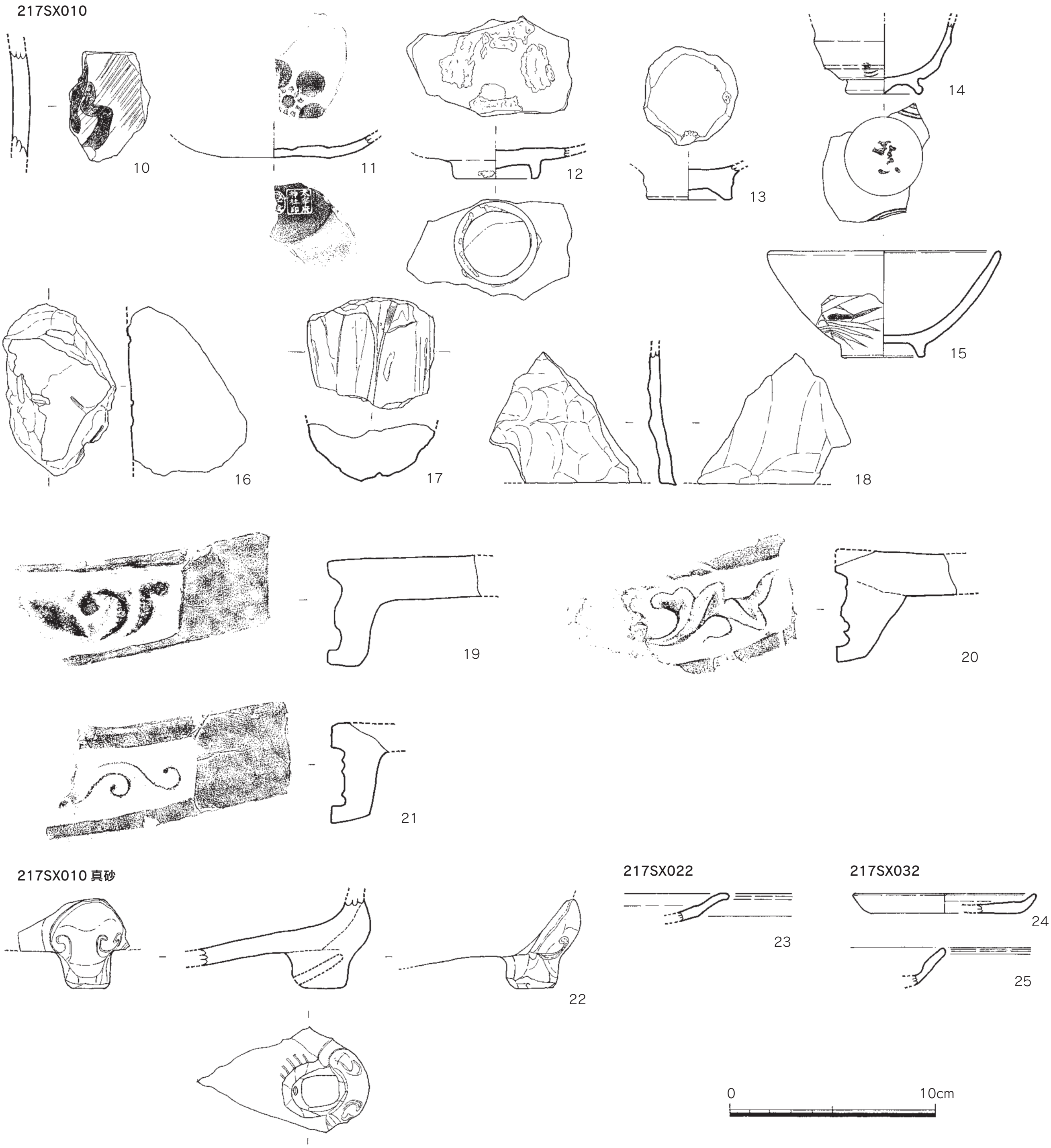



fig.21　第 217 次調査　その他の遺構出土遺物実測図その 2（1/3）

甕（10）　体部の小破片。外面は斜め方向に刷毛調整される。焼成良好。なお「水」字とみられる墨書が観察できる。

国産陶器

かわらけ（11）　底部の小破片。底径 5.2 ㎝に復原される。素地は淡褐色を呈し、施釉はみられない。内面には梅花の型文がみられ、外面には縦 1.2 ㎝、横 1.15 ㎝の角印の中に「太宰府神社印」と、縦 1.1 ㎝の丸印の中に「岡平造」と読める陰刻印が二つ押されている。

椀×皿（12・13）　12 は底部から体部の残存破片。高台径は 4.2 ㎝を計る。高台畳付け部分以外全て

光沢のある淡緑灰色の釉で施釉される。貫入もあり。高台部、底部内面には重ね焼きに伴なう砂目の目あとが確認できる。素地は淡灰白色を呈し焼成は良好。唐津系。13 は底部のみ残存。高台径は 4.2 ㎝に復原できる。高台の畳付けを含む一部を除いて、淡灰緑色の釉が薄く施釉される。内面見込みには 2 箇所砂目の跡が確認できる。唐津系。

国産磁器

小椀（14）　口縁部から体部の 1/5 残存。底径 4.7 ㎝を計る。体部外面には何らかの文様と、判読できないが、底部外面には文字が鮮やかな濃青色の呉須で描かれている。高台畳付けを除き、全体を光沢のある透明釉が施される。

椀（15）　口縁部約 1/5 から底部までの残存資料。口径は 11.4 ㎝に復原され、器高 5.2 ㎝、高台径 4.1 ㎝を計る。高台畳付け以外暗緑灰色の光沢のある不透明釉で全体が施釉された後、体部外面に淡白褐色、淡緑白色で草文が絵付けされる。焼成良好。

瓦製品

軒平瓦（19 ～ 21）　19 は現存長 7.5 ㎝、幅 15.8 ㎝、厚さ 2.0 ㎝を計る。瓦当には唐草文が押型で施される。断面は灰褐色でそれ以外は黒灰色を呈す。焼成良好。20 は瓦当部のみ残存し、現存長 2.8 ㎝、残存幅 12.5 ㎝、厚さ 2.8 ㎝を計る。瓦当は唐草文とも見られるやや幅広の文様が押型で施される。断面は淡灰白色、淡灰色を呈すが、その他は黒灰色である。21 は残存長 5.9 ㎝、横 11.2 ㎝、厚さは 2.1 ㎝を計る。瓦当は唐草文が押型で施される。瓦質で黒灰色を呈す。焼成良好。

土製品

人物像（18）　着物の裾部分の小破片ではないかと考える。外面はナデ調整、指頭圧による調整がなされる。全体が淡茶褐色を呈す。焼成良好。

その他の遺物

焼土塊（16・17）　16 は残存長 8.4 ㎝、幅 5.2 ㎝、厚さ 5.1 ㎝。胎土には 3 ㎜大の砂粒を多く含む。全体は茶褐色を呈す。17 は残存長 5.4 ㎝、幅 6.1 ㎝、厚さ 2.3 ㎝。胎土には 3 ㎜以下の淡白褐色の砂粒を多く含む。全体は淡茶褐色を呈す。

217SX010 真砂出土遺物（fig.21、CD 写真 074・075）

国産陶器

鉢（22）　獣脚を含む底部の小破片。外面に厚み 0.8 ㎝程度の粘土が貼り付けられ、それに獣の文様が刻まれている。また高台内面には縦 0.4 ㎝×横 0.4 ㎝×奥行 2.5 ㎝の穿孔が一ヶ所確認できる。光沢のない淡白褐色の釉が外面の一部にかかる。貫入あり。焼成良好。古瀬戸か。

217SX022 出土遺物（fig.21）

土師器

小皿ａ 2（23）　口縁部から底部の小破片。口縁端部内面に沈線がみえる。底部切り離しは回転ヘラ切り。胎土はやや緻密で焼成は良好。

217SX032 出土遺物（fig.21）

土師器

小皿ａ（24）　口縁部から底部で口縁部の約 1/3 が残存。口径 9.9cm、器高 0.9cm を計る。底部切り離しは回転ヘラ切りで、その後ナデで調整される。

同安窯系青磁

皿（25）口縁部の小破片。残存高 2.95cm。内外面は黄色味のある透明釉で施釉される。焼成良好。Ⅰ-2 類。

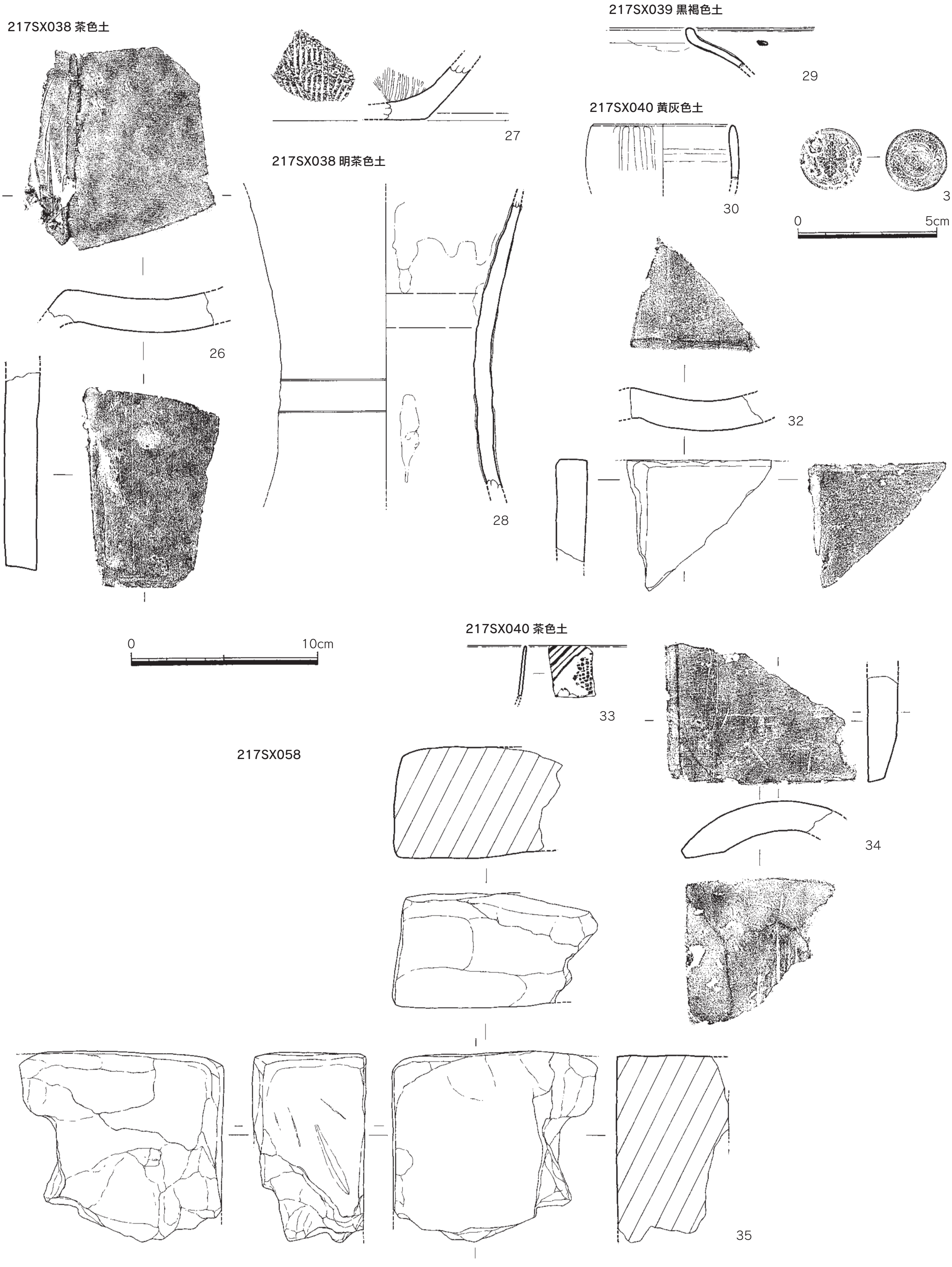



fig.22　第 217 次調査　その他の遺構出土遺物実測図その 3（31 は 1/2、その他は 1/3）

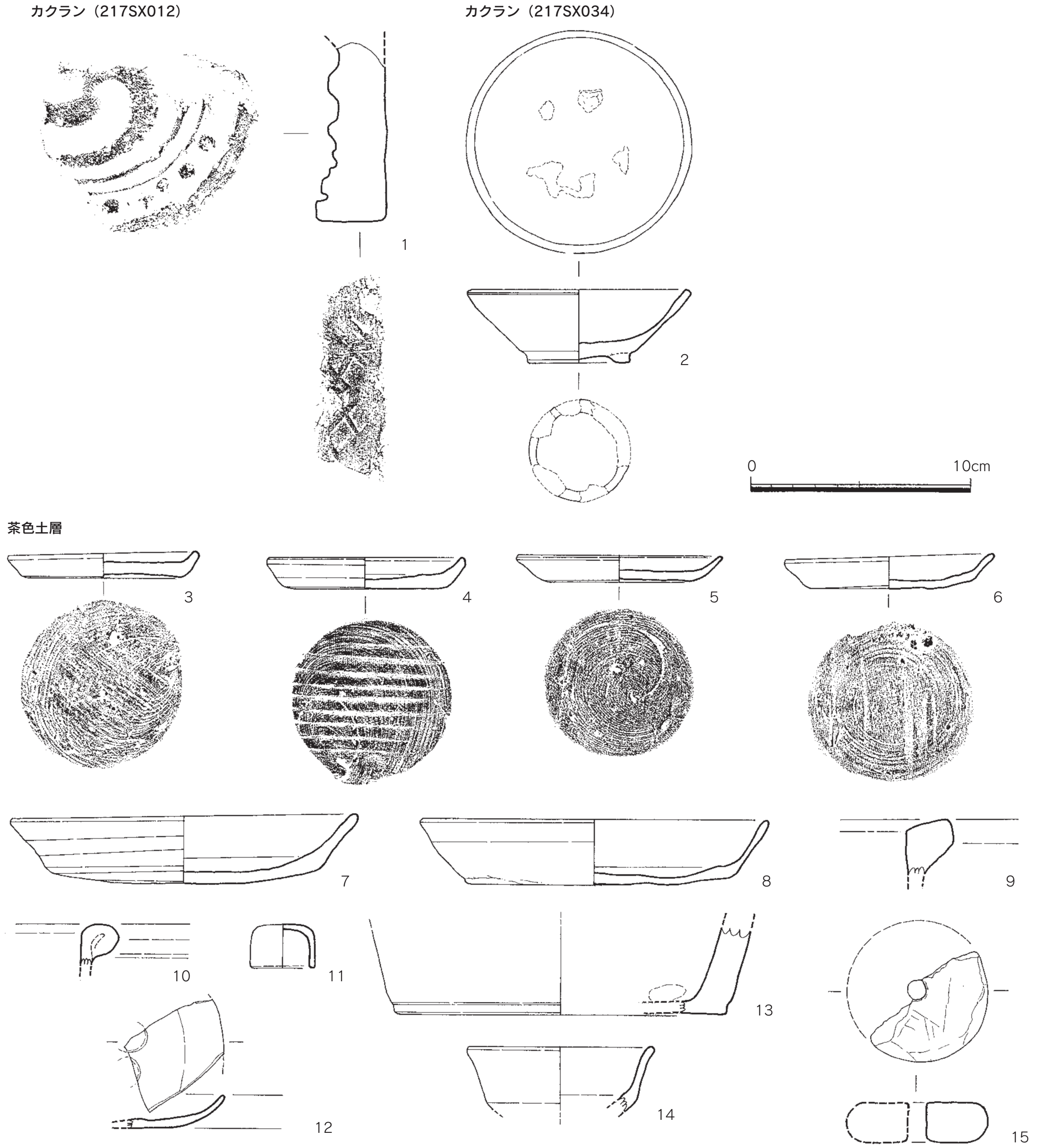



**fig.23　第 217 次調査　カクラン・茶色土層出土遺物実測図（1/3）**

217SX038 茶色土出土遺物（fig.22、CD 写真 076・077）

瓦製品

桟瓦（26）　残存長 10.6 ㎝、幅 7.4 ㎝、厚さ 1.8 ㎝を計る。全面削り後ナデ調整される。焼成良好で、瓦質である。

国産陶器

擂鉢（27）　底部の小破片。内面にすり目がみられるが、摩耗して深さは浅い。胎土はやや緻密で、焼成良好。内外面とも暗赤茶色を呈す。

217SX038 明茶色土出土遺物（fig.22、CD 写真 076・077）

国産陶器

瓶（28）　口縁部から頸部の小破片。内面の上部から下部の一部には灰白色、灰色の釉だれがみられ、外面には光沢のない淡黄褐色味の灰釉がかかる。素地は暗赤紫色～明橙色を呈し、やや粗く硬質。焼成は良好である。

217SX039 黒褐色土出土遺物（fig.22）

国産陶器

土瓶（29）　口縁部の小破片。口縁端部を除いた内外面に淡黄色土の釉がかかり、外面の一部には飴色の鉄絵がみられる。焼成良好。

217SX040 黄灰色土出土遺物（fig.22、CD 写真 078・079）

国産陶器

椀（30）　口径は 7.8 ㎝に復原される。内外面とも白色釉、透明釉の順で施釉され、外面には縦線の文様がみられるが、おそらく白色釉を掻きとって作られたと考えられる。焼成良好。

金属製品

銭貨（33）　一銭銅貨である。径 1.3 ㎝。大正 5 年製造。

瓦製品

桟瓦（32）　残存長 7.0 ㎝、残存幅 7.2 ㎝、厚さ 1.65 ㎝。瓦質で、焼成良好。凹凸面ともに黒灰色を呈す。

銭貨

217SX040 茶色土出土遺物（fig.22、CD 写真 078・079）

国産磁器

椀（33）口縁部の小破片。外面に鮮やかな明青色の呉須によって、花文を含む文様のプリント絵付けが施され、その後内外面に青味のある透明釉がかけられる。焼成は良好。

瓦製品

熨斗瓦（34）　残存長 7.8 ㎝、残存幅 8.2 ㎝、厚さ 1.65 ㎝を計る。凹凸面ともに黒色～黒灰色を呈す。瓦質で、焼成良好。

217SX058 出土遺物（fig.22、CD 写真 080・081）

瓦製品

塼（35）　残存長 10.2 ㎝、残存幅 10.9 ㎝、厚さ 5.9 ㎝を計る。瓦質で焼成良好。胎土には 3 ㎜以下の砂粒を多く含む。概ね淡灰褐色を呈すが、一部茶褐色の部分もある。

各層出土遺物

攪乱（217SX012）出土遺物（fig.23）

瓦製品

軒丸瓦（1）　瓦当部のみの残存破片で、残存長 9.6 ㎝、残存幅 9.8 ㎝、厚さ 2.7 ㎝を計る。瓦当面は珠文と圏線、そして足の長い巴文が観察できる。また顎部は格子叩きされ、その後ナデ調整される。黒灰色を呈し、瓦質で焼成良好。還元も良好である。

撹乱（217SX034）出土遺物（fig.23、CD 写真 082・083）

国産陶器

小皿（2）　口縁部から底部の破片で、口径 10.2cm、高台径 4.6cm に復原され、高さ 3.3cm を計る。底部内面と高台部外面に砂目がみられる。内外面ともに緑味のある灰色釉がかかる。唐津系。

茶色土層出土遺物（fig.23、CD 写真 084 ～ 087）

土師器

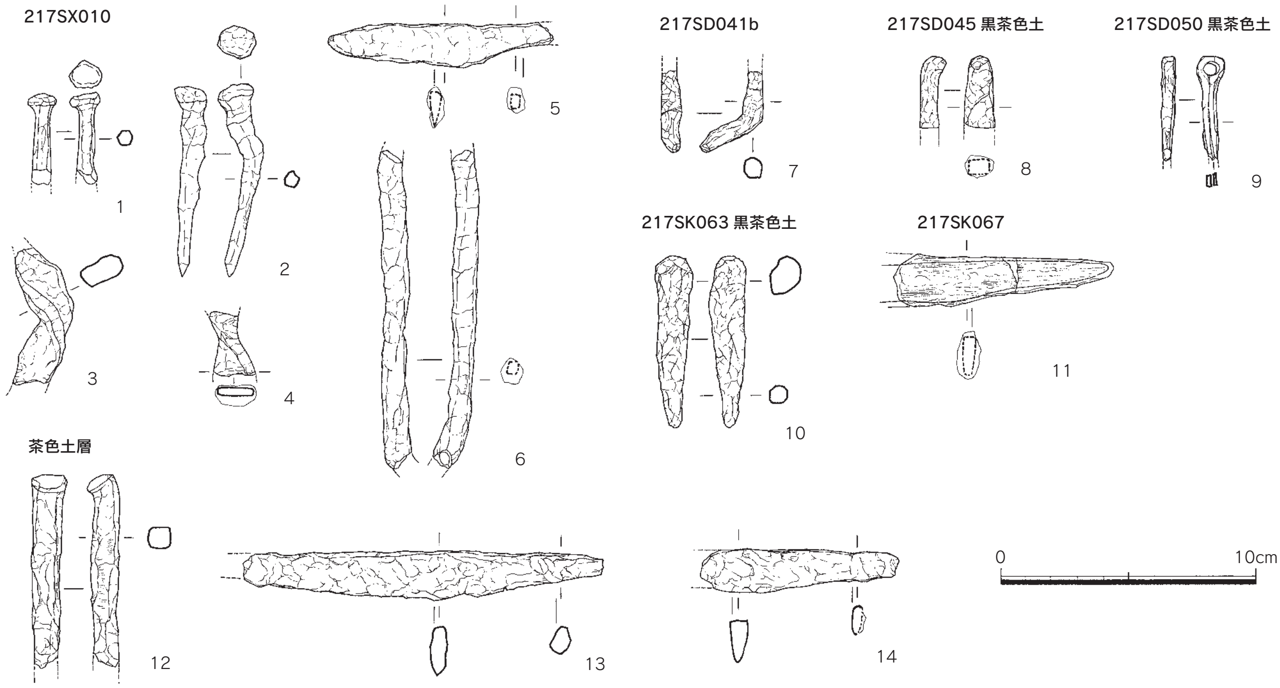



fig.24　第 217 次調査出土金属製品実測図（1/3）

小皿 a （3 ～ 6）　口径 8.8cm から 9.6cm。いずれも焼成良好。底部切り離しは 3 ～ 4 が糸切り、5・6 は条痕をもつヘラ切り。

坏 a （7・8）　7 は口縁部の一部が欠損しており、8 は完形である。口径はそれぞれ 15.9 ㎝、16.0 ㎝を計る。底部切り離しは 7 が回転ヘラ切り、8 が回転糸切りである。いずれも胎土は緻密で焼成良好である。

鍋 （9）　口縁端部の小破片。平坦部は工具による押さえ後ナデ調整され、外面上位は横ナデ、その他は粗い回転ナデ調整される。胎土は緻密で 3 ㎜以下の砂粒が多く、微細な雲母粒もやや多くみられる。焼成良好。

土師質土器

鉢×盤（10）　口縁端部の小破片。端部を折り曲げて成形した玉縁形状を呈す。胎土は緻密で精良。微細な雲母粒をやや多く含む。焼成良好。

国産陶器

蓋（11）　口径 3.0 ㎝、器高 2.0 ㎝を計る。淡白褐色の素地を有し、施釉はされていない。焼成良好である。瓶の蓋と考えられる。

かわらけ （12）　口縁部から底部の小破片。底部外面は回転ヘラケズリされ、梅花型文が押される。淡白褐色の素地で施釉されない。焼成良好。

緑釉陶器

壺 （13）　体部から底部の小破片。内外面とも明緑色の透明釉が薄くかけられるが、内面は特に剥離が著しい。素地は灰白色から淡橙灰白色を呈し、土師質。焼成良好である。

龍泉窯系青磁

坏 （14）　口縁部から体部の破片で、口縁部は 1/8 程度残存。口径は 8.6 ㎝に復原される。内外面ともやや青味のある淡緑色の半透明釉がやや厚めにかけられる。焼成良好。

土製品

紡錘車（15）　復元径 6.4 ㎝、厚さ 1.85 ㎝、穿孔復元径 0.9 ㎝で、全体の約 1/2 残存。全体的に摩耗気味。表裏とも灰白色から灰色で、断面は黒灰色を呈す。胎土は軟質で、瓦質である。

その他の出土遺物

金属製品（fig.24、CD 写真 088・089）

鉄釘（1・2・7・8・12）　1 は現存長 3.6 ㎝、断面は 0.7 × 0.6 ㎝の円形である。頭部は丸みのある三角形を呈す。2 はほぼ完形とみられる。長さ 7.7 ㎝、断面は 0.7 × 0.7 ㎝のほぼ円形を呈す。鉄棒部分の上部が「く」の字に屈曲する。1・2 とも SX010 出土。7 は現存長 3.2 ㎝で、断面は 0.75 ㎝ × 0.8 ㎝の方円形である。鉄棒部は一部屈曲がみられる。SD041 ｂ出土。8 は現存長 2.8 ㎝、断面は 1.15 × 0.8 ㎝の長方形。頭部はやや小さめ。SD045 黒茶色土出土。12 は現存長 7.6 ㎝、で 0.9 ㎝ × 0.95 ㎝の断面四角形を呈す。茶色土層出土。

鉄釘か？（10）　現存長 6.8 ㎝、断面上部は 1.2 × 1.4 ㎝の半円形、下部は 0.7 × 0.7 ㎝円形である。SK063 黒茶色土出土。

板状製品（3･4）　3 は現存長 5.4 ㎝、断面は 1.7 × 0.9 ㎝程の断面長方形である。4 は現存長 2.6 ㎝、断面は 1.5 × 0.4 ㎝である。いずれもねじりがみられる。

刀子（5・11・13・14）　いずれも鉄製である。5 は現存長 8.75 ㎝、幅 1.75 ㎝、厚さ 0.7 ㎝を計る。SX010 出土。11 は現存長 8.7 ㎝で、表面に木が残存している。鞘か柄か判然としないが、ここでは柄と判断している。SK067 出土。13 は現存長 14.2 ㎝である。14 は現存長 7.8 ㎝である。刃部か。13・14 ともに茶色土層出土。

棒状製品（6）　現存長 12.6 ㎝で断面は 0.8 × 1.0 ㎝の円形を呈す。鉄製。内部は円形の空洞が認められる。SX010 出土。

ピン状製品（9）　断面長方形で約 0.55 × 0.2cm の鉄製針金を折り曲げたピン状の製品で、内径 0.5cm 程度の環頭がつく。現存長 4.15cm。SD050 黒茶色土出土。

（久味木理恵）

**5．石塔（五条庚申塔）**

ここで報告するのは､五条の庚申塔として知られている石塔群である。天明元年庚申塔を中心に据え、右手前に板碑 1 基、左手前に文明 18 年銘板碑 1 基を配す。

調査時には、これらは調査対象地南西隅で北向きに設置されていた。ここへの移設は昭和 30 年代以降で、調査地西を通る道路の東脇に五条構口土塀（この基礎石垣を SA040･060 として本書では報告）と並んで置かれていたものである。聞き取りや当時の写真等との照合から、本報告 SX038 に天明元年庚申塔が、本報告 SX039 付近に文明 18 年板碑があったようである。調査終了後は、マンション新設に伴ってほぼ同位置で、再び道路（西）を向いて安置されている。なお付近には、地権者が筑紫台高校造成時で出土した石塔類の部材を寄せておられていたため、それも実測を行った。現在これらは、北東隣の金掛梅の社付近に安置されている。以下、報告する。

天明元年銘庚申塔（fig.25、CD 写真 80 ～ 82、pla.7）

1 は、花崗岩製の巨石に光背･文字を掘り込んだ庚申塔である。石塔全体の高さはは 2.04 ｍを測り、施主名を刻む台座の上に、火炎あるいは光背を模したような形をした石塔本体がおかれている。

本体部は、高さ 1.68 ｍ、幅 0.98 ｍ、厚さ 0.43 ｍを測る。前面に光背を刳りこんでおり、その中に文字が陰刻される。光背は高さ 1.33 ｍ、幅 0.52 ｍ、刳り込みの深さは 1 ～ 1.5cm。文字は中央に

五条庚申塔・板碑

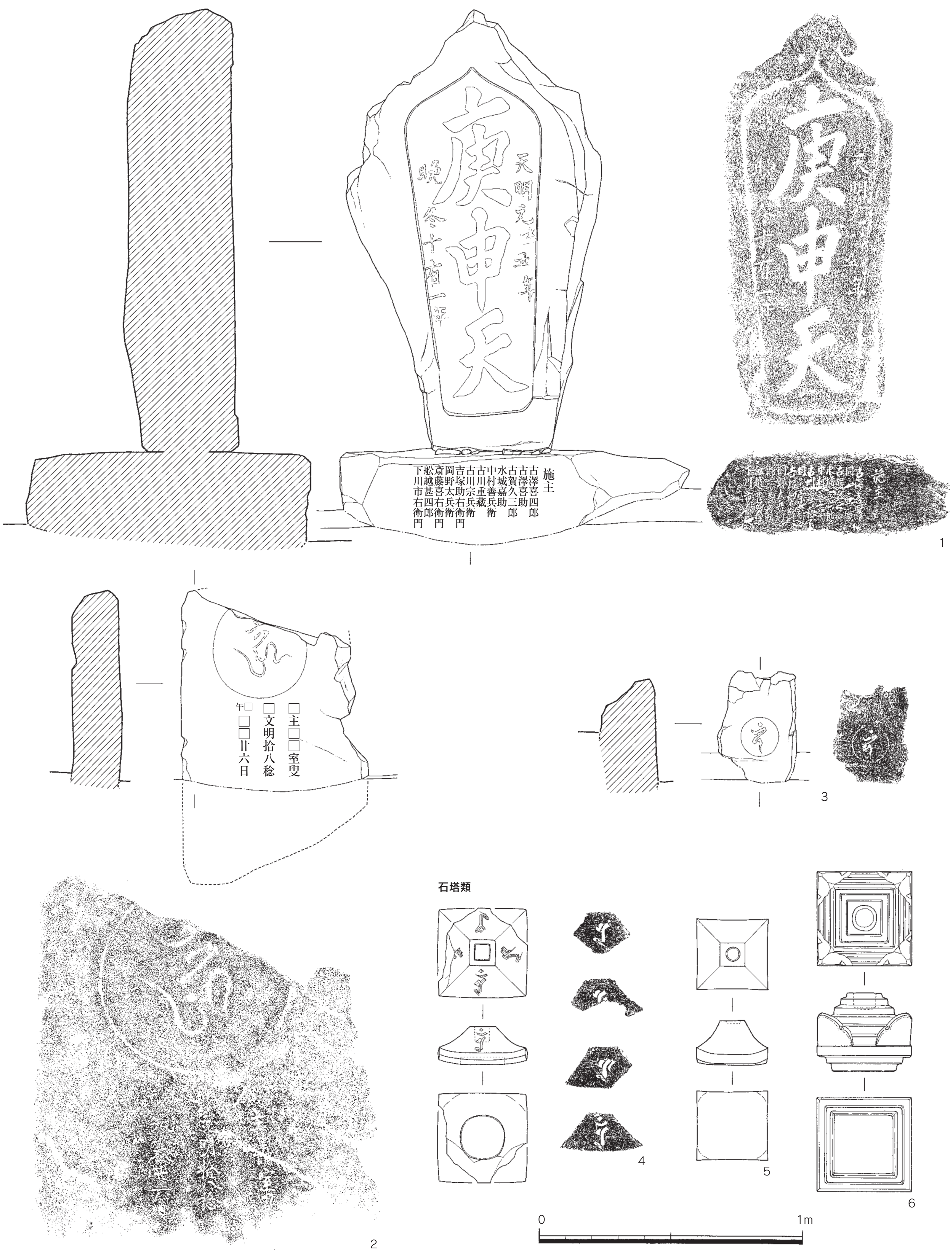



fig.25　第 217 次調査石塔実測図（2 の拓本は 1/10、その他は 1/20）

「庚申天」と記し、その右に「天明元辛丑年」、その左に「晩冬十有一日」と記す。このことから天明元年（1781）12 月 11 日建立ということがわかる。

台座部は上からみると概ね五角形を呈す。高さ 0.34 m（確認できた計測値）、幅 1.33 m、奥行 1.13 mを測る。ここには古澤喜四郎、古澤喜助、古賀久三郎、水城嘉助、中村善兵衛、古川重藏、古川宗兵衛、吉塚助右衛門、岡野太兵衛、斎藤喜右衛門、船越甚四郎、下川市右衛門の 12 名の施主名が陰刻される。

文明 18 年銘板碑（fig.25、CD 写真 83 ～ 86、pla.8・9）

２は、花崗岩とみられる板石を使用した板碑である。上面が欠損しており、残存高 1.06 m、最大幅 0.74 m、奥行 0.19 mを測る。前面上半に径 0.35 mの月輪が彫り込まれ、その中央に種子（ウーン）が陰刻される。月輪は中央部が縁辺部より 1 ～ 1.5cm 盛り上がるように彫られている。種子（ウーン）は、愛染明王、青面金剛などの強い力を持つ仏を示す。前面下半には施主名と建立年月日が３行に亘って陰刻されている。風化等により文字列上部が読みにくくなっているが、願主（あるいは施主）である「□□室叟」（二字目は言偏か）が、「文明拾八稔（年）」□月「廿六日」に建立したことがわかる。文明 18 年は西暦 1486 年であり、丙午年であることから、三行目はじめに見える干支「午」とも合っている。

板碑（fig.25）

３は、花崗岩とみられる板石を使用した板碑である。高さ 0.43 m、幅 0.3 m、奥行 0.21 mを測る。前面に直径 0.15 mの月輪が線刻され、その中に種子が陰刻されている。種子は地蔵菩薩あるいは大日如来の種子の可能性があるが判然としない。

五輪塔火輪（fig.25、CD 写真 90 ～ 92）

４は、凝灰岩製の五輪塔火輪である。頂部から見ると各辺にやや膨らみのある正方形となっている。一辺 34cm、高さ 14cm を測る。笠頂は一辺 10cm の正方形で、この中に一辺 6cm、深さ 5.5cm の方形孔を刳り込む。また笠下にも径 17cm、深さ 3cm の円形の刳り込みがある。笠には４面とも種子を刻む。

五輪塔火輪（fig.25、CD 写真 89）

５は、花崗岩製の五輪塔火輪である。頂部から見ると各辺がやや凹んだ正方形となっている。一辺 27cm、高さ 16.5cm を測る。笠頂は一辺 9.5cm の正方形で、この中に一辺 5.5 ～ 6cm、深さ 1cm の隅丸方形～円形の孔を刳り込む。

宝篋印塔（fig.25、CD 写真 87・88）

６は、花崗岩製の宝篋印塔の一部である。頂部から見るとほぼ正方形で一辺 36cm、高さ 29.5cm を測る。笠頂は径約 9cm、深さ 6cm の円形の孔を刳り込む。

（井上信正）

## 6. 自然科学分析

大宰府条坊跡第 217 次調査の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

当社ではこれまで太宰府市内各地の遺跡において自然科学分析を行い、当時の古環境推定や植物利用、遺物に関する情報を蓄積してきた。

今回の報告では、大宰府条坊跡第 217 次調査により検出された台地を開析する浅い谷を埋積している堆積物について、堆積環境と周辺古植生の検討を目的として、珪藻分析・花粉分析を行う。

１. 試料

大宰府条坊跡第 217 次調査で検出された、SD015・SD020・SD025・SD045・SD050 の覆土の計５点について、珪藻分析・花粉分析を実施する。

２. 分析方法

（1） 珪藻分析

試料を湿重で７g 前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理･化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸 600 倍あるいは 1000 倍で行い、メカニカルステージで任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に 200 個体以上同定･計数する。種の同定は、原口ほか（1998)、Krammer（1992)、Krammer and Lange-Bertalot（1986,1988,1991a,1991b）などを参照する。

同定結果は、淡水～汽水生種、淡水生種の順に並べ、その中の各種類をアルファベット順に並べた一覧表で示す。なお、淡水生種はさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度（pH）・流水に対する適応能についても示す。また、環境指標種についてはその内容を示す。そして、産出個体数 200 個体以上の試料については、産出率 2.0％以上の主要な種類について、主要珪藻化石群集の分布図を作成する。また、産出化石が現地性か異地性かを判断する目安として、完形殻の出現率を求める。堆積環境の解析は、海水～汽水生種については小杉（1988)、淡水生種については安藤（1990)、陸生珪藻については伊藤・堀内（1991)、汚濁耐性については、Asai and Watanabe（1995）の環境指標種を参考とする。

（2） 花粉分析

試料約 10 g について、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛：比重 2.3）よる有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸９：濃硫酸１の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。

３. 結果

（1） 珪藻分析

結果を表１、図１に示す。SD15、SD20、SD25、SD45、SD50 とも陸上のコケや土壌表面など多少の湿り気を保持した好気的環境に耐性のある陸生珪藻が約 80％以上と優占した。産出分類群数は、

合計で12属50種類であった。以下に遺構別に珪藻化石群集の特徴を述べる。

・SD15は、陸生珪藻の中でも分布がほぼ陸域に限られる耐乾性の高いA群（伊藤・堀内，1991）のAmphora montana、Hantzschia amphioxys、Navicula contenta fo. biceps、Navicula mutica、未区分陸生珪藻（伊藤・堀内，1991）のNavicula cf.umida、Pinnularia schoenfelderi 等が10～15%産出する。

・SD20は、陸生珪藻A群のNavicula contenta fo. biceps が約35%と優占し、同じくA群のHantzschia amphioxys、Navicula mutica、Amphora montana 等を伴う。

・SD25は、陸生珪藻A群のNavicula contenta fo. biceps が約20%と多産し、同じくA群のNavicula mutica、Hantzschia amphioxys、未区分陸生珪藻のPinnularia schoenfelderi が10～15%産出する。

・SD45は、陸生珪藻A群のAmphora montana、未区分陸生珪藻のNavicula cf.umida が20%以上と多産し、陸生珪藻A群のNavicula mutica 等を伴う。

・SD50は、陸生珪藻A群のNavicula contenta fo. biceps が約30%と優占し、同じくA群のNavicula mutica、Hantzschia amphioxys、未区分陸生珪藻のPinnularia schoenfelderi が多産する。

以上述べたように、全ての遺構で陸生珪藻が優占したが、この他に塩類を多く含む水域に好んで生育する淡水～汽水生種も全試料から低率ながら産出した。その主なものとしては、有機汚濁の進んだ腐水域に特徴的にみとめられる好汚濁性種(Asai and Watanabe, 1995)のNitzschia palea が挙げられる。

（2）花粉分析

結果を表2に示す。大宰府条坊跡217次の試料からも花粉化石数はほとんど検出されず、わずかにマツ属花粉が数個体検出されただけであった。また、いずれの試料からもシダ類胞子が検出されたが、その個体数は少ない。

4．考察

台地を開析する浅い谷に堆積する堆積物（SD15、SD20、SD25、SD45、SD50）についてみると、珪藻分析の結果は、陸上のコケや土壌表面など多少の湿り気を保持した好気的環境に耐性のある陸生珪藻が約80%以上と優占したことが特徴である。また、各試料から産出する種類の割合は異なっていたが、ほぼ同様の種類が産出した。とくに、陸生珪藻の占める割合は、土壌が水成堆積したのではなく、好気的環境で堆積したことを示している（伊藤・堀内，1991）。よって、各谷内には長期間における水の存在は考え難く、空掘りような状況を呈していたことが予想される。なお、今回産出した好汚濁性種のNitzschia palea は、土壌表面や土壌表層からも生育することが報じられていることから（Petersen, 1928）、今回も陸生珪藻として乾いた環境に生育していたと考えられる。

第217次調査で陸生珪藻が優占したのは、調査地点が台地上に立地していたため水はけも良く、常に乾いた状況を呈していたためと考えられる。

花粉分析の結果では、花粉化石はほとんど検出されず、古植生推定のための定量解析を行うことができなかった。花粉化石・シダ類胞子の産出状況が悪い場合、元々取り込まれる花粉量が少なかった、あるいは、取り込まれた花粉が消失した、という2つの可能性があげられる。一般的に花粉・シダ類胞子の堆積した場所が、常に酸化状態にあるような場合、花粉は酸化や土壌微生物によって分解・消失するとされている（中村，1967；徳永・山内，1971）。珪藻分析の結果をみると、産出する珪藻化石の大半が陸生珪藻により占められており、好気的環境を示している。このことから、今回花粉が検出されなかった理由としては、堆積時に取り込まれた花粉・シダ類胞子が、好気的環境下において分解・消失したためと考えられ、花粉化石からの古植生の復元は困難である。

引用文献

安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用．東北地理，42，p.73-
88.
Asai, K. and Watanabe, T.（1995）Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution（2）Saprophilous and saproxenous taxa．Diatom，10，p.35-47.
原口和夫・三友　清・小林　弘（1998）埼玉の藻類　珪藻類．埼玉県植物誌，埼玉県教育委員会，p.527-600.
伊藤良永・堀内誠示（1991）陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用．珪藻学会誌，６，p.23-45.
小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用．第四紀研究，27，p.1-20.
Krammer，K.（1992）PINNULARIA，eine Monographie der europaischen Taxa．BIBLIOTHECA
DIATOMOLOGICA，BAND 26，p.1-353.，BERLIN・STUTTGART.
Krammer，K. and Lange-Bertalot，H.（1986）Bacillariophyceae，Teil 1，Naviculaceae．Band 2/1
von：Die Suesswasserflora von Mitteleuropa，876p.，Gustav Fischer Verlag.
Krammer，K. and Lange-Bertalot，H.（1988）Bacillariophyceae，Teil 2，Epithemiaceae，Bacillariaceae，Surirellaceae．Band 2/2 von：Die Suesswasserflora von Mitteleuropa，536p.，
Gustav Fischer Verlag.
Krammer，K. and Lange-Bertalot，H.（1991a）Bacillariophyceae，Teil 3，Centrales，Fragilariaceae，Eunotiaceae．Band 2/3 von：Die Suesswasserflora von Mitteleuropa，230p.，
Gustav Fischer Verlag.
Krammer，K. and Lange-Bertalot，H.（1991b）Bacillariophyceae，Teil 4，Achnanthaceae，Kritsche Ergaenzungen zu Navicula（Lineolatae）und Gomphonema．Band 2/4 von：Die Suesswasserflora von Mitteleuropa，248p.，Gustav Fischer Verlag.
中村　純（1967）花粉分析．232p.，古今書院.
Petersen,J.B.（1928）The aerial Algae of Iceland. The Botany of Iceland, 2, p.325-447.
徳永重元・山内輝子（1971）花粉・胞子．「化石の研究法」，p.50-73，共立出版株式会社.

＜図表・図版一覧＞

## tab.217-1　珪藻分析結果

| 種　　類 | 生態性 | | | 環境 | 大宰府条坊跡217次 | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 塩分 | pH | 流水 | 指標種 | SD15 | SD20 | SD25 | SD45 | SD50 |
| Navicula cincta (Ehr.)Kuetzing | Ogh-Meh | al-il | ind | | － | － | － | 1 | 3 |
| Navicula veneta Kuetzing | Ogh-Meh | al-il | ind | U | 2 | － | － | 2 | 1 |
| Nitzschia frustulum (Kuetz.)Grunow | Ogh-Meh | al-bi | ind | | 5 | 3 | － | 6 | 1 |
| Nitzschia obtusa var. scalpelliformis Grunow | Ogh-Meh | al-il | ind | S | 1 | － | － | － | － |
| Nitzschia palea (Kuetz.)W.Smith | Ogh-Meh | ind | ind | S | 11 | 11 | 13 | 21 | 10 |
| Achnanthes lanceolata (Breb.)Grunow | Ogh-ind | ind | r-ph | K,T | － | － | 1 | － | － |
| Amphora montana Krasske | Ogh-ind | ind | ind | RA | 32 | 12 | 7 | 48 | 12 |
| Caloneis aerophila Bock | Ogh-ind | al-il | ind | RA | － | 1 | － | － | 1 |
| Caloneis angustivalva Petit | Ogh-unk | unk | unk | RI | － | 1 | － | － | － |
| Caloneis hyalina Hustedt | Ogh-ind | ind | ind | RA | － | － | 1 | － | 1 |
| Caloneis silicula (Ehr.)Cleve | Ogh-ind | al-il | ind | | 1 | － | － | － | － |
| Caloneis silicula var. minuta (Grun.)Cleve | Ogh-ind | al-il | ind | | 1 | － | － | － | － |
| Cymbella silesiaca Bleisch | Ogh-ind | ind | ind | T | － | － | 1 | － | － |
| Fragilaria construens fo. venter (Ehr.)Hustedt | Ogh-ind | al-il | l-ph | S | 1 | － | － | － | － |
| Hantzschia amphioxys (Ehr.)Grunow | Ogh-ind | al-il | ind | RA,U | 16 | 22 | 21 | 12 | 21 |
| Navicula atomus (Kuetz.)Grunow | Ogh-ind | ind | ind | RA,U | － | － | － | － | 1 |
| Navicula brekkaensis Petersen | Ogh-ind | ind | ind | RI | － | 2 | － | － | － |
| Navicula cohnii (Hilse)Lange-Bertalot | Ogh-ind | al-bi | ind | RI | － | 2 | 1 | － | － |
| Navicula contenta Grunow | Ogh-ind | al-il | ind | RA,T | － | － | － | 2 | 1 |
| Navicula contenta fo. biceps (Arnott)Hustedt | Ogh-ind | al-il | ind | RA,T | 22 | 70 | 43 | 9 | 60 |
| Navicula elginensis (Greg.)Ralfs | Ogh-ind | al-il | ind | O,U | 1 | 1 | － | － | 1 |
| Navicula elginensis var. neglecta (Krass.)Patrick | Ogh-ind | al-il | r-ph | U | 2 | － | － | 1 | － |
| Navicula gibbula Cleve | Ogh-ind | ind | ind | RI | － | 1 | － | － | － |
| Navicula hambergii Hustedt | Ogh-ind | ind | ind | RI | － | 1 | － | － | － |
| Navicula ignota Krasske | Ogh-ind | ind | ind | RB | 1 | － | 1 | － | － |
| Navicula ignota var. palustris (Hust.)Lund | Ogh-ind | ind | ind | RB | － | － | － | － | 1 |
| Navicula lapidosa Krasske | Ogh-ind | ind | ind | RI | － | － | 1 | － | － |
| Navicula mutica Kuetzing | Ogh-ind | al-il | ind | RA,S | 23 | 21 | 31 | 28 | 34 |
| Navicula mutica var. ventricosa (Kuetz.)Cleve | Ogh-ind | al-il | ind | RI | 2 | 1 | － | 5 | 2 |
| Navicula paramutica Bock | Ogh-ind | ind | ind | RB | － | 6 | 10 | － | 3 |
| Navicula saxophila Bock | Ogh-ind | ind | ind | RB | － | － | － | － | 1 |
| Navicula seminulum Grunow | Ogh-ind | ind | ind | RB,S | － | － | － | 1 | － |
| Navicula subnympharum Hustedt | Ogh-ind | ind | ind | | 1 | 2 | 1 | － | － |
| Navicula tantula Hustedt | Ogh-ind | ind | ind | RI,U | － | 1 | － | － | 2 |
| Navicula tridentula Krasske | Ogh-ind | al-bi | ind | RI | － | － | 1 | － | － |
| Navicula cf.umida W.Bock | Ogh-unk | unk | unk | RI | 36 | 10 | 13 | 46 | 10 |
| Neidium affine (Ehr.)Cleve | Ogh-hob | ind | l-bi | | 1 | － | － | － | － |
| Neidium alpinum Hustedt | Ogh-unk | unk | ind | RA | 3 | 1 | 11 | 1 | 4 |
| Nitzschia amphibia Grunow | Ogh-ind | al-bi | ind | S | － | － | － | － | 1 |
| Nitzschia brevissima Grunow | Ogh-ind | al-il | ind | RB,U | 1 | 1 | 1 | － | 3 |
| Nitzschia perminuta (Grun.)Peragallo | Ogh-ind | ind | ind | RI | － | － | 2 | － | － |
| Pinnularia borealis Ehrenberg | Ogh-ind | ind | ind | RA | 2 | 8 | 2 | － | － |
| Pinnularia obscura Krasske | Ogh-ind | ind | ind | RA | － | － | 2 | － | － |
| Pinnularia schoenfelderi Krammer | Ogh-ind | ind | ind | RI | 29 | 12 | 33 | 14 | 28 |
| Pinnularia silvatica Petersen | Ogh-ind | ind | ind | RI | 1 | 2 | 1 | － | 2 |
| Pinnularia subcapitata Gregory | Ogh-ind | ac-il | ind | RB,S | 1 | 6 | 7 | 2 | 2 |
| Stauroneis borrichii (Pet.)Lund | Ogh-ind | ind | ind | RI | － | － | － | 1 | － |
| Stauroneis obtusa Lagerstedt | Ogh-ind | ind | ind | RB | 5 | 3 | 5 | 2 | 3 |
| Surirella angusta Kuetzing | Ogh-ind | al-il | r-bi | U | 2 | － | 1 | 1 | － |
| Surirella ovata var. pinnata (W.Smith)Hustedt | Ogh-ind | al-il | r-ph | U | 2 | 1 | － | 1 | － |
| 海水生種合計 | | | | | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 海水～汽水生種合計 | | | | | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 汽水生種合計 | | | | | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 淡水～汽水生種合計 | | | | | 19 | 14 | 13 | 30 | 15 |
| 淡水生種合計 | | | | | 186 | 188 | 198 | 174 | 194 |
| 珪藻化石総数 | | | | | 205 | 202 | 211 | 204 | 209 |

凡例

| H.R.：塩分濃度に対する適応性 | pH：水素イオン濃度に対する適応性 | C.R.：流水に対する適応性 |
|---|---|---|
| Ogh-Meh　：淡水－汽水生種 | al-bi　：真アルカリ性種 | l-bi　：真止水性種 |
| Ogh-ind　：貧塩不定性種 | al-il　：好アルカリ性種 | l-ph　：好止水性種 |
| Ogh-hob　：貧塩嫌塩性種 | ind　：pH 不定性種 | ind　：流水不定性種 |
| Ogh-unk　：貧塩不明種 | ac-il　：好酸性種 | r-ph　：好流水性種 |
| | unk　：pH 不明種 | r-bi　：真流水性種 |
| | | unk　：流水不明種 |

環境指標種群
K:中～下流性河川指標種，O:沼沢湿地付着生種（以上は安藤，1990）
S:好汚濁性種，U:広域適応性種，T:好清水性種（以上は Asai，K. & Watanabe，T.，1986）
R:陸生珪藻（RA:A 群，RB:B 群，RI 群、伊藤・堀内，1991）

tab.217-2　花粉分析結果

| 種　類　　試料番号 | 大宰府条坊跡 SD15 | SD20 | SD25 | SD45 | SD50 |
|---|---|---|---|---|---|
| 木本花粉 | | | | | |
| 　マツ属複維管束亜属 | − | − | 1 | 1 | − |
| シダ類胞子 | | | | | |
| 　シダ類胞子 | 3 | 7 | 5 | 8 | 3 |
| 合　計 | | | | | |
| 　木本花粉 | 0 | 0 | 1 | 1 | 0 |
| 　草本花粉 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 　シダ類胞子 | 3 | 7 | 5 | 8 | 3 |
| 　総計 | 3 | 7 | 6 | 9 | 3 |

汽水ー淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。いずれも 100 個体以上検出された試料について示す。なお、●は２％未満の種類を示す。

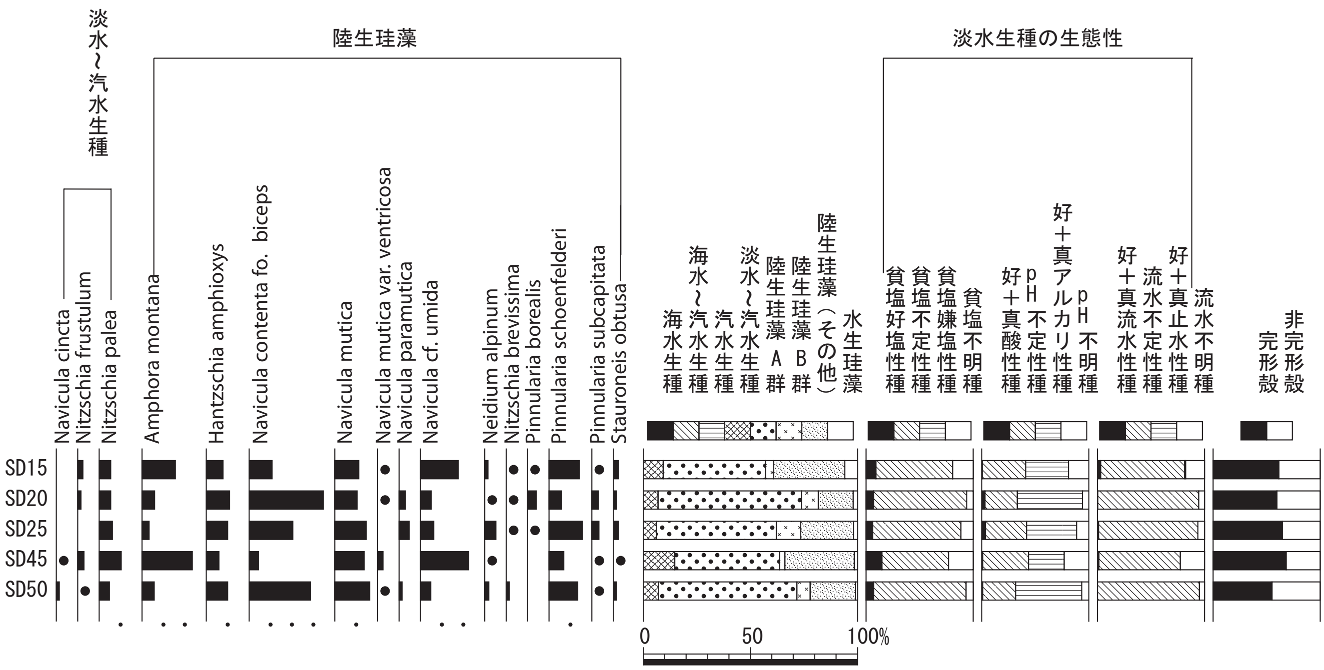
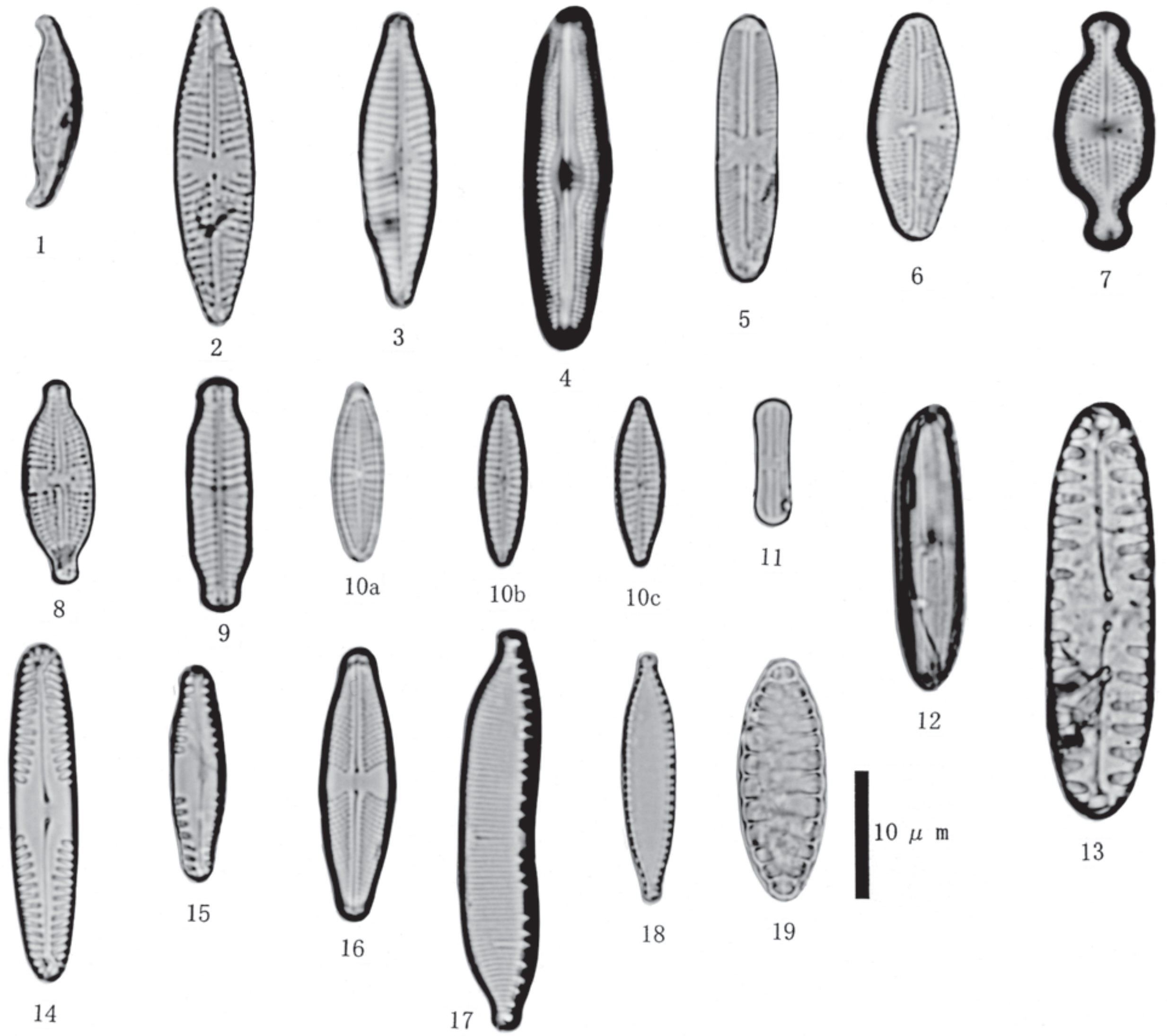



fig.26　主要珪藻化石群集の分布

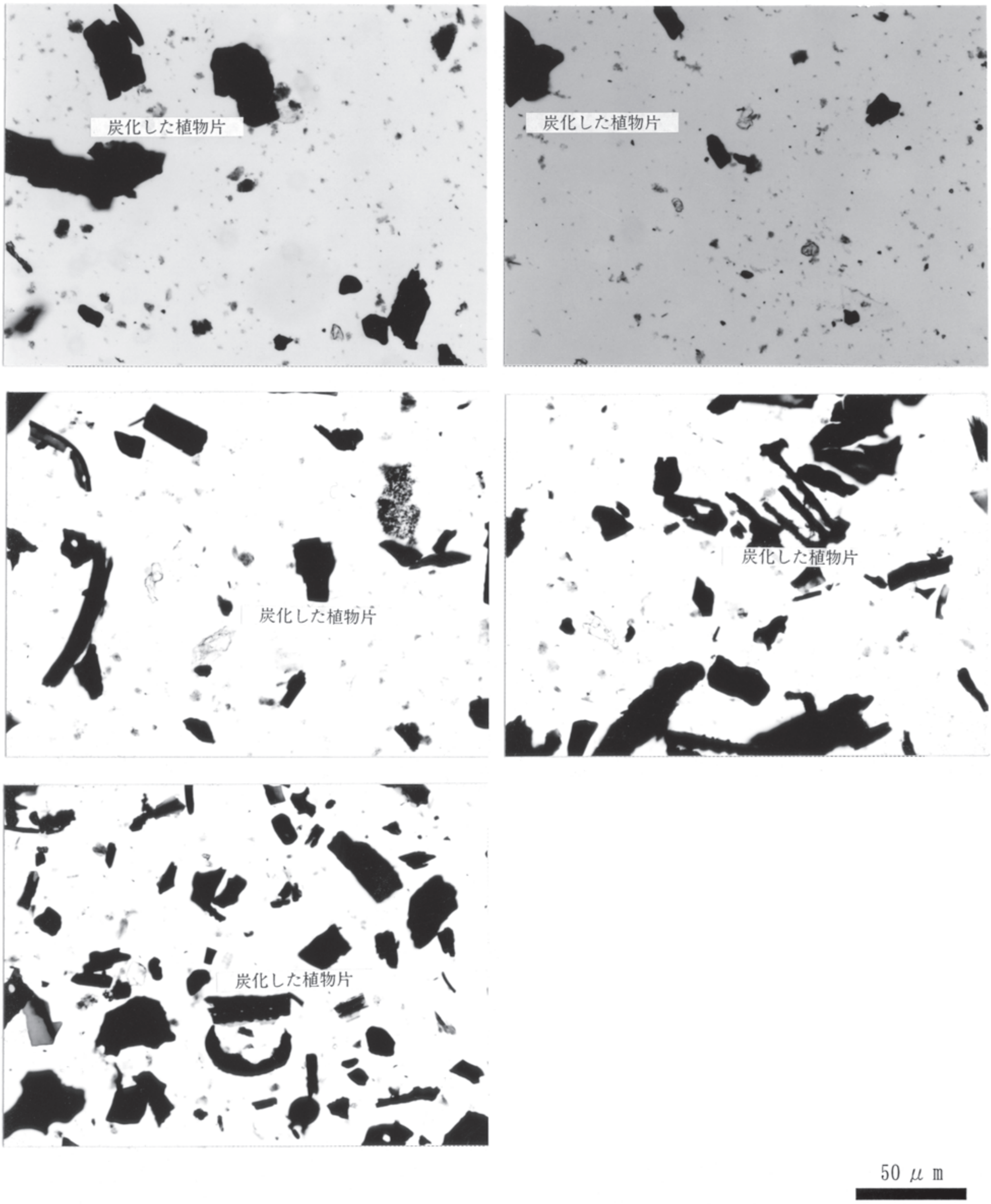
図版１　珪藻化石




1. *Amphora montana* Krasske (大宰府条坊跡217次;SD15)
2. *Navicula veneta* Kuetzing (大宰府条坊跡217次;SD15)
3. *Navicula veneta* Kuetzing (大宰府条坊跡217次;SD45)
4. *Navicula gibbula* Cleve (大宰府条坊跡217次;SD20)
5. *Navicula tantula* Hustedt (大宰府条坊跡217次;SD15)
6. *Navicula mutica* Kuetzing (大宰府条坊跡217次;SD25)
7. *Navicula mutica* var. *ventricosa* (Kuetz.)Cleve (大宰府条坊跡217次;SD45)
8. *Navicula paramutica* Bock (大宰府条坊跡217次;SD45)
9. *Navicula ignota* Krasske (大宰府条坊跡217次;SD25)
10. *Navicula* cf. *umida* W.Bock (大宰府条坊跡217次;SD45)
11. *Navicula contenta* fo. *biceps* (Arnott)Hustedt (大宰府条坊跡217次;SD25)
12. *Neidium alpinum* Hustedt (大宰府条坊跡217次;SD25)
13. *Pinnularia borealis* Ehrenberg (大宰府条坊跡217次;SD20)
14. *Pinnularia schoenfelderi* Krammer (大宰府条坊跡217次;SD25)
15. *Pinnularia subcapitata* Gregory (大宰府条坊跡217次;SD25)
16. *Stauroneis obtusa* Lagerstedt (大宰府条坊跡217次;SD25)
17. *Hantzschia amphioxys* (Ehr.)Grunow (大宰府条坊跡217次;SD25)
18. *Nitzschia palea* (Kuetz.)W.Smith (大宰府条坊跡217次;SD45)
19. *Surirella angusta* Kuetzing (大宰府条坊跡217次;SD15)

**fig.27　珪藻化石写真**

図版２　花粉分析プレパラート内の状況写真




1. 状況写真（大宰府条坊跡 217 次 ;SD15）
2. 状況写真（大宰府条坊跡 217 次 ;SD20）
3. 状況写真（大宰府条坊跡 217 次 ;SD25）
4. 状況写真（大宰府条坊跡 217 次 ;SD45）
5. 状況写真（大宰府条坊跡 217 次 ;SD50）

fig.28　花粉分析プレパラート内の状況写真

## 7. 小結

本調査区は、天満宮付近から流れてくる藍染川が御笠川と合流する地点の東側で、藍染川にかかる「五条小橋」の南東脇に位置する。ここは宰府六座の鍛冶屋齋藤家があったことが、太宰府旧蹟全図北図などからも知られている。これに関連する遺構･遺物はほとんど見られなかったが、溝 15 条、土坑 21 基、また近世以降の土塀等を検出した。注目すべきは調査区中央で検出した左郭 12 坊路関連遺構で、道路側溝とみられる溝群を検出した。左郭 12 坊路は鏡山猛氏の研究以来、条坊東端と想定されており、条坊端についての所見をはじめて得る機会に恵まれたといえる。調査時には併せて五条庚申塔石碑群についても調査を行っており、これらもあわせて概観したい。

a. 左郭 12 坊路（東京極路）

調査区中央で検出した南北に走行する溝群については、道路跡と想定される。ここで路面や通行痕跡などは確認できなかったものの、このライン上には溝群以外の遺構があまり構築されておらず空間が保たれていること、溝埋没の契機に同時性が認められる対となる溝があることから、これら溝群の位置が道路側溝だった可能性は高いと判断している。またこれら溝群は、条坊域発掘調査成果から導かれる 90m 間隔で区画されたとする大宰府条坊復元案（註 1）に合致しており、郭心南北大路（通称朱雀大路）から東へ 12 本目の南北道路推定位置にあたる。こうした状況から、条坊区画に伴う遺構とする蓋然性は高いと判断される（註 2）。

大宰府条坊について記す文献史料は、平安時代中期以降の『観世音寺文書』と『八幡宇佐宮御神領大鏡』（以下、『宇佐大鏡』）が知られている。鏡山猛氏は、『観世音寺文書』に記載される左郭最大坊数が 12 坊であること、また『宇佐大鏡』久安 4 年（1148）12 月 27 日付の府の下文に記された「府中宇佐町」の四至東限が「京極大路」と記されることに注目し、その所在地が「在郭七條二防」と記されるのを「左郭七条十二坊」の誤記とし、左郭の範囲が 12 坊だったと述べる（註 3）。

つまり、検出した南北道路は大宰府条坊左郭 12 坊路であり、それはまさに『宇佐大鏡』が伝える「京極大路」そのものということになる。この発見は、大宰府条坊解明にとって大変意義深いものである。

さて、この南北道路遺構には時期変遷が認められる。ここでは SF070・075・080 の 3 時期の道路があったと想定している。

SF080 については、道路認定に課題を残すものの、敢えて SD048 を道路側溝と仮定した。溝の埋没時期は、出土した最新遺物を土師器小皿 a（fig14-85）とみて、大宰府編年Ⅸ～Ⅹ期（10c 中～ 11c 前）と想定している。この時期は政庁Ⅱ期末～Ⅲ期初頭に相当するが、溝埋土はより古い時期の遺構埋土にみられる灰色土系の埋土であること、溝が政庁Ⅱ期道路側溝にみられる直進性を有する特徴をもつこと、土師器小皿 a を除くその他の遺物から大宰府編年Ⅶ～Ⅷ期（9c 中～ 10c 前）以前のものがみられることから、その開削は政庁Ⅱ期に遡ることが想定される。この他にも SD052・064 等古い溝があり、道路（ないしは区画）開削時期を政庁Ⅱ期に遡らせて考えることは可能とみている（註 4）。ただ、それがどこまで遡るかは明らかではない。なお SD048 と対となる側溝も検出されていない。対の側溝があるとすれば、大きく開口している SD015・025 付近に位置したか。

SD048 埋没後は、SF075（西側溝 SD050、東側溝 SD025）が機能する。道路占有幅（側溝両端までの範囲）は約 7.2m、側溝芯々間距離は約 6.2m、路面部（残存幅）は約 4.6m となる。この道路も、大宰府編年 XII 期（11c 後～ 12c 前）には SF070（西側溝 SD045、東側溝 SD015）に機能が移る。

SF070（西側溝 SD045、東側溝 SD015）は、道路占有幅（側溝両端までの範囲）は約 7.7m、側溝芯々間距離は約 4.8m。路面部（残存幅）は約 3.3m だが、SD015 は溝肩が崩れて広がっている可能性があり、

路面はもう少し広かったことも考えられる。道路側溝埋没は大宰府編年 XIV･XV 期（12c 後半）である。このSF070こそ『宇佐大鏡』が記した久安4年（1148）時点の「京極大路」そのものとみられる。

b.SD020にみる条坊東側条里区画の推定

前項では左郭12坊路について検証したが、ここが条坊東京極だったとすると、その外側がどうなっていたのだろうか。これについては文献史料はなく、遺構からどのように判断されるかということになる。

このことについて示唆的なのが、SF070東側溝（SD015）の東脇にとりつく東西溝SD020である。実は、この溝の東延長上の大宰府条坊跡第137次調査（未報告）でも東西溝群（または道路遺構）が検出されている。つまりこれが何らかの土地区画に由来する溝であると想定される。ただこの土地区画が条坊区画と関連があるようには見えない。一体何に由来するものだろうか。調査時にはその理由がよくわからなかったが、鏡山案をはじめ条坊周辺に条里が広がっているとの指摘はあり、条坊西側の第222次調査において条里由来の区画が検出されたこともあって（註5）、筆者は条坊東側にも条里に由来する土地区画があったのではないかと考える。

地図をみると、このすぐ東側一帯には条里プランに由来するとみられる1町四方の方格地割（一辺約109m）をいくつか見ることができる。またこの方格地割が、4条路と左郭12坊路の交差点が想定される、現在の五条交差点付近で交わることにも注目している。この交差点南東部を調査した第224次調査では、南から延びる左郭12坊路関連溝（224SD310）が東に向かってL字に折れる様子が確認されている（本書報告）。

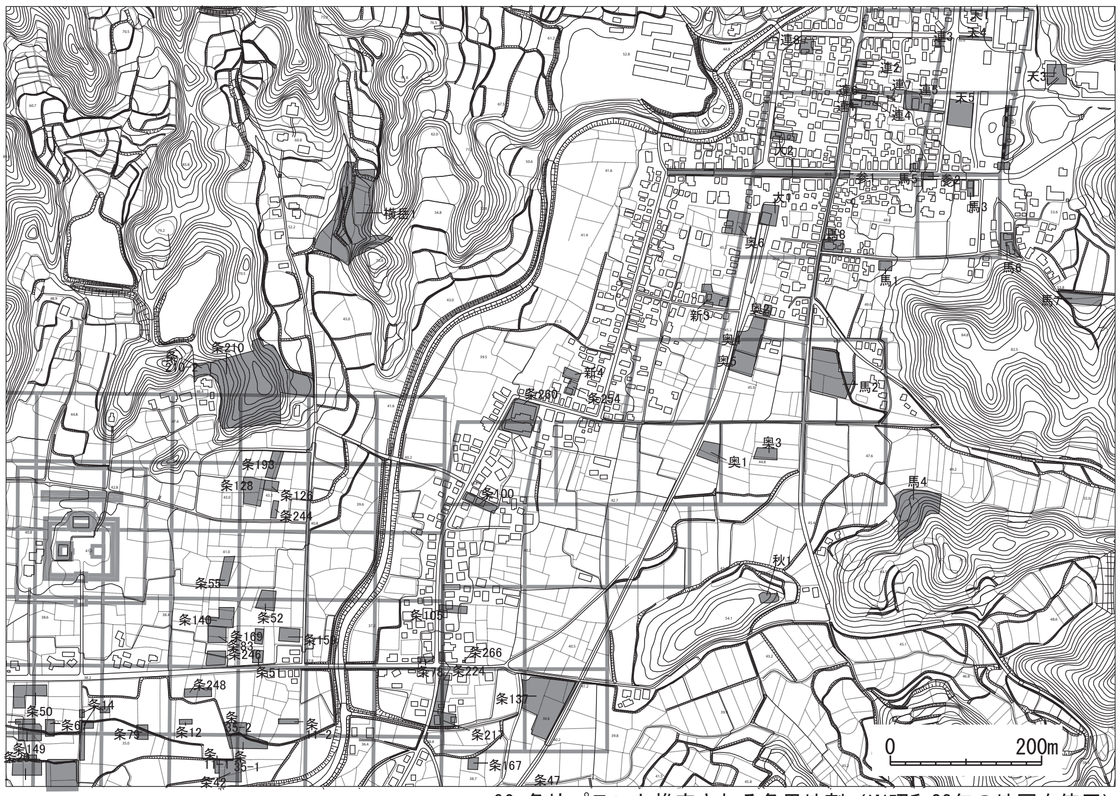
224SD310の検出は、この交差点が条坊外との出入口であり、また東に広がる土地区画の設計基点となっていることを窺わせるものである。4条路は、大宰府政庁の南門前面を通り、右郭8坊付近（現、関屋交差点付近）で水城東門へと続く官道に接続すると想定される道路であり、平城京の二条大路に相当する重要幹線と目される。条坊東側の条里地割がこの4条路が基点となっていると想定することは難くない。

東外側の条里関連遺構としては、近年この4条路より条里3町分北の位置で平安後期の東西道路が検出された（第260次調査（未報告））。この道路遺構の東延長には現道路が伸びており、この東西地割の初現が少なくとも平安後期に遡る可能性を示すものと考えている。こうした東西方向の地割線は1町間隔でさらに天満宮付近まで及んでいる。つまり、これらは元々条里に由来する地割ではないか、と考える。

このように見ると、本調査の217SD020も4条路から条里半町分南に位置していることに注目したい。本遺構も条里関連遺構と推測する。

さらに、SD020は条坊道路東側溝SD015に接続して同時開口していたことが想定される。つまり、12c代の様相ということではあるものの、条坊区画溝と条里区画溝が接合していた事実を提示することとなる。ここには塀などの施設はみられない。つまり視覚的には、「京極大路」を挟んだ条坊内外の違いは、その土地区画の違いを見る程度でしかなかった、ということになろう。

なお、南北方向の地割りは北に対して数度東に振っていることが現在の地図から窺うことができる。この斜行地割は平安後期に遡ることが連歌屋遺跡・馬場遺跡・奥園遺跡などの調査より明らかになりつつある（註6）。東西方向の地割りが1町間隔でみられることと併せると、天満宮周辺は、面積が1町歩となるよう平行四辺形地割となっていた可能性がある。斜行地割は第137次調査でも検出されており、かなり南へ広がっていることが、方格地割と斜行地割両者の関係は、今後の調査成果や整理報告を待ち




90m条坊プランと推定される条里地割（※昭和23年の地図を使用）



※条坊案は井上(2001)による90m条坊案で、遺構間の位置関係を理解しやすいように南へ約6mずらして作図した。
条里プランは、この4条路と12坊路交差点を基点とし、一辺109mとしている。

fig.29　217SD020 に関わる地割の想定図

たい。

c. 五条構口

構口（かまいぐち）とは、江戸時代の黒田藩内の宿場入口に設けられたもので、石垣と瓦葺きの土塀からなる施設である。近くでは長崎街道山家宿（筑紫野市山家）に現存している。ここ宰府宿には4ヶ所の構口があり、ここ五条小橋の脇にも五条構口が設置された。石垣の上に瓦葺の白壁塀がのった施設で、道路と藍染川に沿ってL字に折れる平面プランを有していたという。これは昭和30年代頃まで残っており、在りし日の姿を覚えておられる方も多い。その後住宅建替えで撤去されていたが、今回の調査で道路に沿った石垣基礎（SX040）と藍染川に沿った部分の基礎（SX060）が検出された。なお、石垣基礎からは大正5年の一銭銅貨や近現代の陶磁器が見つかっているが、これらは後に隙間に入った（あるいは入れられた）可能性も十分あり、これだけで建造時期を判断するのは適当ではないと考える。

d. 五条庚申塔と文明18年板碑

調査区南西脇には、庚申塔が安置されていた。この庚申塔は五条庚申塔として知られ、その昔は構口と並んで道路わきに安置されていた。

ここには石塔が3基あり、その中心となるのが天明元年（1781）12月11日建立の庚申塔で、台座には施主12名の名前が記されている。記されるのは五条地区に縁のある姓であり、中世に遡る「宰府六座」に由来する姓もある。

この脇には板碑が2基あるが、この内の一方は、大きな（ウーン）の種字が刻まれているものである。この種字は、愛染明王、青面金剛、降三世明王など、大変強い力を持った仏を表すとされる。

この板碑については、これまで存在は知られていたが、調査は行われていなかった。実見してすぐに種字の下に文字が刻まれていることが目視できたため、拓本をとって文字解読を試みることにした。すると、この板碑を建立した施主（あるいは願主）の「□□室叟」が、文明18年（1486年）に建立したことが記されていた。室町時代後期（戦国期）の板碑は市内でも例がなく、貴重な発見となった。

ここに刻まれた仏の確定や、建立背景については明らかではなく、板碑自体元々ここにあったものかすら定かではない。ただ、この場所にあることを考えると、いくつかのことが想定できるため、以下に提示してみた。

①現在庚申塔と併置されていることに注目し、庚申信仰の仏教の本尊である青面金剛とみられたと考える。この板碑が別の場所にあった場合、種子を青面金剛と見立てて寄せてきたということは十分考えられる。ただ、当初から庚申信仰に関わっていて青面金剛として建立されたかどうかは、時代考証と類例調査が十分できていないため判断がつかない。調べた範囲では、庚申信仰遺物としてはかなり古い事例となる可能性があり、今後の課題としたい。

②中世に遡る宰府六座に「紺屋」があることに注目し、染色業者に信仰例がある愛染明王と考える。

③建立日の「二十六日」に注目して、月待の「二十六夜待」の本尊である愛染明王と考える。

④この場所に注目し、伊勢物語など恋愛歌謡に登場する有名な歌枕としての藍染川にちなみ、愛染明王を供養したと考える。

市内の古い石造物は、そのほとんどが鎌倉～南北朝期にかけてのもので、室町後期の板碑は知られていない。また県内においても、15世紀後半の石造物は数例しか知られておらず、当時の板碑としては、享禄2年（1458年）の大牟田市藤田天満宮の類型板碑が知られている程度らしい。

当時の太宰府は、文明12年（1480年）に少弐氏が去り、山口の大内氏の支配下となっていた。激

動の時代を迎えて社会不安が大きい中で、当時の人が強い仏にすがったことを示す遺物とみられる。

（井上信正）

註１　井上信正「大宰府の街区割りと街区成立についての予察」『条里制・古代都市研究』通巻第 17 号　条里制・古代都市研究会　2001 年

註２　条坊の各区画の呼称については、以下による。

井上信正編『大宰府条坊跡 21』太宰府市教育委員会 2001 年

井上信正「大宰府条坊について」『都府楼 第 38 号』（財）古都大宰府保存協会 2008 年

註３　鏡山猛『大宰府都城の研究』風間書房 1968 年

註４　註１文献で、政庁Ⅱ期道路側溝の中には埋没が大宰府編年Ⅹ期に下るものもあると推定している。側溝機能時期については、埋土出土遺物だけでなく、こうした遺構形態・埋土状況を総合して判断することが必要と考える。

註５　『大宰府条坊跡 27』太宰府市教育委員会　平成 17 年

註６　『連歌屋遺跡 1』太宰府市教育委員会　2003 年

『馬場遺跡 2』太宰府市教育委員会　平成 18（2006）年

## tab.217-3　大宰府条坊跡第 217 次調査　遺構番号台帳（1）

| S-番号 | 遺構番号 | 種　別 | 備　考 | 埋土状況（古→新） | 遺構埋土切合（古→新） | 時　期 | 地区番号 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 217SK001 | 土坑 | 井戸か? | | | 8c末 | BC2 |
| 2 | 217SX002 | 小穴 | | | | 8c末～ | C2 |
| 3 | | 小穴群 | 遺物には8cのものが多い | | | 平安～ | C3 |
| 4 | | 小穴群 | | | | 平安～ | C4 |
| 5 | 217SX005 | 溝 | SX010と関連か | | 10→5 | 近代～ | Dライン |
| 6 | | 土坑 | | | 5→6 | 13c後～ | D2・3 |
| 7 | | 土坑 | | | 5→7 | 中世～ | D4 |
| 8 | | 土坑 | 検出時にはS-10との切合は確認できなかった。 | | | 12c後(D期) | B3 |
| 9 | | 小穴 | | | | 13c～ | D4 |
| 10 | 217SX010 | 溝状の掘込 | 藍染川北岸石垣の裏込か | | | 近現代 | Bライン |
| 11 | | 小穴 | | | | | D5 |
| 12 | | カクラン | | | 20→12 | 近現代 | G4 |
| 13 | | カクラン | 真砂が埋土 | | 25→13 | 近現代 | G6 |
| 14 | | カクラン | アース線入り | | 15→14 | 現代 | G7 |
| 15 | 217SD015 | 溝 | 南北道路東側溝<br>（政庁III期新段階）<br>SD045を西側溝とみる | 淡茶色土→黒色土（黄色土ブロックない） | 20→15 | XII～XIV・XV期機能 | 7ライン |
| 16 | | 小穴群 | S-15西脇の路面上 | | | 平安後～ | GH7 |
| 17 | | 小穴群 | | | | 平安～ | H5 |
| 18 | 217SK027・028 | 土坑 | S-27・28上層を覆う | 黒茶色土 | | IV<V期埋没 | F4 |
| 19 | | カクラン | レンガ構造物。地権者より風呂と聞く。 | | | 近現代 | F7 |
| 20 | 217SD020 | 溝 | 東西溝。東西道路南側溝か。<br>（政庁III期新段階）<br>なおS-18の延長上では8cの遺物多く出土。 | 灰色土→黄灰色土→黄黒色土 | 25→20→15 | XII期埋没 | FG4～7 |
| 21 | | カクラン | S-19の排水溝とみられる | | | 近現代 | DE7～8 |
| 22 | | たまり | | | 22→15 | 平安中期～ | H7 |
| 23 | | 小穴 | | | | 8c～ | E4 |
| 24 | | 小穴 | | | 28→24 | 8c～ | E4 |
| 25 | 217SD025 | 溝 | 南北道路東側溝<br>（政庁III期古段階）<br>SD050を西側溝とみる | 黄灰色土→黒色土 | | XII期埋没 | GH6 |
| 26 | | 土止め? | S-15の溝肩を補強したものか | | | 平安～ | FG6～7 |
| 27 | 217SK027・028 | 土坑 | ここではS-28と同一遺構とみて報告する。但し、形態・埋土の違いがあるため、別遺構の可能性も残っている。 | 黒色土 | 28→27→18 | IV<V期埋没 | F4 |
| 28 | 217SK027・028 | 土坑 | 奈良末頃の遺物多い。S-27・28は埋土の違いがあったためとりあえず分けたが、遺物接合するものも多く、同一遺構と考えている。なお埋土中に土塊が見られず、埋土からは一括廃棄は伺えない。 | やや茶色味を帯びた黒色土 | 28→27→18 | IV<V期埋没 | E4 |
| 29 | 217SD025 | 溝 | S-25と同一遺構 | | 29→20・30 | XII期埋没 | F6 |
| 30 | 217SK030 | 土坑 | S-20の南に沿った長土坑 | 黒灰色土 | 29→30 | XII期埋没 | EF5・6 |
| 31 | | 小穴×溝 | 東西溝の可能性もある | | | 平安後～ | H6 |
| 32 | | 小穴群 | | | 45・50→32 | 平安後～ | H8 |
| 33 | 217SK033 | 土坑 | | | | 13c～ | H9・10 |
| 34 | | カクラン | | | | 現代 | H10 |
| 35 | | 欠番 | S-40に変更 | | | | — |
| 36 | 217SK036 | 土坑 | | | | XIV期埋没 | G9 |
| 37 | | 小穴 | | | | 平安～ | G9 |
| 38 | 217SX038 | 方形基壇状遺構 | 天明元年庚申塔の旧基礎（吉塚太喜雄氏所蔵写真より推定）<br>表土はS-40黄灰色土でも遺物取り上げる | 明茶色土→茶色土→淡茶灰色土（表土と同層） | | 近現代 | F11 |
| 39 | 217SK039 | 土坑 | 文明18年銘板碑の旧跡地（吉塚太喜雄氏所蔵写真より推定）<br>表土はS-40黄灰色土でも遺物取り上げる | 黒褐色土 | | 近現代 | F11 |
| 40 | 217SA040 | 土塀基礎 | 五条口の構口南北土塀基礎 | 明茶色土→茶色土→黄灰色土（表土と同層） | | 近世～ | E11 |
| 41 | 217SD041 | 溝 | 溝、または土坑列。埋土のまとまりからa～cに分けた。<br>区画溝と見られる。 | 暗茶色土 | | 14c～ | 10ライン |
| 42 | | 溝×土坑 | | | | 12c～ | G10～11 |
| 43 | | 小穴 | | | 43→41a | | H10 |
| 44 | | 土坑 | | 淡茶灰色シルト | | 平安～ | H10 |

## tab.217-3　大宰府条坊跡第 217 次調査　遺構番号台帳（2）

| S-番号 | 遺構番号 | 種　別 | 備　考 | 埋土状況<br>（古→新） | 遺構間切合<br>（古→新） | 時　期 | 地区番号 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 45 | 217SD045 | 溝 | 南北道路西側溝<br>（政庁III期新段階）<br>SD015を東側溝とみる | 灰褐色土・明灰茶色土→黒色粘土→灰茶色土→黒茶色土 | 48→50→45→32 | XII～XIV期<br>機能 | 9ライン |
| 46 | | 溝 | 南北に走行。遺物少ない。 | 暗灰茶色土 | 47→46→50 | 8c～ | G8 |
| 47 | | 溝 | 南北に走行。遺物なし。 | 灰茶色土 | 47→46→50 | | G8 |
| 48 | 217SD048 | 溝 | 平安中期以前の条坊南北溝 | 暗灰茶色土 | 64→48→50→45 | IX>X期埋没 | GH8 |
| 49 | 217SK049 | 土坑 | | 暗茶色土→灰茶色土→49 | 51→49 | 13c後～ | FG9 |
| 50 | 217SD050 | 溝 | 南北道路西側溝<br>（政庁III期古段階）<br>SD025を東側溝とみる | 暗茶黒土→茶黒色土・灰茶色土→黒茶色土 | 50→45→32 | XII・XIII<br>期埋没 | 8ライン |
| 51 | | 土坑 | | | 41c→51→49 | 13c | FG10 |
| 52 | | 溝 | 南北に走行。 | | 52→36・45 | 古代か | G9 |
| 53 | | 土坑 | | | 41c→54→53 | 14c～ | E10 |
| 54 | | たまり | | | 41c→54→53 | | E10 |
| 55 | | 欠番 | S-55＝S-60 | | | | — |
| 56 | | 小穴群 | | | | 古代～中世 | F9 |
| 57 | | 小穴群 | | | 50→57 | 平安～近世 | F8 |
| 58 | 217SX058 | 小穴群 | セン出土 | | 45→58 | 平安後～ | F9 |
| 59 | | 土坑群 | | | 59→41c | 14c～ | FG10～11 |
| 60 | 217SX060 | 溝×土坑 | 構口の東西塀に関連か？<br>近世期遺物あり | 茶色土 | | 近世～ | D8～10 |
| 61 | | たまり | | | | 平安後～ | F9 |
| 62 | | 溝状遺構 | | 灰茶色土 | | 平安後～ | E9 |
| 63 | 217SK063 | 土坑 | | 黒茶色土（柔らかい） | 66→63 | 13c～ | DE9～10 |
| 64 | 217SD064 | 溝 | SD048に先行する南北溝。<br>遺物出土なし | 淡灰茶色シルト | 64→48 | IX・X期以<br>前 | 8ライン |
| 65 | | 欠番 | | | | | — |
| 66 | | 土坑 | | | 66→63 | 平安後～ | DE9～10 |
| 67 | 217SK067 | 土坑 | | | | 平安後 | E9 |
| 70 | 217SF070 | 道路 | 政庁III期新段階の南北道路<br>西側溝SD045、東側溝SD015 | | | XII～XIV・<br>XV期機能 | 7～9ライン |
| 75 | 217SF075 | 道路 | 政庁III期古段階の南北道路<br>西側溝SD050、東側溝SD025 | | | XII期以前<br>機能 | 6～8ライン |
| 80 | 217SF080 | 道路 | 側溝はSD048、その他関連溝はSD047・052・064が想定される。<br>いずれも通行位置は未確定。<br>政庁II期の南北道路を踏襲した可能性もある | | | IX～X期以<br>前<br>機能 | |
| 茶色土 | 茶色土層 | 人工層位 | 遺構検出時の人工層位 | | | | 調査区全体 |
| 表土 | 表土 | | | | | | 調査区全体 |

## tab.217-4　大宰府条坊跡第 217 次調査　溝の座標・方位

| 遺構名 | 計測位置 | 座標値 | | 政庁南門中点からの距離(m) | | 遺構の方向 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | X座標 | Y座標 | 南北距離(Δx) | 東西距離(Δy) | |
| 217SD015 | 北端任意中点 | 56628.044 | -43747.440 | -69.892 | 1074.043 | G.N.1°29′47″E |
| | 南端任意中点 | 56619.469 | -43747.664 | -78.469 | 1073.905 | |
| 217SD020 | 東端任意中点 | 56625.709 | -43737.645 | -72.129 | 1083.861 | G.E.7°25′03″N |
| | 西端任意中点 | 56624.705 | -43745.357 | -73.21 | 1076.159 | |
| | 北肩東端任意点 | 56627.000 | -43737.355 | -70.835 | 1084.138 | G.E.4°9′44″N |
| | 北肩西端任意点 | 56626.400 | -43745.600 | -71.518 | 1075.899 | |
| | 南肩東端任意点 | 56624.400 | -43737.905 | -73.441 | 1083.614 | G.E.10°54′43″N |
| | 南肩西端任意点 | 56623.010 | -43745.115 | -74.903 | 1076.418 | |
| 217SD025･029 | 北端任意中点 | 56628.693 | -43744.511 | -69.214 | 1076.965 | G.N.2°12′39″W |
| | 南端任意中点 | 56621.932 | -43744.250 | -75.972 | 1077.294 | |
| 217SD041 | 北端任意中点 | 56631.051 | -43756.434 | -66.975 | 1065.020 | G.N.9°39′10″E |
| | 南端任意中点 | 56620.615 | -43758.209 | -77.429 | 1063.349 | |
| 217SD045 | 北端任意中点 | 56629.953 | -43752.075 | -68.030 | 1069.389 | G.N.3°20′34″E |
| | 南端任意中点 | 56618.328 | -43752.754 | -79.661 | 1068.827 | |
| 217SD048 | 北端任意中点 | 56629.072 | -43751.425 | -68.904 | 1070.048 | G.N.0°28′43″E |
| | 南端任意中点 | 56619.257 | -43751.507 | -78.719 | 1070.064 | |
| 217SD050 | 北端任意中点 | 56629.584 | -43750.548 | -68.383 | 1070.920 | G.N.0°45′50″E |
| | 南端任意中点 | 56619.082 | -43750.688 | -78.886 | 1070.885 | |
| 217SF070 | 北端任意中点 | 56629.098 | -43749.486 | -68.859 | 1071.987 | G.N.0°58′25″E |
| | 南端任意中点 | 56618.978 | -43749.658 | -78.98 | 1071.916 | |
| | 道路東肩北端任意点 | 56628.083 | -43746.371 | -69.843 | 1075.112 | G.N.2°41′09″W |
| | 道路東肩南端任意点 | 56619.258 | -43745.957 | -78.663 | 1075.614 | |
| | 道路西肩北端任意点 | 56630.114 | -43752.602 | -67.874 | 1068.861 | G.N.3°10′35″E |
| | 道路西肩南端任意点 | 56617.969 | -43753.276 | -80.025 | 1068.308 | |
| 217SF075 | 北端任意中点 | 56628.992 | -43747.123 | -68.941 | 1074.351 | G.N.1°39′20″E |
| | 南端任意中点 | 56620.689 | -43747.363 | -77.246 | 1074.194 | |
| | 道路東肩北端任意点 | 56628.340 | -43743.408 | -69.556 | 1078.072 | G.N.2°43′28″E |
| | 道路東肩南端任意点 | 56622.225 | -43743.699 | -75.673 | 1077.842 | |
| | 道路西肩北端任意点 | 56629.644 | -43750.838 | -68.326 | 1070.629 | G.N.1°1′36″E |
| | 道路西肩南端任意点 | 56619.154 | -43751.026 | -78.818 | 1070.546 | |

※座標系は日本座標系(旧座標)である。
基点は政庁南門中点(X=55,708.68、Y=-44,720.83)とし、
政庁中軸線の振れ(G.N.0°34′24″E)を考慮し計算している。

# tab.217-5　大宰府条坊跡第 217 次調査　土器計測表（1）

※A;内底のナデ、B;は板状圧痕
※計測値の( )は復元値。+は残存値。

S-1

| 器別 | 器種 | 図版番号 | 遺物番号 | 口径 | 高さ | 底径 | A | B | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 須恵器 | 蓋c3　ヘラ | ④-1 | R-001 | (15.0) | 1.0+ | — | × | × | |
| | 坏c　ヘラ | ④-2 | R-002 | — | 3.7+ | (11.2) | ○ | × | |
| | 皿a　ヘラ | ④-3 | R-004 | — | 1.6+ | — | ○ | ○ | |
| | 皿a　ヘラ | ④-4 | R-003 | — | 1.8+ | — | ○ | × | |

S-2

| 器別 | 器種 | 図版番号 | 遺物番号 | 口径 | 高さ | 底径 | A | B | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 須恵器 | 蓋3 | | R-002 | — | 1.1+ | — | | | |
| | 坏c　ヘラ | | R-001 | (13.5) | 4.1 | (9.2) | ○ | × | |

S-15黒色土

| 器別 | 器種 | 図版番号 | 遺物番号 | 口径 | 高さ | 底径 | A | B | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 土師器 | 小皿a　ヘラ×イト | ①-1 | R-010 | (8.7) | 1.3 | (6.9) | ○ | × | |
| | 小皿a　ヘラ | ①-2 | R-012 | (8.9) | 0.8 | (6.8) | ○ | × | |
| | 小皿a　イト | ①-3 | R-001 | (9.0) | 1.0 | (6.2) | ○ | ○ | |
| | 小皿a　ヘラ | ①-4 | R-002 | (9.2) | 1.1 | (7.2) | ○ | ○ | |
| | 小皿a　イト | ①-5 | R-011 | (9.6) | 1.25 | (6.8) | × | ○ | |
| | 小皿a　イト | ①-6 | R-014 | (9.8) | 1.4 | (4.4) | ○ | ○ | |
| | 坏a　イト? | ①-7 | R-006 | — | 3.5 | — | ○ | − | |
| | 坏a　ヘラ | ①-8 | R-007 | (15.0) | 2.5 | (10.0) | − | − | |
| | 坏a　イト | ①-9 | R-013 | (15.8) | 3.2 | (10.1) | ○ | ○ | |
| 瓦器 | 椀c | ①-13 | R-003 | (16.0) | 6.35 | (5.4) | | | |
| | 椀(畿内系) | | R-015 | — | 2.1+ | — | | | |
| | 椀c | ①-14 | R-016 | — | 3.9+ | (6.0) | | | |

S-18

| 器別 | 器種 | 図版番号 | 遺物番号 | 口径 | 高さ | 底径 | A | B | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 須恵器 | 蓋3　ヘラ | ⑤-6 | R-001 | (12.1) | 1.0+ | (9.6) | ○ | | |
| | 蓋c3　ヘラ | ⑤-8 | R-004 | 13.6 | 2.45 | 9.3 | ○ | | |
| | 蓋c3 | ⑤-7 | R-002 | (14.4) | 1.9+ | — | ○ | | |
| | 蓋c3　ヘラ | ⑤-9 | R-003 | (15.6) | 2.3 | (12.0) | ○ | | |
| | 小坏c　ヘラ | ⑤-11 | R-017 | (10.0) | 4.8 | (5.8) | × | × | |
| | 小坏c | ⑤-12 | R-018 | (10.7) | 4.3 | (5.5) | ○ | × | |
| | 坏a　ヘラ | ⑤-13 | R-010 | (13.6) | 3.3 | (9.3) | ○ | ○ | |
| | 坏a　ヘラ? | ⑤-14 | R-012 | 13.7 | 4.1 | 9.2 | ○ | ○ | |
| | 坏a　ヘラ | ⑤-15 | R-011 | (13.8) | 3.7 | (10.0) | ○ | ○ | |
| | 大坏c | ⑤-16 | R-014 | (17.6) | 5.6 | (10.7) | ○ | | |
| | 皿a　ヘラ | ⑤-17 | R-008 | (12.5) | 1.7 | (10.4) | ○ | | |
| | 皿a　ヘラ | ⑤-18 | R-009 | 13.6 | 2.05 | 11.1 | ○ | | |
| | 皿a　ヘラ | ⑤-19 | R-007 | (15.6) | 1.75 | (12.5) | ○ | | |
| 土師器 | 小坏 | | R-019 | — | 2.9+ | — | | | |
| | 坏d　ヘラ | ⑤-28 | R-005 | (15.4) | 2.45 | (6.7) | | | |
| | 坏c | ⑤-24 | R-015 | 12.5 | 4.4 | (7.0) | | | |
| | 坏c | ⑤-25 | R-016 | 14.0 | 4.5 | 8.1 | | | |
| | 坏c×皿c　ヘラ | ⑤-27 | R-013 | — | 1.6+ | — | | | |
| | 蓋c3　ヘラ | ⑤-23 | R-006 | 16.7 | 2.0+ | 12.0 | | | 高坏？ |
| | 椀c　ヘラ | ⑤-26 | R-020 | — | 1.7+ | (7.0) | ○ | × | |

S-20黄黒色土

| 器別 | 器種 | 図版番号 | 遺物番号 | 口径 | 高さ | 底径 | A | B | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 土師器 | 小皿a　ヘラ | ①-21 | R-006 | (8.2) | 1.1 | (6.0) | ○ | ○ | |
| | 小皿a　ヘラ | ①-22 | R-009 | (9.2) | 1.05 | (7.2) | ○ | − | |
| | 小皿a　ヘラ | ①-23 | R-007 | (9.3) | 1.15 | (6.8) | ○ | ○ | |
| | 小皿a　ヘラ | ①-24 | R-001 | (9.4) | 1.5 | (2.6) | ○ | ○ | |
| | 小皿a　ヘラ | ①-25 | R-010 | (10.4) | 1.3 | (6.4) | ○ | ○ | |
| | 小皿a　ヘラ | | R-004 | — | 0.8 | — | | | |
| | 坏a　ヘラ | ①-29 | R-005 | 15.7 | 2.75 | 10.0 | ○ | ○ | |
| | 丸底坏a | ①-26 | R-002 | — | 3.15+ | — | | | |
| | 丸底坏a　ヘラ | ①-27 | R-012 | — | 3.2+ | — | | ○ | |
| | 丸底坏a　ヘラ | ①-28 | R-011 | — | 3.9+ | — | | | |

S-20黄灰色土

| 器別 | 器種 | 図版番号 | 遺物番号 | 口径 | 高さ | 底径 | A | B | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 土師器 | 丸底坏a　ヘラ | ①-32 | R-002 | — | 2.95 | — | | ○ | |
| | 丸底坏a　ヘラ | ①-33 | R-001 | — | 3.3+ | — | | − | |

S-22

| 器別 | 器種 | 図版番号 | 遺物番号 | 口径 | 高さ | 底径 | A | B | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 土師器 | 小皿a2　ヘラ | ⑪-23 | R-001 | — | 1.3+ | — | | | |

S-25黒色土

| 器別 | 器種 | 図版番号 | 遺物番号 | 口径 | 高さ | 底径 | A | B | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 須恵器 | 大皿c　ヘラ | | R-008 | (21.8) | 3.9 | (14.8) | ○ | × | |
| 土師器 | 小皿a　ヘラ | ②-34 | R-002 | (10.1) | 0.9 | (8.2) | ○ | − | |
| | 小皿a　ヘラ×イト | ②-35 | R-001 | 10.1 | 1.6 | 8.2 | ○ | ○ | |
| | 小皿a　ヘラ | ②-36 | R-003 | (10.2) | 1.2 | (8.4) | ○ | ○ | |
| | 坏a　ヘラ | ②-37 | R-004 | 16.4 | 2.6 | 12.2 | ○ | ○ | |
| | 坏a　ヘラ | ②-38 | R-005 | (16.6) | 2.6 | (12.8) | ○ | ○ | |
| | 坏a　ヘラ | ②-39 | R-007 | 16.8 | 2.9 | 12.0 | ○ | ○ | |
| | 丸底坏　ヘラ | ②-40 | R-010 | (15.2) | 3.3+ | — | − | ○ | |
| | 丸底坏　ヘラ | ②-41 | R-006 | (15.4) | 3.5 | (10.0) | − | − | |

S-27

| 器別 | 器種 | 図版番号 | 遺物番号 | 口径 | 高さ | 底径 | A | B | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 須恵器 | 蓋c3　ヘラ | ⑥-36 | R-010 | (14.8) | 1.05 | — | | | |
| | 蓋c3　ヘラ | ⑥-35 | R-001 | 18.25 | 2.3 | 12.4 | | | |
| | 蓋c3　ヘラ | ⑥-37 | R-002 | (19.8) | 2.7+ | — | | | |
| | 坏a　ヘラ | ⑥-38 | R-014 | (13.6) | 3.25 | (9.2) | | | |
| | 坏a　ヘラ | ⑥-39 | R-015 | (14.0) | 3.35 | (9.0) | | | |
| | 坏c　— | ⑥-40 | R-008 | (12.4) | 4.0 | (8.3) | | | |
| | 坏c　ヘラ | ⑥-41 | R-013 | (13.4) | 4.4 | (8.9) | | | |
| | 坏c　ヘラ | ⑥-42 | R-009 | (13.5) | 4.0 | (9.0) | | | |
| 土師器 | 蓋3　— | ⑥-44 | R-003 | — | 2.0+ | — | | | |
| | 坏 | ⑥-45 | R-005 | (13.2) | 4.1+ | — | | | 手持ち成形か |
| | 坏 | ⑥-46 | R-004 | (20.2) | 5.2+ | — | | | |

S-28

| 器別 | 器種 | 図版番号 | 遺物番号 | 口径 | 高さ | 底径 | A | B | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 須恵器 | 蓋c | ⑦-57 | R-001 | — | 2.4+ | — | | × | |
| | 蓋c3　ヘラ | ⑦-53 | R-005 | (13.4) | 1.6 | — | ○ | × | |
| | 蓋c3　ヘラ | ⑦-54 | R-002 | (13.7) | 1.9 | — | ○ | × | |
| | 蓋c3　ヘラ | ⑦-56 | R-004 | (18.6) | 2.1+ | — | ○ | × | |
| | 蓋c3　ヘラ | ⑦-55 | R-003 | (19.8) | 3.6 | — | ○ | × | |
| | 坏a　ヘラ | ⑦-58 | R-015 | (12.8) | 3.5 | (9.4) | × | × | |
| | 坏a　ヘラ | ⑦-59 | R-016 | (13.1) | 3.5 | (9.4) | × | × | |
| | 坏c　ヘラ | ⑦-60 | R-010 | (13.1) | 4.1 | 8.9 | ○ | ○ | |
| | 坏c　ヘラ | ⑦-61 | R-012 | 13.2 | 3.4 | 8.8 | ○ | × | |
| | 坏c　ヘラ | ⑦-62 | R-013 | (13.3) | 3.9 | (9.2) | × | × | |
| | 坏c　— | ⑦-63 | R-011 | 13.9 | 4.1 | 8.9 | ○ | ○ | |
| | 坏c　ヘラ | ⑦-64 | R-009 | (17.6) | 5.9 | 10.4 | × | × | |
| | 大坏c　ヘラ | ⑦-65 | R-014 | 17.8 | 5.9 | 13.0 | ○ | × | |
| | 皿a　ヘラ | ⑦-66 | R-006 | (13.6) | 2.0 | 10.8 | ○ | ○ | |
| | 皿a　ヘラ | ⑦-67 | R-007 | 14.8 | 2.0 | 11.8 | × | × | |
| | 皿a　ヘラ | ⑦-68 | R-008 | 17.6 | 2.3 | 14.6 | ○ | × | |
| 土師器 | 坏a×皿b | ⑦-69 | R-017 | (14.3) | 4.6 | — | | | |
| | 坏c×皿c | ⑦-70 | R-018 | — | 1.1+ | — | | | |

S-27・28接合分

| 器別 | 器種 | 図版番号 | 遺物番号 | 口径 | 高さ | 底径 | A | B | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 須恵器 | 蓋c4　ヘラ | ⑦-73 | R-003 | 14.6 | 1.9 | — | ○ | × | |
| | 坏c　— | ⑦-74 | R-002 | 12.6 | 4.0 | 8.1 | × | × | |
| | 坏c　ヘラ | ⑦-75 | R-004 | 16.4 | 5.7 | 10.2 | ○ | × | |
| | 坏c　ヘラ | ⑦-76 | R-001 | (16.5) | 5.7 | 9.6 | × | × | |
| | 坏c　ヘラ | ⑦-77 | R-006 | 17.9 | 5.5 | 11.0 | × | × | |
| 土師器 | 皿a　— | ⑦-78 | R-005 | 18.0 | 2.3 | 9.7 | | | |

S-30黒灰色土

| 器別 | 器種 | 図版番号 | 遺物番号 | 口径 | 高さ | 底径 | A | B | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 土師器 | 小皿a　ヘラ | ⑧-79 | R-005 | (9.8) | 9.5 | (7.2) | ○ | ○ | |
| | 小皿a　ヘラ | ⑧-80 | R-006 | — | 1.5+ | — | ○ | ○ | |
| | 小皿a2 | ⑧-81 | R-007 | — | 0.55+ | — | | | |
| | 丸底坏　ヘラ | ⑧-84 | R-003 | (15.6) | 2.9+ | — | | | |
| | 丸底坏　ヘラ | ⑧-82 | R-002 | — | 2.5+ | — | | ○ | |
| | 丸底坏　ヘラ | ⑧-83 | R-001 | — | 3.6+ | — | | | |

S-32

| 器別 | 器種 | 図版番号 | 遺物番号 | 口径 | 高さ | 底径 | A | B | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 土師器 | 小皿a　ヘラ | ⑪-24 | R-001 | (9.9) | 0.9 | (7.4) | ○? | ○ | |

S-36

| 器別 | 器種 | 図版番号 | 遺物番号 | 口径 | 高さ | 底径 | A | B | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 土師器 | 小皿a　ヘラ | ⑧-90 | R-001 | (8.3) | 1.1 | (6.9) | − | ○ | |
| | 坏a　イト | ⑧-91 | R-002 | — | 1.9+ | (10.0) | ○ | × | |

S-41a

| 器別 | 器種 | 図版番号 | 遺物番号 | 口径 | 高さ | 底径 | A | B | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 土師器 | 小皿b×坏bイト | ②-44 | R-001 | — | 1.0+ | (3.9) | × | × | |
| | 坏b　イト | ②-43 | R-002 | — | 1.15+ | (4.6) | − | × | |

S-41c

| 器別 | 器種 | 図版番号 | 遺物番号 | 口径 | 高さ | 底径 | A | B | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 土師器 | 小皿b　イト | ②-49 | R-009 | (7.0) | 1.7 | (5.2) | × | ○ | |
| | 小皿b　イト | ②-48 | R-001 | — | 0.95+ | (3.5) | ○ | − | |
| | 小皿b　イト | ②-47 | R-014 | — | 1.0+ | 4.25 | × | × | |
| | 小皿a×坏bイト | ②-50 | R-002 | — | 1.1+ | (5.6) | − | − | |
| | 坏b　イト | ②-51 | R-010 | — | 1.75+ | (5.3) | × | × | |

S-45黒茶色土

| 器別 | 器種 | 図版番号 | 遺物番号 | 口径 | 高さ | 底径 | A | B | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 土師器 | 小皿a　ヘラ×イト | ③-61 | R-001 | (9.6) | 1.3 | (7.3) | ○ | ○ | |
| 瓦器 | 椀c　— | ③-62 | R-002 | 15.6 | 5.0 | 6.2 | − | ○ | |

S-45灰茶色土

| 器別 | 器種 | 図版番号 | 遺物番号 | 口径 | 高さ | 底径 | A | B | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 土師器 | 小皿a　ヘラ×イト | ③-71 | R-001 | 9.2 | 1.3 | 7.4 | ○ | ○ | |
| | 坏a　イト | ③-72 | R-002 | (15.6) | 3.2 | (12.0) | ○ | × | |

# tab.217-5　大宰府条坊跡第 217 次調査　土器計測表（2）

※A；内底のナデ、B；は板状圧痕
※計測値の（ ）は復元値。+は残存値。

S-45黒色粘

| 器 別 | 器 種 | 図版番号 | 遺物番号 | 口径 | 高さ | 底径 | A | B | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 土師器 | 小皿a　イト | ③-79 | R-001 | 8.9 | 1.1 | 6.9 | ○ | ○ | |
| | 小皿a　イト | ③-80 | R-002 | 8.9 | 1.1 | 7.0 | ○ | ○ | |
| | 坏a　ヘラ×イト | ③-81 | R-003 | 15.4 | 3.5 | 9.1 | ○ | ○ | |

S-48

| 器 別 | 器 種 | 図版番号 | 遺物番号 | 口径 | 高さ | 底径 | A | B | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 土師器 | 小皿a1　ヘラ | ④-85 | R-004 | (10.5) | 1.6 | (6.9) | ○ | ○ | |
| | 椀c | ④-86 | R-003 | — | 3.5+ | (8.2) | | | |

S-49

| 器 別 | 器 種 | 図版番号 | 遺物番号 | 口径 | 高さ | 底径 | A | B | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 土師器 | 坏a　イト | ⑧-95 | R-001 | (14.6) | 2.9 | (10.1) | ○ | ○ | |
| | 坏a　イト | ⑧-96 | R-002 | (14.8) | 2.9 | (9.4) | ○ | × | |

S-49灰茶色土

| 器 別 | 器 種 | 図版番号 | 遺物番号 | 口径 | 高さ | 底径 | A | B | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 土師器 | 小皿a　イト | ⑧-97 | R-006 | (8.4) | 1.0 | (6.0) | ○ | ○ | |
| | 小皿a　イト | ⑧-98 | R-003 | (9.0) | 1.0 | (7.8) | ○ | ○ | |
| | 小皿a　イト | ⑧-99 | R-002 | (9.4) | 1.2 | (7.4) | ○ | | |
| | 小皿a　イト | ⑧-100 | R-001 | (9.6) | 1.3 | (8.6) | ○ | | |
| | 坏a　イト | ⑧-101 | R-005 | 14.6 | 2.8 | 9.8 | ○ | ○ | |
| | 坏a　イト | ⑧-102 | R-004 | (15.8) | 2.9 | (10.4) | ○ | ○ | |

S-50灰茶色土

| 器 別 | 器 種 | 図版番号 | 遺物番号 | 口径 | 高さ | 底径 | A | B | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 土師器 | 小皿a　ヘラ | ④-97 | R-001 | (10.0) | 1.8 | (7.5) | ○ | — | |

S-50黒茶色土

| 器 別 | 器 種 | 図版番号 | 遺物番号 | 口径 | 高さ | 底径 | A | B | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 土師器 | 蓋c | | R-003 | — | 1.5+ | — | | | |
| | 小皿a　イト | ④-90 | R-001 | (9.8) | 1.45 | (7.7) | ○ | ○ | |
| | 小皿a　ヘラ | ④-92 | R-002 | 10.0 | 1.45 | 7.6 | ○ | × | |
| | 小皿a　ヘラ×イト | ④-91 | R-006 | (10.0) | 1.35 | 7.3 | ○ | ○ | |
| | 小皿a　ヘラ×イト | ④-89 | R-007 | 9.1 | 1.15 | 6.3 | ○ | ○ | |
| | 坏a　ヘラ | ④-93 | R-008 | 15.9 | 3.25 | 11.7 | ○ | ○ | |
| | 丸底坏a　ヘラ | ④-94 | R-004 | (16.2) | 3.35 | (13.8) | — | ○ | |
| 瓦器 | 椀c　ヘラ | ④-95 | R-009 | 16.9 | 5.65 | 6.4 | — | ○ | |

S-63黒茶色土

| 器 別 | 器 種 | 図版番号 | 遺物番号 | 口径 | 高さ | 底径 | A | B | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 土師器 | 小皿a1　イト | ⑨-104 | R-001 | (8.4) | 1.35 | (6.4) | ○ | ○ | |
| | 坏a　イト? | ⑨-105 | R-002 | (13.2) | 2.8 | (9.8) | ○ | ○ | |

S-67

| 器 別 | 器 種 | 図版番号 | 遺物番号 | 口径 | 高さ | 底径 | A | B | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 土師器 | 小皿a　イト | ⑨-107 | R-004 | 8.2 | 0.85 | 7.2 | ○ | ○ | |
| | 小皿a　イト | ⑨-108 | R-002 | (8.8) | 1.25 | (6.5) | ○ | ○ | |
| | 小皿a　イト | ⑨-109 | R-001 | (9.4) | 1.2 | (8.0) | | ○ | |
| | 小皿a　イト | ⑨-110 | R-003 | (9.5) | 1.6 | (7.5) | ○ | ○ | |
| | 坏a　ヘラ | ⑨-111 | R-005 | (14.0) | 2.8 | (9.6) | ○ | ○ | |

茶色土

| 器 別 | 器 種 | 図版番号 | 遺物番号 | 口径 | 高さ | 底径 | A | B | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 土師器 | 小皿a　イト | ⑬-3 | R-009 | 8.8 | 1.1 | 7.4 | ○ | ○ | |
| | 小皿a　イト | ⑬-4 | R-013 | (9.0) | 1.48 | (6.4) | | | |
| | 小皿a　ヘラ | ⑬-5 | R-012 | (9.4) | 1.2 | (6.5) | | | |
| | 小皿a　ヘラ | ⑬-6 | R-003 | 9.6 | 1.55 | 7.6 | ○ | ○ | |
| | 坏a　ヘラ | ⑬-7 | R-001 | 15.9 | 3.1 | 12.4 | ○ | ○ | |
| | 坏a　イト | ⑬-8 | R-002 | 16.0 | 2.95 | 12.1 | ○ | × | |

## tab.217-6　大宰府条坊跡第 217 次調査　出土遺物一覧表（1）

S-1　8c末

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 蓋3、坏c、皿a、甕a |
| 土師器 | 坏c(ﾐｶﾞｷa)、皿a(ﾐｶﾞｷa)、甕a |
| 製塩土器 | 破片(布目痕)(ﾅﾃﾞ) |
| 縄文土器? | 破片 |
| 瓦類 | 丸瓦(縄目叩)、破片(縄目叩)、瓦＞セン |

S-2　8c末〜

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 蓋3、坏c、坏×皿 |
| 土師器 | 坏a×d(ﾐｶﾞｷa)、甕a |
| 製塩土器 | 破片(ﾅﾃﾞ) |

S-3　平安〜(8c遺物多い)

| | |
|---|---|
| 土師器 | 小皿a、煮炊具、破片 |
| 製塩土器 | 破片 |

S-4　平安〜

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 坏c |
| 土師器 | 坏×小皿、小皿 |

S-5　近代〜

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 蓋3、坏a、坏c、高坏、皿、甕、小壺 |
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ､ﾍﾗ)、坏c(8c)、椀c、小皿a(ﾍﾗ､ｲﾄ)<br>甕a |
| 黒色土器A | 椀c |
| 龍泉窯系青磁 | 椀;I×II(2)、I(5)、II-b(2)、II-aか(1)、I-2(5)<br>II(2) |
| 同安窯系青磁 | 椀;I(3)、III(1)<br>皿;I(3) |
| 土師質土器 | 鉢 |
| 須恵質土器 | 鉢 |
| 瓦質土器 | 擂鉢、鉢、風炉、捏鉢、釜(中世)、涼炉<br>瓦質鉢(山村分類IV) |
| 肥前系磁器 | 皿(ﾌﾟﾘﾝﾄ+絵付)、皿(印判)、皿(ﾌﾟﾘﾝﾄ)<br>茶碗蓋、丸椀、端反椀、小筒形椀、広東椀<br>華瓶、徳利、鉢(洗坏)、鉢(蛇ノ目凹形高台)<br>小皿、紅皿(外面陽刻) |
| 国産陶器 | 擂鉢(玉縁、三角高台)、七輪のｻﾝ、捏鉢<br>徳利(「太宰府幸喜」)、片口鉢、雲助、瓶(鉄絵)<br>徳利、鳩笛(緑釉)、鉢(唐津系)、小壺(緑釉) |
| 国産磁器 | 青磁染付?(香炉×鉢)、水注 |
| 白磁 | 椀;VIII(1)、IV-1a(2)、IV(5)、V(1)、破片(1)<br>V-4×VIII-1・3(5)、V×VI(2)、VI(1)、V-4(1)<br>皿;VI-1(1)、IIIか(1)、IX-1(3)、II×III(2)、VI(1)<br>IVか(1)<br>他;壺III(1)、破片(3) |
| 中国陶器 | 甕;破片(IVか)(1)、破片(IIIか)(1)<br>他;破片〔A−2群〕(1)、破片〔B群〕(1) |
| 瓦類 | 平瓦〔燻し瓦(量多い)〕、〔縄目叩(一枚作りか)〕<br>丸瓦(凹面縄目叩)、丸瓦(横長斜格子) |
| 土製品 | 人形(型押し4点)、七輪のｻﾝ、火鉢×七輪 |
| その他 | 石炭、石炭ｶｽ、鉱滓 |

S-6　13c後〜

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 蓋3、蓋c、坏c、甕、壺 |
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ)、小皿a(ｲﾄ) |
| 黒色土器B | 椀c |
| 龍泉窯系青磁 | 椀;I(1)、II-b(1)、III-2(1) |
| 同安窯系青磁 | 皿;I-1b(1) |
| 須恵質土器 | 捏鉢(東播系) |
| 瓦質土器 | 鉢 |
| 灰釉陶器 | 破片 |
| 国産陶器? | 破片(内面白釉、外面黒釉)(混入か) |
| 白磁 | 椀;V-4(1)、IX(2)<br>皿;IX(口縁に煤)(1)<br>壺;II(1) |
| 中国陶器 | 鉢;I-1b(1)<br>甕;IVか(2)<br>他;破片〔B群〕(1) |
| 瓦類 | 丸瓦(正格子) |
| 石製品 | 石鍋 |
| その他 | 鉱滓 |

S-7　中世〜(2点近世以降のものあり)

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 坏c、甕 |
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ)、小皿a(ﾍﾗ)、甕a、煮炊具 |
| 瓦器 | 破片 |
| 緑釉陶器 | 破片 |
| 肥前系磁器 | 皿(1)(混入?) |
| 国産磁器 | 破片(ﾌﾟﾘﾝﾄ)(混入?) |
| 白磁 | 椀;破片(1) |
| 瓦類 | 破片 |

S-8　D期〜

| | |
|---|---|
| 土師器 | 坏(ｲﾄ､ﾍﾗ) |
| 越州窯系青磁 | 椀;I×II(1) |
| 龍泉窯系青磁 | 椀;I(1) |
| 須恵質土器 | 甕 |
| その他 | 焼土塊 |

S-9　13c〜

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 坏c |
| 製塩土器 | 破片 |
| 龍泉窯系青磁 | II-b(1) |

S-10　近代(明治〜)

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 蓋c、坏、坏c、坏c×壺、甕、甕a、甕(二重口縁)<br>甕(中世)、壺×鉢(高台付)、供膳具 |
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ､ﾍﾗ)、坏d、丸底坏、高坏、椀c<br>小皿a(ｲﾄ､ﾍﾗ)、甕a、器台<br>供膳具(外底に墨書あり)、破片(ﾐｶﾞｷa) |
| 製塩土器 | 破片〔布目(II-2)〕 |
| 黒色土器A | 椀c |
| 瓦器 | 椀 |
| 越州窯系青磁 | 椀;I-2ｳ(1)、I(1)、II(1)<br>坏?(1) |
| 龍泉窯系青磁 | 椀;I(2)、I-2(3)、II(2)、II-a(1)、II-b(6)、III(1)、<br>IVか(1)<br>皿;I-1b(1)、I-1c(1) |
| 同安窯系青磁 | 椀;I?(3)<br>皿;I(5)、I-2(1)<br>他;小椀I-2(1) |
| 土師質土器 | 坏×椀(黒釉外面塗布)<br>焙烙(近世〜)、火入れ(近現代) |
| 須恵質土器 | 捏鉢(東播系)、甕(常滑) |
| 瓦質土器 | 鉢、把手?、擂鉢 |
| 肥前系磁器 | 方皿?、鉢(洗坏か)、小坏、重ね鉢<br>這児形水滴、猪口(幕末)椀×皿(唐津系、砂目)<br>丸形椀(印判、蛇ノ目釉剥ぎ)、端反椀<br>大皿(唐津系、刷毛手)、くらわんか椀(丸椀皿)<br>丸椀(鉄釉がけ、蛇ノ目釉剥ぎ、ｱﾙﾐﾅ) |
| 国産陶器 | 丸椀(ﾄﾁﾝ)、灯火具(幕末)、植木鉢(現代)<br>壺(鉄釉)、捏鉢、浅手の小皿(波佐見)、擂鉢<br>甕、壺、蓋、椀×皿(蛇ノ目釉剥ぎ)、山水土瓶<br>壺(ｺﾞｹ底、鉄釉)、徳利(鉄釉)、土瓶(緑釉)、土瓶<br>かわらけ(梅鉢文)、瓶の蓋、小椀 |

## tab.217-6　大宰府条坊跡第217次調査　出土遺物一覧表（2）

| | |
|---|---|
| 国産磁器 | 皿(陽刻)、多角皿(色絵)、行平、椀(緑色、現代)<br>茶入れ(中国技巧模倣) |
| 白磁 | 椀;II(1)、IV(4)、IV-1(2)、V(1)、V-1×VIII-2(2)<br>V-2×VIII-4(1)、V-2(1)、V-3(1)、IX(1)<br>V-4×VI(2)、VI-1b(1)、VIII(5)、破片(5)<br>皿;II×III(2)、VI(1)、IX(2)、IX-1(1)、破片(2)<br>他;壺×水注III(1)、破片(6) |
| 青白磁 | 合子身(1) |
| 中国陶器 | 甕;IV(1)、破片(1)<br>他;壺II-1か(2)、耳壺XIIか(3)<br>耳壺V×VI(1)、破片(7)、破片〔A-2群〕(1)<br>破片〔B群〕(2)、盤I-1b(2) |
| 瓦類 | 平瓦(燻し瓦、縄目叩)、平瓦〔燻し瓦(多量)〕、<br>縄目叩、二重格子叩)、丸瓦(燻し瓦)<br>丸瓦(凹面に縄目叩)、軒平瓦(近世～) |
| 石製品 | 硯(粘板岩)、碁石(白)、石鍋か |
| 土製品 | 人形(型押し、着物の裾か)、七輪のｻﾝ |
| その他 | 石炭、石炭ｶｽ、焼土塊、滓(ｶﾞﾗｽ質)、鉱滓<br>ｶﾞﾗｽ破片 |

S-10真砂　現代か?

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 蓋3、坏a、坏a×皿a、壺(把手付) |
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ)、小皿a(ﾍﾗ)、鍋か |
| 黒色土器A | 破片 |
| 黒色土器B | 破片 |
| 瓦器 | 椀c |
| 同安窯系青磁 | 椀;I-1(1) |
| 土師質土器 | 煮沸具 |
| 瓦質土器 | 鉢 |
| 瀬戸 | 鉢(獣脚付)13～14c |
| 肥前系磁器 | 華瓶、広東椀、蓋茶椀、重ね鉢蓋(銅版ﾌﾟﾘﾝﾄ)<br>中皿(18c代) |
| 国産陶器 | 擂鉢、捏鉢(浅形)、土瓶(緑釉)、瓶蓋 |
| 国産磁器 | 植木鉢(現代)、丸椀(現代)、ｶﾞｲｼ |
| 白磁 | 椀;IV(1)<br>皿;II×III(1) |
| 瓦類 | 平瓦(燻し瓦) |
| 石製品 | 滑石 |
| その他 | ﾚﾝｶﾞ、土管、石炭 |

S-11

| | |
|---|---|
| 土師器 | 破片 |
| 須恵質土器 | 甕 |

S-12

| | |
|---|---|
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ)、小皿a(ｲﾄ) |
| 龍泉窯系青磁 | 椀;I-2a(1)<br>他;壺か(IV類系の釉)(1) |
| 土師質土器 | 坏か、鉢 |
| 須恵質土器 | 捏鉢?、甕 |
| 肥前系磁器 | 染付丸形椀(ｺﾝﾆｬｸ印判)、皿 |
| 国産陶器 | 甕、壺 |
| 白磁 | 椀;V(1) |
| 瓦類 | 平瓦(縄目叩)、平瓦(燻し瓦)、軒丸瓦(巴瓦) |

S-13

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 甕 |
| 土師器 | 坏、破片 |
| 石製品 | 石鍋 |

S-14　撹乱

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 蓋c |
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ) |
| 国産磁器 | 破片 |
| 白磁 | 他;破片(2) |
| 須恵質(輸入) | 破片 |
| 瓦類 | 破片 |
| その他 | ﾋﾞｰ玉 |

S-15黒色土　XIV～XV(12c後半)

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 蓋c、蓋×高坏、坏、坏a×壺、坏c、大皿×盤<br>甕、壺、壺a |
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ、ﾍﾗ)、丸底坏、椀c、丸椀、小皿a(ｲﾄ)<br>甕、鍋、鍋(把手) |
| 黒色土器A | 椀 |
| 黒色土器B | 椀 |
| 瓦器 | 椀(畿内系)、椀 |
| 越州窯系青磁 | 椀;I(3)、I-2bア(1)、II(1) |
| 龍泉窯系青磁 | 椀;I-2(1) |
| 同安窯系青磁 | 椀;III-1b×c(1)、破片(2)<br>皿;Iか(1) |
| 須恵質土器 | 甕、甕(常滑?)、捏鉢(東播系) |
| 緑釉陶器 | 椀[近江](2) |
| 肥前系陶磁器 | 破片(一点のみ混入) |
| 白磁 | 椀;II(2)、II-3b(3)、IV(1)、V-1×VIII-2(2)<br>V-2×VIII-4(2)、V-3×4(1)、V-4b(6)<br>V-4×VIII-2.3(4)、VIII(3)、破片(6)<br>皿;III-1(1)、III×IV(1)、Vか(1)、V×VI(1)、VI(3)<br>VI-1a(1)<br>他;壺III(3)、破片(12) |
| 中国陶器 | 鉢;I-1a(3)<br>甕;破片(1)<br>他;耳壺V-1か〔B群、基筒底〕(1)<br>破片〔B群、耳壺VIIか〕(1)、耳壺XIIか(1) |
| 黒釉陶器 | 椀(1) |
| 瓦類 | 丸瓦、破片〔格子叩(細)、格子叩(中)、縄目叩〕 |
| 石製品 | and-f、滑石 |
| その他 | 石炭 |

S-15淡茶色土　平安後(XIV～XV)

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 坏c、壺 |
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ)、破片 |

S-16　平安後～

| | |
|---|---|
| 土師器 | 小皿a(ﾍﾗ)、破片 |
| 黒色土器A | 破片 |

S-17　平安～

| | |
|---|---|
| 土師器 | 小皿、破片 |

S-18　8c後≦末

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 蓋c3、蓋c3×4、坏a、坏c、高坏、皿a、大甕<br>小壺、壺、壺b |
| 土師器 | 蓋3(ﾐｶﾞｷa)、坏a(ﾐｶﾞｷa)、坏c(ﾐｶﾞｷa)、坏d、甕a |
| 製塩土器 | 焼塩壺I類、破片(II類) |
| 瓦類 | 平瓦(縄目叩、一枚作り)、丸瓦(ﾅﾃﾞ消し) |

## tab.217-6　大宰府条坊跡第 217 次調査　出土遺物一覧表（3）

S-20黄黒色土　～XII

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 蓋3、蓋4、蓋c、蓋×皿(ﾐｶﾞｷa)、坏、坏a、坏c<br>大坏c×壺、高坏、甕a<br>小壺、壺 |
| 土師器 | 坏a(ヘラ)、坏a(ﾐｶﾞｷa)、坏dか、丸底坏、椀c<br>小皿a(ヘラ)、甕、壺、壺か?、大坏c×皿c(ﾐｶﾞｷa) |
| 製塩土器 | 破片(焼塩壺Iか)、破片〔布目痕(II-2類か)〕 |
| 黒色土器B | 破片 |
| 瓦器 | 椀 |
| 越州窯系青磁 | 椀;I(3)、I-2ｳ(1)<br>坏;I-1(1)、I-3(1)<br>他;破片I(輪花あり)(1)、I(2)、I×III(5) |
| 緑釉陶器 | 椀(円板底　京都産か)、壺、破片([近江]系か) |
| 白磁 | 椀;I-1(1)、II-1(1)、IV(1)<br>皿;VI(1)<br>他;破片(広東系)(1) |
| 須恵質(輸入) | 朝鮮系無釉陶器か |
| 瓦類 | 平瓦(斜格子、二重格子、横長格子、<br>縦長格子(中)、正格子〔(細)、縄目〕)<br>丸瓦(ﾅﾃﾞ消し) |
| 金属製品 | 鉄製品? |
| 石製品 | 石鍋、滑石、白玉石 |
| その他 | 滓(ｶﾞﾗｽ質) |

S-20黄灰色土　平安後

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 蓋3、蓋c、坏、坏a×皿a、坏c、高坏、皿a、甕<br>小壺 |
| 土師器 | 蓋3(ﾐｶﾞｷa)、坏×蓋(ﾐｶﾞｷa)、坏d、丸底坏<br>皿a(ﾐｶﾞｷa) |
| 製塩土器 | 破片 |
| 黒色土器B | 破片 |
| 越州窯系青磁 | 椀;I-2(輪花)(1) |
| 土製品 | 破片 |

S-20灰色土　平安後～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 蓋3、坏、坏a、坏c、甕 |
| 土師器 | 椀、小皿a(ヘラ)、皿a×蓋3、破片 |
| 製塩土器 | 破片 |
| 黒色土器A | 破片 |
| 瓦類 | 平瓦(正格子) |

S-21

| | |
|---|---|
| 土師器 | 坏a(ヘラ)、小皿a |
| 須恵質土器 | 甕? |
| 国産磁器 | 化粧瓶(現代) |
| 白磁 | 椀;V-4(1)、V-1(1) |
| 瓦類 | 平瓦 |
| その他 | ｽﾚｰﾄ |

S-22　平安中～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 蓋3、甕a |
| 土師器 | 小皿a2、破片(ﾐｶﾞｷa)、破片 |

S-23　8c～

| | |
|---|---|
| 土師器 | 坏、破片 |

S-24　8c～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 蓋3、坏c、甕 |
| 土師器 | 破片 |

S-25黒色土　～XII頃か

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 蓋3、坏a、坏c、皿c、甕a、大甕、壺 |
| 土師器 | 坏a(ヘラ)、丸底坏、椀c、小皿a(ヘラ、径10cm前後)<br>小皿a(ヘラ×糸)、器台、把手 |
| 製塩土器 | 破片〔布目痕(II類)〕 |
| 越州窯系青磁 | 椀;I(2) |
| 白磁 | 椀;XIか(1)<br>他;破片(1) |
| 瓦類 | 平瓦(ﾅﾃﾞ消し、二重格子、縄目、横長斜格子) |

S-26　平安～

| | |
|---|---|
| 土師器 | 蓋3、坏a、破片 |
| 瓦類 | 破片 |

S-27　8c末～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 蓋3、蓋c3、坏a、坏c、皿a |
| 土師器 | 蓋3、蓋4、坏a(ﾐｶﾞｷa)、坏c、坏d、甕a<br>坏(手持ち成形か)、坏片(糸切り、混入) |
| 金属製品 | 刀子? |

S-28　8c末

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 蓋c3、蓋c4、坏c、大坏c、高坏×蓋3、皿a、甕 |
| 土師器 | 坏a×皿b(底部手持ち成形)、甕a<br>坏a×皿a(ﾐｶﾞｷa)、坏c×皿c |
| 製塩土器 | 煎熬土器、破片(II-1、II-2類) |
| 越州窯系青磁 | 椀;椀×坏I(1) |
| 瓦類 | 平瓦(縄目) |

S-29(S-25と同一遺構)　平安

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 坏aか、甕、甕×壺、壺 |
| 土師器 | 坏、坏a、小皿(ヘラ) |

S-30黒灰色土　～XII期

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 蓋1、蓋3、蓋4、蓋c、坏a、坏c、甕<br>壺、壺e、壺(肥後)、把手 |
| 土師器 | 蓋3(ﾐｶﾞｷa)、坏a(ヘラ)、丸底坏、椀c<br>小皿a(ヘラ)、小皿a2、甕a、甕b、把手 |
| 製塩土器 | 破片(布目痕) |
| 黒色土器A | 椀c |
| 瓦器 | 椀c |
| 越州窯系青磁 | 椀;II(1)、II-2(1)<br>破片I類(2)、破片(3) |
| 緑釉陶器 | 椀(京都)、椀×皿(長門) |
| 白磁 | 椀;II(2)、V-4b(1)<br>皿;VI-1b(1)<br>他;破片(2) |
| 瓦類 | 平瓦(縄目、正格子(小)(中))<br>二重格子(「賀」逆字) |
| 土製品 | 鋳型 |
| その他 | 椀形滓か、鉱滓、滓(ｶﾞﾗｽ質) |

S-31　平安後～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 甕 |
| 土師器 | 坏a、小皿a(ｲﾄ)、甕 |

S-32　平安後～

| | |
|---|---|
| 土師器 | 坏?、小皿a(ｲﾄ) |
| 同安窯系青磁 | 皿;I-2(1) |
| 須恵質土器 | 捏鉢(東播系) |

## tab.217-6 大宰府条坊跡第217次調査 出土遺物一覧表（4）

S-33 13c～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 坏c、甕、壷 |
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ)、椀c、小皿a(ｲﾄ)、甕×鍋 |
| 瓦器 | 椀? |
| 龍泉窯系青磁 | 椀;I(2)、I-1(1)、I-1a(1)、I-1c(金玉満堂)(1)<br>I-2(4)、II-c(1) |
| 須恵質土器 | 捏鉢(東播系) |
| 白磁 | 椀;IV(1)、V-1×VIII-2(2)、V-2×VIII-4(1)<br>V-4×VIII-1･3(1)、V-4a(1)、破片(8)<br>皿;II×III(1)<br>水注(1) |
| 瓦類 | 破片(格子)、破片 |

S-34 カクラン 現代～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 甕a |
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ)、小皿a(ｲﾄ)、供膳具(ﾍﾗ) |
| 龍泉窯系青磁 | 椀;I-2(1) |
| 瓦質土器 | 擂鉢 |
| 国産陶器 | 小皿(唐津、砂目) |
| その他 | ｽﾚｰﾄ |

S-36 XIV期

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 蓋3か、坏、甕、壷、供膳具 |
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ)、丸底坏、小皿a(ｲﾄ、ﾍﾗ(1点出土))、鍋 |
| 瓦器 | 椀c |
| 越州窯系青磁 | 椀;I-1a(1)<br>他;破片I(1) |
| 龍泉窯系青磁 | 椀;I(1)、I-2(2) |
| 同安窯系青磁 | 椀;I(1)、I-1(1)<br>皿;I-2a(1) |
| 白磁 | 椀;IV(1)、IV-1b(1)、V(1)、V-1×VIII-2(2)<br>V-4(1)、V-4×VIII-1･3(1)<br>皿;VI(1)、IX-1(1)(混入か) |
| 青白磁 | 合子蓋(2) |
| 中国陶器 | 壷;破片〔B群〕(1)<br>鉢;I-1b(1) |
| 須恵質(輸入) | 朝鮮系無釉陶器 |
| 瓦類 | 平瓦〔格子、正格子(中)、縄目〕、丸瓦 |
| 石製品 | 黒玉石 |
| その他 | 炭化物、焼土塊 |

S-37 平安～

| | |
|---|---|
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ)、小皿a(ｲﾄ) |

S-38淡茶灰色土

| | |
|---|---|
| 土師器 | 坏、破片 |
| 国産磁器 | 椀(1) |
| 瓦類 | 破片(燻し) |
| その他 | 石墨か?、鉱滓 |

S-38茶色土 近代～(明治)

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 蓋c |
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ)、小皿a(ｲﾄ) |
| 瓦質土器 | 擂鉢 |
| 肥前系磁器 | 筒形碗(銅版ﾌﾟﾘﾝﾄ) |
| 国産陶器 | 擂鉢、徳利 |
| 白磁 | 椀;IV×V(1) |
| 瓦類 | 丸瓦(燻し)、桟瓦、破片 |
| その他 | 焼土塊 |

S-38明茶色土

| | |
|---|---|
| 国産陶器 | 瓶 |

S-39黒褐色土

| | |
|---|---|
| 国産陶器 | 土瓶(鉄絵) |
| 白磁 | 椀;椀×皿IX(1) |
| 瓦類 | 破片(燻し) |

S-40黄灰色土 大正5年～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 甕 |
| 土師器 | 坏、坏a(ｲﾄ)、小皿a(ﾍﾗか)、甕 |
| 龍泉窯系青磁 | 椀;I-2(1) |
| 須恵質土器 | 鉢 |
| 国産陶器 | 土管、破片(外面緑釉) |
| 国産磁器 | 碗(近現代) |
| 白磁 | 椀;V(1) |
| 瓦類 | 平瓦(燻し)、丸瓦(燻し)、桟瓦 |
| 金属製品 | 一銭銅貨(大正5年) |
| その他 | 古いｺﾝｸﾘｰﾄ? |

S-40茶色土

| | |
|---|---|
| 国産磁器 | 碗(ﾌﾟﾘﾝﾄ) |
| 瓦類 | 平瓦、のし瓦(丸瓦の平たいもの) |

S-41a 14c～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 蓋c、甕 |
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ)、坏bか?、小皿a(ｲﾄ)、小皿b×坏b |
| 龍泉窯系青磁 | 椀;I-2(1)、II-b(1) |
| 同安窯系青磁 | 椀;III-2(1)<br>皿;I-1a(1) |
| 土師質土器 | 擂鉢 |
| 須恵質土器 | 捏鉢(東播系) |
| 国産陶器 | 破片 |
| 白磁 | 椀;II-1(1)、IV(1)、V-4(1)<br>皿;IX(1)<br>他;破片(1) |
| 中国陶器 | 甕;破片(IVか)(1) |
| 瓦類 | 平瓦(横長斜格子)、瓦玉? |
| 土製品 | 羽口 |
| その他 | 鉱滓 |

S-41b 14c後～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 甕 |
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ、ﾍﾗ)、小皿a(ｲﾄ) |
| 瓦器 | 椀 |
| 龍泉窯系青磁 | 椀;II-b(2) |
| 同安窯系青磁 | 椀;I(4)<br>皿;I-b(1)、I(1) |
| 土師質土器 | 鉢 |
| 須恵質土器 | 甕(常滑か) |
| 瓦質土器 | 火舎か |
| 国産陶器 | 甕×壷 |
| 白磁 | 椀;IV(1)、V(1)<br>他;破片(2) |
| 中国陶器 | 甕;破片(IVか)(1)<br>他;甕×壷(4)、破片〔A-2群〕(1) |
| 瓦類 | 破片 |
| 石製品 | 玉石(黒) |
| 土製品 | 羽口 |
| その他 | 焼土塊、鉱滓 |

## tab.217-6　大宰府条坊跡第 217 次調査　出土遺物一覧表（5）

S-41c　14c後～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 高坏、破片 |
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ)、坏b(ｲﾄ)、小皿a(ｲﾄ)、鍋、小皿b<br>小皿a×坏b |
| 龍泉窯系青磁 | 椀;I(2)、IIか(2)、II-b(1)、IV(2)、<br>坏;IV(坏III-5に近い。見込の釉は掻き取り) |
| 同安窯系青磁 | 椀;I-1b(1)、IIか(1)<br>他;同安窯系青磁?破片(1) |
| 土師質土器 | 擂鉢、鉢 |
| 須恵質土器 | 甕(常滑)、捏鉢(東播系) |
| 瓦質土器 | 鉢(花文有り)、捏鉢 |
| 国産陶器 | おろし皿(瀬戸か) |
| 白磁 | 椀;破片(1)、IV(1)、V-4(1)、IXか(1)<br>皿;IX-1(1)、VIII(1) |
| 中国陶器 | 甕;IV(2) |
| 須恵質(輸入) | 朝鮮系無釉陶器壺 |
| 瓦類 | 破片 |
| 石製品 | 石鍋、平たい丸石、丸石 |
| 土製品 | 羽口、炉壁? |
| その他 | 滓、鉱滓、焼土塊(ややまとまって出土) |

S-42　12c～

| | |
|---|---|
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ)、供膳具 |
| 龍泉窯系青磁 | 椀;I-1(1) |
| 同安窯系青磁 | 皿;I(2) |

S-43

| | |
|---|---|
| 縄文土器? | 破片 |

S-44　平安～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 甕 |
| 土師器 | 破片 |

S-45黒茶色土　平安後(XIV頃か)

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 蓋、蓋3、蓋c、坏c、甕、甕a、壺 |
| 土師器 | 坏a(ﾍﾗ、ﾍﾗ×ｲﾄ、ｲﾄ)、椀c<br>小皿a(ﾍﾗ、ﾍﾗ×ｲﾄ)、甕×鍋 |
| 瓦器 | 椀c |
| 越州窯系青磁 | 椀;Iか(1)、I-5(1)<br>坏;I(1) |
| 龍泉窯系青磁 | 皿;I-1a(1) |
| 須恵質土器 | 甕、捏鉢(東播系) |
| 白磁 | 椀;IIか(輪花あり)(1)、II-b(1)、IV(1)、IV-1b(1)<br>V-1か(1)、V-2×VIII-4(1)、V-4b×c(2)<br>VIII-2×3(3)、破片(8)、未分類(2)<br>皿;III-2か(1)、V(1)、破片(1)<br>他;破片(内面篦描き文)(1)、四耳壺III(1) |
| 青白磁 | 合子 |
| 中国陶器 | 他;破片(耳壺XIIか)(1)、壺か〔A2群〕(1) |
| 瓦類 | 平瓦〔縄目、正格子(中)〕、横長斜格子(小)<br>丸瓦(正格子)、瓦玉 |
| 石製品 | 碁石(黒) |
| その他 | 椀形滓? |

S-45灰茶色土　平安後(XIV頃か)

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 坏×皿、坏c、高坏、皿a、甕、壺 |
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ)、小皿a(ﾍﾗ)、把手 |
| 瓦器 | 椀 |
| 越州窯系青磁 | 壺;I(外面毛彫)(1)、I(1) |
| 須恵質土器 | 甕 |
| 白磁 | 椀;IV(1)、V-4(1)、VIII(1)、XIIか(段2)(1)<br>椀破片(1) |
| 中国陶器 | 壺;V-2か(1) |
| 瓦類 | 破片〔横長斜格子(小)、縄目〕、瓦玉 |
| 土製品 | 棒状土製品 |
| その他 | 鉱滓 |

S-45黒色粘　XIV期～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 甕 |
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ)、丸底坏cか、小皿a(ｲﾄ) |
| 瓦器 | 椀c |
| 越州窯系青磁 | 椀;II(1)、III?(1)<br>皿;破片(1) |
| 同安窯系青磁 | 椀;III-1b(1)<br>皿;I(1) |
| 白磁 | 椀;V-4(2)、破片(3) |

S-45灰褐色土　平安後

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 甕 |
| 土師器 | 坏(ﾍﾗ、ｲﾄ)、煮炊具、破片 |
| 越州窯系青磁 | 水注I(瓜割り)(1) |
| 白磁 | 破片(1) |

S-46　8c～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 甕 |
| 土師器 | 鉢か、破片(8c頃) |
| 瓦類 | 破片 |

S-48　IX～X

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 蓋c、坏、坏c、甕 |
| 土師器 | 椀c、小皿a(ﾍﾗ)、壺×鉢、破片 |
| 黒色土器A | 椀、大椀×鉢 |
| 越州窯系青磁 | 椀;I(1) |
| 緑釉陶器 | 壺×椀(外面に釉) |
| 瓦類 | 破片(縄目) |

S-49　13c後～か?(出土遺物はXIV～XV期)

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 坏c、甕 |
| 土師器 | 坏a(ﾍﾗ、ﾍﾗ×ｲﾄ)、椀c、小皿a(ｲﾄ)、鍋 |
| 黒色土器A | 破片 |
| 同安窯系青磁 | 椀;I-1b(1)<br>皿;I(1)、I-2b(1) |
| 白磁 | 皿;II(1)、Vか(1)<br>壺;III(1) |

S-49灰茶色土　13c後～か?(出土遺物はXIV～XV期)

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 蓋か、蓋1、坏c、甕 |
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ)、小皿a(ｲﾄ)、椀c |
| 龍泉窯系青磁 | 椀;I(1)、I-2(4) |
| 同安窯系青磁 | 椀;I-1a(3)、I-1b(2)、III-1aか(1)、破片(2)<br>皿;I-2b(2) |
| 須恵質土器 | 捏鉢(東播系) |
| 緑釉陶器 | 皿(京都) |
| 白磁 | 椀;IV(1)、IV-1(1)、V(1)、破片(3)<br>破片(ﾍﾗ花文あり)(2)<br>皿;IVか(1)、Vか(1)<br>他;壺III(1)、破片(5) |
| 中国陶器 | 壺;破片〔B群、外面淡緑黄色の釉〕(1)<br>鉢;I-2a(1)<br>他;盤I-b(1)、耳壺VIIか〔A-2群〕(1) |
| 瓦類 | 破片 |

## tab.217-6　大宰府条坊跡第217次調査　出土遺物一覧表（6）

S-49暗茶色土　13cか

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 坏か、甕、壺か |
| 土師器 | 坏a（ヘラ、イト）、大坏c×盤c、小皿a（ヘラ×イト） |
| 龍泉窯系青磁 | 椀；I(1) |
| 白磁 | 椀；IV-2(1)、V-1×VIII-2(1)、破片(3)<br>皿；破片(1) |
| 中国陶器 | 他；耳壺XIIか(1) |
| 瓦類 | 破片〔正格子（小）〕 |

S-50黒茶色土　XIII～XIV頃か

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 蓋3、蓋4、蓋c、蓋c（土師質）、坏c、甕、甕a、壺 |
| 土師器 | 蓋c、坏a（イト、ヘラ）、丸底坏（ヘラ）、椀c<br>小皿a（ヘラ、ヘラ（穿孔）、ヘラ×イト）、小皿a2、甕a |
| 製塩土器 | 破片〔布目痕（II-2類）〕 |
| 黒色土器A | 椀c |
| 黒色土器B | 椀c |
| 瓦器 | 椀c、小皿 |
| 越州窯系青磁 | 椀；I(5)、II(1) |
| 同安窯系青磁 | 椀；I-1b(1) |
| 白磁 | 椀；II-1(1)、IV(3)、IV-1b(2)、V(1)<br>V-1(1)、V-2(1)、VIII(1)<br>皿；破片(1)<br>他；壺IIIか（大型）(1)、破片(8) |
| 中国陶器 | 他；水注II(1)、破片〔B群〕（耳壺VIIか）(1) |
| 瓦類 | 平瓦〔縄目、格子（大）〕、横長斜格子（中）<br>正格子（小））、破片 |
| 石製品 | 石鍋、ob-f（黒曜石片） |
| その他 | 鉱滓 |

S-50茶黒色土　XII～XIII

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 坏a、皿a、甕、壺、壺d×e×f |
| 土師器 | 坏a（ヘラ、ヘラ×イト）、坏d、丸底坏、椀c、小皿a |
| 製塩土器 | 破片〔布目痕（II-2類）〕 |
| 黒色土器A | 椀c |
| 黒色土器B | 椀c |
| 瓦器 | 椀 |
| 越州窯系青磁 | 椀；I-2bア(1) |
| 白磁 | 椀；II-1×3(1)、IV(2)、V-1×VIII-2(1)、VI-1a(2)<br>他；破片(2) |
| 中国陶器 | 他；耳壺V(1)、ツマミ〔A-2群〕(1)、破片〔B群〕(1) |
| 須恵質（輸入） | 朝鮮系無釉陶器 |
| 瓦類 | 破片（横長斜格子） |
| その他 | 鉱滓、焼土塊 |

S-50灰茶色土　～XII

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 蓋か?、蓋3、坏c、坏×皿、高坏、甕、甕a |
| 土師器 | 坏a（ヘラ）、坏c×椀c、小皿a（ヘラ）、壺、煮炊具 |
| 白磁 | 椀；II-1(1) |
| 瓦類 | 平瓦〔正格子（小、中））|
| その他 | 鉱滓 |

S-50暗茶黒色土　平安後

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 破片 |
| 土師器 | 丸底坏×椀、供膳具(ヘラ) |
| 白磁 | 椀；破片(1) |
| 瓦類 | 破片〔斜格子(小)〕 |

S-51　13c～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 甕 |
| 土師器 | 坏a（イト）、小皿a（イト）、甕a |
| 瓦器 | 椀 |
| 龍泉窯系青磁 | 椀；I(1)、I-2(1)、I-5(1)、II-b(3)<br>皿；I-1b(1)<br>他；破片(1) |
| 同安窯系青磁? | 破片(1) |
| 土師質土器 | 鉢 |
| 須恵質土器 | 捏鉢か、壺×捏鉢 |
| 白磁 | 椀；IIか(1)、V-1×VIII-2(1)、VIIIか(1)、破片(1)<br>皿；破片(1)<br>四耳壺III(1) |
| 中国陶器 | 甕；IVか(1)<br>他；破片〔A-2群〕(1)、破片(1) |
| 瓦類 | 平瓦（細かい格子）、瓦玉 |
| 石製品 | ﾁｬｰﾄ? |
| その他 | 鉱滓 |

S-52　古代～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 破片 |

S-53　14c～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 甕 |
| 土師器 | 坏a（イト） |
| 土師質土器 | 鉢 |
| 瓦類 | 破片（縄目） |
| その他 | 鉱滓 |

S-54

| | |
|---|---|
| 瓦質土器 | 鉢 |

S-56　古代～中世

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 破片 |
| 土師器 | 破片 |
| 龍泉窯系青磁 | 椀；II-b(1) |
| 瓦類 | 破片（格子） |

S-57

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 坏c、皿、甕 |
| 土師器 | 坏a（イト、ヘラ）、坏c×椀c、椀c |
| 黒色土器A | 破片 |
| 瓦器 | 椀、椀c |
| 肥前系磁器 | 破片(2) |
| 中国陶器 | 耳壺V×VI(1)、耳壺〔C群〕(1) |
| 瓦類 | 平瓦（燻し） |
| その他 | 石炭 |

S-58

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 蓋3、蓋×皿、坏、坏c、甕、壺、破片 |
| 土師器 | 坏a(ヘラ、イト)、丸底坏(ヘラ)、小皿a(イト) |
| 龍泉窯系青磁 | 椀；I-2(1) |
| 須恵質土器 | 鉢? |
| 白磁 | 椀；IV(1)、V(1)、VIII(2)<br>壺III(1) |
| 瓦類 | 平瓦(格子)、塼 |
| その他 | 石炭 |

S-59　14c～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 破片 |
| 土師器 | 坏a(イト) |
| 龍泉窯系青磁 | 椀；I(1) |
| 瓦質土器 | 擂鉢 |

## tab.217-6　大宰府条坊跡第 217 次調査　出土遺物一覧表（7）

S-60茶色土（＝S-55茶色土）　近世

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 坏a、坏c、甕 |
| 土師器 | 坏(ヘラ)、小皿(イト)、破片 |
| 国産陶器 | 皿(唐津、砂目) |
| 瓦類 | 平瓦（横長斜格子）、破片（凹面縄目） |

S-61　平安後～

| | |
|---|---|
| 白磁 | 椀；IV-1(1)<br>壺×水注II(1) |
| 瓦類 | 丸瓦（平行叩） |

S-62　平安後～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 甕 |
| 土師器 | 坏a(ヘラ、イトか) |

S-63黒茶色土　13c～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 坏a、坏c、皿a、甕、壺bか |
| 土師器 | 坏a(イト)、大椀c、小皿a(イト) |
| 瓦器 | 椀 |
| 龍泉窯系青磁 | 椀；I-2(2)、II-a(4)、II-b(3)<br>他；小椀I(1) |
| 同安窯系青磁 | 椀；I-1b(1)<br>皿；I-1b(1) |
| 土師質土器 | 鍋 |
| 須恵質土器 | 捏鉢(東播系)、小甕 |
| 瓦質土器 | 鉢 |
| 国産磁器 | 皿?（近世～、S-60からの混入か） |
| 白磁 | 椀；V-4×VIII-1・3(2)<br>破片(5) |
| 中国陶器 | 盤IIか(1)、破片〔A-2群〕(1) |
| 瓦類 | 丸瓦、平瓦(縄目) |
| 土製品 | 土塊 |

S-66　平安後～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 坏a×皿a |
| 土師器 | 坏a(イト) |
| 白磁 | 椀；V-1×VIII-2(1) |

S-67　平安後

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 坏、甕、壺(ヘラ記号あり) |
| 土師器 | 坏a(イト)、小皿a(イト) |
| 瓦器 | 椀 |
| 越州窯系青磁 | 椀；II(1)<br>破片I（輪花有り）(1) |
| 龍泉窯系青磁 | 椀；I(3)、I-2(1) |
| 同安窯系青磁 | 椀；III(1)<br>皿；I(1)、I-2b(1) |
| 須恵質土器 | 捏鉢 |
| 白磁 | 椀；IV-1(1)<br>皿；IIIか(1)<br>壺×水注III(1) |
| 中国陶器 | 壺（胎土粗く白砂入り、褐釉）(1)、壺〔c群〕(1) |
| 土製品 | 焼土塊 |

茶色土

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 蓋3、蓋c、坏a、坏c、高坏、皿a、甕<br>甕（中世、内面ナデ）、甕a×煎熬土器、壺<br>壺（高台付）、壺e |
| 土師器 | 蓋3、蓋4、坏a(イト)、坏d、椀a(平安)、椀c<br>椀c（ミガキc）、大椀c、小皿a（イト、ヘラ）、甕<br>甕（角閃石入）、鉢か、器台、鍋 |
| 製塩土器 | 煎熬土器、破片 |
| 黒色土器A | 椀、大椀c×鉢 |
| 黒色土器B | 椀c |
| 瓦器 | 椀c |
| 越州窯系青磁 | 椀；I(5)、I-2aア(1)、II(2)<br>壺×水注I(1)、破片I(2)、破片（香炉?)(1) |
| 龍泉窯系青磁 | 椀；I(6)、I-2(4)、I-3a(1)、I-4(1)、II-b(5)、IV(1)<br>破片(1)<br>坏；III-1(1)、III-4(1)、III-5a(1) |
| 同安窯系青磁 | 椀；I(5)、III-c(1)、III-2(4)、破片(2)<br>皿；I-1b(1)<br>他；破片(2) |
| 土師質土器 | 風炉、捏鉢、七輪ｻﾝ、鉢×盤 |
| 須恵質土器 | 捏鉢(東播系) |
| 瓦質土器 | 風炉か(花文ｽﾀﾝﾌﾟ) |
| 緑釉陶器 | 椀×坏、緑釉緑彩壺 |
| 肥前系磁器 | 皿（蛇ノ目凹形高台）、丸椀（ｺﾝﾆｬｸ印判）<br>広東椀、蓋茶椀蓋 |
| 国産陶器 | 擂鉢、七輪ｻﾝ、小皿（内面に梅鉢文）、甕、壺<br>捏鉢、土瓶蓋（刷毛手）、小蓋、小甕<br>土瓶（刷手）、鉢（刷手）、花瓶、土瓶（ぶ厚い）<br>土瓶（京都風、幕末） |
| 国産磁器 | 小椀、皿(ﾌﾟﾘﾝﾄ)、壺、紅皿、合子、徳利? |
| 白磁 | 椀；II(1)、IV(4)、IV-1a(2)、IVか(1)、IV-2か(1)<br>V(2)、V×VIII(1)、V-1×VIII-2(4)<br>V-2×VIII-4(1)、V-3(3)、V-3×4(1)<br>V-4(5)、V-4×VII(3)、V-4×VIII-3(1)<br>VII(3)、VIII-2×3(1)、IX(1)、破片(9)<br>皿；II-1×III(1)、III(2)、III-2(1)、IV-2(1)、V(2)<br>VI(4)、VI-1a(3)、IX(2)、破片(1)<br>他；壺III(2)、小壺蓋(1)、水注把手(1)、破片(13)<br>破片（広東系)(2) |
| 青白磁 | 合子蓋(2) |
| 中国陶器 | 甕；IV(1)<br>水注VI(1)、水注〔A群〕(1)、壺×水注〔B群〕(7)<br>盤I-1(1)、耳壺V×VI(1)、破片〔A-2群〕(1)<br>破片〔B群〕(耳壺V×VIIか)(1) |
| 瓦類 | 平瓦（格子、縄目、燻し瓦）<br>丸瓦〔凹面縄目（新しい時期）〕<br>丸瓦×のし瓦（燻し瓦）、文字瓦（「平井」） |
| 石製品 | and-f、滑石、砥石（泥岩）、碁石 |
| 土製品 | 移動式ｶﾏﾄﾞ、土玉、円板製品 |
| その他 | 焼土塊、ﾋﾞｰ玉、石炭、鉱滓、滓(ｶﾞﾗｽ質)<br>ﾀｲﾙ、ｶﾞﾗｽ皿（日本橋の「栄太楼」社のマーク） |

表土

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 坏、坏（ﾐｶﾞｷa）、坏a、甕 |
| 土師器 | 坏a、椀c、小皿a |
| 瓦器 | 椀 |
| 同安窯系青磁 | 皿；I-1a(1) |
| 瓦質土器 | 鉢 |
| 肥前系磁器 | 丸形椀（染付）(見込「寿」字)、丸形椀、筒形碗<br>皿、破片 |
| 国産陶器 | 燭台 |
| 国産磁器 | 徳利 |
| 白磁 | 椀；IV(1) |
| 瓦類 | 破片(格子)、破片（凹面を縄目）、破片（燻し） |
| その他 | ｶﾞﾗｽ |

## Ⅲ -2　第 224 次調査

### 1．調査環境

調査対象地は太宰府市五条 2 丁目 2459-4 の一部に所在する。対象地は「五条交差点」部分にあたる。県道拡幅工事に伴う調査で、原因者は福岡県那珂土木事務所である。

調査に際しては、道路拡幅工事のため調査区が北と南に分かれている。このため、対象地を 5 つの区に分けて調査をおこなった。現場運営の関係で部分的に掘り進んだため、調査着手の順に 1 ～ 5 区を設定した。調査は平成 14（2002）年 9 月 11 日～平成 15（2003）年 5 月 30 日にかけて実施した。発掘対象面積は 181.66 ㎡で、発掘調査面積は 162.9 ㎡である。

なお、発掘成果を地元住民へ公表するために、平成 14（2002）年 11 月 16 日に現地説明会を行った。

### 2．層位等

本調査区は現況道路の「五条交差点」東側にあたり、対象地が東西道路を挟んで北と南に分かれている。調査の進行順に 1 ～ 5 区までの区を設定した。北の調査区は 2・5 区である。2・5 区ともに、遺構面まで近現代の削平を受けており、表土として灰色土の任意土層を設定した。5 区では現況地表面から 0.5 m下で遺構を検出した。遺構のほとんどが現代の撹乱であり、中世の遺構と位置付けられるのはたまり状遺構 224SX209 のみである。2 区では中世以前の遺構は確認できなかった。1 区は南側に直径 7m ほどの現代の撹乱があったために、調査区が南北に分かれ異なる時期に調査をおこなっている。

南の調査区は 1・3・4 区を設定した。1 区と 3 区は南北に調査区が隣接するため、遺構を検出、調査を行った土色・層位・遺構面がほぼ一致している。遺構面は現況地表面から 0.2 ～ 0.4 m下で検出した。1 区では表土（灰色土）、灰黒土、茶灰土、暗灰土①・②（暗灰土 =224SK057 として掘り下げ）、黄色（黄灰）シルト（地山）の順に掘削および検出を行った。茶灰土上面から調査を開始し、4 面の遺構面を確認した。3 区では表土（灰色土）、茶灰土、暗灰土、黄褐粗砂（地山）の順に掘削および調査を行った。茶灰土上面から調査を開始し、3 面の遺構面を確認した。1・3 区は宰府六座のひとつである米屋古川家の敷地内にあたり、調査において「米長」「コメヤ」と朱書された磁器が出土し、池跡や廃棄土坑などを検出した。1 区南に隣接す

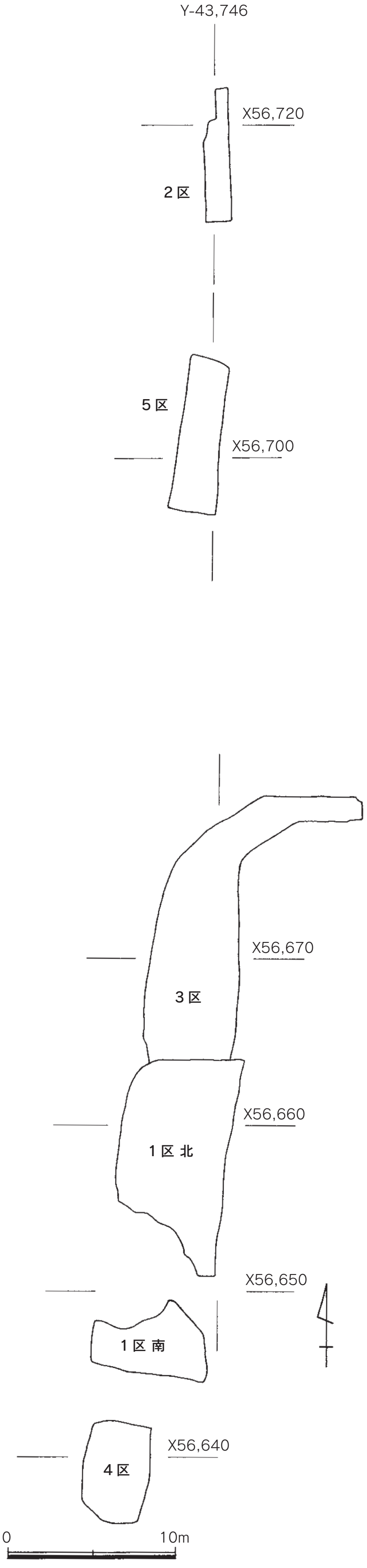



fig.30　第 224 次調査区位置図（1/400）

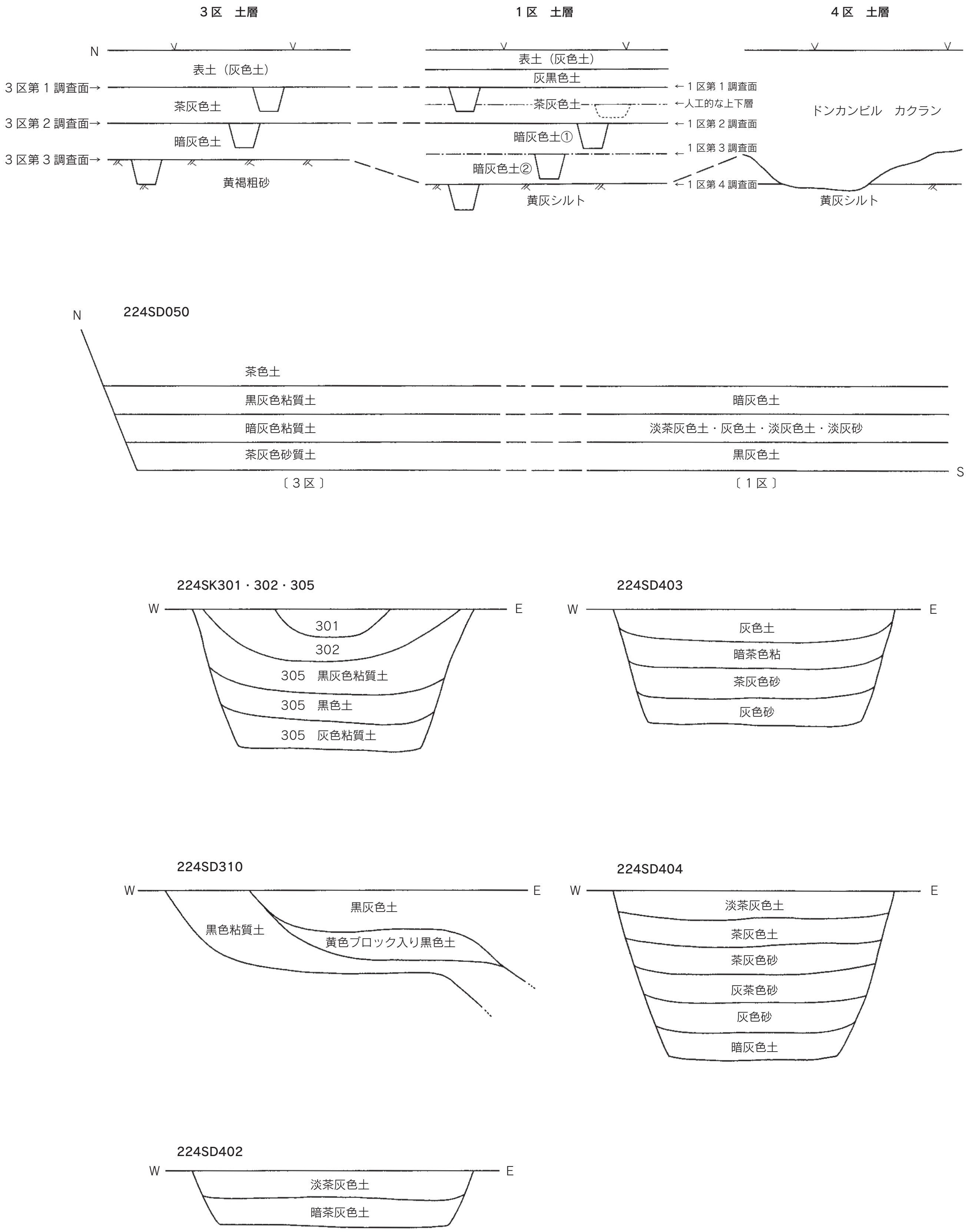
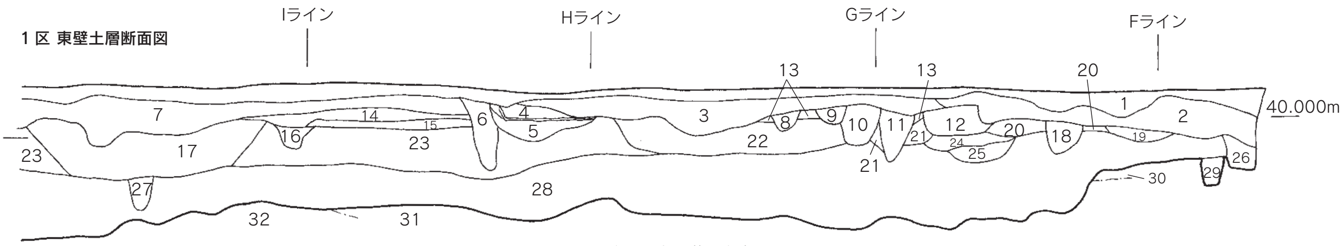


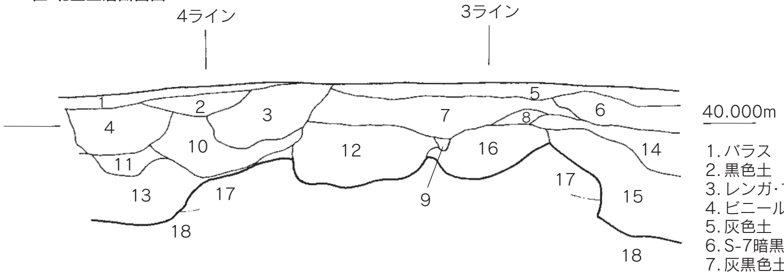

fig.31　第224次調査　土層模式図

**1区 東壁土層断面図**



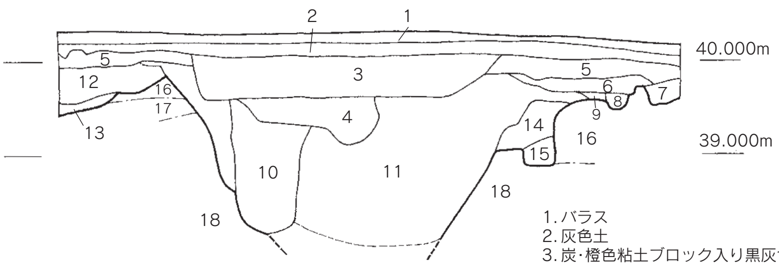

1. 灰色土
2. 炭入り黒灰色土
3. 現代瓦入り黒灰褐色土
4. 橙色土(現代庭園池の貼底コンクリート製)
5. 灰茶褐色土
6. 黒色土
7. 灰黒色土
8. 砂混じり黒色土
9. 黒灰色土
10. 黒色シルト+茶黒色土
11. 灰色シルト+黒灰色土
12. 黒灰色土
13. 灰黒色土
14. 茶灰色土
15. 橙色土硬化面
16. 暗灰色土
17. 224SX030
18. 黒灰色土
19. 炭入り黒灰色土
20. 黒灰色シルト
21. 明茶灰色土
22. 茶灰色土
23. 224SD092(224SF010東側溝)
24. 灰色粗砂
25. 淡灰茶色土
26. 茶黒色土
27. 茶灰色土
28. 224SD100(224SF010東側溝)
29. 黒灰色土
30. 淡茶灰色粗砂(地山)
31. 黄色粗砂(地山)
32. 淡青灰色粗砂(地山)

**1区 北壁土層断面図**



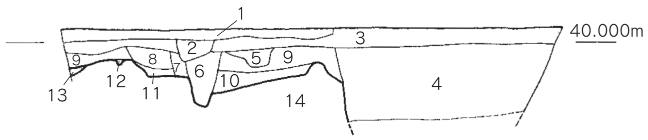

1. バラス
2. 黒色土
3. レンガ・プラスチック入り灰色土
4. ビニール入り黄色気味灰色土
5. 灰色土
6. S-7暗黒灰色土
7. 灰黒色土
8. 暗灰黒色土
9. 黒灰色土
10. 褐色気味灰色土
11. 粗砂入り暗灰色土
12. 224SK078
13. 224SD050(224SF010西側溝)
14. 224SD092(224SF010東側溝)
15. 224SD100(224SF010東側溝)
16. 224SD099(224SF010東側溝)
17. 黄褐色シルト(地山)
18. 淡青灰色粗砂(地山)

**1区南 南壁土層断面図**

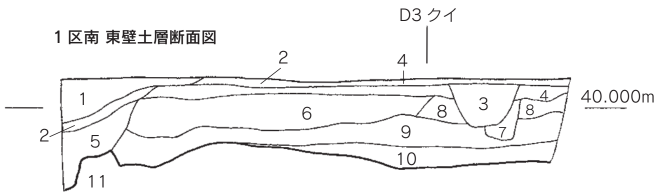



1. バラス
2. 灰色土
3. 炭・橙色粘土ブロック入り黒灰色土
4. 褐色粗砂
5. 茶灰色土
6. 灰褐色土
7. S-104
8. 224SD122
9. 224SD121
10. 224SE130井戸枠内
11. 224SE130裏込め
12. 茶色土
13. 224SD120
14. 224SD137
15. 224SD141
16. 黄茶色シルト(地山)
17. 橙色土(地山)
18. 灰色砂と黄色粗砂の互層(地山)

**1区南 西壁土層断面図**



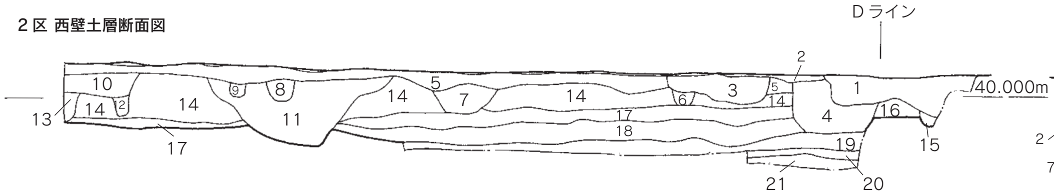

**1区南 東壁土層断面図**



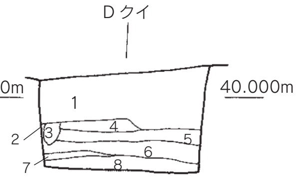

1. バラス
2. バラス入り黒色土
3. 灰色土
4. S-1(ビニール入り)
5. 茶色土
6. S-107瓦入り黒色土
7. S-107黒色土
8. 黒茶色土
9. 茶灰色土
10. 224SD122
11. S-106
12. 茶灰色土
13. S-104
14. 黄茶色シルト(地山)

1. 黒色土
2. バラス
3. 炭多く入り茶黒色土
4. 灰色土
5. 224SK101
6. 炭多く入り黒茶色土
7. 灰茶色土
8. 茶灰色土
9. 茶色土
10. 224SD120
11. 灰色砂(地山)

**2区 西壁土層断面図**




**2区 南壁土層断面図**

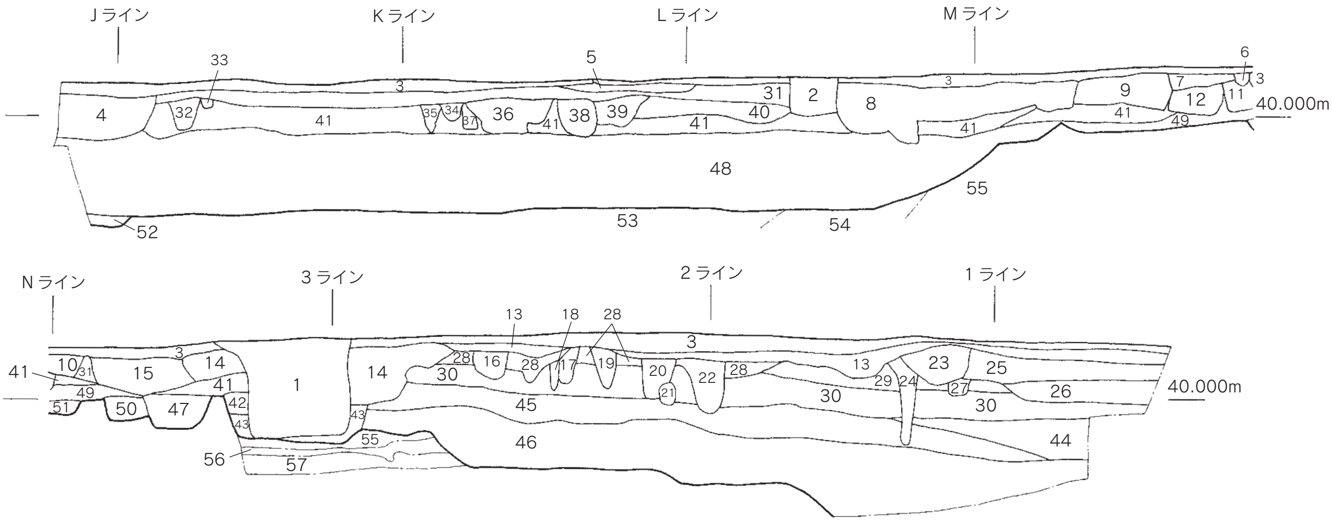



1. コンクリート入り灰色土と灰白粗砂の混土
2. 灰白色粗砂
3. S-201暗灰色砂質土
4. 黒灰色土
5. 灰色土
6. 灰色粗砂
7. 灰色土と黄褐色粗砂の混土
8. 灰褐色砂
9. 黒褐色砂質土
10. 灰色土
11. S-204
12. 黒灰色粗砂
13. 黒灰色粗砂
14. 黄褐色粗砂
15. 黒灰色土
16. 黒茶色土
17. 黒褐色粘土
18. 淡灰色粘土
19. 黒灰色粗砂
20. 灰白色シルト(地山)
21. 黄橙色粘土(地山)

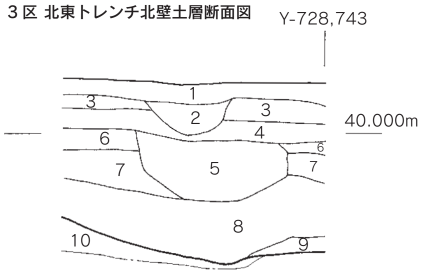
1. 黄褐色粗砂
2. 黒灰色土
3. 224SX209
4. 黒褐色粘土
5. 淡灰色粘土
6. 黒灰色粗砂
7. 灰白色シルト(地山)
8. 黄橙色粘土(地山)


fig.32 第224次調査 1・2区土層図(1/80)

**3区 西壁土層断面図**

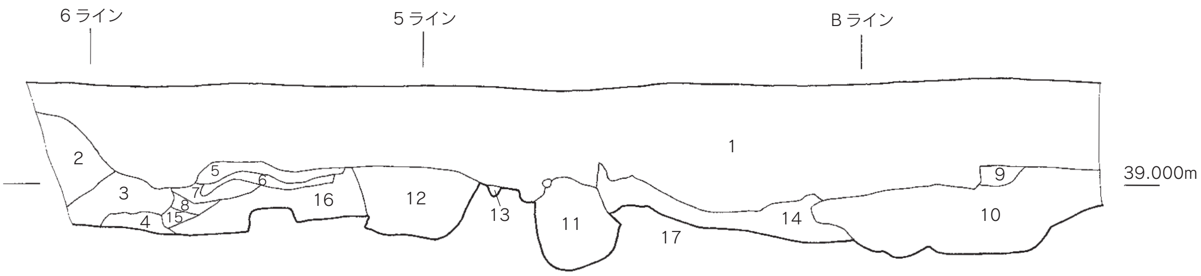



**3区 北東トレンチ北壁土層断面図**



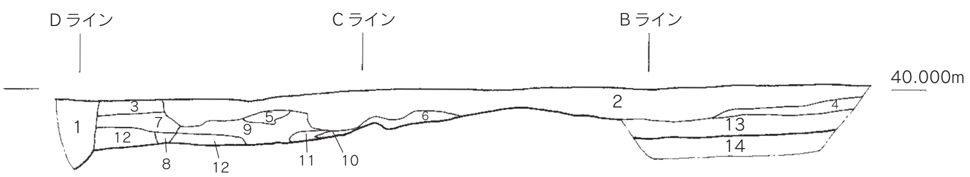

1. 撹乱
2. 瓦入り橙色土ブロック
3. バラス
4. 撹乱
5. 橙色土ブロック
6. 灰色砂
7. 灰色土
8. 砂入り灰色土
9. 灰色シルト
10. 茶灰粘質土
11. 黒灰色砂質土
12. 炭入り茶色土
13. 黄色粗砂
14. 炭・赤褐色砂入り灰色土
15. 炭・赤色土ブロック入り茶色土
16. 茶褐色土
17. 炭・赤褐色砂入り灰色土
18. 淡茶色土
19. 炭入り茶褐色土
20. 炭入り黄灰色土
21. 炭・赤褐色砂入り灰色土
22. 炭入り灰色土
23. コンクリート入り黒色土
24. 炭・赤褐色砂入り茶色土
25. 橙色土ブロック入り灰色土
26. 橙色土ブロック入り黒色土
27. 茶灰色土
28. 茶黒色土
29. 淡茶灰色土
30. 黄色粒入り灰色土
31. 灰色土
32. 炭入り灰色シルト
33. 黄色土ブロック入り灰色土
34. 灰色シルト
35. 炭入り灰色土
36. 砂入り灰色シルト
37. 炭入り灰色土
38. 炭入り灰色土
39. 橙色土入り茶灰色土
40. 黄色土ブロック入り茶灰色土
41. 茶灰色土
42. 灰色粗砂
43. 炭入り灰色土
44. 淡茶灰色土
45. 黄色粒入り茶灰色土
46. 224SD310（224SF010東側溝・交差点付近）
47. 茶白色粘質土入り灰色土
48. 224SD050（224SD050）
49. 暗灰色土
50. 灰色砂
51. 灰色砂
52. 224SD344
53. 褐色粗砂（地山）
54. 黄色シルト（地山）
55. 黄色粗砂（地山）
56. 淡茶灰色粘土（地山）
57. 灰色砂（地山）

**4区 北・東壁土層断面図**




1. コンクリート入り灰色土
2. 灰色砂
3. 淡灰色砂
4. 灰色粗砂
5. 黄色土入り茶褐色粘質土
6. 茶灰色砂
7. 黄色土入り黒褐色粘質土
8. 灰褐色砂
9. S-413
10. 224SD404
11. 224SD404
12. 224SD403
13. 暗褐色土
14. 明茶褐色土
15. 茶褐色土
16. 暗灰粗砂
17. 茶褐色砂

**5区 東壁土層断面図**




1. 撹乱
2. コンクリート入り灰色土
3. 真砂土
4. 黒褐色粘土
5. 灰色土
6. 灰色土入り黒褐色粘土
7. 灰色土入り橙色土
8. 土管入り灰色土
9. 橙色土
10. 黄褐色粘土
11. 灰色土入り黒褐色粘土
12. 黄褐色粗砂
13. 黒褐色粗砂
14. 黄褐色粗砂

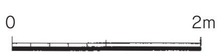



fig.33　第224次調査　3～5区土層図（1/80）


fig.34　大宰府条坊跡第 224 次調査　1 区 1 面全体遺構図（1/100）


fig.35　大宰府条坊跡第 224 次調査　1 区 2 面全体遺構図（1/100）

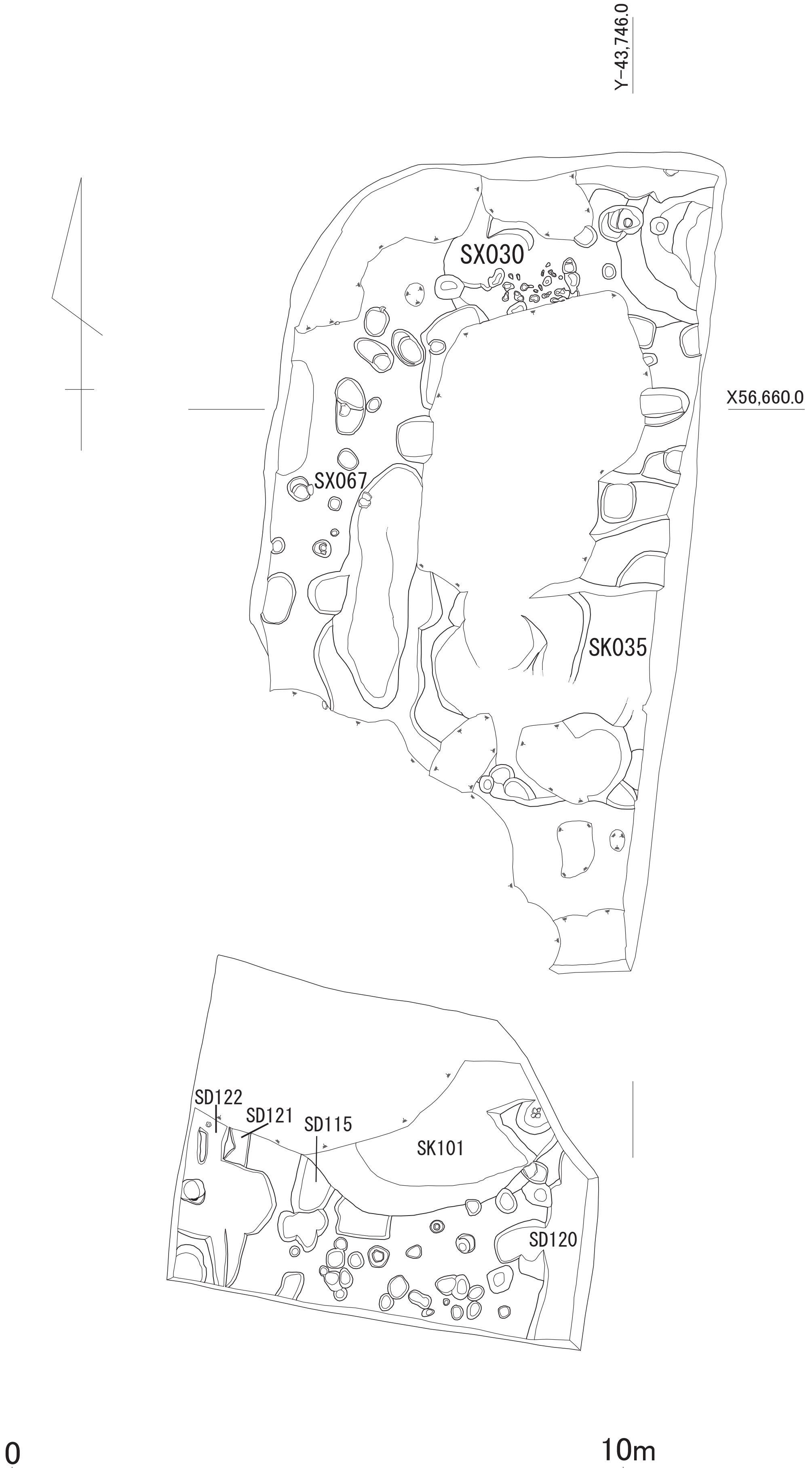



fig.36　大宰府条坊跡第 224 次調査　1 区 3 面全体遺構図（1/100）

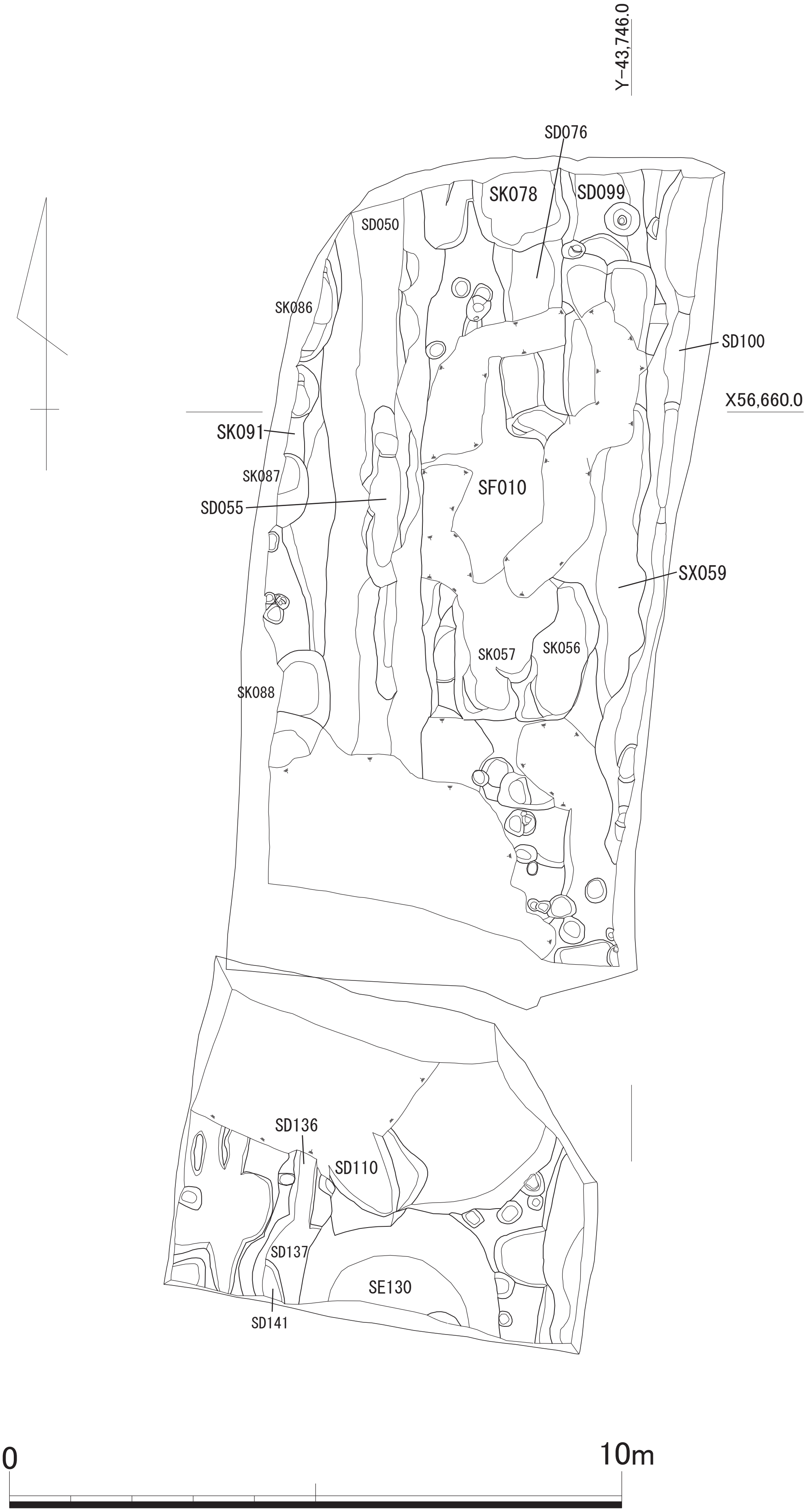



fig.37　大宰府条坊跡第 224 次調査　1 区 4 面全体遺構図（1/100）

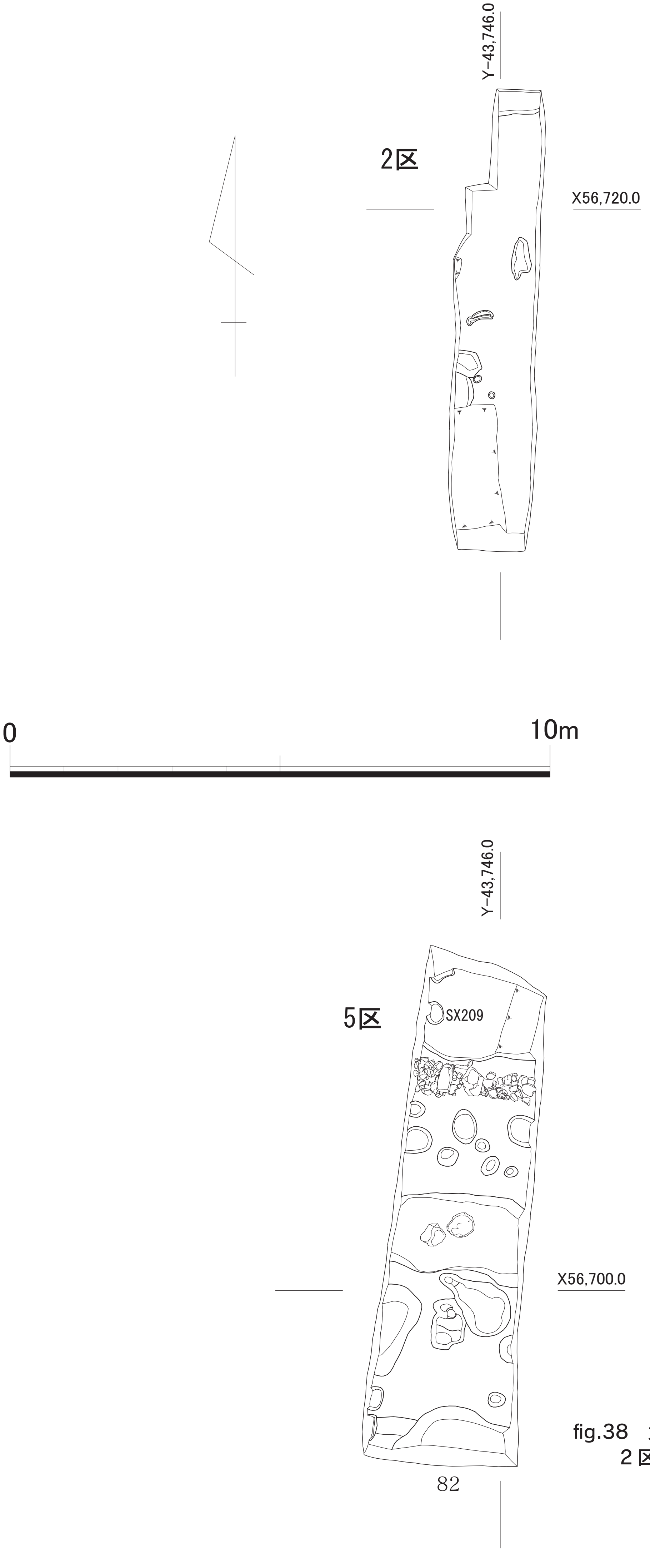



fig.38　大宰府条坊跡第 224 次調査
2 区全体遺構図（1/100）

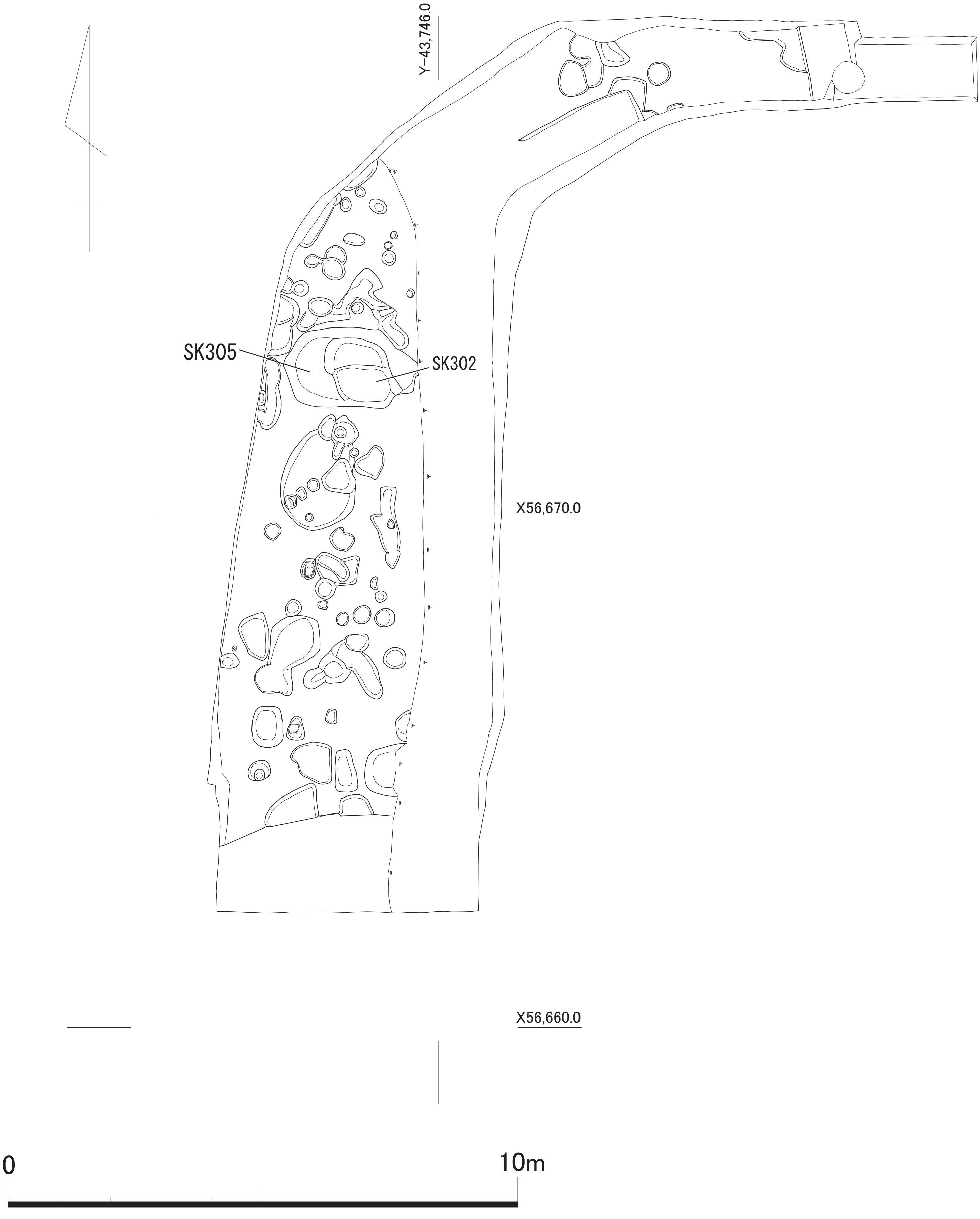



fig.39　大宰府条坊跡第 224 次調査　3 区 1 面全体遺構図（1/100）


fig.40　大宰府条坊跡第 224 次調査　3 区 2 面全体遺構図（1/100）

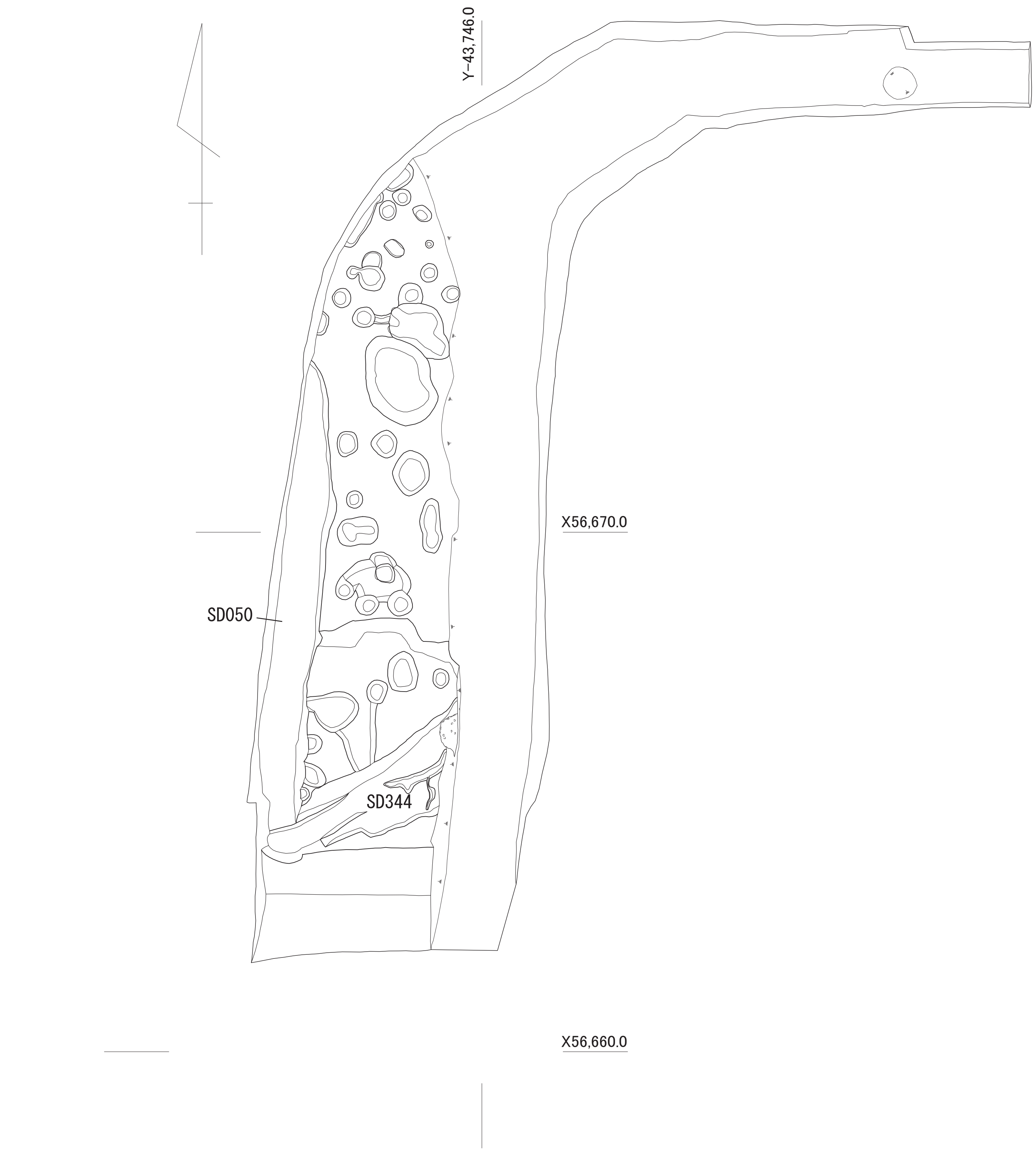



fig.41　大宰府条坊跡第 224 次調査　3 区 3 面全体遺構図（1/100）

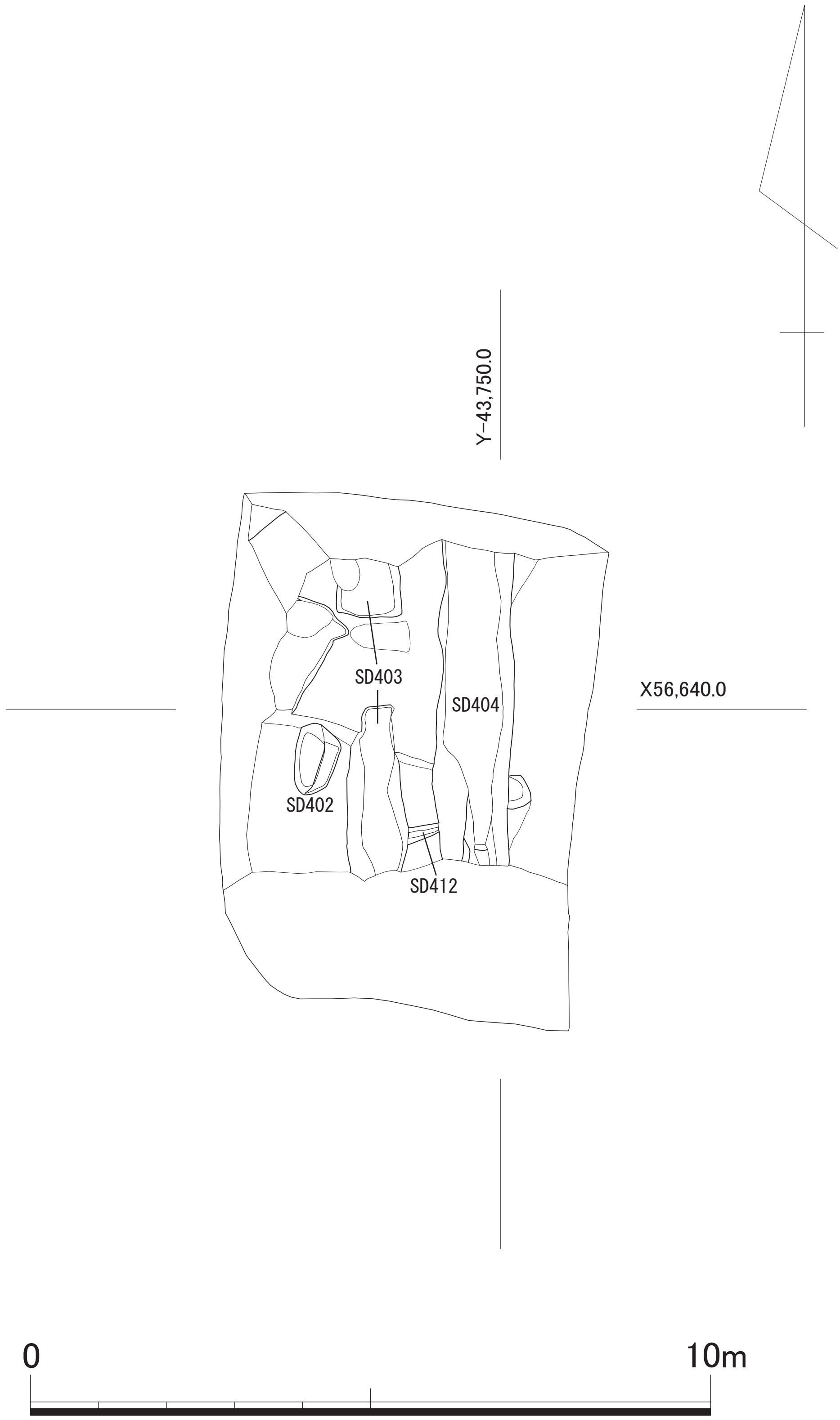



fig.42　大宰府条坊跡第 224 次調査　4 区全体遺構図（1/100）

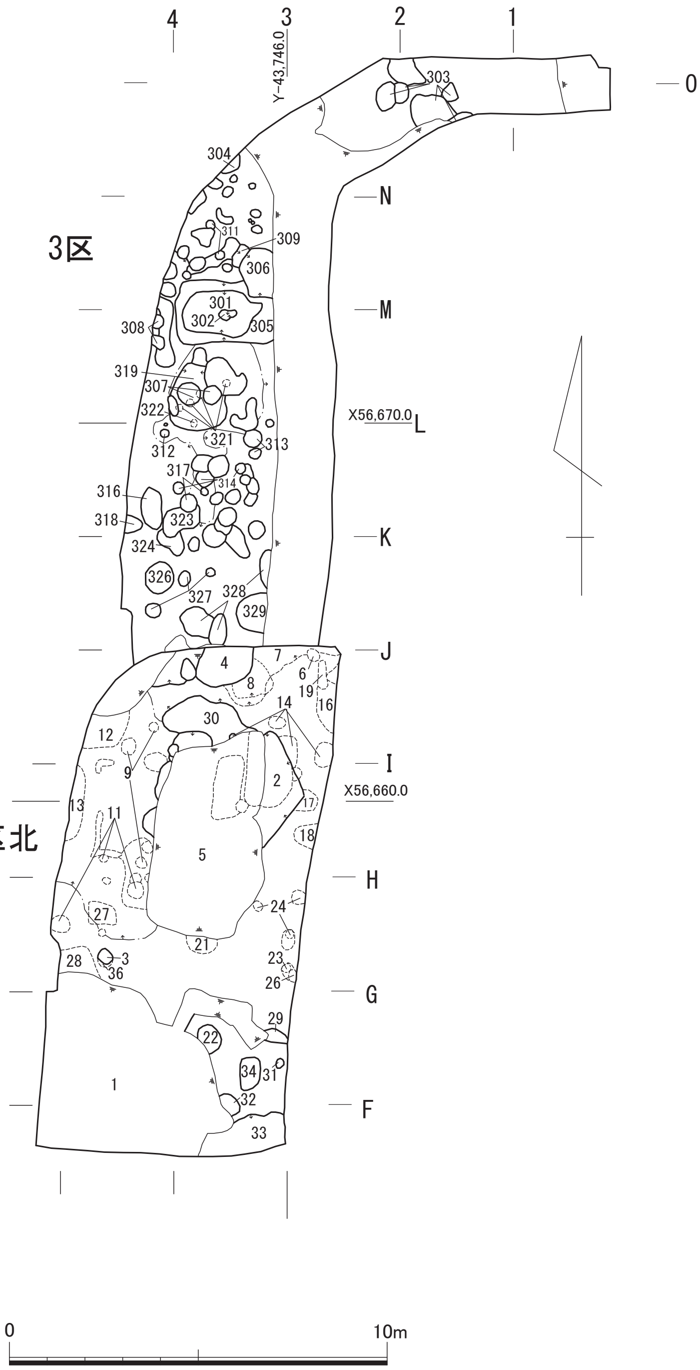



fig.43　大宰府条坊跡第 224 次調査　1 区 1 面、3 区 1 面遺構配置図（1/200）

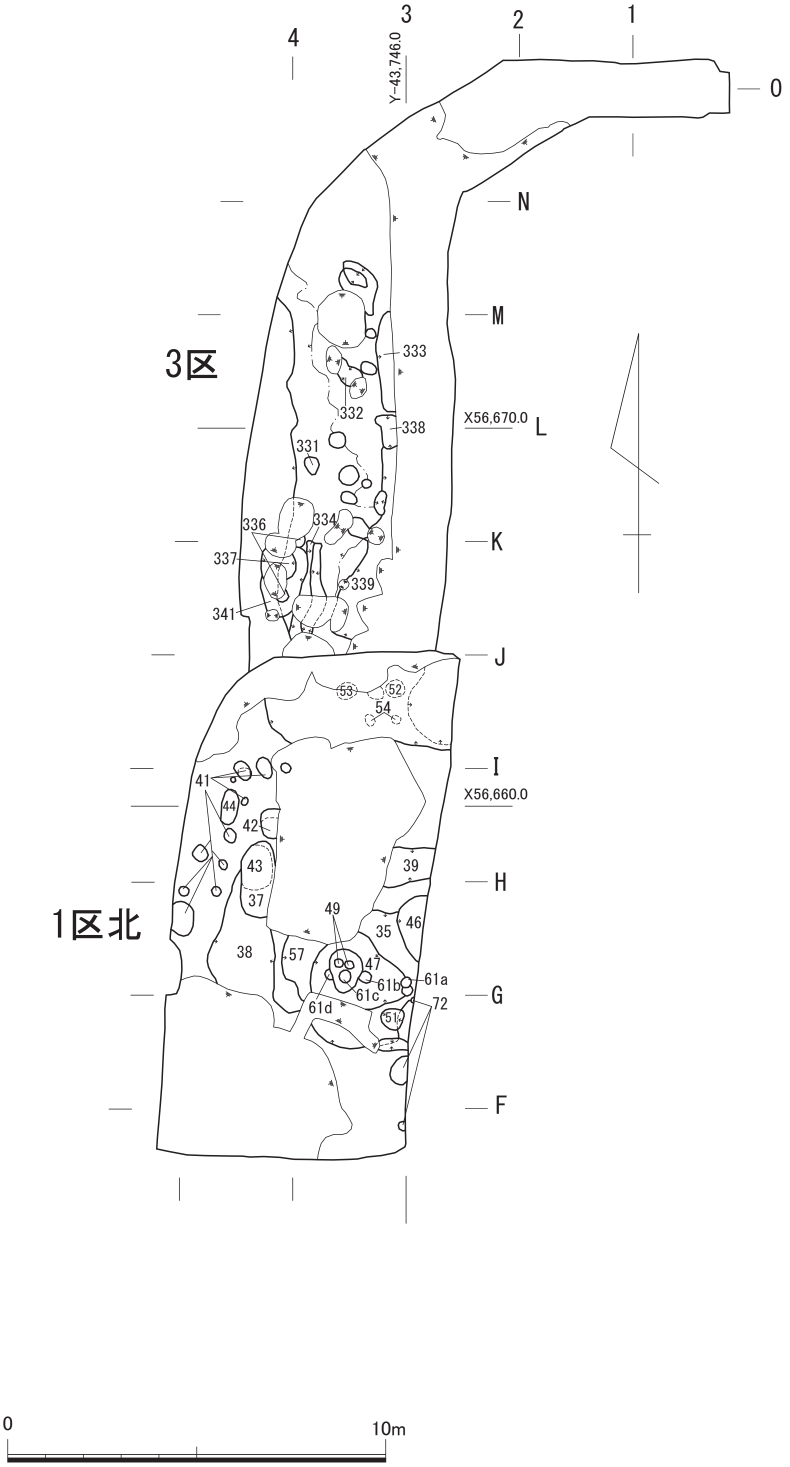



fig.44　大宰府条坊跡第 224 次調査　1 区 2 面、3 区 2 面遺構配置図（1/200）

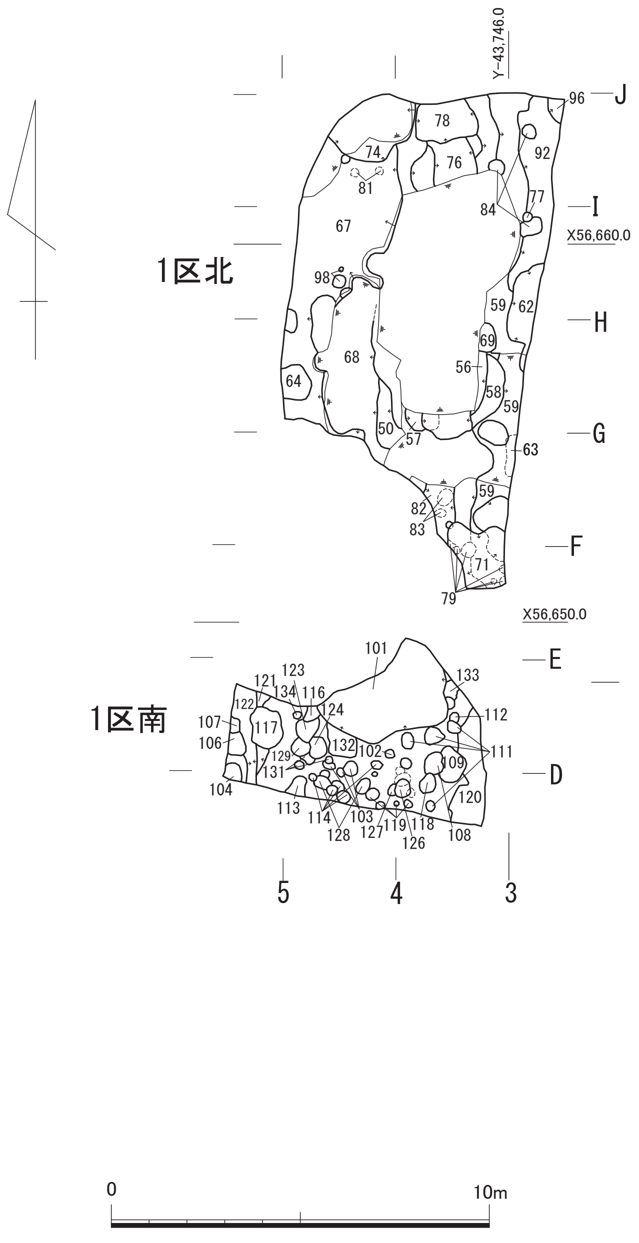



fig.45　大宰府条坊跡第 224 次調査　1 区 3 面遺構配置図（1/200）

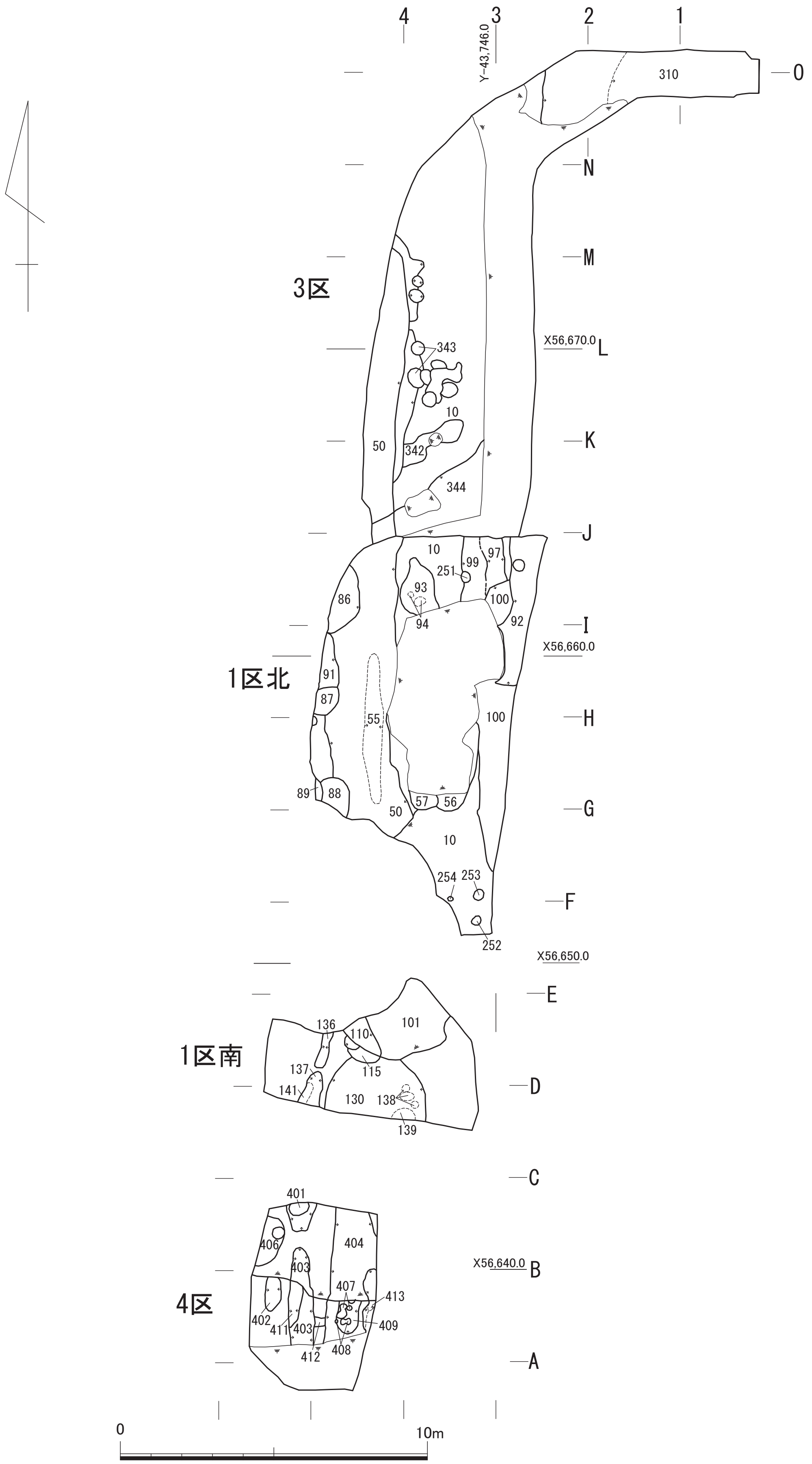



fig.46　大宰府条坊跡第 224 次調査　1 区 4 面、3 区 3 面、4 区遺構配置図（1/200）

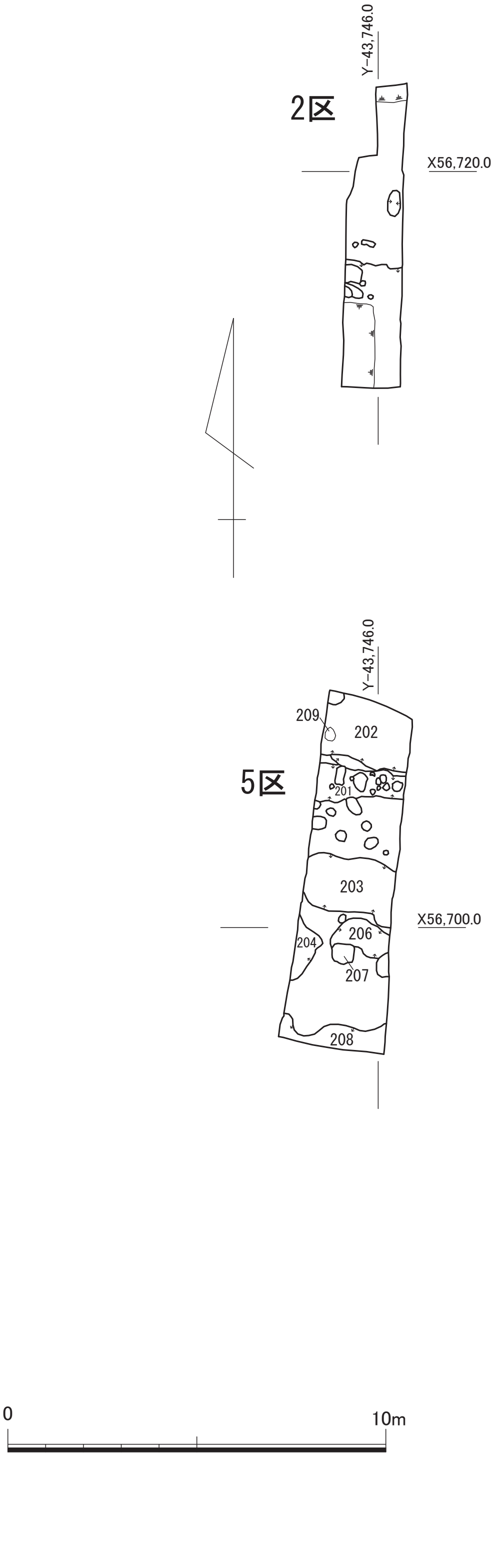



fig.47　大宰府条坊跡第 224 次調査　2 区、5 区遺構配置図（1/200）

る４区は現況地表面から0.9～1.3ｍ下で遺構を検出した。4区は１区と比べ、大きく削平を受けており、表土として灰色土の任意土層を設定した。検出された遺構は２本の溝のみである。1・3・4区では調査区全面にわたって、南北の道路遺構に伴う側溝が検出された。全面で確認されたのは西側溝で、側溝内からは大量の骨が出土した。出土した骨の大半は３区に集中しており、1・4区では散見される程度の出土状況であった。

（柳・山村）

### 3．遺構

溝

1区

224SD050（fig.48 ～ 54、CD 写真 113 ～ 127、pla.17・18）

1・3区にわたって、検出した南北溝である。4区で検出したSD404は位置関係や土層からSD050の延長部分と考えられる。1区において、溝の東で検出されたSD100と平行する位置関係から大宰府条坊（条坊井上案）左郭12坊路に該当する南北道路SF010に伴う西側溝と推定される。溝は長さ19ｍ、幅1.7ｍ、深さ0.5～0.7ｍを測る。溝は北から南へと深くなっており、最終的に調査区南側の藍染川につながっていたと推定される。北側は平面形状からすれば溝が途切れているように見える。条坊井上案ではこの北の数メートルの地点が4条12坊の交差点と想定されており、その手前で本溝が西に折れるために溝が途切れたような形となっているのかも知れない。溝の土層は1区と3区とで取上げ土色が異なるが、その対応については1区I4では上層から暗灰土（弱粘質）、黒灰土の順で、H4付近では暗灰土、灰色土、淡灰色土、淡灰色砂、SD055の順で、3区のK3付近では茶色土、黒灰粘質土、暗灰粘質土、茶灰砂質土の順であった。12世紀前半まで条坊側溝として機能していたと考えられる。土器は完形率の高い土師器供膳具と中国製白磁椀類などが各層で出土している。溝からは1・3区から多数の動物遺体（以後骨と記載）が出土した。骨は1区では黒灰色土層と灰色土層で散見される程度であった。3区では茶色土層では骨は散見される程度で出土していたが、3区黒灰粘質土層で大量の骨が確認され始め、下層の茶灰砂質土まで骨が出土した。1区黒灰色土では3区に近接する北側からウマの頭蓋骨が出土している。1区黒灰色土に対応する3区黒灰粘質土は白色の砂粒を若干含む粘質の強い土で、土層観察でも砂や礫などを含む流水の痕跡は確認できなかった。ここでは溝の北側からウマ一体分（fig.52、原図1）が四肢骨と寛骨の出土位置に乱れがあるもののほぼ関節状況を保ったまま出土している。その南側ではともに関節状況のないバラバラなヒトとウマが重なり合うようにして出土している（fig.52、原図2・3）。ヒトは頭蓋骨①～③の3点、下顎骨4点が出土し、四肢骨も複数出土していた（fig.53）。ヒトと重なり合って出土した獣骨はウマのみである。このウマは関節状況を保っておらず、北側で出土したウマ一体分とは異なる出土状況であった。さらに1区に近接する南側ではヒトの頭蓋骨④が出土している（fig.52、原図4）。この土層ではヒトとウマのみが出土している。次に1区灰色土ではウマの頭蓋骨が横向きの状態で出土した。採集した骨は頭蓋骨のみだが、調査時に骨周辺に黄色の塊が確認されていた。土層の一部として掘り下げているが、体部分の骨であった可能性がある。1区灰色土に対応する3区暗灰粘質土はこぶし大の礫を含む粘質の強い土で、ここでも流水の痕跡は確認できなかった。溝全体にわたって、土師器や陶磁器などの遺物とともにイヌ・ウマ・ニホンジカ・ウシが出土している（出土点数の多い順に表記しており、以後同記）。調査区で出土したイヌの大半はこの層に集中している。イヌは特に出土部位に極端な偏りはみられない。椎骨、肋骨など一部関節状況を保ったまま出土した状況が確認された（fig.52、原図7-45・55）。3区茶灰砂質土は黄灰粗砂（地山）が混じった溝の最下層である。1区暗灰色土では骨は出土していない。溝の北側では部位不明

人骨と獣骨が点々と出土している。溝の中央付近では四肢骨だけが関節状況を保ったままのウマが出土している（fig.52、原図 5-9 ～ 13）。さらに南側ではほぼ一体分のウマが軟部組織がやや腐朽しつつも関節状況が確認できる状況で出土している（fig.52、原図 6）。以上の出土状況から SD050 では北側の 3 区で溝の上下層から大量の骨が出土しているが、南側の 1 区では散見される程度しか出土していないことが分かった。種別ではウマがもっとも多く、イヌ、ヒト、イノシシ / ブタ、ニホンジカ、ウシの順に出土している。ただし、層によって出土種別に偏りがある。層中には流水のあった様相はなく、溜まった大半の水は流下するよりも地盤に吸収されたか、滞水して淀みとなって粘質土壌を形成している。溝としての埋没時期は出土遺物からは華南産白磁が卓越する大宰府陶磁器区分の C 期（11 世紀～ 12 世紀前半）が主体といえるが、土師器の法量や龍泉窯系青磁片が中層以下に包含されていることなどから大宰府編年 XIII 期（12c 中頃）以降に位置づけられる。

224SD055（fig.48・50、CD 写真 128）

1 区北調査区 G4 付近の SD050 の下面でほぼ同じ方位の帯状の状態で検出された。長さ 5m、幅 0.7m、深さ 0.3m を測る。地盤の砂が混じる淡灰色土で埋没している。SD050 の一部である可能性も否定できない。

224SD092（fig.55、CD 写真 129）

1 区北調査区北東隅の暗灰土上面で検出された南北のもので、SD100 の上に重複している。SD100 の埋没過程で出来た窪みの可能性もある。

224SD099（fig.55、CD 写真 130）

1 区北調査区の I3 付近で検出された SD100 に先行する可能性のある南北溝で、幅 0.8m ほどの小

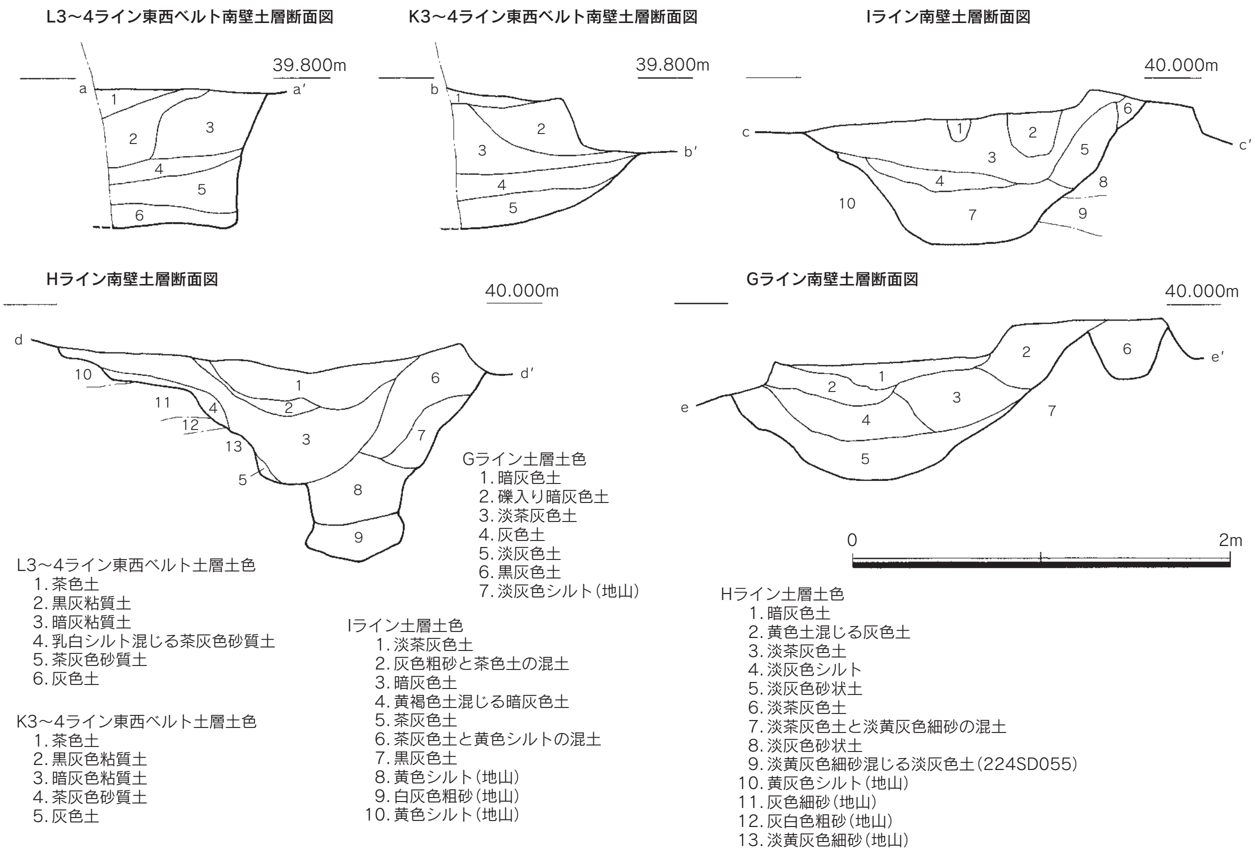



fig.48　224SD050 土層図（1/40）

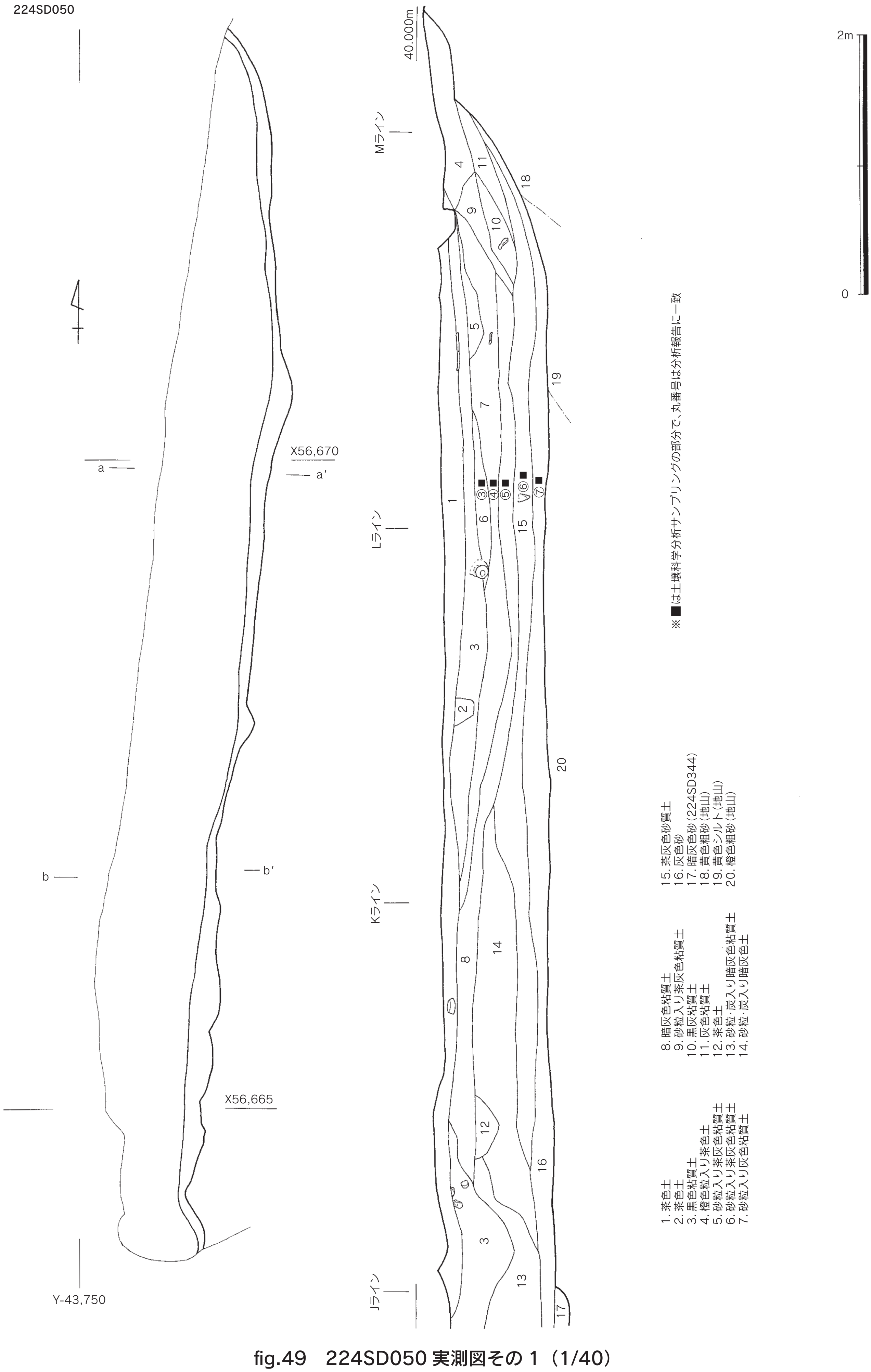



fig.49　224SD050 実測図その 1（1/40）

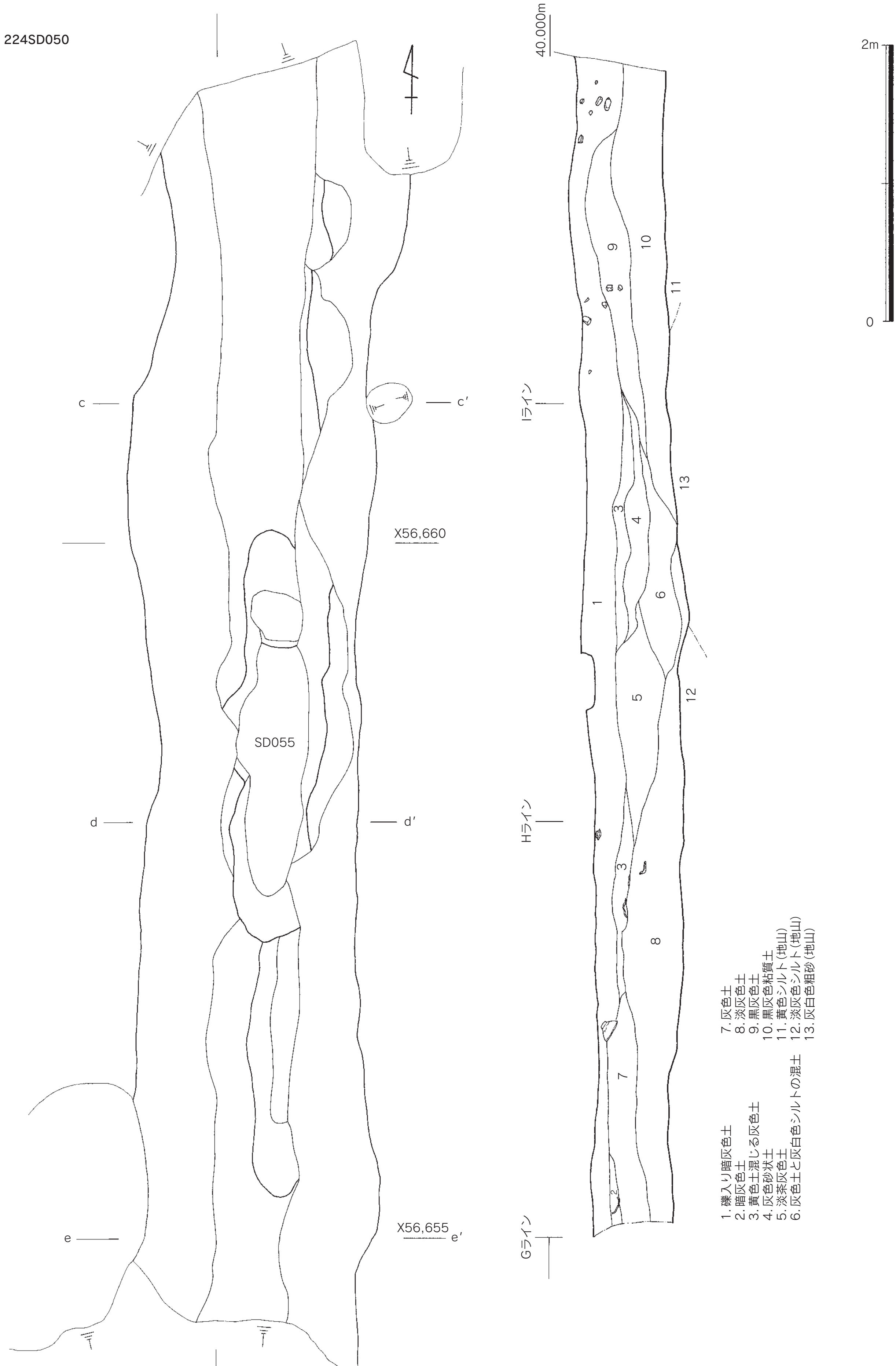



fig.50　224SD050 実測図その 2（1/40）

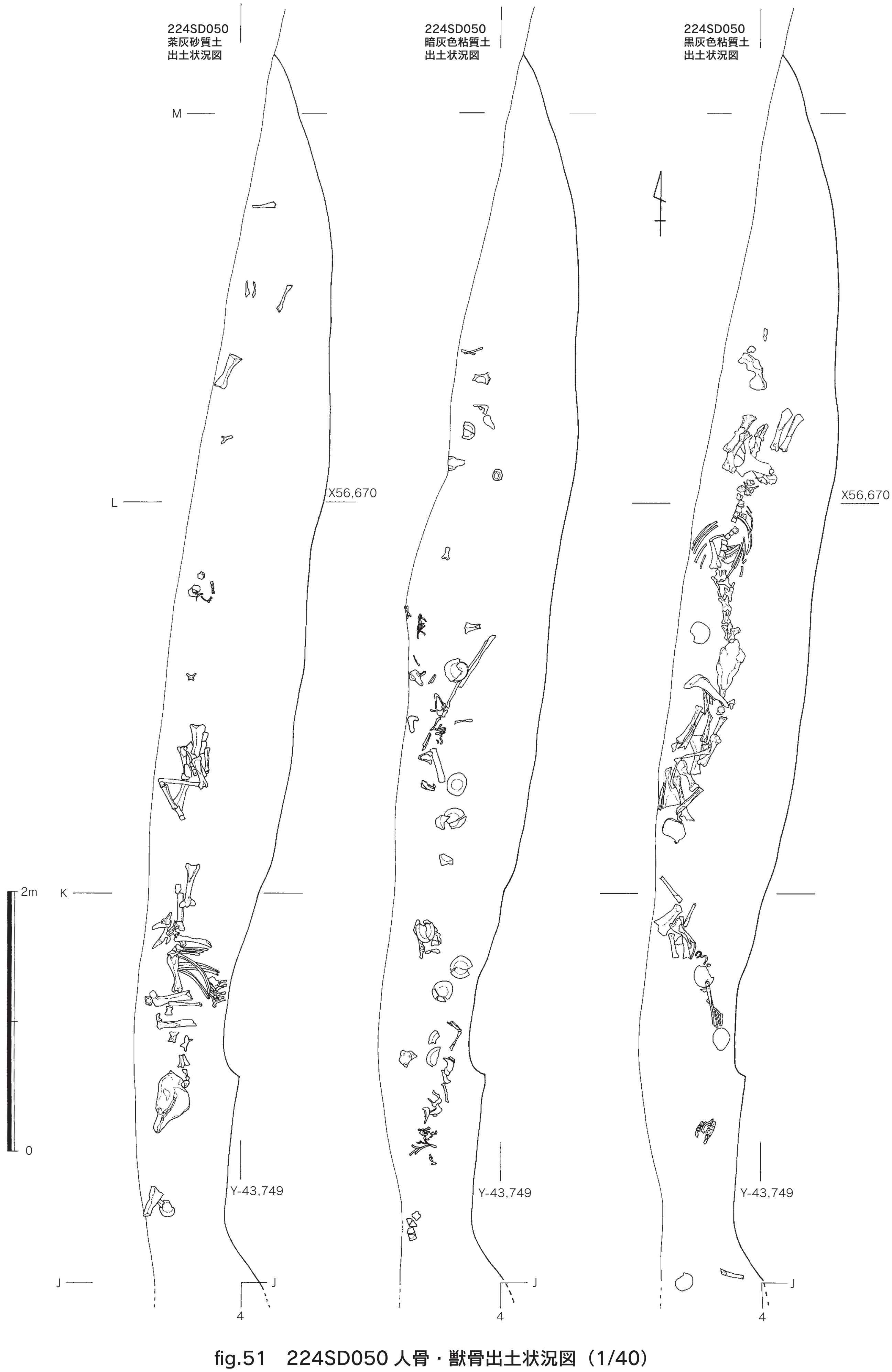



fig.51　224SD050 人骨・獣骨出土状況図（1/40）

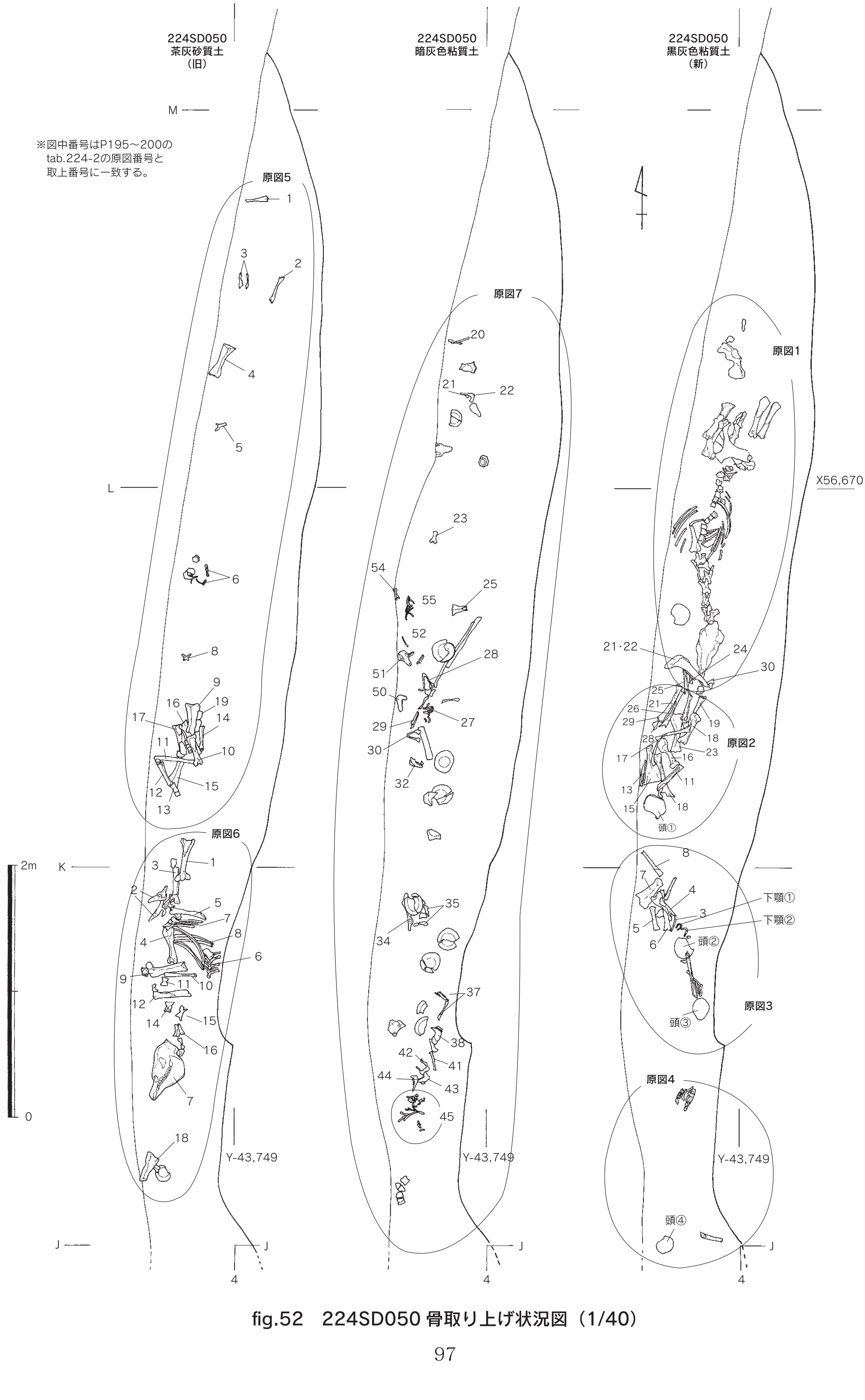



fig.52　224SD050 骨取り上げ状況図（1/40）

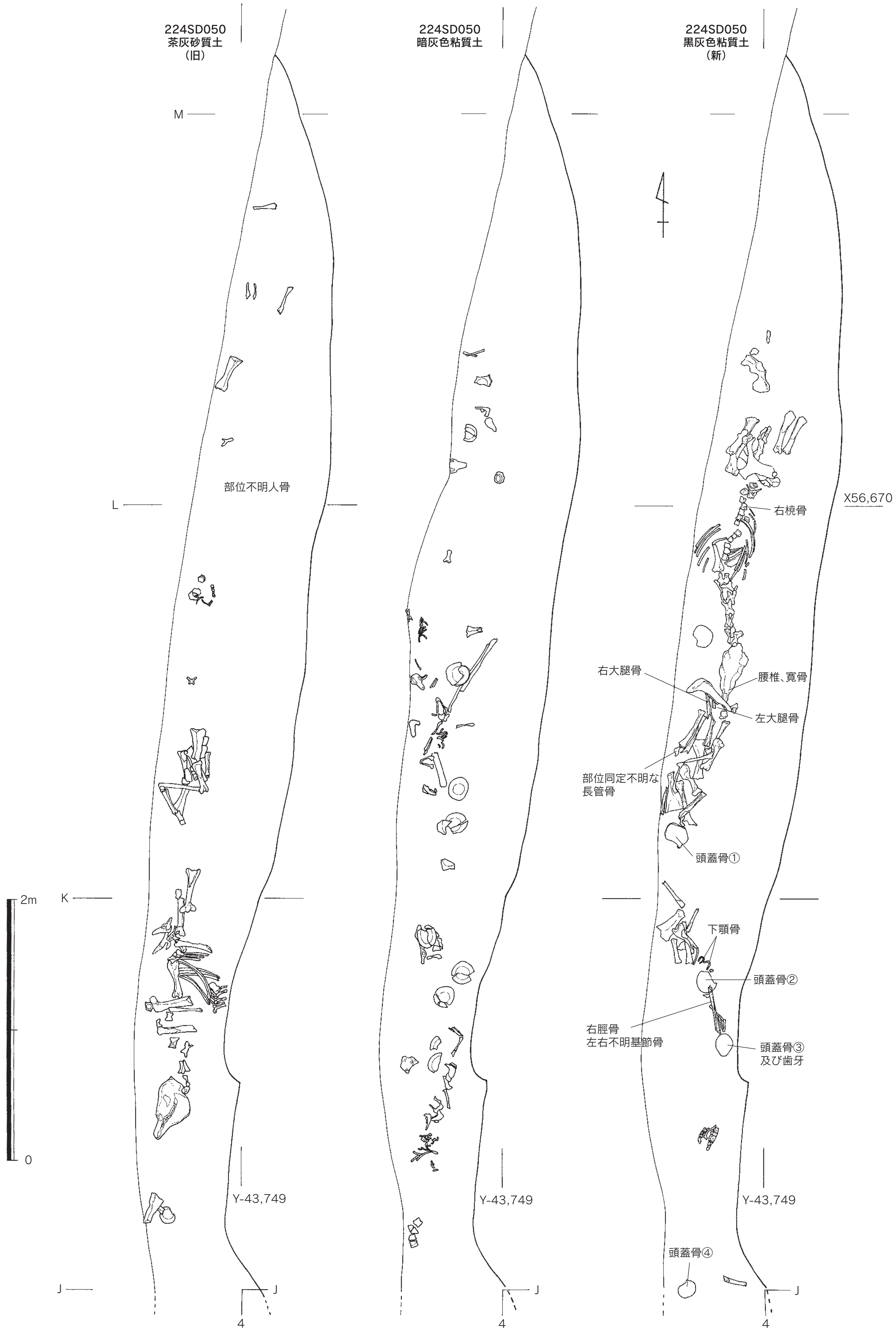



fig.53　224SD050 人骨出土状況図（1/40）


fig.54　224SD050 遺物出土状況図（1/40）

規模なものである。一部に 11 世紀代の遺物が混じているが、主体は 10 世紀代の遺物で占められる。１区中では切り合い関係上最も古い遺構の一つといえる。

224SD100（fig.55、CD 写真 131 ～ 133）

1 区北調査区の東側を南北に縦断する溝で、東側の立ち上がりは調査区外になる。長さ 11m 分が検出されたが、北の３区ではその延長が撹乱で失われていた。南北道路 SF010 に伴う東側溝と推定される。深さ 0.6 m を測る。J2 付近の層序は上から黒色土、黒灰土、暗灰土、茶灰色シルトである。H3 付近では最下層に灰褐色細砂がある。地盤は深さの半ば以下が砂質であり、機能時にはかなり早い間に肩が崩落したのではないかと推測される。そのため横断面の形状は Y 字を呈す。層中には流水のあった様相はない。黒灰土層からウマの動物遺体が出土した。出土遺物中に糸切りの坏が含まれるため、大宰府土器編年 XIII 期（12 世紀前半）以降の埋没である。

224SD115（fig.56、CD 写真 134）

1 区南で検出された南北溝である。近世の廃棄土坑 224SK101 と井戸 224SE130 に切られる位置関係にある。溝の深さは 0.70 m と深く、1 区北で検出された道路西側溝 224SD050 の続きの可能性がある。

224SD120（fig.56、CD 写真 135）

1 区南の調査区東壁付近で検出された南北溝である。検出された溝の長さは約 3 m を測る。深さは 0.16 ～ 0.36 m で、南から北に深くなる傾向を示す。溝の位置から、1 区北で検出された道路東側溝 224SD100 の続きの可能性がある。

224SD121（fig.56、CD 写真 136）

1 区南で検出した南北溝である。溝の西側は併行する SD122 によって切られており、北側は撹乱によって削平されている。溝の深さは 0.12 ～ 0.2 m を測り、茶褐色土単層である。

224SD122（fig.56、CD 写真 136）

1 区南で検出した南北溝である。溝の東側に併行する SD121 を切る位置関係にある。溝の深さは 0.08 ～ 0.2 m を測り、北から南に深くなる傾向を示す。224SD121、122 ともに 1 区南で検出された 224SD115 の西で検出されている。

224SD136,137（fig.57、CD 写真 137・138）

1 区南で検出した南北溝で、北側の SD136 は灰褐色土で埋没し、南側の SD137 は茶灰色土で埋まっている。不連続だが方向性や深さは近似しており一連の遺構と考えられる。1 区北側の SD050 の延長遺構である可能性がある。SD137 からはウマ、ウシ、イノシシ / ブタの動物遺体が出土している。

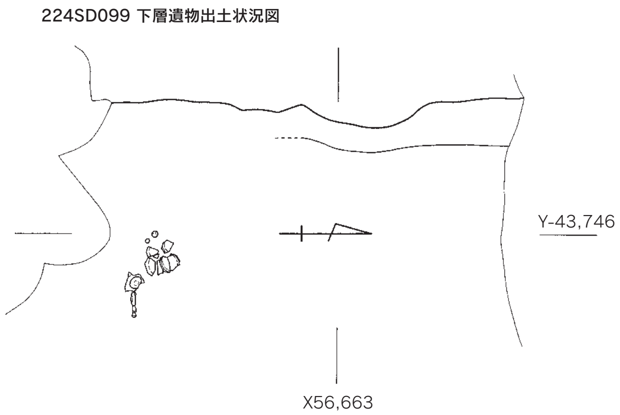
224SD141（fig.57、CD 写真 139）

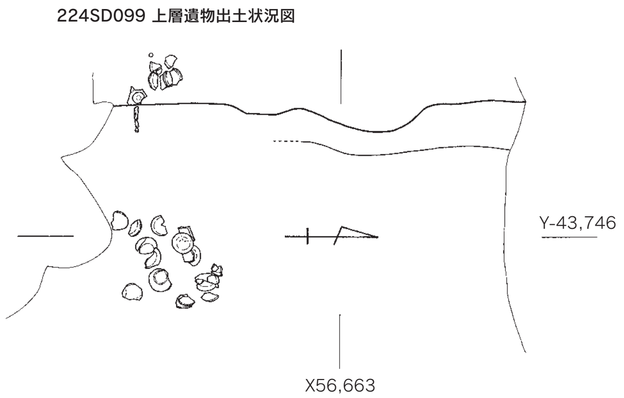
1 区南で検出した南北溝で、SD137 の下面で検出された。長さ 0.8m、深さは 0.2m、幅 0.3m ほどが検出され灰色粗砂で埋没する。掘り込みの横断面形状は箱形で、地山の砂が堆積して掘削後の早期に埋まったものと考えられる。SD136,137 と一連のものである可能性がある。

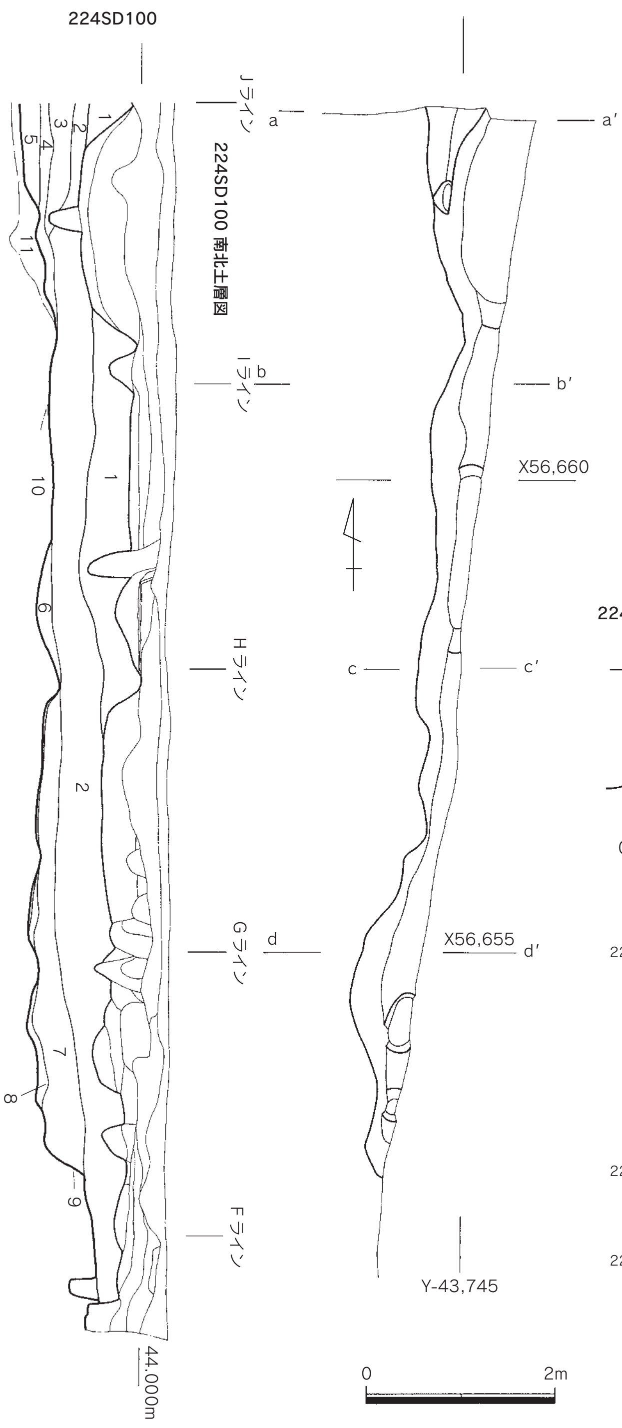
3 区

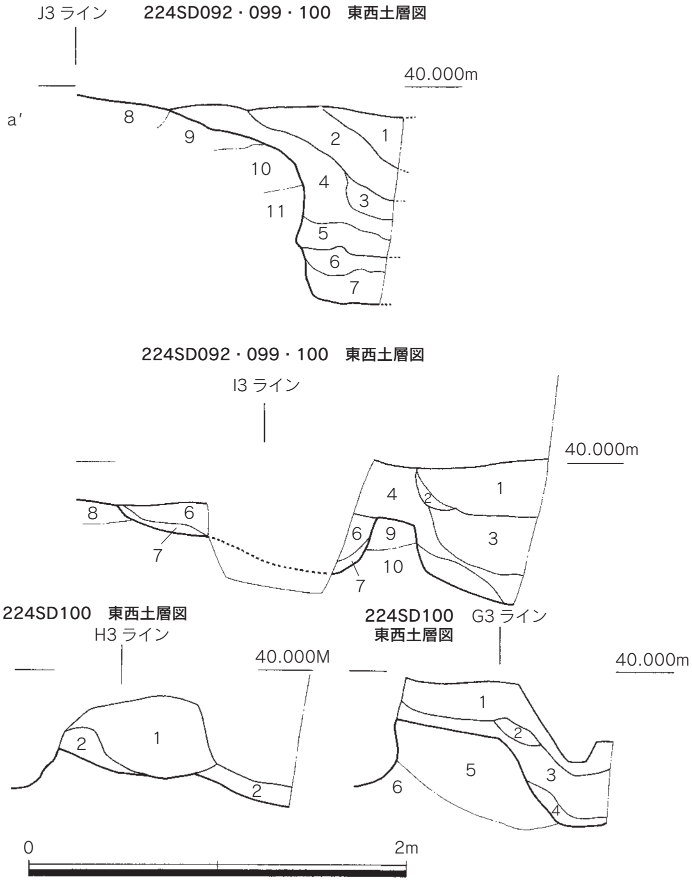
224SD310（fig.58、CD 写真 140・141）

調査区北端で検出された南北溝で長さ 2.5m、幅 2.2m 以上、深さ 0.5m を測る。東側は現代の撹乱があったため全体の様相はわかっていない。上から黒灰土、黄色土ブロック入り黒色土、黒色粘質土の順で検出された。溝は西の肩落ち部分が二段落ちの形状を呈し、両方の段が南から東に緩やかなカーブを描く形状をしている。構築された位置から 1 区 SD100 の延長で、溝の形状から推定 4 条 12 坊（井上案）の交差点の可能性がある。溝としての埋没時期は龍泉窯系青磁片が包含されていることなどから




224SD100　南北土層土色
1. 黒色土（224SD092）
2. ややシルト質の黒灰色土
3. 暗灰色土
4. 茶灰色シルト
5. 茶灰色シルト
6. 灰褐色粗砂
7. 灰褐色粗砂
8. 淡灰色粗砂
9. 淡茶灰色粗砂（地山）
10. 白色粗砂（地山）
11. 淡青灰色細砂（地山）

224SD092･099･100　J2ライン東西土層土色
1. 黒色土（224SD092）
2. 黒灰色土（224SD100黒灰土）
3. 茶色気味の暗灰色土（224SD100暗灰土）
4. 黒味の強い暗灰色土（224SD100暗灰土）
5. 白色粗砂入り暗灰色土（224SD100暗灰土）
6. 暗灰色シルト入り茶灰色シルト（224SD105茶灰シルト）
7. 淡青灰色細砂と淡茶灰シルトの混土（224SD105茶灰シルト）
8. 224SD099
9. 淡褐色粗砂（地山）
10. 黄褐色粘土（地山）
11. 淡青白色細砂（地山）

224SD100　H3ライン東西土層土色
1. 黒色土
2. 灰褐色細砂

224SD100　G3ライン東西土層土色
1. 茶色気味の黒灰色土
2. 黒灰色土（224SK059）
3. 白灰色細砂混じる黒灰色土
4. 灰褐色細砂
5. 乳灰色シルト（地山）
6. 白色細砂（地山）

224SD092･099･100　I3ライン東西土層土色
1. 黒色土（224SD092）
2. 灰茶色土（224SD092）
3. 茶色気味の黒灰色土（224SD100黒灰土）
4. 暗灰色弱粘質土（224SD100黒灰土）
5. 淡茶色細砂（224SD100黒灰土）
6. 暗灰色土（224SD099）
7. 細砂混じる暗灰色土（224SD099）
8. 黄褐色シルト（地山）
9. 黄色粘土（地山）
10. 淡青灰色細砂（地山）

fig.55　第 224 次調査　溝実測図その 1（1/40、1/80）

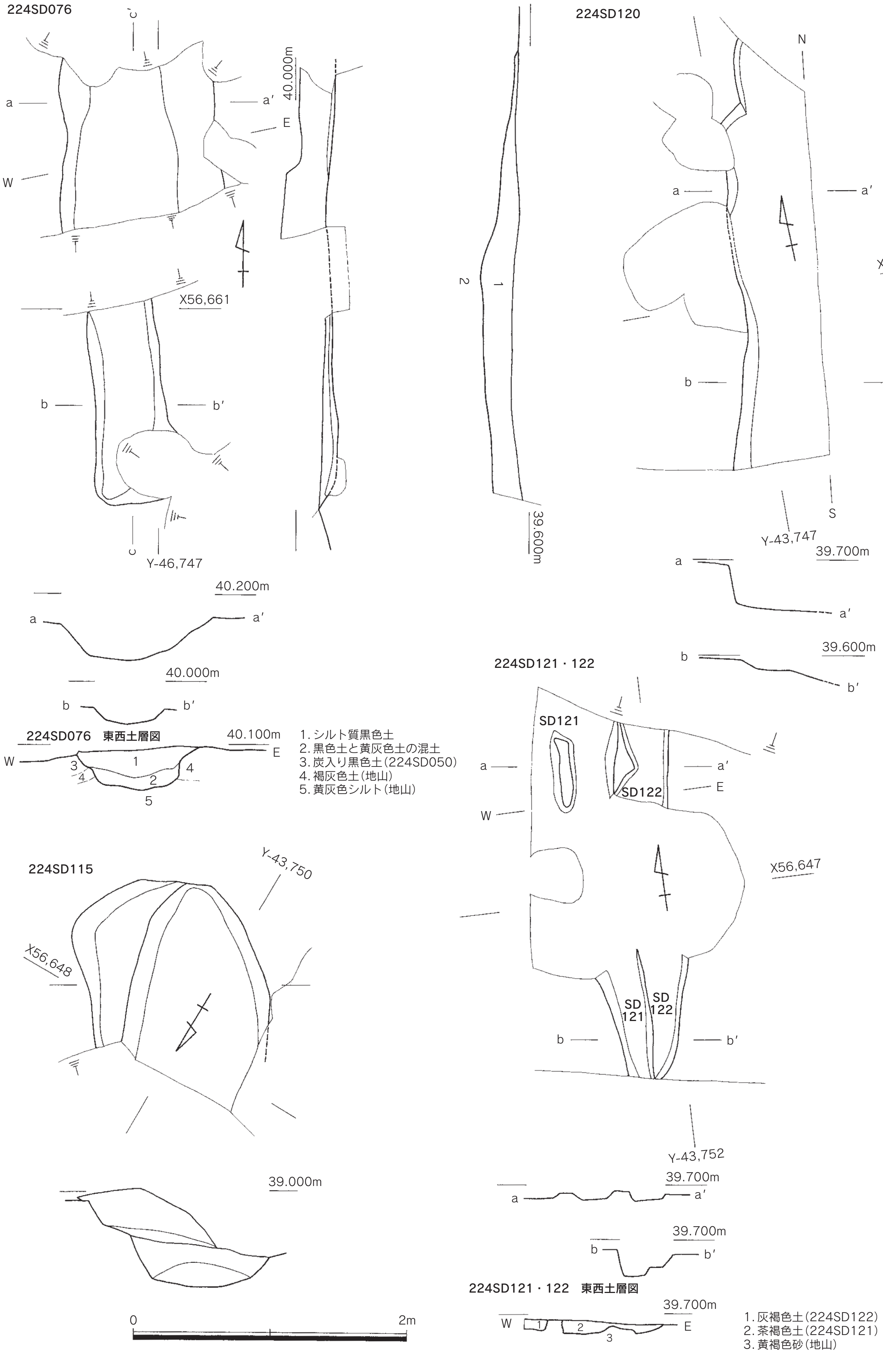



fig.56　第 224 次調査　溝実測図その 2（1/40）

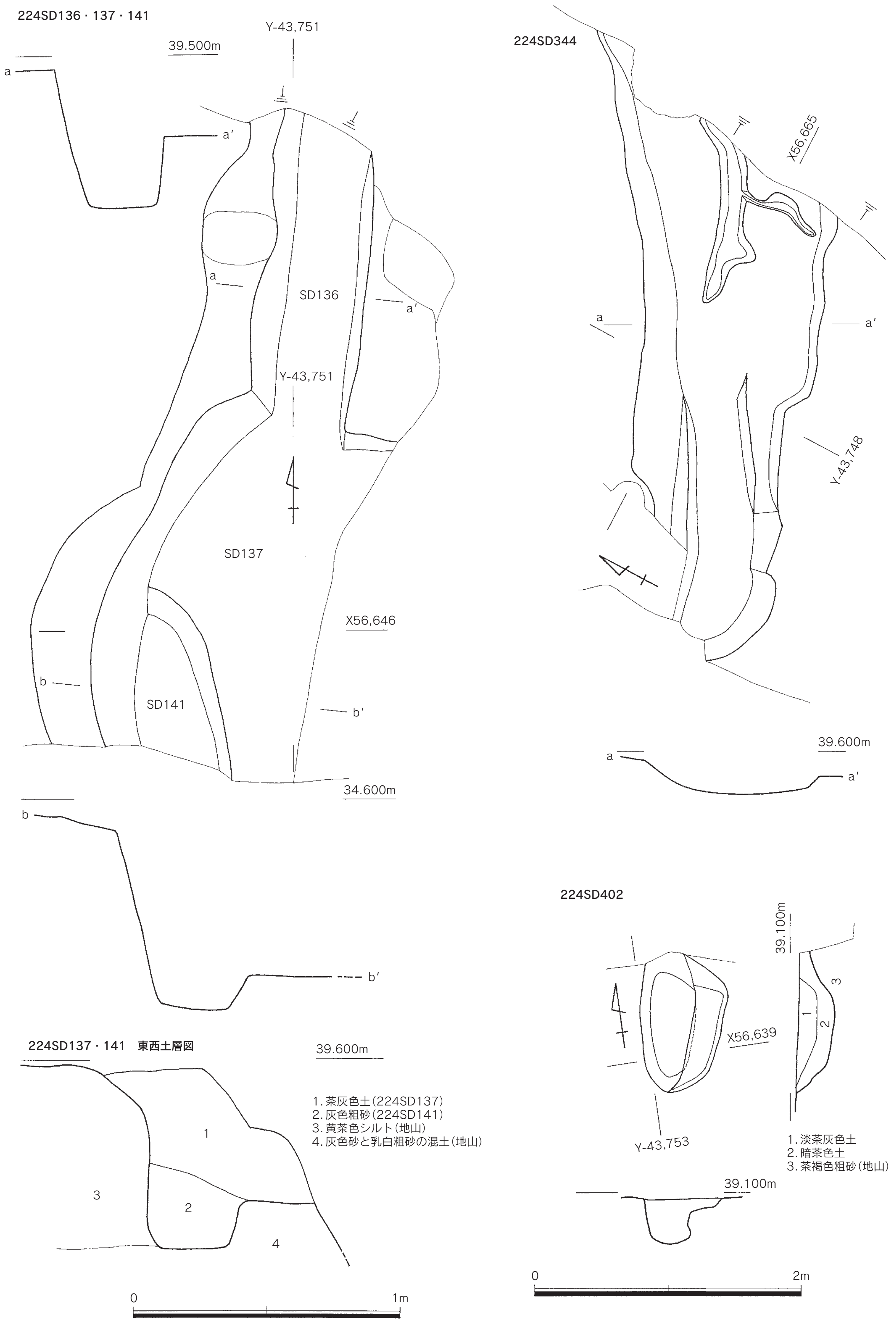



fig.57　第 224 次調査　溝実測図その 3（1/20・1/40）

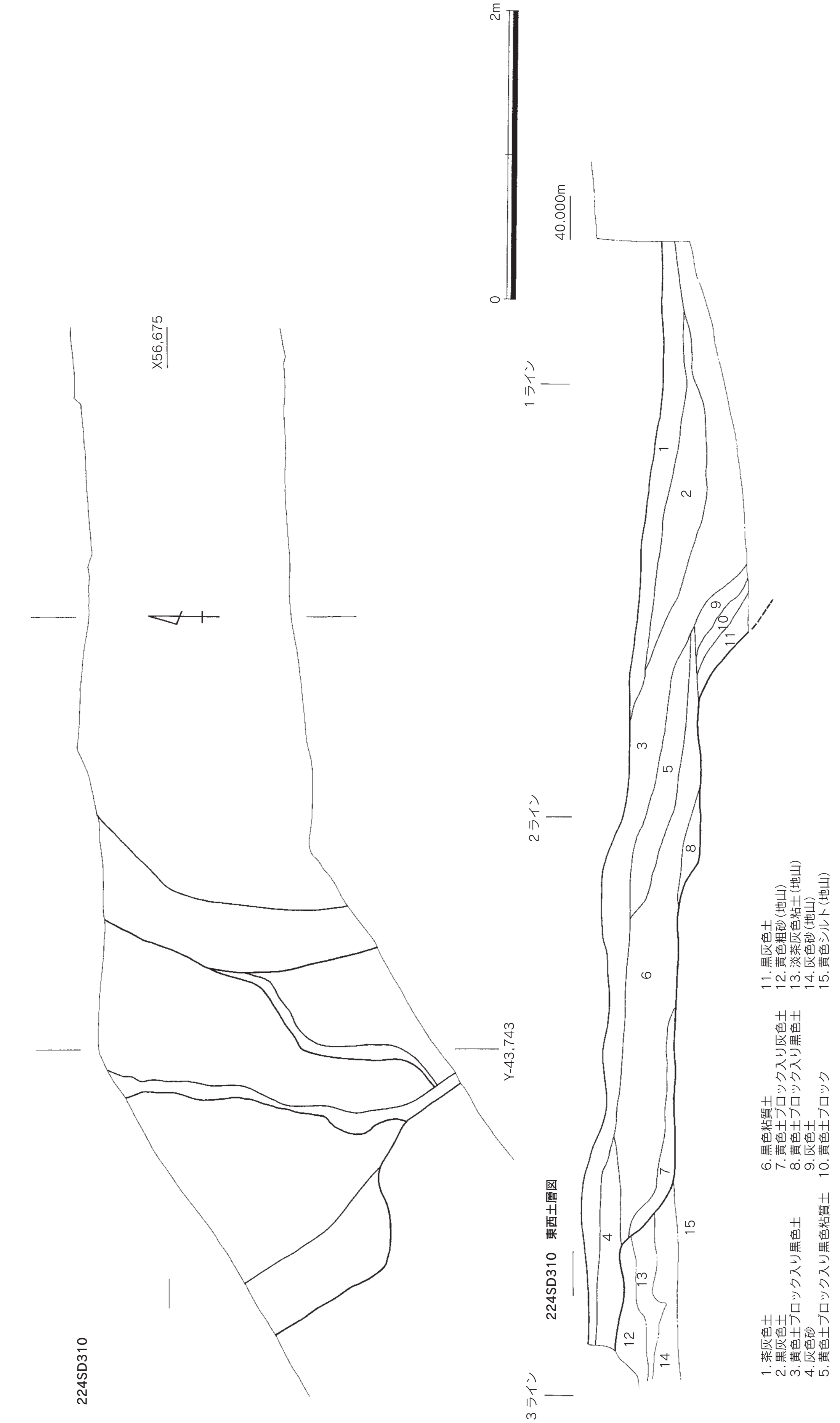



fig.58　第 224 次調査　溝実測図その 4（1/40）

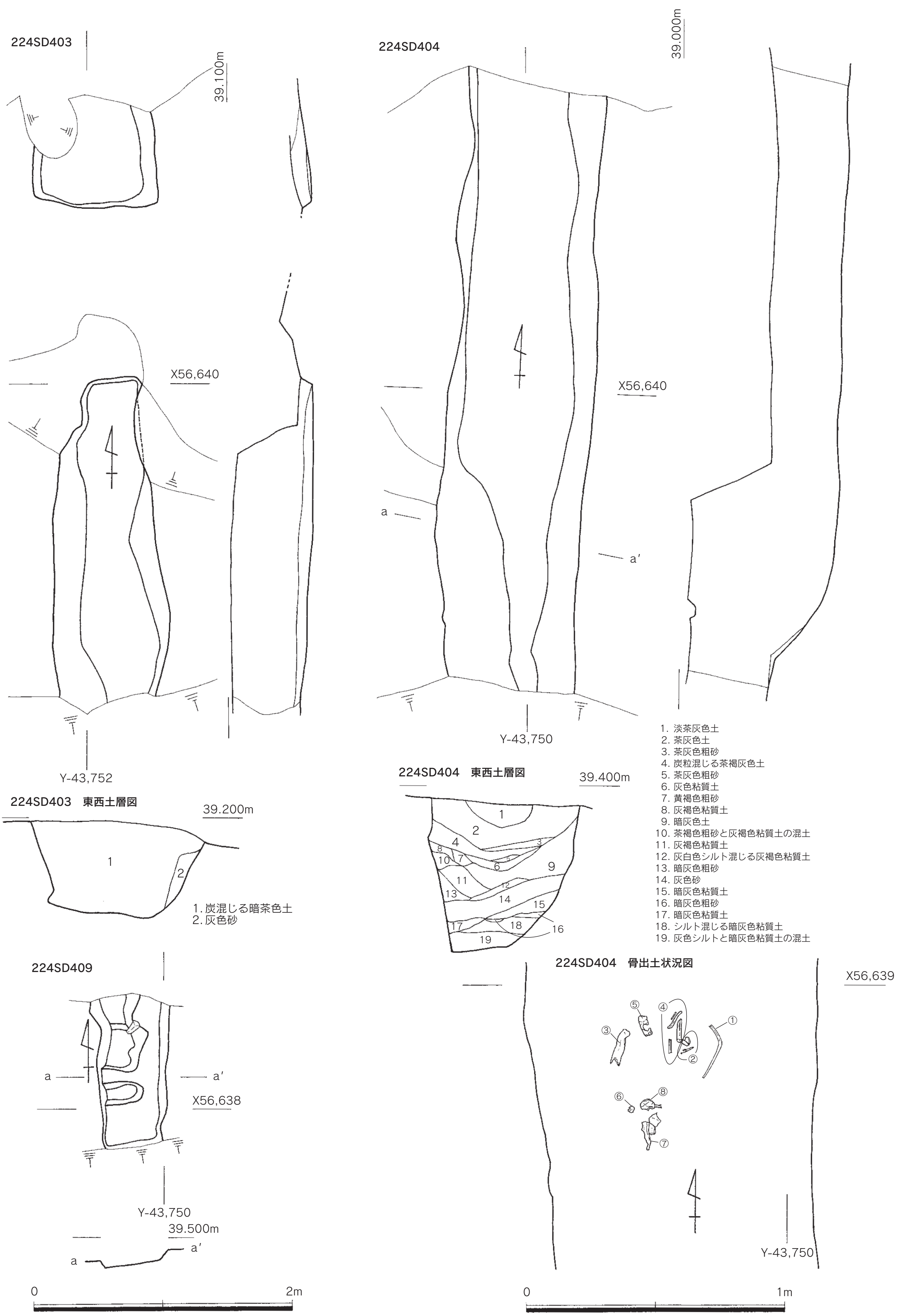
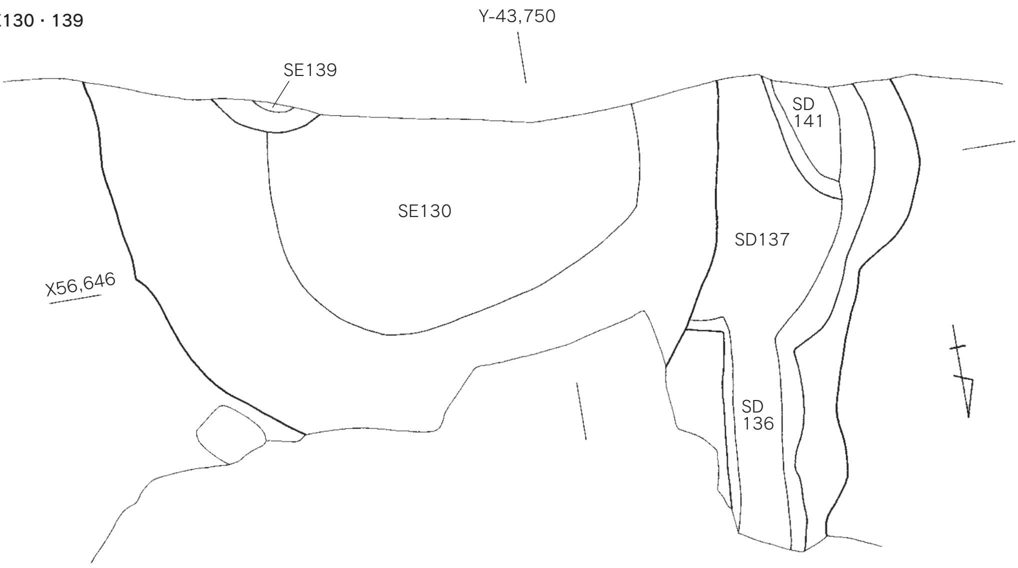
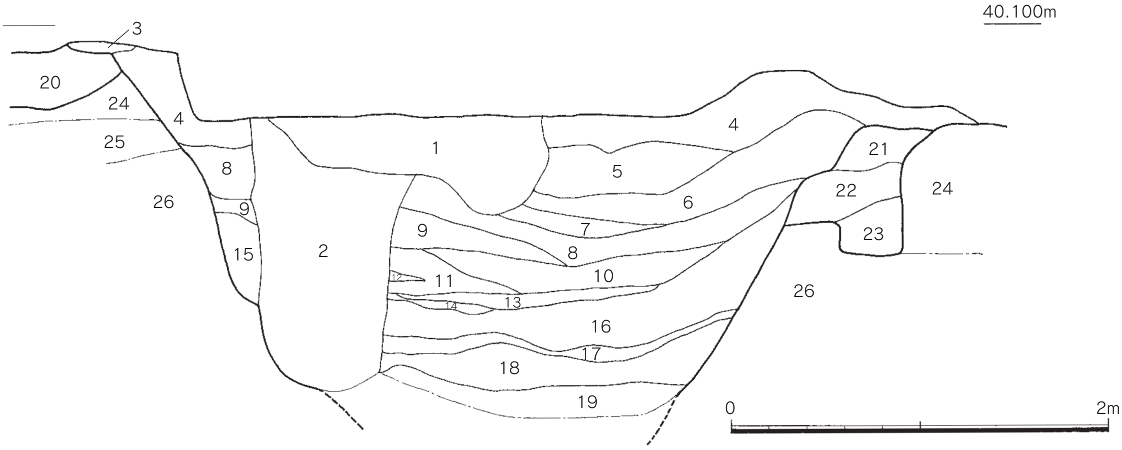



fig.59　第 224 次調査　溝実測図その 5（1/20、1/40）

224SE130・139




224SE130・139　東西土層図




1. 褐色粗砂
2. 橙色土ブロック混じる黒茶色土(S-139)
3. 橙色土ブロック
4. 茶褐灰色土
5. 茶乳灰粗砂
6. 礫･炭混じる灰色土
7. 乳灰色粗砂
8. 炭混じる灰色土
9. 淡茶色粗砂
10. 炭混じる灰色粗砂
11. 炭混じる淡茶灰色砂
12. 炭
13. 炭混じる灰色土
14. 淡茶色粗砂
15. 灰褐色土
16. 炭混じる灰色粗砂
17. 淡灰粗砂
18. 炭混じる灰色土
19. 灰色粗砂
20. 茶灰色土(包含層)
21. 骨混じる茶灰色土(224SD137)
22. 茶灰色土(224SD137)
23. 灰色粗砂(224SD141)
24. 黄茶色シルト(地山)
25. 橙色土(地山)
26. 灰色砂と乳白細砂(地山)

fig.60　第 224 次調査　井戸実測図（1/40）

大宰府編年 XIV 期（12c 中頃）以降に位置づけられる。

224SD344（fig.57、CD 写真 142・143）

調査区南側で検出された東西溝で、SD050 に切られる位置関係にある。長さ 4.4 m、幅 1.1 ～ 1.3 m、深さ 0.30 mを測る。

4 区

224SD402（fig.57、CD 写真 144）

調査区の西側 A5 で検出された南北に長い長楕円形を呈す遺構で、長さ 1.1m、幅 0.7m 深さ 0.35m を測る。土壌は上から淡茶灰色土、暗茶色土の順に検出した。ウマの動物遺体が出土している。SD403 の西側に平行して設けられており、なんらかの関係が想定される。1 区 SD050 の延長遺構の可能性が考えられる。

224SD403（fig.59、CD 写真 145）

調査区中央の 5 ライン上の南北に穿たれたもので、長さ 4.5m、幅 1m 深さ 0.8m を測る。土壌は上から灰色土、暗茶色粘、茶灰色砂、灰色砂の順で検出された。途中途切れるが、一連のものであろう。ウマの動物遺体が出土している。12 世紀前半に埋没しており、条坊側溝最終埋没時点の遺構である。1 区 SD050 の延長遺構の可能性が考えられる。南に隣接する 217SD045 の続きの可能性がある。

224SD404（fig.59、CD 写真 146 ～ 148）

調査区中央の南北に穿たれたもので、長さ 4.5m、幅 1.5m 以上、深さ 1.2m を測る。遺構内の土壌は上から淡茶灰色土、茶灰色土、茶灰色砂、灰茶色砂、灰色砂、暗灰色土の順で検出された。最上層の淡茶灰色土から、ネコ、イヌ、イノシシ / ブタ、マダイの動物遺体が出土している。埋没時期は 12 世紀前半である。1 区 SD050 の延長遺構の可能性が考えられる。南に隣接する 217SD050 の続きの可能性があるが、埋没時期に多少の相違がある。

224SD409（fig.59、CD 写真 149）

SD404 の上面に展開する遺構で、幅 1.1m 以上、0.4m、深さ 0.1 mを測る。SD404 の埋没過程で形成された溜まり状の遺構である可能性もある。

井戸

224SE130（fig.60、CD 写真 150・151）

1 区南で検出された。検出の層序は茶カツ土、茶色土、黒灰色土、暗灰色土、淡茶灰色土、灰色土の順であった。上面には近世後期の撹乱がかなりの面積で入っている。地盤が脆弱で深いため掘方は完掘できなかった。中国龍泉窯系青磁皿が出土していることから 12 世紀中頃以降の所産と考えられるが、坊路路面中央に穿たれているため、条坊機能の終焉を考える上で重要な遺構である。坊路西側溝 SD050 の最終埋没時期に近いため道路廃絶直後に構築されたことが考えられる。

道路

224SF010（fig.61、CD 写真 152・153）

1 区北から 3 区にかけて顕著であるが、SD050 を東側溝、SD100 を西側溝とする道路遺構で、側溝幅が 1.6m に対して路面は約 3.6m を測る。側溝の芯々間は 4.4 mと推定される。路面に相当する箇所は後の時代の遺構の進出が著しいせいもあって通行痕跡は確認できなかった。1 区では地表面が黄色土壌のやや堅い面であるが、地表面から 10cm もしない深さで細かな砂の層に変わるため、穿たれた側溝の肩は緩やかに立ち上がっており、機能時に崩壊し路面側に浸食が進んで路面幅が狭まった可能性がある。大宰府条坊井上案の左郭 12 坊路に相当する位置にある。側溝の最終埋没は大宰府土器編年 XIV 期の 12 世紀中頃であり、12 世紀中頃から後半には路面に井戸 SE130 が穿たれるため、この

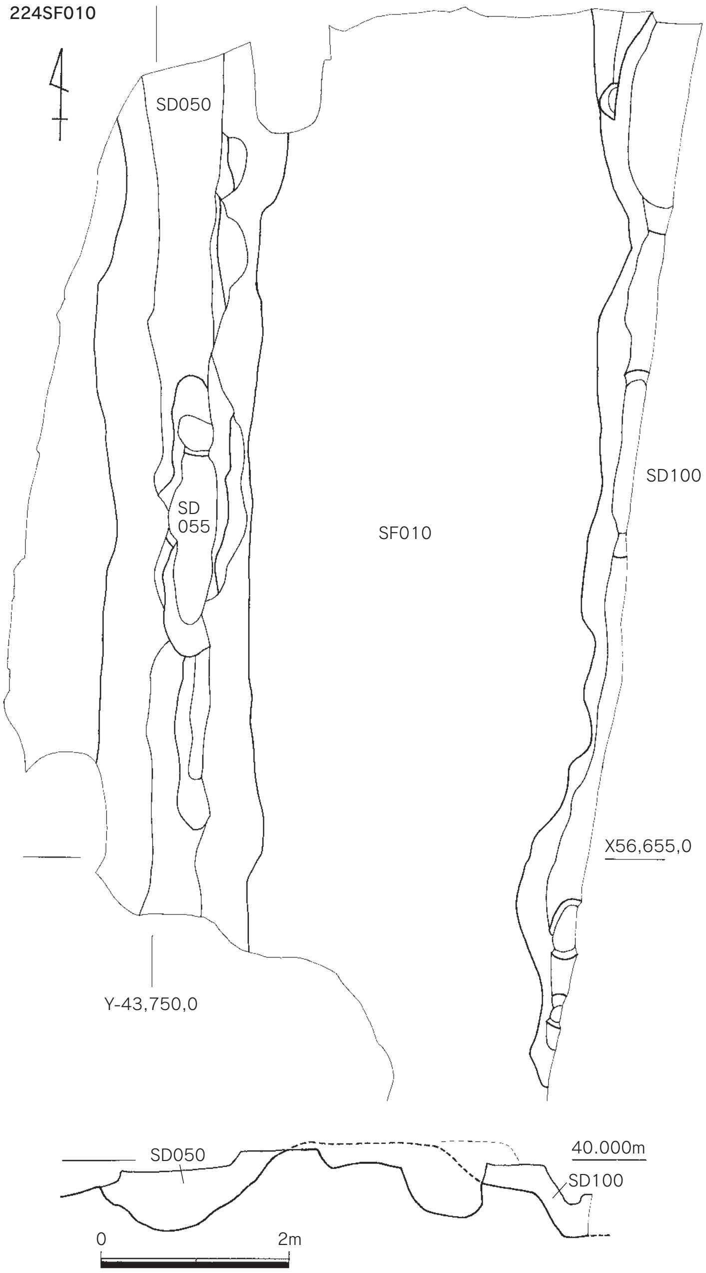


**fig.61　第 224 次調査　道路実測図（1/80）**

位置での道路としての機能はその時点で失われている。調査区西側の現道路が太宰府天満宮の神幸祭の往還路（通称「どんかんみち」）であることから、路面自体が西に変更されて踏襲された可能性がある。条坊 217 次地点で検出されている南北道路 217 SF070 はこの延長の遺構と考えられる。

土坑

1 区

224SK035（fig.62、CD 写真 154）

1 区北側 G3 付近の暗灰土上面で検出されたもので、橙色土のブロックが混じる黒灰土で埋まっている。深さは 0.1m ほどの浅い土坑であった。下層の遺構を認知できずに同時に掘ったため、遺構構築以前の遺物が混じっているが、帰属時期は鎌倉後期頃のものと考えられる。

224SK056（fig.62、CD 写真 155）

1 区北側 G3 の黄色シルト上面で検出されたもので、長さ 2.4m、幅 1.3m 以上、深さ 0.7m を測る。埋土は黒灰色土橙色土粒入り、淡黒灰土の順で堆積する。平安後期以降の所産と見られる。

224SK057（fig62、CD 写真 156）

1 区北側 G3 の SK056 を切って構築され、長さ 1m、幅 0.7m 以上、深さ 0.75m を測る。黒灰色土、橙色土で埋没する。東播系の須恵質土器が出土し 13 世紀以降の所産と見られる。

224SK078（fig.62、CD 写真 157）

1 区北側 F3 で検出され、長さ 1.7m、幅 1.2m 以上、深さ 0.5m を測る。灰黒色土で埋没し、出土遺物から 13 世紀以降の所産と見られる。

224SK086,087,091（fig62・63、CD 写真 158・159・161）

1 区北側 E4 の SD050 の西肩を壊す位置で確認された遺構で、SD050 埋没以降に形成されたものである。SK091 が先に形成され 087 がそれを穿つ形となっていた。SK091 は南北に長い形状である。土色は暗い灰色系統を呈しており、連続して形成された可能性もある。SK086 は長さ 2.2m、深さ 0.6m、SK 087 は長さ 1m、深さ 0.6m、SK091 は長さ 1.7m、深さ 0.2m を測る。12 世紀中頃以降の所産と考えられる。

224SK088（fig.63、CD 写真 160）

1 区北側 G4 で検出された楕円形になると思われる遺構で、長さ 1.4m 以上、幅 1m 以上、深さ

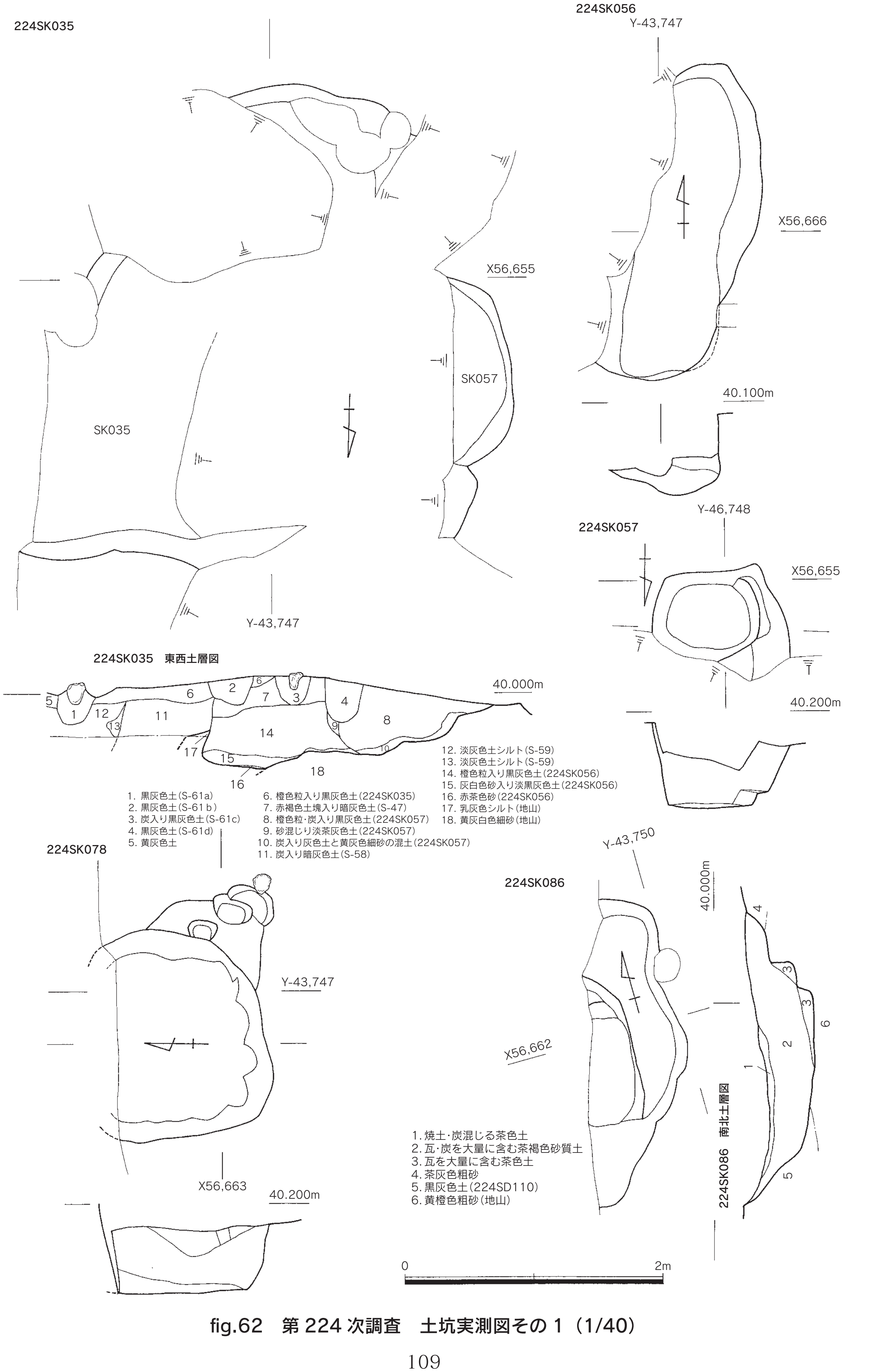



fig.62　第 224 次調査　土坑実測図その 1（1/40）

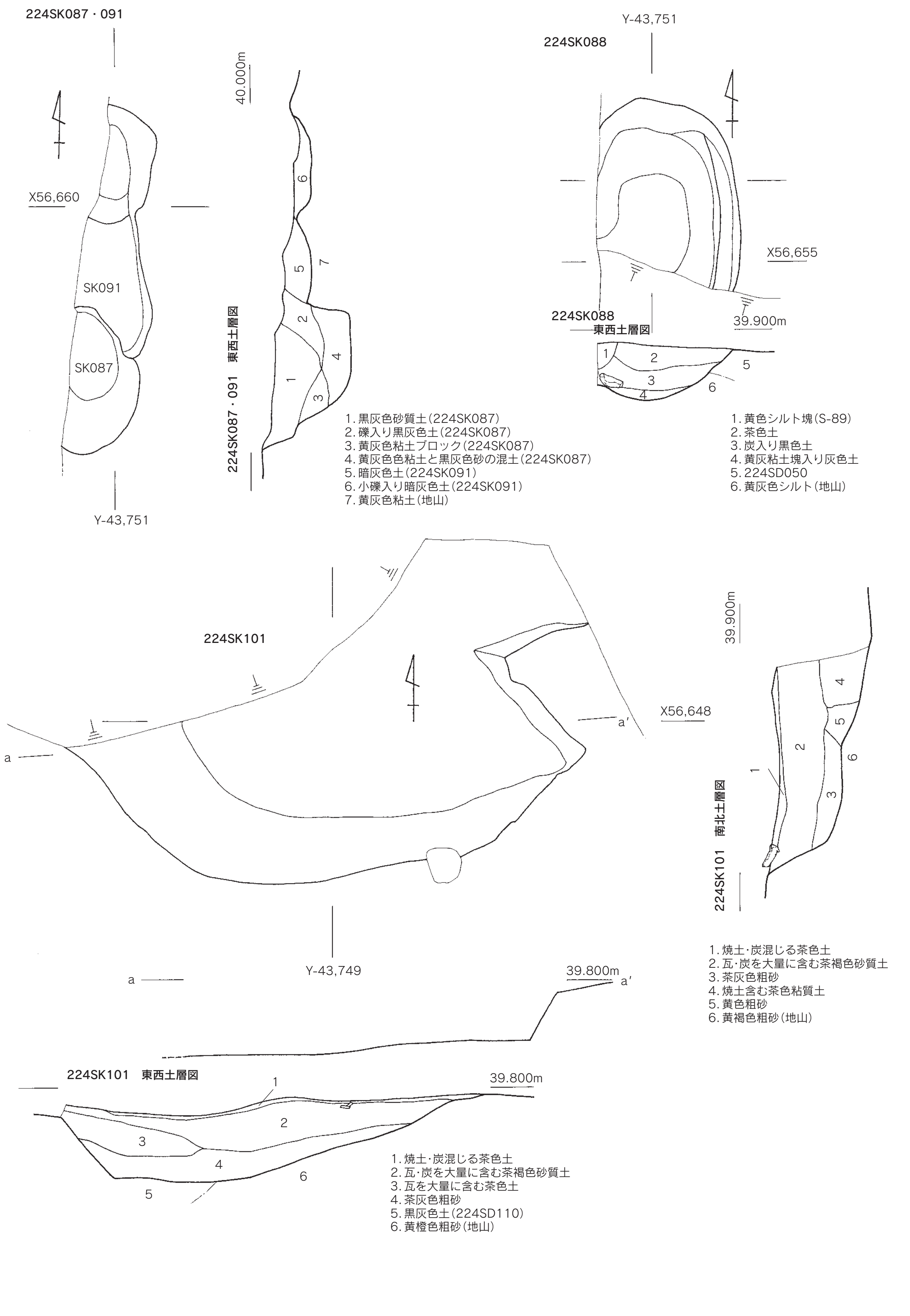
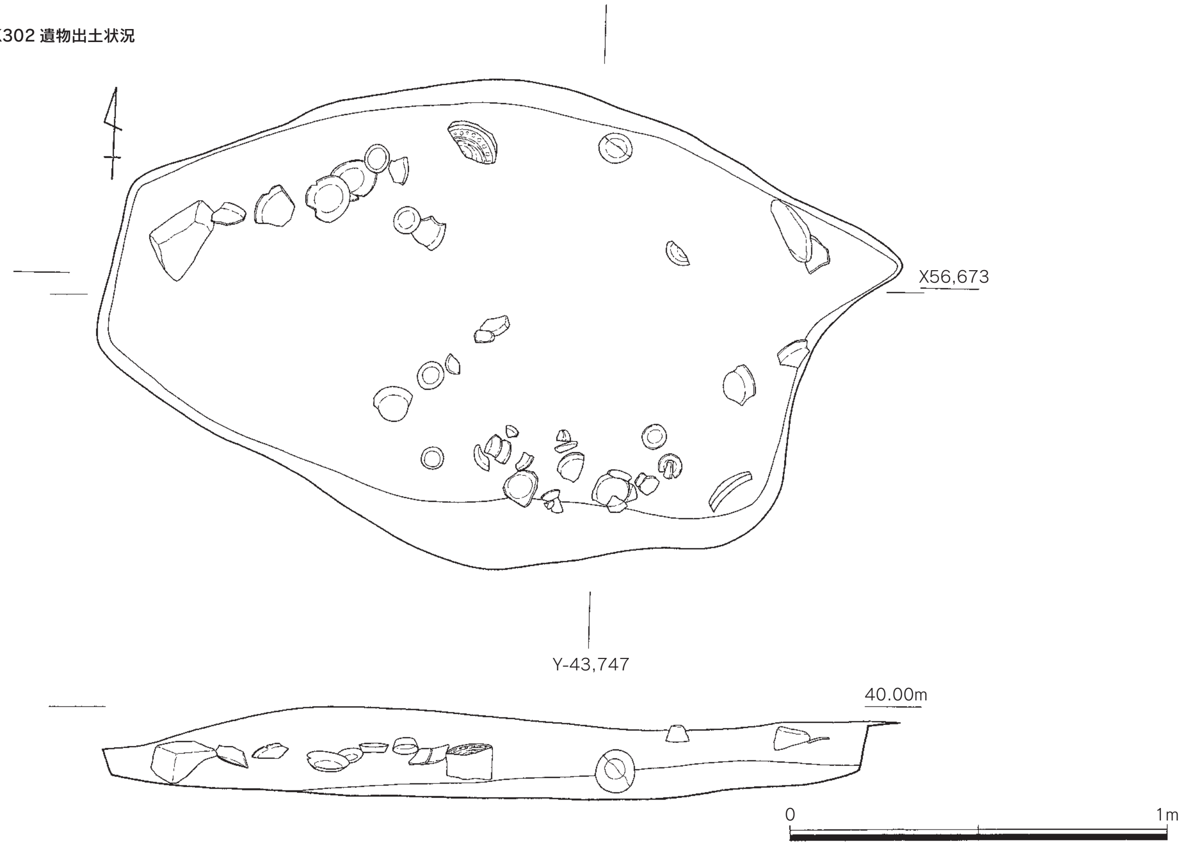
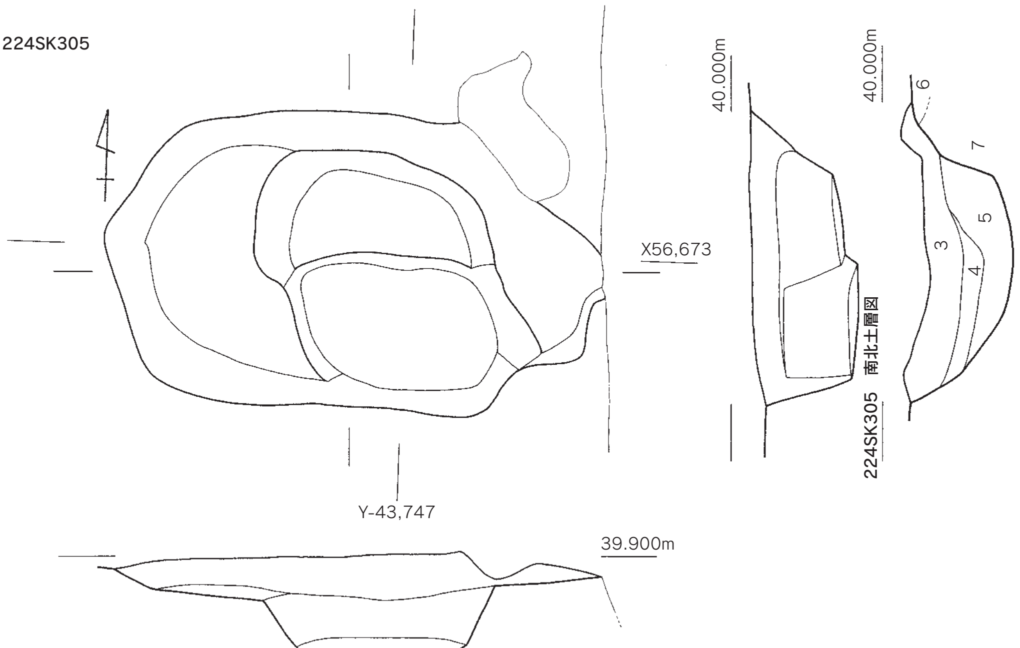



fig.63　第224次調査　土坑実測図その2（1/40）

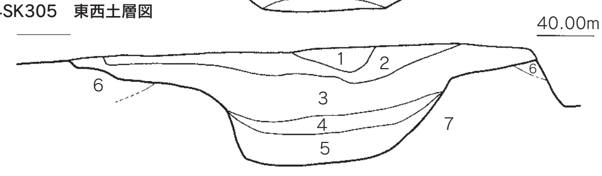
224SK302 遺物出土状況




224SK305

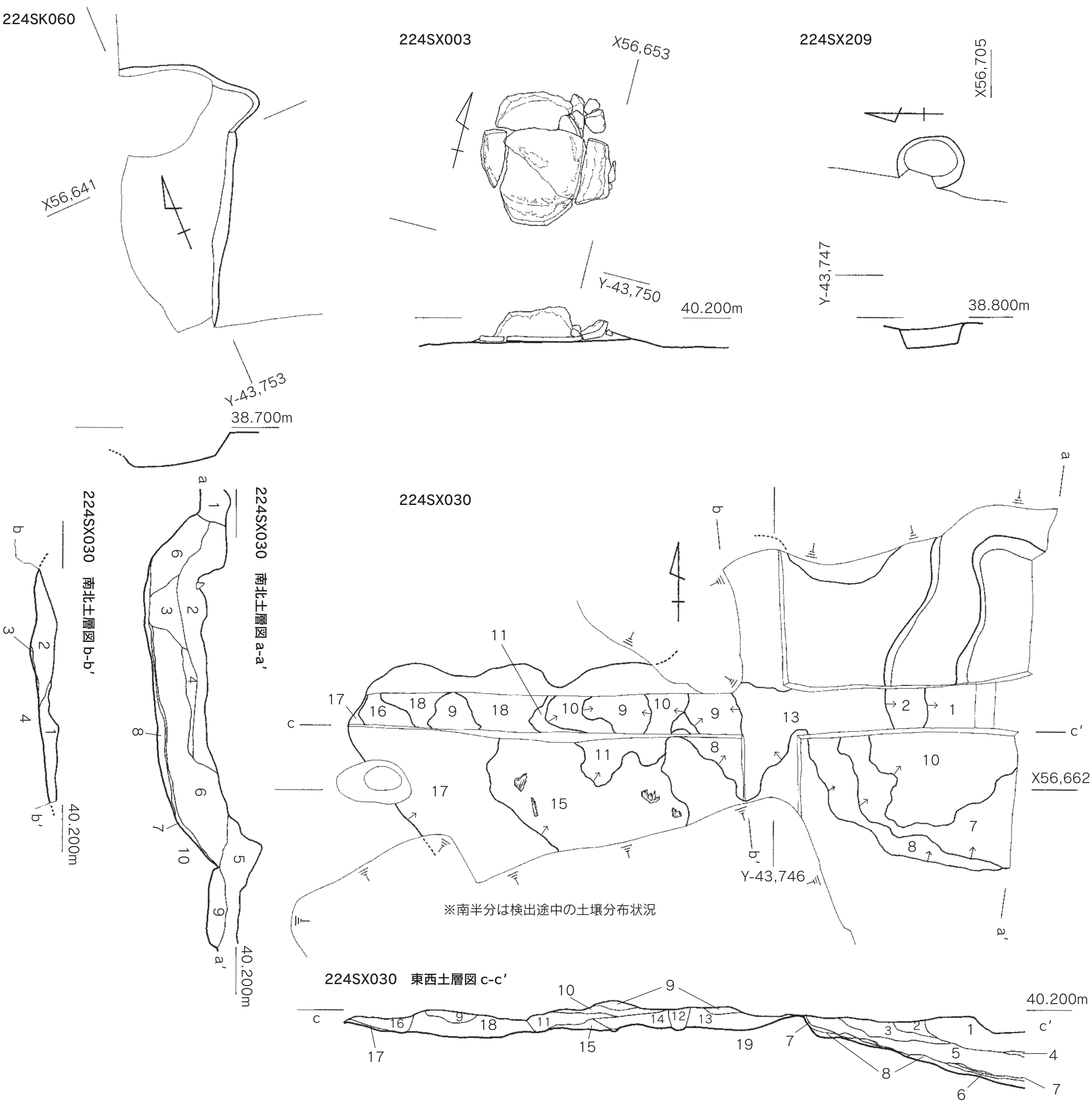



224SK305 東西土層図




224SK305土層土色
1. 茶色土(224SK301)
2. 炭･黄色土ブロック混じる黒色土(224SK302)
3. 黒灰色粘質土(224SK305)
4. 黒色土(224SK305)
5. 灰色砂質土(224SK305)
6. 灰色粗砂(地山)
7. 黄橙色粗砂(地山)


fig.64 第 224 次調査 土坑実測図その 3(1/20、1/40)




224SX030南北土層土色a-a´
1. 黒灰色土(S-7)
2. 橙褐色土ブロック
3. 炭入り暗灰色土
4. 炭入り黒色土
5. 橙色土ブロック入り灰色土
6. 炭入り橙褐色土
7. 炭
8. 暗灰色粘土
9. 暗灰色土
10. 灰褐色土

224SX030東西土層土色c-c'
1. 橙褐色土ブロック
2. 暗橙褐色土
3. 炭粒入り黒灰色土
4. 炭入り黒色土
5. 炭入り橙褐色土
6. 炭
7. 茶褐色弱粘質土(被熱)
8. 炭
9. 橙色土ブロック
10. 炭
11. 暗茶褐色土
12. 明灰色土
13. 炭入り暗灰色土
14. 暗灰色土
15. 炭
16. 黄橙色土
17. 炭
18. 暗灰色土
19. 灰褐色土

224SX030南北土層土色b-b´
1. 暗灰色土
2. 橙褐色土
3. 炭
4. 灰褐色土

0　2m

fig.65　第 224 次調査　土坑およびその他の遺構実測図（1/40）

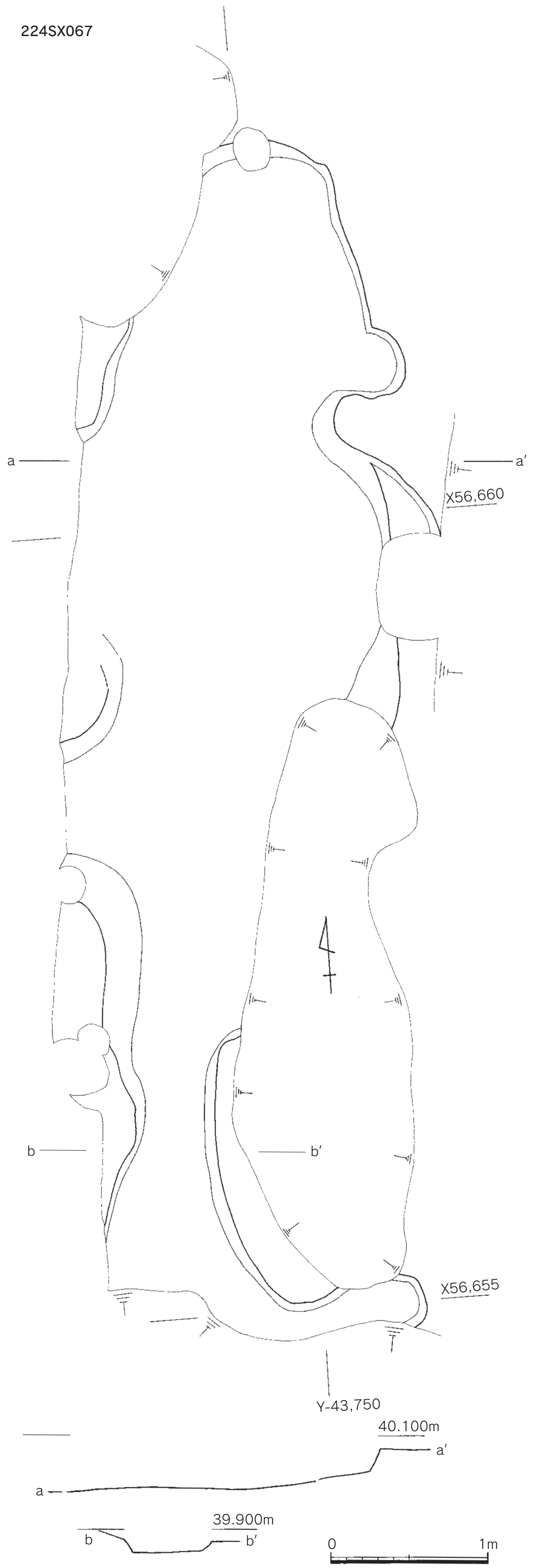


fig.66　第 224 次調査　その他の遺構実測図（1/40）

0.5m を測る。この遺構も SD050 の西肩を壊す位置で確認された。同安窯系青磁椀が出土しており、鎌倉前期頃に機能していた遺構と考えられる。SK086,087,091 の南側にあってこれらと南北に連続する位置にあり、条坊側溝廃絶後にも土地の境目としての意識がつながっていた可能性がある。この真上を「どんかんみち」といわれる現道路が南北に走っていることは示唆的である。

224SK101（fig.63、CD 写真 162）

1 区南側 D3 で検出された円形になると思われ、炭の多く入った土壌が主体の塵芥処理のための廃棄遺構と考えられ、直径 3.5m 以上、深さ 0.7m を測る。19 世紀中頃以降の江戸時代末期頃の陶磁器類、瓦類、池のタタキ土塊などが出土している。米屋古川家の屋敷内での土地利用の状況を知る上で興味深い遺構である。

3 区

224SK302（fig.64、CD 写真 163）

M3 で検出された長さ 2.1m、幅 1.2m 以上、深さ 0.2m を測る東西に長い遺構で、床面は平坦な形状である。埋没土中に土師器の坏、皿類、軒丸瓦などがまとまって廃棄されていた。13 世紀後半以降の所産である。

224SK305（fig.64、CD 写真 164）

M3 の SK302 の外側で検出された遺構で、長さ 2.6m、幅 1.6m、深さ 1.2m を測る。灰色砂質土、黒色土、黒灰色粘質土の順で堆積する。SK302 はこの遺構の埋没過程の窪みが利用されたことも考えられる。13 世紀後半以降の所産である。

たまり状遺構

224SX003（fig.65、CD 写真 165）

1 区北側 G4 の茶灰土面で検出された、瓦質土器の甕を埋めた遺構である。甕は底の部分を残して上は大半がかく乱されて失われていた。直径はもともと 0.5m 程度のものか。粗砂混じりの黒灰色土が裏込めとして入れられていた。甕の底付近に黄白色の付着物があることから（尿酸カルシウムか）、近世後半から近代の便槽と考えられる。

224SX030（fig.65、CD 写真 166 ～ 168）

1 区北側の I3 付近で検出された東西に長い

たまり状の遺構で、検出時は橙色の粘土塊と多量の木炭片が集積した状態であった。長さ 4.2m、幅 2.5m、深さ 0.5m を測る。大まかな層序は焼土ブロックと炭層の互層で、炭は 3 度の供給があった状態である。遺構は東西に長く東側に緩やかに深くなる形状で、西側は床が平坦で、堆積土をすべて除去した状態では炭が地面に刺さりこんだ状態であった。床面は被熱した様子はない。木炭は下層は粉状で上層では広葉樹の枝材と細い竹、萱様の繊維束が見られ、一部は蒸し焼き状態で残ったとみられる。燃焼は不完全なもので、地盤自体が硬化するほど熱が高い状態に至ってはいなかった様相が見える。遺構の用途は不明といわざるを得ない。

224SX067（fig.66、CD 写真 169）

1 区北側の暗灰土上面で検出された南北に長い溜まり状の遺構で、SD050 の上に溜まったような位置で検出された。長さ 7.4m 以上、幅 2.4m、深さ 0.15m を測る。龍泉窯系青磁椀などが出土し 13 世紀前半以降の所産である。条坊側溝の不等沈下に伴って埋められた可能性も考えられる。

224SX209（fig.66、CD 写真 170）

2 区の北側で検出された溜まり状遺構で、茶灰色土で埋没している。2 区で唯一古代までさかのぼる遺構であり 11 世紀後半以降の所産である。

（柳・山村）

**4．遺物**

224SD050 暗灰色土出土遺物（fig.67、CD 写真 001 ～ 003・007・008）

瓦器

椀（1）口縁が 1/4 程度欠損し、復元口径 17.3 ㎝、器高 5.5 ㎝、底径 6.6 ㎝を測る。口縁部分はやや内湾し、底部貼付け高台である。内外面ともにミガキ c を施す。胎土は微細な砂粒を含みやや密で、焼成良好である。色調は燻しにより黒灰色を呈す。

緑釉陶器

椀（2）口縁端部のみの小片である。胎土は淡乳白色で精良で、内外面に明緑色の釉が薄く施釉される。防長産。

朝鮮無釉陶器

壺（3）復元口径 9.6 ㎝、残存器高 8.2 ㎝を測る破片である。口縁端部には側面のヨコナデによる隆起があり、外面体部上半に 2 条沈線が巡る。外面は強いヨコナデにより滑らかで、内面は条線を残す強いヨコナデを施こす。胎土は白色砂粒をわずかに含み精良である。焼成は胎土芯に黒色味のある灰色層があり、還元焼成である。

龍泉窯系青磁

椀（4）器高 5.3 ㎝、底径 5.8 ㎝を測る底部から体部にかけての破片である。素地は微細な砂粒を含む灰色で、精良堅緻。釉調は光沢のある緑色味のある透明釉である。底部畳付部分は露胎し、墨書が外低部二箇所対面位置で確認できる。「全」ないし「余」とも見えるが不明。Ⅰ -3 b 類。

白磁

椀（8・9）8 は底部 1/2 程度の破片で、底径 6.4 ㎝を測る。胎土は微細な黒色斑を多く含み淡灰白色で精良。釉調は光沢のある灰色味を帯びた透明釉で、高台部分は露胎する。底部畳付部分に墨書がある。Ⅴ -a 類。9 は底部から体部にかけての破片である。残存器高 4.5 ㎝、底径 5.9 ㎝を測る。素地は黒色斑と細かなピンホールが見られ、淡灰色で精良堅緻。釉は光沢のある緑灰色味のある透明釉がかかる。体部畳付部分は露胎で、外底部に「千寿」と墨書されている。

土製品

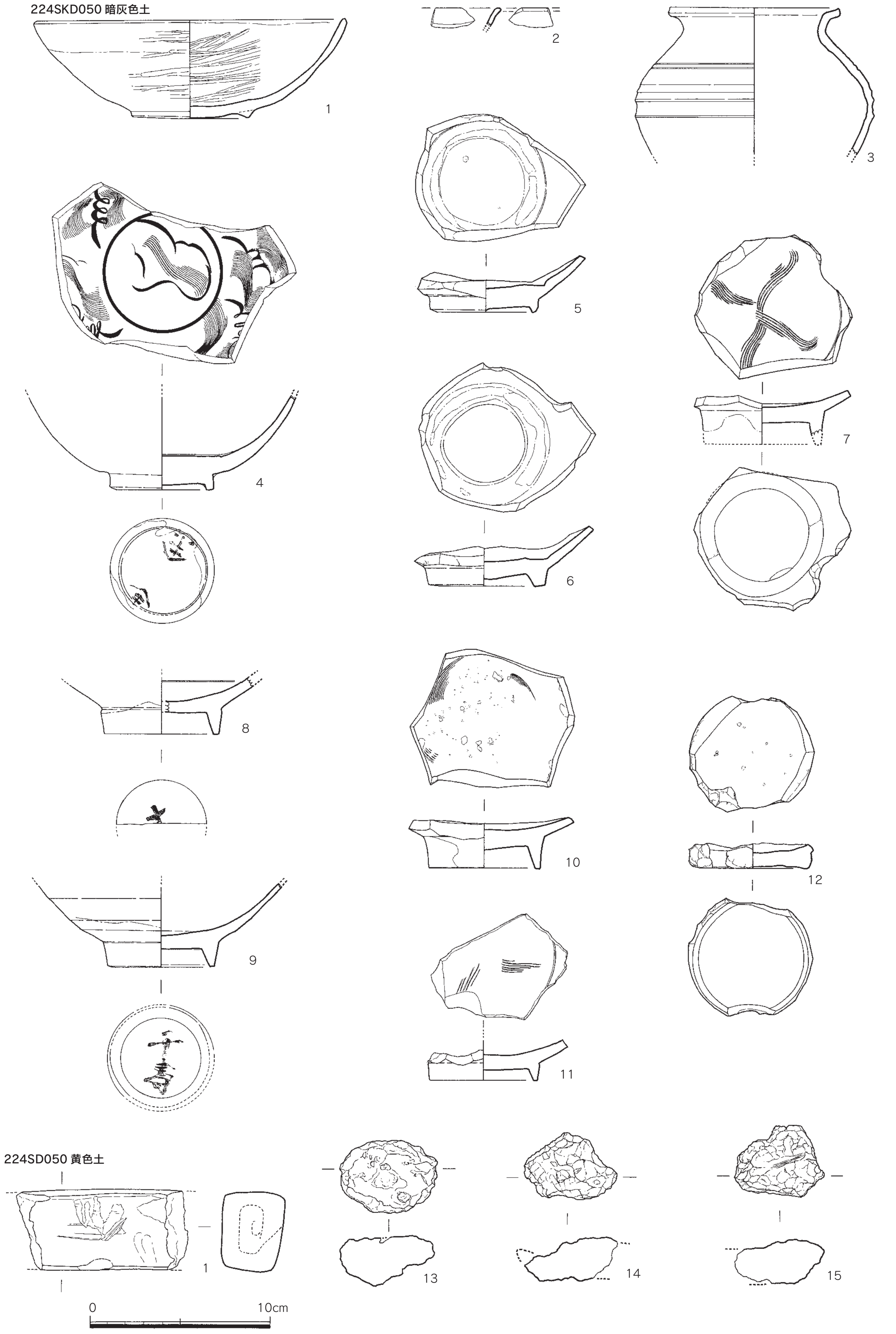



fig.67　第 224 次調査　溝出土遺物実測図その 1（1/3）

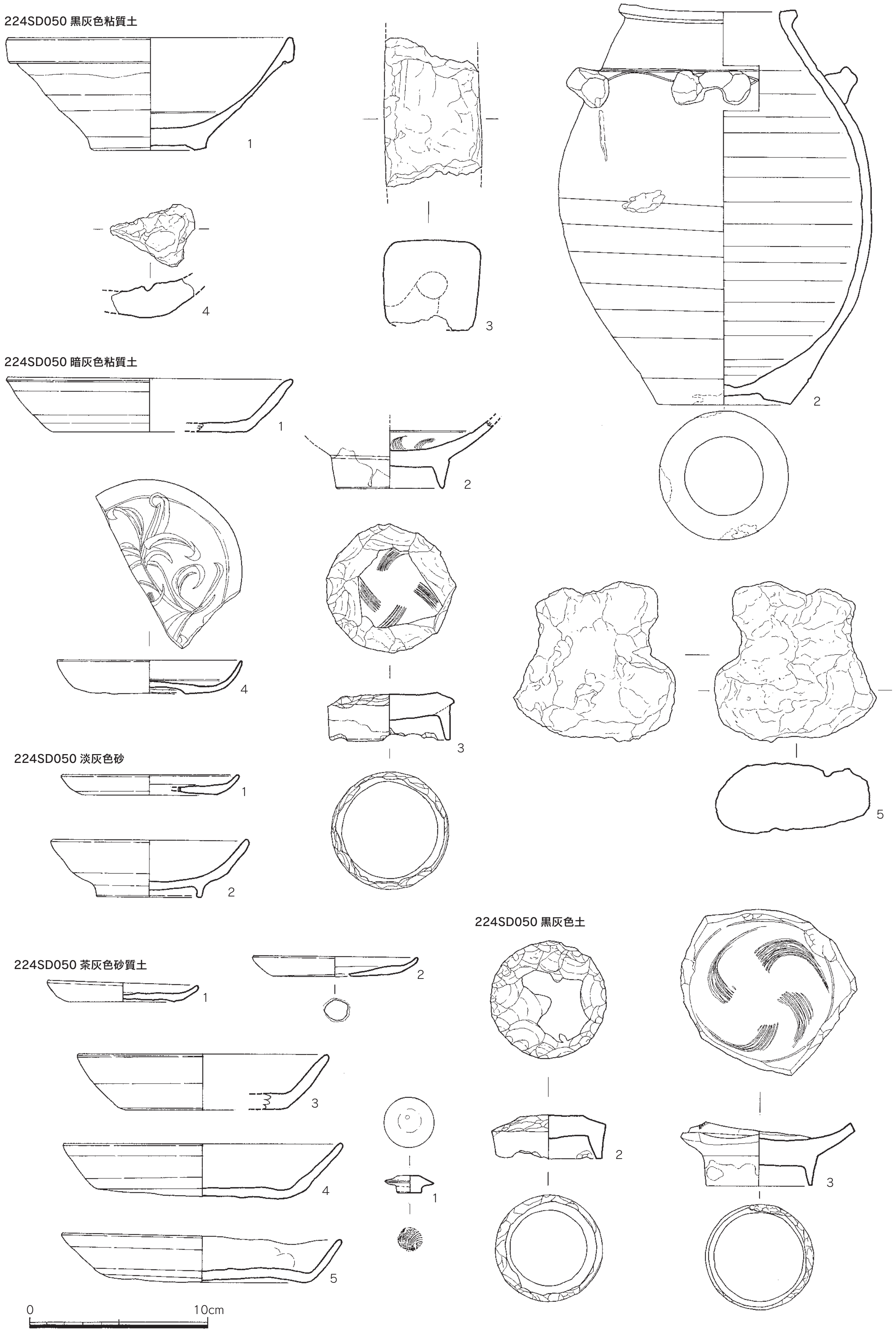



fig.68　第 224 次調査　溝出土遺物実測図その 2（1/3）

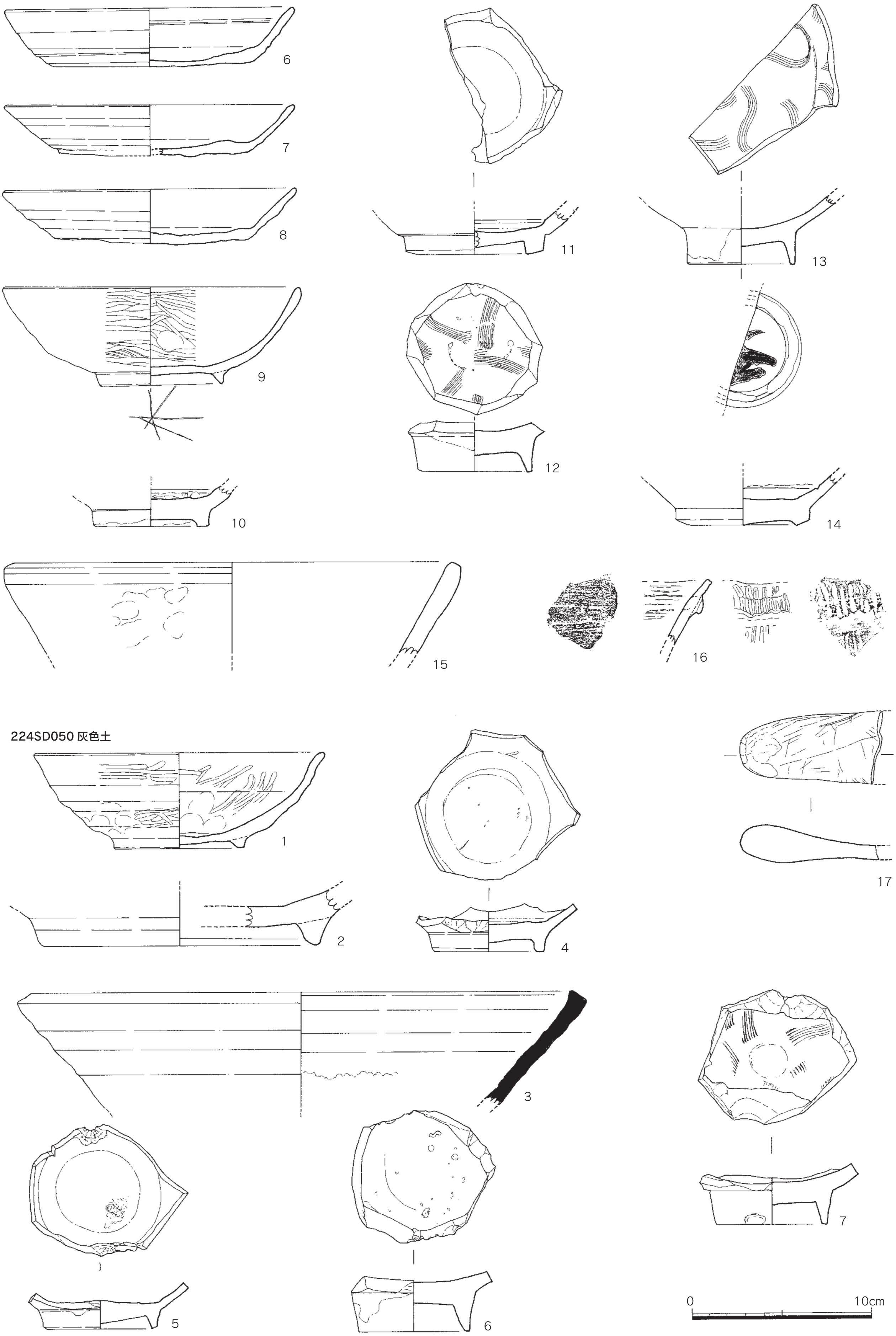



fig.69　第 224 次調査　溝出土遺物実測図その 3（1/3）

打ち欠き土器（5 ～ 7、10 ～ 12）5 は底部のみの破片である。見込み部分の釉をドーナツ状に削り取っている。素地は白色砂粒をわずかに含む灰色味を帯びた淡白色で、やや緑色味の灰色釉を施釉する。白磁椀Ⅷ類。6 は底部のみの破片である。見込み部分の釉をドーナツ状に削り取っており、白色の剥離剤が付着する。白磁椀Ⅷ -2 × 3 類。7 は底部から体部にかけての破片である。見込み部分に櫛目文を施し、一条の沈線が巡る。素地は灰色味を帯びた淡白色で、光沢のある透明釉がかかる。白磁椀Ⅴ類。10 は素地に砂粒を含みやや密で硬質。釉調は緑色味を帯びた透明釉を施す。白磁椀Ⅴ類の見込み部分と高台底部を外面から内面に向かって、打ち欠いている。11 は底部のみの破片である。白磁椀Ⅳ -1 類を見込み部分と底部の一部を打ち欠いている。12 は素地に砂粒をわずかに含む淡灰色で密である。釉調は緑灰色を帯びた光沢のある透明釉がかかる。内面見込みには櫛目文が施され、打ち欠きによる加工されている。白磁椀Ⅴ類。

金属製品

鉱滓（13）タテ 4.1 ㎝、ヨコ 5.45 ㎝、厚さ 2.6 ㎝を測る破片である。形状は椀形だが、断面観察で土質の部分が確認でき、炉壁の可能性がある。内面は炭化物と緑色味を帯びた黒灰色を呈す。

椀形滓（14・15）14 はタテ 3.6 ㎝、ヨコ 5.15 ㎝、厚さ 2.0 ㎝を測る破片である。椀形状の内面には炭化物が付着し、淡灰茶色、茶褐色の斑状を呈す。15 はタテ 3.9 ㎝、ヨコ 5.0 ㎝、厚さ 3.0 ㎝を測る破片である。

224SD050 茶色土出土遺物（fig.67、CD 写真 007・008）

土製品

棒状土製品（1）残存長 9.2 ㎝、幅 4.6 ㎝、厚さ 3.4 ㎝を測る破片である。胎土には白色の 3mm 大の砂粒を多く含み、やや粗い。色調は芯が黄灰褐色で、表面は多少還元気味で、淡褐灰色を呈す。磨耗のため調整不明。土器焼成に係る遺物か。

224SD050 黒灰色粘質土出土遺物（fig.68、CD 写真 001・007・008）

白磁

椀（1）口縁 1/2 欠損、復元口径 16.2 ㎝、器高 6.3 ㎝、底部径 6.6 ㎝を測る。胎土は微細な黒色斑混じり、気泡状の穴が多くやや密な灰白色を呈す。釉調はやや緑色味を帯びた光沢のある白色で表面に小さなピンホールが多少みられる。焼成は良好で硬質。Ⅳ -1a 類。

中国陶器

四耳壺（2）口縁～体部にかけて 1/4 ほど欠損しており、口縁部分に歪みがある。復元口径 10.0 ㎝、器高 22.4 ㎝、底部径 7.5 ㎝を測る。口縁はくの字に外反し、横向きの四耳の間には波状沈線が施される。やや体部下半に胴張りがあり、底部は蛇の目高台である。素地はやや赤みを帯びた茶灰色を呈し、細かな白色、茶色粒を含み粘質で精良である。釉調は光沢のある緑色を帯びた明褐色釉で全面施釉を施す。Ⅴ -2 類。

土製品

棒状土製品（3）残存長 8.3 ㎝、幅 5.45 ㎝、厚さ 4.6 ㎝を測る破片である。胎土は大粒の砂粒を多く含み粗い。焼成は良好で、断面は淡黄色だが、外面は還元化し淡灰色を呈す。磨耗のため調整不明。

金属製品

椀形滓（4）タテ 3.6 ㎝、ヨコ 4.7 ㎝、厚さ 1.9 ㎝を測る破片である。

224SD050 暗灰色粘質土出土遺物（fig.68、CD 写真 004・007・008）

土師器

坏 a（1）全体の 1/6 程度の残存で、復元口径 16.2 ㎝、器高 2.95 ㎝、復元底径 11.0 ㎝を測る。底部

は糸切りで板状圧痕が残る。胎土はごく微量の雲母を含み精良である。色調は内外面ともに淡橙色で、口縁の一部に煤が付着する。

白磁

椀（2）底部のみの破片である。胎土はピンホールの多い灰色味を帯びた白色を呈す。釉調は光沢のある緑灰色色で、焼成は良好で硬質である。V-4 b類。

同安窯系青磁

皿（4）1/2 弱残存し、復元口径 10.4 ㎝、器高 1.9 ㎝、器高 3.8 ㎝を測る破片である。胎土は黒色斑とピンホールが多くみられ、磁質で灰白色を呈す。釉調は緑灰色味を帯びた光沢のある透明釉である。見込み部分にはヘラ描きによる草花文と櫛描き文が施される。底部は刳り込みによる碁笥底状で畳付部分に 2.8 ㎝ほどの円形状の付着物があり、焼き台の痕跡の可能性がある。Ⅷ -1 c類

土製品

打ち欠き土器（3）素地は黒色、茶色斑を多く含みやや密で硬質。釉調は黄色味を帯びた透明釉を施す。白磁椀Ⅴ -4 bの見込み部分と高台底部を外面から内面に向かって、打ち欠いて円形状に加工している。

金属製品

椀形滓（5）タテ 9.0 ㎝、ヨコ 9.0 ㎝、厚さ 3.8 ㎝を測る。椀形状の底面には大粒の砂粒や炭化物が付着し、黒灰色・暗褐色を呈す。

224SD050 淡灰色砂出土遺物（fig.68、CD 写真 004）

土師器

小皿 a（1）全体の 1/2 弱の破片である。復元口径 10.0 ㎝、器高 1.1 ㎝、復元底径 7.6 ㎝を測る。底部へラ切りで板状圧痕が残る。胎土はやや大粒の白色砂粒を多く含み、やや密。色調は淡茶褐色で焼成良好。

小皿 c（2）全体の 3/4 程度の破片である。復元口径 11.0 ㎝、器高 3.25 ㎝、復元底径 5.9 ㎝を測る。底部切り離しは磨耗のため、不明。貼付け高台部分はややくの字に内湾する。胎土は金雲母を多く含み、精良。色調は淡白色を呈し、焼成良好。

224SD050 黒灰色土出土遺物（fig.68、CD 写真 007・008）

白磁

小壺蓋（1）ほぼ完形。径 2.7 ㎝、器高 1.0 ㎝を測る。底部には糸切り痕が残り、底部以外に施釉している。素地は淡褐灰白色で密、釉調は黄色味を帯びた白色の透明釉を施し、焼成良好。

土製品

打ち欠き土器（2･3）2 は素地が細かな黒色･茶色斑を多く含みやや粗い。釉調は緑色味を帯びた灰色で、焼成良好。白磁椀Ⅴ類を見込み部分を外側から細かく打ち欠いている。高台端部にも打ち欠いた箇所が確認できる。3 は素地に細かな黒色斑を多く含みやや粗い。釉調はない外面ともに緑色味を帯びた灰色釉を薄く施釉する。白磁椀Ⅴ類を荒く打ち欠いている。

224SD050 茶灰色砂質土出土遺物（fig.68・69、CD 写真 004 ～ 006）

土師器

小皿 a（1･2）1 は完形。口径 8.3 ㎝、器高 1.1 ㎝、底径 6.0 ㎝を測る。底部イト切り後板状圧痕が残る。胎土は微細な砂粒と金雲母を含み密で、色調は黄褐色である。2 はほぼ完形で、口径 9.2 ㎝、器高 1.2 ㎝、底径 7.2 ㎝を測る。底部イト切り後板状圧痕が残り、底部中央に穿孔がある。胎土は金雲母若干含み密で、色調は淡茶灰色である。

坏 a（3 ～ 8）3 は全体の 1/6 程度の残存で、復元口径 14.0 ㎝、器高 3.1 ㎝、復元底径 9.6 ㎝を測る

破片である。底部切り離しはナデ調整のため不明で、板状圧痕がわずかに残る。胎土は金雲母を若干含み密で、色調は淡橙灰色で焼成良好である。4 はほぼ完形。口径 15.6 ㎝、器高 3.2 ㎝、底径 11.9 ㎝を測る。底部ヘラ切りで、切り離し時に引っ張られたような形で凸状に変形する。口縁部は外側に外反する。胎土は金雲母が多少含み密で、色調は淡橙褐色である。焼成良好。5 は底部は完存し、口縁部が 1/3 欠損し、口縁の一部に歪みがある。口径 15.8 ㎝、器高 2.6 ㎝、底径 11.7 ㎝を測る。底部ヘラ切り後板状圧痕が残る。胎土は金雲母と微細な砂粒を含み密である。色調は淡橙色で焼成良好。6 はほぼ完形。口縁 16.1 ㎝、器高 3.2 ㎝、底径 11.4 ㎝を測る。口縁部はやや外反気味で、底部イト切りである。胎土には微細な金雲母を多く含み、精良である。色調は内外面ともに淡灰褐色を呈す。7 は底部 1/2 と口縁部 1/6 程度残存する。復元口径 16.2 ㎝、器高 2.8 ㎝、復元底径 11.2 ㎝を測る。口縁端部は外反し、底部イト切りである。胎土は微細な砂粒を含み密で、色調は淡灰茶白色である。8 はほぼ完形。口径 16.3 ㎝、器高 3.1 ㎝、底径 10.8 ㎝を測る。底部イト切りで板状圧痕が残る。胎土には金雲母を多く含み、精良である。色調は淡灰褐色を呈し、焼成良好である。

瓦器

椀 c （9） ほぼ完形。口径 16.6 ㎝、器高 5.6 ㎝、底径 6.9 ㎝を測る。体部下半にイト切り痕が残り、イト切りの坏 a の底部から体部下半を押し出して高台をつけた椀である。白色砂粒を含むが精良な胎土で、色調は灰色味を帯びた白色である。体部上部から口縁にかけては燻しがかかり黒色化している。外底部に放射状のヘラ描きが施される。筑前型の形状。

白磁

椀（10・11・13・14）10 は底部のみの破片である。内面見込みをドーナツ状に釉を削り、中央と高台部分に白色の剥離剤が残る。胎土には黒色粒を多く含み、淡灰色を呈す。釉調は灰色味を帯びた白濁色で、焼成良好である。Ⅷ -2 × 3 類。11 は底部 1/2 の破片である。内面見込みにドーナツ状に釉を削る。胎土は淡黄白色でやや密、釉調は灰色味帯びた淡褐灰色を呈す。Ⅷ -2 × 3 類。13 は底部 1/2 の破片である。底部畳付部分に墨書がある。素地は微細な黒色斑とピンホールが見られ、灰色味を帯びた白色である。釉調は緑色味を帯びた灰白色で細かな貫入が見られる。Ⅴ類。14 は底部のみの小片である。素地は細かな黒色斑を多く含み、淡灰白色を呈す。釉調は灰色味を帯びた白色である。焼成は良好。Ⅳ -1 b 類。

瓦質土器

鉢（15）口縁部のみの破片で、口径 24.2 ㎝に復元される。口縁から内面にかけてはヨコナデ調整で、外面には指押さえ痕と砂が付着している。胎土には金雲母、白色砂粒を多く含み、やや粗い。色調は断面が灰色で、内面は淡茶灰色で、外面は黒褐色を呈す。A- Ⅱ類。

縄文土器

浅鉢（16）器高 3.7 ㎝の小破片である。口縁が大きく外反し、波状口縁である。内面にはヨコ方向の条痕がみられ、外面には貼付けによる帯状突帯があり、突帯上部にはヘラ状工具による縦方向の刻み目が施される。胎土には白褐色の砂粒を少量含み、やや粗い。色調は暗褐灰色～黒灰色を呈す。

土製品

打ち欠き土器（12）素地が細かな白色砂粒を含みやや粗い。釉調は緑色味を帯びた灰色で、焼成良好。白磁椀Ⅴ類を見込み部分を外側から内側に打ち欠いている。

石製品

砥石（17）タテ 9.9 ㎝、ヨコ 3.8 ㎝、厚さ 1.2 ㎝の両端部が欠損している破片である。石材は暗灰色のきめの細かい泥岩で対馬産のものか。両面を使用した痕跡が残る。

224SD050 灰色土出土遺物（fig.69・70、CD 写真 009 ～ 012）

瓦器

椀ｃ（1）全体の 1/2 程度欠損し、復元口径 16.2 ㎝、器高 5.3 ㎝、復元底径 7.2 ㎝を測る。口縁端部は外反し、押し出し技法による成形で内外面ともに指押さえ痕が確認できる。胎土には白色砂粒を若干含み精良である。色調は全体的に灰白色だが、口縁部分は還元により黒色化しており、重ね焼き痕が認められる。

土師質土器

大皿ｃ×鉢（2）底部 1/8 程度の破片で、復元底径 15.4 ㎝を測る。胎土は大粒の砂粒と金雲母を若干含み密。色調は内外面ともに淡灰白褐色を呈す。

須恵質土器

鉢（3）口縁部 1/10 程度の破片で、復元口径 31.6 ㎝を測る。口縁部は上部にやや突出気味の形状で、内面体部下半には使用による器面の荒れが確認できる。胎土は砂粒を多く含み、密で硬質である。色調は内外面ともに暗灰色で、外側の口縁端部には黒褐色で光沢のある自然釉が付着する。森田Ⅱ -2 類。

白磁

椀（8・9）8 は底部のみの破片で、底径 6.2 ㎝を測る。内面見込みに一条の沈線が巡る。素地は黒色・茶色斑を多く含みやや粗い。釉調は緑灰色味を帯びた透明釉を薄く施釉する。高台畳付と底部は露胎しており、「上」と墨書されている。9 は底部 3/4 と体部の一部のみの破片である。残存器高 3.7 ㎝、底径 3.7 ㎝を測る。内面見込みには櫛掻文が施される。素地は黒色斑が多く含まれ、白色で精良堅緻。釉調は緑灰色味の透明釉がかかる。底部畳付と底部は露胎しており、草名と思われる墨書が書かれる。Ⅴ -4 ｂ類。

土製品

打ち欠き土器（4 ～ 7）4 は素地が淡灰白色で密で、焼成良好。内面見込み部分を釉がドーナツ状にかき取られ、白色の剥離剤が一部に残る。白磁椀Ⅷ類の見込み部分を打ち欠いている。5 は素地が淡灰白色で密。釉調は灰色味を帯びた透明釉で、内面見込み部分の釉をドーナツ状にかき取っている。白磁椀Ⅷ -2 ～ 4 類の見込み部分を外側から内側に打ち欠いている。6 は素地に黒灰色斑を若干含み、淡灰白色で密である。釉調は緑色味を帯びた半透明釉を施す。白磁椀Ⅴ -a 類の見込み部分を打ち欠いて加工している。7 は素地に黒色・茶色斑を多く含みやや密。釉調は緑灰色味の透明釉である。内面に櫛目文が施される白磁椀Ⅴ類の見込み部分を粗く打ち欠いている。

瓦類

平瓦（10）タテ 9.5 ㎝、ヨコ 9.5 ㎝、厚さ 2.0 ㎝を測る破片である。側面端部の切り離しはヘラ切りで、凹面には横長二重斜格子目叩きを施す。胎土は灰色で大粒の砂粒を多く含み密。焼成良好で須恵質である。叩き分類はＦ群に属す。

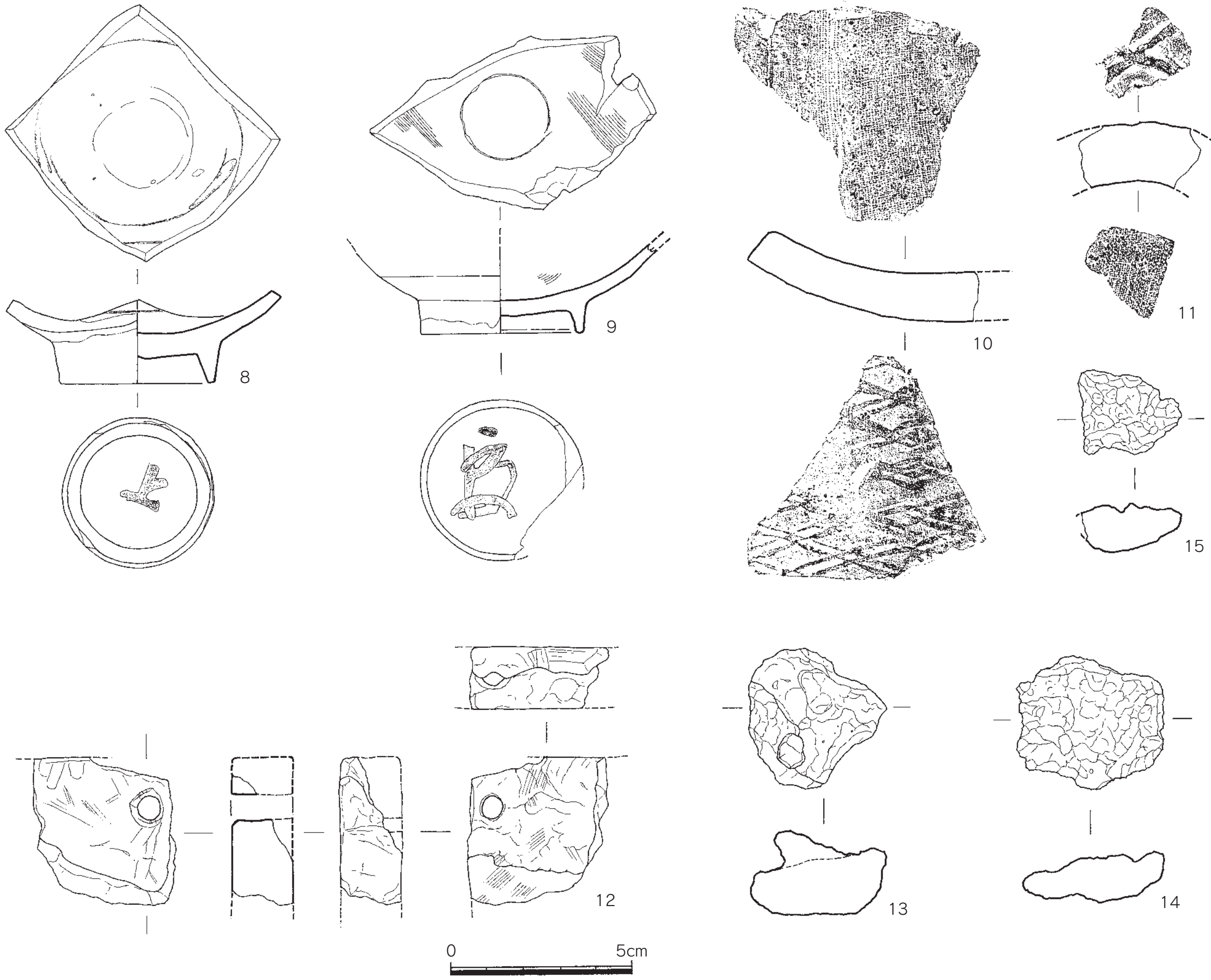
丸瓦（11）タテ 4.4 ㎝、ヨコ 5.8 ㎝、厚さ 2.5 ㎝を測る破片である。凹面には細かな布目、凸面には大きな横長斜格子目叩きが確認できる。胎土には大粒の砂粒を若干含み、密。色調は暗茶褐色で還元がやや不良の須恵質である。叩き分類はＦ群。

石製品

不明滑石製品（12）タテ 4.05 ㎝、ヨコ 4.0 ㎝を測る破片である。石材は滑石である。厚さ 1.7 ㎝の平坦な断面で、直径 6 ㎜ほどの穿孔が開けられている。

金属製品

椀形滓（13・14・15）13 はタテ 5.1 ㎝、ヨコ 5.5 ㎝、厚さ 3.8 ㎝を測る。内面には橙褐色の泥状付



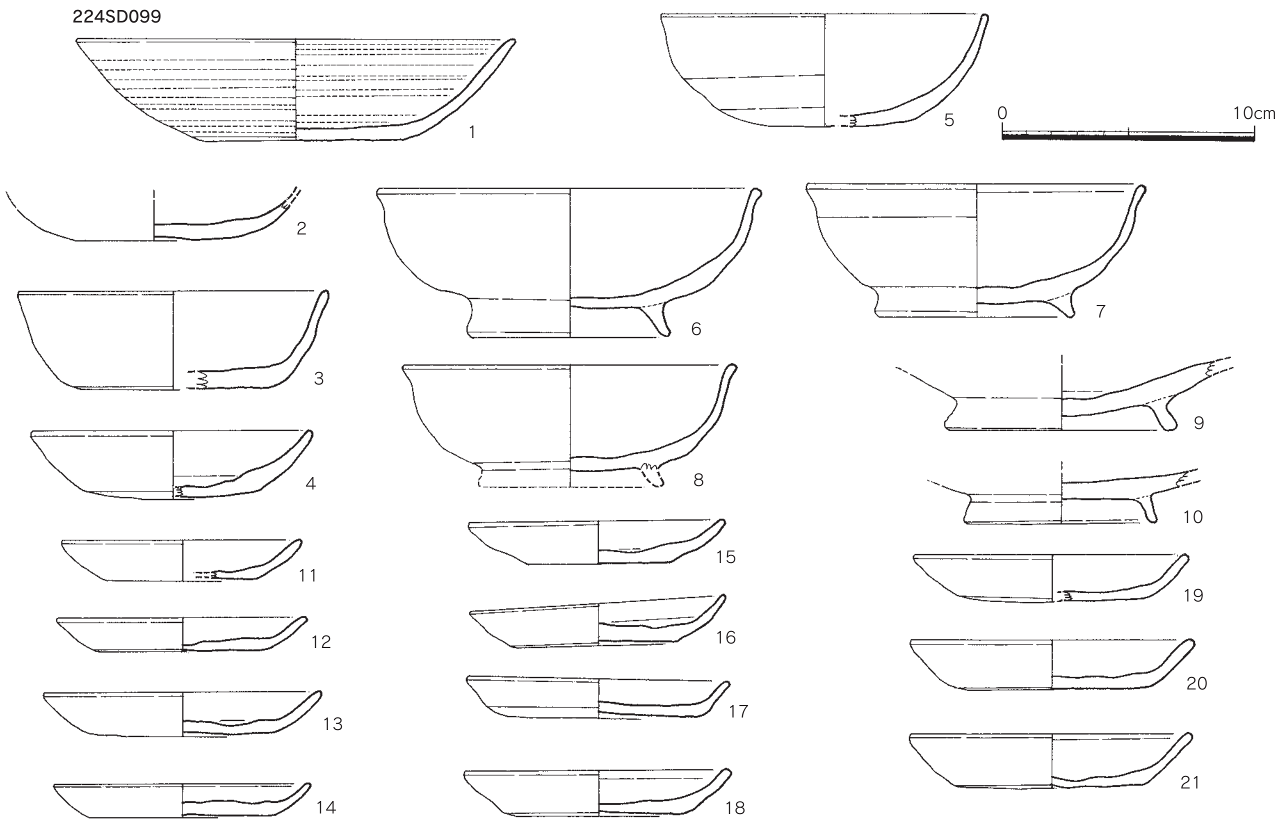




fig.70　第 224 次調査　溝出土遺物実測図その 4（1/2、1/3）

着物があり、土器片を含む鉄錆が確認できる。14 はタテ 5.2 ㎝、ヨコ 5.8 ㎝、厚さ 1.7 ㎝を測る。内面には白色の鉱石物が付着し、茶褐色や黒灰色、黄色の斑状を呈している。15 はタテ 3.2 ㎝、ヨコ 4.1 ㎝、厚さ 1.8 ㎝の破片である。底部は気泡がなく、丸みを持つ暗灰色である。内面は気泡が多く、黒灰色と緑灰色の斑状を呈す。

224SD099 出土遺物（fig.70・71、CD 写真 013 ～ 018）

土師器

坏 d （1）口縁部 2/3 欠損の破片である。復元口径 17.3 ㎝、器高 4.1 ㎝、底径 7.9 ㎝を測る。底部ヘラ削り調整で、内外面ともにミガキ a を施す。胎土は砂粒を少量含み密で、明茶褐色を呈す。

坏 a（2 ～ 4）2 ～ 4 は底部ヘラ切りで板状圧痕が残る。2 は底部のみの小片で、底径 6.3 ㎝を測る。大粒の砂粒を多く含むやや粗い胎土で、淡乳白色で焼成良好である。3 は全体の 1/4 程度の破片である。復元口径 12.4 ㎝、器高 3.9 ㎝、復元底径 8.2 ㎝を測る。胎土には細かな金雲母を多く含む淡橙茶褐色で、やや粗い。口縁端部に煤が付着した痕跡が残る。4 は 1/4 程度の破片で、復元口径 11.0 ㎝、器高 2.8 ㎝、復元底径 7.2 ㎝を測る。黒色・茶色粒を多く含み密な胎土で、内面は淡黄色、断・外面は暗灰色を呈す。

丸坏（5）2/3 残存の破片で、口径 13.0 ㎝、器高 4.5 ㎝を測る。底部ヘラ切り後板状圧痕が残る。胎土には金雲母を多く含みやや密で、茶褐色を呈す。

椀 c （6 ～ 10）6 は口縁部 2/3 欠損の破片で、復元口径 15.2 ㎝、器高 5.8 ㎝、底径 8.0 ㎝を測る。口縁端部はやや外反し、底部ヘラ切り後高台貼り付け成形を雑に施される。高台は外踏ん張りで高い。胎土は砂粒を若干含み密な淡褐灰色を呈す。7 は口縁部 2/3 欠損の破片で、復元口径 13.4 ㎝、器高 5.2 ㎝、底径 7.8 ㎝を測る。口縁は大きく外反し、底部切離しは不明だが工具痕が残る。胎土は淡褐灰色で、砂粒をわずかに含み、密。8 は高台部分が欠損した破片で、口径 13.2 ㎝を測る。口縁部は大きく外反し、底部ヘラ切り痕が残る。9 は体部下半から高台にかけての破片で、復元高台径 9.0 ㎝を測る。高台は外踏ん張りの貼り付けで、底部切離しは摩耗のため不明。胎土は淡灰色で、大粒の黒色粒や金雲母を多く含みやや粗い。10 は高台のみの小片で、復元高台径 7.5 ㎝を測る。高台はやや外踏ん張りな貼り付け高台である。胎土は淡乳灰白色で、黒色や茶色の砂粒を多く含みやや密である。

小皿 a（11 ～ 24）11 ～ 24 は底部ヘラ切り後板状圧痕が残る。11 は 1/2 残存で、復元口径 9.4 ㎝、器高 1.7 ㎝、復元底径 6.0 ㎝を測る。口縁端部がやや内湾する。胎土は茶色粒を多く含みやや粗い。12 は 1/7 程度の破片である。復元口径 9.8 ㎝、器高 1.5 ㎝、復元底径 6.6 ㎝を測る。胎土には黒色・茶色粒や金雲母を多く含み淡茶褐色で、精良である。13 はほぼ完形。口径 10.1 ㎝、器高 1.7 ㎝、底径 4.5 ㎝を測る。胎土には細かな砂粒を含みやや粗い。色調は淡乳白色を呈す。14 は 1/8 程度の破片で、復元口径 10.2 ㎝、器高 1.3 ㎝、復元底径 7.4 ㎝を測る。胎土は黒色・茶色粒や金雲母を多く含み密である。色調は淡橙褐色を呈す。15 はほぼ完形。口径 10.1 ㎝、器高 1.8 ㎝、底径 5.8 ㎝を測る。口縁端部はやや内湾する。胎土は黒色・茶色粒を多く含み淡灰茶褐色で密である。16 は全体の 2/3 残存で、口径 10.2 ㎝、器高 1.7 ㎝、底径 6.7 ㎝を測る。口縁端部がやや内湾する。胎土には砂粒と金雲母を若干含み精良である。17 は口縁部が 1/2 欠損の破片で、口径 10.4 ㎝、器高 1.5 ㎝、底径 9.0 ㎝を測る。胎土は黒灰褐色で、精良。18 は 1/7 程度の破片で、復元口径 10.4 ㎝、器高 1.8 ㎝、復元底径 6.2 ㎝を測る。黒色・茶色粒を多く含みやや密な胎土で、淡乳白色を呈す。19 は全体の 1/3 残存の破片で、復元口径 11.0 ㎝、器高 1.9 ㎝、復元底径 7.4 ㎝を測る。砂粒を若干含み密で、淡褐白色の胎土である。20 は全体の 1/2 以上の破片で、復元口径 11.2 ㎝、器高 2.0 ㎝、復元底径 7.8 ㎝を測る。胎土には金雲母を多く含み密で、色調は淡茶褐色である。21 は全体の 2/3 残存で、口径 11.2 ㎝、器高 2.2 ㎝、底径 7.8 ㎝を測る。胎土は淡茶白色で砂粒をわずかに含み精良。22 はほぼ完形。口径 11.3 ㎝、器高

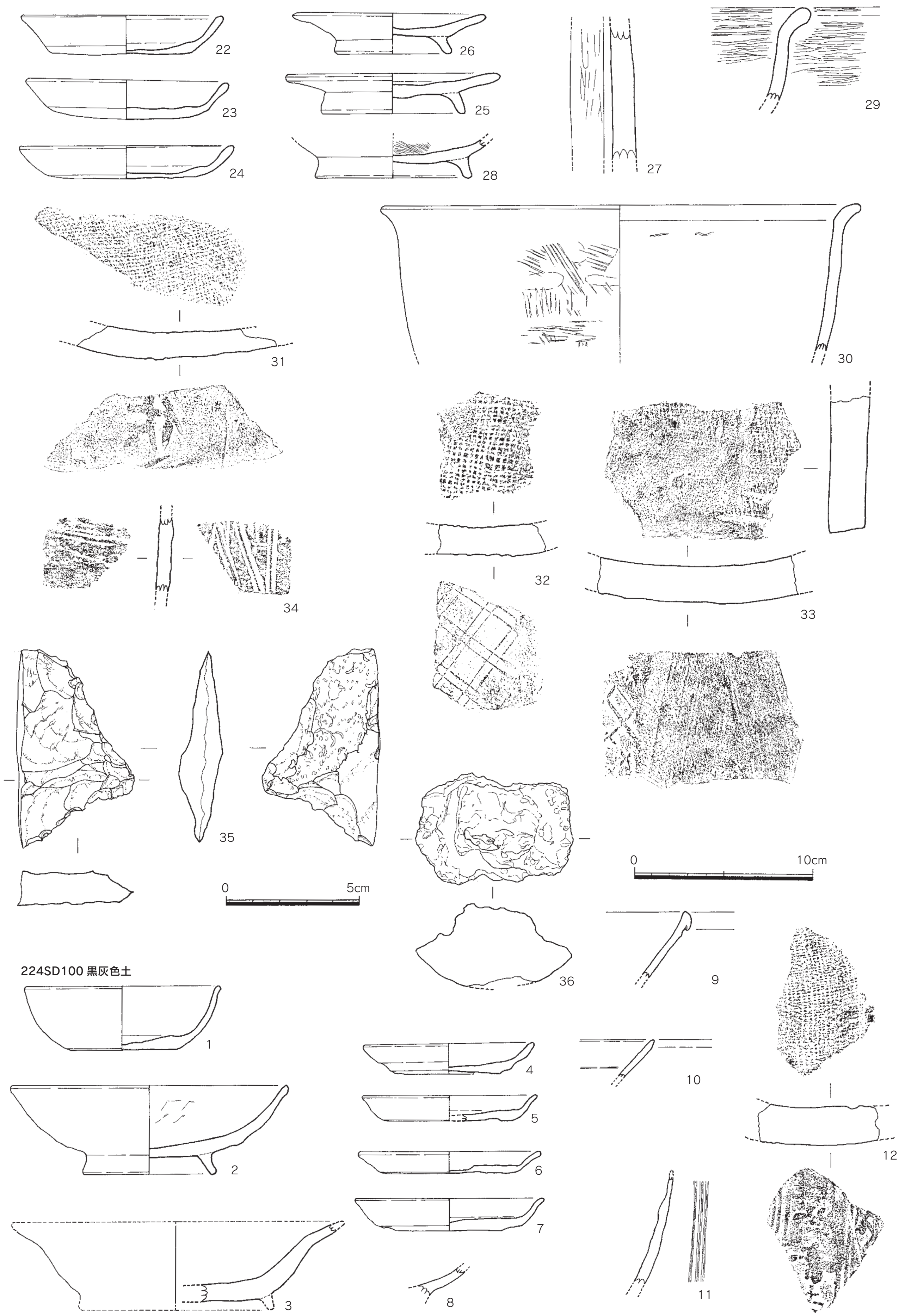



fig.71　第 224 次調査　溝出土遺物実測図その 5（1/2、1/3）

2.2 ㎝、底径 8.8 ㎝を測る。口縁端部に煤が付着している。胎土は砂粒をわずかに含む淡灰白色で密。23 はほぼ完形。口径 11.4 ㎝、器高 2.2 ㎝、底径 9.0 ㎝を測る。口縁部に二次被熱による橙色化を呈す。胎土は細かな砂粒を含む淡褐白色である。24 は 1/2 程度の破片で、復元口径 12.0 ㎝、器高 1.9 ㎝、8.8 ㎝を測る。胎土には砂粒を含み密で、内外面ともに淡乳白色を呈す。

小皿ｃ（25・26）25 は口径 10.8 ㎝、器高 2.3 ㎝、高台径 6.6 ㎝を測る。高台は外踏ん張りの貼り付けである。胎土は淡白褐色で、砂粒をわずかに含み精良である。26 は 1/8 程度残存の破片である。復元口径 11.8 ㎝、器高 2.2 ㎝、復元高台径 7.9 ㎝を測る。高台はやや外踏ん張りの貼り付け高台で、底部切離しは不明である。色調は淡乳白色で、細かな砂粒を若干含みやや粗い胎土である。

器台（27）残存高 7.2 ㎝の小片である。外面に縦方向のナデが残る。胎土は細かな砂粒を若干含み淡褐白色で密である。

鉢（30）復元口径 27.0 ㎝、残存高 8.1 ㎝を測る小片である。口縁部分がやや外反し、内面にはヨコハケ、外面にはナナメ方向のハケが残る。焼成がやや還元気味で、断面の芯部分が黒色化している。

黒色土器Ａ類

椀ｃ（28）底部のみの小片である。やや外踏ん張りの貼り付け高台がつき、内面見込みには細かなミガキが施される。

黒色土器Ｂ類

鉢（29）残存高 5.1 ㎝を測る小片である。くの字に外反した口縁部で、内外面ともに細かなミガキｃを施す。胎土には大粒の白色砂粒を多く含み、やや粗い。

瓦類

平瓦（31 ～ 33）31 はタテ 5.3 ㎝、ヨコ 14.3 ㎝、厚さ 1.5 ㎝の破片である。胎土は砂粒を多く含みやや密で硬質。焼成は良好で須恵質の淡灰白色である。凸面に左文字の「佐」叩き目がみられ、文字周辺は丁寧に文様がナデ消されている。Ｄ群に属す。32 はタテ 8.0 ㎝、ヨコ 6.9 ㎝、厚み 1.7 ㎝を測る小片である。白色の砂粒を多く含みやや密な胎土で、瓦質に焼成される。凸面には二重正格子目叩きが施される。Ｆ群に属す。33 はタテ 8.7 ㎝、ヨコ 11.3 ㎝、厚さ 2.0 ㎝を測る破片である。胎土には大粒の砂粒を含みやや密で、淡白灰色の須恵質である。凸面に大きな縦長斜格子目叩き、凸面に粗い布目痕が残る。

縄文土器

鉢（34）残存高 4.0 ㎝を測る小片である。内面はヨコ方向のナデで、外面にはナデ後縦方向の深い条線が施される。胎土には砂粒を多く含む暗茶褐色でやや粗い。後・晩期の所産と見られる。

石製品

剥片（35）タテ 7.3 ㎝、ヨコ 4.3 ㎝、厚さ 1.4 ㎝を測る二次加工のある剥片である。石材は暗灰色の安山岩である。

金属製品

椀形滓（36）タテ 6.3 ㎝、ヨコ 8.8 ㎝、厚さ 4.7 ㎝を測る。底部は椀形の形状を呈す。内面は黒色のガラス質により中央部分が盛り上がっている。

224SD100 黒灰色土出土遺物（fig.71、CD 写真 019 ～ 021）

土師器

坏ａ（1）全体の 1/6 残存の破片で、復元口径 11.0 ㎝、器高 5.5 ㎝、復元底径 6.4 ㎝を測る。口縁端部はやや外反し、底部ヘラ切りである。胎土には金雲母を多く精良で、淡茶褐色の色調を呈す。

椀ｃ（2）口縁 1/2 欠損の破片で、復元口径 15.6 ㎝、器高 5.0 ㎝、高台径 7.5 ㎝を測る。口縁端部は

やや外反し、底部ヘラ切りのち外踏ん張りの高台がつく。内面にはミガキｂが施される。細かな砂粒を含み密な胎土で、淡褐白色な色調を呈す。
小皿ａ（4 ～ 7）4・6・7 は底部ヘラ切り後板状圧痕が残る。5 は底部ヘラ切り後ナデ調整が施される。4 は口縁 1/4 欠損で、口径 9.6 ㎝、器高 1.6 ㎝、底径 6.7 ㎝を測る。胎土は砂粒を若干含み密。淡茶褐色の色調を呈す。5 は全体の 1/2 程度の残存で、復元口径 9.8 ㎝、器高 1.3 ㎝、復元底径 7.2 ㎝を測る。胎土は砂粒をわずかに含み精良で、暗灰褐色を呈す。6 は全体の 1/3 残存で、復元口径 10.2 ㎝、器高 1.2 ㎝、復元底径 7.7 ㎝を測る。胎土には砂粒をわずかに含む淡白褐色である。7 は全体の 1/2 残存で、復元口径 10.6 ㎝、器高 1.8 ㎝、復元底径 8.0 ㎝を測る。胎土には金雲母を含みやや密である。色調は淡茶褐色を呈す。
鉢ｃ（3）全体の 1/6 程度の小片である。口縁端部と高台が欠如しており、法量は不明である。器壁が厚く、口縁端部が大きく外反する特徴をもつ。胎土は砂粒をわずかに含む淡褐白色である。外来系。
緑釉陶器
椀（8）体部下半の小片である。素地は砂粒を少量含む淡灰褐色の土師質である。釉調は薄く光沢のない黄緑色を呈す。防長系。
白磁
椀（9･10）9 は口縁端部のみの破片である。素地は淡灰白色で、光沢のある緑色味の透明釉がかかる。Ⅳ類。10 は口縁端部のみの小片である。Ⅴ -1 類。
水注（11）体部のみの小片である。体部外面に縦方向の 3 条凹線が施される。Ⅲ類。
瓦類
平瓦（12）タテ 8.5 ㎝、ヨコ 7.5 ㎝、厚さ 2.1 ㎝を測る破片である。胎土に大粒の砂粒を多く含みやや粗い。淡褐灰色の土師質な焼成である。凹面にはやや粗い布目痕、凸面には縦長斜格子目に二重界線に囲まれた左文字の「観世音寺」が入る叩き目が施される。F 群に属す。
224SD115 出土遺物（fig.72、CD 写真 020・021）
土師質土器
鍋ｃ（1･2）1･2 は口縁部のみの破片である。外面に貼り付けによる縁が巡り、ヨコナデ調整が施され、煤の付着により黒色化している。内面はヨコナデ後ハケ目調整が施される。胎土は暗茶褐色で、大粒の砂粒を多く含みやや粗い。
224SD120 出土遺物（fig.72、CD 写真 020・021）
緑釉陶器
椀（1）口縁端部のみの小片である。素地は細かな砂粒を含み灰白色で、内外面に薄い暗緑色釉がかかる。京都産。
土師質土器
鍋（2）口縁部のみの小片である。口縁端部は外側に屈曲し、上部に平坦面を有する。外面にはヨコナデ後指圧痕により調整される。内面は煤付着により暗茶褐色化している。胎土は明茶褐色で、大粒の砂粒を多く含みやや粗い。B 類。
金属製品
鉱滓（3）タテ 3.8 ㎝、ヨコ 2.6 ㎝、厚さ 2.0 ㎝、重さ 22.6g を測る。全体的に鉄錆の明茶色を呈する。
224SD122 出土遺物（fig.72、CD 写真 020 ～ 022）
龍泉窯系青磁
椀（未分類）（1）体部下半から底部にかけての破片で、復元底径 5.0 ㎝を測る。素地は暗紫赤灰色で

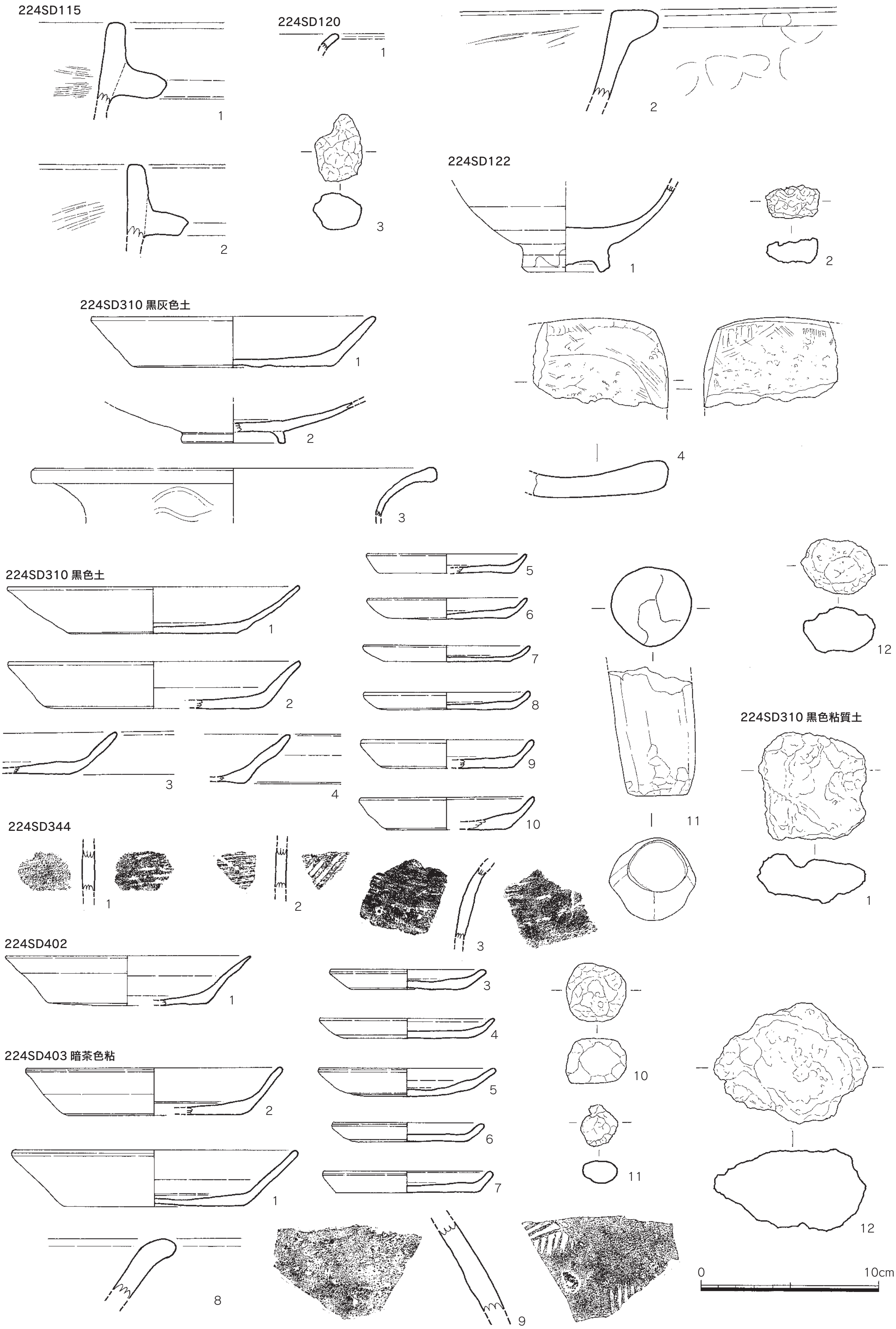



fig.72　第 224 次調査　溝出土遺物実測図その 6（1/3）

微細な白色砂粒と黒色粒をわずかに含み精良堅緻である。釉調は内外面ともに細かな貫入の入る厚い緑灰色を呈す。高台畳付から底部にかけて露胎している。高台は外面が竹節状でやや外反する。Ⅳ類系か。

金属製品

鉱滓 (2) タテ 1.9 ㎝、ヨコ 3.0 ㎝、厚さ 1.3 ㎝、重さ 7.9g を測る。茶褐色、黒灰色、茶黒色が斑状を呈す。

224SD310 黒灰色土出土遺物（fig.72、CD 写真 020・021・023）

土師器

坏 a（1） 1/4 残存で、復元口径 16.0 ㎝、器高 2.8 ㎝、復元底径 11.4 ㎝を測る。底部ヘラ切りで板状圧痕がのこる。口縁はやや外反し、内面見込みに不定方向のナデが施される。胎土は淡黄橙色で、微細な砂粒と雲母を多く含み密である。

緑釉陶器

皿 c （2） 底部 1/4 程度の破片で、復元底径 5.8 ㎝を測る。胎土は黒灰色で、軟質。釉調は内外面に暗緑灰色の釉を薄く施し、一部が酸化して白銀化している。高台は貼り付けで、やや外踏ん張りの角形状を呈す。

朝鮮無釉陶器

壺 （3） 口縁部 1/10 程度の小片で、復元口径 22.7 ㎝を測る。大きく外反する口縁で、端部は丸くやや玉縁状である。外面には波状の文様状の窪みがみられる。胎土は精良堅緻で、断面が暗茶色で内外面は黒灰色を呈す。

石製品

石皿状石製品（4） 石材は灰色の滑石で、一部に煤の付着が見られ、石鍋を加工し直した製品と考えられる。石皿状の口縁から底部にかけては滑面化しており、内面は敲打によりアバタ状に窪んでいる。

224SD310 黒色土出土遺物（fig.72、CD 写真 020・021・023）

土師器

坏 a（1 ～ 4） 1 ～ 4 は底部イト切りである。1 は 1/2 程度の残存で、復元口径 16.3 ㎝、器高 2.8 ㎝、復元底径 9.6 ㎝を測る。器壁が薄く、やや外反する口縁をもつ。胎土は淡茶褐色で砂粒をわずかに含み密である。2 は 1/3 残存で、復元口径 16.4 ㎝、器高 2.7 ㎝、復元底径 12.3 ㎝を測る。内面見込みは工具痕の回転ナデが条痕状を呈す。胎土は明茶褐色で砂粒と雲母をわずかに含み密である。3 は 1/5 程度の小片である。胎土はにぶい茶褐色で砂粒をわずかに含み密である。4 は小片で、ナデ調整により内面にくねる体部である。胎土はにぶい褐色で砂粒をわずかに含み密である。

小皿 a（5 ～ 10） 5 ～ 10 は底部イト切りである。5 は 1/4 残存で、復元口径 9.0 ㎝、器高 1.3 ㎝、復元底径 6.7 ㎝を測る。やや内湾する口縁をもつ。胎土は淡褐茶色で砂粒と微細な雲母を含み密である。6 は 1/4 残存で、復元口径 9.0 ㎝、器高 1.1 ㎝、復元底径 7.6 ㎝を測る。胎土は淡茶褐色で、金雲母を多く含み密である。7 は 1/2 残存で、復元口径 9.3 ㎝、器高 0.9 ㎝、復元底径 7.2 ㎝を測る。器壁が薄く、やや内湾する口縁をもつ。胎土は淡茶褐色で砂粒をわずかに含み密である。8 は 1/4 残存で、復元口径 9.4 ㎝、器高 1.0 ㎝、復元底径 8.0 ㎝を測る。口縁はやや内湾気味である。胎土は淡褐白色で砂粒をわずかに含み密である。9 は 1/4 残存で、復元口径 9.7 ㎝、器高 1.6 ㎝、復元底径 7.6 ㎝を測る。内湾する口縁をもつ。胎土は淡茶褐色で砂粒を多く含みやや密である。10 は 1/6 残存で、復元口径 9.8 ㎝、器高 1.8 ㎝、復元底径 7.3 ㎝を測る。器壁が厚く、やや内湾する口縁をもつ。胎土はにぶい褐色で砂粒をわずかに含み密である。

土製品

脚状土製品（11） 断面観察から板状の粘土を丸めて円形にまとめ、ケズリ後に一定方向のナデで調整

している。胎土はにぶい褐色で砂粒を多く含み粗い。

金属製品

鉄塊系遺物（12）タテ 3.1 ㎝、ヨコ 4.1 ㎝、厚さ 2.5 ㎝を測る。全体的に黄灰色、黄色茶色を呈す。

224SD310 黒色粘質土出土遺物（fig.72、CD 写真 020・021）

金属製品

椀形滓（1）タテ 5.9 ㎝、ヨコ 6.0 ㎝、厚さ 2.4 ㎝を測る。底部は椀形状で、内面には凹状に窪み、茶褐色を呈す。

224SD344 出土遺物（fig.72、CD 写真 017・018）

縄文土器

鉢（1 ～ 3）1 は内外面にヨコ方向のナデが残る。胎土は大粒の砂粒を含みやや密である。2 は内面に二枚貝腹縁によるヨコ方向の条痕、外面にナナメ方向の条痕が施される。胎土は暗茶色で砂粒を含みやや密である。3 は内外面ともにヨコ方向のナデが残る。胎土は黒暗褐色で大粒の砂粒を多く含み粗い。

224SD402 出土遺物（fig.72、CD 写真 024）

土師器

坏 a（1）口縁から底部にかけての小片である。復元口径 13.8 ㎝、器高 2.8 ㎝、復元底径 9.0 ㎝を測る。底部イト切り後板状圧痕がある。口縁部は外反し、内面に漆の付着痕が確認できる。胎土は淡茶褐色で砂粒を含みやや密である。

224SD403 暗茶色粘出土遺物（fig.72、CD 写真 025 ～ 027）

土師器

坏 a（1・2）1・2 は底部イト切りで内面見込みに一定方向のナデが施される。1 は 1/4 残存で、復元口径 14.4 ㎝、器高 2.6 ㎝、復元底径 10.2 ㎝を測る。口縁端部がやや外反する。胎土は淡茶褐色で細かな茶色、黒色粒や金雲母を多く含み、やや密である。2 は 1/3 残存で、復元口径 16.0 ㎝、器高 3.2 ㎝、復元底径 10.1 ㎝を測る。口縁はやや内湾する。胎土は淡乳白色で、微細な砂粒を含みやや密である。

小皿 a（3 ～ 7）3 ～ 5 は底部ヘラ切り後板状圧痕があり、内面見込みに一定方向のナデが施される。6・7 は底部糸切り後板状圧痕である。3 は 1/3 残存で、復元口径 8.8 ㎝、器高 1.2 ㎝、復元底径 6.0 ㎝を測る。胎土は明橙茶褐色で大粒の砂粒を多く含みやや密である。4 は 1/3 残存で、復元口径 9.9 ㎝、器高 1.1 ㎝、復元底径 7.2 ㎝を測る。胎土は淡茶褐色で、大粒の砂粒を含みやや密である。5 は口縁 2/3 程度欠損の破片で、復元口径 10.0 ㎝、器高 1.7 ㎝、底径 7.2 ㎝を測る。胎土は淡乳茶褐色で大粒の茶色粒を多く含みやや密である。6 はほぼ完形で、口径 8.4 ㎝、器高 1.1 ㎝、底径 6.3 ㎝を測る。胎土は淡橙色で砂粒と細かな金雲母を含み密である。7 は 1/4 残存で、復元口径 9.6 ㎝、器高 1.2 ㎝、復元底径 8.0 ㎝である。胎土は淡乳白色で、砂粒を含みやや密である。底部が黒色化している。

土師質土器

鉢（8）口縁端部が外反し、内外面ともにヨコナデ調整である。胎土は淡明茶褐色で、大粒の砂粒を多く含みやや粗い。

国産陶器

甕（9）体部の一部のみの破片である。内面には充て具痕、外面にナナメ方向の叩き目痕が見られる。胎土は灰色で、砂粒を含み密で、硬質に焼き上がる。

土製品

瓦玉（10）タテ 3.3 ㎝、ヨコ 3.4 ㎝、厚さ 2.4 ㎝を測る。淡黄色の瓦の側面を細かく打ち欠き円形状に加工している。

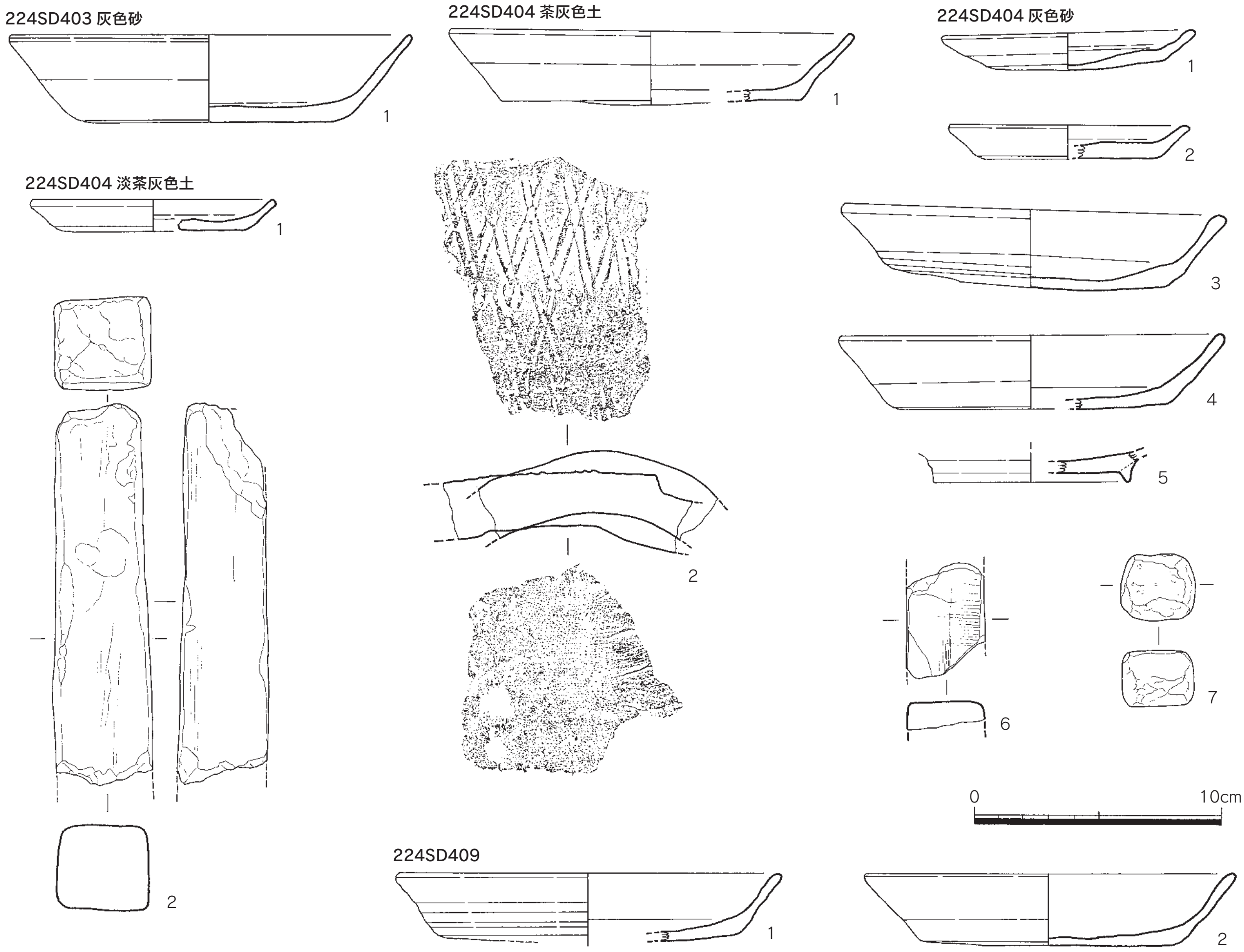



fig.73　第 224 次調査　溝出土遺物実測図その 7（1/3）

金属製品

鉱滓（11）タテ 2.3 ㎝、ヨコ 2.1 ㎝、厚さ 1.3 ㎝を測る。全体的に黄灰色を呈す。

椀形滓（12）タテ 6.7 ㎝、ヨコ 8.6 ㎝、厚さ 4.6 ㎝を測る。底部が椀形状で白色の砂粒が多く付着し、内面は表面全体が黄茶色を呈す。

224SD403 灰色砂出土遺物（fig.73、CD 写真 025）

土師器

坏 a（1）2/3 残存で、復元口径 16.2 ㎝、器高 3.6 ㎝、復元底径 10.5 ㎝を測る。底部イト切り後板状圧痕がある。胎土は淡茶褐色で大粒の茶色粒を多く含みやや密である。

224SD404 淡茶灰色土出土遺物（fig.73、CD 写真 026・027）

土師器

小皿 a（1）1/6 残存で、復元口径 10.0 ㎝、器高 1.3 ㎝、復元底径 8.0 ㎝を測る。底部ヘラ切りで、内面見込みには粗いナデが施される。中央部分に直径 0.9 ㎝の穿孔がある。胎土は淡橙色で微細な砂粒を含み密である。

土製品

棒状土製品 (2) 厚さ 3.4 ㎝を測る棒状の土製品である。表面は粗いナデ調整で、灰黒色の付着物がある。胎土は茶灰色で大粒の砂粒を多く含み粗く、土師質な焼成である。土器焼成に係る遺物か。

224SD404 茶灰色土出土遺物（fig.73、CD 写真 026 ～ 028）

土師器

坏 a（1）3/5 残存で、復元口径 16.4 ㎝、器高 3.0 ㎝、復元底径 12.2 ㎝を測る。底部イト切り後に板状圧痕がある。口縁部はやや外反し、内面見込みに不定方向のナデが施される。胎土は微細な砂粒を含み密である。

瓦類

丸瓦（2）凸面に大きな二重斜格子叩き目で、凹面には細かな布目痕がある。胎土は灰色で大物の砂粒を多く含みやや粗く、須恵質で硬質な焼成である。叩き分類では F 群（平安後期）。

224SD404 灰色砂出土遺物（fig.73、CD 写真 026 ～ 028）

土師器

小皿 a（1・2）1 は 3/5 残存で、復元口径 10.3 ㎝、器高 1.6 ㎝、復元底径 7.2 ㎝を測る。底部ヘラ切り後板状圧痕で、内面見込みには一定方向のナデがある。胎土は淡橙色で、細かな砂粒を含み密である。2 は 1/2 残存で、復元口径 9.8 ㎝、器高 1.4 ㎝、復元底径 7.5 ㎝である。底部イト切り後板状圧痕である。胎土はにぶい淡橙色で、細かな砂粒を含み密である。

坏 a（3・4）3 はほぼ完形で、口径 21.0 ㎝、器高 3.2 ㎝、底径 11.1 ㎝を測る。底部ヘラ切り後板状圧痕があり、内面見込み部分は一定方向のナデである。口縁端部が丸みを帯びた形状を呈す。胎土は黄橙色で、細かな砂粒を含み密である。4 は底部 1/3 欠損で、口径 15.6 ㎝、器高 3.0 ㎝、復元底径 11.0 ㎝を測る。底部糸切り後板状圧痕で、内面は黒色化している。胎土は茶灰色で、微細な砂粒を若干含み密である。

緑釉陶器

皿 c（5）底部 1/6 程度の破片で復元底径 8.0 ㎝を測る。底部イト切りでやや外反する三角形状の貼り付け高台がつく。内外面ともに施釉され、光沢のある深緑色である。胎土は淡黄茶色で砂粒を若干含み精良である。防長産と考えられる。

土製品

瓦玉（7）淡灰色の瓦の側面を打ち砕き、四角形状に加工している。タテ 2.7 ㎝、ヨコ 3.0 ㎝、厚さ 2.2 ㎝を測る。

石製品

砥石（6）欠損箇所以外に使用痕が見られる。石材は緑色片岩である。

224SD409 出土遺物（fig.73、CD 写真 024）

土師器

坏 a（1・2）1 は復元口径 15.6 ㎝、復元底径 12.0 ㎝を測る破片である。口縁端部はやや外反し、底部ヘラ切り後板状圧痕がのこる。胎土は淡橙白色で、微細な砂粒を含み密である。2 は 1/3 残存で、復元口径 15.0 ㎝、器高 3.0 ㎝、復元底径 10.4 ㎝を測る。底部イト切りで、内面には渦巻き状にナデ調整がのこる。胎土は微細な砂粒と金雲母を含み密である。

224SE130 淡茶灰色土出土遺物（fig.74、CD 写真 029・030）

須恵器

甕（1･2）1 は口縁部のみの破片である。口縁が大きく外反し、外面に波状文と格子目叩きが見られる。内外面ともに光沢のあるにぶい茶褐色の自然釉がかかる。胎土は暗灰色で砂粒を多く含みやや粗く、硬質である。2 は体部のみの小片である。内面には無文で円形の充て具痕があり、外面には格子目叩き目が残る。胎土は砂粒を少量含み密で硬質である。肥後系の遺物か。

土師質土器

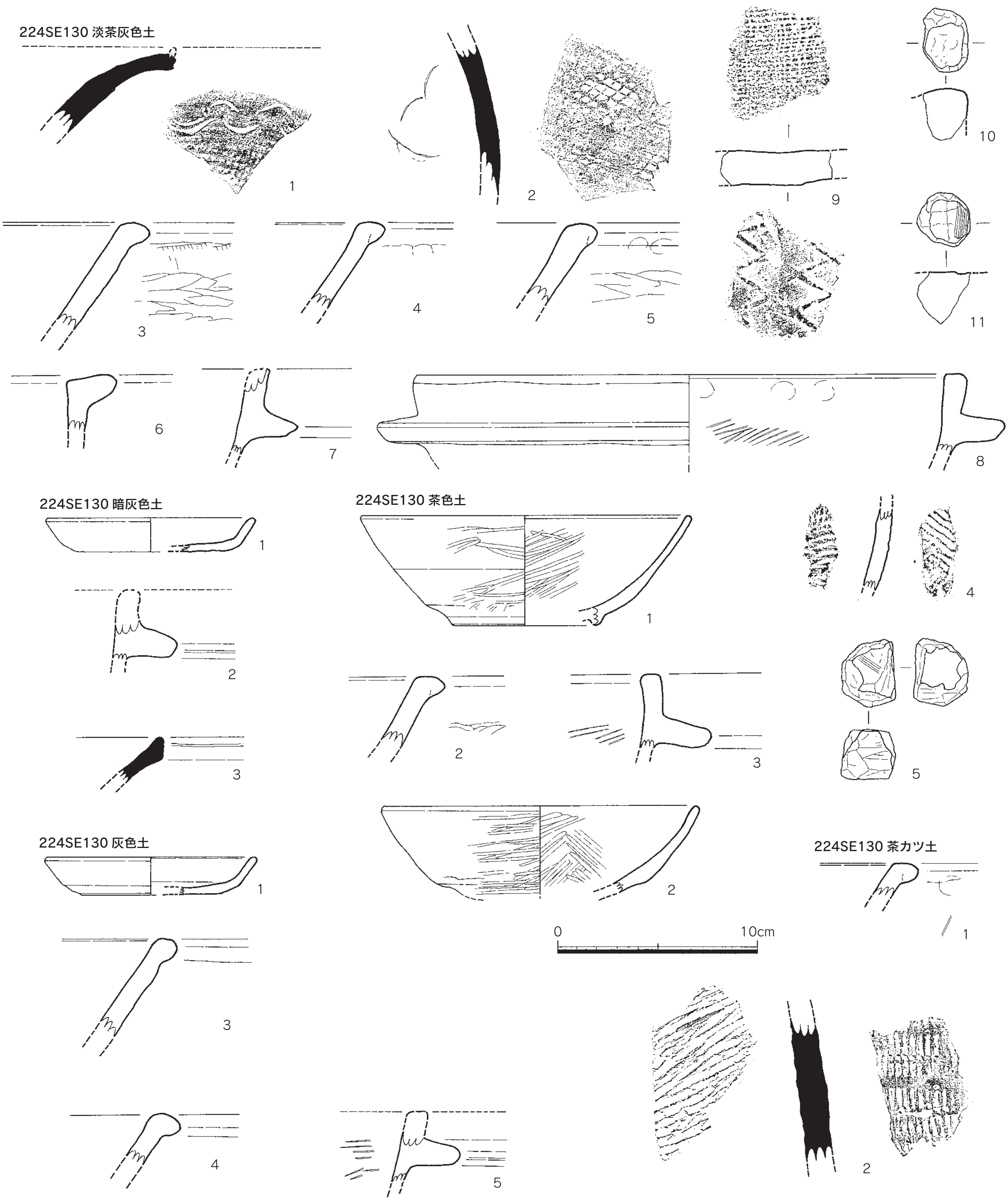



fig.74　第 224 次調査　井戸出土遺物実測図（1/3）

鉢（3 ～ 5）3 ～ 5 は口縁から体部にかけての破片である。口縁端部を短く折り曲げて、玉縁状を呈す。胎土は淡褐色で砂粒を多く含みやや密である。3 の外面はヨコ方向のナデ調整である。4 は口縁に折り曲げ時の指押さえ痕が残る。5 は口縁に折り曲げ時の指押さえ痕と、横方向のナデ調整が見られる。

鍋（6・7・8）6 はＡ類の口縁端部のみの破片である。外側に張り出す口縁端部で、内外面ともにナデ調整である。Ａ類。7、8 はＣ類の口縁部分のみの破片である。内面はハケ目調整で、口縁端部から外面にかけてはナデ調整が施される。胎土は暗褐灰色で大粒の砂粒を多く含みやや粗い。煤付着により口

縁から内面にかけて黒褐色化する。同一個体の可能性がある。

瓦類

平瓦（9）凹面に粗い布目痕、凸面に大きい横長斜格子目が残る。胎土は砂粒を若干含み淡茶褐色の土師質である。

土製品

焼土塊（10･11）10･11 ともに淡茶褐色で砂粒を多く含み、粗い胎土である。11 は管状の痕跡が残る。

224SE130 暗灰色土出土遺物（fig.74、CD 写真 029・030）

土師器

小皿 a（1）全体の 1/6 程度の破片で、復元口径 10.3 ㎝、器高 1.7 ㎝、復元底径 7.5 ㎝を測る。底部ヘラ切りで、全体に二次被熱して須恵器化しており、淡白白色を呈す。胎土は砂粒をわずかに含み密である。

土師質土器

鍋（2）羽部分のみの C 類の小片である。内外面ともにヨコ方向のナデ調整が残り、羽端部に浅い沈線が見られる。胎土は暗褐灰色で、砂粒を多く含みやや粗く、外面には煤が付着し黒褐色を呈す。

須恵質土器

鉢（3）内外面ともにやや強いヨコナデで、口縁端部に浅い沈線状の窪みが見られる。胎土は暗灰色で砂粒を若干含み密である。

224SE130 茶色土出土遺物（fig.74、CD 写真 029・030）

瓦器

椀 c （1）全体の 1/8 程度の破片で、復元口径 16.6 ㎝、器高 5.4 ㎝、復元底径 8.4 ㎝を測る。口縁端部がやや内湾し、内面にはミガキにより平滑化し、外面にもヨコ方向のミガキが施される。胎土は淡白色で砂粒をわずかに含み密で、口縁端部のみ黒灰色を呈す。

土師質土器

鉢（2）口縁端部を短く外面に折り曲げて、玉縁状を呈す。内外面ともにナデ調整で、胎土は砂粒を多く含みやや粗い。

鍋（3）口縁端部のみの小片である。内面にはヨコ方向のハケ調整で、口縁～外面にかけてはヨコ方向のナデが施され、煤が付着している。C 類。

甕（4）体部の小片である。内面にナナメ刻み目の充て具痕、外面にはナナメの格子目叩き痕がある。胎土は淡茶褐色で砂粒を多く含みやや密で、硬質である。

土製品

瓦玉（5）タテ 3.4 ㎝、ヨコ 2.6 ㎝、厚さ 2.6 ㎝を測り、やや三角形状を呈す。胎土は須恵質で砂粒を多く含みやや密である。

224SE130 灰色土出土遺物（fig.74、CD 写真 031・032）

瓦器

小皿 a（1）口縁から底部にかけての小片で、復元口径 10.6 ㎝、器高 1.9 ㎝、復元底径 6.9 ㎝を測る。底部ヘラ切りで、内外面ともにナデ調整を施す。胎土は灰白色で、砂粒を少量含み密である。口縁から外面の一部が燻しにより黒色化している。

椀 c （2）口縁から体部にかけての小片で、復元口径 13.8 ㎝を測る。口縁がやや内湾し、内外面ともに細かいﾐｶﾞｷが施される。体部下半には底部ヘラ切りの痕跡が残る。胎土は淡褐灰色で砂粒を若干含みやや密で、焼成不良のため還元化していない。

土師質土器

鉢（3・4）3 は内外面ともにナデ調整で、口縁端部が外側に突出し、玉縁状を呈す。胎土は淡褐色で砂粒を多く含みやや粗い。4 は口縁端部がへの字に屈曲し、内外面ともにナデ調整である。胎土は淡茶褐色で、砂粒と角閃石を多く含みやや粗い。

鍋（5）5 の内面はハケ目調整で、口縁端部に煤が付着し黒灰色化している。胎土は暗茶褐色で砂粒を多く含みやや粗い。C 類。

224SE130 茶カツ土出土遺物（fig.74、CD 写真 031・032）

土師質土器

鉢（1）口縁端部を短く折り曲げて、玉縁状を呈す。口縁端部の折り曲げ部分にヨコ方向のナデと指押痕が残る。胎土は砂粒を多く含みやや粗く、淡褐色である。

須恵質土器

甕（2）体部の小片である。内面に平行刻み目の充て具痕、外面には長方形の格子目叩き痕があり、緑灰色の自然釉がかかる。胎土には砂粒をわずかに含みやや密で、硬質である。

224SK035 出土遺物（fig.75、CD 写真 031・032）

土師器

坏 a（1・2）1、2 は底部イト切り後板状圧痕が残る。1 は全体の 1/4 程度の残存で、復元口径 9.6 ㎝、器高 1.8 ㎝、復元底径 6.0 ㎝を測る。口縁部が内面にやや屈曲する。胎土は淡褐白色で、微細な砂粒を含み密である。2 は全体の 1/6 程度残存で、復元口径 10.2 ㎝、器高 1.8 ㎝、復元底径 6.8 ㎝を測る。胎土は淡白褐色で砂粒をわずかに含み、外面に煤付着状の黒色化が見られる。

須恵質土器

鉢（3・4）3、4 ともに口縁端部のみの小片で、篠窯系である。胎土は淡白灰色で、微細な砂粒を含み精良である。3 は玉縁状の口縁を呈す。4 はやや内湾する口縁で、焼成がやや軟質である。

瓦質土器

鉢（5）口縁部のみの小片である。口縁から外面にかけてはヨコナデで、内面にはヨコハケ目の調整を施す。胎土は淡灰白色で、砂粒を若干含みやや密である。A Ⅰ類。

土製品

焼土塊（6）タテ 4.7 ㎝、ヨコ 3.8 ㎝、厚さ 3.4 ㎝を測る小片である。胎土には砂粒を多く含みやや粗く、淡茶褐色を呈す。片面にフラットな面があり、側面に棒状のものが挟まっていた痕跡があり、土壁の可能性もある。

224SK056 淡黒灰色土出土遺物（fig.75、CD 写真 031・032）

土師器

坏 a（1）口縁から底部にかけての小片で、復元口径 14.8 ㎝、器高 3.1 ㎝、復元底径 10.8 ㎝を測る。器壁が厚く、底部はハケにより調整され、底部を除く器面が被熱により黒色化している。胎土には金雲母を多く含み、淡茶褐色でやや密である。

土製品

瓦玉（2）タテ 2.9 ㎝、ヨコ 2.7 ㎝、厚さ 1.5 ㎝を測る。砂粒を多く含む淡乳褐色のやや密な胎土である。瓦を細かく打ち欠いて円形に加工している。

土壁（3）タテ 3.8 ㎝、ヨコ 2.5 ㎝、厚さ 4.1 ㎝の破片である。胎土には大粒の砂粒を多く含み橙茶褐色で粗い。外面の所々に木質による凹みと痕跡が残る。

224SK056 黒灰色土出土遺物（fig.75、CD 写真 033・034）

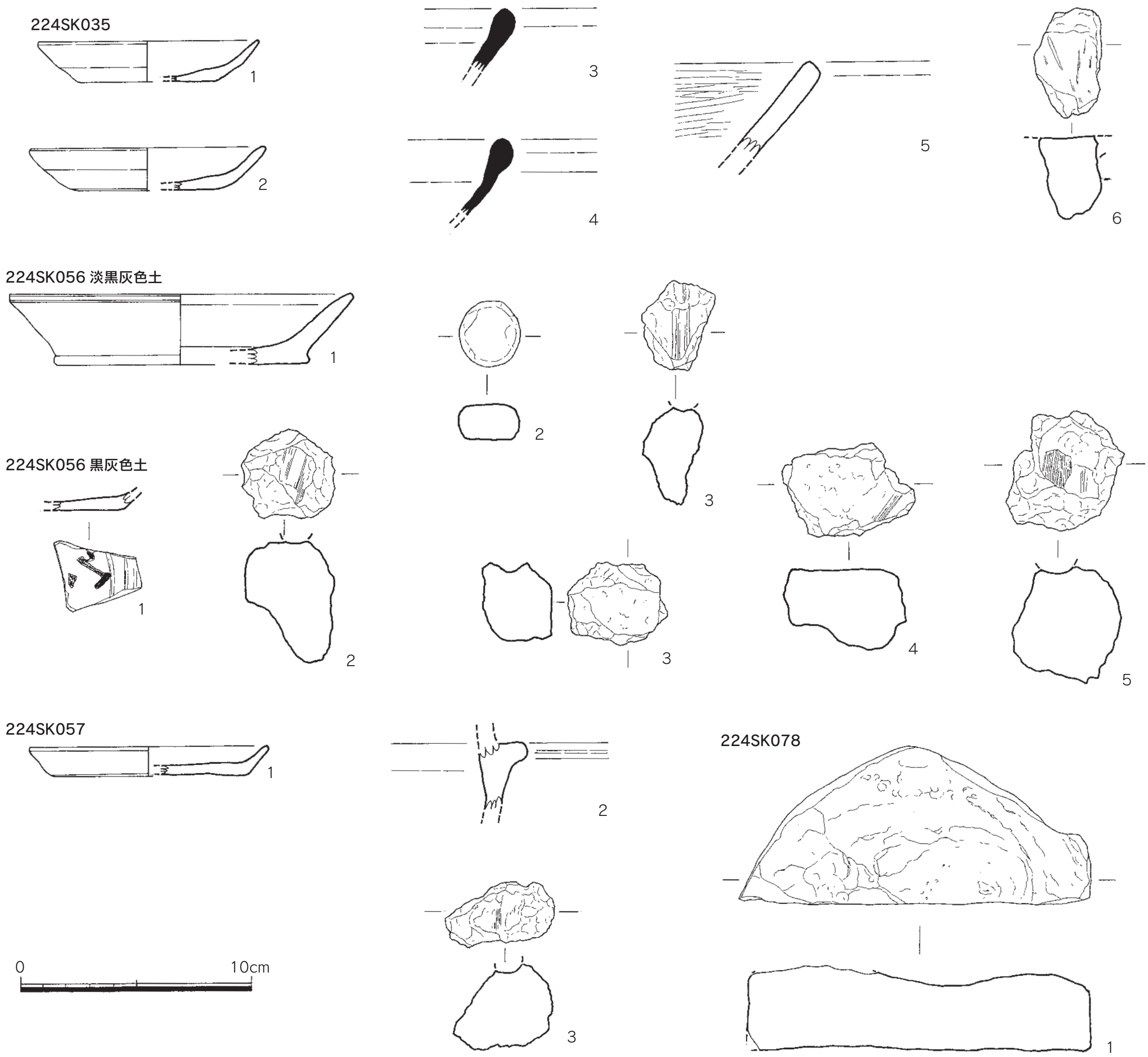



fig.75　第 224 次調査　土坑出土遺物実測図その 1（1/3）

土師器

小皿 a（1）底部のみの小片である。胎土は淡乳茶褐色で、やや大粒の茶色粒を多く含み密である。底部ヘラ切りで、文字は不明だか墨書が確認できる。

土製品

土壁（2 ～ 5）2 ～ 5 は淡橙茶褐色で大粒の砂粒やスサなどの混和材を多く含み、やや粗い胎土である。2 と 5 は管状の木材痕が残り、3 と 4 には土壁の外壁と考えられるフラットな面が残存している。

224SK057 出土遺物（fig.75、CD 写真 033・034）

土師器

小皿 a（1）1/3 程度の破片で、復元口径 10.4 ㎝、器高 1.3 ㎝、復元底径 8.2 ㎝を測る。底部イト切り後板状圧痕が残る。胎土は淡茶灰色で、やや大粒の砂粒を多く含みやや粗い。

土師質土器

鍋（2）口縁部分の破片である。内外面ともにヨコナデ調整で、外面に煤が付着する。やや大粒の砂粒を多く含みやや密な胎土である。C 類か。

土製品

土壁（3）タテ 2.7 ㎝、ヨコ 4.7 ㎝、厚さ 3.2 ㎝を測る破片である。胎土は橙褐色で、大粒の砂粒を多く含み、粗い。一部に管状の木材痕が残る。

224SK078 出土遺物（fig.75、CD 写真 033・034）

石製品

石皿（1）淡褐灰色の砂岩製である。タテ 15.4 ㎝、ヨコ 6.9 ㎝、厚さ 3.2 ㎝の破片である。

224SK101 出土遺物（fig.76 ～ 86、CD 写真 035 ～ 059）

肥前系染付

蓋（1 ～ 3）1 は口縁を 1/3 欠損する破片である。つまみ部分上部が露胎し、界線に囲まれた銘が施される。天上部に金泥と青紺色の呉須とで施文され､内面には雷文の縁取りと見込みに貝殻文が描かれる。2 は口縁を 2/3 程度欠損する破片で、つまみ径 3.6 ㎝、器高 2.6 ㎝、復元口径 8.7 ㎝を測る。明青色の呉須で天上部見込みに界線に囲まれた銘が施され、天上部には細かな草花文が施される。内面には口縁近くに雷文を巡らし、見込みに松竹梅文が描かれる。3 は全体の 1/2 程度残存し、つまみ径 3.6 ㎝、器高 2.6 ㎝、口径 8.6 ㎝を測る。つまみ上部は釉が拭き取られ、青紺色の呉須で天上部には細かな雲文が施される。内面見込みは松竹梅文、口縁内面は雷文が巡る。

広東椀（4・5）4 は底部のみの小片である。内面見込みと外面に青紺色の呉須で施文される。5 は全体の 1/2 程度残存し、復元口径 11.6 ㎝、器高 6.2 ㎝、復元底径 6.0 ㎝を測る。口縁も高台も直で、高台畳付部分に黒灰色の付着物がみられる。素地は淡灰白色で、光沢のある透明釉が施される。内外面に明るい青色の呉須による絵付けがある。

椀（6 ～ 8、10）6 は体部下半から底部にかけての破片である。内面見込みには花蝶文、外面には色絵で綾杉文と唐子が施される。7 は底部のみの小片である。内面見込みには二重線に囲まれた松竹梅文が紺青色の呉須で描かれる。外面は明るい青色の呉須で､草花文が描かれる。8 は全体の 3/4 程度残存し、復元口径 9.8 ㎝、器高 5.6 ㎝、復元底径 4.2 ㎝を測る。口縁端部はやや端反気味である。内面に雷文、見込みに山影文を、外面には大柄の花文が暗青色の呉須で描かれる。10 は口縁 3/4 欠損し、復元口径 10.3 ㎝、器高 5.9 ㎝、底径 4.6 ㎝を測る。やや端反気味の口縁端部で、外踏ん張りの高台を呈す。外面に円窓文と草花文、雷文、内面には口縁近くに雷文と見込みに松竹梅文が青～青紺色の呉須で描かれる。

端反椀（9）口縁 1/2 欠損し、口径 9.6 ㎝、器高 5.3 ㎝、底径 3.7 ㎝を測る。口縁端部は端反り、高台もやや外踏ん張りである。内面は口縁近くと見込みにくすんだ紺色の呉須で施文される。外面には円窓文と寿文が均等に 4 分割で描かれている。

坏（11）口縁 1/4 欠損の破片で、復元口径 6.4 ㎝、器高 2.6 ㎝、復元底径 3.0 ㎝を測る。素地は微細な黒色粒を含み精良である。青紺色の呉須により内面見込みに波千鳥が描かれ、外面は口縁端部以外塗りつぶされている。高台内面には「清元」銘が書かれる。

小皿（12）全体の 1/3 程度の破片で、復元口径 9.2 ㎝、器高 2.3 ㎝、復元底径 4.8 ㎝を測る。波状口縁は内面が帯状に青紺色の呉須で塗られ、内面見込みには花文が描かれる。素地は淡褐白色で精良である。釉調は焼成がやや不良なため、酸化気味で白濁している。

小角皿（13）口縁のみの小片で、復元口径 10.3 ㎝を測る。紺青色の呉須で、内面に波文、外面に草花文が施される。

皿（14・15）14 は口縁がわずかで底部が完存する破片で、復元口径 12.0 ㎝、器高 3.5 ㎝、底径 7.7 ㎝を測る。口縁端部は輪花で、内面見込みには三分割の蝙蝠文が紺色の呉須で描かれる。底部は凹型蛇の目高台で露胎し、内面見込みには針状の目跡が三箇所ある。15 は全体の 1/3 程度残存し、復元口径

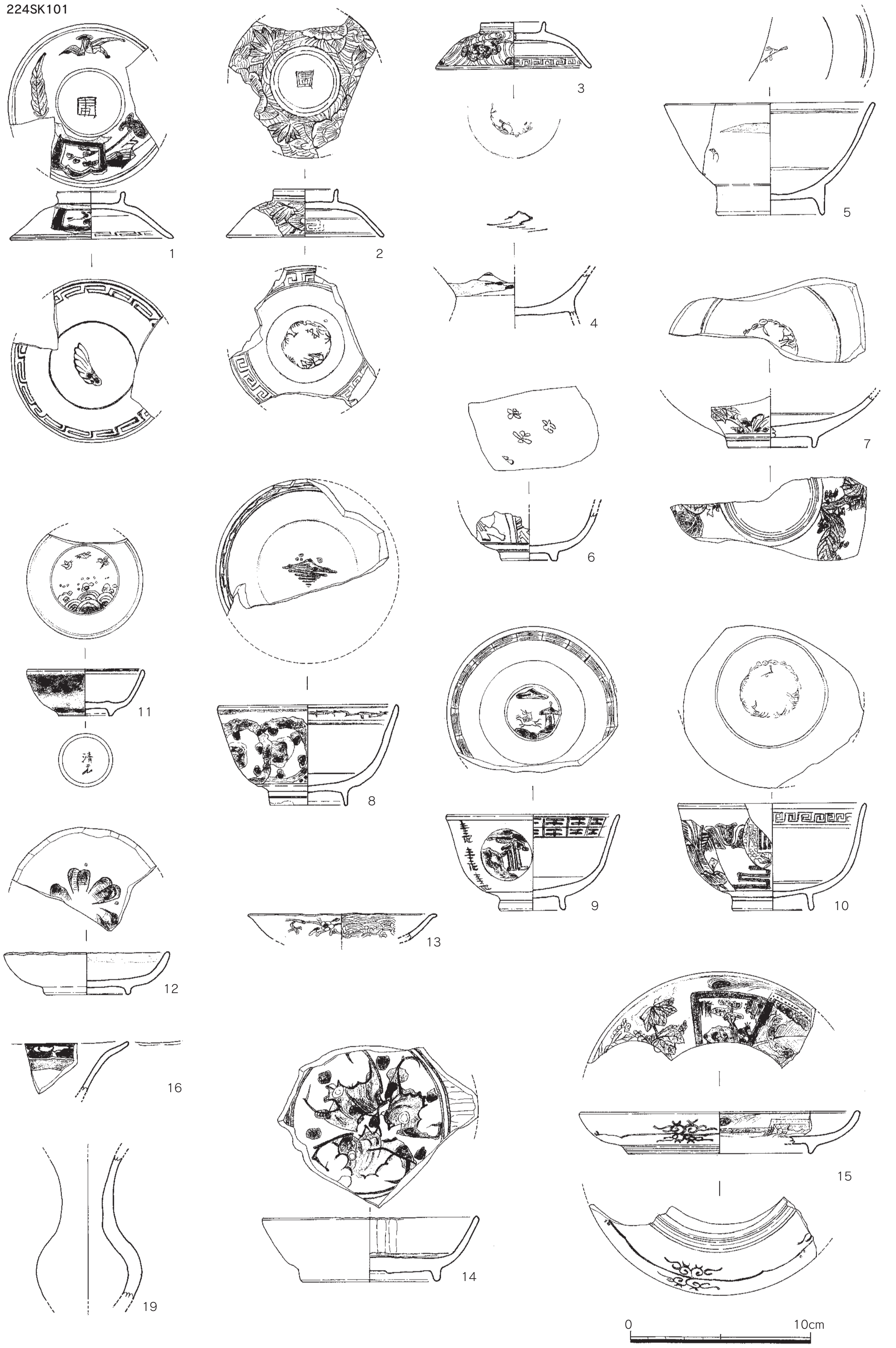



fig.76　第 224 次調査　土坑出土遺物実測図その 2（1/3）

15.6 ㎝、器高 2.3 ㎝、復元底径 10.0 ㎝を測る。内面には濃青色の呉須で草花文が施され、外面には唐草文が巡る。

鉢（16 ～ 18）16 は口縁のみの小片である。口縁端部が大きく外反し、内面に濃いコバルトブルーの呉須で、雲文が絵付けされる。17 は全体の 1/2 残存で、復元口径 18.5 ㎝、器高 6.4 ㎝、底径 9.0 ㎝を測る。口縁端部は 6 分割の輪花で、外側に屈曲した部分と内面見込みに青紺色の呉須で絵付が施される。底部は凹型蛇の目高台で、中央部分に渦福が描かれる。18 は底部のみの破片である。底部は釉拭き取り、三脚の高台がつく。底部と体部との屈曲部分には焼き継ぎ痕がみられる。内面には濃青色の呉須で山水文が描かれ、さらに朱に金縁で寿壷文が彩色され、二度焼きされている。底部には「米長九」と朱書されている。

国産磁器

皿（20）口縁端部のみ欠損の破片で、底径 3.9 ㎝を測る。内面見込みは輪状に釉剥げ後剥離剤を塗布しており、高台畳付部分は露胎している。素地は淡灰白色で微細な砂粒をわずかに含み密で、光沢と貫入のある透明釉がかかる。

小皿（21）全体の 1/3 残存で、復元口径 8.0 ㎝、器高 2.7 ㎝、復元底径 4.5 ㎝を測る。型押しによる成形で、菊花を表す。素地は微細な砂粒を含み白色できめ細かい。釉調は光沢のある透明釉がかかる。

鉢（22）口縁から体部のみの小片である。淡白灰色の精良な胎土で、光沢と貫入のある淡緑灰色の厚い釉がかかる。口縁端部は輪花で外面に屈曲する。欠損箇所にはホウシャなどによる欠け継ぎ焼きの痕跡が見られる。

国産陶器

椀（23・24）23 は口縁 2/3 欠損しており、口径 11.6 ㎝、器高 6.1 ㎝、底径 4.5 ㎝を測る。高台から底部にかけて露胎している。胎土は微細な砂粒をわずかに含む淡灰褐色で、光沢のある緑色味を帯びた透明釉で、口縁部のみにナマコ釉がかかる。24 は体部下半から底部にかけての破片で、底径 4.5 ㎝を測る。高台から底部にかけて露胎している。胎土は微細な砂粒を少量含み淡灰白色で、淡緑灰色のナマコ釉がかかる。

華瓶（19）口縁、底部を欠損する破片である。素地は微細な砂粒を含み密で、内面の一部と外面に飴釉がかかる。小型品である。

土瓶蓋（25 ～ 29）25 は完形。胎土は暗赤紫色で微細な砂粒を含み密である。硬く焼き締まり、光沢のある飴釉が天上部のみに施される。底部切り離しのイト切り痕は未調整なままである。26 ～ 28 はつまみ部分のみが欠損。26 の胎土は淡白褐色で精良、光沢と貫入のある白色の透明釉が天上部にのみ施される。27 は底部から内面にかけて煤が付着し、黒色化している。28 は白色で精良な胎土で、光沢のある淡白黄色の釉がかかる。29 は全体の 1/4 残存する。天上部はヘラ削りのち粗いナデ調整で、重ね焼き痕が残る。胎土は茶褐色で、砂粒を若干含みやや密である。天上部に茶褐色の釉がかかる。

土瓶（30 ～ 35）30 はほぼ完形で、口径 8.5 ㎝、器高 10.2 ㎝、底径 8.0 ㎝を測る。体部がソロバン状を呈し、下半からカキ目が施され、小さな三脚がつく。胎土は赤橙色で微細な砂粒を含み密で、光沢のある暗緑灰色の釉がかかる。底部に被熱による煤が付着し黒色化している。31 はほぼ完形で、口径 8.2 ㎝、器高 11.7 ㎝、底径 8.7 ㎝を測る。口縁端部と底部のみ露胎する。胎土は暗赤紫色で、細かな砂粒を含み密で、飴釉を施す。32 は体部 1/6 程度欠損で、口縁部の歪みがある。口径 10.2 ㎝、器高 12.4 ㎝、底径 6.7 ㎝を測る。体部がソロバン状を呈し、下半からカキ目が施され、小さな三脚がつく。胎土は茶褐色で密。光沢のある暗茶褐色の釉が施される。33・34 は胎土に微細な砂粒を少量含む灰褐色で、内面の体部下半と外面に透明釉がかかる。透明釉は胎土の上に白色の化粧土後、鉄釉や色絵での

絵付の後で施されている。33は体部上半のみの小片である。外面に草花文が施される。34は口縁から体部にかけての小片である。蓋の受け部がくの字を呈し、丸みを帯びた体部である。外面は亀甲文と草花文が施される。35は口縁から体部上半にかけての小片である。胎土は白色で、微細な砂粒を若干含み精良である。

徳利（36～39）36は全体の2/3残存で、口径4.8㎝、器高25.7㎝、底径7.6㎝を測る。胎土は白色で精良、光沢と貫入のある淡褐色の透明釉がかかる。外面には山水柄の鉄絵が施され、露胎する底部には墨書が書かれる。37は体部から底部にかけての破片で、底径9.1㎝を測る。胎土は砂粒を多く含みやや粗い淡茶褐色で、体部に飴釉に黒茶褐色の釉を重ねかけする。体部中央付近にイッチン描きによる文字が確認できる。38は体部下半から底部にかけての破片である。胎土は精良な淡白灰色で、貫入に褐色が入り網文様を呈す透明釉がかかる。高台畳付は釉掻き取りのため露胎する。39は体部下半から底部にかけての小片で、底径9.2㎝を測る。胎土は暗茶褐色で微細な砂粒を多く含みやや粗い。底部イト切りで、白色の砂が付着する。淡黄褐色の飴釉がかかる。

灰落ち（40）全体の1/3程度の残存で、復元口径10.4㎝、器高6.6㎝、復元底径10.0㎝を測る。胎土は茶褐色で細かな砂粒を少量含みきめ細かい。内面口縁付近から外面にかけて乳白色の化粧土の上に鉄絵で竹模様が施される。

すり鉢（41～42）タテに長い大きめの玉縁の口縁に片口を施し、やや脚の長い高台を持つ。すり目は底部から口縁に向けて隙間無く放射状に施される。41は口径36.5㎝、器高13.2㎝、底径13.1㎝を測る。胎土は赤褐色を呈す混入物の多いザラザラな粗いもので、茶褐色の鉄釉を施す。高台の底は露胎しており、内外面に重ね焼きの剥離材としての砂が付着している。内底部は逆に器面が重ね焼きの取り外しによって輪状に剥落している。筑前西新高取系の製品と思われる。42は口径36.5㎝、器高13.2㎝、底径15.9㎝を測る。胎土は黄褐色を呈す混入物の少ないきめの細かなもので、黒味を帯びた茶褐色の鉄釉を施す。高台の底は露胎しており、内面に重ね焼きの剥離材としての砂が輪状に付着している。内底部には5箇所に重ね焼きの方形の目跡が残る。底部外側に丸に正字の刻印を押す。産地は不明。

甕×壺（43）体部下半から底部にかけての破片で、復元底径12.5㎝を測る。内面に轆轤成形痕があり、底部が露胎し、砂粒の付着がある。胎土は暗灰色で砂粒を少量含みやや粗い。外面に光沢ある飴釉、内面には透明釉が施される。

甕（44･47）44は底部が残存しており器高12.3㎝、底径16.0㎝を測る。47はほぼ完形品で口径4.8㎝、器高25.7㎝、底径7.6㎝を測る。中型の甕で底に引き栓の口が付けられる酒壺の類である。栓の口の径は44は2.5cm、47は3cmを測る。胎土は微細な白色粒を含む程度の精製されたものできめが細かく明茶褐色を呈し、焼成は硬質で締まっている。光沢のある褐色の飴釉地の上に乳白色から緑灰色の藁灰釉を打ち掛けする。筑前高取系の製品か。

壺（45・46）45と46は直接接合しないが大きさや釉調から同一の製品と考えられ、45は口径12.4㎝、器高24.1㎝、46は器高18.1㎝、底径12.8㎝を測る。胎土は微細な白色粒を含む程度の精製されたものできめが細かく暗茶褐色を呈し、焼成は硬質で締まっている。光沢のある褐色の飴釉地の上に乳白色から灰緑色の藁灰釉を打ち掛けする。筑前高取系の製品か。

土師質土器

風炉（48・52）48は口縁から体部にかけての破片で、復元口径22.8㎝を測る。口縁端部は頚部から直行し、逆台形状を呈す。内外面ともにナデ調整を施し、外面頚部に叩き痕が残る。胎土は淡茶褐色で砂粒を多く含みやや密である。焼成はやや還元気味。52は脚部のみの破片である。全体的に形が歪んでおり、内面には煤が付着している。胎土は暗茶褐色で、微細な砂粒をわずかに含み密である。

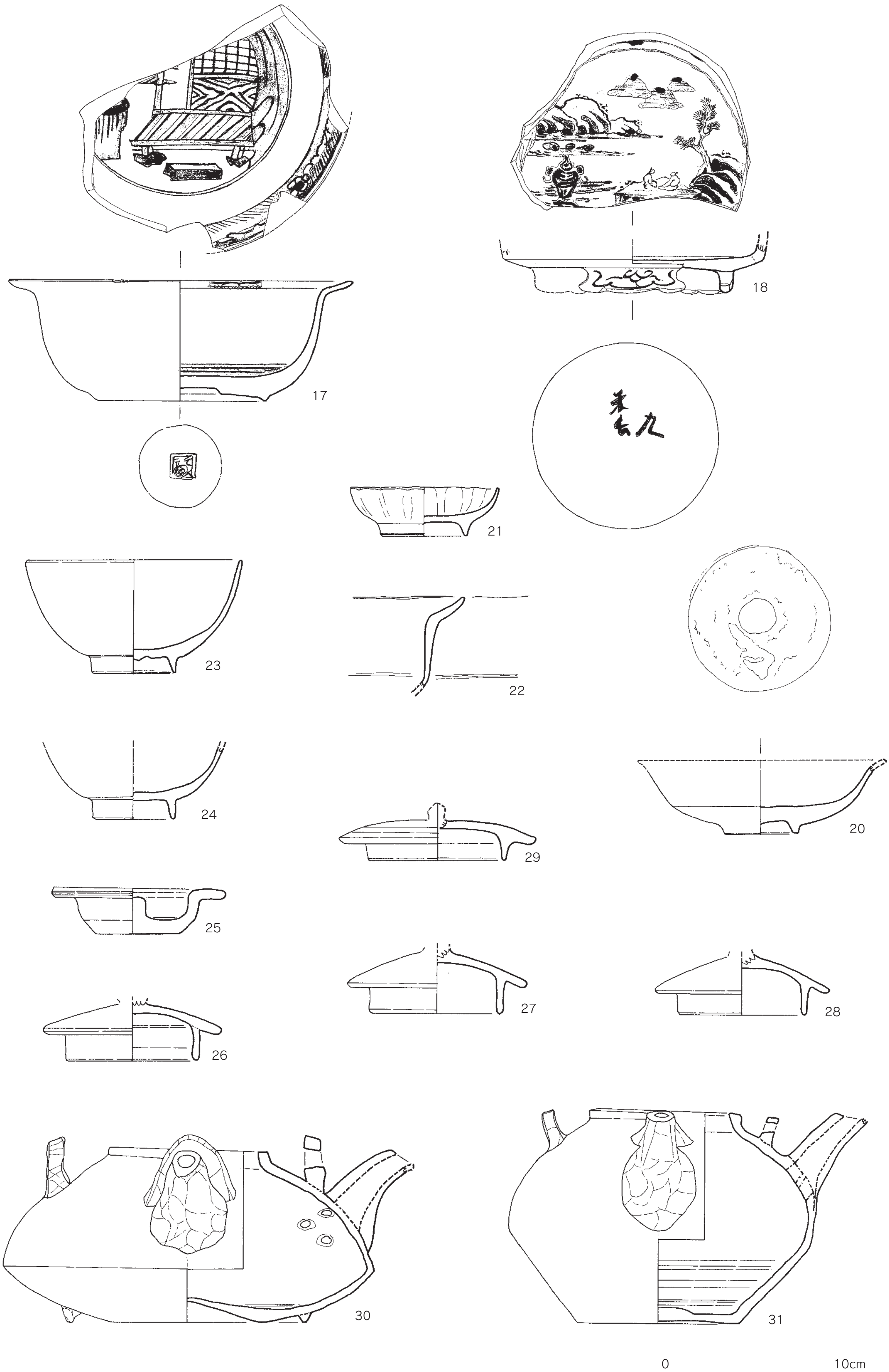



fig.77　第224次調査　土坑出土遺物実測図その3（1/3）

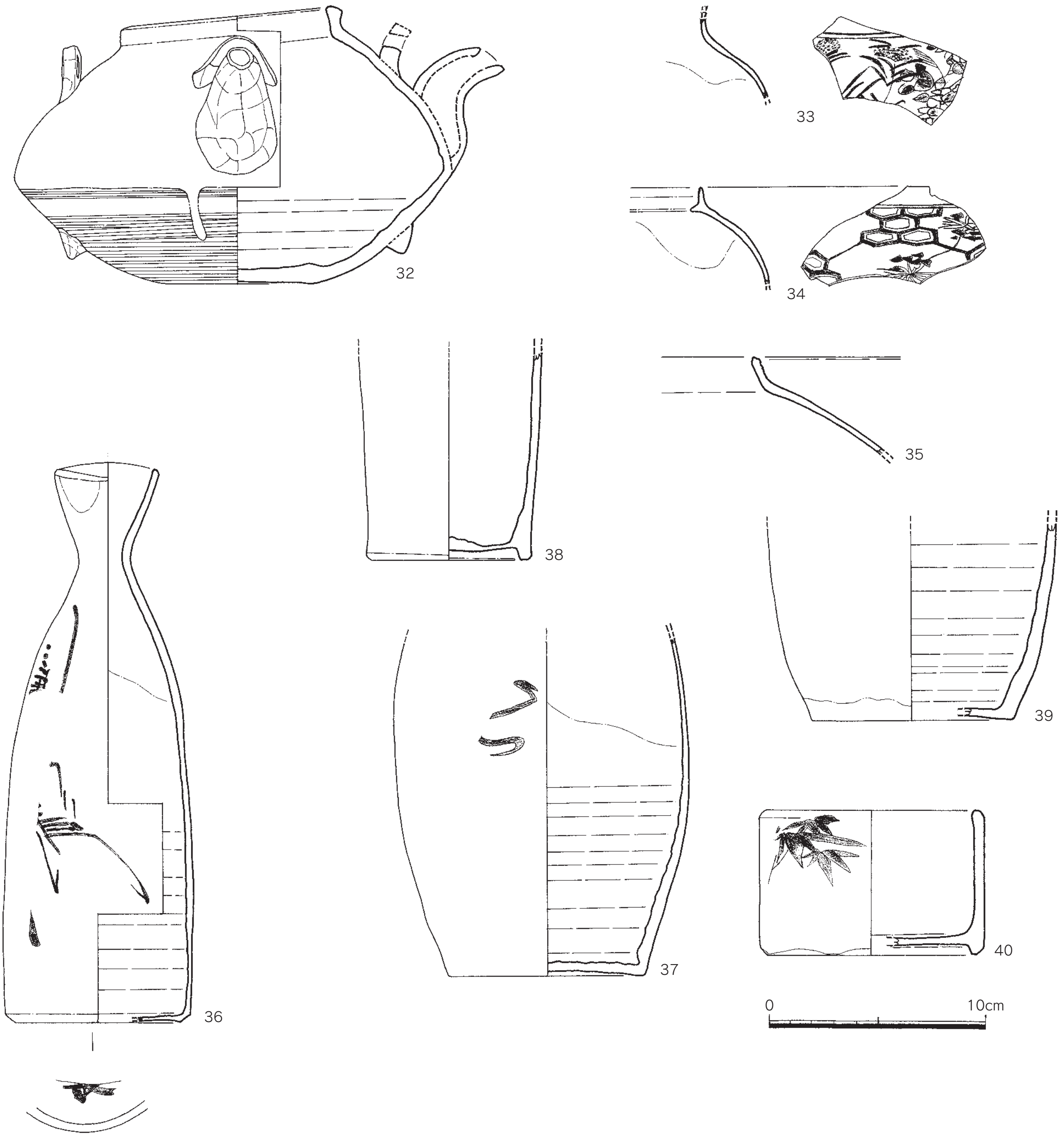



fig.78　第 224 次調査　土坑出土遺物実測図その 4（1/3、1/4）

火鉢（49･50）口縁～体部にかけての破片で、49 は復元口径 28.0 ㎝を測る。口縁端部は内面に突出し、断面が三角形状を呈す。内外面ともにナデ調整で、外面には押型の梅鉢文が押され、赤色顔料を塗布する。煙穴の上部には煤が付着する。胎土は暗褐灰色で、砂粒と金雲母を多く含みやや粗い。50 は口径 25.8 ㎝、器高 19.1 ㎝、底径 26.0 ㎝に復元される。口縁の一部が突出して外に開き、内側には棒状に突起した掛け子が貼り付けられている。内側は粘土紐接合の強い押さえの上に強い横方向のナデが施され、外面は細い条線の残る工具によるナデが施され、口縁上端部から下半部まで朱色の顔料が刷毛により塗布されている。胎土は 5mm 大の長石粒を多く含む粗い土で、焼成は硬質の土師質。

手焙り炉（51）天井部が欠損した小片で、復元底径 27.4 ㎝を測る。体部上部に窓が確認でき、外面にはヨコ方向のハケで、内面には指押痕で調整されている。底部は内面に突出した形状をもつ。底部から内面には煤が付着し、黒色化している。胎土は暗褐茶色で砂粒を多く含みやや粗い。

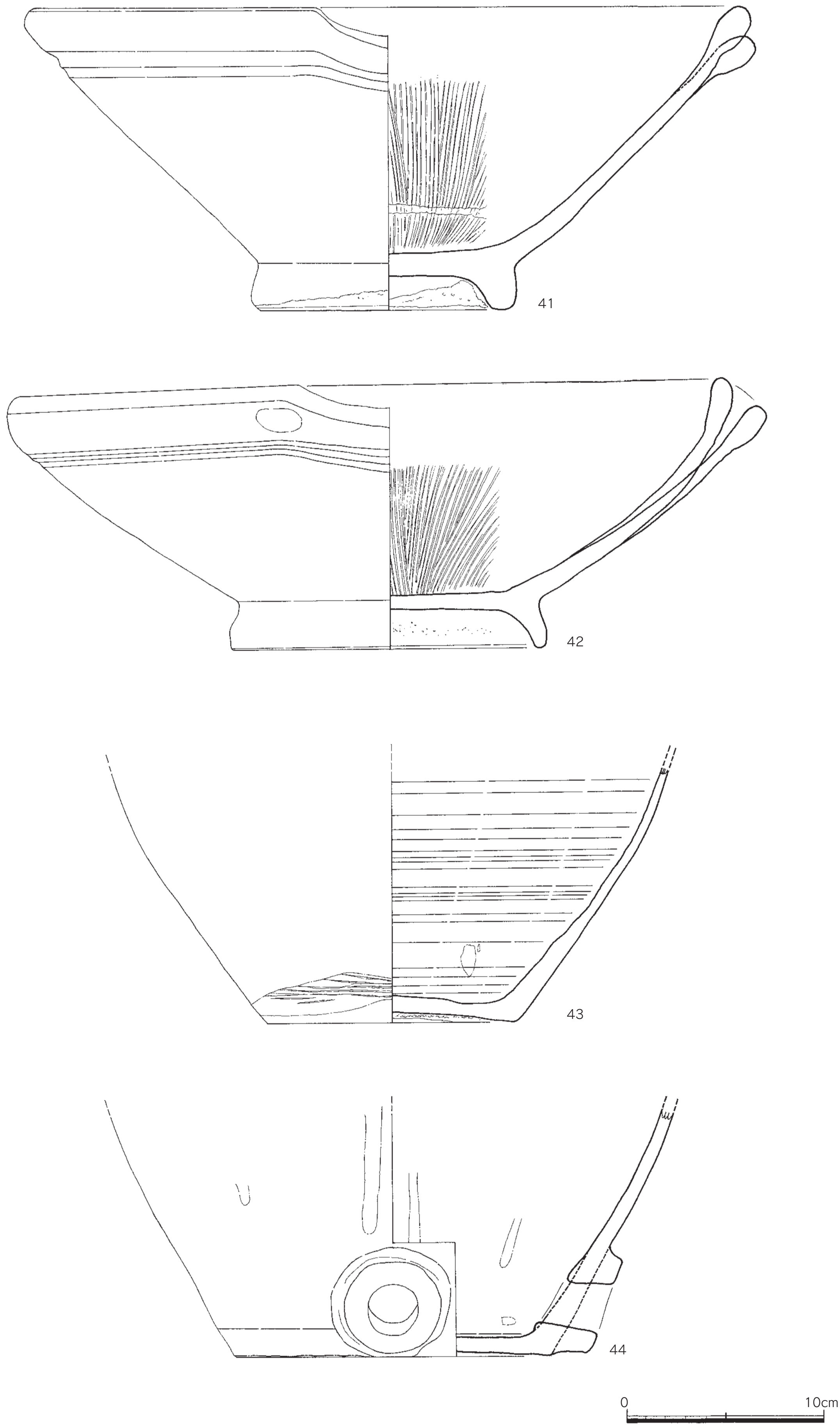



fig.79　第 224 次調査　土坑出土遺物実測図その 5（1/3）

焙烙（53）口縁部のみの小片である。口縁端部は器壁を外面に折り曲げで玉縁状を呈し、外面は型押し成形の側面のため器面に多くヒビが入る。胎土は淡橙色で微細な砂粒と雲母をわずかに含み密である。外面は煤が付着し、黒褐色化している。

火消し壺（54）口縁から体部にかけての破片で、復元口径 24.6 ㎝を測る。口縁端部は内面にくの字に屈曲し、内外面にはハケによるヨコナデ調整が施され、内面には指押痕も認められる。胎土は淡茶褐色で砂粒を多く含みやや粗い。

七輪サン（55 ～ 57）55、56 は 1/4 程度の破片で、直径 20.6 ㎝を測る。円形の穿孔があり、上部にはランダムなハケ目調整で、底部はナデ調整と被熱による二次焼成が見られる。57 は底部に淡白灰色の付着物がある。

七輪（58・60 ～ 61）58 は口縁部のみの破片である。口縁端部が内面に突出し、逆く字状を呈す。器高は 10.4cm を測る。60 と 61 は３嶺の波状口縁を持つタイプのもので、焼成は硬質の土師質で明るい橙褐色を呈す。嶺の内側には三角形の掛け子の突起が貼付され、そこから下位は桟の載る内壁と体部外壁との二重構造になっている。体部下位には隅丸方形の横に長い燃焼部の口が開口している。内面はハケ状工具による横方向のナデが、外面にはミガキに近い丁寧な平滑なナデが施される。

瓦質土器

七輪（59）３嶺の波状口縁を持つタイプの口縁部分の破片で、復元口径 27.0 ㎝を測る。口縁端部が外反し、外面はケズリ後丁寧なナデ調整により光沢があり、スタンプによる文様がある。内面は手づくね調整により掛子を成形している。胎土は淡茶灰色で黒色粒を多く含みやや粗く、燻しにより黒色化している。

風炉（62）体部下半から底部にかけての破片で、復元底径 16.8 ㎝を測る。全体に丁寧なナデ調整が施され、高台は底部に内湾する三脚がつく。胎土は淡褐灰色で、砂粒を多く含みやや粗い。焼成良好で、表面が燻しにより黒色化している。

大鉢（63）体部のみの小片である。内面はヨコ方向のナデ調整で、外面には梅の木模様が型押しされている。胎土は黄茶灰色で、砂粒を多く含みやや粗い。内外面は燻しにより黒色化し、焼成良好である。

火鉢（64・65）64 は飾り把手部分のみの小片である。内面はヨコナデ調整、外面には獣面と六角同心円文が型押しされる。胎土は黒茶灰色で砂粒をやや多く含み密である。65 は全体の 1/2 程度残存し、復元口径 20.9 ㎝、器高 21.2 ㎝、復元底径 17.9 ㎝を測る。口縁端部は内側に突出した形状をもち、垂直に立ち上がる６㎜ほどの器壁に三角形の高台がつく。外面には型押しによる鱗状の模様がつき、丁寧にナデ調整を施す。底部中央に接合痕があり、縦二分割の型による成形後、内面を刷毛状工具でナデて仕上げたものと考えられる。胎土は砂粒を多く含みやや粗い。断面は褐灰色で、表面は燻しにより黒色化している。

瓦類

軒丸瓦（66 ～ 72）66・67、69 ～ 72 は軒部分の巴文と珠文の特徴から、同版の瓦と考えられる。巴文は右回りで太く、13 の珠文をもつ。凸面は縦方向のヘラによるナデ調整が行われ、凹面には細かな布目痕が残る。胎土は淡灰色で、やや大粒の砂粒を多く含み粗い。焼成は良好で、瓦質で燻しも均一である。

丸瓦（73）全体の 1/2 程度の破片で、長さ 25.7 ㎝、幅 11.0 ㎝、厚さ 1.8 ㎝を測る。凸面は縦方向の丁寧なナデ調整で、凹面には布目痕が残る。瓦中央に釘で固定するための１㎝ほどの穿孔がある。胎土はややあああ粒の炭化物を多量に含みやや粗く、内外面ともに光沢のない暗灰色を呈す。

軒平瓦（74・75）74・75 は軒の文様が均等唐草梅鉢文である。凹面は縦方向の丁寧なナデ調整で平

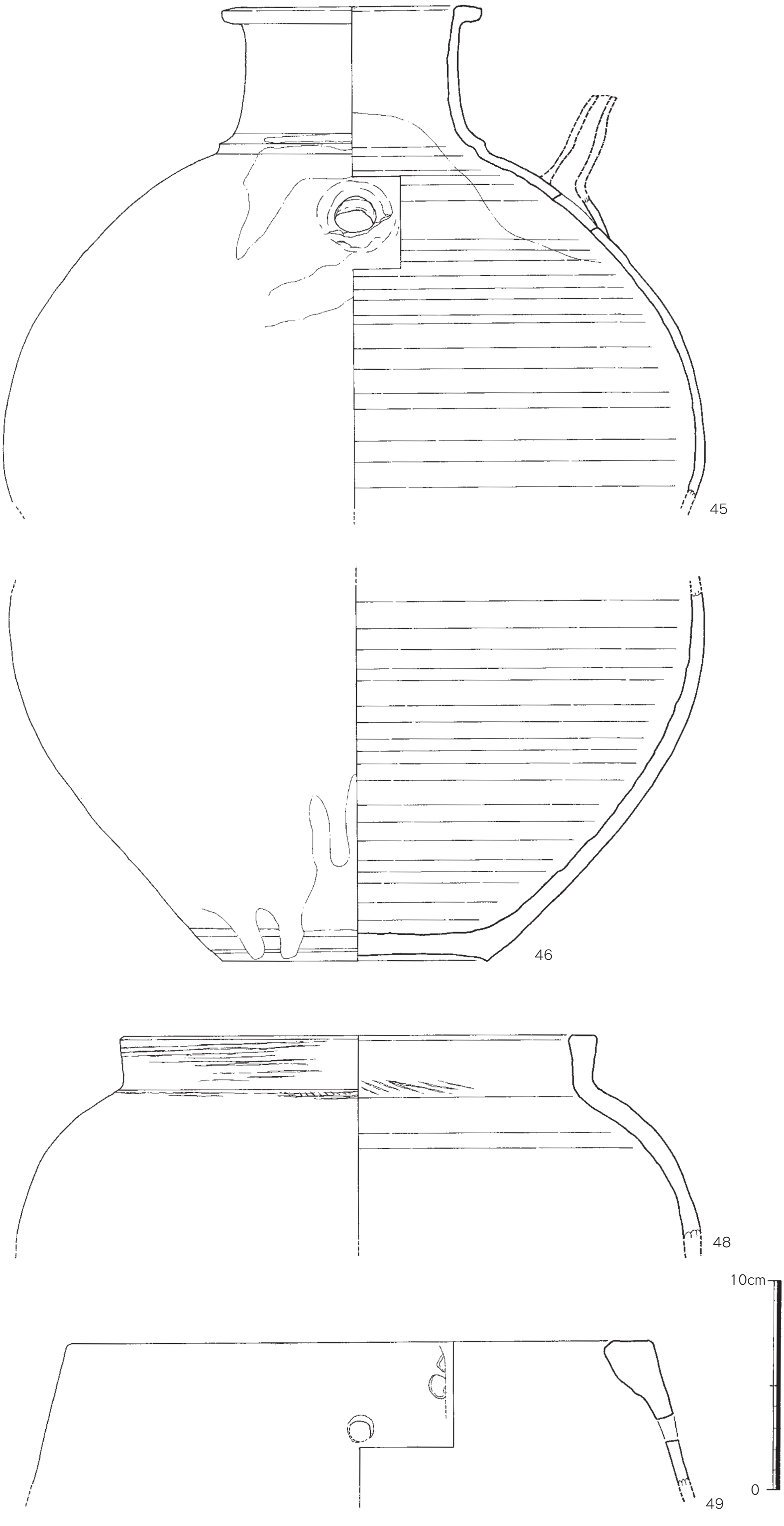
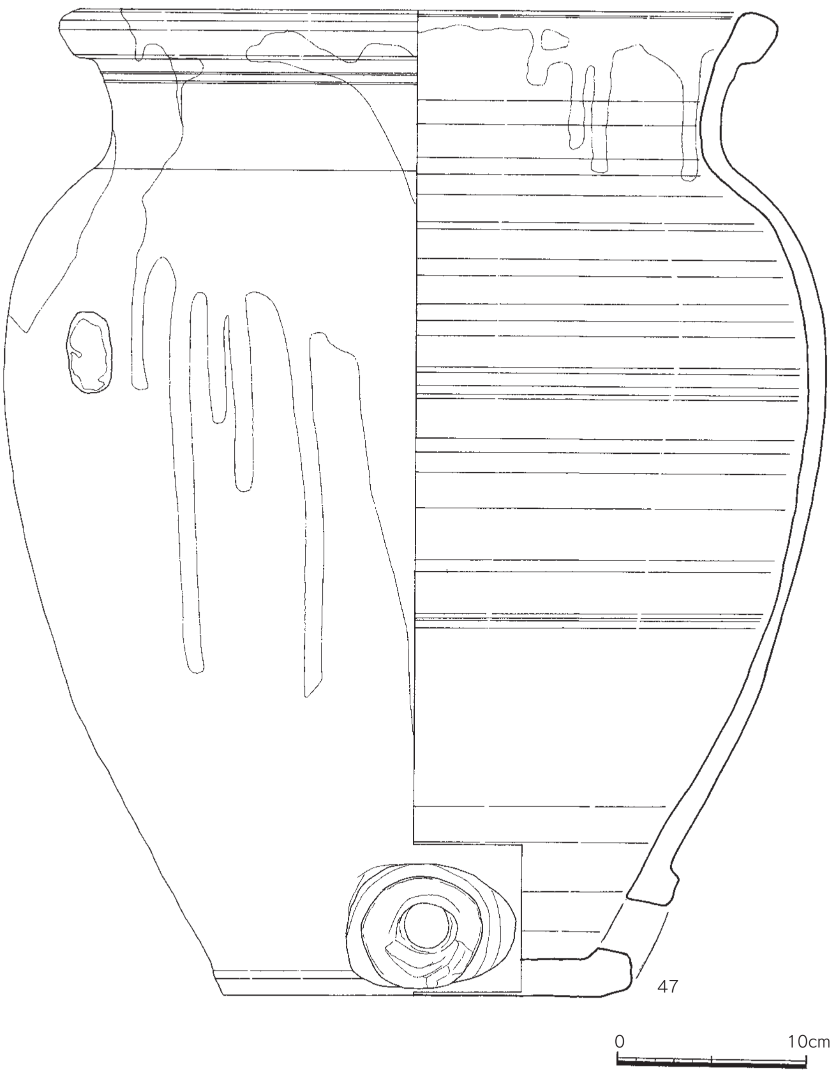



fig.80　第 224 次調査　土坑出土遺物実測図その 6（1/3）



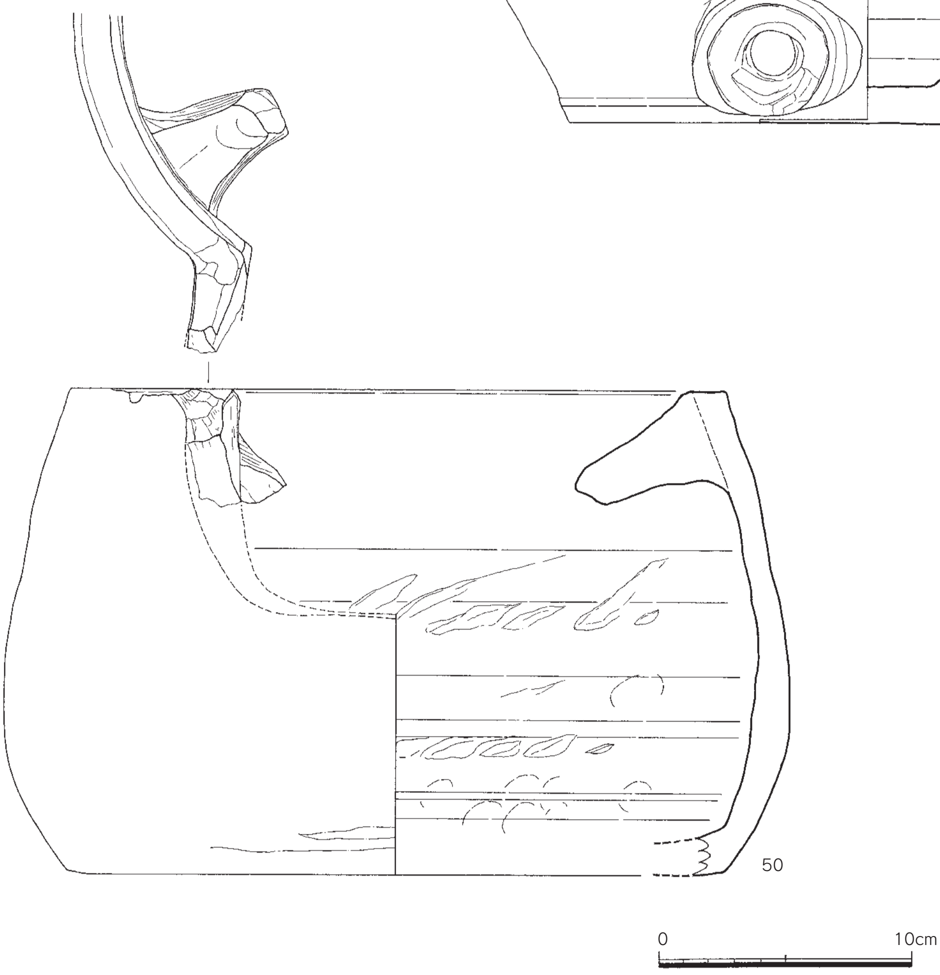




fig.81　第 224 次調査　土坑出土遺物実測図その 7（1/3、1/4）

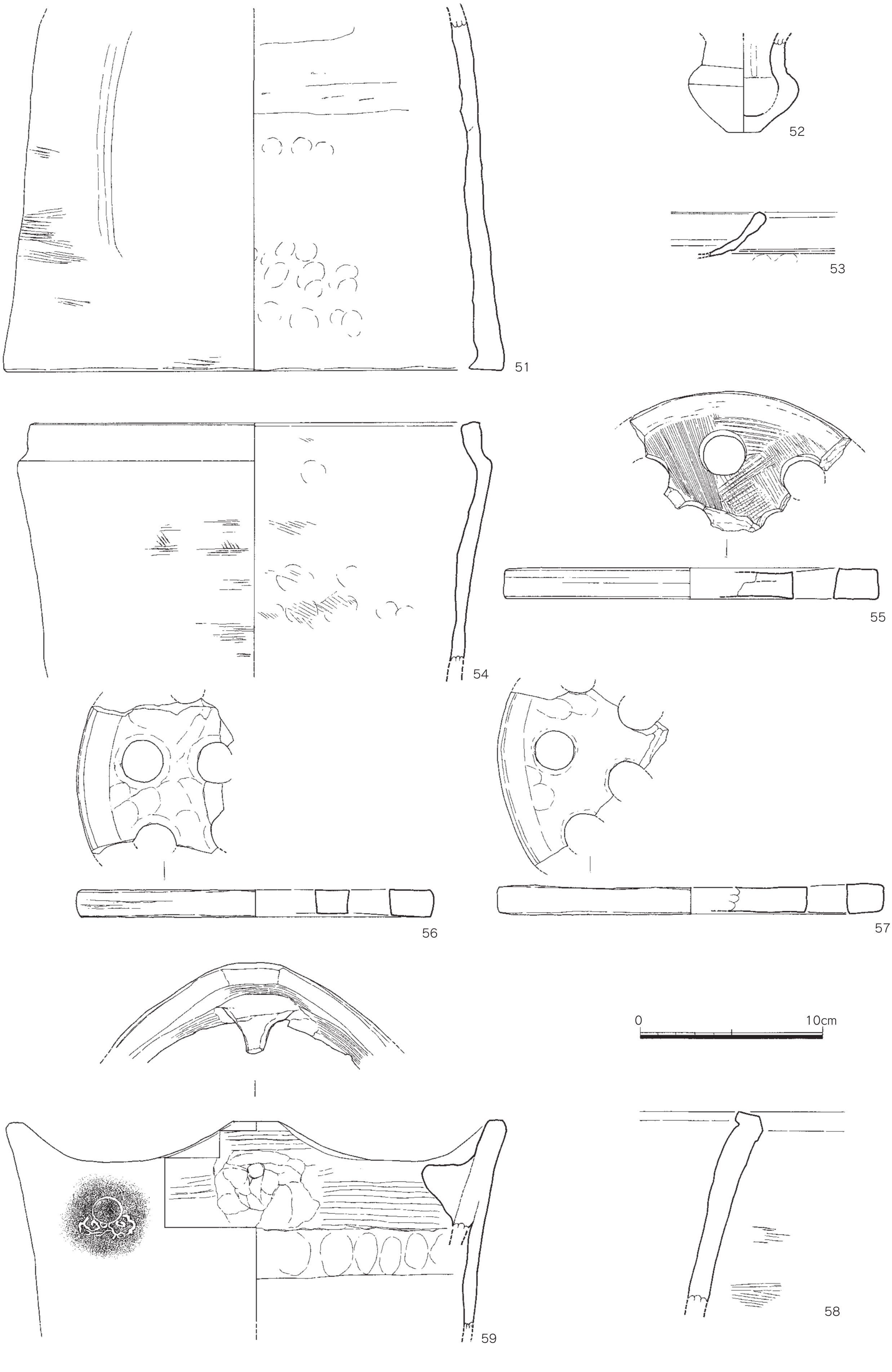



fig.82　第 224 次調査　土坑出土遺物実測図その 8（1/3）

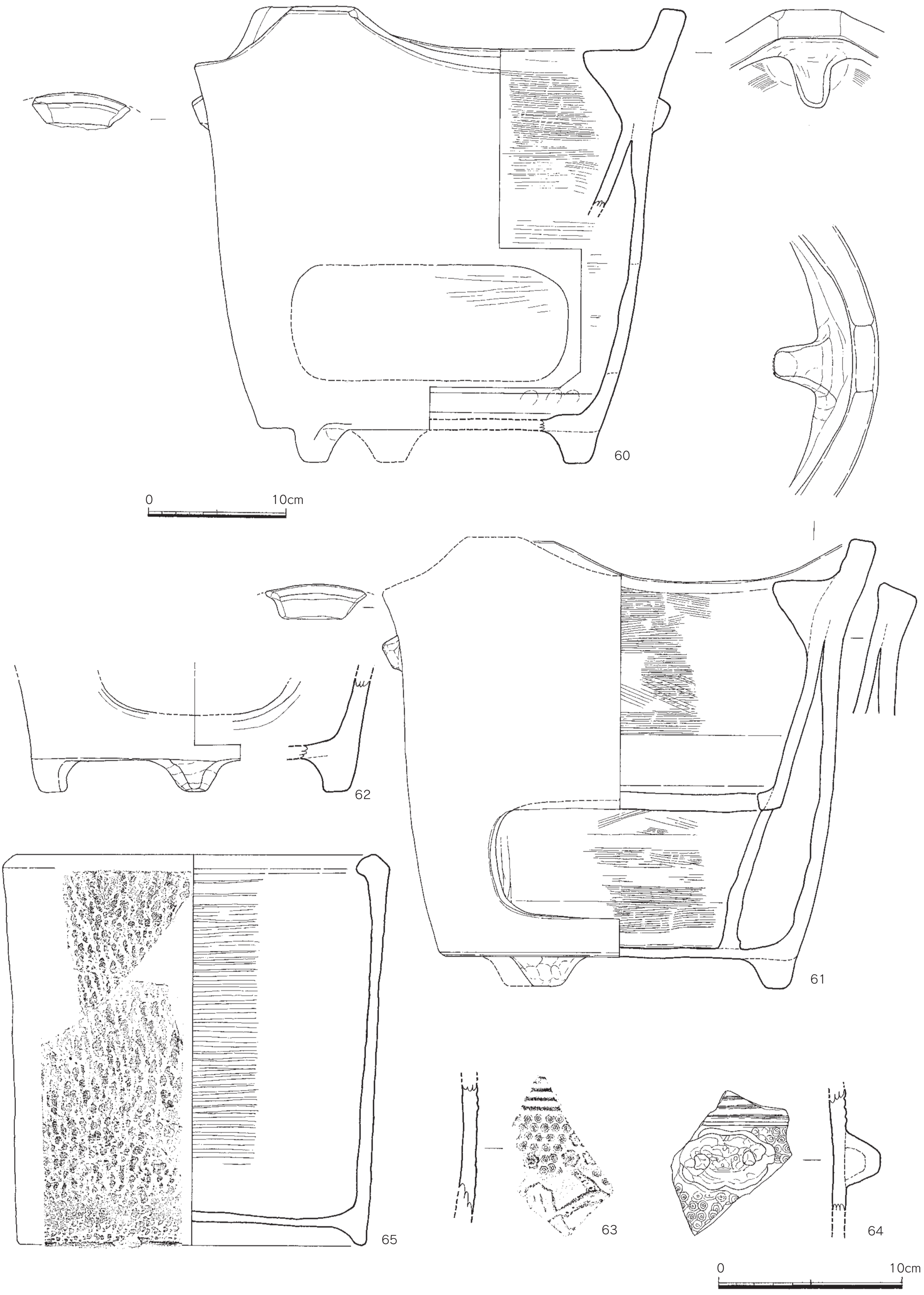



fig.83　第 224 次調査　土坑出土遺物実測図その９（1/3、1/4）

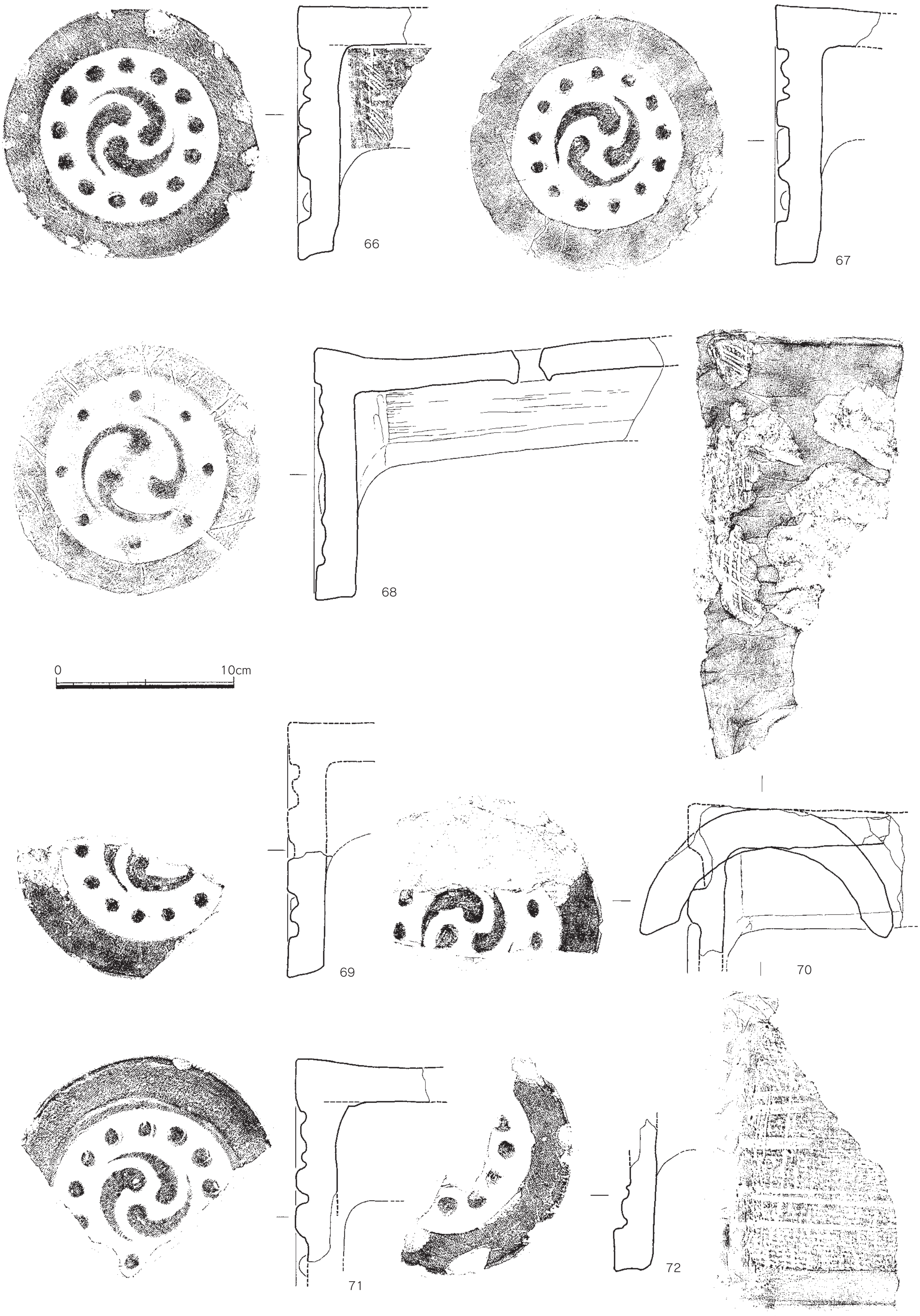



fig.84　第 224 次調査　土坑出土遺物実測図その 10（1/3）

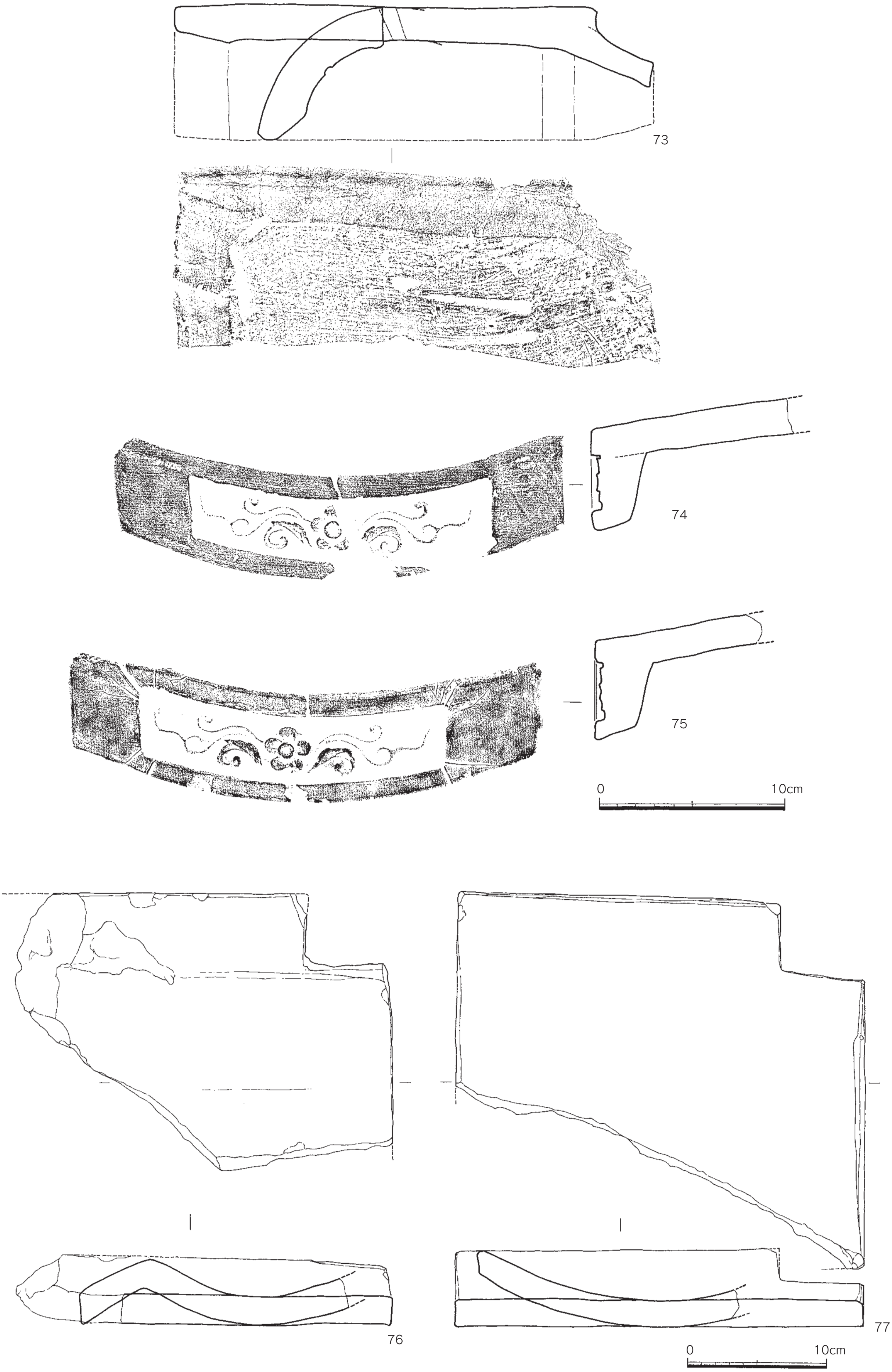



fig.85　第 224 次調査　土坑出土遺物実測図その 11（1/3、1/4）

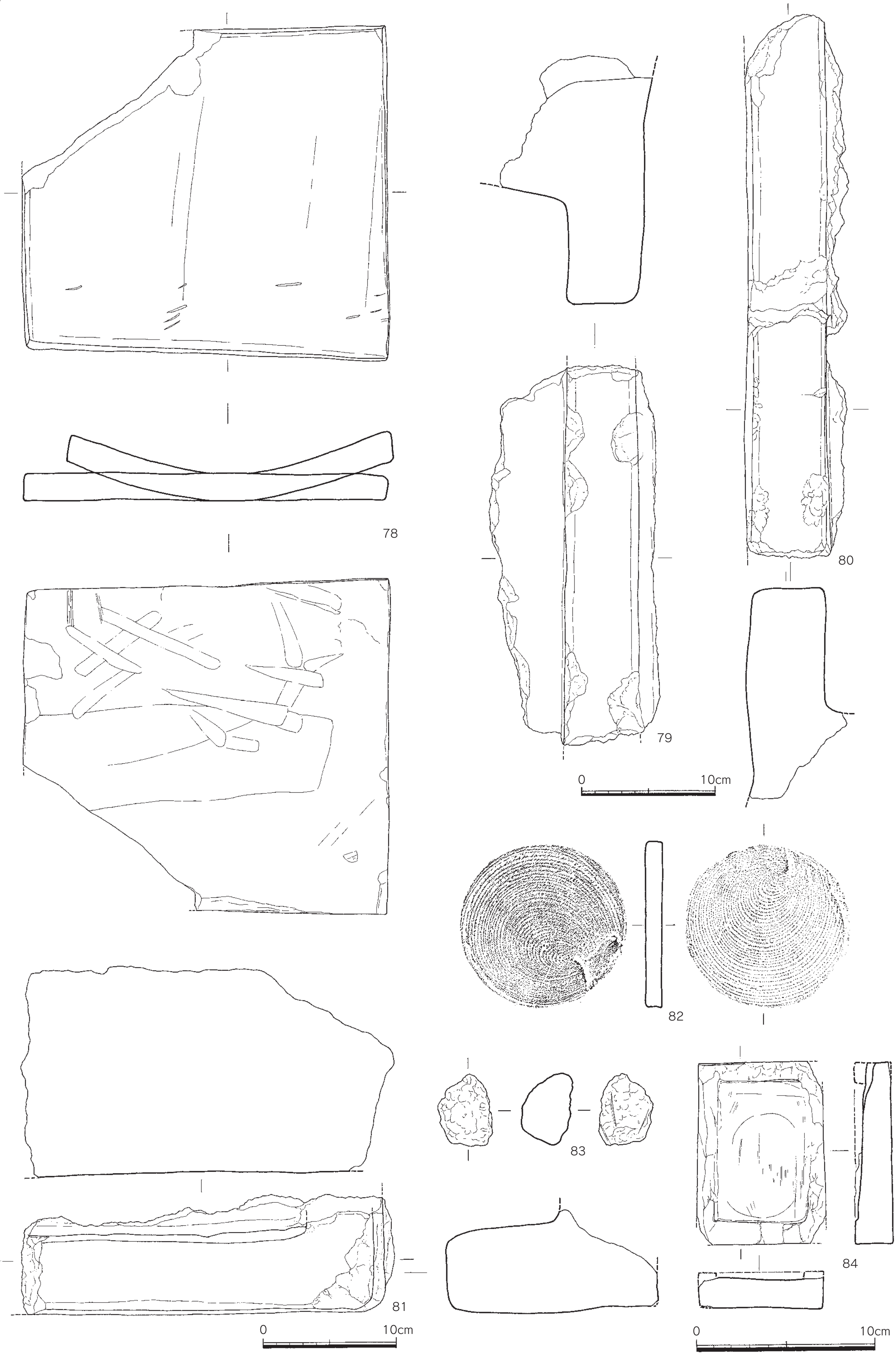



fig.86　第 224 次調査　土坑出土遺物実測図その 12（1/3、1/4）

滑である。凸面は軒の接合のためのヨコナデ調整が施され、凹面に比べると器面がザラザラである。軒部分は丁寧に面取りされ、文様部分に白雲母が多く付着している。胎土には大粒の砂粒と炭化物粒が多く含まれ、粗い。断面は淡灰色で、凹凸面ともに燻しにより黒灰色を呈す。梅鉢紋の瓦の分布は天満宮境内、馬場、連歌屋遺跡など天満宮周辺に限られるといっても良い状況で出土しており、境内および門前町での使用に特化して生産された特殊な瓦である。現在のところその始源の時期は馬場遺跡6次調査 SX046 の 18 世紀後半頃に置かれ、幕末から明治期には当地においては通有の文様として軒の丸平問わず採用されている。軒平の梅鉢紋には唐草の展開で大きく2系統2タイプの区分が可能で、系統は上段の唐草が上から下に向かうもの（I 系）と下から上にカールするもの（II 系）に分けられる。さらに中段2本目の唐草は二手先になるが、その一手目の先が上から下に下がるもの（A タイプ）と下から上に上がるもの（B タイプ）に分けられる。今のところ A タイプのものは馬場6次調査 SX046 にあるため 18 世紀後半には存在し、B タイプのものは連歌屋1次 SK007 のものが古く 19 世紀中頃以降には確実にあるといえる。本出土例は I 系統 B タイプに属すもので、残存状態が良く江戸末期の軒平梅鉢紋として好例といえる。現在、天満宮周辺の定遠館、光明寺、太郎左近社、大藪家などに梅鉢紋の軒瓦が現役で使用されており、それと同氾の木型を五条平井家が所有していることから、これら天満宮周辺の梅鉢紋瓦の生産に宰府六座の平井家が関わっていたことが知られる。現在使用されている梅鉢紋様は江戸期の出土遺物と比較すると系統は踏襲しながらも意匠に変容が認められ、後時的な様相として捉えられる。

平瓦（76 ～ 78）表面は燻し焼成により光沢の少ない黒色を呈し、芯は白灰色を呈す。胎土は白色の長石粒や炭化物粒子を多少含むやや粗いものであり、空隙も多々みられる焼成は硬質にあがっている。76 はへ字に屈曲するいわゆる桟瓦で長さ 27.1cm 以上、幅 19.5cm 以上、厚さ 1.9cm を測る。屈曲する隅角はタテ 6.5ラヨコ 5.5cm の方形の欠けが設けられる。77 は長さ 26.5cm、幅 13.6cm 以上、厚さ 1.6cm を測る。屈曲する隅角は 5.5cm 四方の方形の欠けが設けられる。78 は長さ 27.2cm、幅 24.4cm 以上、厚さ 2.0cm を測る。

土製品

池縁（79 ～ 81）石灰混土による固化した土の塊であり、黄味がかった白色を呈す。長石や石英が多く含まれるザラザラな素材である。端の部分が高さ 15cm の縁を持って矩形に立ち上がり槽状を呈している。園地中に小規模な池を造りつけた部材片かと思われる。

ハマ（82）完形で、直径 9.4 ㎝、厚さ 0.9 ㎝を測る。両面ともにイト切り後未調整のままである。胎土は暗橙色で微細な砂粒を含む密である。窯道具は連歌屋遺跡でも出土している。

焼土塊（83）胎土は暗茶褐色で、やや大粒の砂粒とスサを多く含み粗い。

石製品

硯（84）縁が欠損している破片で、タテ 10.3 ㎝、ヨコ 7.2 ㎝、厚さ 2.1 ㎝を測る。石材は灰色の滑石である。丘部分に海方向の擦痕が残る。

224SK301 出土遺物（fig.87、CD 写真 061・062）

染付（輸入）

皿（1）底部のみの明染付磁器である。内面には淡紺色の呉須で草花文、底部には高台外周と内側に二条の線が施される。素地は砂粒をわずかにふくむ淡白色で、精良である。

224SK302 黒色土出土遺物（fig.87、CD 写真 060 ～ 062）

土師器

坏 a（1･2）1、2 は底部イト切り後板状圧痕が残る。1 は口縁 2/3 欠損で、復元口径 11.7 ㎝、器高 2.6 ㎝、

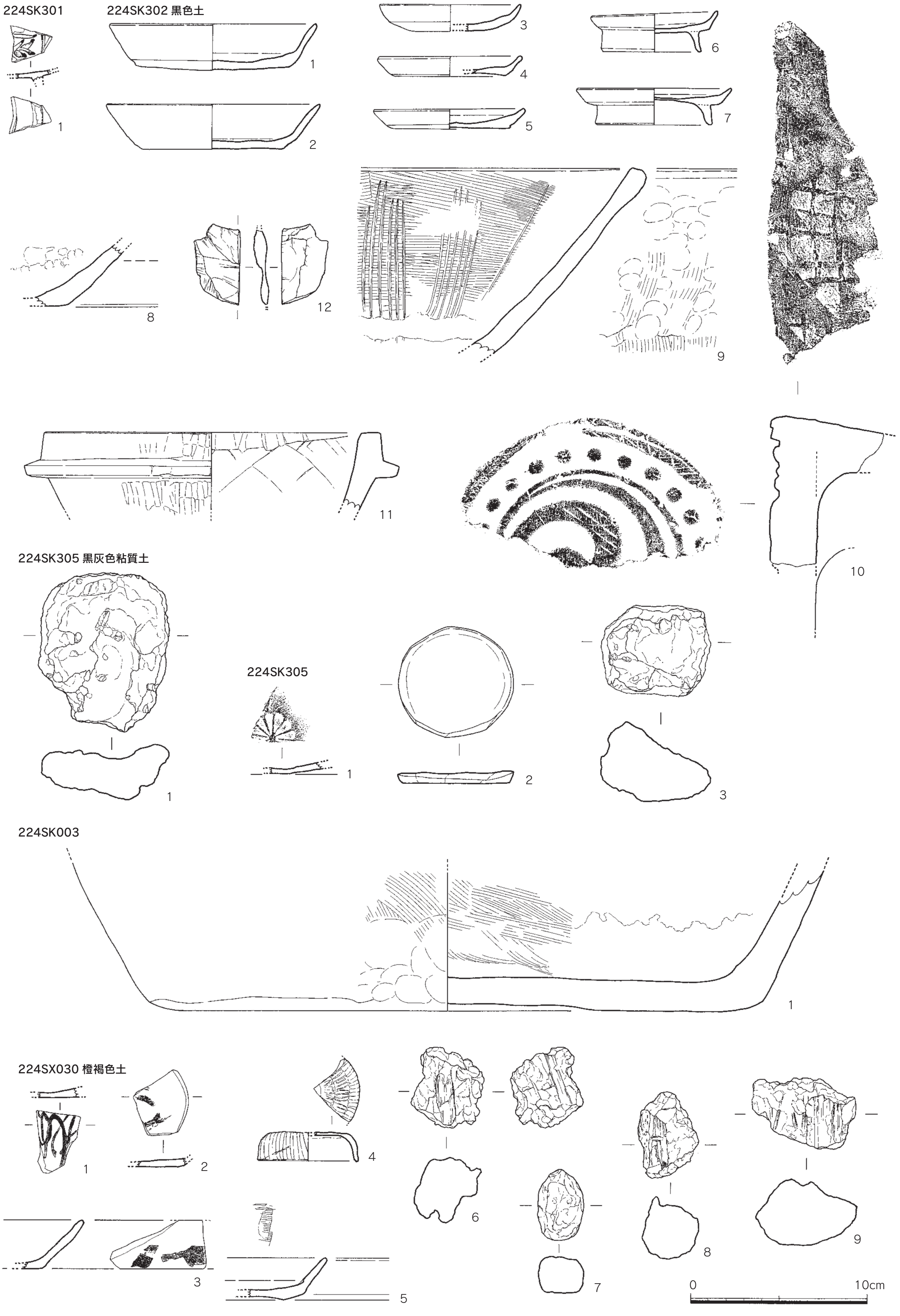



fig.87　第 224 次調査　土坑およびその他の遺構出土遺物実測図（1/3）

底径 9.3 ㎝を測る。胎土はにぶい褐灰色で砂粒と雲母を含みやや密である。2 は 2/3 残存で、復元口径 12.1 ㎝、器高 2.6 ㎝、復元底径 8.1 ㎝を測る。胎土は淡茶褐色で、砂粒をわずかに含みやや粗い。
小皿 a（3 ～ 5）3 ～ 5 は底部イト切りで、内面に不定方向のナデが施される。3 は 1/3 程度の残存で、復元口径 8.0 ㎝、器高 1.5 ㎝、復元底径 6.0 ㎝を測る。口縁端部がやや内湾する。胎土は淡灰褐白色で細かな金雲母を多く含み精良である。4 は 1/2 程度の破片で、復元口径 8.1 ㎝、器高 1.1 ㎝、復元底径 6.6 ㎝を測る。やや外反する口縁部である。胎土は淡褐白色で砂粒をわずかに含み密である。5 はほぼ完形である。胎土は淡褐灰色で、砂粒をわずかに含みやや密である。
小皿 c （6・7）6、7 は口縁端部は外反し、やや外踏ん張りな高台である。底部切離しは高台貼り付けのナデにより不明である。6 はほぼ完形で、口縁 7.2 ㎝、器高 2.1 ㎝、底径 5.7 ㎝を測る。胎土は淡褐色で砂粒をわずかに含み精良である。7 は口縁 1/2 欠損の破片で、復元口径 8.8 ㎝、器高 2.1 ㎝、底径 6.6 ㎝を測る。胎土は淡褐白色で、細かな砂粒を雲母も若干含み精良である。
須恵質土器
鉢（8）底部のみの小片である。内面見込みは使用による剥離が見られ、黒褐色でガラス質が付着している。胎土は砂粒を多く含みやや粗く、2 次被熱により酸化しにぶい赤茶色を呈す。
瓦質土器
鉢（9）口縁から体部下半にかけての破片である。口縁端部はやや玉縁状を呈し、内面はヨコ方向のハケ目後に 6 条のすり目が放射状に施される。外面はタテ方向のハケ目後に指押さえにより調整している。胎土は淡白白色で砂粒を少し含みやや密で、焼成良好で硬質である。口縁から外面にかけて黒色化している。A Ⅲ類。
瓦類
軒丸瓦（10）瓦当部 1/2 程度の破片で、推定 24 コの珠文をもつ三つ巴文である。瓦当には版の木目痕が良く残り、丸瓦部分には斜変形格子目叩きが施される。胎土は淡灰色で、大粒の砂粒や炭化物を多く含みやや粗い。瓦質な焼成で黒灰色に燻されている。
石製品
石鍋（11）口縁部 1/4 程度の破片で復元口径 19.0 ㎝を測る。石材はやや緑がかった灰色の滑石である。内外面ともにケズリ調整で、外面には煤が付着し黒灰色化している。B 類。
砥石（12）両面ともに刃物の刃先を研いだ痕跡が残り、厚さ 0.8 ㎝を測る。石材は淡灰白色の珪質泥岩である。
224SK305 黒灰色粘質土出土遺物（fig.87、CD 写真 061・062）
金属製品
椀形滓（1）タテ 5.2 ㎝、ヨコ 6.2 ㎝、厚さ 4.0 ㎝を測る。底部が椀形状で内面は高低差のある三角形を呈す。内面には灰黄色の膜状のものが表面を覆っており、炭化物や大粒の砂粒が多く含まれる。
224SK305 出土遺物（fig.87、CD 写真 061・062）
土師器
小皿 a（1）底部のみの小片である。底部イト切りで、内面見込みに菊花文のスタンプが施される。胎土は淡褐色で、砂粒をわずかに含み精良である。
土製品
円盤状加工土製品（2）タテ 5.9 ㎝、ヨコ 6.5 ㎝、厚さ 0.7 ㎝の楕円形状を呈す。底部イト切りと板状圧痕がみられ、小皿 a を円盤状に加工している。
金属製品

椀形滓（3）タテ 6.0 ㎝、ヨコ 8.4 ㎝、厚さ 2.4 ㎝を測る。底部がやや歪な椀形状で、内面が凹状に窪んでいる。砂粒を多く含み、表面には炭化物の塊が付着している。

224SX001 出土遺物（fig.89、CD 写真 066・067）

肥前系染付

皿（1）底部のみの破片である。見込み部分に呉須で草文が入り、底部には一条の界線を巡らす。底部には「コメ長□□」の朱書が施される。

国産陶器

灯火具（2）完形品で、口径 4.8 ㎝、器高 2.5 ㎝、底径 5.0 ㎝を測る。口縁端部の釉は拭き取られ、油受け部には剥離剤の砂粒が付着する。底部は糸切りで、体部下半は露胎である。素地は白色の砂粒を含む暗赤褐色で、飴釉が施される。

瓦類

軒丸瓦（3）瓦当部 2/3 のみの破片である。中房 1+8 で、内区には複弁の菊花弁文が入る。胎土は淡茶灰色の土師質で、砂粒を多く含みやや粗い。九歴分類 143 ｂ。

224SX002 出土遺物（fig.89、CD 写真 066・067）

朝鮮陶器

椀（1）底部 1/4 残存の破片である。復元口径 14.0 ㎝、器高 6.3 ㎝、復元底径 6.0 ㎝を測る。口縁端部はやや玉縁状で、内面見込みと高台部分に目跡による釉の剥落がみられる。素地には微細な白色砂粒と黒色粒子を含み、ピンホールが多く認められやや粗い。焼成はやや軟質で、不透明で乳白色の透明釉が薄くかかる。

224SX003 出土遺物（fig.87、CD 写真 068）


fig.88　第 224 次調査　その他の遺構出土遺物実測図その 1（1/3）

瓦質土器
大甕（1）底部の破片で器高 8.0 ㎝、底径 34.8 ㎝を測る。表面は燻し焼によって光沢のない黒色を呈し、芯は白灰色を呈す。器面はハケ状工具によってナデて仕上げられる。内面には横方向の帯状に黄白色の付着物（尿酸カルシウムか）が見られる。大宰府では馬場 6 次 SX044 や日焼遺跡 7ST054、観世音寺境内 130SX3866,3868 などで同時期の完形品が報告されており、器高は 60 ～ 90cm になるものである。江戸後期に棺桶や便槽、肥桶など肥前系の大甕を補完する用途で使用されている。近隣で生産されたものと考えられるが、窯場は不明である。
224SX008 出土遺物（fig.89、CD 写真 066・067・069）
土師器
坏 a（1･2）1、2 ともに底部イト切り後板状圧痕が残る。1 はほぼ完形で、口径 13.4 ㎝、器高 2.3 ㎝、底径 9.4 ㎝を測る。胎土は微量の砂粒を含み精良で、一部に黒色化した部分が残る。2 は全体の 1/3 程度残存で、復元口径 15.0 ㎝、器高 3.0 ㎝、復元底径 10.9 ㎝を測る。胎土は淡灰黄色で、微量の砂粒を含み精良である。
丸坏（3）底部のみの破片である。内面にミガキ b 調整が見られ、底部ヘラ切り後板状圧痕がある。胎土は淡灰色で精良である。
小皿 a（4･5）4、5 ともに底部イト切り後に板状圧痕が残る。4 は 1/2 程度の残存で、復元口径 8.4 ㎝、器高 1.1 ㎝、復元底径 7.3 ㎝を測る。胎土には微細な金雲母を含み密で、淡灰褐色を呈す。5 は口縁部 1/4 残存で、復元口径 8.8 ㎝、器高 1.2 ㎝、復元底径 6.5 ㎝を測る。胎土は灰褐色で、微細な砂粒を含み密である。
中国陶器
壺Ⅳ（6）口縁～体部にかけての破片である。素地は黒色班を少量含み暗灰色で精良堅緻。釉調は光沢のない暗黒茶褐色である。Ⅳ類。
224SX013 出土遺物（fig.89、CD 写真 066・067）
土師器
坏 a（1）口縁～底部にかけての小片である。復元口径 12.7 ㎝、器高 2.3 ㎝、復元底径 8.3 ㎝を測る。口縁部は外反し、底部イト切りである。胎土は砂粒を若干含む淡橙褐色である。
小皿 a（2）全体の 1/8 程度の小片で、復元口径 7.5 ㎝、器高 1.2 ㎝、復元底径 5.8 ㎝を測る。口縁部はやや内湾し、底部イト切り後板状圧痕が残る。
瓦器
椀 c（3）底部のみの小片である。内面にはミガキ c がみられ、外踏ん張りの貼り付け高台がつく。胎土は砂粒を若干含み密で、色調は淡白褐色で燻しが不十分なため、黒色化していない。
土製品
トリベ（4）全体の 1/4 程度の破片である。復元口径 7.0 ㎝、器高 3.3 ㎝を測る。外面に手づくねによる指圧痕が見られる。外面はにぶい灰褐色や茶褐色で、口縁から内面にかけて淡灰黒色を呈す。内面には淡白色の付着物が残る。
224SX016 出土遺物（fig.89、CD 写真 066・067）
土製品
瓦玉（1）タテ 2.4 ㎝、ヨコ 2.2 ㎝、厚さ 1.9 ㎝を測る。黒灰色の瓦質の瓦を打ち欠いた調整が側面に残る。
224SX022 出土遺物（fig.89、CD 写真 066・067）
瓦玉（1）タテ 4.1 ㎝、ヨコ 4.3 ㎝、厚さ 1.8 ㎝を測る。暗灰色の近世瓦を転用したもので、側面に

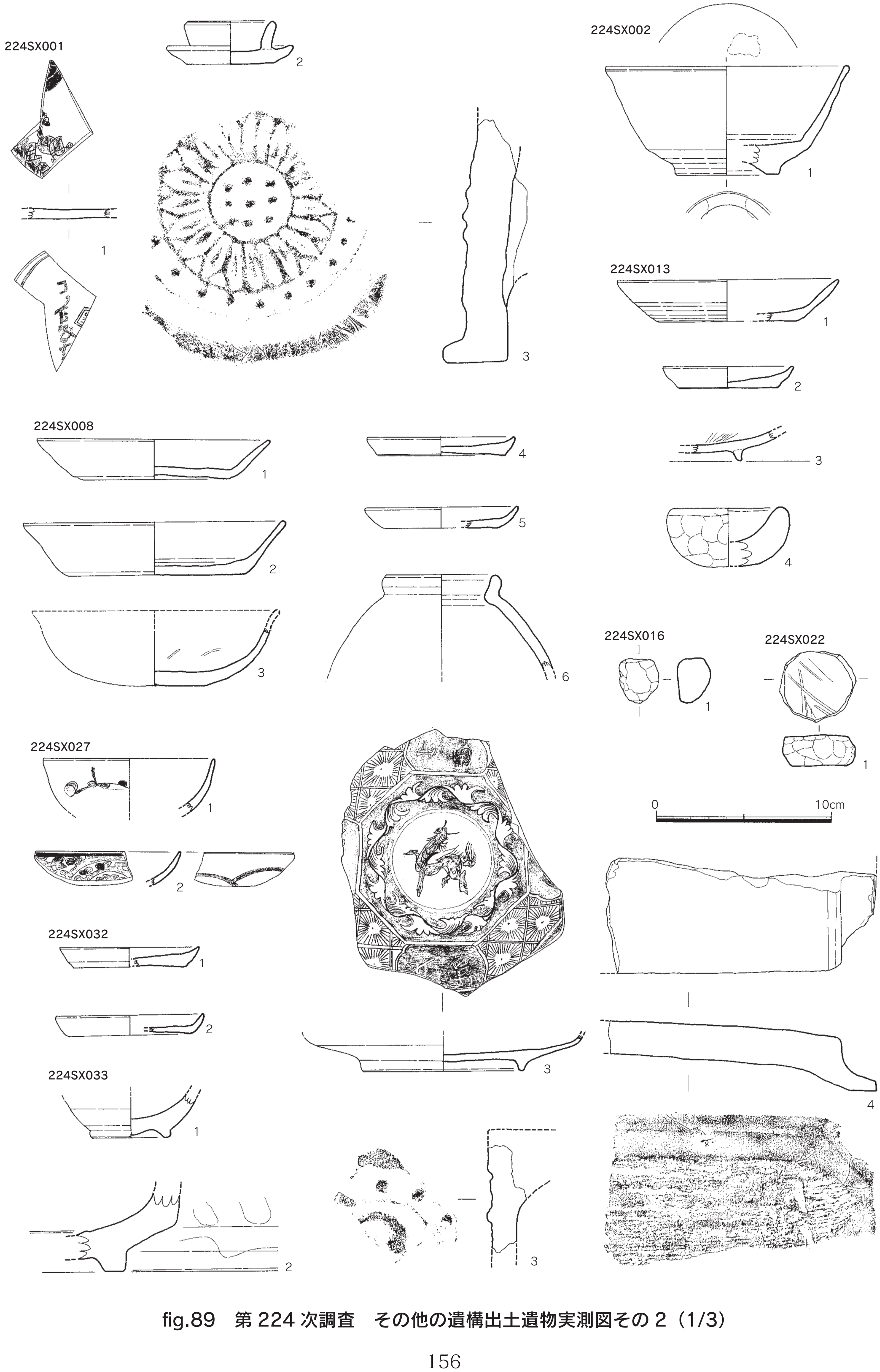



fig.89　第 224 次調査　その他の遺構出土遺物実測図その 2（1/3）

細かな打ち欠き痕が残る。
224SX027 出土遺物（fig.89、CD 写真 070・071）
肥前系染付
丸椀（1）口縁から体部のみの小片で、復元口径 9.8 ㎝を測る。体部外面に暗い青色の呉須による花草文が施される。くらわんか手。
皿（2・3）2 は口縁部のみの小片である。暗い青色の呉須で、内面には蛸唐草文、外面には円弧状の模様が施される。3 は底部のみの破片で、復元高台径 9.3 ㎝を測る。内面には暗い青色の呉須で方皿の形状に精緻な模様が施される。見込み中央には麒麟が描かれ、その外周を囲む唐草文の四方には方位を表す「南山」「寿北」の文字が確認できる。
224SX030 橙褐色土出土遺物（fig.87・88、CD 写真 061 ～ 064）
土師器
小皿（1・2）1 は底部のみの小片である。胎土は淡褐白色で、砂粒をわずかに含み密である。底部ヘラ切り後板状圧痕が残る。底部には絵画のような墨書が施される。2 は底部のみの小片である。胎土は淡褐茶色で、微量の砂粒を含み密である。底部イト切りが残り、内面見込み部分に墨書が残る。
坏 a（3）口縁から底部の一部のみの小片である。胎土は淡褐白色で、微細な砂粒をわずかに含み密である。体部外面に墨痕がある。
青白磁
合子蓋（4）天井部から口縁にかけての小片である。復元口径 5.6 ㎝、器高 5.7 ㎝を測る。素地は淡い茶色粒を含む乳白色で、光沢のある青味かかった透明釉がかかる。口縁から内面にかけて露胎しており、外面に三重の菊花文が施される。
青磁
同安窯系青磁
皿（5）口縁から底部の一部のみの小片である。素地は砂粒をわずかに含み精良だが、焼成が不良なため、にぶい白灰色を呈す。Ⅰ -2 b 類。
土製品
土壁（6・8・9）6 はタテ 4.5 ㎝、ヨコ 3.9 ㎝、厚さ 3.7 ㎝を測る。胎土は淡橙褐色で大粒の白色砂粒を多く含み粗い。両面に木質による窪みと痕跡が確認できる。8 はタテ 5.0 ㎝、ヨコ 3.3 ㎝、厚さ 2.0 ㎝を測る。胎土に大粒の白色砂粒を多く含み粗く脆い。内面の一部に木質による黒茶色の窪みが確認できる。9 はタテ 3.8 ㎝、ヨコ 5.6 ㎝、厚さ 3.5 ㎝を測る。大粒の砂粒を多く含み粗い。フラットな面と木質による窪みと痕跡を確認できる。
焼土塊（7）タテ 4.0 ㎝、ヨコ 2.6 ㎝、厚さ 2.1 ㎝を測る。胎土に大粒の白色砂粒を多く含み粗い。焼成は酸化と還元層部分が明確に分離しており、淡橙茶褐色と淡灰色を呈す。
金属製品
滓（10・11）10、11 は炭化材と粘土塊がタール状の塊を成しているものである。淡灰色でタール状の部分が黒褐色を呈し、全体的に柔らかい。
224SX030 出土遺物（fig.88、CD 写真 063・064）
土師器
小皿 a（1）底部のみの小片である。胎土は淡褐茶色で、微量な砂粒を含み密である。底部には絵画のような墨書が施される。
青磁

同安窯系青磁

皿（2）全体の 1/2 欠損で、復元口径 9.6 ㎝、器高 1.7 ㎝、復元底径 4.3 ㎝を測る。素地は淡灰色で、微量な黒色粒を含み硬質で密である。釉調は光沢のある青味かかった透明釉で、底部は掻き取りにより露胎している。底部の露胎部分に「□（上ヵ）」の墨書が施される。Ⅰ -1a 類。

224SX032 出土遺物（fig.89、CD 写真 070・071）

土師器

小皿 a（1･2）1､2 ともに 1/4 程度の破片である。底部イト切り後板状圧痕が残る。胎土は淡灰黄白色で、微量な砂粒を含み密。1 は復元口径 8.0 ㎝､器高 1.1 ㎝､復元底径 6.6 ㎝を測る。2 は復元口径 8.6 ㎝､器高 1.2 ㎝、復元底径 7.2 ㎝を測る。

224SX033 出土遺物（fig.89、CD 写真 070・071）

国産陶器

椀（1）体部下半～底部にかけての破片で、復元高台径 4.6 ㎝を測る。高台は八の字に外反する削り出し高台で、外面は露胎する。内面には厚めの黒釉を施す。胎土には白色砂粒と黒灰色班をわずかに含み暗茶褐色で密である。

鉢（2）体部下部から高台の一部のみの破片である。胎土は気泡の多い淡灰黄白色で、外面に透明で緑味かかった黒褐色釉を施す。高台削りだし部分は露胎し、体部側面は凸凹に波打つようにケズリ調整されているため、器壁の厚みが一定していない。鉢以外の器種の可能性もある。

瓦類

軒丸瓦（3）珠文に囲まれた巴文の瓦当部分のみの小片である。胎土には細かな白色砂粒を若干含み密である。

丸瓦（4）玉縁の一部を残す破片である。胎土には微量の砂粒を含みやや密で、黒灰色に燻される。

224SX037 出土遺物（fig.90、CD 写真 070 ～ 072）

土師器

坏 a（1）1/3 程度残存で、復元口径 15.0 ㎝、器高 3.1 ㎝、復元底径 10.3 ㎝を測る。口縁端部はやや外反し、底部イト切り後板状圧痕が残る。細かな金雲母を多く含み、灰褐色で密な胎土である。

土師質土器

鍋（2）口縁端部のみの小片である。口縁上部から外面にかけてヨコナデ、内面に粗いナデ調整が施される。胎土は淡橙灰褐色で、大粒の砂粒をやや多く含み、密である。A 類。

224SX038 出土遺物（fig.90、CD 写真 070 ～ 072）

瓦器

椀 c（1）ほぼ完形で､口径 17.2 ㎝､器高 5.2 ㎝､底径 5.8 ㎝を測る。胎土は砂粒をわずかに含み粗い。口縁端部がやや外反し、貼り付け高台部分に板状圧痕が残る。内面に縦方向のミガキ b、外面には横方向のミガキが施される。色調は口縁付近が黒灰色で、体部は淡灰白色に二分されており、重ね焼き痕が見られる。

同安窯系青磁

椀（未分類）（1）口縁から体部にかけての小片で、内外面ともに無文である。素地は微細な砂粒をわずかに含む淡灰色である。釉調は細かい貫入と光沢のあるオリーブ色で、表面の一部が銀化している。

224SX044 出土遺物（fig.90、CD 写真 073・074）

龍泉窯系青磁

椀（1）高台部分のみの破片で、底径 6.0 ㎝を測る。素地は淡灰色で、細かな砂粒を含み密である。釉

調は細かい貫入と光沢のある緑色味かかった灰色で、薄く施釉される。内面見込みには「金玉満堂」の刻印があり、底部には「一」と墨書されている。Ⅰ -1 c 類。

224SX046 出土遺物（fig.90、CD 写真 073・074）

土師器

坏 a（1）口縁から底部にかけての小片で、復元口径 13.2 ㎝、器高 2.4 ㎝、復元底径 9.9 ㎝を測る。底部イト切りで、胎土は淡橙褐色で白色砂粒を多く含み密である。

小皿 a（2・3）2 は全体の 1/2 程度残存で、復元口径 8.9 ㎝、器高 1.1 ㎝、復元底径 6.9 ㎝を測る。底部イト切り後板状圧痕が残る。胎土は淡橙褐色で、細かな砂粒をわずかに含み密である。3 は口縁から底部にかけての小片で、復元口径 9.0 ㎝、器高 1.0 ㎝、復元底径 6.9 ㎝を測る。底部イト切りで、淡黄褐色で精良な胎土である。

224SX047 出土遺物（fig.90、CD 写真 073・074）

国産陶器

椀×皿（1）底部のみの小片である。素地は淡白褐色で、光沢のある透明釉を施す。高台畳付部分が露胎する。

224SX052 出土遺物（fig.90、CD 写真 075）

椀 c （1・2）1 は 1/3 程度残存の破片で、復元口径 13.2 ㎝、器高 5.0 ㎝、復元高台径 8.8 ㎝を測る。口縁端部はやや玉縁状で、外踏ん張りな貼り付け高台がつく。胎土は細かな金雲母を多く含み、淡橙褐色でやや粗い。2 は底部のみの破片で、復元高台径 8.2 ㎝を測る。外踏ん張りな貼り付け高台で、胎土は淡乳褐色で茶色粒と金雲母を多く含みやや密である。

224SX059 出土遺物（fig.90、CD 写真 076 ～ 078）

土師器

坏 a（1 ～ 3）1 ～ 3 は底部イト切り後板状圧痕である。1 は口縁の 1/2 程度欠損しており、復元口径 15.6 ㎝、器高 3.2 ㎝、復元底径 11.6 ㎝を測る。胎土は淡茶褐色で、微量の金雲母を含みやや密である。2 は全体の 2/3 程度の残存で、復元口径 16.2 ㎝、器高 2.9 ㎝、復元底径 11.4 ㎝を測る。口縁端部が外反する。胎土は淡茶褐色で砂粒をわずかに含み精良。3 は体部から底部にかけての小片である。胎土は淡白褐色で砂粒をわずかに含み精良。

小皿 a（4）口縁から底部にかけての小片で、復元口径 11.1 ㎝、器高 1.4 ㎝、復元底径 8.2 ㎝を測る。底部ヘラ切りが残る。胎土は淡褐白色で微細な金雲母を含みやや密である。

小皿 c （5）全体の 1/3 程度の破片で、復元口径 12.6 ㎝、器高 1.9 ㎝、復元底径 7.8 ㎝を測る。底部切離し不明で、外踏ん張りの貼り付け高台がつく。胎土は淡褐灰色で、微細な金雲母を含み密である。

椀 c （6）口縁部分のほとんどが欠損し、復元口径 15.5 ㎝、器高 5.7 ㎝、高台径 8.2 ㎝を測る。内外面にミガキ c を施す。胎土には淡褐白色で砂粒をわずかに含み密である。

器台（7）残存高 10.6 ㎝の破片である。外面にはタテ方向のケズリ調整が施される。胎土は淡褐白色で、細かな砂粒を含み密である。

瓦類

丸瓦（8）格子目の叩きを持つ土師質焼成の軟質な製品で、長さ 16.3cm、幅 9.1cm、厚さ 2.2cm を測る。叩き目は斜格子を基本とするが端部は平行条線となる 10 世紀中頃以降の E 群に位置付けられ、版に「介」字が彫り込まれている。

金属製品

椀形滓（9）ほぼ完形で、タテ 8.2 ㎝、ヨコ 10.4 ㎝、厚さ 5.1 ㎝を測る。底部は椀形状を呈し、内面

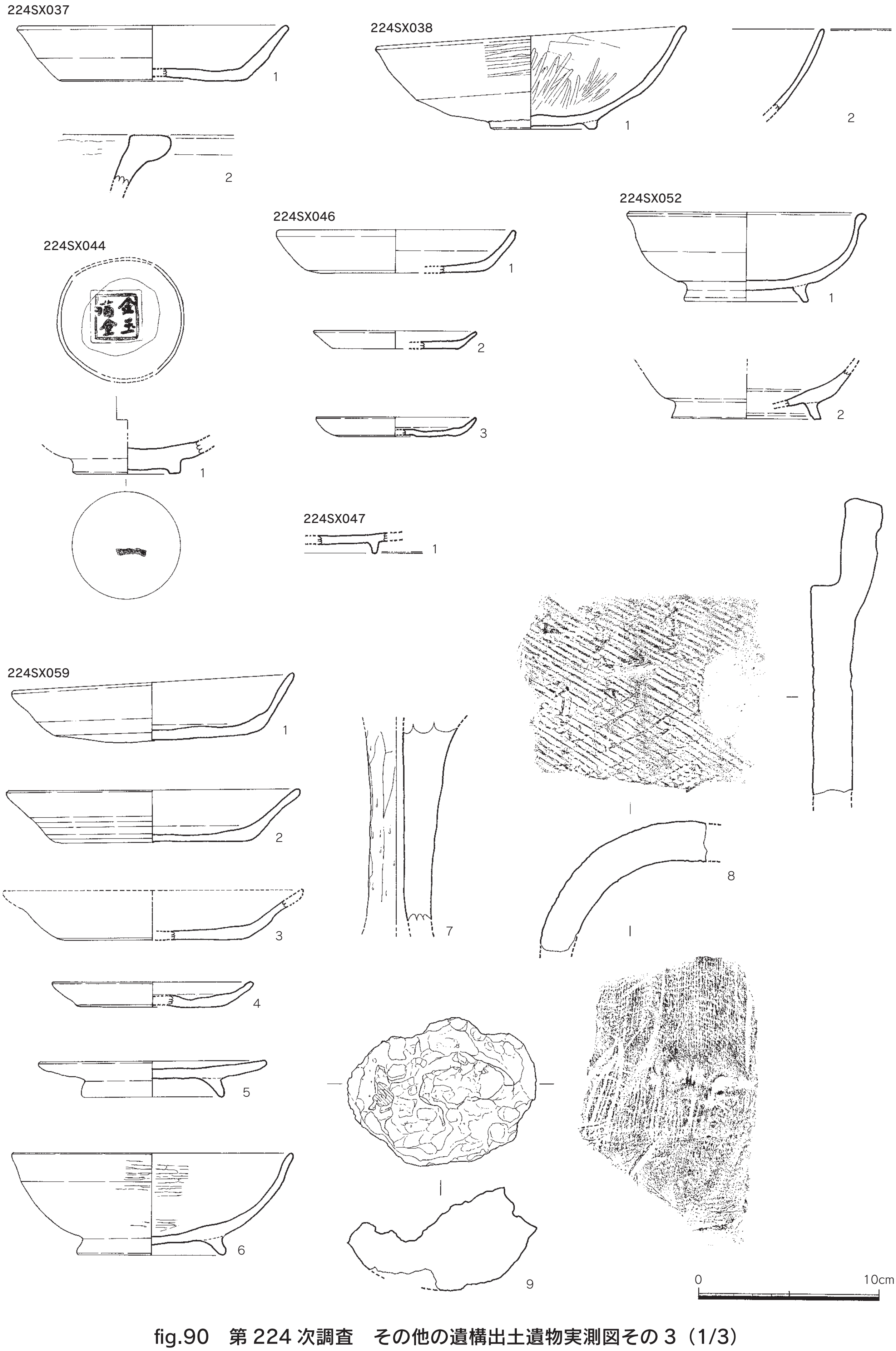



fig.90　第 224 次調査　その他の遺構出土遺物実測図その 3（1/3）

には暗灰色で片寄りのある突起状の塊が残る。片寄りのある方向から鞴の送風があったと推定される。
224SX061a 出土遺物（fig.91、CD 写真 073・074）
土師器
坏 a（1）全体の 1/2 程度残存で、復元口径 15.6 ㎝、器高 2.7 ㎝、復元底径 10. ㎝を測る。底部イト切り後板状圧痕残る。胎土は茶褐色で白色・茶色粒を多く含みやや密である。
小皿 a（2･3）1、2 ともに 1/3 程度の破片で、底部イト切り後板状圧痕である。2 は復元口径 10.2 ㎝、器高 1.0 ㎝、復元底径 8.0 ㎝を測る。胎土は淡乳白褐色で、砂粒を含み密である。3 は復元口径 10.6 ㎝、器高 1.0 ㎝、復元底径 8.2 ㎝を測る。胎土は淡褐灰色で、黒色粒を多く含み密である。
224SX061c 出土遺物（fig.91、CD 写真 073・074）
土師器
坏 a（1）全体の 1/4 程度の破片で、復元口径 12.8 ㎝、器高 2.8 ㎝、復元底径 9.2 ㎝を測る。底部イト切り後板状圧痕がある。胎土は淡茶褐色で、微細な砂粒を多く含みやや密である。
224SX062 出土遺物（fig.91、CD 写真 073・074）
土製品
土壁（1）大粒の白色砂粒や黒色粒を多く含み粗い胎土である。色調は内断面は乳灰褐色で、外面は淡橙褐色を呈す。内面には管状の木材の窪みと痕跡が認められる。
224SX066 出土遺物（fig.91、CD 写真 017・018）
石製品
石鏃（1）タテ 2.3 ㎝、ヨコ 1.5 ㎝、厚さ 0.3 ㎝を測る。石材は安山岩の剥片鏃で、両側縁に連続剥離を施し、基部が内湾するタイプである。
224SX067 出土遺物（fig.88、CD 写真 063 ～ 065）
土師器
坏 a（1）全体の 1/3 程度残存し、復元口径 13.8 ㎝、器高 2.4 ㎝、復元底径 11.5 ㎝を測る。底部イト切り後板状圧痕がある。胎土は淡褐色で微細な砂粒を含み密である。
小皿 a（2）完形で、口径 8.4 ㎝、器高 1.0 ㎝、底径 6.4 ㎝を測る。底部イト切り後板状圧痕が残る。胎土は淡橙褐色で、細かな砂粒を含み密である。
緑釉陶器
皿（3）底部 1/3 程度の破片で、復元底径 6.8 ㎝を測る。底部削りだしの円盤高台である。胎土は砂粒を少量含み精良で、ホタル状に黄灰色が混じる淡灰黄色である。釉調は薄く淡黄緑色を呈す。
白磁
皿×椀（4）底部のみの破片である。内面見込みには拭き取りによる輪状釉剥ぎがあり、やや荒い削り出し高台である。胎土は微細な黒灰色の砂粒を多く含む灰白色である。釉調は薄緑色がかった白色である。高台底部に記号状の墨書がある。皿Ⅲ -1 ×椀Ⅷ類。
瓦類
平瓦（5･6）5 はタテ 6.0 ㎝、ヨコ 7.8 ㎝、厚さ 2.7 ㎝を測る破片である。胎土は砂粒を多く含みやや粗い。須恵質な焼き上がりで、外面は暗青灰色、断面は淡赤灰色の色調である。凹面には細かな布目痕、凸面には四葉文の入る大きな横長斜格子目叩きが認められる。6 はタテ 8.3 ㎝、ヨコ 9.7 ㎝、厚さ 1.5 ㎝の破片である。胎土は淡灰色で、砂粒を多く含みやや粗く、須恵質である。凹面には粗い布目痕、凸面には大きな横長斜格子目叩きが見られる。F 群。
土製品

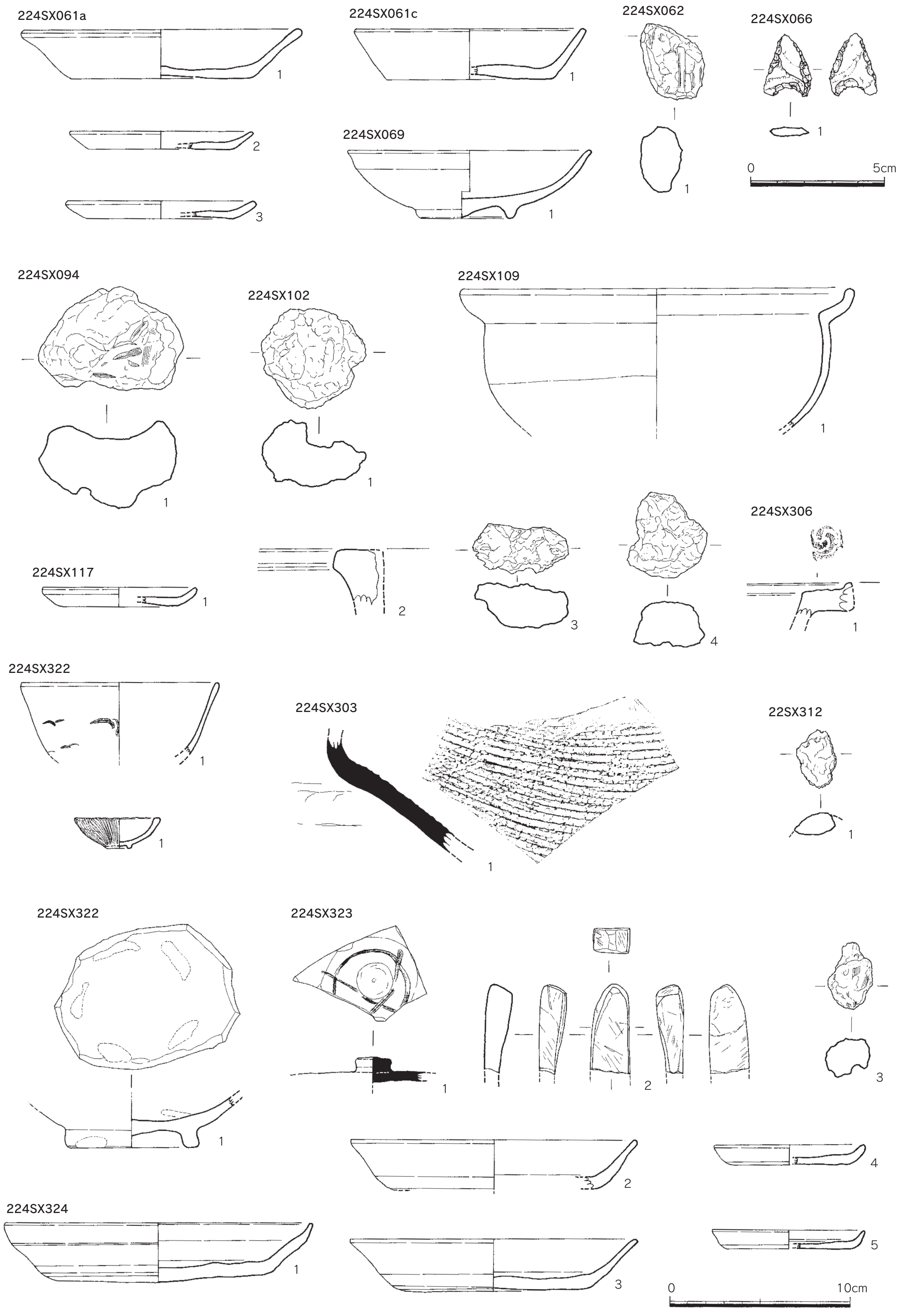



fig.91　第 224 次調査　その他の遺構出土遺物実測図その 4（1/2、1/3）

瓦玉（7）タテ3.8㎝、ヨコ3.4㎝、厚さ2.2㎝を測る。暗青灰色の須恵質で、横長斜格子目のある瓦を打ち欠いて成形している。
石製品
打具×すり石（8）タテ9.8㎝、ヨコ8.9㎝、厚さ6.1㎝を測る。石材は青灰色の安山岩である。
軽石（9）タテ3.2㎝、ヨコ2.9㎝、厚さ2.0㎝を測る。石材は淡白褐色の軽石である。
224SX069出土遺物（fig.91、CD写真077・078）
輸入陶器
皿×浅形椀（1）全体の1/2程度残存で、復元口径13.6㎝、器高3.8㎝、底径5.3㎝を測る。胎土は微細な砂粒をわずかに含む淡灰褐色で、光沢と細かい貫入のある暗緑灰色の釉がかかる。口縁端部がやや外反し、高台底部は削り込みにより中央が盛り上がる特徴がある。高台畳付部分は露胎し、砂が付着している。産地不明で、龍泉窯系浅形椀の系譜の可能性がある。
224SX094出土遺物（fig.91、CD写真077・078）
土製品
焼土塊（1）胎土に淡茶褐色でやや大粒の砂粒やスサを多く含み粗い。被熱した部分が淡白褐色化している。
224SX102出土遺物（fig.91、CD写真077・078）
金属製品
製錬滓（1）タテ5.5㎝、ヨコ5.9㎝、厚さ3.6㎝、116.1gを測る。底部はやや椀形状で、内面は上部にやや光沢のある黒灰色が突出している。
224SX109出土遺物（fig.91、CD写真077・078）
国産陶器
鉢（1）口縁から体部下半にかけての小片で、復元口径22.0㎝を測る。口縁部分がての字状に屈曲する。胎土は淡灰色で精良で、暗茶褐色の釉が体部中ほどから内面にかけて施される。
224SX117出土遺物（fig.91、CD写真077・078）
土師器
小皿a（1）全体の1/3程度残存し、復元口径8.6㎝、器高1.1㎝、復元底径6.2㎝を測る。底部イト切り後板状圧痕が残る。胎土は淡黄褐色で、茶色粒を多く含みやや密である。
瓦質土器
鉢（2）口縁端部のみの小片である。口縁上部に指圧痕があり、内側に突出する形状をもつ。胎土は淡茶灰色でやや大粒の砂粒を含み密である。
金属製品
ガラス質滓（3）タテ2.8㎝、ヨコ5.3㎝、厚さ2.4㎝、重さ33.2gを測る。全体はほぼ黒色で、表面の一部と芯がツヤのある黒色のガラス質である。
土製品
焼土塊（4）タテ4.8㎝、ヨコ4.0㎝、厚さ2.3㎝を測る。胎土は淡灰茶褐色で大粒の砂粒を多く含み粗い。
224SX132出土遺物（fig.91、CD写真079・080）
肥前系染付
端反椀（1）全体の1/3程度の破片で復元口径11.0㎝を測る。素地は砂粒をわずかに含み端白灰色で密である。釉調は光沢のある透明釉で、くすんだ青紺色の呉須で外面に絵付けが施される。
国産磁器

紅皿（2）型による菊花状を呈し、復元口径 4.9 ㎝、器高 1.7 ㎝、復元底径 1.4 ㎝を測る。素地は白灰色で精良で光沢のある透明釉がかかる。

224SX303 出土遺物（fig.91、CD 写真 079・080）

須恵質土器

甕（1）頸部から体部にかけての破片である。内面はナデ調整で、外面に格子目状の叩き痕が残る。胎土は暗灰黒色で、砂粒を少し含み密で硬質な焼成である。

224SX306 出土遺物（fig.91、CD 写真 079・080）

瓦質土器

火舎（1）口縁端部のみの破片である。鍔状の端部上面には三つ巴文のスタンプが施される。胎土は淡灰白色で砂粒を少し含み密である。

224SX312 出土遺物（fig.91）

土製品

焼土塊（1）タテ 3.2 ㎝、ヨコ 2.2 ㎝、厚さ 1.2 ㎝を測る。砂粒を多く含む淡黄茶褐色の胎土である。

224SX322 出土遺物（fig.91、CD 写真 079・080）

朝鮮陶器

椀（1）底部のみの破片で、底径 7.4 ㎝を測る。底部はやや丸みを帯びた外踏ん張りな削り出し高台で、畳付部分は露胎する。内面見込みには 5 つの横長の目跡がある。目跡は白色で表面が削られ、平滑化している。胎土は灰色で白色砂粒を多く含み、粗い。釉調は淡灰緑色で不透明な釉を内外面に施す。

224SX323 出土遺物（fig.91、CD 写真 079・080）

須恵器

蓋 c （1）天井部は回転ヘラ削りで、2.0 ㎝のつまみがつく。天井部には墨書で模様が施される。胎土は淡灰色で、精良堅緻で硬質である。

石製品

砥石（2）欠損している箇所以外に刃物を研いだ痕跡がある。石材は淡灰白色の泥岩である。

土製品

焼土塊（3）タテ 3.8 ㎝、ヨコ 2.5 ㎝、厚さ 2.0 ㎝を測る。胎土は暗灰褐色で、砂粒と金雲母を多く含みやや粗い。

224SX324 出土遺物（fig.91・92、CD 写真 081）

土師器

坏 a（1 ～ 3）1･3 は底部イト切り後板状圧痕が残る。1 は口縁 2/3 欠損で、口径 17.3 ㎝、器高 3.4 ㎝、底径 12.7 ㎝を測る。口縁端部が内湾し、内面見込みに不定方向のナデがある。胎土は．淡灰白褐色で微細な砂粒と雲母を含み密である。2 は口縁 1/4 程度の小片で、復元口径 16.0 ㎝を測る。胎土は黄褐灰色で微細な砂粒を含み密である。3 は口縁 1/6 残存で復元口径 16.1 ㎝、器高 3.0 ㎝、底径 10.7 ㎝を測る。口縁部は外反し、内面見込みは不定方向のナデ調整が施される。胎土は黄褐灰色で、微細な砂粒を含み密である。

小皿 a（4 ～ 7）4 ～ 7 は底部イト切りで板状圧痕がある。4 は 1/2 程度残存で、復元口径 8.5 ㎝、器高 1.1 ㎝、復元底径 7.0 ㎝を測る。胎土は淡黄褐灰色で砂粒を含み密である。5 は 1/3 残存で、復元口径 8.6 ㎝、1.1 ㎝、復元底径 7.1 ㎝を測る。器壁が薄く、内面見込みに不定方向のナデが施される。胎土は微細な砂粒と雲母を含み密である。6 は 1/4 残存で、復元口径 9.6 ㎝、器高 1.5 ㎝、復元底径 6.9 ㎝を測る。胎土は淡橙色で微細な砂粒を含み密である。7 は 1/3 残存で、復元口径 10.4 ㎝、器高

1.1 ㎝、復元底径 8.7 ㎝を測る。胎土は黄灰褐色で微細な金雲母を多く含み精良である。
大皿 c （8） 1/4 程度残存で、復元口径 20.7 ㎝、器高 5.5 ㎝、復元底径 15.7 ㎝を測る。口縁端部はやや内湾し、外踏ん張りの高い貼り付け高台がつく。胎土は淡灰褐色で微細な砂粒と雲母を多く含み密である。
土製品
焼土塊（9） タテ 7.6 ㎝、ヨコ 4.2 ㎝、厚さ 3.3 ㎝を測る。胎土は淡灰茶褐色で、砂粒やスサを多く含みやや粗い。表面の一部に黒褐色の煤の付着がある。
224SX336 出土遺物（fig.92、CD 写真 079・080）
石製品
石鍋加工品（1） 鍔付きの石鍋の破砕された破片の割れ口を削って 2 次的な加工を施している。元の形状を大きく残しており、加工の意図は明確でない。タテ 5.2 ㎝、ヨコ 8.5 ㎝、厚さ 1.5 ㎝を測る。石材は滑石で、外面に煤が付着し、黒褐色を呈す。
土製品
焼土塊（2） 砂粒やスサを多く含む粗い土の塊で、一部に面が残っている。タテ 6.3 ㎝、ヨコ 2.8 ㎝、厚さ 2.5 ㎝を測る。
224SX339 出土遺物（fig.92、CD 写真 079・080）
緑釉陶器
皿（1） 灰色気味の土師質の胎土を持つ口縁部の小片で、高さ 1.9cm を測る。全面施釉で光沢のある淡緑黄色の釉がかかる。防長産と思われる。
灰釉陶器
壺（2） 胎土は砂粒をわずかに含み、気泡が多くやや粗い淡灰白色である。灰緑色の釉が掛けられる。高さ 2.8cm を測る。東海産の灰釉陶器の壺類の肩の部位であろう。
224SX341 出土遺物（fig.92、CD 写真 082・083）
石製品
打具×すり石（1） 石材は灰白色の礫岩製の円礫が用いられ、長さ 8.6cn、幅 4.7cm、厚さ 4.2cm が残存する。平坦面は平滑になり側縁はアバタ状の連続した窪みが残る。縄文時代の所産であろう。
224SX342 出土遺物（fig.92、CD 写真 082・083）
縄文土器
粗製深鉢（1）底部は平坦なはっきりした作り出しがあり、ほぼ同じ厚みで上方に体部が開く形状を持つ。調整は二枚貝の腹縁を用いた条痕の残る粗いナデが斜位に施される。底径 7.4cm、高さ 3.3cm を測る。胎土は淡茶褐色で、大粒の砂粒を含みやや粗い。縄文後・晩期の所産である。
224SX406 出土遺物（fig.92、CD 写真 082・083）
土師器
坏 a（1･2）1･2 は底部イト切りで、2 は板状圧痕が残る両者ともに内面見込みに不定方向のナデがある。1 は 1/2 残存で、復元口径 14.0 ㎝、器高 3.4 ㎝、復元底径 8.0 ㎝を測る。2 はほぼ完形で、口径 12.8 ㎝、器高 2.8 ㎝、底径 9.1 ㎝を測る。
小皿 a （3・4） 3 は 1/2 残存で、復元口径 7.8 ㎝、器高 1.0 ㎝、復元底径 6.6 ㎝を測る。胎土は淡橙褐色で微細な砂粒を含み密である。4 は 1/2 程度残存で、復元口径 8.6 ㎝、器高 1.0 ㎝、復元底径 6.4 ㎝を測る。底部は回転イト切り後に板状圧痕が残る。口縁部の引き出しは短い。胎土は淡灰黄色で微細な金雲母を多く含み密である。

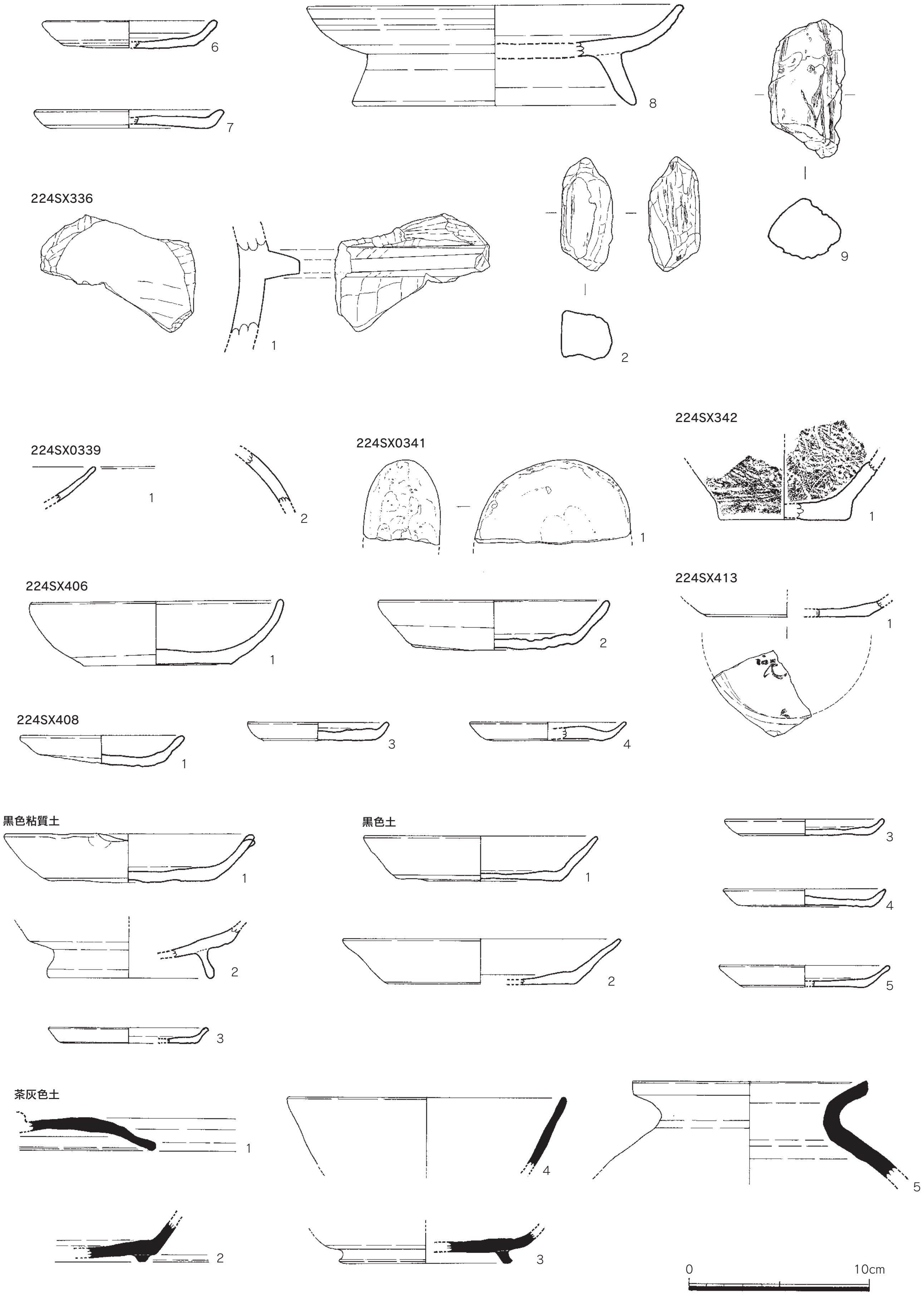



fig.92　第 224 次調査　その他の遺構および黒色粘質土、黒色土、茶灰色土出土遺物実測図（1/3）

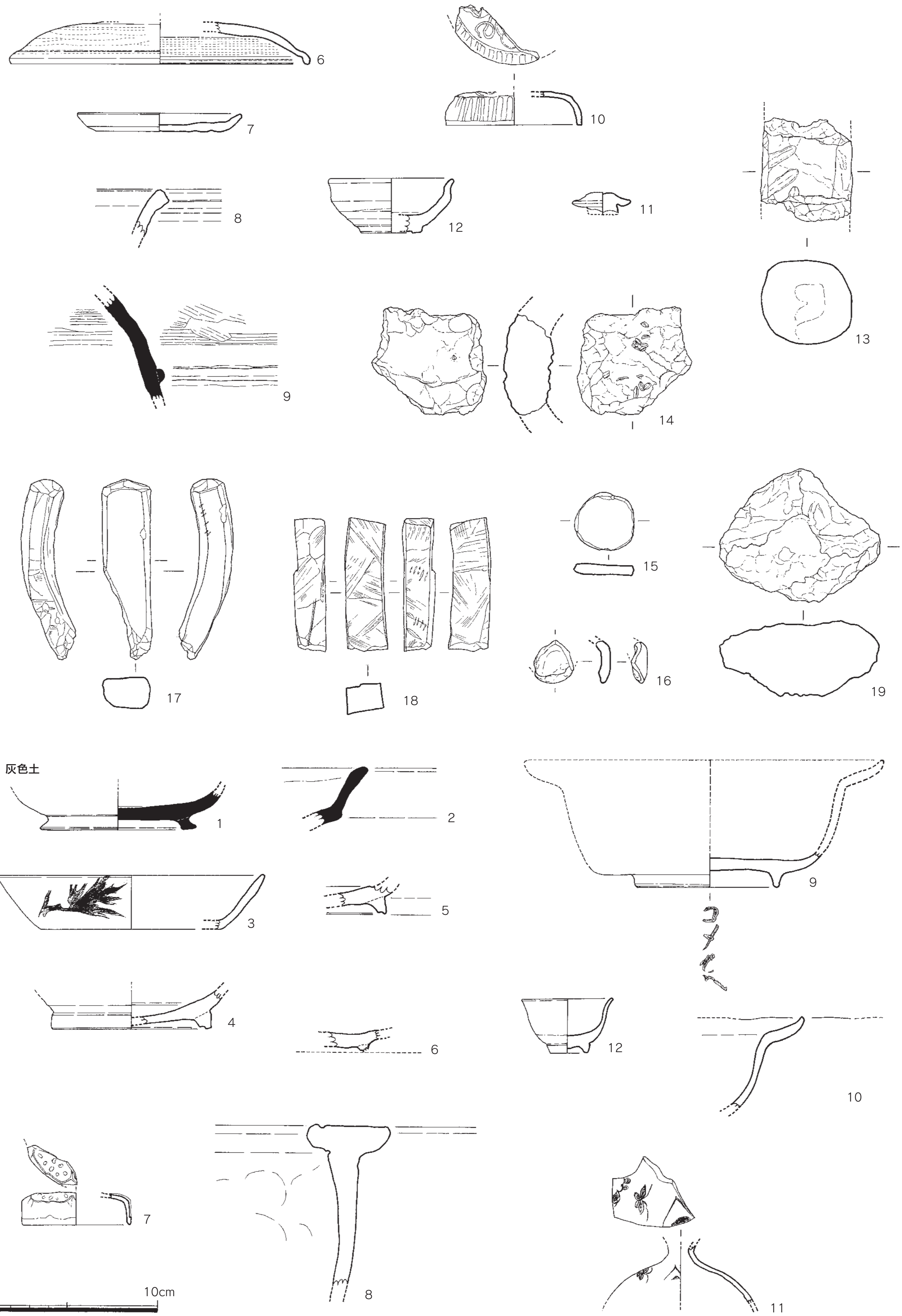



fig.93　第 224 次調査　茶灰色土、灰色土出土遺物実測図（1/3）

224SX408 出土遺物（fig.92、CD 写真 084・085）
土師器
小皿 a（1）ほぼ完形で、口径 9.0 ㎝、器高 1.5 ㎝、底径 7.0 ㎝を測る。底部は回転イト切りで、凸気味に外に膨らんでいる。口縁部は外反り気味に引き出される。胎土は淡灰褐色で精良である。
224SX413 出土遺物（fig.92、CD 写真 084・085）
土師器
坏×皿（1）器高 0.8 ㎝以上、底径 9.4 ㎝に復元される底部のみの破片である。底部は回転イト切りで、外面に墨書の痕跡が残る。判読はできない。胎土は暗橙褐色で、微細な砂粒と金雲母を含み密である。
黒色粘質土出土遺物（fig.92、CD 写真 084・085）
土師器
坏 a（1）1/5 残存で、口径 13.8 ㎝、器高 2.7 ㎝、底径 9.6 ㎝に復元される。底部は回転イト切り後に板状圧痕が残る。口縁の一部に片口状につまみだした部位がある。胎土はにぶい褐色で砂粒を多く含みやや密である。
坏 c （2）器高 2.7 ㎝以上、底径 9.2 ㎝に復元される。外に開き気味の足の長い高台が付けられる。
小皿 a（3）復元口径 8.8 ㎝、器高 0.9 ㎝、復元底径 7.6 ㎝を測る小片である。底部は回転イト切り後に板状圧痕が残る。口縁部の引き出しは短い。胎土は淡白褐色で砂粒を若干含み密である。
黒色土出土遺物（fig.92、CD 写真 084・085）
土師器
坏 a（1・2）1 は 2/3 残存で、復元口径 12.8 ㎝、器高 2.5 ㎝、復元底径 9.6 ㎝に、2 は 1/4 残存で口径 15.3 ㎝、器高 2.5 ㎝、底径 10.8 ㎝に復元される。底部は回転イト切り後に板状圧痕が、内側に強いナデが残る。
小皿 a（3 ～ 5）3・5 は底部イト切りで、4 は底部ヘラ切り後板状圧痕がある。3 ～ 5 には内面見込みにナデ調整が見られる。胎土は淡白褐色で砂粒を若干含み密である。3 は 1/3 残存で復元口径 8.8 ㎝、器高 0.9 ㎝、復元底径 7.4 ㎝を、4 は口縁 1/4 欠損で、復元口径 9.0 ㎝、器高 1.0 ㎝、底径 7.4 ㎝を測る。5 は 1/4 残存で、復元口径 9.4 ㎝、器高 1.2 ㎝、復元底径 7.0 ㎝を測る。
茶灰色土出土遺物（fig.92・93、CD 写真 086 ～ 089）
須恵器
蓋 c 3（1）高さ 1.8cm を測る破片である。口縁端部はごく短く折り曲げた形状を呈す。天井部は切り離し後に粗いナデが施される。
坏 c 3（2）高さ 2.2cm を測る破片である。底部の角は稜をもって屈曲するタイプで、高台は断面が台形で外側に付けられる。
坏 c 1（3）高さ 1.7cm、底径 8.6cm に復元される。底部外面は回転ヘラケズリが施された後に外に張り出す細身の高台が付けられる。焼成は硬質。
椀（4）口径 15.4cm、高さ 3.8cm を測る。直線的に外に開く体部を持つ。
壺（5）口径 12.8cm、高さ 4.7cm に復元される。短く「く」字形に開く素口縁を持つ。
土師器
蓋 3（6）口縁端部が L 字に折れる形状を持つ。内外面にはミガキ a が施される。口径 16.3cm、高さ 2.3cm 以上に復元される。
小皿 a（7）口径 9.0 ㎝、器高 1.0 ㎝、底径 7.0 ㎝に復元される。底部は回転イト切りが施される。内面には赤色顔料が付着している。

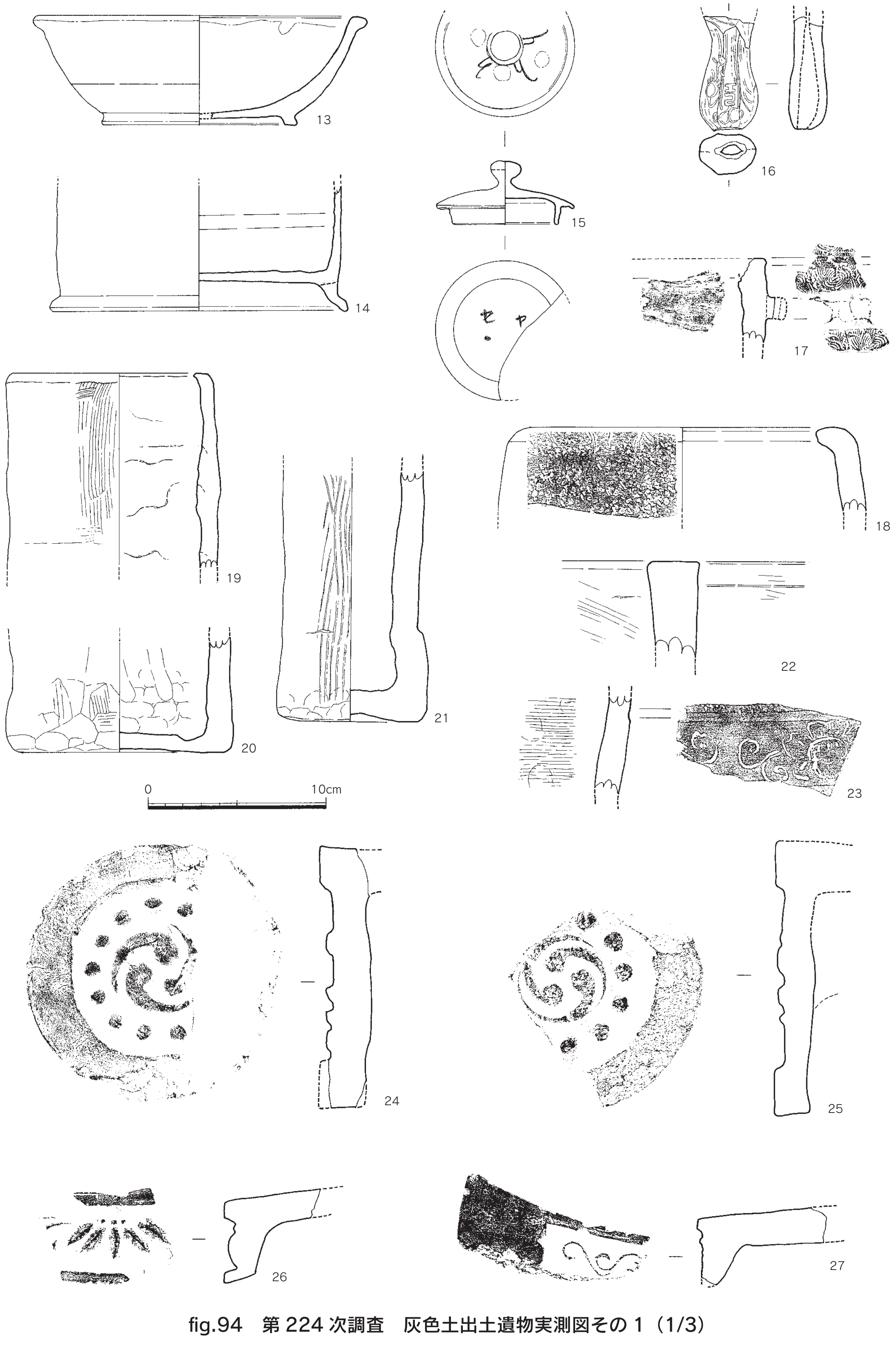



fig.94　第 224 次調査　灰色土出土遺物実測図その 1（1/3）

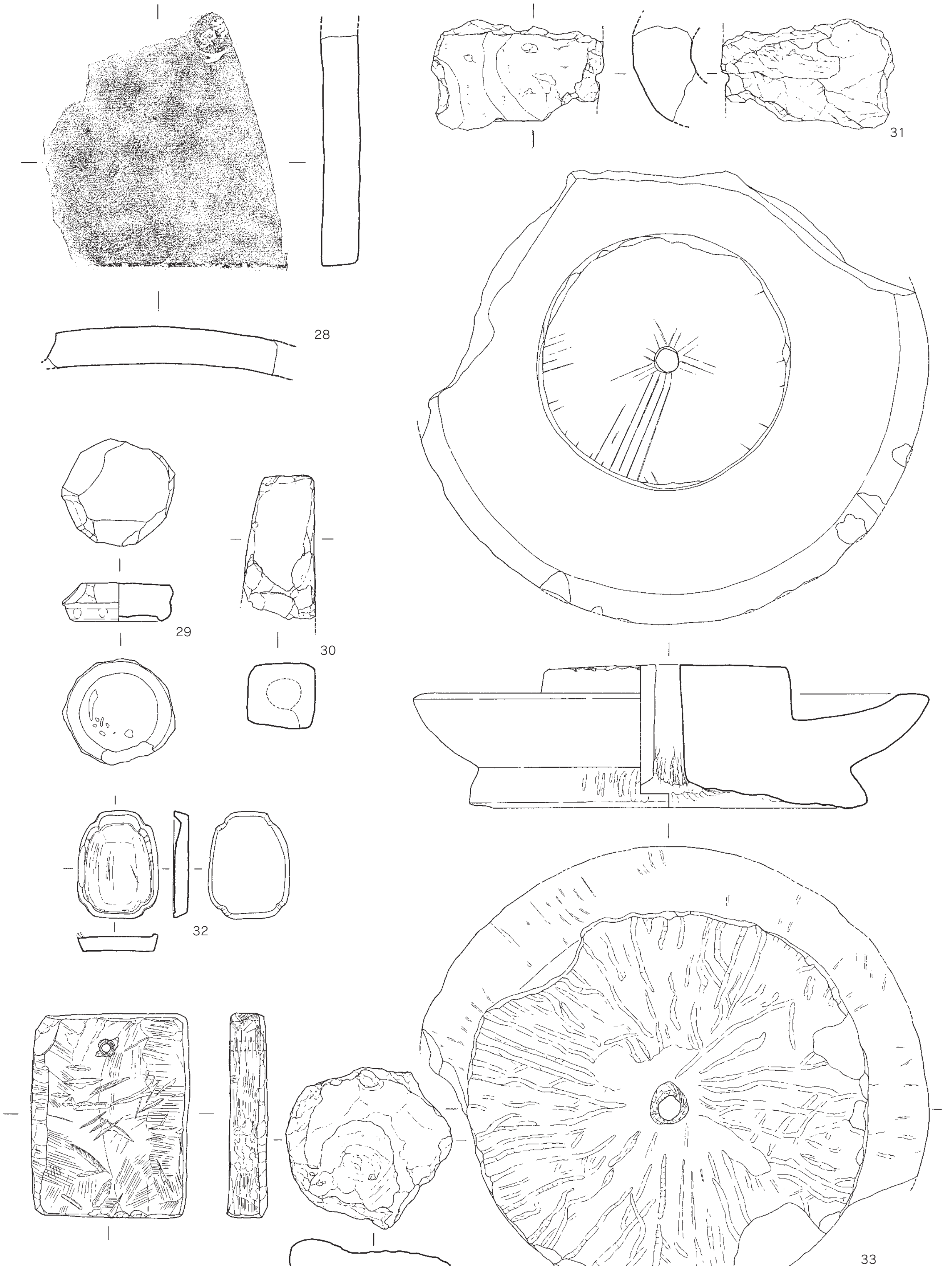



fig.95　第 224 次調査　灰色土出土遺物実測図その 2（1/3、1/4）

朝鮮無釉陶器

壺×甕（8・9）8は高さ 2.4cm の短く外反する口縁部片で、9は高さ 5.4cm の体部の肩の部位で、横方向に隆起線が付けられる。両者ともに横方向の強いナデが施される。

青白磁

合子蓋（10）型により成形された合子の蓋側の破片で、口径 9.6 ㎝、器高 1.8 ㎝を測る。上面は草花文か。青味のある透明な釉が施され、口縁端部のみが露胎している。

白磁

蓋（11）クラゲ形の傘に円柱状の込みの部位からなる。傘の径は 3.4cm、込み栓の部位の径は 1.8cm を測る。高さは 1.1cm 以上。乳白色の釉が傘の上面のみに掛けられる。

国産陶器

盃（12）天目椀の小型品で短く外に反る口縁を持つ。高台は内刳りがごく浅い。口径 6.9 ㎝、器高 3.1 ㎝、底径 3.2 ㎝に復元される。胎土は中国産と比較すると粗く色調が茶黒色で、国産の可能性がある。

土製品

棒状土製品（13）土師質の焼成で、長さ 6.7cm、幅 6.0cm、厚さ 4.5cm を測る。粘土板を折り曲げて成型した痕跡が観察される。土器焼成にかかわる道具と評されている。

鞴羽口（14）灰色に還元化した部位の破片で、直径が 10cm を超える大きさに復元され、やや大きな部類に位置づけられる。

円盤状土製品（15）直径 3.1cm、厚さ 0.6cm を測る。土師器片を円形に加工したもの。

土鈴（16）土師質焼成のもので切り目の入った口の小片である。外面に黒色の顔料が残存している。

石製品

棒状石製品（17）滑石を用いたもので、縦方向にカーブを描くことから、石鍋の胴部片を横方向に再利用したものであろう。小口まで面を取って整形されている。長さ 9.9cm、幅 2.6cm、厚み 1.7cm を測る。

方柱状石製品（18）これも滑石を用いたもので、面取りをした粗い削りの痕跡が明瞭に残されている。長さ 7.3cm、幅 2.3cm、厚み 1.5cm を測る。

金属製品

椀形滓（19）円盤形のいわゆる椀形を呈すが、周辺は打ち欠いたような状況で欠損している。図の下位は炉底部の形状を残している。鉄錆に覆われる。長さ 8.4cm、幅 7.8cm、厚み 4.0cm、重量は 276.4g を測る。

灰色土出土遺物（fig.93 ～ 95、CD 写真 088 ～ 099）

須恵器

坏ｃ１（1）やや丸底気味の体部に外に張り出す高台を持つ。高さ 2.1cm、底径 8.8cm に復元される。焼成は硬質。

壺ｅ（2）朝顔形に屈曲して開く口縁を持つもので、高さ 3.1cm が残る。焼成は硬質だが内面や芯はやや酸化気味である。肥後産の可能性がある。

土師器

坏ａ（3）口径 14.6 ㎝、器高 3.0 ㎝、底径 9.8cm に復元される。胴部から口縁部は直線的に開く形状で、外面に墨書が残るが文字ではなく内容は絵画的に見えるが明確でない。

緑釉陶器

椀（4 ～ 6）4は内側に浅い段の有る貼り付け高台である。胎土は微細な砂粒を含む淡黄褐色で、光沢

のある暗緑灰色の釉が薄くかかる。近江産と考えられる。5 は内面見込みに沈線が巡り、底部は内側に段の有る貼り付け高台である。胎土は淡茶褐色で精良で、暗緑色の薄い釉が施される。近江産と考えられる。6 は胎土には細かな砂粒を含む淡橙色の土師質で、濃緑色の厚めの釉がかかる。

青白磁

合子蓋（7）推定器高 1.8 ㎝、口径 6.0 ㎝を測る小片である。天井部に型抜きによる凸状模様がみられる。素地は淡灰白色で、光沢のある淡緑白色釉が施される。

中国陶器

甕（8）T字状を呈す口縁のみの破片である。内面に成形時の布目状の充て具痕がある。胎土は砂粒を多く含み粗く、緑味を帯びたにぶい灰褐色の釉がかかる。口縁上部は粗く拭き取られる。

国産磁器

青磁鉢（9・10）9 は底部のみの破片で、底径 8.0 ㎝を測る。素地は白色で混入物がなく、釉調は淡青緑色で、内面の釉が厚めで 1 ㎜以上施される。高台畳付部分の釉は拭き取られている。底面中央に縦文字で「コメ□（長ヶ）」と三文字の朱書がある。三文字目は消えかかっているが、漢字と思われる。現場の場所は古川家跡で米屋を営んでいたことから、町内では「コメチョウ」と呼ばれている。10 は口縁部がての字状に外反し、一部波状を呈す。素地は白色で精良で、淡青緑色の釉が厚めに施される。9 と 10 は直接接合しないが、素地や釉調から同一遺物の可能性がある。

色絵小壺（11）頸部から体部にかけて袋状に広がる形状を呈す。淡白灰色の精良な素地で、朱や黒で色絵が施される。

盃（12）ほぼ完形で、口径 5.0 ㎝、器高 2.9 ㎝、底径 2.1 ㎝を測る。口縁が外反し、削り出し高台は内湾する三日月状を呈す。淡白色で精良な素地で、光沢のある淡白緑色釉が施される。

国産陶器

鉢（13）1/3 残存で、復元口径 18.8 ㎝、器高 6.6 ㎝、復元底径 11.0 ㎝を測る。口縁端部は丸みを帯びた玉縁状を呈し、外に開く角高台である。胎土は砂粒を若干含み密で、高台部分以外にはにぶい緑褐色釉がかかる。口縁部分のみに白釉が施される。

壺（14）1/4 残存で、復元底径 16.8 ㎝を測る。高台がくの字に張り出す特徴的な形状をしており、体部は直線的に立ち上がる。底部には板状圧痕と目跡が見られる。胎土は砂粒をわずかに含み淡褐白色で、光沢のある暗緑灰色釉が薄く施される。

土瓶蓋（15）1/2 残存で、器高 3.6 ㎝、底径 7.8 ㎝を測る。天井部は淡白灰色の化粧土後に暗茶褐色と淡緑色の二彩が施される。内面にカタカナ表記の墨書がある。

焙烙把手（16）上下二枚合わせの型で成形されている。把手上部は押し型文様で、下部はナデで調整されている。胎土は淡茶褐色で砂粒をわずかに含みやや密である。野間焼と考えられる。

土師質土器

風炉×香炉（17）口縁上部から外面にかけて渦巻き状のスタンプが施される。外面にはタテに穿孔のある把手が付いていた痕跡がのこる。胎土は暗褐色で、砂粒を多く含みやや密である。

筒状土製品（19 ～ 21）19 は口縁 11.6 ㎝、器高 11.6 ㎝以上を測る破片である。口縁端部は内側に張り出し、内面は粘土帯接合の痕跡が残り、外面はハケ状工具によるタテ方向のナデが施される。胎土は砂粒を多く含みやや密で、暗褐灰色の還元焼成である。20 は底径 12.8 ㎝を測る破片である。底部は一定方向のナデ調整で、外面は不定方向のナデが施される。内面見込みは体部との境目に放射状の指押さえ痕が見られる。21 は器高 14.0 ㎝以上、底部 8.5 ㎝を測る破片である。底部は板状の粘土を貼り付けた痕跡が見られ、底部は工具によるナデ調整が残る。内面はタテ方向のナデで、外面はタテ方向

のハケ目が施される。
大甕（22）器高 5.6cm 分の小片で、口縁端部上面が平坦な断面形状が撥形を呈す。焼成はにぶい茶褐色を呈す硬質のもので、ハケ状工具によってナデられる。
瓦質土器
火鉢（18･23）18 は口縁部 1/4 程度の破片で、口径 19.6 ㎝に復元される。内外面ともにナデ調整で、外面に叩きによる鱗状の模様が施される。胎土は砂粒と金雲母を含みやや粗く、燻しにより表面が黒色化している。23 は内面にはハケによるヨコナデと指圧痕、外面には丁寧なナデ調整後スタンプによる凹線の草花文が施される。胎土は砂粒を少し含みやや粗く、燻しが不十分で黒色化せず、にぶい灰色を呈す。
瓦類
軒丸瓦（24・25）24・25 ともに瓦質で器面は燻しにより黒色化している。24 は推定 14 の珠文をもつ三つ巴文の丸瓦である。巴文が太く、巴同士が連結していないのが特徴である。胎土は淡灰白色で、砂粒を多く含みやや粗い。25 は推定 12 の珠文をもつ三つ巴文の丸瓦である。巴文の先が細長く延び、三つが連結しているのが特徴である。胎土は黒灰色で、砂粒を多く含みやや粗く軟質である。
軒平瓦（26・27）26・27 ともに瓦質で器面は燻しにより黒色化している。26 は中央の笹葉文が見られる破片で、瓦当部分から凹面にかけて微細な白雲母が付着している。27 は唐草文が確認でき、瓦当の周辺は強いヨコナデで調整されている。凹面にはタテ方向の削り後ナデ調整が見られ、多少白雲母が付着している。
平瓦（28）両面と切離し部分に細かなナデ調整が施され、端部には面取りがみられる。凸面には丸に囲まれた文字「城島」がスタンプされている。硬質な焼成で、燻しにより黒色化する。
土製品
打ち欠き土器（29）
棒状土製品（30）タテ 7.9 ㎝、厚さ 3.5 ㎝を測る破片である。欠損部の断面観察から棒状の粘土に板状粘土を巻き付けた痕跡が見られる。表面はナデにより四角柱状に成形されている。胎土は淡灰茶色で、大粒の砂粒を多く含みやや粗い。
鞴羽口（31）先端部の残る破片である。外面の炉に接続している先端部は被熱により黒灰色を呈し、還元して灰色化している。胎土は大粒の砂粒を多く含みやや粗い。
石製品
四葉硯（32）ほぼ完形で、タテ 5.4 ㎝、ヨコ 4.4 ㎝、厚さ 0.75 ㎝を測る。長方形で、鑿により四葉状に加工されている。石材は黒灰色の泥岩である。
石臼（33）緑灰色を呈す砂岩製のすり臼の下部で、外径 38.0cm、すり面の径 18.0cm、高さ 10.5cm を測る。中心には直径 2cm の円筒形の穴が貫かれている。受け部の外面までは平坦な仕上げがほどこされるが、底部は上げ底でノミの粗い調整のままである。すり目は幅 1mm ほどの放射状の線彫りであるが、ほとんど磨耗している。鎌倉時代以降の所産か。
板状石製品（34）ほぼ完形で、タテ 11.1 ㎝、ヨコ 8.6 ㎝、厚さ 2.0 ㎝を測る。全体の 1/5 部分に穿孔がある。両端部には丁寧な削り調整が施される。石材は灰黒色の滑石である。
金属製品
椀形滓（35）タテ 7.7 ㎝、ヨコ 9.1 ㎝、厚さ 3.9 ㎝を測る。底部が椀形状を呈し、内面には黒灰色の凹みがみられる。大粒の砂粒が全面に渡って付着している。

（柳・山村）

## 5．自然科学分析

### 1）大宰府条坊跡第 224 次調査出土人骨について

舟橋京子＊・田中良之＊＊
＊九州大学総合研究博物館
＊＊九州大学大学院比較社会文化研究院

１．はじめに

福岡県太宰府市条坊 224 次調査において、平安末期の溝から人骨が出土し、太宰府市教育委員会から依頼を受けた九州大学大学院比較社会文化学府基層構造講座の舟橋京子（現．九州大学総合研究博物館）・端野晋平（現．九州大学人文科学研究院）・岡崎健治（現．吉林大学）・板倉有大（現．福岡市教育委員会）が現地へ赴き調査および取り上げを行った。その後人骨は九州大学へと搬入され、同講座において整理分析を行った。

２．224SD050 溝出土状況

224SD050 溝内の北側から馬骨１頭分が出土しており、この付近から人間の右橈骨近位端付近が出土している。この馬骨の南側南北 150 ㎝×東西 50 ㎝の範囲から獣骨と人骨が出土している（北側獣骨･人骨群）。このうち人骨に関しては、先述の溝内北側出土馬下顎骨の下から腰椎と寛骨が出土している。馬下顎骨の直下南側からは右大腿骨が出土しており、この右大腿骨南側から左大腿骨および下顎骨が出土している。さらに南側からは、右尺骨・左右不明上腕骨・頭蓋骨が散乱した状態で出土している。この頭蓋骨は、左大腿骨とともに出土した下顎骨と同一個体である。

また、これらの人骨・獣骨群から 60 ㎝南側からも人骨と獣骨が混在した状態で出土している（中央獣骨・人骨群）。この人骨・獣骨群のうち北側からは部位同定困難な長管骨が出土している。さらに、この人骨・獣骨群の中央付近からは、下顎骨２体分がオトガイを東にし咬合面を上にした状態で南北に並んだ状態で出土しており、これらの下顎の南側からは、南側の下顎骨に対応する上顎骨およびこれらの顎骨とは別個体と考えられる頭蓋冠と歯牙１体分が出土している。この頭蓋骨の南側からは、長軸を南北にした状態で右脛骨および左右不明基節骨が出土している。さらにこれらの長管骨の南側から、１体分の頭蓋骨および歯牙が出土している。

また､これらの獣骨･人骨群から 1.5m 南側からも､頭蓋骨が１体分出土している（南側獣骨･人骨群）。

一方で、これらの獣骨・人骨よりも下層の茶灰砂質土層中からも獣骨が出土しており、微量ながら人骨も出土している。この人骨は部位不明であり、溝の中央よりやや北側から出土している。

これらの出土人骨で関節状態を保っているものはなく、北側獣骨・人骨群から出土した左右大腿骨と中央獣骨・人骨群から出土した頭蓋骨と下顎骨がそれぞれ近接して出土しているのみである。前章までに記述されているとおり土層の状態から､人骨が溝内に持ち込まれた段階には溝内には水の流れは無く、遺骸が溝内を流されている間に体の各部位が離散した可能性は低い。したがって、これらの人骨は、死亡直後に溝内に持ち込まれたのではなく、早くても軟部組織がある程度腐朽し関節が外れるようになった段階で溝内に持ち込まれたと考えられる。

３．人骨所見

ⅰ）北側獣骨・人骨群出土人骨

この獣骨人骨群においては、１体分の頭蓋骨および躯幹骨と四肢骨が数点ずつ遺存している。

・頭蓋骨①

【保存状態】

本頭蓋骨は保存状態があまり良くない。左頬骨および左側頭骨の外耳･乳様突起付近が遺存している。また、左右上顎骨の歯槽部が一部遺存しており、下顎骨も下顎体が遺存している。乳様突起は発達している。歯牙も一部遺存しており、残存歯牙の歯式は以下の通りである。

| | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ／ | △ | △ | ／ | ／ | ／ | ／ | $I^1$ | ／ | ／ | C | △ | $P^2$ | $M^1$ | $M^2$ | ／ |
| ／ | × | $M_1$ | $P_2$ | $P_1$ | C | ○ | ○ | ○ | ○ | C | $P_1$ | $P_2$ | $M_1$ | $M_2$ | $M_3$ |

歯牙咬耗度は、栃原（栃原 1957）の 2° a ～ 3° である。

【性別・年齢】

頭蓋骨は、性別に関しては乳様突起が発達していることから男性と判定され、年齢は歯牙咬耗度から熟年と推定される。

・躯幹骨及び四肢骨

【保存状態】

全体的に保存状態はあまり良くなく、部位の判別可能な人骨は少ない。躯幹骨は下部胸椎 2 点と腰椎 1 点が遺存している。腰椎にはリッピングが見られる。

上肢骨は左右不明上腕骨体部片と左尺骨遠位端片が遺存している。尺骨の太さは太い。

下肢骨は左右大腿骨体部が遺存している。大腿骨の粗線は左右ともに発達している。

上記の人骨以外にも部位同定困難な破片が複数遺存している。

【性別・年齢】

これらの躯幹骨・上肢骨・下肢骨は同一個体かどうかは不明であり、それぞれの部位ごとに性別・年齢の記述を行う。躯幹骨のうち腰椎にはリッピングが見られることから、熟年以上の可能性が高い。上肢骨のうち尺骨は太さが太いことから男性の可能性が考えられる。大腿骨は粗線が発達していることから男性と判定される。

ⅱ）中央獣骨・人骨群出土人骨

この獣骨・人骨群からは頭蓋骨 2 体分および上肢骨・下肢骨が出土している。

・頭蓋骨②

【保存状態】

保存状態はあまり良くない。側頭骨の乳様突起付近および後頭骨の外後頭隆起付近、左右上顎骨の口蓋部分および下顎体が遺存している。乳様突起と外後頭隆起はともに発達している。歯牙も一部遺存しており、残存歯牙の歯式は以下の通りである。

| | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ／ | $M^2$ | $M^1$ | $P^2$ | $P^1$ | C | $I^2$ | ○ | $I^1$ | ○ | C | $P^1$ | $P^2$ | $M^1$ | △ | $M^3$ |
| ($M_3$) | $M_2$ | $M_1$ | $P_2$ | $P_1$ | ／ | ／ | ／ | ／ | $I_2$ | C | $P_1$ | ／ | ／ | ／ | ／ |

歯牙咬耗度は、栃原（栃原 1957）の 2° a である。

【性別・年齢】

年齢は、歯牙咬耗度から、成年後半から熟年前半と推定される。性別は乳様突起と外後頭隆起が発達

していることから男性と判定される。
・頭蓋骨③
【保存状態】
　本頭蓋骨の保存状態はあまり良くない。前頭骨の右眼窩上縁付近、左右頬骨、左側頭骨の外耳付近と後乳突縫合付近片、上顎骨の口蓋部分が遺存している。歯牙も一部遺存しており、残存歯牙の歯式は以下の通りである。

| | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ／ | $M^2$ | $M^1$ | ／ | ／ | ／ | ／ | ／ | ／ | ／ | ／ | $P^1$ | $P^2$ | $M^1$ | $M^2$ | $M^3$ |
| ／ | ／ | ／ | ／ | ／ | ／ | ／ | ／ | ／ | ／ | ／ | ／ | ／ | ／ | ／ | |

歯牙咬耗度は、栃原（栃原 1957）の 2°　b ～ 3°である。
【性別・年齢】
　年齢は、歯牙咬耗度から、熟年以上と推定される。性別は判定可能な部位が遺存していないため不明である。
・下顎骨および長管骨
【保存状態】
　下顎骨は、下顎体が遺存しており、歯牙も一部残存している。残存歯牙の歯式は以下の通りである。

| | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | ● | | | | | | ● | | | | | | |
| ／ | ／ | ／ | $P^2$ | ／ | ／ | ／ | ／ | ／ | $I^2$ | ／ | ／ | ／ | ／ | ／ | ／ |
| ／ | ／ | $M_1$ | $P_2$ | $P_1$ | △ | $I_2$ | $I_1$ | △ | △ | △ | △ | $P_2$ | $M_1$ | $M_2$ | ／ |

歯牙咬耗度は、栃原（栃原 1957）の 1°　c ～ 2°　b である。
　四肢骨は、右脛骨縁位端片と左右不明手の基節骨が遺存している。この他にも部位同定困難な小片が複数遺存している。
【性別・年齢】
　下顎骨は歯牙咬耗度から成年から熟年と推定される。それ以外の部位は、保存状態もあまり良くなく性別・年齢の判定可能な部位も遺存していないことから、推定困難である。
ⅲ）南側獣骨・人骨群出土人骨
本群からは頭蓋骨が出土しており、これを頭蓋骨④として以下記述を行う。
【保存状態】
　本個体の保存状態はあまり良くなく、部位同定困難な頭蓋冠片が遺存しているのみである。
【性別・年齢】
　性別・年齢ともに判定・推定可能な部位が遺存していないため不明である。

これらの人骨の他にもより下層の茶灰砂質土層から微量の人骨が出土しているが、いずれも部位同定困難であり、性別・年齢ともに不明である。

4．本遺跡に見られる人骨遺棄の様相
　本遺跡において出土した人骨は、先述の通りいずれも関節状態を保っているものはなく、左右大腿骨

１組、１体分の頭蓋骨と下顎骨がそれぞれ近接して出土しているのみである。そして、人骨が廃棄された段階には溝内は水の流れはなく、溝内を流されている間に各部位が離散した可能性は低い。したがって、これらの人骨は少なくとも軟部組織がある程度腐朽し関節が外れるようになった段階以降に溝内に廃棄されたものと考えられる。また、人骨の遺存部位に関しては、部位同定困難な細片が出土しているものの、頭蓋骨４体分に対し躯幹骨・四肢骨は少量しか出土しておらず、残存部位に偏りがある。

以上の出土状況および人骨の残存状況と、中世における人の遺骸の二次的移動に関する研究から（勝田 2003）、本人骨群が溝に遺棄される以前の状態として以下の３つの可能性が考えられる。

①土葬されていた遺骸が掘り起こされて頭蓋を中心に溝内に持ち込まれた。

②遺棄葬または風葬もしくは行倒れで地表におかれていた遺骸の一部が動物（犬・鳥）により溝内に持ち込まれた。

③遺棄葬または風葬もしくは行倒れで地表におかれていた遺骸の一部が人により持ち込まれた。

なお、動物による移動の可能性等に関しては、本来骨表面についても観察を行い動物のかじり痕等の確認を行う必要があるが、本遺跡出土人骨に関しては表面の腐食が激しく観察困難であった。風葬に関しても、晒された痕跡を観察する必要があるが、同様に困難であった。ただ、葬制としての風葬は古代～中世の文献記録にも残されていないため、その可能性は考えがたい。そこで、上記の３つの可能性について人骨の出土状況・部位等から考察したい。

まず、①に関しては、溝出土であるという点から、改葬目的で掘り返された可能性は低い。また、何らかの理由で、本来埋葬されていた空間を別目的で利用するために遺骸を回収・遺棄したのであれば、上述のような極端な出土部位の偏りは生じない。②の可能性に関しては、動物により骨が移動される場合、その動物の運びやすさにより運ばれる部位に選択がかかる可能性が考えられる。例えば、勝田至氏は中世の犬により貴族の屋敷地へ運び込まれる遺骸は小児が多く、その一因として犬が運べる重さが反映されていると指摘している（勝田 2003）。本遺跡で出土している人骨の部位を見ると、軟部組織がある程度残存していた段階では重量が最も重い頭蓋骨が多く出土している。仮に、動物により運ばれたならば、頭蓋骨よりも軽く、運びやすい四肢骨も多く出土しているはずである。さらに、犬などが骨を囓る場合は海面質に富む骨端部から囓るが、このケースでは骨端部が遺存している。したがって、本溝内出土人骨が動物により運ばれた可能性は低いと考えられる。一方で、③の可能性に関しては、人により遺骸が移動される場合、頭蓋・下肢などの目に付きやすい部位を中心に側溝に廃棄された可能性が考えられよう。この場合、溝に遺棄される前段階に既に動物により四肢骨などの比較的運びやすい部位が運ばれており、運ぶのが困難であった比較的重量の重い部位が遺存していた可能性も考えられる。

以上のことから、本遺跡から出土した人骨群は遺棄葬もしくは行倒れで地表に放置されていた遺骸の一部が人により溝内に遺棄されたと推定できよう。但し、単に人骨を遺棄しているのか、平安京の朱雀大路東側溝から出土した人骨事例のように供養の意味を込めた遺棄であるかは不明である。

## 5. まとめ

本遺跡からは少なくとも４体分の人骨が出土した。保存状態があまり良好でない事から、計測等は行えなかったが、出土状況から溝の中に人骨を移動するという行為が復元できた。
このような事例は平安京・平城京の発掘調査により近年事例数が増えつつある（奈良国立文化財研究所 1983：1997）。本遺跡においては中央の都市のみでなく地方都市においても中央と同様に、地表に遺骸が放置されており、さらにその遺骸を溝内に人の遺棄するという行為が行われていたということが確認された。このような、地方都市における遺骸の遺棄について明らかにするためにも、今後の事例の増

加が待たれる。

最後に、本報告にあたり、太宰府市教育委員会の山村信榮氏、柳智子氏、中島恒次郎氏にはご便宜を賜り、かつご迷惑をおかけした。深謝したい。九州大学総合研究博物館の岩永省三氏・太宰府市教育委員会の中島恒次郎氏には平城京・平安京における溝内出土人骨に関し様々なご教示を頂いた。記して謝意を表したい。また、九州大学大学院比較社会文化学府基層構造講座の小田裕樹（現．独立行政法人奈良文化財研究所）・渡邊誠（現．高松市教育委員会）・山根謙二の諸氏には人骨の整理作業でご協力頂いた。感謝したい。

参考文献

栃原　博，1957：日本人歯牙咬耗度に関する研究．熊本医学会雑誌，31-4．
勝田　至，2003：死者達の中世．吉川弘文館．
奈良国立文化財研究所編，1983：平城京東堀河左京九条三坊の発掘調査．
奈良国立文化財研究所編，1997：平城京東堀河左京七条一坊十五・十六坪発掘調査報告．

## 2）大宰府条坊跡第 224 次調査出土の動物遺存体

菊地大樹（京都大学大学院人間・環境学研究科）
石丸恵利子（総合地球環境学研究所）
松井章（奈良文化財研究所埋蔵文化財センター）

### 1．概要

今回報告する動物遺存体の大部分は、およそ大宰府 4 条 12 坊の平安時代 12 世紀中頃の道路西側溝 224SD050 の側溝内に廃棄されたものである。動物遺存体の多くは骨の主成分であるリンと地下水の鉄イオンとが結合した藍鉄鋼（ビビアナイト）を析出させて劣化しており、その結果、関節部の多くが発掘時に取り上げられず崩壊し、また発掘後の乾燥によっても劣化が進んだため、多数の亀裂が生じて破片となっている。出土した動物遺存体のうち、種まで同定できたものは 334 点で、魚類はマダイ、哺乳類はヒト、イヌ、ネコ、ウマ、イノシシ／ブタ、ニホンジカ、ウシの 7 種であった。保存状態の悪さから骨の表面に亀裂が生じ、剥離して荒れているため、解体痕などの痕跡は観察できなかった。

各部位の計測は Driesch (1976) に従い､部分骨からのウマの体高推定は西中川ら (1991) に基づく。以下、出土した動物遺存体について記す。

### 2．種類ごとの特徴

#### マダイ

#### L3 付近

主上顎骨（左）が 1 点出土している。

#### 224SD404　A4 付近

前上顎骨（右）が 1 点出土している。

#### ヒト

#### 224SD050

下顎骨（右）、上腕骨（左）、脛骨（不明）が 1 点ずつ、計 3 点が出土している。

#### イヌ

同定できた点数は 92 点、ウマについで総点数の約 2 割を占める。

#### 224SD050

頭蓋骨（左 2 右 5 不明 1）、寛骨（左 5 右 3）が 8 点ずつ、下顎骨（左 4 右 2）が 6 点、上腕骨（左 4 右 1）、大腿骨（左 3 右 2）、脛骨（左 4 不明 1）が 5 点ずつ、肩甲骨（左 1 右 1）、距骨（左 1 右 1）が 2 点ずつ、橈骨、第 3 中手骨と第 2 中足骨（右）が 1 点ずつ、遊離歯（左 6 右 4）が 10 点、肋骨（不明）が 7 点、椎骨が 18 点の計 79 点が出土している。いずれの部位も解剖学的な位置を保っておらず、散乱状態で出土したようである。頭蓋骨からもとめられる最小個体数は 5 個体となる。

#### 224SD050　J4 付近

寛骨（左）、肋骨（不明）が 1 点ずつ、計 2 点が出土している。

#### 224SD050　K4 付近

下顎骨（右）、寛骨（左）、脛骨（右）、上腕骨（右）が 1 点ずつ、計 4 点が出土している。

**224SD050　L4 付近**

大腿骨（左）が 1 点出土している。

**224SD050　最下層清掃時埋土**

橈骨（右）が 1 点出土している。

**224SD407　A4 付近**

椎骨が 1 点出土している。

**224SD404　A4 付近**

寛骨（左 1 右 1）、椎骨が各 2 点、計 4 点が出土している。

**ネコ**

同定できた点数は 26 点である。西側側溝に対応する位置から出土している。解体痕等は観察できなかった。

**224SD404　A4 付近**

尺骨（左 2 右 1）が 3 点、上腕骨（左 1 右 1）、橈骨（左 1 右 1）、脛骨（左 2）、椎骨が 2 点ずつ、下顎骨、肩甲骨、踵骨（左）、基節骨（右）、肋骨（不明）、頭蓋骨が 1 点ずつ、そのほか、第 2 から第 5（左）、第 2、第 5（右）の中足骨、第 5 中手骨（左）、部位が特定できなかった中手骨（右）と中足骨（右）が 1 点ずつの計 26 点が出土している。

これまで古代遺跡からネコが出土した例はなく、おそらく唯一の出土例となるだろう。

**ウマ**

同定できた点数は 194 点で、今回同定した総点数の約半数を占める。西側側溝から検出されたものがほとんどである。発掘時の記録によると、1 頭は全身骨格が確認されているが、その他は散乱状態であった。保存状態に恵まれず、ほとんどの骨の表面はビビアナイトの析出や、取り上げ時とその後の物理的脆弱性によって亀裂を生じていたため、崩壊がすすんでおり、人為的な解体痕などは観察できなかった。

**224SD050**

大腿骨（左 3 右 3 不明 3）が 9 点、肩甲骨（左 4 右 3）、上腕骨（左 2 右 5）、寛骨（左 3 右 2 不明 2）、中節骨（左 2 右 1 不明 4）が 7 点ずつ、中手骨（左 3 右 2 不明 1）、橈骨（左 2 右 4）が 6 点ずつ、下顎骨（左 2 右 2 不明 1）、基節骨（左 2 右 2 不明 1）が 5 点ずつ、距骨（左 2 右 2）、尺骨（左 1 右 3）、脛骨（左 1 右 2 不明 1）、末節骨（不明 4）が 4 点ずつ、踵骨（左 1 右 2）、中足骨（左 1 右 2）が 3 点ずつ、頭蓋骨、上顎骨（左 1 右 1）、肋骨（不明）が 2 点ずつ、遊離歯（左 10 右 15 不明 3）が 28 点と椎骨 33 点、そのほか手根骨、足根骨、豆状骨、種子骨といった細かい骨が 15 点の計 163 点が出土した。

出土したウマは、計測可能な中足骨、中手骨、橈骨の最大長から、推定体高 125 ～ 135 ㎝と推定され、トカラウマや対州馬といった在来和種の小形馬（ポニー）に属す。

**224SD050　I4 付近**

遊離した臼歯（不明）が 1 点出土している。

**224SD050　J4 付近**

遊離した臼歯（左 1 右 1）が 2 点出土している。

**224SD050　K4 付近**

遊離した上顎切歯（左)、上顎臼歯（右)、椎骨、豆状骨が１点ずつ、計４点出土している。

**224SD050　L4 付近**

遊離した臼歯（不明)、中足骨（左)、寛骨（左）が１点ずつの計３点出土している。

**224SD050　南側**

遊離した上顎臼歯（左６右８不明１）が 15 点出土している。

**K3 付近**

遊離した臼歯（左）が１点出土している。

**224SD100　I2 付近**

遊離した臼歯（不明）が１点出土している。

**224SD310**

遊離した上顎臼歯（右）が１点出土している。

**224SD402　A5 付近**

遊離した上顎臼歯（右１不明２）が３点出土している。

**イノシシ／ブタ**

計８点が出土している。近年の考古学の成果により、弥生時代以来、日本列島にイノシシが存在したことが明らかになったが、形態上の区別については、現在においても議論さえており、その判別は容易ではない。しかし、『続日本紀』聖武紀には、畿内の百姓らの飼いたる猪を山野に放ち云々、という記載もあり、大宰府で「猪」が飼われていた可能性は十分に考えられよう。

**224SD050**

上顎骨（左)、脛骨（左)、第３または第４の中足骨（左右不明）が１点ずつ、計３点出土している。

**224SD050　最下層清掃時埋土**

頭蓋骨（左）が１点出土している。

**224SD137　D4 付近**

遊離歯（左）が１点出土している。

**224SD404　A4 付近**

肋骨（左１右１）が２点、上腕骨（右）が１点の計３点が出土している。

**ニホンジカ**

**224SD050**

脛骨（左）が１点出土している。

**224SD050　K4 付近**

遊離歯（左）が１点出土している。

**ウシ**

**224SD050**

脛骨（左）が１点出土している。

**224SD050　L4 付近**

椎骨が２点出土している。

**224SD137　D4 付近**

遊離した上顎臼歯（右）が3点出土している。

**224SD404　A4付近**

距骨（左）が1点出土している。

### 3. まとめ

本報告資料は、太宰府市による大宰府条坊跡第224次調査で出土した動物遺存体である。調査区は5地区に分けて調査され、各地区ともに平安、鎌倉、近世の各時代の遺構が検出されている。

本遺跡から出土した動物遺存体のなかで、およそ4条12坊の側溝中からウマが大量に出土したこと、224SD050で獣骨と共にヒトが出土したこと、またネコの出土が特徴としてあげられる。平城京や平安京の運河、もしくは大規模側溝において、ヒトが他の動物遺存体とともに遺棄されている事例は、京都や奈良の都市遺跡では確認されているが、大宰府においてははじめてであり、当時の大宰府の都市景観とともに、都市部における廃棄状況を知る貴重な手がかりとなる資料となろう。

さらに、224SD404から確認されたネコは、12世紀前半の遺構から検出されており、遺跡からのネコの確実な出土例は、いまのところ鎌倉の中世遺跡からとされることから（松井2002）、日本におけるネコの出現事例として貴重な資料である。

日本列島には縄文時代を通じて、オオヤマネコが生息し、現在でもツシマヤマネコ、イリオモテヤマネコが生息し、その大きさは現代のイエネコとほぼ同大である。『枕草子』や『源氏物語』などには、ネコの描写があり、平安時代にはネコが存在していたことは明らかであるが、考古資料として確認されたものとしては、はじめてであろう。

これまでに、太宰府の井戸から出土した動物遺存体を報告し、縄文犬から草戸千軒町、現生日本犬、特にシバイヌに連なる在来犬の範疇よりも大きい頭蓋骨が出土した。この点に関し、大宰府が大陸との盛んな交流拠点であったことから、大陸から連れてこられた可能性を指摘した（松井・沖田1998）。今回の報告では、残念ながら保存状態が良好でなかったため、同様の傾向はみられなかった。今後の類例増加を待ちたい。

なお、出土した動物遺存体の保存処理にあたっては、パラロイドB-72をアセトン（$CH_3COCH_3$）で5%に溶解したものを塗布した。

脱稿後、長崎県壱岐カラカミ遺跡Ⅰからネコが出土し、AMS年代測定をおこなったところ、2140±24yrBPという結果が得られ、弥生時代のものであることが判明した（宮本2008）。本例は、日本における確実な資料として最古にあたる。しかしながら、ネコの出土例は古代・中世の遺跡からも稀であり、本例はその貴重なひとつとなろう。

### 参考文献

(1) Driesch,A.von den 1976 *A Guide to the Measurement of Animal Bones from Archaeological Sites. Peabody Museum Bulletins 1* Harvard University.

(2) 西中川駿 1991『古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究』平成2年度文部省科学研究費補助金（一般研究B）研究成果報告書。

(3) 松井章 2002「ネコ〈猫〉」『日本考古学辞典』三省堂、687頁。

(4) 沖田絵麻、松井章 1998「大宰府条坊跡第64次調査出土の動物遺存体」

『大宰府条坊Ⅹ』（大宰府市の文化財第 37 集）大宰府市教育委員会。
⑸ 宮本一夫 2008『壱岐カラカミ遺跡Ⅰ―カラカミ遺跡東亜考古学会第 2 地点の発掘調査―』平成 19 年度文部科学省科学研究費補助金基盤研究 B（2）研究成果報告書。

**表 1　出土動物遺存体種名表**

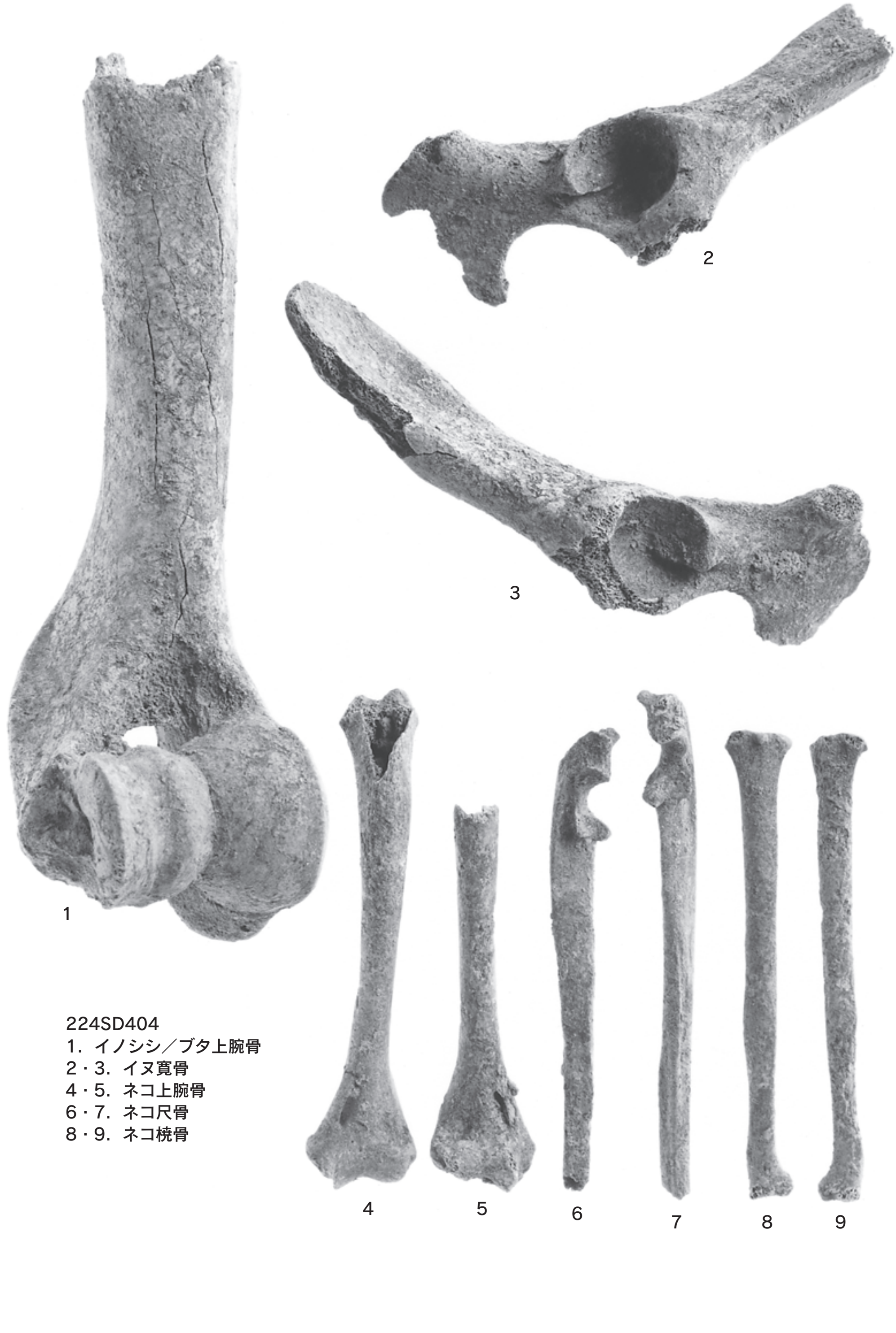
硬骨魚綱 CLASS OSTEICHTHYES
　スズキ目 Order Perciformes
　　タイ科 Family Sparidae
　　　マダイ *Pagrus Major*
哺乳綱 MAMMALIA
　霊長目 Primates
　　ヒト科 Hominidae
　　　ヒト *Homo sapiens*
食肉目 CARNIVORA
　イヌ科 Canidae
　　イヌ *Canis familiaris*
　ネコ科 Felidae
　　ネコ *Felis catus*
奇蹄目 Perissodactyla
　ウマ科 Equidae
　　ウマ *Equus caballus*
偶蹄目 Artiodactyla
　イノシシ科 Suidae
　　イノシシ／ブタ *Sus scrofa*
　シカ科 Cervidae
　　ニホンジカ *Cervus nippon*
　ウシ科 Bovidae
　　ウシ *Bos Taurus*

224SD050
1. ウマ上腕骨　4・5. ウマ中節骨　10 ～ 12. ウマ中手骨
2. ウマ踵骨　6. ウマ橈骨
3. ウマ基節骨　8・9. ウマ中足骨

224SD137
7. ウシ橈骨

224SD404
13. ウシ距骨

fig.96　第 224 次調査　出土動物遺存体写真（1）




224SD404
1．イノシシ／ブタ上腕骨
2・3．イヌ寛骨
4・5．ネコ上腕骨
6・7．ネコ尺骨
8・9．ネコ橈骨

fig.97　第 224 次調査　出土動物遺存体写真（2）

## 6. 小結

1）条坊 224 次調査の遺構と出土遺物

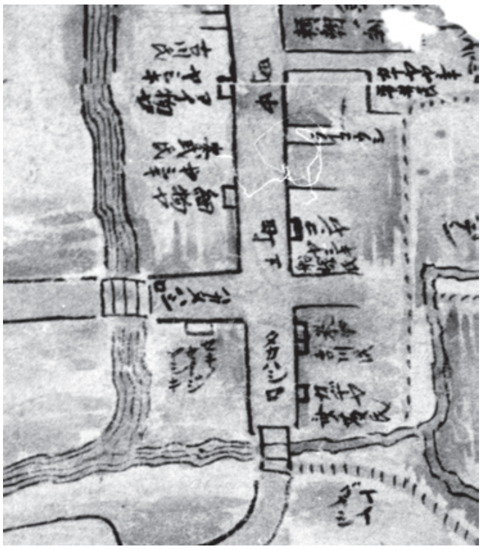


fig.98 『太宰府旧蹟全図北』の五条付近

この地点での明確な遺構の展開は大宰府土器編年 X 期の 10 世紀後半頃に位置づけられる南北溝 224SD099 を端緒とし、その後に調査区中央を南北道路 224SF010 が貫いている。その道は西側溝の最終埋没が大宰府土器編年 XIV 期の 12 世紀中頃に置かれ、その路面中央に穿たれた井戸 224SE130 が大宰府陶磁器編年 D 期の様相を持つため、12 世紀中頃から後半の間に路面が宅地化して、道路側溝の上を埋めて 224SX067 などの整地がなされ、その後 224SX030 など鎌倉時代後半までの間に緩慢に土地利用が続いていた様子が見られる。鎌倉後期以降の明確な遺構は江戸時代後期の 19 世紀後半までは顕著ではないが、瓦質製品や朝鮮産の雑釉陶器などの遺物群の存在から 16 世紀後半から 17 世紀前半頃には至近で生活空間としての利用が再開していたものと考えられる。

遺構では明確でないが、古代については出土遺物からは 8 世紀中頃の供膳具が一定量複数の遺構や包含層から出土しており、条坊 217 次の所見と合わせれば、大宰府政庁第 II 期相当期での生活空間が至近ないしここに存在した可能性が指摘される。平安前期の遺物として越州窯系青磁椀、京都篠窯系の須恵質鉢、京都洛北、防長、近江系の緑釉陶器など大宰府条坊域では通有の外来系遺物が一定量出土しており、遺構は顕著でないが当該時期についても生活空間としては機能していた可能性はある。X 期前後の遺物中に 224SD100-3 で図示したような在来器形にはない形態の肉厚な坏（椀）類が複数出土しており、九州島内での他地域（九州南部地域か）から持ち込まれたと考えられる供膳具として注目される。

近世後半期については本調査地が宰府六座古川家の屋敷に相当する場所であり、廃棄土坑 224SK101 の存在からその屋敷地の縁辺空閑地であったことが考えられ、池の造作のタタキ材としての土塊が出土していることから至近に苑池が造作されていたことが考えられる。朱書で「米長」や「九」と入った肥前系染付坏の出土は什器が家以外の対象者や場所での使用が想定されていたものか。19 世紀後半の出土軒瓦の意匠や陶磁器の組成も天満宮社家町地区と差異や遜色は無く、宰府宿五条入口付近の活発な生活観を示している。

2）出土骨について

本調査区で骨が出土したのは 224SD050・100・137・402・403・404・310 である。道路遺構 224SF010 の東側溝が 224SD100 で、西側溝が 224SD050・137・402・403・404 である。224SD310 は遺構の位置関係から東側溝 224SD100 とつながり、南から東に曲がる交差点部分にあたる。このことから骨はすべて道路に関係する溝から出土している。本調査区で検出された西側溝を概観すると、北側の調査区である 3 区の 224SD050 に集中しており、人骨はこの溝のみで出土している。ただし、西側溝北側という場所は SD050 が西に延びかけた検出状況や SD310 の東への湾曲部の確認から、4 条 12 坊の交差点、平安末期の巷付近であると考えられる。大量の骨は交差点付近の道路側溝に遺棄されていたことが分かった。

出土した骨の分析結果などをまとめると、点数の多い順にウマ、イヌ、ネコ、ヒト、イノシシ / ブタ、ウシ、ニホンジカ、マダイが出土している。ウマは関節状況を保ったまま出土しているものが複数あり、

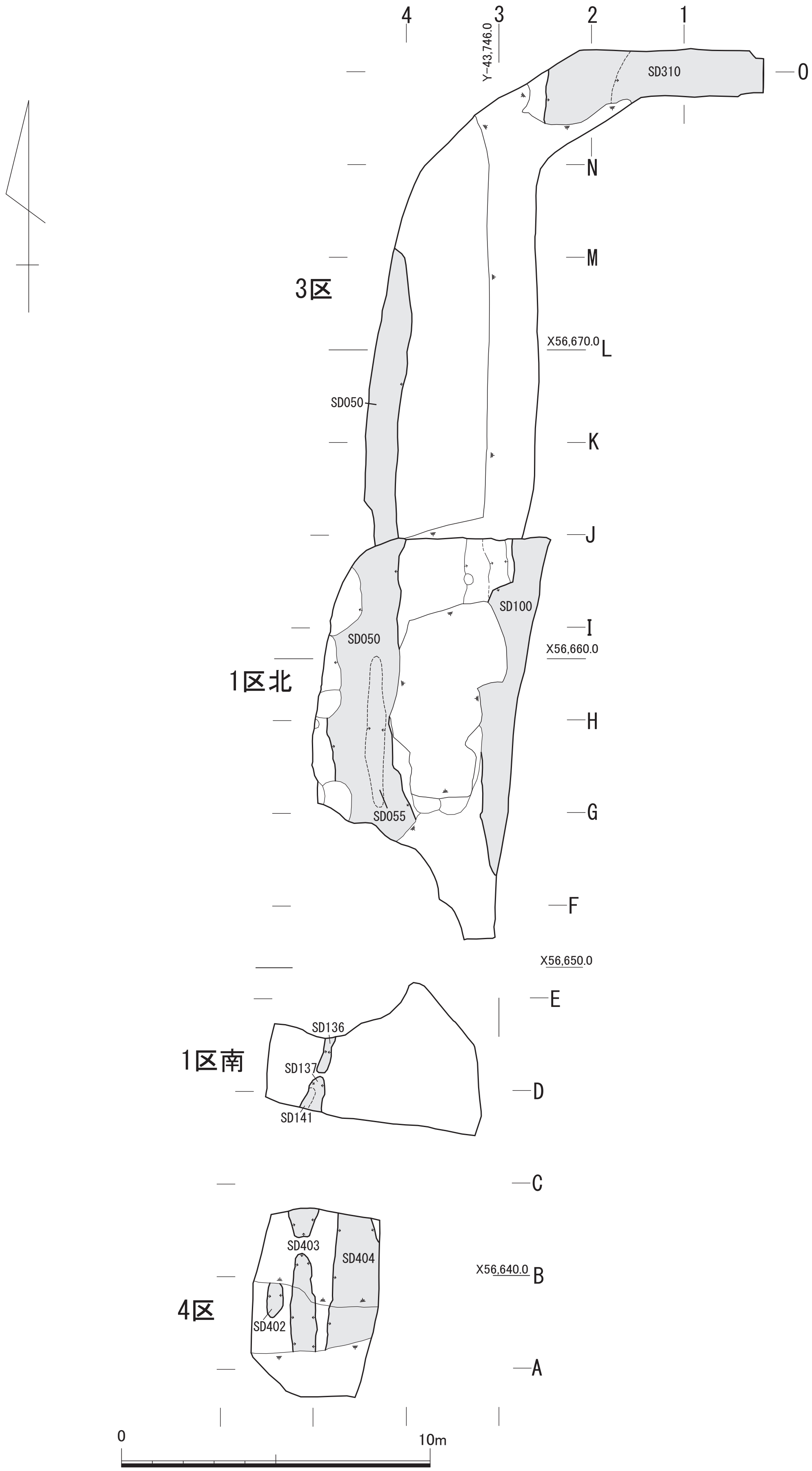



fig.99　第 224 次調査　骨出土遺構配置図（1/200）

全出土数の半分を占める量が出土している。ヒトは頭蓋骨がもっとも多く、四肢骨が多少あるものの出土部位に極端な偏りがある特徴がみられた。出土状況も関節状況を保っていたものはなく、ほぼ白骨化した段階で溝に遺棄されたと分析されている。さらに骨が溝に遺棄されるまでの過程を知る手がかりとして、野外に放置された風化痕、2次加工や解体痕あるいは動物による齧り痕を探っていただいたが、骨の保存状況が悪く、人骨・獣骨ともにそれらの痕跡を確認することができなかった。これらの分析結果と出土状況から出土の背景について考察をこころみた。

まず、獣骨については224SD050ではウマが関節状況を保ったまま出土している状況から、死後そのまま棄て置かれたままの状況で溝に埋没していたと考えられる。道路やその付近で死んだウマを交差点近くの道路側溝に放置していた風景が復元されるが、古代において『養老厩牧令』（官馬牛死条）ではウマやウシの死後は斃牛馬として皮や骨などを資源として二次利用する方法を細かく規定している。平城京や平安京域での発掘調査事例で加工痕や解体痕が残るウマやウシが確認されている。このことから、ウマがそのまま棄て置かれる状況としては、斃牛馬処理を行う職能集団が未発達であったか、ウマが路上で横死した場合、大型動物を他の場所に移動させることは大変な労力を要したと思われ、条坊の路面幅3mほどの狭い道路上では解体処理することが困難だったとも考えられる。

次に人骨については部位として頭蓋骨が多いという傾向が挙げられる。頭蓋骨に偏った部位の出土は別の場所で白骨化するまでの過程で消失あるいは故意に選択された場合に起こりうる現象と考えられる。まず人骨が故意に選択される場として埋葬された墓が想定される。その改葬によって溝に人骨が供給されたと考えた場合、人としての形を残す頭蓋骨を選択する可能性はある。しかし、頭蓋骨ばかりを集中して再度埋葬する場合と比較すると、本調査のように獣骨と折り重なるようにして出土している遺棄の状況からすれば、意図的な改葬を想定することは難しいといえよう。次に白骨化するまで死体が放置されていた過程で消失したとすると、腐敗する体の中心付近の骨は消失しやすく、結果として頭蓋骨や四肢骨が残りやすい。これは動物（主にイヌ）が遺体を食した場合も類似しており、特に内臓と四肢骨の両端を齧るため、食べにくく運びにくい頭蓋骨が結果として残ることになる。放置されていた死体が白骨化した過程で、以上の要因で自然に選択された部位が溝に遺棄された蓋然性が高いのではないだろうか。溝に遺棄された遺体は遠くからわざわざ白骨化した頭蓋骨などを運んでくるのは考えにくく、溝に近い道路上もしくはその周辺にあったのではと想定される。道路側溝からの人骨の出土例は平安京、平城京でも確認されている。平安京では左京6条1坊1町の西南端では牛馬と人骨とともに「南無大日如来」の木簡が共伴し、左京3条2坊14町の西では人畜各種の骨と共に卒塔婆が出土している。京域での出土人骨は葬送・供養木簡などの資料が共伴しており、葬送を伴う遺棄「遺棄葬」と想定されている。本調査では人骨に伴うような葬送・供養木簡などの資料は出土していないが、いずれも交差点もしくはその近くの道路側溝の出土場所や獣骨と共に出土している点で類似している要素はある。

以上の類例と今回の出土状況から道路は死体が遺棄され、そのまま放置されやすい場所だったのではないだろうか。勝田至氏によると、特定の人間（集団）のテリトリーあるいは所有地が確定している場所にある死体は死穢の対象となり排除されると考えられている。道路空間は「くかいの小路」や「公界ノ井」と表現される､開放された公共の場である。以上の概念からみると道路は「穢れの及ばない（伝わらない）場所」であり、放置死体があっても死穢に感染することはないとされている。しかし、道路上で行き倒れた死体は通行の邪魔であり、目障りな存在であっただろう。道路側溝はこのように放置された死体を廃棄するにはもっとも簡単で穢れも伝わらない格好の場所だったと考えられる。そして道路側溝でも交差点付近に近い側での出土頻度が高いことが注目される。本調査事例でも交差点付近に集中して出土している。民俗事例をあたってみる必要があるが、律令の神祇令に規定された除疫を目的とす

る「道饗祭」は京師四方の路上であり、『三代実録』貞観７年５月１３日条の「疫神祭」では祭祀の場が朱雀大路東西とともに「七条大路衢」が指定されており、古代の災除の祭祀における交通路としての交差点の重要性が認識される。方画地割の都市域を持つ多賀城においては山王遺跡 12 次調査において、街路交差点中央に平安前期の土器が埋置された例が報告されている。道饗祭祀の衢における観念が地方にも浸透していたことを示している。本例の場合も交差点付近に骨を廃棄していると考えられる。交差点という場所は辻という、通常の道路とは異なる特殊な意識が働いている可能性が想定される。獣骨と一緒に出土することについてはその種別にウマやウシが必ず入っていることが注目される。道路上には様々な物資とともに多くのウシやウマが行き交う状況がある。特に本調査区は政庁や観世音寺の前面を東西に抜ける四坊路と京極大路の 12 条路が交差する場所であり、溝に横死した獣骨や白骨化した人骨が遺棄される状況になりやすい環境であったと考えられる。道路やその周辺への死体の遺棄は、葬送を伴った遺棄（遺棄葬）であれ、行き倒れの結果であれ、側溝に遺棄された時点で人は葬られるものではなく、棄てられるものになっているのである。京域以外の地方都市・平安末期の大宰府条坊で、白骨化した後に道路側溝に人骨が遺棄された現場が見つかったことは、当時の道路における通行以外の利用や場のあり方、都市としての遺体処理（獣骨・人骨を含む）を考える上で重要な成果となった。

３）遺跡の環境

大宰府域内における条坊の終焉と墳墓の形成

大宰府条坊跡における溝への人骨の廃棄が行われた平安時代末期は大宰府における都市の変換期にあたる。そのような時代背景と出土地点（条坊 224 次調査区）の位置関係からその出土背景について考察する。

大宰府の都市域は発掘データに基づく井上信正案によれば平安期には広域に約 90m ピッチの方眼グリットの道路が約 2km 四方の範囲に展開していたと考えられ(井上 2001)、グリット内では掘立柱建物、井戸、廃棄土坑、区画溝等の生活遺構の形成が群構成を成し半規則的に形成されており、また、グリット内も２ないし４分割の土地利用が存在するとの指摘もあり、遺構の上からも計画的な都市空間が存在したといえる。条坊の中央大路の埋没は 11 世紀後半から 12 世紀前半に想定され（条坊 168,133 次）、条坊街路の終焉は条坊西半の右郭では 11 世紀後半代（条坊 16,201 次）、左郭では 12 世紀前半以降（条坊 217,224 次）の箇所があり、連続土坑や溝の形で鎌倉期まで条坊地割が残る箇所がある（条坊 119,224 次）。平安後期の 12 世紀代には条坊北東の想定条坊郭外において天満宮安楽寺に至る平地に北に対し６度ほど東傾する土地区割りが想定され（連歌屋 1,2,5 次、馬場遺跡 2,5, ８次、条坊 137,260 次）、条坊内南西部、鷺田川南側の郭内においては 11 世紀後半から 12 世紀前半に位置づけられる、90m 四方の方眼グリットとは異なる周辺の条里型地割りに整合的な東西 103m、南北 124m の道に囲まれた大きな街区が近年発見された（条坊 122,176,222 次）。このように 11 世紀後半以降の平安後期の大宰府においてはそれまであった条坊区画が衰微し、その縁辺部において新規の土地区割りが出現していると言えよう。『八幡宇佐宮御神領大鏡』康和４年（1102）条に現れ、中世に亘って使用される大宰府における「府中」領域はこの頃形成されたものと考えられる（山村 2006）。

この都市域への墳墓の形成は平安前期までは禁忌の概念が徹底されたが、大宰府土器編年 XIV,XV 期の 12 世紀前半頃を境に一斉に左郭を中心とした条坊域に進出し始め（史跡 38 次、条坊 50,64,66,71,92,93 次）、生活域に死が同居する環境ができあがった（狭川 1990）。以降、鎌倉期にも引き続いてこの領域で墳墓は形成され続けている。九州島内の他国でも同様な様相であったと見え、仁治三年（1242）正月十五日に豊後（大分）の守護大名大友氏が自国の府中に出した『新御成敗状』

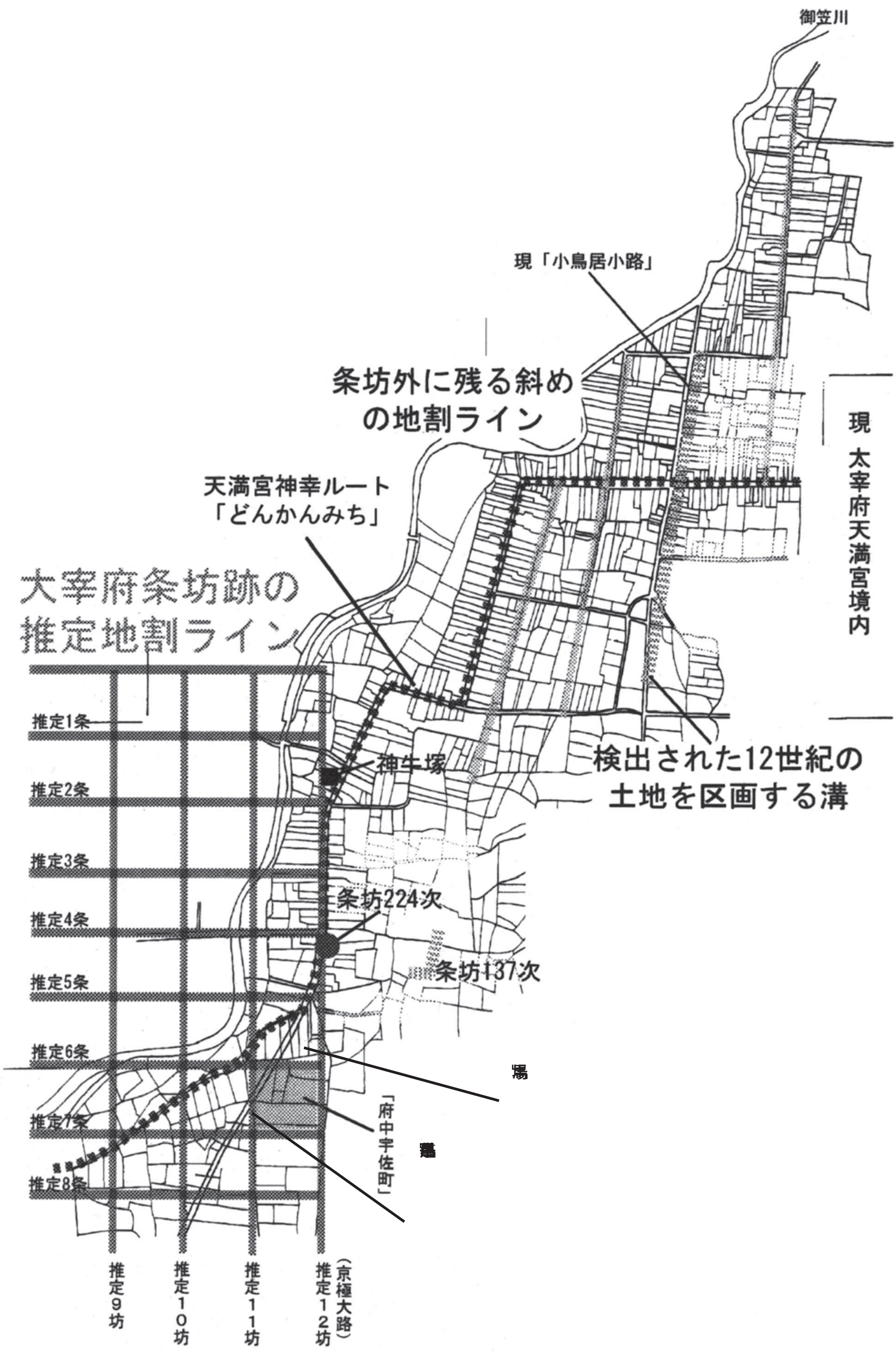



fig.100　平安後期の周辺街区概念図

には「一　府中墓所事　右　一切不可有、若有違乱之所者　且改葬之由被仰主、且可召其屋地矣」（『鎌倉遺文』5979）とあり、国の中枢である府中域においては造墓行為が多少禁忌されながらも一般化していたと見られる。

条坊側溝という街路脇に人骨を二次的に棄てた人為的行為がみとめられるのであれば、集住空間に入り込んだ死穢をそれにふさわしい場所に追いやる意図があったと見られ、その場所が住人にとっては集住空間の外、ないし境界という認識があったのではなかろうか。条坊 224 次北側は左郭 5 条 12 坊の交差点であり、これ以東、以北には条坊 137 次や 260 次の斜行地割による新しいまち場が検出されており、旧条坊域からも斜行地割から見ても領域としての境となっていた地理的要件を持ち合わせている。

馬の骨と「馬場」

ところで『八幡宇佐宮御神領大鏡』は康和 4 年（1102）の大宰府条坊左郭 7 条 12 坊を「府中宇佐町」と表記するが、骨が大量出土した条坊 224 次は井上条坊案では同じ左郭 4 条 12 坊に想定される。宇佐町の四至の表記に拠れば左郭 6 条 12 坊は「馬場」とされ､7 条 12 坊に接する西側の南北路は「馬出子午小道」と表記されている。6 条 12 坊は西へは「どんかんみち」と呼ばれる天満宮神幸式のルート、南へは筑後方面へ、東へは四条交差点から発し『筥崎八幡宮縁起』に見られる大宰府府官以下国司が馬に乗り宝満山眼前を抜け穂波郡大分宮に向かった道と考えられる、太宰府石坂を越えて筑豊・豊前へと繋がるルートの分基点であり、馬場の必然性は高い場所である。条坊 224 次現場南のエリアには府駅館や兵部所などの牛馬をあつかう公的な「馬場」施設があったと考えられる。道路側溝への牛馬の横死が複数回認められる背景に関連するとも考えられ興味深い。

（柳・山村）

参考文献

井上信正 2001「大宰府の街区割りと街区成立についての予察」『条里制・古代都市研究会』17 号
鵜沢和宏 2006「骨が語る遺棄葬」第一回中世墓を考える会
勝田至　2006『日本中世の墓と葬送』吉川弘文館
木下保明 1994「発掘調査～平安京右京三条二坊」『平成元年度京都市埋蔵文化財調査概要』京都市埋蔵文化財研究所
狭川真一 1990「古代都市・太宰府の検討 - 墳墓からのアプローチ -」『古文化談叢』第 23 集
平尾政幸 1995「発掘調査～平安京左京六条一坊」『平成三年度京都市埋蔵文化財調査概要』京都市埋蔵文化財研究所
平尾政幸･加納敬二 1989「発掘調査～平安京右京七条一坊」『昭和 61 年度京都市埋蔵文化財研究概要』京都市埋蔵文化財研究所
前嶋敏　2006　「文献にみえる遺棄葬」第一回中世墓を考える会
前田晴人 1979「古代王権と衢」『続日本史研究』203 号
松井章 2002「古代都城の環境汚染とその対策－特に斃牛馬処理と屎尿処理を中心に－」
『文化財論叢Ⅲ』奈良文化財研究所
山田邦和 1996「京都の都市空間と墓地」『日本史研究』409 号
山村信榮 2006「大宰府の変容」『鎌倉時代の考古学』
柳智子・山村信榮 2007「大宰府条坊出土の放置人骨」『墓と葬送の中世』高志書院
千葉孝弥 1992『山王遺跡第 12 次調査概報』多賀城市埋蔵文化財調査センター
太宰府市教育委員会　2005『太宰府・佐野地区遺跡群 19』

## tab.224-1　大宰府条坊跡第 224 次調査　遺構番号台帳（1）

| S番号 | 遺構番号 | 遺構性格 | 堆積土 | 備考〔先後関係など〕 | 時期 | 地区 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | | 樟木抜取 | 黒灰色混土 | | (現代)平成 | F4 |
| 2 | | カクラン | 灰黒色シルト | | 近現代 | I3 |
| 3 | 224SK003 | 埋め甕 | | | 近世～ | G4 |
| 4 | | 土坑 | | | | I3 |
| 5 | | 木抜取穴 | 黒灰色混土 | | 平成(現代) | H3 |
| 6 | | Pit | 灰白色度 | | 13c～ | I2 |
| 7 | | たまり状 | 黒灰色土 | | 13c～ | I2 |
| 8 | | 土坑 | 灰黄色土 | 8←7←4 | 13c～ | I3 |
| 9 | | Pit群 | 赤褐色土塊 | | 13c～ | I4 |
| 10 | 224SF010 | 道路 | | S-50、100を両側溝 | ～12c中頃 | F～I4 |
| 11 | | Pit群 | 明灰色土 | | 12c～ | G4 |
| 12 | | たまり状 | 黒灰色砂 | | 近現代 | I4 |
| 13 | | たまり状 | 黒灰色砂 | | 12c～ | H4 |
| 14 | | Pit群 | 黒灰色砂 | | 13c～ | I2 |
| 16 | | たまり状 | 黒灰色土 | | 12c～ | I2 |
| 17 | | たまり状 | 角閃石入黒灰色土 | | 11c後半～ | H2 |
| 18 | | たまり状 | 角閃石入黒灰色土 | | 11c後半～ | H2 |
| 19 | | 溝状 | 黒色土 | 16←19 | 12c～ | I2 |
| 21 | | Pit | 黒灰色土 | | 18c後半～ | G3 |
| 22 | | Pit | 黒色土 | | 近世～ | F3 |
| 23 | | Pit | 黒灰色土 | | 18c～ | G2 |
| 24 | | Pit群 | | 26←24 | 12c～ | G2 |
| 26 | | Pit | 黒色土 | | 近世～ | G2 |
| 27 | | 土坑 | 黄灰色土 | | 近世～ | G4 |
| 28 | | 土坑 | 黄灰色土 | | 13c～ | G4 |
| 29 | | たまり状 | 淡灰色シルト＋赤褐色土ブロック | | 11c後半～ | F3 |
| 30 | 224SK030 | たまり状 | 黒色土、橙カツ土、炭層 | | 13c後半～ | I3 |
| 31 | | Pit | 黒灰色土＋木炭 | | 12c～ | F2 |
| 32 | | たまり状 | 黒灰色土＋黄色土ブロック | | 12c～ | F3 |
| 33 | | たまり状 | 黒灰色土＋木炭 | | 18c後半～ | E3 |
| 34 | | 土坑 | 黄灰色土 | | 近世～ | F3 |
| 35 | 224SK035 | 土坑 | 黒灰色土＋橙色土塊 | 46←35 | 13c後半～ | G3 |
| 36 | | Pit | 黄灰色土 | | 18c～ | G4 |
| 37 | | たまり状 | 黒色土 | 37←38 | 近世～ | H4 |
| 38 | | 溝 | 黒灰色砂 | 37←38 | 近世～ | G4 |
| 39 | | | 赤色度塊入り黒灰色土 | | 11c後半～ | H3 |
| 41 | | Pit群 | 黒灰色土炭粒入り | | 13c～ | H4 |
| 42 | | Pit | 黒灰色土炭粒入り | | 13c～ | H4 |
| 43 | | たまり状 | 黒色土(ポクポク) | 37←43 | 11c後半～ | H4 |
| 44 | | たまり状 | 黒灰色土炭粒入り | | 13c～ | H4 |
| 46 | | たまり状 | 黒灰色土赤褐色土粒入り | 46←35 | 13c～ | G2 |
| 47 | | たまり状 | 黒灰色土赤褐色土粒入り | 35←47＝56 | 近世～ | G3 |
| 48 | 欠番 | | | | | |
| 49 | | Pit群 | 黒灰色砂 | | 近世～ | G3 |
| 50 | 224SD050 | 西側溝 | 暗灰土←淡茶灰土・灰色土・淡灰土・淡灰砂←黒灰土(1区) | 67←50←55 | 12c中頃～ | G～I3・4 |
| | | | 茶色土←黒灰粘質土←暗灰粘質土←茶灰砂質土(3区) | 50←344 | | J～K4 |
| 51 | | Pit | 灰褐色土＋橙色砂 | | 13c～ | F3 |
| 52 | | Pit | S-30橙褐色土と同一埋土 | 30←52 | 10c～ | I2 |
| 53 | | Pit | S-30橙褐色土と同一埋土 | 30←53 | 12c～ | I3 |
| 54 | | Pit | S-30橙褐色土と同一埋土 | 30←54 | 11c後半～ | I3 |
| 55 | 224SD055 | 溝状 | 淡灰色土 | 50←55 | 12c～ | G4 |
| 56 | 224SK056 | 溝×土坑 | 黒灰色土橙色土粒入り←淡黒灰土 | 61←35←59←58←56　※76の延長か | 11c後半～ | G3 |
| 57 | 224SK057 | 土坑 | 黒灰色土橙色土粒・炭入り | 56→58→35←56=47→57→61 | 13c～ | G3 |
| 58 | | たまり×土坑 | 暗灰色土炭入り | | | 位置不明 |

## tab.224-1　大宰府条坊跡第 224 次調査　遺構番号台帳（2）

| S番号 | 遺構番号 | 遺構性格 | 堆積土 | 備考〔先後関係など〕 | 時期 | 地区 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 59 | 224SX059 | 溝状 | 黒灰色土 | 59←100 | 12c後半～ | F～I2 |
| 61 | | 柵列a～d | 黒灰色土 | 61←35 | 近世～ | G3 |
| 62 | | たまり状 | 灰黒色土 | 62←59 | 12c～ | H2 |
| 63 | | Pit | 黒灰色土橙褐色土入り | 63←59 | 12c～ | F2 |
| 64 | | たまり状 | 黒灰色土 | 64←67←68 | 11c後半～ | G4 |
| 66 | 224SK066 | 土坑 | 灰黒色シルト | 66←67 | 13c～ | H4 |
| 67 | 224SX067 | 整地層 | 暗灰色土円礫入り | 64←67←68 | 13c前半～ | G4 |
| 68 | | 整地層 | 灰黒色シルト円礫入り | | | G4 |
| 69 | | Pit | 黒灰色土 | 69←59 | 13c～ | G3 |
| 71 | | 硬化面 | 黄灰色細砂 | 71←59 | 13c～ | F3 |
| 72 | | Pit群 | 黒灰色土 | 72←59 | 近世～ | F2 |
| 73 | | たまり状 | 黒灰色土 | 71←73←59 | 10c～ | F3 |
| 74 | | たまり状 | 黒色土炭粒入り | | 13c～ | I4 |
| 76 | 224SD076 | 溝 | 黒灰色砂 | 76(S-56延長か？)←59←30 | 13c～ | I3 |
| 77 | | Pit | 茶色土 | 77←59 | 11c～ | H2 |
| 78 | 224SK078 | 土坑 | 灰黒色土 | 78←76/71←78 ※重複あり | 13c～/13c後半～ | I3/F3 |
| 79 | | Pit群 | 黒灰色土 | 71←78 | 13c～ | F3 |
| 81 | | Pit群 | 暗灰色土＋橙色土ブロック | 67←81 | 11c～ | I4 |
| 82 | | たまり状 | 黒色粘土ブロック | 71←82 | 11c後半～ | F3 |
| 83 | | Pit群 | 黒色粘土ブロック | 82←83 | 11c後半～ | F3 |
| 84 | | Pit群 | 茶褐色土 | | 11c後半～ | H～I2 |
| 86 | 224SK086 | 土坑 | 黒灰色土 | 50←86　※2ヶ所あり | 12c中頃～ | G3/I4 |
| 87 | 224SK087 | 土坑 | 黒灰色土 | 50←87 | 12c中頃～ | H4 |
| 88 | 224SK088 | 土坑 | 黒色土→茶色土 | 89←88 | 12c中頃～ | G4 |
| 89 | | Pit | 黄色土ブロック | | 12c中頃～ | G4 |
| 91 | 224SK091 | 土坑 | 黒灰色土礫入り | 87←91←50 | 12c中頃～ | H4 |
| 92 | 224SD092 | 溝状 | 黒灰色土炭入り | 62←92←59 | 12c～ | H4～F4 |
| 93 | | たまり状 | 黒色土炭入り | | 13c～ | I3 |
| 94 | | Pit群 | 黒色土 | 93←94 | 12c～ | I3 |
| 96 | | たまり状 | 茶灰褐色土 | 96←92 | 12c～ | I2 |
| 97 | | 溝 | 茶灰シルト | 92(S-59延長か？)←97 | 12c～ | I2 |
| 98 | | Pit群 | 黄灰色土 | 50暗灰色土＝67→ | 11c～ | H4 |
| 99 | 224SD099 | 溝 | 黒灰色土 | 92＝100→97→99 | 11c後半～ | I3 |
| 100 | 224SD100 | 東側溝 | 黒色土←黒灰土←暗灰土←茶灰色シルト←灰褐色細砂 | 92＝100→97→99 | 12c前半～ | F～I2 |
| 101 | 224SK101 | 土坑 | 黒灰色土炭入り | 朱書磁器「米長　九」 | 19c中頃～ | D3.4 |
| 102 | | Pit | 淡茶色土 | | 12c～ | D3 |
| 103 | | Pit | 灰褐色土 | | 12c～ | D4 |
| 104 | | Pit | 黒灰色土炭入り | | 12c～ | D5 |
| 105 | | 溝 | 茶灰色シルト | 92←100←105 | 8c後半～ | I2 |
| 106 | | 土坑 | 黒茶色土 | | 近世～ | D5 |
| 107 | | Pit | 黒灰色土 | 107←106 | 18c～ | D5 |
| 108 | | 土坑 | 灰褐色土炭入り | | 近世～ | D3 |
| 109 | | 土坑 | 黒褐色土 | 108←109 | 18c～ | D3 |
| 110 | 224SD110 | 土坑状溝 | 暗灰色土 | S-50暗灰色土に同 | 11c後半～ | D4 |
| 111 | | Pit群 | 炭褐色土 | | 12c～ | D3 |
| 112 | | | 黒茶色土炭入り | | 11c～ | D3 |
| 113 | | 土坑 | 灰茶色土 | | 13c～ | D4 |
| 114 | | Pit群 | 灰茶色土 | | 12c～ | D4 |
| 115 | 224SD115 | 土坑状溝 | | | 12c～ | D4 |
| 116 | | Pit | 黒色粘質土 | | 13c～ | D4 |
| 117 | | 土坑 | 灰褐色土 | | 12c～ | D5 |
| 118 | | Pit | 灰褐色土 | | 近世～ | D3 |
| 119 | | Pit群 | 灰褐色土 | | 12c～ | D3 |
| 120 | 224SD120 | 溝 | 黒茶色土 | | 12c～ | D3 |
| 121 | 224SD121 | 溝 | 茶褐色土 | 122←121 | 11c後半～ | D5 |
| 122 | 224SD122 | 溝 | 灰褐色土 | 122←121 | 12c～ | D5 |
| 123 | | 土坑 | 黒褐色土炭入り | | 13c～ | D4 |

## tab.224-1　大宰府条坊跡第224次調査　遺構番号台帳（3）

| S番号 | 遺構番号 | 遺構性格 | 堆積土 | 備考〔先後関係など〕 | 時期 | 地区 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 124 | | Pit | 黒褐色土炭入り | | 12c～ | D4 |
| 126 | | Pit | 黒褐色土炭入り | | 12c～ | D3 |
| 127 | | Pit | 灰褐色土 | | 12c～ | D3 |
| 128 | | Pit群 | 黒褐色土炭入り | | 12c～ | D4 |
| 129 | | Pit | 黒褐色土炭入り | | 12c～ | D4 |
| 130 | 224SE130 | 井戸掘方 | 茶カツ土←茶色土←黒灰色土←暗灰色土←淡茶灰色土←灰色土 | S-50.115一部変更 | 12c中頃～ | D4 |
| 131 | | Pit群 | 灰褐色土 | | 近世～ | D4 |
| 132 | | 土坑 | 茶褐色土 | | 19c中頃～ | D4 |
| 133 | | 土坑 | 茶色土 | | 11c後半～ | D3 |
| 134 | | Pit | 灰褐色土 | | 18c～ | D4 |
| 136 | | 溝 | 灰褐色土 | 136→130（S-50延長か？） | 11c後半～ | D5 |
| 137 | 224SD137 | 溝 | 茶灰色土 | 137→130（S-50延長か？） | | D4 |
| 138 | | Pit群 | 灰褐色土 | | 12c～ | D4 |
| 139 | 224SE130 | 井戸枠内 | 黒茶色土橙色ブロック入り黒 | 130井戸枠内 | 11c後半～ | C3 |
| 141 | 224SD141 | 溝 | 灰色粗砂 | 137←141 | 12c後半～ | C4 |
| 201 | | たまり状 | 黒色土 | | 19c～ | 2区 |
| 202 | | 列石 | 黒灰色土 | | 現代 | 2区 |
| 203 | | たまり状 | 黒色土 | | 現代 | 2区 |
| 204 | | たまり状 | 黒色土 | | 現代 | 2区 |
| 206 | | たまり状 | 黒灰色土 | | 現代 | 2区 |
| 207 | | たまり状 | 暗灰色土 | | 現代 | 2区 |
| 208 | | たまり状 | 黒色土 | | 現代 | 2区 |
| 209 | 224SX209 | たまり状 | 茶灰色土 | | 11c後半～ | 2区 |
| 251 | | Pit | 灰色土＋黄色ブロック | 251←99 | 10c～ | I3 |
| 252 | | Pit | 茶灰色砂 | 59←252 | | E3 |
| 253 | | Pit | 灰色砂 | | 10c～ | F3 |
| 254 | | Pit | 灰色砂 | | 13c後半～ | F3 |
| 301 | | Pit | 茶色土 | 301←302←305 | 16c前半～ | L3 |
| 302 | 224SK302 | 廃棄土坑 | 黒色土 | 301←302←305 | 13c後半～ | L・H3 |
| 303 | | たまり | 黒色土 | 303←301 | 近世～ | N1 |
| 304 | | 土坑 | 茶色砂質土白色粘土ブロック | | 12c～ | N4 |
| 305 | 224SK305 | 土坑 | 黒灰色粘質土←黒色土←灰色砂質土 | 301←302←305 | 13c後半～ | L・M3 |
| 306 | | 土坑 | 黒茶色土炭入り | 306←305 | 13c～ | M3 |
| 307 | | 土坑群 | 黒茶色土炭入り | | 12c～ | L3 |
| 308 | | Pit | 黒茶色土炭入り | | 12c～ | L3 |
| 309 | | 土坑 | 黒茶色土炭入り | 306←309 | 11c後半～ | M3 |
| 310 | 224SD310 | 溝 | 黒灰土←黄色土ブロック入り黒色土←黒色粘質土 | | 12c中頃～ | N・O2 |
| 311 | | Pit群 | 茶色砂質土 | | 11c後半～ | M3 |
| 312 | | Pit | 黒茶色土炭・黄色土入り | | 13c～ | K3 |
| 313 | | 土坑群 | 黒茶色土炭入り | | 13c～ | K3 |
| 314 | | Pit群 | 黒色粘質土 | | 12c～ | K3 |
| 316 | | 土坑 | 黒茶色粘質土 | | 13c～ | K4 |
| 317 | | Pit群 | 黒茶色土炭入り | | 13c～ | K3 |
| 318 | | Pit群 | 黒茶色土炭入り | | 11c後半～ | K4 |
| 319 | | 土坑 | 黒色粘質土 | | 11c後半～ | L3 |
| 321 | | Pit群 | 灰色砂質土 | 319←321 | 11c後半～ | L3 |
| 322 | | Pit | 灰色砂質土 | 319←322 | 11c後半～ | L3 |
| 323 | | 土坑 | 黒茶色土炭入り | | 13c～ | K3 |
| 324 | | 土坑 | 黒茶色土炭入り | | 12c後半～ | J3 |
| 325 | | 土坑 | 黒色土 | | 近世 | J3 |
| 326 | | 土坑 | 黒茶色土炭入り | | 13c～ | J3 |
| 327 | | Pit群 | 黒茶色土炭入り | | 近現代 | J3 |

## tab.224-1　大宰府条坊跡第 224 次調査　遺構番号台帳（4）

| S番号 | 遺構番号 | 遺構性格 | 堆積土 | 備考〔先後関係など〕 | 時期 | 地区 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 328 | | 土坑群 | 黒茶色土炭入り | | 現代～ | J3 |
| 329 | | 土坑 | 黒茶色土炭入り | | 近世～ | J3 |
| 331 | | Pit | 黒色土 | | 11c後半～ | K3 |
| 332 | | Pit | 茶灰色土 | | 11c～ | L3 |
| 333 | | 溝 | 黒灰色土 | | 11c後半～ | J3 |
| 334 | | 溝 | 黒灰色土 | | | J3 |
| 336 | | Pit群 | 黒茶色土 | | 12c～ | J3 |
| 337 | | 土坑 | 黒茶色土 | 337←50 | 13c後半～ | J3 |
| 338 | | 土坑 | 黒色土 | 338←339 | 現代 | K3 |
| 339 | | 溝 | 茶灰色土 | | 11c後半～ | K3 |
| 341 | | 土坑 | 黒色粘礫入り | | 12c～ | J3 |
| 342 | | 土坑 | 黒灰色シルト | | 縄文後期～ | K3 |
| 343 | | Pit群 | 黒灰色シルト | | 11c後半～ | K3 |
| 344 | 224SD344 | 溝 | 黒灰色土 | 50←344 | 11c後半～ | J3 |
| 401 | | 旧どんかんビル基 | | 401←406 | 現代 | B5 |
| 402 | 224SD402 | 溝 | 淡茶灰土←暗茶土・暗茶粘 | 50延長か | 13c～ | A5 |
| 403 | 224SD403 | 溝 | 灰色土←暗茶色粘←茶灰色砂←灰色砂 | 50延長か | 12c前半～ | A5 |
| 404 | 224SD404 | 溝 | 淡茶灰色土←茶灰色土←茶灰色砂←灰茶色砂←灰色砂←暗灰色土 | 50延長か | 12c前半～ | A・B5 |
| 406 | | 溝？ | 黒灰色土 | 401←406 | 13c～ | B5 |
| 407 | | Pit群 | 黒灰色土 | 407←409 | 11c後半～ | A4 |
| 408 | | Pit群 | 黒灰色土 | 408←409 | 11c後半～ | A4 |
| 409 | 224SD409 | 溝状 | 明茶色土 | | 11c後半～ | A4 |
| 411 | | 溝 | 緑色土粒入り灰色粘 | 411←403 | | A4 |
| 412 | 224SD412 | 溝状 | 灰色粘 | 403、404←412 | | A4 |
| 413 | | Pit | 茶灰色土褐色土粒入り | 404←413 | 8c後半～ | A4 |

# tab.224-2　大宰府条坊跡第224次調査　骨一覧表（1）

| S番号 | 土色 | 地区番号 | 種類 | 部位 | 左右 | 備考 | 原図番号-取上番号 | 整理番号 | CD写真番号 | fig |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | ウマ | 遊離歯 | R | $P^4$ | 原図1 | 001 | 101 | |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | ウマ | 遊離歯 | R | $P_3$ | 原図1 | 001 | 101 | |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | ウマ | 遊離歯 | L | $I^3$ | 原図1 | 001 | 101 | |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | ウマ | 遊離歯 | R | $M_1$ | 原図1 | 002 | 101.102 | |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | ウマ | 遊離歯 | R | $M_2$ | 原図1 | | | |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | ウマ | 遊離歯 | R | $M_3$ | 原図1 | | | |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | ウマ | 中足骨 | R | | 原図1 | | | |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | ウマ | 椎骨 | ― | | 原図1 | 003 | 103 | |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | ウマ | 椎骨 | ― | | 原図1 | 004 | 104.105 | |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | ウマ | 椎骨 | ― | | 原図1 | 005 | 106 | |
| 50 | 黒灰粘質土 | L4 | ウマ | 足根骨 | R | | 原図1 | 006 | 107 | |
| 50 | 黒灰粘質土 | L4 | ウマ | 寛骨 | L | | 原図1 | | | |
| 50 | 黒灰粘質土 | L4 | ウマ | 遊離歯 | R | $P^4$ | 原図1 | | | |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | 不明 | 肋骨 | ― | | 原図1 | 007 | 108 | |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | ウマ | 下顎骨 | RL | **R**:$I_1$～$M_3$ **L**:$I_1$～$M_3$ | 原図1 | 008 | 109 | |
| 50 | 黒灰粘質土 | L4 | ウマ | 大腿骨 | R | | 原図1 | 009 | 110 | |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | ウマ | 脛骨 | R | | 原図1 | 010 | 106 | |
| 50 | 黒灰粘質土 | L4 | ウマ | 大腿骨 | L | | 原図1 | 011 | 111 | |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | ウマ | 椎骨 | ― | | 原図1 | 012 | 112 | |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | ウマ | 基節骨 | R | | 原図1 | 013 | 113 | 96-3 |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | ウマ | 手根骨 | R | | 原図1 | | | |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | ウマ | 遊離歯 | R | $P_4$ | 原図1 | 014 | 113 | |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | ウマ | 遊離歯 | R | $M_1$ | 原図1 | | | |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | ウマ | 遊離歯 | R | $I_2$? | 原図1 | | | |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | ウマ | 遊離歯 | R | $M_2$ | 原図1 | | | |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | ウマ | 遊離歯 | ― | $P_4$or$M_1$ | 原図1 | | | |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | ウマ | 遊離歯 | ― | $P_4$or$M_1$ | 原図1 | | | |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | ウマ | 椎骨 | ― | | 原図1 | | | |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | ウマ | 椎骨 | ― | 2個体あり | 原図1 | 015 | 113 | |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | ウマ | 椎骨 | ― | 2個体あり | 原図1 | 016 | 115 | |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | ウマ | 寛骨 | R | | 原図1 | | | |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | ウマ | 椎骨 | ― | 5個体あり | 原図1 | 017 | 116 | |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | ウマ | 脛骨 | L | | 原図1 | 018 | 117 | |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | 不明 | 不明 | ― | | 原図1 | 019 | 117 | |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | イノシシ/ブタ | 上顎骨 | L | | 原図1 | 020 | 118 | |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | ウマ | 寛骨 | L | | 原図1 | 021 | 119 | |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | ウマ | 遊離歯 | L | $P^4$ | | | | |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | ウマ | 遊離歯 | R | $M^2$ | 原図1 | | | |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | ウマ | 距骨 | R | | 原図1 | 022 | 120 | |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | ウマ | 踵骨 | R | | 原図1 | | | |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | ウマ | 末節骨 | ― | | 原図1 | | | |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | ウマ | 中節骨 | ― | | 原図1 | | | |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | 不明 | 肋骨 | ― | | 原図1 | 023 | 121 | |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | ウマ | 遊離歯 | R | | 原図1 | 024 | 121.122 | |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | ウマ | 橈骨 | R | | | | | |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | ウマ | 肩甲骨 | L | | 原図1 | | | |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | ウマ | 肩胛骨 | | | 原図1 | 025 | 123 | |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | ウシ | 脛骨 | L | 一部uf | 原図1 | 026 | 123.124 | |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | 不明 | 肋骨 | ― | | 原図1 | 027 | 123 | |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | ウマ | 椎骨 | ― | | 原図1 | 028 | 125 | |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | ウマ | 不明 | ― | | 原図1 | | | |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | ウマ | 大腿骨 | ― | 2個体あり | 原図1 | 029 | 126 | |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | ウマ | 遊離歯 | L | C | 原図1 | | | |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | イヌ | 大腿骨 | L | | 原図1 | | | |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | イヌ | 脛骨 | L | | | | | |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | ウマ | 椎骨 | ― | | 原図1 | | | |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | ウマ | 寛骨 | ― | | 原図1 | | | |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | 不明 | 不明 | ― | | 原図1 | | | |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | ウマ | 上顎骨 | LR | **L**:$P^2$～$M^3$ **R**:$P^3$～$M^3$ | 原図1 | 030 | 110.127 | |
| 50 | 黒灰粘質土 | J～L4 | ウマ | 椎骨 | - | | 原図1 | 177 | 128 | |
| 50 | | J～L4 | ウマ | 中足骨 | R | GL1:250.3,Ll:250.1 | 原図1 | 180 | 129 | 96-9 |
| 50 | | J～L4 | ウマ | 中足骨 | L | 第4中足骨 | 原図1 | 189 | 129 | |
| 50 | | J～L4 | 不明 | 不明破片 | ― | | 原図1 | 189 | | |
| 50 | 黒灰粘質土 | L4 | ウマ/ウシ | 大腿骨 | | | 原図1-別個体1 | 199 | 130 | |
| 50 | | L4 | ウシ | 乳臼歯 | | | 原図1-別個体1 | 200 | | |
| 50 | | L4 | イヌ | 臼歯 | | | 原図1-別個体1 | 201 | 130 | |
| 50 | 黒灰粘質土 | L4 | ウマ/ウシ? | 寛骨 | | | 原図1-別個体1（歯あり） | 202 | | |
| 50 | 黒灰粘質土 | L4 | ウマ | 上臼歯 | | | 原図1-別個体2 | 203 | 130 | |
| 50 | 黒灰粘質土 | L4 | ウマ | 上椀骨 | | | 原図1-別個体2（歯あり） | 204 | | |
| 50 | 黒灰粘質土 | L4 | 不明 | 不明 | | | 原図1-寛骨（別個体?）北側の小片 | 205 | | |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | イヌ | 脛骨 | L | | 原図2 | 036 | 131.136.148 | |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | ヒト | 下顎骨 | R | | 原図2 | | | |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | ウマ | 蹄種子骨 | ― | | 原図2 | | | |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | イノシシ/ブタ | 中足骨 | ― | 第3or4中足骨 | 原図2 | | | |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | 不明 | 不明破片 | ― | | 原図2 | | | |

# tab.224-2　大宰府条坊跡第 224 次調査　骨一覧表（2）

| S番号 | 土色 | 地区番号 | 種類 | 部位 | 左右 | 備考 | 原図番号-取上番号 | 整理番号 | CD写真番号 | fig |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | ウマ | 中節骨 | ― | SD:40.2 | 原図2 | 037 | 131 | |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | ウマ | 下顎骨 | ― | $M_3$ | 原図2 | | | |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | 不明 | 不明破片 | ― | | 原図2 | 038 | 131 | |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | ヒト | 上腕骨 | L | | 原図2 | 040 | 131 | |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | 不明 | 不明破片 | ― | | 原図2 | | | |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | 不明 | 不明破片 | ― | | 原図2 | 041 | 131 | |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | 不明 | 不明 | ― | | 原図2-28 | 047 | | |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | ヒト | 頭蓋骨 | | | 原図2-頭1 | 206 | 132 | |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | ヒト | 左右不明上腕 | | | 原図2-13 | 207 | | |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | ヒト | 左尺骨 | | | 原図2-14 | 208 | 133 | |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | ヒト | 上腕骨 | | | 原図2-17 | 209 | 133 | |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | ヒト | | | | 原図2-21 | 210 | 133 | |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | ヒト | | | | 原図2-22 | 211 | 133 | |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | ヒト | 右大腿骨 | | | 原図2-25 | 212 | 134 | |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | ヒト | 左大腿骨 | | | 原図2-26 | 213 | 134 | |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | ヒト | 下部胸椎 | | | 原図2-27 | 214 | 135 | |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | ヒト | 下顎骨 | | | 原図2-29　付近の骨 | 215 | 135 | |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | ヒト | | | | 原図2-29 | 216 | 135.136 | |
| 50 | 黒灰土 | I4 | 不明 | 不明破片 | ― | | ⑧ | 186 | | |
| 50 | 黒灰土 | I4 | 不明 | 不明破片 | ― | | ⑧ | 187 | | |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | 不明 | 不明 | ― | | 原図2-11 | 031 | 125 | |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | ウマ | 橈骨 | L | Bp:67.5,Bd:71.8 | 原図2-12 | 033 | 137 | |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | ウマ | 尺骨 | L | | 原図2-12 | | | |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | ウマ | 肩甲骨 | R | | 原図2-15 | 032 | 138 | |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | ウマ | 上腕骨 | R | | 原図2-16 | 035 | 139 | 96-1 |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | ウマ | 上腕骨 | L | | 原図2-18 | 034 | 140.144 | |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | ウマ | 中節骨 | L | | 原図2-18 | | | |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | ウマ | 中足骨 | L | 第3中足骨 | 原図2-19 | 043 | 141 | 96-8 |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | ウマ | 中節骨 | ― | | 原図2-19 | | | 96-4 |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | ウマ | 中足骨 | L | 第4中足骨 | 原図2-19 | | 142 | 96-8 |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | ウマ | 中手骨 | L | GL:213.0,Bp:47.7,Bd:41.8 | 原図2-20 | 046 | 143 | |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | ウマ | 末節骨 | ― | | 原図2-20 | | | |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | ウマ | 肩甲骨 | L | | 原図2-23 | 045 | | |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | ウマ | 中節骨 | ― | | 原図2-23 | | | |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | ウマ | 手根骨 | L | | 原図2-23 | | | |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | ウマ | 中手骨 | R | Dp:32.63,SD:30.59 | 原図2-24 | 042 | 141.142 | 96-12 |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | ウマ | 橈骨 | R | GL:335.0,Bp:74.8,Bd:65.6 | 原図2-27 | 044 | 142.145 | |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | ウマ | 尺骨 | R | | 原図2-27 | | | |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | ウマ | 踵骨 | L | | 原図2-30 | 039 | 146.148 | 96-2 |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | ウマ | 距骨 | L | GH:55.61,GB:55.48,LmT:54.21 | 原図2-30 | | | |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | ウマ | 基節骨 | L | | 原図2-30 | | | |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | ウマ | 下顎骨 | RL | **R**:I1〜I3　**L**:I1〜I3 | 原図2-30 | | | |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | ウマ | 足根骨 | L | | 原図2-30 | | | |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | ウマ | 手根骨 | L | | 原図2-30 | | | |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | ウマ | 豆状骨 | L | | 原図2-30 | | | |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | 不明 | 不明破片 | ― | | 原図2-30 | | | |
| 50 | 黒灰粘質土 | L4 | ウマ | 上腕骨 | R | | 原図3-4 | 049 | 147 | |
| 50 | 黒灰粘質土 | L4 | ウマ | 中手骨 | L | | 原図3-5 | 050 | 143 | |
| 50 | 黒灰粘質土 | L4 | ウマ | 中足骨 | L | | | | | |
| 50 | 黒灰粘質土 | L4 | ウマ | 末節骨 | ― | | | | | |
| 50 | 黒灰粘質土 | L4 | ウマ | 肩甲骨 | L | | 原図3-7 | 048 | 147 | |
| 50 | 黒灰粘質土 | L4 | 不明 | 不明 | ― | | 原図3 | 051 | | |
| 50 | 黒灰粘質土 | L4 | ウマ | 遊離歯 | L | $I^3$ | 原図4 | 052 | 157 | |
| 50 | 黒灰粘質土 | L4 | ウマ | 遊離歯 | L | $I^1$ | 原図4 | | | |
| 50 | 黒灰粘質土 | L4 | ウマ | 遊離歯 | ― | $I^1$？ | 原図4 | | | |
| 50 | 黒灰粘質土 | L4 | ウマ | 遊離歯 | R | $I^2$ | 原図4-頭④南側 | 053 | 157 | |
| 50 | 黒灰粘質土 | L4 | ウマ | 遊離歯 | R | $I^3$ | 原図4-頭④南側 | | | |
| 50 | 黒灰粘質土 | L4 | ウマ | 遊離歯 | ― | $I^1$？ | 原図4-頭④南側 | | | |
| 50 | 黒灰粘質土 | L4 | ウマ | 遊離歯 | L | $P^2$ | 原図4-頭④南側 | | | |
| 50 | 黒灰粘質土 | L4 | ウマ | 遊離歯 | L | $P^3$ | 原図4-頭④南側 | | | |
| 50 | 黒灰粘質土 | L4 | ウマ | 遊離歯 | L | $P^4$ | 原図4-頭④南側 | | | |
| 50 | 黒灰粘質土 | L4 | ウマ | 遊離歯 | L | $M^1$ | 原図4-頭④南側 | | | |
| 50 | 黒灰粘質土 | L4 | ウマ | 遊離歯 | L | $M^2$ | 原図4-頭④南側 | | | |
| 50 | 黒灰粘質土 | L4 | ウマ | 遊離歯 | L | $M^3$ | 原図4-頭④南側 | | | |
| 50 | 黒灰粘質土 | L4 | ウマ | 遊離歯 | R | $P^2$ | 原図4-頭④南側 | | | |
| 50 | 黒灰粘質土 | L4 | ウマ | 遊離歯 | R | $P^3$ | 原図4-頭④南側 | | | |
| 50 | 黒灰粘質土 | L4 | ウマ | 遊離歯 | R | $P^4$ | 原図4-頭④南側 | | | |
| 50 | 黒灰粘質土 | L4 | ウマ | 遊離歯 | R | $M^1$ | 原図4-頭④南側 | | | |
| 50 | 黒灰粘質土 | L4 | ウマ | 遊離歯 | R | $M^2$ | 原図4-頭④南側 | | | |
| 50 | 黒灰粘質土 | L4 | ウマ | 遊離歯 | R | $M^3$ | 原図4-頭④南側 | | | |
| 50 | 黒色粘質土 | K4 | 不明 | 椎骨 | ― | | | 185 | 129 | |
| 50 | 黒色粘質土 | K4 | イヌ | 下顎骨 | R | $P_2$〜$M_2$ | | 182 | 129 | |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | ヒト | 下顎骨 | | | 原図3-下顎1 | 217 | 149.150 | |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | ヒト | 下顎骨 | | | 原図3-下顎2 | 218 | 151.152.153 .154 | |
| 50 | 黒灰粘質土 | J4 | | 上顎骨 | | | 原図3-頭2 | | | |
| 50 | 黒灰粘質土 | J4 | | 頭蓋骨 | | | 原図3-頭2 | | | |
| 50 | 黒灰粘質土 | J4 | | 歯牙 | | | 原図3-頭2 | | | |

# tab.224-2　大宰府条坊跡第 224 次調査　骨一覧表（3）

| S番号 | 土色 | 地区番号 | 種類 | 部位 | 左右 | 備考 | 原図番号-取上番号 | 整理番号 | CD写真番号 | fig |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 50 | 黒灰粘質土 | J 4 | ヒト | 部位不明人骨 | | | 原図3-頭2　下　雑骨 | 219 | 148 | |
| 50 | 黒灰粘質土 | J 4 | | 右脛骨 | | | | | | |
| 50 | 黒灰粘質土 | J 4 | ヒト | 左右不明基節骨 | | | 原図3-頭2と頭3の間の長管骨 | 220 | 148 | |
| 50 | 黒灰粘質土 | J 4 | ヒト | 頭蓋骨 | | | 原図3-頭3 | 221 | 155.156 | |
| 50 | 黒灰粘質土 | J 4 | ヒト | 部位不明人骨 | | | 原図3 | 222 | | |
| 50 | 黒灰粘質土 | J 4 | ヒト | 頭蓋骨 | | | 原図4-頭4 | 223 | | |
| 50 | 黒灰粘質土 | J 4 | | | | | 原図4-頭4　ヒト・頭 | | | |
| 50 | 暗灰粘質土 | J 4 | イヌ | 寛骨 | L | | | 142 | 174 | |
| 50 | 暗灰粘質土 | J 4 | ウマ | 遊離歯 | L | P2 | | | | |
| 50 | 暗灰粘質土 | L 4 | イヌ | 大腿骨 | L | | | 143 | 174 | |
| 50 | 暗灰粘質土 | J 4 | イヌ | 肋骨 | — | | | 144 | | |
| 50 | 暗灰粘質土 | L 4 | ウマ | 椎骨 | — | | | 145 | 175 | |
| 50 | 暗灰粘質土 | K4 | ニホンジカ | 遊離歯 | L | $M_1$ | | 146 | 175 | |
| 50 | 暗灰粘質土 | K4 | ウマ | 遊離歯 | L | $I^3$ | | | | |
| 50 | 暗灰粘質土 | K4 | イヌ | 上腕骨 | R | | | | | |
| 50 | 暗灰粘質土 | K4 | ウマ | 豆状骨 | — | | | | | |
| 50 | 暗灰粘質土 | K4 | ウマ | 椎骨 | — | | | | | |
| 50 | 暗灰粘質土 | K4 | 不明 | — | — | | | | | |
| 50 | 暗灰粘質土 | K4 | イヌ | 脛骨 | R | | | 147 | 175 | |
| 50 | 暗灰粘質土 | K4 | イヌ | 寛骨 | L | | | | | |
| 50 | 暗灰粘質土 | L 4 | 不明 | — | — | | | 148 | | |
| 50 | 暗灰粘質土 | J 4 | 不明 | — | — | | | 149 | | |
| 50 | 暗灰粘質土 | L 4 | ウマ | 中足骨 | L | | | 150 | 175 | |
| 50 | 暗灰粘質土 | J 4 | ウマ | 遊離歯 | R | $P_3$ | | 151 | 175 | |
| 50 | 暗灰粘質土 | L 4 | 不明 | 肋骨? | — | | | 181 | 129 | |
| 50 | 暗灰粘質土 | J 4 | 不明 | 不明破片 | — | | | 184 | | |
| 50 | 暗灰土 | L 4 | ウシ | 椎骨 | — | 2個体あり | | 154 | 175 | |
| 50 | 茶灰砂質土 | K4 | 不明 | 不明破片 | — | | 原図5 | 059 | 158 | |
| 50 | 茶灰砂質土 | K4 | ウマ | 肩甲骨 | R | | 原図5 | 061 | 158 | |
| 50 | 茶灰砂質土 | K4 | ウマ | 遊離歯 | L | $I^2$ | 原図5 | 068 | 131 | |
| 50 | 茶灰砂質土 | K4 | ウマ | 遊離歯 | R | $I_2$ | 原図5 | | | |
| 50 | 茶灰砂質土 | K4 | 不明 | — | — | | 原図5 | 069 | | |
| 50 | 茶灰砂質土 | K4 | 不明 | 不明 | — | | 原図5 | 070 | | |
| 50 | 茶灰砂質土 | L 4 | 不明 | 大腿骨 | — | | 原図5-2 | 067 | | |
| 50 | 茶灰砂質土 | L 4 | イヌ | 寛骨 | R | | 原図5-3 | 058 | 159 | |
| 50 | 茶灰砂質土 | L 4 | イヌ | 寛骨 | L | | 原図5-3 | 058 | 159 | |
| 50 | 茶灰砂質土 | L 4 | ウマ | 大腿骨 | L | | 原図5-4 | 056 | 159 | |
| 50 | 茶灰砂質土 | K4 | イヌ | 椎骨 | — | | 原図5-6 | 072 | | |
| 50 | 茶灰砂質土 | K4 | イヌ | 遊離歯 | RL | **R**:$M^2$　**L**:$P^2$,$M^2$ | 原図5-7 | 066 | | |
| 50 | 茶灰砂質土 | K4 | イヌ | 遊離歯 | RL | **R**:$P_2$,$M_1$　**L**:$P_3$,$M_1$ | 原図5-7 | 066 | | |
| 50 | 茶灰砂質土 | K4 | 不明 | — | — | | 原図5-8 | 063 | 131.160 | |
| 50 | 茶灰砂質土 | K4 | ウマ | 肩甲骨 | R | | 原図5-9 | 073 | 161 | |
| 50 | 茶灰砂質土 | K4 | ウマ | 上腕骨 | R | | 原図5-10 | 062 | 158 | |
| 50 | 茶灰砂質土 | K4 | ウマ | 中手骨 | L | Bd:44.0 | 原図5-14 | 064 | 162 | 96-10 |
| 50 | 茶灰砂質土 | K4 | ウマ | 中手骨 | R | Bp:42.9,Bd:40.9 | 原図5-14 | | | |
| 50 | 茶灰砂質土 | K4 | ウマ | 橈骨 | R | | 原図5-11 | 075 | 161 | 96-6 |
| 50 | 茶灰砂質土 | K4 | ウマ | 上腕骨 | L | | 原図5-11 | | | |
| 50 | 茶灰砂質土 | K4 | ウマ | 橈骨 | L | | 原図5-11 | | | |
| 50 | 茶灰砂質土 | K4 | ウマ | 手根骨 | R | | 原図5-11 | | | |
| 50 | 茶灰砂質土 | K4 | ウマ | 豆状骨 | R | | 原図5-11 | | | |
| 50 | 茶灰砂質土 | K4 | ウマ | 中手骨 | R | 第4中足骨 | 原図5-12 | 065 | 162 | 96-11 |
| 50 | 茶灰砂質土 | K4 | ウマ | 基節骨 | R | | 原図5-13 | 060 | 158 | |
| 50 | 茶灰砂質土 | K4 | ウマ | 中節骨 | R | | 原図5-13 | | | |
| 50 | 茶灰砂質土 | K4 | ウマ | 遊離歯 | L | $M^1$or$M^2$ | 原図5-14付近 | 074 | 161 | |
| 50 | 茶灰砂質土 | K4 | ウマ | 末節骨 | — | | 原図5-14付近 | | | |
| 50 | 茶灰砂質土 | K4 | ウマ | 豆状骨 | R | | 原図5-14付近 | | | |
| 50 | 茶灰砂質土 | K4 | ウマ | 手根骨 | R | | 原図5-14付近 | | | |
| 50 | 茶灰砂質土 | K4 | ウマ | — | — | | 原図5-14付近 | | | |
| 50 | 茶灰砂質土 | K4 | ウマ | 橈骨 | R | | 原図5-16 | 054 | 159 | |
| 50 | 茶灰砂質土 | K4 | ウマ | 尺骨 | R | | 原図5-16 | | | |
| 50 | 茶灰砂質土 | K4 | ウマ | 基節骨 | — | | 原図5-16下 | 071 | 162 | |
| 50 | 茶灰砂質土 | K4 | ウマ | 中節骨 | L | | 原図5-16下 | | | 96-5 |
| 50 | 黒灰粘質土 | K4 | ウマ | 上腕骨 | R | 2個体あり | 原図5-17 | 057 | 147 | |
| 50 | 茶灰砂質土 | J 4 | ウマ | 遊離歯 | R | I3 | 原図6 | 094 | 163 | |
| 50 | 茶灰砂質土 | J 4 | ウマ | 距骨 | R | | 原図6-1 | 082 | 164 | |
| 50 | 茶灰砂質土 | J 4 | ウマ | 大腿骨 | L | | 原図6-1 | | | |
| 50 | 茶灰砂質土 | J 4 | ウマ | 寛骨 | L | | 原図6-2 | 083 | 165 | |
| 50 | 茶灰砂質土 | J 4 | ウマ | 椎骨 | — | | 原図6-2 | 085 | 166 | |
| 50 | 茶灰砂質土 | J 4 | ウマ | 脛骨 | R | | 原図6-3 | 079 | 164 | |
| 50 | 茶灰砂質土 | J 4 | ウマ | 踵骨 | R | | 原図6-3 | | | |
| 50 | 茶灰砂質土 | J 4 | ウマ | 不明 | — | | 原図6-3 | | | |
| 50 | 茶灰砂質土 | J 4 | 不明 | 不明 | — | | 原図6-4 | 080 | | |
| 50 | 茶灰砂質土 | J 4 | ウマ | 椎骨 | — | 5個体あり | 原図6-5 | 095 | 166 | |
| 50 | 茶灰砂質土 | J 4 | ウマ | 不明 | — | 2個体あり | 原図6-5 | | | |
| 50 | 茶灰砂質土 | J 4 | 不明 | — | — | | 原図6-7 | 089 | | |

# tab.224-2　大宰府条坊跡第 224 次調査　骨一覧表（4）

| S番号 | 土色 | 地区番号 | 種類 | 部位 | 左右 | 備考 | 原図番号-取上番号 | 整理番号 | CD写真番号 | fig |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 50 | 茶灰砂質土 | J4 | ウマ | 肋骨 | ― | | 原図6-8 | 099 | | |
| 50 | 茶灰砂質土 | J4 | ウマ | 脛骨 | ― | | 原図6-9 | 088 | | |
| 50 | 茶灰砂質土 | J4 | ウマ | 大腿骨 | ― | | 原図6-9 | | | |
| 50 | 茶灰砂質土 | J4 | ウマ | 不明 | ― | | 原図6-10 | 096 | | |
| 50 | 茶灰砂質土 | J4 | 不明 | ― | ― | | 原図6-11 | 092 | 163 | |
| 50 | 茶灰砂質土 | J4 | 不明 | ― | ― | | 原図6-12 | 084 | 163 | |
| 50 | 茶灰砂質土 | J4 | 不明 | ― | ― | | 原図6-12 | 093 | 163 | |
| 50 | 茶灰砂質土 | J4 | ウマ | 中手骨 | ― | | 原図6-13 | 091 | | |
| 50 | 茶灰砂質土 | J4 | 不明 | ― | ― | | 原図6-14 | 090 | 163 | |
| 50 | 茶灰砂質土 | J4 | 不明 | ― | ― | | 原図6-15 | 078 | | |
| 50 | 茶灰砂質土 | J4 | 不明 | ― | ― | | 原図6-15 | 087 | 163 | |
| 50 | 茶灰砂質土 | J4 | 不明 | ― | ― | | 原図6-16 | 086 | 163 | |
| 50 | 茶灰砂質土 | J4 | ウマ | 脛骨 | R | | 原図6-17 | 076 | | |
| 50 | 茶灰砂質土 | J4 | ウマ | 踵骨 | R | | 原図6-17 | | | |
| 50 | 茶灰砂質土 | J4 | ウマ | 不明 | ― | | 原図6-17 | | | |
| 50 | 茶灰砂質土 | J4 | 不明 | ― | ― | | 原図6-17 | 077 | 165 | |
| 50 | 茶灰砂質土 | J4 | ウマ | 距骨 | L | | 原図6-17 | 081 | 164 | |
| 50 | 茶灰砂質土 | J4 | ウマ | 頭蓋骨 | ― | | 原図6-17 | 098 | 167 | |
| 50 | 茶灰砂質土 | J4 | ウマ | 肩甲骨 | L | | 原図6-18 | 097 | 165 | |
| 50 | 茶灰砂質土 | L4 | イヌ | 頭蓋骨 | R | $C〜M^1$ | 原図7-21 | 100 | 172 | |
| 50 | 茶灰砂質土 | L4 | イヌ | 椎骨 | ― | 2個体あり | 原図7-21 | | | |
| 50 | 茶灰砂質土 | K4 | イヌ | 橈骨 | R | | 原図7 | 102 | 172 | |
| 50 | 茶灰砂質土 | K4 | イノシシ/ブタ | 頭蓋骨 | L | $(I^2,I^3)$ | 原図7 | | | |
| 50 | 茶灰砂質土 | K4 | 不明 | 不明 | ― | | 原図7 | | | |
| 50 | 茶灰砂質土 | K4 | 不明 | 不明破片 | ― | | 原図7 | 124 | | |
| 50 | 茶灰砂質土 | K4 | イヌ | 大腿骨 | R | | 原図7 | 134 | 171 | |
| 50 | 茶灰砂質土 | K4 | イヌ | 椎骨 | ― | | 原図7 | | | |
| 50 | 茶灰砂質土 | K4 | 不明 | 不明 | ― | | 原図7 | | | |
| 50 | 茶灰砂質土 | L4 | 不明 | 不明 | ― | | 原図7-20 | 123 | 168 | |
| 50 | 茶灰砂質土 | L4 | イヌ | 椎骨 | ― | | 原図7-22 | 120 | 169 | |
| 50 | 茶灰砂質土 | K4 | ウマ | 基節骨 | L | BFp:41.34,Dp:28.22 | 原図7-23 | 133 | 171 | |
| 50 | 茶灰砂質土 | K4 | ニホンジカ | 脛骨 | L | | 原図7-25 | 127 | 168 | |
| 50 | 茶灰砂質土 | K4 | 不明 | 不明破片 | ― | | 原図7-25 | | | |
| 50 | 茶灰砂質土 | K4 | 不明 | 不明破片 | ― | | 原図7-26 | 126 | 168 | |
| 50 | 茶灰砂質土 | K4 | イヌ | 脛骨 | L | | 原図7-27 | 121 | | |
| 50 | 茶灰砂質土 | K4 | イヌ | 椎骨 | ― | | 原図7-27 | | | |
| 50 | 茶灰砂質土 | K4 | イヌ | 肋骨 | ― | | 原図7-27 | | | |
| 50 | 茶灰砂質土 | K4 | 不明 | 不明 | ― | | 原図7-28 | 122 | 169 | |
| 50 | 茶灰砂質土 | K4 | イヌ | 頭蓋骨 | R | $P^4,M^1$ | 原図7-28 | 128 | 168 | |
| 50 | 茶灰砂質土 | K4 | イヌ | 遊離歯 | R | M1 | 原図7-28 | | | |
| 50 | 茶灰砂質土 | K4 | イヌ | 頭蓋骨・下顎骨 | RL | 上顎R:$I^1〜C$,L:$I^1〜P^1$,下顎不明だが$P_3$辺りまでは存在 | 原図7-28 | | | |
| 50 | 茶灰砂質土 | K4 | イヌ | 頭蓋骨 | ― | | 原図7-28 | | | |
| 50 | 茶灰砂質土 | K4 | イヌ | 肋骨 | ― | | 原図7-28 | | | |
| 50 | 茶灰砂質土 | K4 | イヌ | 肩甲骨 | L | | 原図7-28 | | | |
| 50 | 茶灰砂質土 | K4 | イヌ | 上腕骨 | L | Dp:30.38 | 原図7-29 | 118 | 169 | |
| 50 | 茶灰砂質土 | K4 | イヌ | 大腿骨 | L | Dc:14.88 | 原図7-29 | | | |
| 50 | 茶灰砂質土 | K4 | イヌ | 寛骨 | L | | 原図7-29 | | | |
| 50 | 茶灰砂質土 | K4 | イヌ | 椎骨 | ― | 2個体あり | 原図7-29 | | | |
| 50 | 茶灰砂質土 | K4 | イヌ | 橈骨 | R | | 原図7-29 | | | |
| 50 | 茶灰砂質土 | K4 | イヌ | 大腿骨 | R | | 原図7-30 | 108 | 170 | |
| 50 | 茶灰砂質土 | K4 | ウマ | 大腿骨 | R | | 原図7-31 | 116 | 168 | |
| 50 | 茶灰土 | K4 | イヌ | 下顎骨 | R | $C,P_2〜M_2$ | 原図7-32 | 179 | 128 | |
| 50 | 茶灰土 | K4 | イヌ | 下顎骨 | L | $(I_1〜P_1)P_2,P_4〜M_3$ | 原図7-32 | | | |
| 50 | 茶灰土 | K4 | イヌ | 中手骨 | R | 第3中手骨 | 原図7-32 | | | |
| 50 | 茶灰土 | K4 | イヌ | 遊離歯 | L | $M^2$ | 原図7-32 | | | |
| 50 | 茶灰土 | K4 | イヌ | 遊離歯 | L | $I_2$ | 原図7-32 | | | |
| 50 | 茶灰土 | J4 | 不明 | 不明 | ― | | 原図7-33 | 153 | | |
| 50 | 茶灰砂質土 | J4 | ウマ | 寛骨 | R | | 原図7-34 | 113 | 173 | |
| 50 | 茶灰砂質土 | J4 | ウマ | 寛骨 | ― | | 原図7-34のつづき | 114 | 173 | |
| 50 | 茶灰砂質土 | J4 | 不明 | ― | ― | | 原図7-35 | 112 | 173 | |
| 50 | 茶灰土 | K4 | ウマ | 肋骨 | ― | | 原図6-6 | 178 | | |
| 50 | 茶灰砂質土 | J4 | 不明 | 不明破片 | ― | | 原図7-36 | 109 | | |
| 50 | 茶灰土 | K4 | イヌ | 上腕骨 | L | Dp:32.36 | 原図7-37 | 159 | 128 | |
| 50 | 茶灰土 | K4 | イヌ | 上腕骨 | L | | 原図7-37 | | | |
| 50 | 茶灰砂質土 | J4 | 不明 | ― | ― | | 原図7-38 | 115 | 173 | |
| 50 | 茶灰砂質土 | J4 | イヌ | 大腿骨 | L | | 原図7-39 | 117 | 173 | |
| 50 | 茶灰砂質土 | J4 | 不明破片 | ― | ― | | 原図7-40 | 106 | 170 | |
| 50 | 茶灰砂質土 | J4 | イヌ | 脛骨 | L | | 原図7-41 | 132 | 171 | |
| 50 | 茶灰砂質土 | J4 | イヌ | 距骨 | L | | 原図7-41 | | | |
| 50 | 茶灰砂質土 | J4 | イヌ | 寛骨 | RL | | 原図7-42 | 104 | 172 | |
| 50 | 茶灰砂質土 | J4 | イヌ | 肋骨 | ― | | 原図7-42 | | | |
| 50 | 茶灰砂質土 | J4 | イヌ | 下顎骨 | R | $(C〜M_2)$ | 原図7-43 | 131 | 171 | |
| 50 | 茶灰砂質土 | J4 | イヌ | 椎骨 | ― | | 原図7-44 | 110 | 170 | |
| 50 | 茶灰砂質土 | J4 | イヌ | 椎骨 | ― | | 原図7-45 | 107 | 170 | |

# tab.224-2　大宰府条坊跡第 224 次調査　骨一覧表（5）

| S番号 | 土色 | 地区番号 | 種類 | 部位 | 左右 | 備考 | 原図番号-取上番号 | 整理番号 | CD写真番号 | fig |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 50 | 茶灰砂質土 | J 4 | イヌ | 椎骨 | ― |  | 原図7-45 | 111 | 170 |  |
| 50 | 茶灰砂質土 | J 4 | イヌ | 肋骨 | ― |  | 原図7-45 |  |  |  |
| 50 | 茶灰砂質土 | J 4 | イヌ | 距骨 | R |  | 原図7-45 |  |  |  |
| 50 | 茶灰砂質土 | J 4 | イヌ | 中手骨／中足骨 | ― |  | 原図7-45 |  |  |  |
| 50 | 茶灰砂質土 | K4 | ヒト | 脛骨? | ― |  | 原図7-50 | 101 |  |  |
| 50 | 茶灰土 | K4 | イヌ | 頭蓋骨 | ― | **R**:$I^2$, $I^3$, $P^1$, $P^3$, $P^4$ **L**:$I^3$～$P^1$, $P^3$～$M^2$　【計測値】 **13**:77.76, **13a**:75.74, **35**:32.51, **36**:33.72, **16L**:17.92, **10**:62.83, **12**:70.96 | 原図7-51 | 176 | 128 |  |
| 50 | 茶灰土 | K4 | イヌ | 下顎骨 | L |  | 原図7-51 |  |  |  |
| 50 | 茶灰土 | J～L4 | 不明 | 不明破片 | ― |  | 原図7-51 | 183 |  |  |
| 50 | 茶灰砂質土 | K4 | 不明 | 不明破片 | ― |  | 原図7-52 | 129 |  |  |
| 50 | 茶灰砂質土 | K4 | イヌ | 下顎骨 | L | C～$M_2$ | 原図7-52 | 130 |  |  |
| 50 | 茶灰砂質土 | K4 | イヌ | 上腕骨 | L |  | 原図7-52 | 130 | 171 |  |
| 50 | 茶灰砂質土 | K4 | イヌ | 上腕骨 | R | Dp:30.57 | 原図7-52 |  |  |  |
| 50 | 茶灰砂質土 | K4 | イヌ | 椎骨 | ― | DP:28.49 | 原図7-52 |  |  |  |
| 50 | 茶灰砂質土 | K4 | イヌ | 肋骨 | ― |  | 原図7-52 |  |  |  |
| 50 | 茶灰砂質土 | K4 | イヌ | 四肢骨 | ― |  | 原図7-52 |  |  |  |
| 50 | 茶灰砂質土 | K4 | イヌ | 椎骨 | ― |  | 原図7-53 | 103 | 172 |  |
| 50 | 茶灰砂質土 | K4 | イヌ | 肋骨 | ― |  | 原図7-53 |  |  |  |
| 50 | 茶灰砂質土 | K4 | イヌ | 中足骨 | R | 第2中足骨 | 原図7-53 |  |  |  |
| 50 | 茶灰砂質土 | K4 | イヌ | 椎骨 | ― |  | 原図7-53 | 105 | 172 |  |
| 50 | 茶灰砂質土 | K4 | イヌ | 肋骨 | ― |  | 原図7-53 |  |  |  |
| 50 | 茶灰砂質土 | K4 | イヌ | 肩甲骨 | R? |  | 原図7-53 |  |  |  |
| 50 | 茶灰砂質土 | K4 | イヌ | 寛骨 | R |  | 原図7-54 | 119 | 169 |  |
| 50 | 茶灰砂質土 | K4 | イヌ | 寛骨 | L |  | 原図7-54 |  |  |  |
| 50 | 茶灰砂質土 | L 4 | ウマ | 大腿骨 | R |  |  | 135 | 174 |  |
| 50 | 茶灰砂質土 | L 4 | ウマ | 尺骨 | R |  |  |  |  |  |
| 50 | 茶灰砂質土 | L 4 | 不明 | 不明破片 | ― |  |  |  |  |  |
| 50 | 茶灰砂質土 | L 4 | 不明 | 遊離歯 | ― |  |  | 136 | 174 |  |
| 50 | 茶灰砂質土 | L 4 | 不明 | 不明破片 | ― |  |  |  |  |  |
| 50 | 茶灰砂質土 | L 4 | 不明 | 不明破片 | ― |  |  | 137 |  |  |
| 50 | 茶灰砂質土 | L 4 | イヌ | 脛骨 | ― |  |  | 138 | 174 |  |
| 50 | 茶灰砂質土 | L 4 | 不明 | 不明破片 | ― |  |  |  |  |  |
| 50 | 茶灰砂質土 | J 4 | 不明 | 不明破片 | ― |  |  | 139 |  |  |
| 50 | 茶灰砂質土 | L 4 | 不明 | 不明破片 | ― |  |  | 140 |  |  |
| 50 | 茶灰砂質土 | L 4 | ウマ | 遊離歯 | R | $I^3$ |  | 141 | 174 |  |
| 50 | 茶灰砂質土 | L 4 | ウマ | 遊離歯 | L | $I^3$ |  |  |  |  |
| 50 | 茶灰砂質土 | L 4 | ウマ | 遊離歯 | L | $I^2$ |  |  |  |  |
| 50 | 茶灰砂質土 | L 4 | イヌ | 下顎骨 | L | (C？～$M_2$？) |  |  |  |  |
| 50 | 茶灰砂質土 | L 4 | 不明 | 不明破片 | ― |  |  |  |  |  |
| 50 | 茶灰土 | K4 | ウマ | 遊離歯 | R? | $P^4$, $M^1$, $M^2$ |  | 157 | 128 |  |
| 50 | 茶灰砂質土 | K4 | 不明 | 不明破片 | ― |  |  | 158 |  |  |
| 50 | 茶色土 | L 4 | ウマ | 遊離歯 | ― |  |  | 188 | 129 |  |
|  | 茶灰土 | K3 | ウマ | 遊離歯 | L |  |  | 197 |  |  |
| 50 | 茶灰土 | J～L4 | イヌ | 椎骨 | ― | 3個体あり |  | 155 | 175 |  |
| 50 | 茶灰土 | J～L4 | イヌ | 寛骨 | L |  |  |  |  |  |
| 50 | 茶灰土 | J～L4 | イヌ | 椎骨 | ― |  |  | 156 | 128 |  |
| 50 | 茶色土 | G 4 | ウマ | 頭蓋骨 | ― |  |  | 152 | 177 |  |
| 50 | 茶色土 | G 4 | 不明 | ― | ― |  |  |  |  |  |
| 50 | 暗灰土 | I4 | 不明 | 不明破片 | ― |  |  | 190 |  |  |
| 50 | 暗灰土 | I4 | ウマ | 遊離歯 | ― |  |  | 191 | 129 |  |
| 50 | 灰色土 |  | 不明 | 不明 |  |  | ⑲ | 224 | 176 |  |
| 50 |  |  | 不明 | ― | ― |  |  | 125 |  |  |
| 100 | 黒灰土 | I2 | 不明 | 不明破片 | ― |  |  | 192 |  |  |
| 100 | 黒灰土 | I2 | ウマ | 遊離歯 | ― |  |  | 193 |  |  |
| 137 |  | D4 | ウマ | 橈骨 | ― |  |  | 055 | 178 | 96-7 |
| 137 |  | D4 | 不明 | 不明破片 | ― |  |  | 194 |  |  |
| 137 |  | D4 | 不明 | ― | ― |  |  | 195 |  |  |
| 137 |  | D4 | ウシ | 遊離歯 | R | $M^1$ |  | 196 | 179 |  |
| 137 |  | D4 | ウシ | 遊離歯 | R | $M^2$ |  |  |  |  |
| 137 |  | D4 | ウシ | 遊離歯 | R | $M^3$ |  |  |  |  |
| 137 |  | D4 | イノシシ/ブタ | 遊離歯 | L | $M_3$ |  | 198 |  |  |
| 310 | 黒色土 | M3 | ウマ | 遊離歯 | R | $P^2$ |  | 160 | 180 |  |
| 402 | 暗茶土 | A5 | ウマ | 遊離歯 | R | $M^3$ |  | 161 | 179 |  |
| 402 | 暗茶粘 | A5 | ウマ | 遊離歯 | ― | $P^2$？ |  | 162 | 179 |  |
| 403 | 灰色土 | A5 | ウマ | 遊離歯 | ― | PorM |  | 163 | 179 |  |
| 404 | 茶灰土 | A4 | マダイ | 前上顎骨 | R | 大型(PH-PN:15.79, PI-PK:15.96) |  | 024 | 181 |  |
| 404 | 淡茶灰土 | A4 | イノシシ/ブタ | 肋骨 | L |  | ① | 165 | 180 |  |
| 404 | 淡茶灰土 | A4 | イノシシ/ブタ | 肋骨 | R |  |  |  |  |  |
| 404 | 淡茶灰土 | A4 | ネコ | 上腕骨 | L |  | ④ | 166 | 180 | 97-4.5 |
| 404 | 淡茶灰土 | A4 | ネコ | 上腕骨 | R |  |  |  |  |  |
| 404 | 淡茶灰土 | A4 | ネコ | 橈骨 | L |  |  |  |  | 97-8.9 |
| 404 | 淡茶灰土 | A4 | ネコ | 橈骨 | R |  |  |  |  |  |
| 404 | 淡茶灰土 | A4 | ネコ | 尺骨 | L |  |  |  |  | 97-6.7 |
| 404 | 淡茶灰土 | A4 | ネコ | 尺骨 | R |  |  |  |  |  |
| 404 | 淡茶灰土 | A4 | ネコ | 踵骨 | L |  |  |  |  |  |
| 404 | 淡茶灰土 | A4 | ネコ | 椎骨 | ― |  |  |  |  |  |

## tab.224-2　大宰府条坊跡第 224 次調査　骨一覧表（6）

| S番号 | 土色 | 地区番号 | 種類 | 部位 | 左右 | 備考 | 原図番号-取上番号 | 整理番号 | CD写真番号 | fig |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 404 | 淡茶灰土 | A4 | ネコ | 肋骨 | ― |  | ④ | 166 | 180 |  |
| 404 | 淡茶灰土 | A4 | ネコ | 中足骨 | R |  |  |  |  |  |
| 404 | 淡茶灰土 | A4 | ネコ | 中手骨 | R |  |  |  |  |  |
| 404 | 淡茶灰土 | A4 | イヌ | 寛骨 | R |  | ⑧ | 167 | 180 | 97-3 |
| 404 | 淡茶灰土 | A4 | イヌ | 椎骨 | ― |  |  |  |  |  |
| 404 | 淡茶灰土 | A4 | イヌ | 椎骨 | ― |  | ⑥ | 168 | 181 |  |
| 404 | 淡茶灰土 | A4 | ネコ | 中足骨 | L | 第2中足骨 | ② | 169 | 181 |  |
| 404 | 淡茶灰土 | A4 | ネコ | 中足骨 | L | 第3中足骨 |  |  |  |  |
| 404 | 淡茶灰土 | A4 | ネコ | 中足骨 | L | 第4中足骨 |  |  |  |  |
| 404 | 淡茶灰土 | A4 | ネコ | 中手骨 | L | 第5中手骨 |  |  |  |  |
| 404 | 淡茶灰土 | A4 | ネコ | 基節骨 | R |  |  |  |  |  |
| 404 | 淡茶灰土 | A4 | ネコ | 尾椎 | ― |  |  |  |  |  |
| 404 | 淡茶灰土 | A4 | ネコ | 中足骨 | R | 第2中足骨 |  |  |  |  |
| 404 | 淡茶灰土 | A4 | ネコ | 中足骨 | L | 第5中足骨 |  |  |  |  |
| 404 | 淡茶灰土 | A4 | ネコ | 中足骨 | R | 第5中足骨 |  |  |  |  |
| 404 | 淡茶灰土 | A4 | ネコ | 頭蓋骨 | ― |  | ⑤ | 170 | 181 |  |
| 404 | 淡茶灰土 | A4 | イノシシ/ブタ | 上腕骨 | R |  | ③ | 171 | 179 | 97-1 |
| 404 | 茶灰砂 | A4 | ネコ | 脛骨 | L | 遠位骨端uf |  | 172 | 180 |  |
| 404 | 茶灰砂 | A4 | ウシ | 距骨 | L |  |  | 173 | 180 | 96-13 |
| 404 |  | A4 | ネコ | 下顎骨 | L | C, $p_3$, $p_4$, $M_1$ |  | 174 | 179 |  |
| 404 |  | A4 | ネコ | 肩甲骨 | L |  |  |  |  |  |
| 404 |  | A4 | ネコ | 脛骨 | L |  |  |  |  |  |
| 404 |  | A4 | ネコ | 尺骨 | L |  |  |  |  |  |
| 404 |  | A4 | ネコ | ― | ― |  |  |  |  |  |
| 404 | 淡茶灰土 | A4 | イヌ | 寛骨 | L |  | ⑦ | 175 | 179 | 97-2 |
| 407 |  | A4 | イヌ | 椎骨 | ― |  |  | 164 | 179 |  |
| 茶灰土 |  | L3 | マダイ | 主上顎骨 | L | MK-HL:8.19,M4-M10:4.36,MI-MJ:7.43 |  | 235 |  |  |

※各原図の位置と取上げ番号についてはfig.52の記載に対応している。
※備考では同一個体数と、出土部分について記載している。部位の表記はDriesch1976（P182参考文献(1)）に基づく。計測値の単位はmm。
※歯列番号の上下は、上顎と下顎をあらわす。

# tab.224-3　大宰府条坊跡第 224 次調査　土器計測表（1）

224SK030計測表

| 器別 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 底部切り離し | 残存率 | 遺物番号 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 土師器 | 小皿a | (8.1) | 1.3 | (6.0) | イト | 1/3 | a-009 |
| 土師器 | 小皿a | (8.6) | 1.2 | (6.0) | イト | 1/3 | a-011 |
| 土師器 | 小皿a | (9.0) | 1.3 | (7.4) | イト | 1/3 | a-006 |
| 土師器 | 小皿a | (9.0) | 1.0 | (6.6) | ヘラ | 1/2 | a-003 |
| 土師器 | 小皿a | (9.1) | 1.1～1.3 | 7.2 | ヘラ | 2/3 | a-004 |
| 土師器 | 小皿a | 9.2 | 1.0～1.6 | 7.6 | イト | 1/2 | a-010 |
| 土師器 | 小皿a | 9.2 | 1.3～1.8 | 7.2 | イト | 2/3 | a-002 |
| 土師器 | 小皿a | 9.6 | 1.1 | 7.6 | ヘラ | 2/3 | a-001 |
| 土師器 | 小皿a | (9.8) | 1.1 | (7.4) | イト | 1/4 | a-005 |
| 土師器 | 小皿a | (10.0) | 1.2 | (7.4) | イト | 1/2 | a-008 |
| 土師器 | 坏a | (14.2) | 2.9 | (10.6) | イト | 1/4 | a-013 |
| 土師器 | 坏a | (14.6) | 2.8 | (9.8) | イト | 1/4 | a-014 |
| 土師器 | 坏a | (14.8) | 2.7 | (8.6) | イト | 1/4 | a-012 |
| 土師器 | 坏a | (15.0) | 3.1 | 10.4 | イト | 2/3 | a-015 |

224SK030橙カツ土計測表

| 器別 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 底部切り離し | 残存率 | 遺物番号 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 土師器 | 小皿a | 8.8 | 1.3 | 6.6 | イト | 完形 | a-014 |
| 土師器 | 小皿a | (9.0) | 1.0～1.5 | (7.4) | ヘラ | 1/3 | a-007 |
| 土師器 | 小皿a | 9.2 | 0.9 | 7.2 | ヘラ | 2/3 | a-003 |
| 土師器 | 小皿a | 9.4 | 0.9～1.5 | 7.5 | イト | ほぼ完形 | a-001 |
| 土師器 | 小皿a | 9.5 | 1.0～1.5 | 7.2 | イト | 完形 | a-013 |
| 土師器 | 小皿a | (9.6) | 1.0 | (7.8) | ヘラ | 1/3 | a-002 |
| 土師器 | 小皿a | (9.6) | 0.9～1.2 | (7.2) | ヘラ | 1/2 | a-004 |
| 土師器 | 小皿a | (9.6) | 1.2 | (8.2) | ヘラ | 1/3 | a-005 |
| 土師器 | 小皿a | (10.2) | 1.2 | (8.2) | ヘラ | 1/3 | a-006 |
| 土師器 | 坏a | (14.2) | 2.9～3.6 | (7.2) | ヘラ | 1/3 | a-017 |
| 土師器 | 坏a | (14.8) | 2.4 | (8.2) | ヘラ | 1/4 | a-008 |
| 土師器 | 坏a | 15.2 | 3.0 | 11.0 | ヘラ | ほぼ完形 | a-009 |
| 土師器 | 坏a | 15.2 | 3.0 | 11.0 | ヘラ | 2/3 | a-011 |
| 土師器 | 坏a | 15.5 | 2.9 | 10.8 | ヘラ | ほぼ完形 | a-010 |
| 土師器 | 坏a | (15.6) | 2.8 | 11.0 | ヘラ | 2/3 | a-012 |

224SD050暗灰粘質土計測表

| 器別 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 底部切り離し | 残存率 | 遺物番号 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 土師器 | 小皿a | 8.8 | 1.1 | 7.8 | イト | 1/3 | a-004 |
| 土師器 | 小皿a | 9.0～9.3 | 0.9～1.1 | 7.3～7.5 | イト | ほぼ完形 | a-003 |
| 土師器 | 坏a | (15.4) | 3.0 | 9.8 | イト | 1/2 | a-002 |
| 土師器 | 坏a | 15.6 | 3.0～3.2 | 9.4 | イト | 1/3 | a-002 |
| 土師器 | 坏a | 16.0～16.8 | 2.8～3.0 | 16.7～17.1 | イト | ほぼ完形 | a-001 |
| 土師器 | 坏a | 16.2 | 3.0～3.3 | 9.2 | イト | 1/2 | a-001 |
| 土師器 | 坏a | 18.0 | 2.6 | 10.8 | ヘラ | 1/2 | a-001 |

224SD050茶灰砂質土計測表

| 器別 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 底部切り離し | 残存率 | 遺物番号 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 土師器 | 小皿a | 8.8～9.0 | 1.2～1.3 | 7.0～7.4 | ヘラ | ほぼ完形 | a-005 |
| 土師器 | 小皿a | 9.2 | 1.2 | 7.2 | イト | 1/2 | R-001 |
| 土師器 | 小皿a | (9.8) | 1.0 | (8.2) | ヘラ | 1/3 | a-004 |
| 土師器 | 小皿a | (10.0) | 1.3 | (7.6) | イト | 1/2 | a-002 |
| 土師器 | 坏a | (14.2) | 2.7 | (10.0) | ヘラ | 1/3 | a-011 |
| 土師器 | 坏a | (14.3) | 2.7 | (10.2) | イト | 1/2 | a-001 |
| 土師器 | 坏a | (14.4) | 2.3 | 12.0 | ヘラ | ほぼ完形 | a-012 |
| 土師器 | 坏a | (14.8) | 3.2 | (8.8) | イト | 1/2 | a-001 |
| 土師器 | 坏a | 15.2～15.4 | 2.9～3.0 | 9.9～10.3 | イト | ほぼ完形 | a-001 |
| 土師器 | 坏a | 15.3～15.5 | 3.1 | 11.9～12.1 | ヘラ | 完形 | a-013 |
| 土師器 | 坏a | (15.4) | 2.6 | (11.0) | ヘラ | 1/3 | a-009 |
| 土師器 | 坏a | 15.5～16.2 | 2.9～3.4 | 11.2～11.7 | ヘラ | 完形 | a-007 |
| 土師器 | 坏a | 15.6 | 2.9～3.4 | 10.7 | イト | ほぼ完形 | a-001 |
| 土師器 | 坏a | 15.6 | 3.2 | 11.9 | ヘラ |  | R-001 |
| 土師器 | 坏a | 15.6 | 3.0 | 10.4 | ヘラ | ほぼ完形 | a-006 |
| 土師器 | 坏a | (15.7) | 2.9 | (10.8) | ヘラ | 1/3 | a-008 |
| 土師器 | 坏a | 15.8 | 2.6 | 11.7 | ヘラ | 2/3 | R-001 |
| 土師器 | 坏a | (15.8) | 2.4 | (11.0) | ヘラ | 1/2 | a-003 |
| 土師器 | 坏a | 15.9～16.2 | 3.2～3.9 | 6.9～7.9 | ヘラ | 完形 | a-001 |
| 土師器 | 坏a | 16.1 | 3.2 | 11.4 | イト | ほぼ完形 | R-001 |
| 土師器 | 坏a | (16.2) | 2.8 | (11.2) | イト | 1/2 | R-001 |
| 土師器 | 坏a | 16.3 | 3.1 | 10.8 | イト | ほぼ完形 | R-001 |
| 土師器 | 坏a | 17.1 | 2.6 | 11.7 | ヘラ | ほぼ完形 | a-014 |
| 土師器 | 坏a | (18.0) | 2.8～3.1 | (11.2) | ヘラ | 1/3 | a-010 |

# tab.224-3　大宰府条坊跡第 224 次調査　土器計測表（2）

224SD050暗灰土計測表

| 器別 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 底部切り離し | 残存率 | 遺物番号 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 土師器 | 小皿a | 9.1 | 0.9～1.3 | 6.8 | イト | 1/3 | a-001 |
| 土師器 | 坏a | 15.0～15.3 | 2.8～3.4 | 10.5～10.8 | イト | ほぼ完形 | a-001 |

224SD050淡灰砂計測表

| 器別 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 底部切り離し | 残存率 | 遺物番号 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 土師器 | 小皿a | (10.0) | 1.1 | (7.6) | ヘラ | ほぼ完形 | R-001 |
| 土師器 | 小皿c | (11.0) | 3.3 | (5.9) | — | ほぼ完形 | R-002 |

224SD050灰色土計測表

| 器別 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 底部切り離し | 残存率 | 遺物番号 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 土師器 | 坏a | (14.1) | 2.2 | (10.4) | イト | ほぼ完形 | a-001 |
| 土師器 | 坏a | 14.8 | 2.6 | 10.8 | イト | 2/3 | a-001 |
| 土師器 | 坏a | 15.3 | 2.9 | 10.5 | イト | 4/5 | a-001 |
| 土師器 | 坏a | (16.8) | 3.4 | (11.8) | イト | 1/2 | a-001 |

224SD050黒灰土計測表

| 器別 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 底部切り離し | 残存率 | 遺物番号 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 土師器 | 小皿a | (9.2) | 0.8 | (6.6) | ヘラ | 1/2 | a-002 |
| 土師器 | 坏a | (14.4) | 2.5 | (8.6) | イト | 1/2 | a-001 |
| 土師器 | 坏a | 14.8 | 3.9 | 8.4 | イト | 1/3 | a-001 |

224SD302黒色土計測表

| 器別 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 底部切り離し | 残存率 | 遺物番号 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 土師器 | 小皿a | (7.0) | 1.1 | (5.6) | イト | 1/3 | a-020 |
| 土師器 | 小皿a | (7.4) | 1.0 | (6.8) | — | 1/2 | a-037 |
| 土師器 | 小皿a | 8.0 | 1.4 | 5.6 | イト | 完形 | a-001 |
| 土師器 | 小皿a | (8.0) | 1.2 | (7.0) | イト | 1/3 | a-034 |
| 土師器 | 小皿a | (8.0) | 1.0 | (6.2) | イト | 1/3 | a-017 |
| 土師器 | 小皿a | 8.2 | 0.9 | 6.7 | イト | 1/2 | a-016 |
| 土師器 | 小皿a | 8.2 | 1.2 | 6.2 | イト | 完形 | a-001 |
| 土師器 | 小皿a | 8.2 | 1.2 | 6.4 | イト | ほぼ完形 | a-001 |
| 土師器 | 小皿a | (8.2) | 0.9～1.4 | (5.6) | イト | 1/3 | a-036 |
| 土師器 | 小皿a | 8.3 | 1.1～1.4 | 6.1～6.5 | イト | 完形 | a-022 |
| 土師器 | 小皿a | (8.3) | 1.2 | (6.1) | イト | 1/3 | a-009 |
| 土師器 | 小皿a | 8.4 | 1.4 | 6.7 | イト | 完形 | a-001 |
| 土師器 | 小皿a | 8.4 | 0.9 | 7.0 | イト | 1/2 | a-013 |
| 土師器 | 小皿a | (8.4) | 1.1 | (7.2) | イト | 1/2 | a-021 |
| 土師器 | 小皿a | 8.6 | 1.1～1.6 | 6.5 | イト | 完形 | a-023 |
| 土師器 | 小皿a | 8.7 | 1.0 | 7.4 | — | 1/2 | a-015 |
| 土師器 | 小皿a | (8.8) | 1.3 | (7.0) | イト | 1/2 | a-038 |
| 土師器 | 小皿a | (9.0) | 1.1 | (7.7) | イト | 1/2 | a-012 |
| 土師器 | 小皿a | (9.0) | 1.2 | 6.6 | イト | 1/3 | a-014 |
| 土師器 | 小皿a | 9.4 | 1.3 | 7.0 | イト | 完形 | a-001 |
| 土師器 | 坏a | (12.0) | 2.6 | 8.0 | イト | ほぼ完形 | a-044 |
| 土師器 | 坏a | (12.0) | 2.7 | (8.2) | イト | 1/3 | a-001 |
| 土師器 | 坏a | (12.0) | 2.9 | 8.8 | イト | 1/3 | a-001 |
| 土師器 | 坏a | 12.2 | 2.4～3.0 | 9.0 | イト | ほぼ完形 | a-030 |
| 土師器 | 坏a | 12.2 | 2.2 | 8.8 | イト | ほぼ完形 | a-001 |
| 土師器 | 坏a | 12.5 | 2.7 | 9.0 | イト | ほぼ完形 | a-001 |
| 土師器 | 坏a | 12.6 | 2.3 | 8.8 | イト | ほぼ完形 | a-003 |
| 土師器 | 坏a | 12.6 | 2.7 | 8.2 | イト | ほぼ完形 | a-001 |
| 土師器 | 坏a | (12.6) | 2.4 | (8.8) | イト | 1/2 | a-007 |
| 土師器 | 坏a | (12.6) | 2.4 | (8.0) | イト | 1/3 | a-008 |
| 土師器 | 坏a | (12.6) | 2.6 | (7.8) | イト | 1/3 | a-043 |
| 土師器 | 坏a | (12.6) | 2.4 | (9.0) | イト | 1/2 | a-026 |
| 土師器 | 坏a | 12.6 | 2.2 | 9.0 | イト | ほぼ完形 | a-029 |
| 土師器 | 坏a | 12.8～13.2 | 2.4 | 9.3～9.5 | イト | ほぼ完形 | a-004 |
| 土師器 | 坏a | (12.8) | 3.0 | 8.6 | イト | 3/4 | a-001 |
| 土師器 | 坏a | (13.0) | 2.7 | (8.6) | イト | 3/5 | a-027 |
| 土師器 | 坏a | (13.0) | 2.5 | 9.0 | イト | 3/4 | a-028 |
| 土師器 | 坏a | 13.1 | 2.5 | 9.8 | イト | ほぼ完形 | a-002 |

## tab.224-4　大宰府条坊跡第224次調査　出土遺物一覧表（1）

S-1　現代(平成)

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 大甕　壺 |
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ)　小皿a(ｲﾄ)　甕a |
| 龍泉窯系青磁 | 椀;II-b(2)　I(1)　I-2(1) |
| 同安窯系青磁 | 皿;I-2b(1) |
| 土師質土器 | 鍋E-a群　蓋?　風炉(近世～)<br>筒型容器(近世～) |
| 須恵質土器 | 甕(常滑系) |
| 肥前系磁器 | 蓋　椀?　瓶　椀(色絵)　皿(米書「ｺﾒ長」)<br>鉢(凸型高台) |
| 国産陶器 | 甕　鉢　土瓶　瓶　椀(黒釉)　徳利(ｲｯﾁﾝがけ)<br>灯火具　擂鉢(ロ2) |
| 白磁 | 椀;IV(1)　V(1)　V-4×VIII-3(1)　VIII(2)<br>耳壺III(2)　破片(1) |
| 瓦類 | 平瓦(近世～)　丸瓦(近世～)　軒丸瓦<br>道具瓦(近世～)　サン瓦 |
| 土製品 | 焼土塊(1) |
| その他 | 石炭混土 |

S-2　近現代

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 坏　甕 |
| 土師器 | 坏a(ﾍﾗ､VI～)　坏a(ｲﾄ)　椀c |
| 須恵質土器 | 同筒型土器 |
| 肥前系磁器 | 染付皿 |
| 国産磁器 | 甕(近世～) |
| 白磁 | 皿;V-2a(1)　VIII-2b(1) |
| 染付(輸入) | 色絵椀 |
| 須恵器(輸入) | 朝鮮系無釉陶器椀 |
| 李朝 | 白磁椀 |
| 瓦器 | 平瓦(近世～)　平瓦(須恵質､格子目D群)<br>丸瓦(近世～)　•ｻﾝ瓦(近世～) |

S-3　近世～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 坏? |
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ)　甕把手 |
| 瓦質土器 | 大甕　鉢AII? |
| 肥前系磁器 | 染付椀 |
| 白磁 | 椀;IV-1a(1) |

S-6　13c～

| | |
|---|---|
| 土師器 | 小皿a(ｲﾄ) |
| 白磁 | 皿;VIII-2a(1) |

S-7　13c～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 甕　壺(肥後系?)　供膳具 |
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ)　坏d　丸底坏c?　椀c　小皿a(ｲﾄ) |
| 龍泉窯系青磁 | 椀;I-1(1)　I-4(1) |
| 国産磁器 | 甕(東海系)　甕×鉢 |
| 白磁 | 椀;破片(2)　皿;VI-1b(2)　耳壺III(1) |
| 中国陶器 | B群(2) |

S-8　13c～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 蓋　甕 |
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ)　丸底坏a　小皿a(ｲﾄ)　甕a |
| 龍泉窯系青磁 | 椀;II-b(1) |
| 国産磁器 | 甕(東海系) |
| 白磁 | 椀;V-a(1)　V-b×VI-b(1)　椀×皿(1)<br>耳壺III(2)　壺IV(1) |
| 中国陶器 | 壺IV(1)　B群(4) |

S-9　13c～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 壺? |
| 土師器 | 坏a(ﾍﾗ)　小皿a(ｲﾄ) |
| 土製品 | 焼土塊(1) |

S-11　12c～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 破片 |
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ) |
| 黒色土器A | 椀c |
| 土製品 | 焼土塊(1) |

S-12　近現代

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 甕　壺 |
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ)　坏×小皿a(ｲﾄ)　丸底坏　椀c |
| 瓦質土器 | 甕 |
| 瓦類 | 平瓦(須恵質､無文)　平瓦(近世～) |

S-13　12c～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 甕　壺? |
| 土師器 | 坏a(ﾍﾗ､ｲﾄ)　小皿a(ｲﾄ) |
| 瓦器 | 椀c |
| 土師質土器 | 鍋? |
| 瓦類 | 平瓦(土師質､格子目F群)　平瓦(須恵質､無文) |
| 土製品 | ﾄﾘﾍﾞ(1) |

S-14　13c～

| | |
|---|---|
| 土師器 | 坏a(ﾍﾗ､ｲﾄ)　丸底坏a? |
| 石製品 | ob-f(1) |

S-16　12c～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 甕　壺d×e |
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ)　小皿a(ｲﾄ)　甕a |
| 瓦器 | 椀 |
| 土師質土器 | 鍋×鉢 |
| 国産陶器 | 甕(常滑系) |
| 石製品 | 滑石製石鍋 |
| 土製品 | 瓦玉(1) |

S-17　11c後半～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 甕 |
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ)　小皿a(ﾍﾗ) |
| 瓦類 | 平瓦(土師質､縄目) |

S-18　11c後半～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 蓋?　皿a×坏a　甕 |
| 土師器 | 丸底坏a　椀c　小皿a(ｲﾄ)　甕 |

S-19　12c～

| | |
|---|---|
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ)　小皿a(ｲﾄ) |
| 国産陶器 | 甕?(常滑系?) |

S-21　18c後半～

| | |
|---|---|
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ)　小皿a(ｲﾄ) |
| 瓦質土器 | 擂鉢 |
| 肥前系磁器 | 小坏　皿 |
| 国産陶器 | 段皿　甕(常滑系)　大甕 |
| 土製品 | 焼土塊(1) |

## tab.224-4　大宰府条坊跡第 224 次調査　出土遺物一覧表（2）

S-22　近代～

| | |
|---|---|
| 土師器 | 小皿a(ｲﾄ) |
| 国産陶器 | 椀×鉢(緑釉)　土瓶蓋(飴釉) |
| 瓦類 | 丸瓦(近世～) |
| 土製品 | 瓦玉(近世～)(1) |
| その他 | 石炭 |

S-23　18c～

| | |
|---|---|
| 土師器 | 坏a?(ｲﾄ)　小皿a(ｲﾄ) |
| 肥前系磁器 | 小皿 |

S-24　12c～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 坏 |
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ)　椀c |
| 瓦類 | 平瓦(瓦質) |
| 石製品 | 丸石(黒色泥岩) |
| 土製品 | 焼土塊(1) |

S-26　近世～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 蓋　坏a2　甕 |
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ､ﾍﾗ)　椀c　小皿a(ｲﾄ) |
| 国産磁器 | 小坏×瓶 |
| 土製品 | 焼土塊(1) |

S-27　近世～

| | |
|---|---|
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ) |
| 黒色土器A | 椀c |
| 土師質土器 | 甕? |
| 須恵質土器 | 鉢 |
| 肥前系磁器 | 丸椀　皿(たこ唐草)　多角形皿 |
| 瓦類 | 平瓦(近世～)　丸瓦(近世～) |

S-28　13c～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 甕　供膳具 |
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ) |
| 瓦器 | 椀 |
| 瓦質土器 | 甕 |

S-29　11c後半～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 甕(肥後系)　大甕 |
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ)　丸底坏 |

S-30　13c後半～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 坏c3　甕 |
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ)　脚付坏　小皿a(ｲﾄ)　小皿a(ｲﾄ)(墨書) |
| 瓦器 | 椀c |
| 同安窯系青磁 | 椀;I-1c(1)　皿;I-1a(1) |
| 土師質土器 | 鍋×鉢 |
| 灰釉陶器 | 壺(東海系)(1) |
| 国産陶器 | 甕(常滑系系) |
| 白磁 | 椀;II(1)　VIII-b(1)　破片(4) |
| 中国陶器 | B群 |
| 瓦類 | 平瓦(瓦質､斜格子目F群)　丸瓦(須恵質､無文) |
| 土製品 | 焼土塊(7) |

S-30橙カツ土　13c後半～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 蓋3　蓋c　甕　壺f |
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ)　坏a(ｲﾄ)(墨書)　椀c　小皿a(ｲﾄ) |
| 黒色土器A | 椀c |
| 同安窯系青磁 | 皿;I-2b(1) |
| 須恵質土器 | 鉢(東播系) |
| 緑釉陶器 | 坏×皿(京都産) |
| 国産陶器 | 甕(常滑系) |
| 国産磁器 | 青磁染付?(香炉×鉢)、水注 |
| 白磁 | 椀;I-2b(1)　IV-2a(1)　VIII(2)　皿;IX |
| 中国陶器 | C1群(1)　B群(1)　壺×耳壺A2群(1) |
| 青白磁 | 合子蓋(1) |
| 瓦類 | 平瓦(須恵質、二重格子目F群) |
| 石製品 | 滑石製石鍋 |
| 金属製品 | 板状鉄製品　鉱滓(2)　鉄釘(1) |
| 土製品 | 焼土塊(211)　土壁(2) |

S-30炭層　13c後半～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 皿　甕 |
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ)　小皿a(ｲﾄ) |
| 瓦器 | 椀 |
| 石製品 | 滑石破片 |
| 土製品 | 焼土塊(95) |

S-30a　13c後半～

| | |
|---|---|
| 土師器 | 甕 |

S-31　12c～

| | |
|---|---|
| 土師器 | 坏a?(ｲﾄ)　甕? |
| 瓦類 | 平瓦(須恵質､無文) |

S-32　12c～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 小甕 |
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ)　小皿a(ｲﾄ) |
| 土製品 | 焼土塊(2) |

S-33　18c後半～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 蓋3　甕 |
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ)　椀c　小皿a(ｲﾄ) |
| 黒色土器A | 椀c |
| 土師質土器 | 筒型容器 |
| 瓦質土器 | 火鉢?((近世～)　甕　ｻﾝ |
| 肥前系磁器 | 鉢 |
| 国産陶器 | 蓋(褐釉)　椀(黒褐)　大甕(常滑系)　鉢(ﾊｹ手)<br>大型鉢　段皿　徳利(ｲｯﾁﾝ掛け)　土瓶(緑釉) |
| 白磁 | 椀;IV-2(1)<br>耳壺III(1) |
| 瓦類 | 平瓦(近世～)　平瓦(須恵質､格子目D群)<br>平瓦(須恵質､格子目D群「平井」)<br>丸瓦(近世～)　軒丸瓦 |
| 金属製品 | 鉄釘(1) |
| その他 | 石炭 |

S-34　近世～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 坏×蓋　甕 |
| 土師器 | 坏a(ﾍﾗ)　椀c　小皿a(ｲﾄ) |
| 土師質土器 | 鍋×鉢 |
| 瓦類 | 丸瓦(近世～) |

## tab.224-4　大宰府条坊跡第 224 次調査　出土遺物一覧表（3）

S-35　13c後半～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 蓋1　蓋3　坏c2　坏a×皿a　甕　壺 |
| 土師器 | 坏a(イト)　坏d　丸底坏a　丸底坏c　椀c<br>小皿a(ヘラ、イト)　小皿a2•甕a |
| 黒色土器A | 椀 |
| 黒色土器B | 小皿a |
| 瓦器 | 椀c |
| 龍泉窯系青磁 | 椀;I(2)　I-1(3)　I-2(1)　II-b(5)　III-1B(1)a<br>破片(2)　皿;I(1)　坏III(1) |
| 同安窯系青磁 | 椀;I-1(1)　I-1b(2)　破片(2)<br>皿;I(2)　I-b(1)　I-1b(2)　I-2b(1)　破片(1) |
| 高麗青磁 | 椀;破片 |
| 土師質土器 | 不明大型製品 |
| 須恵質土器 | 甕　鉢(篠窯系) |
| 瓦質土器 | 擂鉢AI　鉢(篠窯系) |
| 緑釉陶器 | 小坏(京都産)　椀(防長産)　椀×皿(防長産) |
| 国産陶器 | 甕(常滑系) |
| 白磁 | 椀;I(1)　IV-1(1)　IV-2a(1)　V-C(1)　椀×皿(1)<br>破片(1)　白磁×同安(1)破片(1)<br>皿;VI-1a(1)　IX(1)　IX-1(1)　破片(1) |
| 中国陶器 | 壺;III(1)　壺×水注B群(1)　盤I-b(1)<br>壺×耳壺×水注A2群(1)　•壺×耳壺B群(1) |
| 瓦類 | 平瓦(土師質、縄目)　平瓦(瓦質、無文)<br>平瓦(須恵質、無文)•丸瓦(須恵質、格子目)<br>丸瓦(須恵質、無文) |
| 土製品 | 焼土塊(15) |
| 石製品 | 滑石製石鍋　砥石(茶色泥岩) |

S-35黒灰土　13c後半～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 破片 |
| 土師器 | 坏　椀c　小皿c　甕? |
| 黒色土器A | 椀 |
| 土師質土器 | 破片 |

S-36　18c～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 小坏c　甕 |
| 土師器 | 坏a(イト)　小皿a(イト)　甕 |
| 瓦器 | 椀c |
| 土師質土器 | 焙烙把手 |
| 須恵質土器 | 鉢 |
| 肥前系磁器 | 筒椀　徳利 |
| 国産陶器 | 土瓶(鉄釉) |
| 白磁 | 椀;IV-1a　破片(2)<br>皿;VIII-b(1)　破片(1) |
| 中国陶器 | 盤;I(1)　I-1b(1)　破片(1) |
| 瓦類 | 平瓦(近世～)　平瓦(土師質、格子目A群)<br>丸瓦(近世～)　•道具瓦(近世～) |

S-37　近世～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 蓋　甕 |
| 土師器 | 坏a(イト)　小皿a(イト) |
| 黒色土器A | 椀c |
| 土師質土器 | 鍋A群(S-38と接合)　鉢×鍋 |
| 国産陶器 | 甕(常滑系) |
| 石製品 | 滑石製石鍋A群 |

S-38　近世～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 蓋3　蓋c　坏c4　甕 |
| 土師器 | 坏a(イト)　丸底坏　小皿a(イト)　大皿c |
| 瓦器 | 椀c |
| 龍泉窯系青磁 | 椀;I-3(2)　I-1a(1)　II-b(1) |
| 同安窯系青磁 | 椀;破片(1)　椀(未分類)(1) |
| 土師質土器 | 鉢　鍋A群(S-37と接合) |
| 国産陶器 | 鉢(肥前系)　皿(唐津系)　甕(常滑系)　捏鉢 |
| 白磁 | 椀;破片(4)<br>皿;III-1(1)　破片(2) |
| 中国陶器 | A1群(2)　B群(1) |
| 瓦類 | 平瓦(近世～) |
| 石製品 | 用途不明石製品　滑石 |
| 土製品 | 瓦玉(2) |

S-39　11c後半～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 小蓋4　皿a×蓋　甕 |
| 土師器 | 坏a(ヘラ、イト)　大坏c　椀c |
| 瓦類 | 平瓦(瓦質、無文) |
| 土製品 | 焼土塊(1) |

S-41　13c～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 蓋3　坏c3　小甕 |
| 土師器 | 坏a(イト)　椀c　甕a |
| 瓦器 | 椀 |
| 同安窯系青磁 | 椀;I-3(1)　I-1c(1)　III(1)<br>破片(1) |
| 白磁 | 椀;V(1)　V-4×VIII-3(1)　破片(1) |
| 中国陶器 | A2群(1) |
| 土製品 | 焼土塊(2) |

S-42　13c～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 坏　甕　壺a×b　鉢 |
| 土師器 | 坏a(イト、ヘラ)　丸底坏　小皿a(イト)　小甕a |
| 瓦質土器 | 甕 |
| 白磁 | 椀;V-VIII　破片(1)<br>耳壺III(1) |
| 石製品 | and-f(1)　砥石? |
| 土製品 | 土玉(1) |

S-43　11c後半～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 甕 |
| 土師器 | 坏a(イト) |
| 白磁 | 椀;IV(1)　XIII-1b(1) |

S-44　13c～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 蓋3　供膳具 |
| 土師器 | 坏a(イト) |
| 龍泉窯系青磁 | 椀;I-1c(1)<br>龍泉窯系青磁×(同安窯系青磁)皿(1) |
| 白磁 | 椀;I-1c(1)　破片(1) |
| 瓦類 | 平瓦(瓦質、縄目2)　破片(須恵質、格子目D群) |

S-46　13c～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 甕 |
| 土師器 | 坏a(イト)　小皿a(イト)　腕c　蓋 |
| 龍泉窯系青磁 | 椀;I-2(1) |
| 白磁 | 椀;IV-a(1)　椀IV(1)　破片(1) |
| 中国陶器 | B群(1) |
| 石製品 | 砥石 |

# tab.224-4　大宰府条坊跡第 224 次調査　出土遺物一覧表（4）

S-47　近世〜

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 蓋3×4　甕×壺? |
| 土師器 | 坏a(イト)　小皿a(イト) |
| 瓦器 | 椀c |
| 龍泉窯系青磁 | 椀;I-3(1)　I-4(2)　I-1a(1) |
| 同安窯系青磁 | 椀;I-1c(2)<br>皿;I-2b(1)　破片(1) |
| 肥前系磁器 | 椀(1) |
| 国産陶器 | 大甕(常滑系)　椀×皿　丸椀 |
| 国産磁器 | 丸椀 |
| 白磁 | 椀;II(1)　V-a(2)　V-4×VIII-3(1)　破片(7)<br>皿;IX-1a(1)　III(1)<br>耳壺(1)　水注II(1)　破片(1) |
| 青白磁 | 椀(1) |
| 中国陶器 | B群(1) |
| 瓦類 | 丸瓦(近世〜)　平瓦(近世〜) |
| 石製品 | 平玉石(黒)(1) |
| 金属製品 | 鉄釘(1) |
| 土製品 | 焼土塊(1) |

S-47暗灰土　近世〜

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 甕 |
| 土師器 | 坏a×小皿a(イト)　小皿a(イト) |
| 国産陶器 | 甕(常滑系) |
| 土製品 | 焼土塊(1) |

S-49　近世〜

| | |
|---|---|
| 土師器 | 坏a?　小皿a(イト) |
| 瓦器 | 椀c |
| 同安窯系青磁 | 椀;I-1b(1) |
| 土師質土器 | 鍋? |
| 中国陶器 | B群(1) |

S-50暗灰土　1区　12c中頃〜

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 蓋　蓋3×4　坏c3　坏c4　小高坏a<br>小甕(肥後系?)　甕　•壺?(肥後系)　鉢b |
| 土師器 | 坏a(イト)　坏d　丸底坏a　椀c　小皿a(ヘラ)<br>小皿a2(ヘラ)　小皿c(イト?)•甕a×b　甕b |
| 黒色土器A | 椀c |
| 黒色土器B | 椀c |
| 瓦器 | 椀c |
| 龍泉窯系青磁 | 椀;I-3a(1)　I-3b(1) |
| 同安窯系青磁 | 椀;II(1)　椀×皿(1)　破片(2) |
| 土師質土器 | 鉢?(鍔部分)　鉢 |
| 須恵質土器 | 甕(常滑系?)　鉢(東播系、森田I〜2類) |
| 緑釉陶器 | 椀(防長系)　破片(1) |
| 灰釉陶器 | 壺 |
| 白磁 | 椀;V2b(2)　VIII(16)　V-b(4)　V(5)　V-a(3)<br>V-4b(7)　V(2)　IV(1)•II-b(1)　VI-b(1)　I-3b(1)<br>IV-1a(2)　V-VIII(3)　VIII-3(1)<br>V-3a(1)•V-4×VIII-3(2)　V-1×VIII-2(1)<br>IV(6)　IV-a(2)　IV-1(2)　V-3(2)•I-1a(1)<br>II-0(1)　II(2)　IV(6)　VIII-2(1) V-4×VIII-3(1)<br>白磁×同安(4)　椀×皿(1)　V×VIII(2)<br>V-b(6)　破片(18)<br>皿;III-1(3)　V-a(1)　VI(1)　VIII-1´b(1)　破片(1)<br>白磁×同安(1)　破片(5) |
| 青白磁 | 椀(1) |
| 中国陶器 | 壺;IV-1b(1)　甕(3)<br>壺×耳壺×水注B群(3)　D2群(1)　C1群(2)<br>B群(3)　盤(1)　•盤A1群(1)　耳壺C1群(1)<br>耳壺B群(5)　耳壺III(1) |

| | |
|---|---|
| 須恵器(輸入) | 朝鮮系無釉陶器;壺　壺?　甕 |
| 黒釉陶器 | 壺? |
| 瓦類 | 丸瓦(土師質)　丸瓦(須恵質、格子目D群)(2)<br>平瓦(須恵質、格子目D群「平井」)<br>平瓦(土師質、縄目)•平瓦(須恵質、無文)<br>平瓦(須恵質、格子目) |
| 石製品 | 滑石製石鍋　砥石(2)　滑石製用途不明品(2) |
| 金属製品 | 鉄塊系遺物　鉱滓(椀形滓)(4) |
| 土製品 | 焼土塊(1)　瓦玉(4)　打ち欠き土器(6) |

S-50淡茶灰土　1区　12c〜

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 蓋c　坏c1　坏c3 |
| 土師器 | 坏a(ヘラ)　小椀c　小皿a(イト) |
| 白磁 | 破片(1)　耳壺III(1) |

S-50淡灰土　1区

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 甕　鉢a |
| 土師器 | 坏a(イト)　椀c　甕a |
| 緑釉陶器 | 破片 |
| 白磁 | 椀;破片(1)　皿;VI-1(1)　IV-2(1)　破片(1) |
| 中国陶器 | 壺×耳壺B群(1) |
| 須恵器(輸入) | 朝鮮系無釉陶器壺 |
| 瓦類 | 平瓦(瓦質、斜格子目D群)　平瓦(土師質、縄目)<br>丸瓦(須恵質、斜格子目D群) |
| 土製品 | 瓦玉(1) |

S-50淡灰砂　1区　12c〜

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 壺 |
| 土師器 | 坏a(イト)　小椀c　小皿a(イト)　小皿c |
| 須恵器(輸入) | 朝鮮系無釉陶器;壺　破片 |

S-50灰色土　1区　12c中頃〜

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 坏c2×3　坏c3　坏×皿　高坏b　甕　壺a<br>鉢(肥後系) |
| 土師器 | 坏a(イト)　坏c　丸底坏a　小椀c　椀c<br>小皿a(イト、ヘラ)　甕b　鉢b　鉢?器台　脚付鉢 |
| 製塩土器 | I類 |
| 瓦器 | 椀c |
| 龍泉窯系青磁 | 椀;I-1(1)　I-2(1) |
| 同安窯系青磁 | 椀;III-1b(1) |
| 土師質土器 | 鉢　大皿c×鉢 |
| 須恵質土器 | 鉢(東播系、森田II-2類) |
| 緑釉陶器 | 椀?(防長産) |
| 国産陶器 | 甕(備前?) |
| 白磁 | 椀;V(2)　IV-2(2)　V-2×VI-VIII-3(1)　V-b(5)<br>VIII(10)　II-4b(1)•V-1a(1)　V-a(9)　IV(2)<br>IV-1a(3)　V-b×c(1)　破片(11)破片(15)<br>•V-c(1)　II-b(2)　XI(1)　V〜VIII(13)　VI-1b(1)<br>V-b(1)　IV(3)　•III-1b(1)　III-1b(1)<br>VIII-4×IX(1)　V-4×VIII-3(1)　V-4b(2)<br>皿;III-1(2)　XI(1)　VI-1b(1)　XI-1(1)　V-1a(1)<br>V-VI(1)　破片(1)<br>耳壺III類(1)　破片(1) |
| 青白磁 | 椀(1) |
| 中国陶器 | 壺;D1群(1)　甕(1)<br>CI群(2)　壺×耳壺B群(4)　B群(1)<br>壺×耳壺C1群(1) |
| 須恵器(輸入) | 朝鮮系無釉陶器壺 |
| 瓦類 | 平瓦(土師質、無文)　平瓦(須恵質、無文)<br>平瓦(須恵質、二重格子目F群)<br>平瓦(土師質、縄目)　平瓦(瓦質、縄目)•<br>丸瓦(須恵質、格子目D群)　丸瓦(瓦質、縄目) |

## tab.224-4　大宰府条坊跡第 224 次調査　出土遺物一覧表（5）

| | |
|---|---|
| 瓦類 | 丸瓦(須恵質､斜格子目)　丸瓦(土師質､無文)<br>破片(瓦質､格子目F群) |
| 石製品 | 石鍋　用途不明滑石製品　and-f　原石(黒曜石) |
| 金属製品 | 鉱滓(椀形滓)(1) |
| 土製品 | 瓦玉(1)　焼土塊(1)　打ち欠き土器(3) |

S-50黒灰土　1区　　12c中頃～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 坏　皿?　小甕　甕　大甕　壺a×b |
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ)　坏d　丸底坏a　椀c　小皿a(ｲﾄ､ﾍﾗ)　甕<br>小甕 |
| 製塩土器 | II-b類 |
| 黒色土器A | 椀c |
| 黒色土器B | 椀 |
| 瓦器 | 椀 |
| 須恵質土器 | 鉢(東播系､森田I-2類) |
| 灰釉陶器 | 壺　小坏 |
| 白磁 | 椀;V-a(2)　V-1×VIII-2(2)　V-VIII(3)　VIII(2)<br>IV(2)　II-a(1)　VI-b(1)　VIII-2(1)　IV-1a(1)<br>V-b(1)　V(2)　II-b(1)　VI×VIII(1)　IV(1)<br>破片(1)　白磁×同安窯系青磁(1)<br>蓋(1)　耳壺III(1)　破片(1) |
| 中国陶器 | 壺;IV-1b(1)　甕(3)　破片(1)<br>鉢×水注D2群(1)　B群(1)<br>壺×耳壺×水注A2群(1)<br>壺×耳壺×水注B群(1)　破片(1) |
| 須恵器（輸入） | 朝鮮系無釉陶器;壺　破片 |
| 瓦類 | 平瓦(土師質)　平瓦(瓦質､縄目)　平瓦(土師質<br>､格子目D群)･丸瓦(瓦質､無文)<br>丸瓦(須恵質､無文) |
| 石製品 | 滑石製石鍋　ab-f(1) |
| 土製品 | 打ち欠き土器(2) |

S-50茶色土　3区

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 蓋4　坏a2　坏c　甕　壺　鉢 |
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ)　椀c　小皿a(ｲﾄ､ﾍﾗ)　甕a?　甕把手 |
| 瓦器 | 椀c |
| 白磁 | 椀;IV(1)　IV-1a(1)　V-4×VIII-3(3)　VIII(1)<br>破片(4)　皿;VI-2b(1)　破片(2) |
| 青白磁 | 椀(1) |
| 中国陶器 | 壺×耳壺B群(1)<br>CI群(2)　壺×耳壺B群(4)　B群(1)<br>壺×耳壺C1群(1) |
| 黒釉陶器 | 椀(2) |
| 瓦類 | 丸瓦(須恵質､無文)　丸瓦(土師質､無文) |
| 土製品 | 柱状土製品(1) |

S-50黒色粘質土　3　　12c～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 蓋3　小坏c3　坏c3　甕 |
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ)　坏d　坏c×椀c　丸底坏a　椀c<br>小皿a(ｲﾄ) |
| 土師質土器 | 盤? |
| 須恵質土器 | 甕 |
| 瓦類 | 丸瓦(瓦質､無文)　丸瓦(土師質､無文) |
| 石製品 | ob-f(1) |

S-50黒灰粘質土　3　　12c中頃～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 小蓋c3　小高坏　大甕　壺d×e　鉢b |
| 土師器 | 蓋3　坏a(ｲﾄ)　坏d　椀c　椀c(外来系)<br>小皿a(ｲﾄ､ﾍﾗ)　小甕　甕a･甕a? |
| 黒色土器B | 椀c |
| 瓦器 | 椀c |
| 越州窯系青磁 | 椀;I(1)　I-2ｳ(1) |

| | |
|---|---|
| 緑釉陶器 | 坏(防長系) |
| 白磁 | 椀;IV-1a(1)　V-4×VIII-3(2)　V-a(4)　VIII(1)<br>V-b(2)　V-VIII(2)　IV(2)･V-4b(1)　IV-1a(1)<br>破片(6)　皿VIII－c(1)　破片(1)　耳壺III(2) |
| 中国陶器 | 壺;耳壺V-2(1)　破片(1)<br>鉢;I-2a(1)<br>B群(2)　A2群(1)　壺×耳壺B群(2) |
| 須恵器（輸入） | 朝鮮系無釉陶器壺? |
| 瓦類 | 丸瓦(瓦質､無文)　平瓦(瓦質､無文)　平瓦(瓦<br>質､縄目)･平瓦(須恵質､格子目D群)　平瓦(瓦<br>質､格子目D群) |
| 石製品 | 滑石製石鍋 |
| 金属製品 | 鉱滓(椀形滓)(1) |

S-50暗灰粘質土　3区

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 蓋3　蓋c　坏a2　大坏c3　皿a　小甕a　甕<br>大甕　壺e　･壺c×鉢c(外来系)　鉢b |
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ)　椀c　小皿a(ｲﾄ)　甕a |
| 黒色土器A | 椀c |
| 瓦器 | 椀c |
| 同安窯系青磁 | 椀;II(2) |
| 土師質土器 | 鉢A群 |
| 緑釉陶器 | 破片(防長産) |
| 白磁 | 椀;IV(2)　V-b(3)　VIII(1)　V-VIII(2)　IV-1a(1)<br>V-4×VIII-3(2)　･椀V-1×VIII-2(1)　VIII(1)<br>V-4b(1)　破片(4)　皿;III-1(1)　VIII-1c(1)<br>耳壺III(1) |
| 中国陶器 | 壺;VIII(1)<br>壺×耳壺B群(3)　D2群(1)　B群(1) |
| 須恵器（輸入） | 朝鮮系無釉陶器壺 |
| 瓦類 | 平瓦(須恵質､無文)　平瓦(土師質､無文)<br>平瓦(瓦質､無文)･平瓦(瓦質､縄目) |
| 石製品 | 滑石製石鍋A類 |
| 金属製品 | 鉱滓(椀形滓)(1) |
| 土製品 | 打ち欠き土器(1) |

S-50茶灰砂質土　3区

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 蓋1　蓋3　蓋c　坏c3　小甕　甕　壺d |
| 土師器 | 蓋　坏a(ｲﾄ､ﾍﾗ)　丸底坏a　椀c　小皿a(ｲﾄ､ﾍﾗ)<br>甕a　器台 |
| 黒色土器A | 椀c |
| 黒色土器B | 椀c |
| 瓦器 | 椀(筑前型) |
| 龍泉窯系青磁 | 椀;I-1(1)　B×C(上田)(1)　破片(1) |
| 須恵質土器 | 片口鉢(東播系､森田I-2類) |
| 瓦質土器 | 鉢A-IV群　鉢A-II群 |
| 白磁 | 椀;VIII(7)　V-b(3)　V-2×VI～VIII-1(1)<br>V(2)　IV(2)　IV-1(1)　V-a(2)　V-1×VIII-2(2)<br>II-4b(2)　V-b(3)　III-1b(1)　IV-1b(1)　V-4(1)<br>V-a(1)　VIII-2×3(1)　破片(8)　皿;IV-2b(1)<br>耳壺III(1)　破片(2) |
| 中国陶器 | 鉢;I-2a(1)<br>壺×耳壺×水注B群(1)　耳壺C1群(1) |
| 須恵器（輸入） | 朝鮮系無釉陶器壺(2) |
| 瓦類 | 丸瓦(須恵質､無文)　丸瓦(須恵質､斜格子目)<br>平瓦(土師質､格子目A～D群)<br>平瓦(須恵質､格子目D2群)<br>平瓦(瓦質､縄目)　平瓦(土師質､縄目) |
| 縄文土器 | 粗製浅鉢(北久根山式?) |
| 石製品 | 滑石製石鍋B群　砥石(泥岩､対馬産)　ob-f(1) |
| 土製品 | 瓦玉(1)　打ち欠き土器(1) |

## tab.224-4　大宰府条坊跡第 224 次調査　出土遺物一覧表（6）

S-50茶灰土 3区

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 甕 |
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ) 椀C |
| 瓦器 | 椀c |

S-51　13c〜

| | |
|---|---|
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ) |
| 須恵質土器 | 鉢(東播系) |
| 須恵器(輸入) | 朝鮮系無釉陶器(1) |

S-52　10c〜

| | |
|---|---|
| 土師器 | 椀c |

S-53　12c〜

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 小甕 |
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ) 小皿a(ｲﾄ) |
| 須恵質土器 | 鉢(東播系) |

S-54　11c後半〜

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 坏 壺? |
| 土師器 | 坏a(ﾍﾗ) 椀c 小皿a(ｲﾄ) |
| 須恵質土器 | 鉢(篠窯系) |

S-55　12c〜

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 壺b |
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ) |

S-56黒灰土　11c後半〜

| | |
|---|---|
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ) 小皿a(ｲﾄ、ﾍﾗ) 小皿a(ｲﾄ)(墨書) |
| 瓦類 | 丸瓦(瓦質、縄目2) |
| 石製品 | 砥石(1) |
| 土製品 | 焼土塊(12) 土壁 |

S-56淡黒灰土　11c後半〜

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 壺e 鉢a? |
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ) |
| 土製品 | 焼土塊(1) 瓦玉(1) |

S-57　13c〜

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 甕 |
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ) 小皿a(ｲﾄ) |
| 土師質土器 | 鍋c |
| 須恵質土器 | 鉢(東播系) |
| 国産陶器 | 甕(常滑系) |
| 土製品 | 焼土塊(3) 土壁 |

S-59　12c後半〜

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 蓋c 坏 坏c3 皿a×坏a 甕 壺a? |
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ) 坏a(ﾍﾗ) 坏a(ﾍﾗ、ｲﾄ) 坏d 丸底坏<br>椀c 小皿a(ｲﾄ) •小皿a(ﾍﾗ) 皿c 甕 甕a<br>器台 |
| 黒色土器B | 椀c |
| 瓦器 | 椀 |
| 同安窯系青磁 | 椀;破片(1) |
| 瓦類 | 丸瓦(土師質、格子目D群) 丸瓦(瓦質、無文)<br>平瓦(土師質、無文) |
| 石製品 | 滑石製石鍋 ob-f(1) |
| 金属製品 | 鉱滓(1) |

S-61a　近世〜

| | |
|---|---|
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ) 小皿a(ｲﾄ) |

S-61b　近世〜

| | |
|---|---|
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ) 小皿a(ｲﾄ) |

S-61c　近世〜

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 鉢 |
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ) |
| 国産陶器 | 甕(常滑系) |

S-61d　近世〜

| | |
|---|---|
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ) 小皿a(ｲﾄ) |

S-62　12c〜

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 蓋3 甕 甕a |
| 土師器 | 坏a(ﾍﾗ、ｲﾄ) 丸底坏c 椀c 小皿a(ﾍﾗ、ｲﾄ)<br>小皿a2 大皿? 甕 |
| 黒色土器A | 椀c |
| 瓦器 | 椀 |
| 瓦類 | 平瓦(瓦質、縄目) 平瓦(瓦質、無文) |
| 石製品 | 焼土塊(4) 土壁(1) |

S-63　12c〜

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 坏 |
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ) 小皿a(ｲﾄ) |
| 土師質土器 | 大型製品? |
| 金属製品 | 鉱滓(1) |

S-64　11c後半〜

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 坏c3 甕 |
| 土師器 | 坏a(ﾍﾗ、ｲﾄ) |

S-66　13c〜

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 坏 小甕a 大甕b |
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ) 椀c 小皿a(ﾍﾗ、ｲﾄ) |
| 黒色土器B | 破片 |
| 瓦器 | 椀c |
| 瓦質土器 | 鍋×鉢 |
| 瓦類 | 平瓦(瓦質、格子目F群) |
| 石製品 | and-AP(1) |

S-67　13c前半〜

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 蓋3 坏c3 大坏c3 小甕 大甕 壺b<br>鉢(未分類) ﾊｿｳ? |
| 土師器 | 坏a(ﾍﾗ、ｲﾄ) 坏d 丸底坏a 椀c<br>小皿(ﾍﾗ、ｲﾄ) 大皿a×c 甕a?•器台 |
| 製塩土器 | I類 |
| 瓦器 | 椀c |
| 龍泉窯系青磁 | 椀;I-1(1) I-3(1) I-4(1) II(1) 破片(1)<br>不明(2) |
| 同安窯系青磁 | 椀;I-1b(1) III-1a(1) III-c(1) |
| 土師質土器 | 鍋? |
| 須恵質土器 | 鉢(東播系、森田II類) |
| 緑釉陶器 | 坏(東海系) 皿(洛西産) 破片(防長産)(2) |
| 灰釉陶器 | 壺(1) 大壺 |
| 国産陶器 | 坏(1) 甕(常滑系) |
| 白磁 | 椀;II(3) V-4b(3) IV-1a(2) V-4×VIII-3(3)<br>V〜VIII(10) V-a(1)•VIII(7) V-b(2)<br>IV(7) 破片(28) 皿;III-1(3) III(1) VIII-1b(1)<br>III-1×椀VIII(墨書)(1) 破片(3) 椀×皿(2)<br>耳壺III(1) 不明(15) |
| 中国陶器 | 壺×耳壺A2群(2) 壺×耳壺×水注B(3)<br>壺×耳壺B(2) •壺×耳壺C1群(1) 鉢;破片(1)<br>A1群(1) B群(1) 盤C1群(2) 盤II(1) 盤(1) |

## tab.224-4　大宰府条坊跡第 224 次調査　出土遺物一覧表（7）

| | |
|---|---|
| 須恵器(輸入) | 朝鮮系無釉陶器;壺(1)　大壺(1) |
| 瓦類 | 平瓦(瓦質、格子目D群)　平瓦(須恵質、格子目D群)・平瓦(須恵質、格子目F群)　平瓦(須恵質、格子目D-1群)・平瓦(瓦質、縄目)<br>平瓦(須恵質、縄目)　丸瓦(須恵質、格子目D群) |
| 石製品 | 軽石塊　ob-f(1)　すり石(1)　滑石製石鍋A群 |
| 土製品 | 瓦玉(1) |

S-69　13c～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 甕 |
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ)　丸底坏　椀c　甕a? |
| 龍泉窯系青磁 | 椀;II-b(1)　浅形椀(未分類)(1) |
| 同安窯系青磁 | 椀;破片(1) |

S-71　13c～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 甕　大甕 |
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ)　椀c　小皿a(ﾍﾗ) |
| 土師質土器 | 鉢 |
| 須恵質土器 | 鉢(東播系) |
| 石製品 | ob-f(1) |

S-72　近世～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 大甕 |
| 土師器 | 坏c　坏a(ｲﾄ) |
| 土師質土器 | 脚付鉢 |
| 須恵器(輸入) | 朝鮮系無釉陶器壺? |
| 瓦類 | 平瓦(土師質、縄目)(1) |
| 金属製品 | 鉱滓(1) |

S-73　10c～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 蓋3　大蓋3　坏c3　大甕　壺蓋　壺b |
| 土師器 | 椀c　小皿a(ﾍﾗ) |
| 越州窯系青磁 | 椀;I(1) |
| 瓦類 | 平瓦(須恵質、格子目、老司系)(1) |

S-74　13c～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 大甕 |
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ)　小皿a(ｲﾄ) |
| 黒色土器A | 椀 |
| 黒色土器B | 鉢 |
| 瓦器 | 破片 |
| 同安窯系青磁 | 椀;I-b(1) |
| 白磁 | 椀;V-VIII(2)　破片(2) |
| 須恵器(輸入) | 朝鮮系無釉陶器壺(1) |
| 瓦類 | 平瓦(土師質、無文) |

S-76　13c～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 甕 |
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ) |
| 龍泉窯系青磁 | 椀;I-1(1) |
| 同安窯系青磁 | 椀;破片(1) |

S-77　11c～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 小甕 |
| 土師器 | 坏a(ﾍﾗ) |
| 瓦器 | 破片 |

S-78　13c後半～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 小甕　甕　供膳具 |
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ)　椀c　小皿a(ｲﾄ) |
| 龍泉窯系青磁 | 椀;II-a(3)　II-b(1)　小椀III-1(1) |
| 同安窯系青磁 | 椀;I-1a(1)　皿;I-1b(1) |

| | |
|---|---|
| 土師質土器 | 鍋×鉢 |
| 須恵質土器 | 破片(1) |
| 瓦質土器 | 甕 |
| 国産陶器 | 甕(1) |
| 白磁 | 椀;破片(1)　皿;IX-1b(1) |
| 中国陶器 | B群(4) |
| 石製品 | 石皿(1) |
| 土製品 | 焼土塊(1) |

S-79　13c～

| | |
|---|---|
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ) |
| 龍泉窯系青磁 | 椀;II-b(1) |
| 瓦質土器 | 釜 |
| 石製品 | 石鍋(1) |

S-81　11c～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 坏c3 |
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ)　小皿a(ｲﾄ)　甕 |
| 白磁 | 皿;VI-2a(1) |
| 金属製品 | 鉄釘(1) |

S-82　11c後半～

| | |
|---|---|
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ)　小皿a(ｲﾄ) |

S-83　11c後半～

| | |
|---|---|
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ)　丸底坏a?　小皿a(ｲﾄ) |

S-84　11c後半～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 坏c3　大甕 |
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ、ﾍﾗ)　椀c |
| 須恵質土器 | 鉢(東播系) |

S-86　12c中頃～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 坏c3　甕 |
| 土師器 | 丸底坏a　椀c　小皿a(ｲﾄ、ﾍﾗ)　皿c |
| 瓦器 | 椀 |
| 越州窯系青磁 | 椀;I(1)　破片(1) |
| 白磁 | 椀;II-b(1) VIII(1) V-4b(2) V-a(1) V-1×VIII-V-4×VIII-3(1)・破片(2)<br>皿;IV-2(1)　皿×椀(1)　耳壺III(1)　不明(1) |
| 瓦類 | 平瓦(須恵質、無文) |

S-87　12c中頃～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 蓋　甕　鉢a? |
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ?)　椀c　甕(把手) |
| 瓦器 | 椀 |
| 白磁 | 椀;V-1×VIII-2(1)　V-2×VI～VIII-4(1)<br>V-4×VIII-3(1)　VIII(1)・破片(1)　皿;破片(1) |
| 中国陶器 | 壺×耳壺C1群(1) |
| 瓦類 | 平瓦(須恵質、縄目)　平瓦(須恵質、格子目D群) |

S-88黒色土　12c中頃～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 蓋3 |
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ)　小皿a(ｲﾄ) |
| 越州窯系青磁 | 椀;Ⅱ(1)　破片(1) |
| 龍泉窯系青磁 | 椀;I-2(1) |
| 同安窯系青磁 | 椀;I(1) |
| 土師質土器 | 鍋×鉢 |
| 白磁 | 椀;V～VIII(1)　V-4～VIII-3(2)　破片(2)<br>皿;XI(1)　VI～1a(1)　皿×椀(1) |
| 中国陶器 | C1群(1) |
| 瓦類 | 平瓦(須恵質、D-2群)　丸瓦(土師質、無文) |

## tab.224-4　大宰府条坊跡第224次調査　出土遺物一覧表（8）

S-88茶色土　12c中頃〜

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 坏c3　大甕 |
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ) |
| 瓦器 | 椀c |
| 同安窯系青磁 | 椀;I-1b(1) |
| 土師質土器 | 鍋×鉢 |
| 白磁 | 椀;IV(1)　V-2×VI〜VIII-4(1)　V-4×VIII-3(1)　V-b(1)　破片(4)　皿;VII-b(1) |
| 瓦類 | 丸瓦(瓦質、格子目)　平瓦(須恵質、D-2群) |
| 石製品 | 石鍋 |
| 金属製品 | 鉱滓(1) |

S-89　12c中頃〜

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 甕　壺? |

S-91　12c中頃〜

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 蓋3　壺b |
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ)　甕b |
| 瓦器 | 椀? |
| 土師質土器 | 鉢? |
| 瓦類 | 平瓦(土師質、格子目D群) 平瓦(瓦質、格子目) |

S-92　12c〜

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 坏　小甕　壺a×b |
| 土師器 | 丸底坏a　椀c　皿a(ﾍﾗ)　皿a2 |
| 瓦器 | 椀c |
| 緑釉陶器 | 破片(洛西産) |
| 瓦類 | 丸瓦(須恵質、格子目) |

S-93　13c〜

| | |
|---|---|
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ、ﾍﾗ) |
| 龍泉窯系青磁 | 椀;I(1) |

S-94　12c〜

| | |
|---|---|
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ)　小皿a(ｲﾄ) |
| 土製品 | 焼土塊(7) |

S-96　12c〜

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 小壺 |
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ)　小皿a(ｲﾄ) |
| 瓦器 | 椀 |
| 土製品 | 焼土塊(1) |

S-97　12c〜

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 甕　壺f×d　壺×瓶 |
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ、ﾍﾗ)　椀c　小皿a(ｲﾄ)　甕a |
| 瓦器 | 椀 |
| 緑釉陶器 | 椀×皿(洛西産) |
| 須恵器(輸入) | 朝鮮系無釉陶器壺 |
| 瓦類 | 平瓦(須恵質、二重格子目) |

S-98　11c〜

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 供膳具 |
| 土師器 | 坏　甕? |

S-99　11c後半〜(※殆ど10c代が主体)

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 蓋c　坏a2　小甕 |
| 土師器 | 坏d　丸底坏　椀c　小皿a(ﾍﾗ、ｲﾄ)　小皿c　甕　器台 |
| 黒色土器A | 椀c |
| 黒色土器B | 鉢 |
| 瓦器 | 椀c |
| 土師質土器 | 鉢 |
| 瓦類 | 平瓦(須恵質、「佐」)平瓦(須恵質、二重格子目) |
| 縄文土器 | 粗製深鉢(1) |
| 石製品 | and-f(1) |
| 金属製品 | 鉱滓(椀形滓)(1) |

S-100黒灰土　12c前半〜

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 蓋1　蓋3　坏c3　甕　大甕 |
| 土師器 | 坏a(ﾍﾗ、ｲﾄ)　丸底坏a　丸底坏c　椀c　小皿(ｲﾄ、ﾍﾗ)　小皿a2　小甕a・小甕×把手　鉢c　鉢把手 |
| 黒色土器A | 椀 |
| 黒色土器B | 椀 |
| 瓦器 | 椀 |
| 土師質土器 | 鉢×鍋 |
| 須恵質土器 | 鉢(内面赤色顔料付着)　鉢(外面格子目叩) |
| 緑釉陶器 | 椀?(洛北産)　椀(洛西産)　椀(防長産) |
| 灰釉陶器 | 椀? |
| 白磁 | 椀;V-1(1)　IV(1)　耳壺×水注II(1) |
| 須恵器(輸入) | 朝鮮系無釉陶器壺 |
| 瓦類 | 平瓦(須恵質、無文)　平瓦(須恵質、格子目D群)　平瓦(須恵質、格子目「平井」D2群)・平瓦(瓦質、格子目、左文字の「観世音寺」G群)　丸瓦(土師質、無文) |
| 石製品 | 平玉石(白)(2)　and-f(1) |

S-101　19c中頃〜

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 坏a |
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ)　小皿a(ｲﾄ) |
| 土師質土器 | 赤火鉢B群　火鉢(近世〜)　火消し壺　風炉　七鉢ｻﾝ　涼炉　・手焙り炉?　焙烙 |
| 瓦質土器 | 火鉢(近世〜)　火鉢ｻﾝ |
| 肥前系磁器 | 鉢(染付青磁)　丸椀　小坏　端反椀　広東椀　蓋茶碗　菊皿　坏(染付)・小角皿　小皿 |
| 国産陶器 | 擂鉢底(4) 大型半胴甕(鉄釉、白釉、近世〜)　大型壺(鉄釉、白釉)・土瓶(白釉)　土瓶(褐釉)　擂鉢口2 壺蓋(褐釉)　土瓶蓋(白釉)　・丸椀(灰釉)　土瓶(鉄絵山水、京都系)　皿(輪花、高取)　徳利(褐釉)・擂鉢底(3)　香炉×火鉢(白釉)　華瓶(小型品) |
| 国産磁器 | 丸椀　徳利　鉢(青磁、近世〜)　菊皿(青磁、江戸〜)　丸椀(赤絵) |
| 白磁 | 椀;IV-1a(1)　V(2)　VIII(1)　皿;III-1(1)　VIII-1(1) |
| 中国陶器 | 甕;破片(IVか)(1)、破片(IIIか)(1)　他;破片〔A−2群〕(1)、破片〔B群〕(1) |
| 瓦類 | 平瓦(近世〜)　軒平瓦(梅鉢唐草文)　軒丸瓦(巴文、近世〜)　ｻﾝ瓦 |
| 石製品 | 石鍋　硯(滑石製) |
| 土製品 | 焼土塊(1)　ﾊﾏ(ｶﾏ道具) |
| その他 | 池縁 |

## tab.224-4　大宰府条坊跡第224次調査　出土遺物一覧表（9）

S-102　12c～

| | |
|---|---|
| 土師器 | 小皿a(イト) |
| 瓦類 | 丸瓦×平瓦(須恵質、格子目A群) |
| 金属製品 | 鉱滓(製錬滓) |

S-103　12c～

| | |
|---|---|
| 土師器 | 坏a(イト)　椀c　小皿a(イト)　甕×鉢 |
| 黒色土器A | 椀? |

S-104　12c～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 坏c3 |
| 土師器 | 小皿a(イト) |

S-105　8c後半～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 小蓋3×4 |

S-106　近世～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 蓋　甕 |
| 瓦類 | 平瓦?(近世～) |

S-107　18c～

| | |
|---|---|
| 肥前系磁器 | 肥前系染付；皿(見込みコンニャク印)　鉢?<br>青磁染付徳利? |
| 国産陶器 | 捏鉢(刷毛手、唐津産) |
| 瓦類 | 平瓦(近世～)　サン瓦(近世～) |

S-108　近世～

| | |
|---|---|
| 土師器 | 坏 |
| 肥前系磁器 | 染付；丸椀? |
| 瓦類 | 平瓦(近世～)　丸瓦(近世～) |

S-109　18c～

| | |
|---|---|
| 土師器 | 坏a(イト) |
| 土師質土器 | 大甕 |
| 肥前系磁器 | 染付；丸椀? |
| 国産陶器 | 鉢(鉄釉)　竹徳利　壺(黒釉) |
| 国産磁器 | 色絵筒椀 |
| 瓦類 | 丸瓦(近世～)　平瓦(近世～) |

S-110　11c後半～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 甕 |
| 土師器 | 坏a?(イト)　丸底坏a　小皿a(イト)? |
| 瓦器 | 椀 |

S-110　12c～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 小坏　甕? |
| 土師器 | 坏a(イト)　椀c　小皿a(イト)　甕a |

S-112　11c～

| | |
|---|---|
| 土師器 | 坏a?(ヘラ) |
| 瓦器 | 破片 |
| 石製品 | 平丸石(黒)(1) |

S-113　13c～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 坏a2 |
| 土師器 | 坏a(イト)　小皿a(イト) |
| 土師質土器 | 鉢×鍋 |
| 瓦質土器 | 甕 |
| 白磁 | 椀；破片(2) |

S-114　12c～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 坏c3　甕 |
| 土師器 | 坏a(イト)　椀c　小皿a(ヘラ) |
| 瓦器 | 小皿a(イト) |

S-115　12c～(※国陶は1点のみ混入か?)

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 蓋?　坏　大甕　壺? |
| 土師器 | 坏a(イト)　椀c　小皿a(イト)　甕a |
| 瓦器 | 椀c　小皿a(イト) |
| 土師質土器 | 鍋A群　鍋×鉢　鍋C群 |
| 須恵質土器 | 甕 |
| 緑釉陶器 | 破片(洛北系) |
| 国産陶器 | 土瓶(白地緑彩、江戸～) |
| 白磁 | 椀；I-2(1)　IV(2)　V-2×VI～VIII-4(1)　V-4×<br>VIII(1)　V-4b(2)・V～VIII(1)　VI-1a(1)　破片(1)<br>皿；VI-1a(1)　不明(2) |
| 中国陶器 | 鉢I-2a(1)　鉢(1)　鉢I(1)　B群(1) |
| 石製品 | 石鍋 |

S-116　13c～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 蓋?　甕 |
| 土師器 | 坏a(イト)　小皿a(イト) |
| 白磁 | 椀；II(1)　破片(1) |

S-117　12c～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 高坏 |
| 土師器 | 坏a(イト)　小皿a(イト) |
| 瓦器 | 椀 |
| 土師質土器 | 火鉢B群? |
| 瓦質土器 | 鉢 |
| 金属製品 | ガラス質滓(1) |
| 土製品 | 焼土塊(1) |

S-118　近世～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 蓋1 |
| 土師質土器 | 鍋×鉢 |

S-119　12c～

| | |
|---|---|
| 土師器 | 坏a(イト)　丸底坏a　小皿a(イト) |
| 白磁 | 皿；破片(1) |

S-120　12c～(※近世瓦は混入の可能性あり)

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 蓋3　鉢b? |
| 土師器 | 坏a(イト)　椀c　器台　鉢 |
| 瓦器 | 椀 |
| 土師質土器 | 鍋B群　鉢B群 |
| 瓦質土器 | 甕 |
| 緑釉陶器 | 椀(京都産) |
| 白磁 | 椀；破片(1)　耳壺III(1)　破片(1) |
| 中国陶器 | 鉢×水注D2群(1)　A2群(1) |
| 瓦類 | 平瓦(近世～) |
| 金属製品 | 鉄塊系遺物(1)　鉱滓(金属質)(1) |

S-121　11c後半～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 皿a |
| 土師器 | 小皿a(イト) |
| 須恵質土器 | 鉢(東播系?) |

S-122　12c～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 坏c3　甕 |
| 土師器 | 小皿a(イト) |
| 金属製品 | 鉱滓(1) |

## tab.224-4　大宰府条坊跡第224次調査　出土遺物一覧表（10）

S-122① 12c～

| | |
|---|---|
| 高麗青磁 | 高麗青磁×龍泉窯系青磁(未分類)(1) |

S-123 13c～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 大甕 |
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ) |
| 瓦器 | 椀 |
| 越州窯系青磁 | 破片(1) |
| 龍泉窯系青磁 | 椀;II(1) |
| 白磁 | 皿;VI-1(1) |

S-124 12c～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 小甕 |
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ) |
| 越州窯系青磁 | 破片(1) |
| 須恵質土器 | 鉢(東播系?) |

S-126 12c～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 小甕 |
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ) |
| 白磁 | 椀;破片(1) |

S-127 12c～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 鉢 |
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ) 甕 |
| 瓦器 | 椀? 小皿a(ｲﾄ) |
| 土製品 | 焼土塊(1) |

S-128 12c～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 供膳具 |
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ) 小皿a(ｲﾄ) |
| 白磁 | 破片(1) |

S-129 12c～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 甕 |
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ) 小皿a(ｲﾄ) 甕a |
| 白磁 | 破片(1) |
| 中国陶器 | C1群(1) |

S-130 茶褐色土 12c中頃～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 大甕 大甕(産地不明) |
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ､ﾍﾗ) 小皿a(ｲﾄ) 甕a |
| 黒色土器A | 椀c |
| 瓦器 | 小皿a(ｲﾄ) |
| 龍泉窯系青磁 | 皿;I(1) |
| 土師質土器 | 鉢 |
| 須恵質土器 | 甕 |
| 白磁 | 椀;IV(1) V-4×VIII-3(2) V-4b(1) VIII(1)XI(1) 破片(1) |
| 中国陶器 | 鉢;I-2a(1) B群(1) C2群(1) |
| 瓦類 | 平瓦(須恵質､格子目D群) |
| 土製品 | 焼土塊(1) |

S-130 茶色土 12c中頃～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 坏c3 大甕 壺a×b 長頸壺 |
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ) 小皿a(ｲﾄ) 甕 |
| 瓦器 | 椀c |
| 土師質土器 | 鍋C群 鍋D群 鉢 |
| 白磁 | 椀;II(1) V-1×VIII-2(2) V-4b(1) 破片(3) 皿;破片(1) 耳壺III(1) |
| 中国陶器 | 壺×耳壺×水注B群(1) 鉢;I-2a(1) D群(1) |
| 土製品 | 瓦玉(1) |

S-130 黒灰色土 12c中頃～

| | |
|---|---|
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ) |

S-130 暗灰色土 12c中頃～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 甕 鉢c |
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ) 椀c 小皿a |
| 瓦器 | 椀c |
| 土師質土器 | 鍋C群 |
| 須恵質土器 | 鉢(森田II-2類) |
| 瓦質土器 | 筒型容器(近世～) |
| 白磁 | 椀;IV(4) V(1) V-4b(3) 破片(4) |
| 瓦類 | 平瓦(近世～) 丸瓦(須恵質､無文) |

S-130 淡茶灰色土 12c中頃～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 小甕 甕(肥後系?) 大甕 壺b 壺d～f 壺e |
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ､ﾍﾗ) 椀c 小皿a(ｲﾄ､ﾍﾗ) 甕b |
| 黒色土器B | 椀 |
| 瓦器 | 椀c |
| 土師質土器 | 鍋A群 鍋C群 鉢 大鉢? |
| 緑釉陶器 | 皿(京都系) |
| 灰釉陶器 | 筒型容器(近世～) |
| 白磁 | 椀;IV(1) IV-a(1) V(1) V-1×VIII-2(1) V-4b(1) 破片(1)皿;IV-2b(1) 破片(1) |
| 中国陶器 | 鉢;I-2a(1) D2群(1) B群(1) |
| 瓦類 | 平瓦(土師質､格子目F群?) 平瓦(須恵質､無文文) 丸瓦(瓦質､不明) |
| 土製品 | 焼土塊(2) 瓦玉(1) |

S-130 灰色土 12c中頃～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 甕 |
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ) 小皿a(ｲﾄ) |
| 瓦器 | 椀c 小皿a(ｲﾄ) |
| 土師質土器 | 鍋C群 鉢 |
| 白磁 | 椀;II(1) V-2×IV～VIII-4(1) V-4×VIII-3(1) 破片(1)皿;VIII(1) 破片(2) 耳壺II(1) |
| 中国陶器 | B群(1) |
| 須恵器(輸入) | 朝鮮系無釉陶器壺 |

S-131 近世～

| | |
|---|---|
| 土師器 | 坏×皿 |
| 瓦器 | 椀c |
| 瓦質土器 | 火鉢AII群 |
| 瓦類 | 平瓦(近世～) |

S-132 19c中頃～

| | |
|---|---|
| 土師器 | 小皿a(ｲﾄ) 甕a? |
| 龍泉窯系青磁 | 椀;I-b×a(1) |
| 肥前系磁器 | 端反椀(染付) |
| 国産陶器 | 土瓶(鉄釉､白釉流し掛け) 小鉢(黄釉) 紅皿 |
| 白磁 | 椀;VI-b(1) |
| 中国陶器 | 鉢;I-2b(1) |
| 瓦類 | 平瓦(近世～) |
| 土製品 | 焼土塊(1) |

S-133 11c後半～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 小甕 壺 |
| 土師器 | 椀c 小皿(ﾍﾗ､ｲﾄ) |
| 瓦類 | 丸瓦(土師質､不明) |

S-134 18c～

| | |
|---|---|
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ) |
| 肥前系磁器 | 染付筒椀 |

## tab.224-4　大宰府条坊跡第224次調査　出土遺物一覧表（11）

S-136　11c後半～

| | |
|---|---|
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ)　小皿a(ﾍﾗ) |
| 越州窯系青磁 | 破片(1) |
| 白磁 | 椀;V-VIII(1) |

S-138　12c～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 破片 |
| 土師質土器 | 鍋A群 |

S-139　11c後半～

| | |
|---|---|
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ)　丸底坏a? |
| 白磁 | 椀;破片(1)　皿;II(1) |

S-141　12c後半～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 蓋3　甕 |
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ) |
| 白磁 | 椀;V-4b(1)　破片(1) |
| 瓦類 | 平瓦(須恵質、格子目D群)<br>平瓦(須恵質、縄目I群) |
| 石製品 | 石鍋 |

S-201　19c～

| | |
|---|---|
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ)　椀c |
| 肥前系磁器 | 染付皿(綱浜文) |
| 国産陶器 | 行平　土瓶 |
| 白磁 | 椀;V-1×VIII-2(1) |
| 瓦類 | 平瓦(近世以降) |

S-202　現代

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 供膳具 |
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ)　小皿a2　甕a |
| 龍泉窯系青磁 | 椀;II-a(1) |
| 肥前系磁器 | 染付筒茶椀 |
| 国産磁器 | ﾀｲﾙ　丸椀(近世～) |
| 瓦類 | 平瓦(近世～) |

S-203　現代

| | |
|---|---|
| 土師器 | 甕 |
| 瓦器 | 椀c |
| 肥前系磁器 | 小椀　丸椀(江戸～)　方皿　大皿 |
| 国産陶器 | 鉢　椀(飴釉)　灯明皿　灯明皿(黄釉)<br>器種不明(尖底形) |
| 国産磁器 | 丸椀　洋皿(近世～) |
| 瓦類 | 平瓦(瓦質、無文) |
| その他 | コンクリート |

S-208　現代

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 大坏c3 |

S-209　11c後半～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 鉢? |
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ)　甕×鍋 |

S-251　10c～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 甕 |
| 土師器 | 坏a(ﾍﾗ?)　椀c |
| 緑釉陶器 | 椀(防長産)　坏(京都産) |

S-252

| | |
|---|---|
| 土師器 | 皿c |

S-253　10c～

| | |
|---|---|
| 土師器 | 椀c　小皿a(ﾍﾗ?) |

S-254　13c後半～

| | |
|---|---|
| 土師器 | 小皿a(ｲﾄ) |
| 白磁 | 椀;破片(1)　皿;IX-2(1)　破片(1) |

S-301　16c前半～

| | |
|---|---|
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ)　小皿a(ｲﾄ) |
| 染付(輸入) | 明染皿(小野分類B群) |

S-302黒色土　13c後半～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 坏a2　甕 |
| 土師器 | 坏a(ﾍﾗ)　小皿a(ｲﾄ)　小皿c |
| 瓦器 | 椀 |
| 龍泉窯系青磁 | 椀;I-4(1)　II-b(3)　坏III-3b(1) |
| 須恵質土器 | 鉢(東播系) |
| 瓦質土器 | 擂鉢AIII群 |
| 国産陶器 | 甕(肥前系?) |
| 白磁 | 椀;V～VIII(1)　皿;V×VI(1)　IX(2)　IX-1b(1) |
| 中国陶器 | D2群(1)　A2群(1) |
| 瓦類 | 平瓦(土師質)　軒丸瓦(瓦質、巴文) |
| 土製品 | 焼土塊(2) |
| 石製品 | 砥石　石鍋B1群 |
| 金属製品 | 鉱滓(1) |

S-303　近世～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 蓋　甕 |
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ)　小皿a(ｲﾄ)　器台 |
| 瓦器 | 椀c |
| 越州窯系青磁 | 椀;III(1) |
| 須恵質土器 | 甕 |
| 瓦質土器 | 甕 |
| 瓦類 | 平瓦(近世～) |
| その他 | コンクリート |

S-304　12c～

| | |
|---|---|
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ) |
| 黒色土器B | 椀? |

S-305　13c後半～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 坏c3　甕 |
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ)　坏a(ｲﾄ、菊花文ｽﾀﾝﾌﾟ)　小皿a(ｲﾄ) |
| 瓦器 | 椀?　小皿a(ｲﾄ) |
| 龍泉窯系青磁 | 椀;I-4b(1) |
| 同安窯系青磁 | 椀;I-1b(1) |
| 須恵質土器 | 鉢II-2 |
| 国産陶器 | 甕(肥前系) |
| 白磁 | 椀;I-1b(1)×1(1)　I-2(1)　VIII-b(1)　破片(5)<br>皿;IV～VI(1)　I-2b(1)　破片(1) |
| 中国陶器 | A1群(1)　小盤I(1) |
| 瓦類 | 丸瓦(瓦質、F群) |
| 土製品 | 円盤状土製品(小皿の加工品)　焼土塊(1) |
| 石製品 | ﾁｬｰﾄ(原石) |
| 金属製品 | 鉱滓(椀形滓)(1) |

## tab.224-4　大宰府条坊跡第 224 次調査　出土遺物一覧表（12）

S-305 黒灰色粘質土　13c後半～

| | |
|---|---|
| 土師器 | 坏a(イト)　小皿a(イト) |
| 瓦器 | 椀 |
| 龍泉窯系青磁 | 椀;I |
| 瓦質土器 | 鉢AII群 |
| 白磁 | 椀;IV |
| 金属製品 | 鉱滓(椀形滓)(1) |

S-305黒色土　13c後半～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 供膳具 |
| 土師器 | 小皿a(イト) |

S-305 灰色砂質土　13c後半～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 甕　大甕 |
| 土師器 | 坏a(イト) |

S-306　13c～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 坏×皿　大甕 |
| 土師器 | 坏a(イト)　小皿a(イト) |
| 瓦質土器 | 火舎 |
| 国産陶器 | 甕(産地不明) |
| 中国陶器 | 鉢;I(1) |
| 瓦類 | 軒平瓦(瓦質、連続巴文) |

S-307　12c～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 蓋3×4 |
| 土師器 | 坏a(イト)　小皿a(イト) |
| 越州窯系青磁 | 椀;I |

S-308　12c～

| | |
|---|---|
| 土師器 | 坏a(イト)　小皿a(イト)　甕? |
| 瓦類 | 平瓦(瓦質?) |

S-309　11c後半～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 壺 |
| 土師器 | 坏a　小皿a(イト) |

S-310黒灰色土　12c中頃～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 蓋3　小甕a　大甕 |
| 土師器 | 坏a(ヘラ、イト)　坏a(イト、赤色顔料付着)　小皿a(イト) |
| 製塩土器 | 壺I |
| 黒色土器A | 椀? |
| 瓦器 | 椀 |
| 同安窯系青磁 | 椀;破片(1) |
| 須恵質土器 | 鉢(産地不明)　鉢(東播系II-2) |
| 緑釉陶器 | 皿c(近江系)(1)　皿c(防長産)(1) |
| 白磁 | 椀;IV(2)　V(3)　V－c(1)　破片(3)　皿;II(1)<br>VI～VIII(1)　破片(1)　耳壺III(2)　破片(5) |
| 中国陶器 | C1群(1) |
| 須恵器(輸入) | 朝鮮系無釉陶器;甕　壺(3) |
| 瓦類 | 平瓦(須恵質、格子目D-1群)<br>平瓦(土師質、正格子目)<br>平瓦(須恵質、刷毛手)　丸瓦(瓦質、無文) |
| 石製品 | 石皿状滑石製品 |

S-310 黒色土　12c中頃～(※近世陶器は混入の可能性あり)

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 蓋3　蓋c1　小坏3　甕　大甕　鉢a |
| 土師器 | 坏a(イト)　椀c　小皿a(イト)　甕a |
| 黒色土器A | 椀c |
| 瓦器 | 椀c |
| 須恵質土器 | 鉢II-2 |
| 国産陶器 | 甕(高取系)　甕(常滑系) |
| 白磁 | 椀;I(1)　IV(4)　IV-1a(2)　V-4(1)　V-a(1)<br>V-4×VIII-3(3)　VIII(1)•破片(4)<br>皿;VI-1(1)　椀×皿(1) |
| 青白磁 | 合子身(1)　破片(4) |
| 中国陶器 | C1群(1)　B群(2)　A1群(1) |
| 瓦類 | 平瓦(瓦質、縄目)　平瓦(須恵質、格子目D群)<br>平瓦(須恵質、格子目B群)　丸瓦(須恵質、無文) |
| 石製品 | 脚状土製品 |
| 金属製品 | 鉄塊系遺物(1) |

S-310 黒色粘質土　12c中頃～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 坏　坏a2　坏c4　甕　大甕 |
| 土師器 | 坏a(ヘラ、イト)　椀c　小皿a(ヘラ)　甕a　甕b　甕把手 |
| 瓦器 | 椀 |
| 越州窯系青磁 | 椀;I-2(1) |
| 龍泉窯系青磁 | 椀;破片(1) |
| 須恵質土器 | 甕　鉢II-2 |
| 緑釉陶器 | 小坏(東海産)　坏(東海産)　椀(防長産)<br>椀×皿(防長産)•破片(京都産)　破片(防長産) |
| 白磁 | 椀;II(1)　IV(2)　V(1)　VI-1b(1)　VIII(1)　破片(3)<br>破片(1) |
| 中国陶器 | C1群(1)　盤I-1 |
| 瓦類 | 平瓦(混入か?)(近世～)　平瓦(瓦質、無文)<br>平瓦(須恵質、格子目D群)•平瓦(瓦質、縄目I群)<br>平瓦(瓦質、斜格子目)　平瓦(土師質、無文) |
| 金属製品 | 鉱滓(椀形滓)(1) |

S-311　11c後半～

| | |
|---|---|
| 土師器 | 坏a(イト) |

S-312　13c～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 甕 |
| 土師器 | 坏a(イト)　小皿a(イト) |
| 白磁 | 破片(1) |
| 土製品 | 焼土塊(1) |

S-313　13c～

| | |
|---|---|
| 土師器 | 蓋×鉢　坏a(イト)　小皿a(イト) |
| 龍泉窯系青磁 | 椀;I-2(1) |
| 中国陶器 | 盤I(3)　盤I-2b(1) |

S-314　12c～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 坏　甕 |
| 土師器 | 坏a(イト)　小皿a(イト)　甕a |
| 瓦器 | 破片 |

S-316　13c～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 坏　甕 |
| 土師器 | 小皿a(イト) |
| 瓦器 | 破片 |
| 白磁 | 椀;V-1×VIII-2(1)　VIII(1) |

## tab.224-4　大宰府条坊跡第 224 次調査　出土遺物一覧表（13）

S-317　13c～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 小甕 |
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ)　小皿a(ｲﾄ)　甕b　甕×鍋 |
| 龍泉窯系青磁 | 椀;I(1) |
| 瓦類 | 平瓦(須恵質、格子目D群) |

S-318　11c後半～

| | |
|---|---|
| 土師器 | 椀c　小皿a(ｲﾄ) |

S-319　11c後半～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 甕　鉢b? |
| 土師器 | 蓋3　坏a(ｲﾄ､ﾍﾗ)　椀c |
| 白磁 | 椀;破片(2)　破片(1) |
| 瓦類 | 平瓦(須恵質、無文) |

S-321　11c後半～

| | |
|---|---|
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ)　小皿a |
| 黒色土器A | 椀c |
| 瓦器 | 椀 |
| 瓦類 | 平瓦(瓦質、正格子目) |

S-322　11c後半～

| | |
|---|---|
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ) |
| 青磁(未分類) | 椀(高麗?)(1) |
| 李朝 | 椀(雑釉)(1) |

S-323　13c～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 蓋c(墨書)　高坏　小甕　壺e |
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ)　椀c　小皿a(ｲﾄ) |
| 龍泉窯系青磁 | 椀;I-4(1)　破片(1) |
| 同安窯系青磁 | 椀;I(1)　I-1c(1) |
| 白磁 | 椀;V-4c(1)　V～VIII(1)　破片(1)<br>破片(1) |
| 土製品 | 焼土塊(1) |
| 石製品 | 砥石(泥岩製) |

S-324　12c後半～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 甕　壺a×b |
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ)　大坏a(ｲﾄ)　小皿a(ｲﾄ)　脚付大皿 |
| 黒色土器B | 椀 |
| 白磁 | 皿;VI(1) |
| 中国陶器 | 盤(2) |
| 土製品 | 焼土塊(1) |

S-325　近世

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 壺e～f |
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ､ﾍﾗ)　小皿a(ｲﾄ)　甕a |
| 黒色土器A | 鉢(未分類) |
| 瓦類 | 平瓦(近世～) |

S-326　13c～(※近世瓦は混入の可能性あり)

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 壺a×b　壺d |
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ)　小皿a(ｲﾄ)　皿c　甕 |
| 黒色土器B | 椀 |
| 龍泉窯系青磁 | 椀;破片(1)　皿;破片(1) |
| 同安窯系青磁 | 椀;I-1c(1) |
| 国産陶器 | 甕(常滑系)(3) |
| 白磁 | 椀;V-4(1)　破片(3)･(白磁×同安窯系青磁)(1)<br>皿;破片(1)　破片(1) |
| 中国陶器 | 耳壺V～VIII(1)　盤(2)　C1群(1)　B群(1)　甕(1) |
| 瓦類 | 平瓦(近世～)　平瓦(瓦質、縄目) |

S-327　近現代

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 甕 |
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ)　坏d　椀c |
| 龍泉窯系青磁 | 椀;II-b(1) |
| 瓦類 | 平瓦(近世～) |
| その他 | コンクリート |

S-328　現代～

| | |
|---|---|
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ) |
| 瓦器 | 椀c |
| 土師質土器 | 七鉢(白色系) |
| 肥前系磁器 | 丸椀 |
| 国産陶器 | 植木鉢(高取系) |
| 白磁 | 椀;V-4×VIII-3(1) |
| 瓦類 | 平瓦(近世～)　平瓦(ｺﾝｸﾘｰﾄ)　丸瓦(近世～)<br>サン瓦 |

S-329　近世～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 蓋1　皿a2　甕 |
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ)　椀c　小皿a(ｲﾄ)　甕×鉢 |
| 黒色土器A | 椀? |
| 龍泉窯系青磁 | 椀;I(1)　I-4(1)　I-1c(1) |
| 肥前系磁器 | 丸椀(染付) |
| 白磁 | 椀;V～VIII(1) |
| 瓦類 | 平瓦(須恵質、斜格子目D群)　平瓦(近世～) |
| 石製品 | 平玉石(黒)(1) |

S-331　11c後半～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 蓋4 |
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ) |
| 同安窯系青磁 | 椀;I(1) |

S-332　11c～

| | |
|---|---|
| 土師器 | 坏a(ﾍﾗ) |

S-333　11c後半～

| | |
|---|---|
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ､ﾍﾗ)　甕a |

S-334

| | |
|---|---|
| 土師器 | 坏a?(ｲﾄ) |

S-336　12c～

| | |
|---|---|
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ) |
| 土製品 | 焼土塊(1) |
| 石製品 | 石鍋B-3群(森田分類) |

S-337　13c後半～

| | |
|---|---|
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ)　小皿a(ｲﾄ) |
| 黒色土器B | 椀? |
| 同安窯系青磁 | 皿;I-2b(1) |
| 瓦質土器 | 甕 |
| 国産陶器 | 大甕(常滑系)　土瓶 |
| 白磁 | 椀;破片(3)耳壺III(1) |
| 中国陶器 | 鉢;III(1)　盤(4)　盤I-2(2) |
| 瓦類 | 平瓦(須恵質、掻き目) |
| 土製品 | 焼土塊(1) |

## tab.224-4　大宰府条坊跡第 224 次調査　出土遺物一覧表（14）

S-338　現代

| | |
|---|---|
| 土師器 | 坏a(イト) 椀c 小皿a(イト) |
| 黒色土器A | 椀? |
| 土師質土器 | 鍋×鉢 |
| 龍泉窯系青磁 | 椀;II-b(1) 小椀I(1) 小椀III(1) |
| 白磁 | 椀;破片(1) |
| 瓦類 | 平瓦(近世〜) 平瓦(近代〜) |

S-339　11c後半〜

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 坏a2 甕 |
| 土師器 | 坏a(イト) 甕a 甕b |
| 黒色土器A | 椀 |
| 土師質土器 | 鍋×鉢 |
| 緑釉陶器 | 皿(防長産)(1) |
| 灰釉陶器 | 壺?(1) |
| 瓦類 | 平瓦(須恵質、縄目1) |

S-341　12c〜(※国産磁器は混入の可能性あり)

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 坏c1 坏c3 甕 壺d |
| 土師器 | 坏a(イト、ヘラ) 椀c 甕a 大皿a |
| 黒色土器A | 椀c |
| 瓦器 | 椀c |
| 龍泉窯系青磁 | 椀;I(1) I-2(1) 皿;I(1) |
| 同安窯系青磁 | 椀;I-1a(2) I-1b(1) I-1c(1)<br>皿;I-1b(1) I-2b(1) |
| 須恵質土器 | 甕(産地不明) |
| 瓦質土器 | 甕 |
| 国産磁器 | 鉢×徳利 |
| 白磁 | 椀;VIII(1) IV(1) V〜VIII(2) V(1)<br>V-2×VI〜VIII-4(1) •V-4×VIII-3(2)<br>V-1×VIII-2(1) 破片(2) 皿;VI(1) |
| 中国陶器 | 壺;破片(1) 鉢;I-2(1) 甕;破片(4)<br>D2群(1) 耳壺V〜VIII(1) 小盤I-2(1) |
| 瓦類 | 平瓦(瓦質) 平瓦(土師質、縄目1) |
| 石製品 | すり石×打具(1) |
| 金属製品 | 鉄釘 |

S-342　縄文後期〜

| | |
|---|---|
| 縄文土器 | 粗製深鉢(1) |

S-343　11c後半〜

| | |
|---|---|
| 土師器 | 坏a(イト) |

S-344　11c後半〜

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 壺e? |
| 土師器 | 破片? |
| 白磁 | 椀;V-VIII(1) |
| 縄文土器 | 粗製深鉢(3) |

S-402　13c〜

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 甕 |
| 土師器 | 坏a(イト) |
| 龍泉窯系青磁 | 椀;I-2b(1) |
| 白磁 | 耳壺III(1) |

S-402 淡茶灰色土　13c〜

| | |
|---|---|
| 中国陶器 | B群(1) |

S-402 暗茶色土　13c〜

| | |
|---|---|
| 須恵器 | ハソウ |
| 土師器 | 坏a |
| 白磁 | 椀;破片(1) |
| 瓦類 | 平瓦(瓦質、縄目1) |

S-403 灰色土　12c前半〜

| | |
|---|---|
| 土師器 | 坏a(イト) 椀c |
| 同安窯系青磁 | 破片(1) |
| 灰釉陶器 | 壺 |

S-403 暗茶色粘　12c前半〜

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 蓋c 坏 坏c 甕 大甕 壺 鉢a |
| 土師器 | 坏a(イト、ヘラ) 椀c 小皿a(イト、ヘラ) |
| 黒色土器B | 椀 |
| 瓦器 | 椀 |
| 龍泉窯系青磁 | 椀;破片(1) |
| 土師質土器 | 鉢 |
| 須恵質土器 | 甕 |
| 灰釉陶器 | 壺(1) |
| 肥前系磁器 | 染付;椀×皿 |
| 国産陶器 | 甕(常滑系) |
| 白磁 | 椀;IV(1) V-4b(1) VIII(1) VIII-2(2)<br>皿;III-1(1) |
| 中国陶器 | 壺×耳壺×水注C1群(1) |
| 瓦類 | 平瓦(須恵質、格子目D群) |
| 金属製品 | 鉄塊系遺物(1) 鉱滓(椀形滓)(1) |
| 土製品 | 瓦玉(2) |

S-403 茶灰色砂　12c前半〜

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 甕 |
| 土師器 | 坏a(イト、ヘラ) |
| 白磁 | 椀;V-4×VIII-3(1) |

S-403 灰色砂　12c前半〜

| | |
|---|---|
| 土師器 | 坏a(イト) |

S-404 淡茶灰色土　12c前半〜

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 坏c3 甕 |
| 土師器 | 坏a(イト) 小皿a(ヘラ、イト) 小皿a(穿穴) |
| 黒色土器B | 椀 |
| 土師質土器 | 鉢 鉢×鍋 |
| 国産陶器 | 壺(備前系) 壺(1) |
| 白磁 | 椀;破片(1) 破片(1) |
| 土製品 | 棒状土製品(1) |

S-404 茶灰色土　12c前半〜

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 小甕 |
| 土師器 | 坏a(イト) |
| 緑釉陶器 | 椀×皿(防長系) 破片(防長系)(1) |
| 白磁 | 椀;IV(1) V-VIII(1) 破片(1) |
| 瓦類 | 丸瓦(須恵質、二重格子目F群) 平瓦(須恵質、斜格子目D群)•平瓦(須恵質、無文) |
| 石製品 | すり石 and-f(1) |

S-404 茶灰色砂　12c前半〜

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 壺e |
| 土師器 | 坏a(ヘラ、イト) 小皿a(ヘラ) |
| 国産陶器 | 壺?(常滑系) 甕(1) |
| 瓦類 | 丸瓦(須恵質、斜格子目D群) |

## tab.224-4　大宰府条坊跡第 224 次調査　出土遺物一覧表（15）

S-404 灰茶色砂　12c前半〜

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 坏c3　甕　鉢 |
| 土師器 | 坏a(ヘラ、イト)　小皿a(ヘラ、イト) |
| 黒色土器A | 椀c |
| 土師質土器 | 鉢 |
| 緑釉陶器 | 椀×皿(洛北系) |
| 瓦類 | 丸瓦(須恵質、縄目1) |

S-404 灰色砂　12c前半〜

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 坏c3　甕　壺　壺f? |
| 土師器 | 坏a(ヘラ、イト)　小皿a(イト)　甕? |
| 黒色土器B | 椀c |
| 瓦器 | 椀c |
| 土師質土器 | 鉢? |
| 緑釉陶器 | 椀(近江産)(1)　皿c(防長産)(1) |
| 国産陶器 | 壺(1)　壺?(備前系) |
| 白磁 | 椀;IV(1)　IV-1a(1)　破片(1) |
| 中国陶器 | 耳壺C1群(1)　B群(2) |
| 石製品 | 砥石 |
| 土製品 | 瓦玉(1) |

S-404 暗灰色土　12c前半〜

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 甕 |
| 土師器 | 坏a(イト) |
| 須恵質土器 | 大甕(産地不明) |
| 瓦質土器 | 破片(1) |
| 緑釉陶器 | 椀(洛北産)　椀(京都産) |
| 灰釉陶器 | 壺(東海産)　壺(1) |
| 中国陶器 | 壺×耳壺C1群(1) |
| 瓦類 | 平瓦(須恵質、格子目D群) |
| 金属製品 | 鉄塊系遺物(1)　鉱滓(椀形滓)(1) |
| 土製品 | 瓦玉(2) |

S-406　13c〜

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 甕 |
| 土師器 | 坏a(イト)　小皿(イト) |
| 白磁 | 椀;破片(2) |
| 中国陶器 | 盤I-2(1)　D2群(1)　C群(1) |

S-407　11c後半〜

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 坏? |
| 土師器 | 坏a(イト) |
| 白磁 | 椀;V-4(1) |

S-408　11c後半〜

| | |
|---|---|
| 土師器 | 坏a(イト)　椀　小皿a(ヘラ、イト) |
| 白磁 | 椀;V-a(1) |

S-409　11c後半〜

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 甕 |
| 土師器 | 坏a(ヘラ、イト)• |
| 瓦器 | 椀c |
| 須恵質土器 | 甕(産地不明) |
| 須恵器(輸入) | 朝鮮系無釉陶器壺 |
| 土製品 | 焼土塊(1) |

S-413　8c後半〜

| | |
|---|---|
| 土師器 | 坏×皿(ヘラ、墨書)　甕? |
| 土師質土器 | 鉢? |
| 縄文土器 | 破片 |

灰色土　近現代

| | |
|---|---|
| 越州窯系青磁 | 椀;I(1) |
| 龍泉窯系青磁 | 椀;I(4)　I-1(3)　I-1a　I-1c　I-2(2)　I-4　II-a(3)<br>II-V(4)　III(3)　坏III |
| 同安窯系青磁 | 椀;I-1c　III　破片(1)　皿;I　I-1a(2)　I-1b |
| 灰釉陶器 | 皿(東海産)(1) |
| 白磁 | 椀;IV(2)　IV-1a　V　V-4(3)　V-4b(2)<br>V〜VIII(2)　V-4×VIII-3(3)•破片(5)<br>皿;破片(1)　耳壺III(2) |
| 中国陶器 | 壺×耳壺×水注B群(2)　壺×耳壺×水注D3群<br>盤I-1(2) |

1区 灰色土　近現代

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 蓋?　蓋c　坏c2×3小甕　甕　大甕　壺b　壺d<br>壺a×b×鉢 |
| 土師器 | 坏a(墨書)　坏a(イト)　坏a(ヘラ、イト)　坏a(墨書、<br>絵画)　•丸底坏a(2次被熱)　椀c　椀c(外来系)<br>小皿a(イト)　小皿a(ヘラ、イト)　•小皿b(イト)　大皿c |
| 瓦器 | 椀 |
| 龍泉窯系青磁 | 椀;I(3)　I-1　I-2(2)　II-b(5)　III-1c　VIII<br>破片(3) |
| 同案窯系青磁 | 皿;I-1a(2)　破片(1) |
| 土師質土器 | 足鍋　大甕(近世)　風炉×香炉(近世〜)　焙烙<br>七鉢ｻﾝ　七鉢 |
| 須恵質土器 | 甕　甕(飴釉)　大甕　鉢(東播系)　擂鉢(東播系) |
| 瓦質土器 | 風炉(近世以降)　筒状容器　甕(中世)<br>瓶?(近世)　•火鉢×風炉(近世〜)<br>火鉢(近世〜)　鍋D-3c |
| 緑釉陶器 | 皿c(京都産)　椀(防長産)　椀c<br>椀×皿(防長産) |
| 肥前系陶磁器 | 小坏　丸椀　蓋茶椀　端反椀方皿　変形方皿<br>蓋茶椀皿　小鉢　鉢　鉢(青磁染付「ｺﾒ長」)<br>小徳利　徳利 |
| 国産陶器 | 土瓶蓋(鉄釉)　土瓶蓋(山水、墨書)<br>土瓶蓋(粉引、鉄絵)<br>小坏　椀　椀(唐津系)(2)　皿(唐津系)<br>皿(なまこ釉)　甕(3)　甕(常滑系)(2)　大甕<br>大甕(常滑系?)　大甕(飴釉)　甕(常滑系)　壺<br>壺(黄釉、近世)鉢(黄釉、近世)三彩鉢(唐津系)<br>擂鉢　擂鉢口2　植木鉢(褐釉)擂鉢底3<br>火鉢?　火鉢ｻﾝ?　瓶(粉引、鉄絵)　瓶×壺<br>土瓶(京風焼)　土瓶(山水)　土瓶(鉄釉)<br>三彩土瓶　行平　行平把手　徳利　竹徳利 |
| 国産磁器 | 小坏　燭台 |
| 白磁 | 椀;IV　V　V-4　V-4b(2)　V-a　V-VIII　VIII<br>破片(6)　皿;III　IX　IX-1a　破片(1)<br>小椀　耳壺III(2)　破片(1) |
| 青白磁 | 椀(1)　合子蓋 |
| 染付(輸入) | 皿?(明染) |
| 中国陶器 | 盤(2)　盤I　B群　盤I-1(2)　盤I×II<br>壺×耳壺×水注B群 |
| 土製品 | 瓦玉(1)　焼土塊(2)　棒状土製品(1)　土玉(1) |
| 瓦類 | 丸瓦(近世以降)　平瓦(須恵質、格子目F群)(2)<br>平瓦(須恵質、格子目D群)(2)　道具瓦(近世〜)<br>道具瓦(近世以降、「松島印」)　軒丸瓦(巴文)<br>のし瓦(近世以降)•ｻﾝ瓦　破片 |
| 石製品 | 滑石製石鍋　ob-f(1)　砥石?　石臼　石鍋<br>硯(四葉形、小形品) |
| 金属製品 | 鉄塊系遺物(1) |
| その他 | ｺｶｺｰﾗ瓶 |

## tab.224-4　大宰府条坊跡第 224 次調査　出土遺物一覧表（16）

1区 灰黒色土　近世～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 蓋3　甕 |
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ) |
| 瓦器 | 椀 |
| 龍泉窯系青磁 | 椀;II-b　破片(1) |
| 同案窯系青磁 | 椀;I-1c　III　皿;I-2b(2) |
| 須恵質土器 | 鉢 |
| 肥前系陶磁器 | 丸椀(染付) |
| 白磁 | 椀;破片(2) |
| 中国陶器 | 小盤I-2　A1群 |
| 瓦類 | 平瓦(近世以降) |
| 石製品 | 滑石製不明加工品 |

1区 茶灰色土　近代～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 蓋3　蓋c　坏　坏c3　坏×皿　甕　中甕a　大甕<br>壺 |
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ)　坏a(ﾍﾗ､ｲﾄ)　坏a×小皿a(ﾍﾗ)　椀c<br>小皿a(ｲﾄ)　小皿a2甑把手 |
| 黒色土器A | 椀　供膳具 |
| 瓦器 | 椀c |
| 越州窯系青磁 | 椀;I(2)　I-2bｨ　II-1b　破片(1) |
| 龍泉窯系青磁 | 椀;I-1(2)　I-2(3)　I-4(3)　II-a(4)　I-2(8)<br>II-b(5)　II-c　IV　V　皿;I　I-1b<br>坏III-3b　破片(2) |
| 同案窯系青磁 | 椀;I　I-1　I-1b(3)　III-1　III-1a　III-1c(2)<br>破片(2)　皿;I(3)　I-1b　I-2b |
| 土師質土器 | 鉢?　鍋A群 |
| 須恵質土器 | 擂鉢(東播系)　鉢　甕(常滑系) |
| 瓦質土器 | 火鉢E　釜　鉢 |
| 緑釉陶器 | 破片　破片(京都産) |
| 灰釉陶器 | 椀　壺 |
| 国産陶器 | 甕　甕(常滑系)　甕(東海系)　甕(鉄釉､近世～)<br>擂鉢(近世～)・皿(灰釉､近世～)<br>丸椀(灰釉､近世～)　皿 |
| 国産磁器 | 皿×椀 |
| 白磁 | 椀;I　II　II-4b　IV(8)　IV-1a(2)　V(2)　V-4(2)<br>V-4×VIII-3(4)　V-c　V-VIII(4)　VIII(2)<br>白磁×同安窯系青磁　破片(23)<br>皿;I　III　III-1　VI-1a　VIII　VIII-2b　IX-1a<br>破片(2)　小壺蓋　耳壺III(4)　水注II(2)　破片(4) |
| 青白磁 | 壺III(3)　合子蓋　壺 |
| 中国陶器 | 壺;破片(3)　鉢;I(3)　I-2　盤I-2b<br>B群(6)　壺×耳壺B群(3)　C2群　盤C1群<br>C1群(4)　A1群　盤1　•壺×耳壺×水注B群(3) |
| 須恵器(輸入) | 朝鮮系無釉陶器壺 |
| 土製品 | 柱状土製品　土壁(5)　鞴羽口　焼土塊(6)<br>土鈴(1) |
| 瓦類 | 平瓦(須恵質､格子目D群)　平瓦(近世～)<br>平瓦(鉄釉)・平瓦(須恵質､格子目A群)<br>丸瓦(須恵質､格子目D群)・丸瓦(瓦質､近世～)<br>軒平瓦(唐津､近世～) |
| 石製品 | 平玉石(白)　平玉石(黒)(3)　石鍋　ob-f(2)<br>用途不明滑石製品(2) |
| 金属製品 | 鉄製品(洋ばさみ)　鉄塊系遺物(1)　銅銭(1) |

1区 黒色土(S-30か)

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 坏c3 |
| 龍泉窯系青磁 | 椀;I　I-2 |
| 白磁 | 破片(1) |
| 土製品 | 焼土塊(1) |
| 石製品 | 砥石(泥岩) |

2区 灰色土　近現代

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 坏c3 |
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ)　小皿a(ｲﾄ) |
| 瓦器 | 椀c |
| 肥前系陶磁器 | 端反椀　蓋茶椀　筒茶椀　筒茶椀(色絵)　鉢 |
| 国産陶器 | 壺×土瓶　土瓶×行平瓦 |
| 瓦類 | 丸瓦(土師質､無文) |
| 金属製品 | はかり　おもり |

3区 灰色土　近現代

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 坏　坏c1　坏c2×3　小甕　甕 |
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ)　坏a?(ｲﾄ)　椀c　小皿a(ｲﾄ)<br>小皿a(ﾍﾗ､ｲﾄ)　甕　盤? |
| 黒色土器B | 椀c |
| 龍泉窯系青磁 | 椀;I-1 |
| 須恵質土器 | 鉢(東播系)　擂鉢(東播系) |
| 緑釉陶器 | 椀(近江産)　椀c(東海産) |
| 肥前系磁器 | 仏飯具　方皿(ﾍﾞﾛ藍)　椀　小椀(口紅)<br>小椀(赤絵) |
| 国産陶器 | 椀(唐津系)　土瓶(白釉褐彩) |
| 国産磁器 | 丸椀(京焼風) |
| 白磁 | 椀;IV(2)　V　破片(2)　皿;XI-1b |
| 中国陶器 | 甕;破片(1) |
| 土製品 | 焼土塊(1) |
| 瓦類 | 平瓦(近世)　平瓦(須恵質､縄目)　平瓦(須恵質､<br>格子目D群)・平瓦(須恵質､格子目A群)<br>平瓦(須恵質､格子目F群)・丸瓦(瓦質､無文) |
| 石製品 | 滑石製権 |
| 金属製品 | 鉱滓(1) |
| その他 | ｶﾞﾗｽ |

3区 茶灰色土

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 蓋3　坏　坏a2　坏c3　小甕　甕　壺 |
| 土師器 | 坏a(ｲﾄ)　大坏c×大皿c　椀c　小皿a(ｲﾄ)<br>小皿a(ｲﾄ､赤色顔料付着) |
| 黒色土器A | 椀 |
| 瓦器 | 椀 |
| 越州窯系青磁 | 椀;III-1　破片(1) |
| 龍泉窯系青磁 | 椀;I-1(2)　I-2(4)　II-b(2)　皿;I-2(2)　坏III-4 |
| 同安窯系青磁 | 椀;I-1(2)　I-1c(2)　III-1b　皿;I-2b |
| 土師質土器 | 七輪?　鍋A |
| 須恵質土器 | 鉢(東播系)　鉢(東播系､森田II-2)<br>鉢(東播系III-1) |
| 瓦質土器 | 筒型胴器　甕 |
| 灰釉陶器 | 瓶? |
| 肥前系陶磁器 | 皿(銅版手)　皿×鉢(凹型蛇ノ目高台)<br>椀?(ｺﾝﾆｬｸ版)　端版椀 |
| 国産陶器 | 皿×椀　甕(常滑系)　甕　壺×瓶<br>椀×皿(蛇ノ目釉剥ぎ)　椀 |
| 白磁 | 椀;IV　IV-1a　V-4×VIII-3(2)　V-VIII(3)<br>破片(7)　皿;IV-2a　IX-1a |
| 中国陶器 | 壺;破片(1)<br>盤1　B群　C1群　壺×耳壺C1群 |
| 須恵器(輸入) | 朝鮮系無釉陶器壺 |
| 土製品 | 焼土塊　柱状土製品　円盤状土製品 |
| 瓦類 | 平瓦(近世以降)　平瓦(瓦質､縄目)<br>平瓦(瓦質､格子目)　•平瓦(土師質､縄目)<br>丸瓦(須恵質､格子目A群)　ｾﾒﾝﾄ瓦 |
| 石製品 | 砥石(緑色変岩) |
| その他 | ｺﾝｸﾘｰﾄ　土管　ﾚﾝｶﾞ |

## tab.224-4　大宰府条坊跡第 224 次調査　出土遺物一覧表（17）

3区 暗灰色土　12c～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 坏 甕 |
| 土師器 | 坏a(イト) 坏a(ヘラ、VI期～) 椀c 小皿a(イト) 甕? |
| 瓦器 | 椀 |
| 須恵質土器 | 甕 |
| 白磁 | 椀;V-a 破片(2) |
| 中国陶器 | 壺;破片(2) 壺×耳壺×水注B群 |
| 瓦類 | 破片(須恵質、無文) |

3区 黄灰橙色土　19c中頃～

| | |
|---|---|
| 同安窯系青磁 | 椀;III-1 |
| 肥前系陶磁器 | 小皿 |
| 国産陶器 | 擂鉢(口2、底3) |

3区 茶色土(S-50茶　12c～

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 甕 |
| 土師器 | 坏a(イト) 小皿a(イト) |
| 瓦器 | 椀c |
| 白磁 | 椀;V-4×VIII-3 破片(1) 皿;VI-2b |
| 中国陶器 | 壺×耳壺B群 |
| 瓦類 | 丸瓦(土師質、無文) |

3区 黒色粘質土(S-　12c～

| | |
|---|---|
| 土師器 | 坏a(イト) 坏c×椀c 丸底坏a 小皿a(イト) |

4区 灰色土　近現代

| | |
|---|---|
| 須恵器 | 坏 坏c2 高坏b 皿a 小甕 甕 |
| 土師器 | 坏a(2次被熱) 坏a(イト) 椀(外来系?) 椀c 小皿a(イト、ヘラ) |
| 須恵質土器 | 甕 鉢(森田I期) |
| 国産陶器 | 椀(唐津系) 椀?(黄釉) 鉢(鉄釉) |
| 国産磁器 | 破片 |
| 土製品 | 鞴羽口(1) |
| 瓦類 | 平瓦?(近世以降) 丸瓦(近世以降) 道具瓦?(近世以降) |

5区 灰色土　近現代

| | |
|---|---|
| 土師器 | 坏a×小皿a(イト) |
| 肥前系陶磁器 | 皿×坏(銅版手) |

# 写　真　図　版

224SD050 茶灰色砂質土獣骨出土状況（上が南）

## 条坊 217 次調査

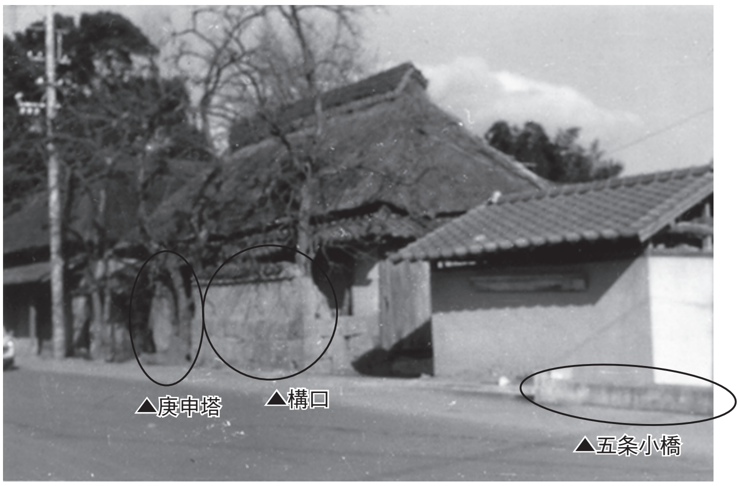
pla1　第 217 次調査区より五条交差点を望む（南から）

pla2　道路部分全景（南西から）

pla3　SD048 土層観察（中央が SD048、左は SD045、右は SD050。南から）

pla4　SX038・039・040 検出状況（北東から）

pla5　SX038・039・040 検出状況（北西より）




pla6　昭和 30 年代の庚申塔・五条構口（南西から撮影、吉塚太喜雄氏所蔵）

pla7　五条庚申塔全体写真（調査当時状況、北から）

pla8　文明 18 年板碑（庚申塔左脇、北から）

pla9　文明 18 年板碑 採拓状況（北から）

pla10　1,2 区全景（上が北）

pla11　1 区北側完掘時全景（南から）

pla12　1 区南側茶灰土全景（南から）


pla13　３区全景（上が北）


pla14　３区全景（上が北）


pla15　４区全景（北から）

pla16　５区全景（北から）

pla17　224SD050 黒灰色粘質土骨出土状況（東から）

pla18　224SD050 黒灰色粘質土人骨出土状況（東から）

## 報告書抄録

| | |
|---|---|
| ふりがな | だざいふじょうぼうあと |
| 書名 | 大宰府条坊跡 40 |
| 副書名 | 第 217・224 次調査 |
| シリーズ名 | 太宰府市の文化財 |
| シリーズ番号 | 107 集 |
| 編著者 | 井上信正　久味木理恵　山村信榮　柳 智子 |
| 編集機関 | 太宰府市教育委員会 |
| 所在地 | 福岡県太宰府市観世音寺 1 丁目 1 番 1 号 |
| 発行年月日 | 2009（平成 21）年 3 月 31 日 |
| | |

| ふりがな<br>所収遺跡名 | 条坊<br>【鏡山推定案】 | ふりがな<br>所在地 | コード | | 座標 | | 調査期間 | | 調査面積<br>$m^2$ | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 市町村 | 遺跡番号 | X | Y | 開始 | 終了 | | |
| だざいふじょうぼうあと<br>大宰府条坊跡　第 217 次 | 左郭 5 条 10 坊 | 太宰府市<br>五条 2 丁目 | 402214 | 210050-217 | 56620.0 | -43740.0 | 20010403 | 20010706 | 315.3 | 県道拡幅<br>マンション建設 |
| だざいふじょうぼうあと<br>大宰府条坊跡　第 224 次 | 左郭 4 条 10 坊 | 太宰府市<br>五条 2 丁目 | 402214 | 210050-224 | 56670.0 | -43746.0 | 20020911 | 20030530 | 162.9 | 県道拡幅 |

| 所収遺跡名 | 遺跡種別 | 時代 | 主要遺構 | 主要遺物 | 特記事項 | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 大宰府条坊跡　第 217 次 | 都城跡 | 奈良、平安<br>江戸 | 井戸、<br>土坑、溝、道路 | 土師器　須恵器<br>陶磁器　緑釉陶器　灰釉陶器 | 条坊痕跡 | 左郭 12 坊路（井上案） |
| 大宰府条坊跡　第 224 次 | 都城跡 | 平安、鎌倉<br>江戸 | 井戸、<br>土坑、溝、道路 | 土師器　須恵器　陶磁器　瓦<br>緑釉陶器・墨書土器・陶磁器 | 条坊痕跡 | 左郭 12 坊路（井上案） |

太宰府市の文化財　第 107 集

大宰府条坊跡 40

－第 217・224 次調査－

平成 21（2009）年3月

編集・発行　太宰府市教育委員会

〒 818-0101　太宰府市観世音寺 1 丁目 1 番 1 号

印刷　有限会社　システム・レコ

〒 813-0032　福岡市東区土井 1 丁目 11 番 21 号

３）大宰府条坊跡第 224 次調査 SD050 の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

今回の分析調査では、大宰府条坊跡第 224 次調査 SD050 で検出された平安時代末の溝埋没期の古環境復元を目的として、珪藻分析、花粉分析、寄生虫卵分析、植物珪酸体分析、種実分析を実施する。

１　試料

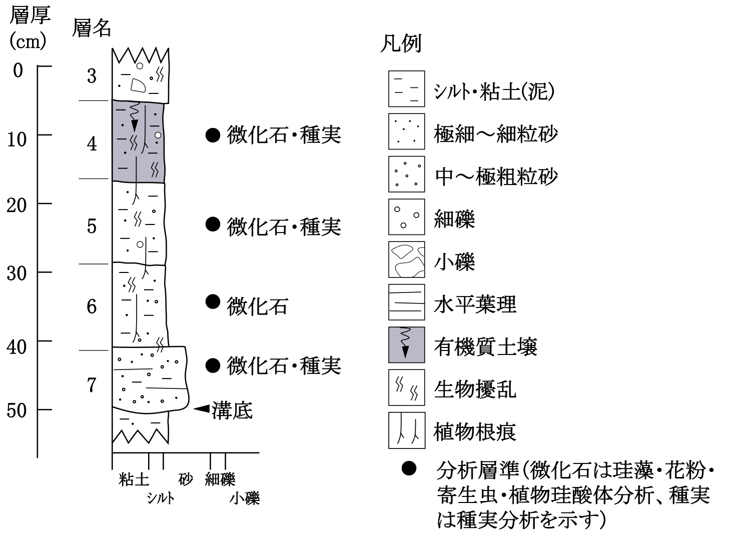


図1　調査地点の層序および分析層準

分析試料は、３区 SD050 溝埋土断面よりタッパウエアを利用して柱状に採取されている。

平安時代末の溝埋土は５層に区分されており、上位より２層～７層の層名が付されている。２層・３層は褐灰色を呈する細礫混じり砂質泥からなり、人為的に撹拌された堆積物からなる。４層は黒灰色を呈する著しく擾乱された砂質泥からなる。５層は暗灰色を呈する著しく擾乱された砂質泥からなる。６層は褐灰色を呈する著しく擾乱された泥質砂からなる。７層は葉理構造が認められる灰色を呈する泥・中粒砂混じり極細粒～細粒砂からなる。このような層相から、７層が溝機能期、６層以上が放置期ないし機能期に形成された堆積物と推定される。

分析は７層～４層について実施する。珪藻・花粉・寄生虫卵・植物珪酸体分析は全層準、種実分析は 4・5・7 層について実施する（図１）。

２　分析方法

（1）珪藻分析

試料を湿重で７g 前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法（4 時間放置）の順に物理・化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸 600 倍あるいは 1000 倍で行い、メカニカルステージでカバーガラスの任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に 200 個体以上同定・計数する(化石の少ない試料はこの限りではない）。種の同定は、原口ほか(1998)、Krammer(1992)、Krammer & Lange-Bertalot(1986,1988,1991a,1991b)、渡辺ほか（2005）、小林ほか(2006)などを参照し、分類基準は、Round ,Crawford & Mann(1990)に従う。なお、壊れた珪藻殻の計数基準は、柳沢(2000)に従う。

同定結果は、中心類(Centric diatoms;広義のコアミケイソウ綱 Coscinodiscophyceae)と羽状類(Pennate diatoms)に分け、羽状類は無縦溝羽状珪藻類(Araphid pennate diatoms:広義のオビケイソウ綱 Fragilariophyceae)と有縦溝羽状珪藻類(Raphid pennate diatoms;広義のクサリケイソウ綱 Bacillariophyceae)に分ける。また、有縦溝類は､単縦溝類、双縦溝類、管縦溝類、翼管縦溝類、短縦

溝類に細分する。

各種類の生態性については、Vos & de Wolf(1993)を参考とするほか、塩分濃度に対する区分はLowe(1974)に従い、真塩性種(海水生種)、中塩性種(汽水生種)、貧塩性種(淡水生種)に類別する。また、貧塩性種についてはさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度(pH)・流水に対する適応能についても示す。そして、産出個体数 100 個体以上の試料については、産出率 2.0%以上の主要な種類について、主要珪藻化石群集の層位分布図を作成する。また、産出化石が現地性か異地性かを判断する目安として、完形殻の出現率を求める。堆積環境の解析にあたり、海水生種(真塩性種)～汽水生種(中塩性種)については小杉(1988)、淡水生種(貧塩性種)については安藤(1990)、陸生珪藻については伊藤・堀内(1991)、汚濁耐性については渡辺ほか(2005)の環境指標種を参考とする。珪藻化石の生態性区分や環境指標種群の説明を表 1 に示す。

（２）花粉分析・寄生虫卵分析

分析は、金原・金原(1992)等を参考に処理を行った。堆積物 1cc あたり 10,000 個体以上検出される(金原・金原,1994)ような場合は、金原・金原(1992)と同様な方法で観察可能である。ただし、試料の状況や概査結果から寄生虫卵の数が少ないと判断されたことから、花粉分析に準じた手法を用いて寄生虫卵の濃集を行なう。

試料 10cc を正確に秤り取り、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液(臭化亜鉛，比重 2.3)よる有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物粒の溶解、アセトリシス(無水酢酸 9，濃硫酸 1 の混合液)処理によるセルロースの分解、の順に物理・化学的処理を施す。処理後の残渣を定容してから一部をとり、グリセリンで封入してプレパラートを作成する。今回の場合試料中の花粉化石含量と寄生虫卵含量が大きく異なっていたため、濃度を変えてプレパラートを作成し、同定を行う。分析残渣中の花粉化石量や寄生虫卵量を測定するため分析量や分析残渣量、プレパラート作成量などを精密に測定し、1cc あたりの含量が求められるようにする。

結果は同定・計数結果の一覧表、および花粉化石群集の分布図として表示する。木本花粉は木本花粉総数、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

（３）植物珪酸体分析

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法(ポリタングステン酸ナトリウム，比重 2.5)の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400 倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由来した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)を、近藤(2004)の分類に基づいて同定・計数する。分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量を正確に計量し、堆積物 1g あたりの植物珪酸体含量(同定した数を堆積物 1g あたりの個数に換算)を求める。結果は、植物珪酸体含量の一覧表と植物珪酸体含量の層位分布図として示す。その際、100 個/g 未満は「<100」で表示する。各分類群の含量密度値は 10 の位で丸める(100 単位にする)。

（４）種実遺体分析

試料 200cc を水に浸し、粒径 0.5mm の篩を通して水洗する。篩内の試料を粒径別にシャーレに集めて双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて同定可能な種実を抽出する。現生標本および石川

表1 珪藻化石の生態性区分と環境指標種群

| 塩分濃度に対する区分 Lowe(1974)による | | |
|---|---|---|
| 海水生種 | 強塩性種 | 塩分濃度40.0‰以上の高濃度海水域に生育する種 |
| | 真塩性種(海水生種) | 塩分濃度40.0～30.0‰に生育する種 |
| 汽水生種 | 中塩性種(汽水生種) | 塩分濃度30.0～0.5‰に生育する種 |
| 淡水生種 | 貧塩性種(淡水生種) | 塩分濃度0.5‰以下に生育する種 |
| 淡水生種の生態性区分 | | |
| 塩分 | 貧塩好塩性種 | 少量の塩分がある方が良く生育する種 |
| | 貧塩不定性種 | 少量の塩分があってもこれに良く耐えることができる種 |
| | 貧塩嫌塩性種 | 小量の塩分にも耐えることができない種 |
| | 広域塩性種 | 淡水～汽水域まで広い範囲の塩分濃度に適応できる種 |
| pH:Hustedt(1937-38)による | 真酸性種 | pH5.5以下の酸性水域に最適の出現域がある種 |
| | 好酸性種 | pH7.0以下の水域に主として出現する種 |
| | pH不定性種 | pH7.0付近の中性水域で最も良く生育する種 |
| | 好アルカリ性種 | pH7.0以上の水域に主として出現する種 |
| | 真アルカリ性種 | pH7.0以上の水域にのみ出現する種 |
| 流水:Hustedt(1937-38)による | 真止水性種 | 止水域にのみ生育する種 |
| | 好止水性種 | 止水域に特徴的であるが、流水域にも生育する種 |
| | 流水不定性種 | 止水域にも流水域にも普通に生育する種 |
| | 好流水性種 | 流水域に特徴的であるが、止水域にも生育する種 |
| | 真流水性種 | 流水域にのみ生育する種 |

| 主に海水域での指標種群(小杉,1988による) | |
|---|---|
| 外洋指標種群(A) | 塩分濃度が約35‰の外洋水中で浮遊生活するもの |
| 内湾指標種群(B) | 塩分濃度35～26‰の内湾水中で浮遊生活することからそのような環境を指標することのできる種群 |
| 海水藻場指標種群(C1) | 塩分濃度35～12‰の海域で海藻(草)に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群 |
| 汽水藻場指標種群(C2) | 塩分濃度12～4‰の汽水域で海藻(草)に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群 |
| 海水砂質干潟指標種群(D1) | 塩分濃度35～26‰の砂底の砂に付着生育することからそのような環境を指標することができる種群 |
| 汽水砂質干潟指標種群(D2) | 塩分濃度26～5‰の砂底の砂に付着生育することからそのような環境を指標することができる種群 |
| 海水泥質干潟指標種群(E1) | 30～12‰の閉鎖性の高い塩性湿地など泥底の泥に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群 |
| 汽水泥質干潟指標種群(E2) | 塩分濃度12～2‰の汽水化した塩性湿地などの泥に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群 |
| 淡水底生種群(F) | 2‰以下の淡水域の底質の砂、泥、水生植物などに付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群 |
| 淡水浮遊生種群(G) | 塩分濃度2‰以下の湖沼などの淡水域で浮遊生活することからそのような環境を指標することのできる種群 |
| 河口浮遊生種群(H) | 塩分濃度20～2‰の河口域で浮遊生活、あるいは付着生活することからそのような環境を指標することのできる種群 |
| **主に淡水域での指標種群**(安藤,1990による) | |
| 上流性河川指標種群(J) | 河川上流部の峡谷部に集中して出現することから上流部の環境を指標する可能性の大きい種群 |
| 中～下流性河川指標種群(K) | 河川中～下流部や河川沿いの河岸段丘、扇状地、自然堤防、後背湿地などに集中して出現することから、そのような環境を指標する可能性の大きい種群 |
| 最下流性河川指標種群(L) | 最下流部の三角州の部分に集中して出現することから、そのような環境を指標する可能性の大きい種群 |
| 湖沼浮遊性種群(M) | 水深が約1.5m以上ある湖沼で浮遊生活する種群で湖沼環境を指標する可能性の大きい種群 |
| 湖沼沼沢湿地指標種群(N) | 湖沼における浮遊生種としても沼沢湿地の付着生種としても優勢に出現することから、そのような環境を指標する可能性の大きい種群 |
| 沼沢湿地付着生種群(O) | 沼よりも浅く水深が1m前後で一面に水生植物が繁茂している沼沢や更に水深の浅い湿地で優勢な出現の見られることからそのような環境を指標する可能性の大きい種群 |
| 高層湿原指標種群(P) | ミズゴケを主体とした環境や泥炭が形成される環境に集中して出現することから、そのような環境を指標する可能性の大きい種群 |
| 陸域指標種群(Q) | 水中でなく、多少の湿り気のある土壌表面、岩の表面、コケなど常に大気に曝された好気的環境(陸域)に集中して生育することからそのような環境を指標する可能性の大きい種群 |
| **陸域での指標種群**(伊藤・堀内,1991による) | |
| 陸生珪藻A群(RA) | 陸生珪藻の中でも、分布がほぼ陸域に限られる耐乾性の高い種群 |
| 陸生珪藻B群(RB) | 陸生珪藻A群に随伴し、陸域にも水中にも生育する種群 |
| 未区分陸生珪藻(RI) | 陸生珪藻に相当すると考えられるが、乾湿に対する適応性の不明な種群 |

(1994)、中山ほか(2000)等の図鑑との対照から種実の種類と部位を同定し、個数を数えて表示する。

炭化材は、70℃24 時間乾燥後の重量(g)と最大径(㎜)を表示する。分析後は、種実を種類別に容器に入れ、70％程度のエタノール溶液で液浸し、保管する。

## ３　結果

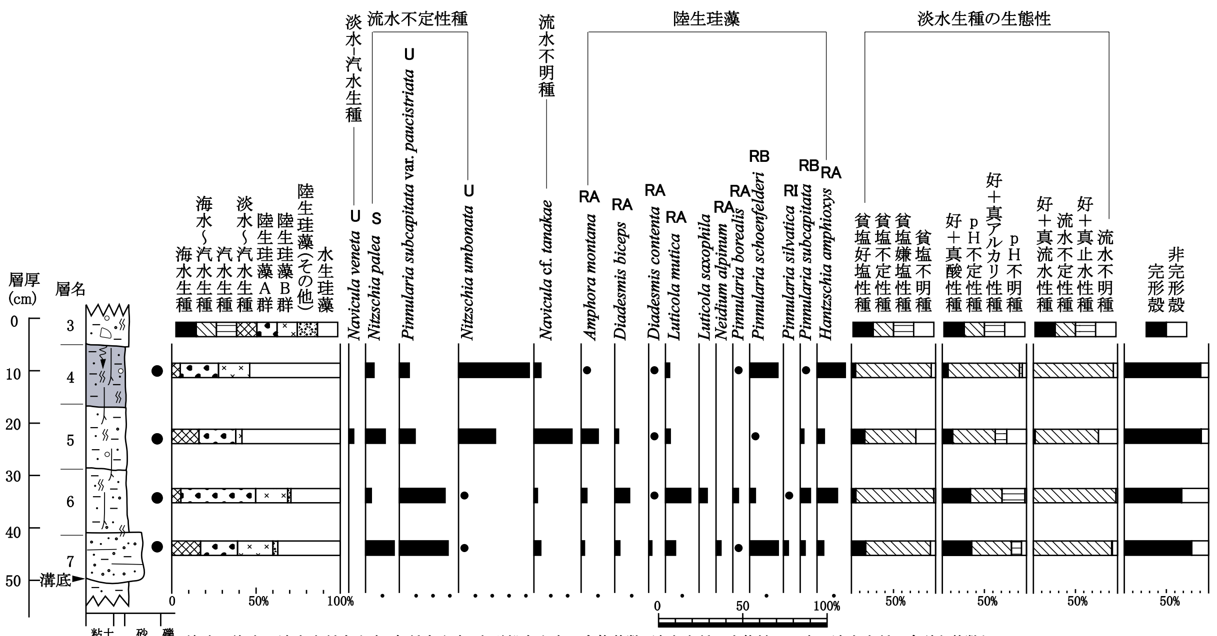
### （１）珪藻化石

結果を表 2、図 2 に示す。珪藻化石は、分析全層準で少ないが、完形殻の出現率は、約 70%以上で保存状態は比較的良い。産出分類群数は、合計で 13 属 30 分類群である

7 層は、淡水域に生育する水生珪藻(以下、水生珪藻と言う)が全体の約 35%、陸上のコケや土壌表面など多少の湿り気を保持した好気的環境に耐性のある陸生珪藻が約 40%、それに淡水～汽水生種が約 20%産出する。淡水性種の生態性(塩分濃度、水素イオン濃度、流水に対する適応性)の特徴は、貧塩不定性種、真＋好アルカリ性種と真＋好酸性種、流水不定性種が多産する。流水不定性で付着性の *Pinnularia subcapitata* var. *paucistriata* が約 30%産出し、同じ生態性で好汚濁性種の *Nitzschia palea* が約 20%、水域にも陸上にも生育する陸生珪藻 B 群の *Pinnularia schoenfelderi* が約 20%産出する。

6 層は、陸生珪藻が約 65%と優占し、水生珪藻が約 30%産出する。淡水生種の生態性の特徴は、7 層と類似する。流水不定性で付着性の *Pinnularia subcapitata* var. *paucistriata* が約 30%検出され、陸生珪藻の中でも耐乾性の高い陸生珪藻Ａ群の *Luticola mutica*、*Hantzschia amphioxys*、*Diadesmis biceps* を伴う。

5 層は、淡水生種の生態性の特徴は、塩分濃度、水素イオン濃度、流水に対する適応性ともに不定性の種類が多い。流水不定性で付着性の *Nitzschia umbonata* と生態性が不明な *Navicula* cf. *tanakae* がそれぞれ約 20%、流水不定性で付着性の *Pinnularia subcapitata* var. *paucistriata*、同じく流水不定




海水－汽水－淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお、●は2 %未満の産出を示す。
(環境指標種, S:好汚濁性種, U:広域適応性種, RA:陸生珪藻A群, RB:陸生珪藻B群, RI:未区分陸生珪藻)

図2　主要珪藻化石群集の層位分布

表2. 珪藻分析結果

| 種　　類 | 生態性 | | | 環境指標種 | 地点・層名 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | 224DS050 | | | |
| | 塩分 | pH | 流水 | | 4 | 5 | 6 | 7 |
| Bacillariophyta(珪藻植物門) | | | | | | | | |
| Araphid Pennate Diatoms(無縦溝羽状珪藻類) | | | | | | | | |
| *Staurosira venter* (Ehren.)H.Kobayasi | Ogh-ind | al-il | l-ph | U | - | - | - | 1 |
| Raphid Pennate Diatoms(有縦溝羽状珪藻類) | | | | | | | | |
| Biraphid Pennate Diatoms(双縦溝羽状珪藻類) | | | | | | | | |
| *Amphora montana* Krasske | Ogh-ind | ind | ind | RA,U | 2 | 14 | 5 | 2 |
| *Diploneis parma* Cleve | Ogh-ind | ind | ind | | 1 | - | - | - |
| *Hippodonta linearis* (Oestrup)Lange-B.,Metzeltin et Witkowski | Ogh-Meh | al-il | ind | U | - | 1 | - | - |
| *Navicula veneta* Kuetzing | Ogh-Meh | al-il | ind | U | - | 4 | - | - |
| *Navicula ignota* Krasske | Ogh-ind | ind | ind | RB,T | 1 | - | 2 | - |
| *Navicula* cf. *tanakae* Fukush.,Ts.Kobay. & Yoshit. nov. sp. | Ogh-unk | unk | unk | | 5 | 31 | 3 | 4 |
| *Navicula tenelloides* Hustedt | Ogh-unk | unk | r-ph | J,U,RI | - | 1 | - | - |
| *Stauroneis obtusa* Lagerstedt | Ogh-ind | ind | ind | RB | - | - | 1 | - |
| *Diadesmis biceps* Arnott ex Grunow in Van Heurck | Ogh-ind | al-il | ind | RA,T | - | 3 | 13 | 3 |
| *Diadesmis contenta* (Grun.ex Van Heurck)D.G.Mann | Ogh-ind | al-il | ind | RA,T | 1 | 2 | 2 | 2 |
| *Luticola mutica* (Kuetz.)D.G.Mann | Ogh-ind | al-il | ind | RA,S | 3 | 4 | 22 | 6 |
| *Luticola paramutica* (Bock)D.G.Mann | Ogh-ind | ind | ind | RB | - | - | 2 | 1 |
| *Luticola saxophila* (Bock ex Hustedt)D.G.Mann | Ogh-ind | ind | ind | RB | - | - | 7 | - |
| *Luticola ventricosa* (Kuetz.)D.G.Mann | Ogh-ind | ind | ind | RI,U | - | - | 1 | - |
| *Neidium alpinum* Hustedt | Ogh-ind | ac-il | ind | RA | - | - | - | 3 |
| *Pinnularia borealis* Ehrenberg | Ogh-ind | ind | ind | RA,U | 1 | - | 5 | 1 |
| *Pinnularia gibba* Ehrenberg | Ogh-ind | ac-il | ind | O,U | - | 1 | - | - |
| *Pinnularia obscura* Krasske | Ogh-ind | ind | ind | RA | - | 1 | - | 1 |
| *Pinnularia schoenfelderi* Krammer | Ogh-ind | ind | ind | RB | 20 | 2 | 5 | 17 |
| *Pinnularia silvatica* Petersen | Ogh-ind | ind | ind | RI | - | - | 2 | 3 |
| *Pinnularia subcapitata* Gregory | Ogh-ind | ac-il | ind | RB,S | 1 | 3 | 9 | 3 |
| *Pinnularia subcapitata* var. *paucistriata* (Grun.)Cleve | Ogh-ind | ac-il | ind | U | 7 | 13 | 40 | 29 |
| *Pinnularia* spp. | Ogh-unk | unk | unk | | - | - | - | 1 |
| 管縦溝類 | | | | | | | | |
| *Hantzschia amphioxys* (Ehr.)Grunow | Ogh-ind | ind | ind | RA,U | 20 | 6 | 18 | 4 |
| *Nitzschia brevissima* Grunow | Ogh-Meh | al-il | ind | RB,U | - | - | 2 | - |
| *Nitzschia inconspicua* Grunow | Ogh-Meh | al-il | ind | U | - | 1 | 1 | - |
| *Nitzschia palea* (Kuetz.)W.Smith | Ogh-Meh | ind | ind | S | 6 | 16 | 5 | 17 |
| *Nitzschia tubicola* Grunow | Ogh-ind | al-il | ind | S | - | 2 | - | - |
| *Nitzschia umbonata* (Ehr.)Lange-B. | Ogh-ind | ind | ind | U | 50 | 30 | 2 | 1 |
| *Nitzschia* spp. | Ogh-unk | unk | unk | | 1 | - | - | - |
| 翼管縦溝類 | | | | | | | | |
| *Surirella minuta* Brebisson | Ogh-ind | al-il | r-ph | U | - | 2 | - | - |
| *Surirella* spp. | Ogh-unk | unk | unk | | - | - | - | 1 |
| 海水生種 | | | | | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 海水～汽水生種 | | | | | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 汽水生種 | | | | | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 淡水～汽水生種 | | | | | 11 | 53 | 11 | 21 |
| 淡水生種 | | | | | 108 | 84 | 136 | 79 |
| 珪藻化石総数 | | | | | 119 | 137 | 147 | 100 |

珪藻の適応性

| | | |
|---|---|---|
| H.R. :塩分濃度 | pH :水素イオン濃度 | C.R.:流水 |
| Meh :汽水生種 | al-bi :真アルカリ性種 | l-bi :真止水性種 |
| Ogh-Meh:淡水－汽水生種 | al-il :好アルカリ性種 | l-ph :好止水性種 |
| Ogh-hil:貧塩好塩性種 | ind :pH不定性種 | ind :流水不定性種 |
| Ogh-ind:貧塩不定性種 | ac-il :好酸性種 | r-ph :好流水性種 |
| Ogh-hob:貧塩嫌塩性種 | ac-bi :真酸性種 | r-bi :真流水性種 |
| Ogh-unk:貧塩不明種 | unk :pH不明種 | unk :流水不明種 |

環境指標種群

性で好汚濁性種の *Nitzschia palea*、それに陸生珪藻Ａ群の *Amphora montana* が約 10%産出する。

4 層は、水生珪藻と陸生珪藻とがほぼ半々づつ産出する。淡水生種の生態性の特徴は、塩分濃度、水素イオン濃度、流水に対する適応性ともに不定性種が優占する。流水不定性で付着性の *Nitzschia umbonata* が約 50%産出し、陸生珪藻 B 群の *Pinnularia schoenfelderi*、陸生珪藻Ａ群の *Hantzschia amphioxys* がそれぞれ約 20%産出する。

（２）花粉・寄生虫卵分析

花粉分析・寄生虫卵分析の結果を表 3、図 3 に示す。

試料 1cc あたりの花粉・胞子数は、6 層が 2000 個/cc であるほかは、4 層、5 層が 3 桁台、7 層が 2 桁台と極端に少ない。またいずれの試料も保存状態が悪い。

全ての試料に共通する傾向として草本類が多いことが挙げられる。多産した 6 層をみると、草本類ではイネ科が多く、その中にイネ属も含まれる。ただし、イネ属と思われるが、保存状態が悪く特徴が明瞭でない個体を他のイネ科に加えたため、実際のイネ属はこれより若干多いと思われる。その他、アカザ科、ナデシコ科、アブラナ科、ヨモギ属などが検出される。木本類では、マツ属、スギ属、コナラ亜属、アカガシ亜属、アカメガシワ属などが検出あれるが、草本類に比べると少ない。イネ属以外の栽培種(もしくは栽培種を多く含む種類)は、ソバ属、ベニバナ属、カキ属である。花粉化石が少ない 4 層・5 層・7 層では、産出数が少なく傾向が明瞭ではないが、概ね 6 層と類似する。

寄生虫卵は、6 層から鞭虫卵

表3. 花粉･寄生虫卵分析結果

| 種　類 | 地点･層名 | | | |
|---|---|---|---|---|
| | 224DS050 | | | |
| | 4層 | 5層 | 6層 | 7層 |
| 木本花粉 | | | | |
| モミ属 | － | － | 4 | 9 |
| ツガ属 | － | － | 5 | 11 |
| マツ属複維管束亜属 | － | － | 24 | 16 |
| マツ属(不明) | － | － | 22 | 29 |
| スギ属 | － | 1 | 9 | 12 |
| イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科 | － | － | 2 | － |
| ヤマモモ属 | － | － | 1 | － |
| クマシデ属－アサダ属 | － | － | 1 | － |
| カバノキ属 | － | － | 2 | － |
| ブナ属 | 1 | － | 3 | － |
| コナラ属コナラ亜属 | － | － | 13 | － |
| コナラ属アカガシ亜属 | － | － | 11 | － |
| エノキ属―ムクノキ属 | － | － | 1 | － |
| アカメガシワ属 | － | － | 14 | － |
| ウコギ科 | － | － | 1 | － |
| カキノキ属 | － | － | 1 | － |
| 草本花粉 | | | | |
| ガマ属 | － | － | 2 | － |
| イネ属 | 1 | － | 43 | 10 |
| 他のイネ科 | 16 | 4 | 481 | 63 |
| カヤツリグサ科 | 1 | 1 | 14 | 4 |
| クワ科 | － | － | 5 | － |
| サナエタデ節－ウナギツカミ節 | 1 | － | 6 | 8 |
| ソバ属 | － | － | 15 | 1 |
| アカザ科 | 18 | 1 | 73 | 23 |
| スベリヒユ属 | － | － | 1 | － |
| ナデシコ科 | 24 | 7 | 56 | 3 |
| アブラナ科 | 10 | 7 | 32 | 8 |
| アリノトウグサ属 | － | － | 1 | － |
| オミナエシ属 | － | － | 1 | － |
| ヨモギ属 | 7 | 3 | 10 | 2 |
| ベニバナ属 | － | － | 1 | － |
| キク亜科 | 1 | － | 4 | － |
| タンポポ亜科 | － | － | 1 | － |
| 不明花粉 | － | － | 2 | 1 |
| シダ類胞子 | | | | |
| 他のシダ類胞子 | 40 | 19 | 77 | 39 |
| 合　計 | | | | |
| 木本花粉 | 1 | 1 | 114 | 77 |
| 草本花粉 | 79 | 23 | 746 | 122 |
| 不明花粉 | 0 | 0 | 2 | 1 |
| シダ類胞子 | 40 | 19 | 77 | 39 |
| 総計(不明を除く) | 120 | 43 | 937 | 238 |
| その他 | | | | |
| 鞭虫卵 | － | － | 6 | － |
| 試料1ccあたりの個数 | | | | |
| 花粉･胞子数 | 300 | 100 | 2300 | 20 |
| 寄生虫卵数 | － | － | 20 | － |

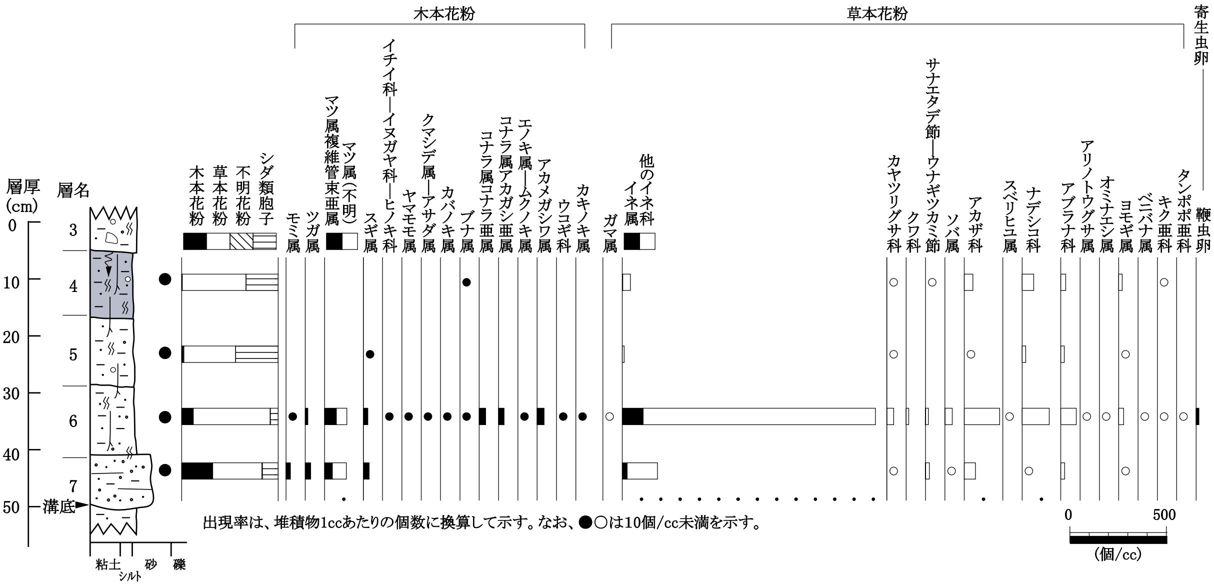



図3 花粉化石・寄生虫卵群集の層位分布

がわずかに検出された程度であり、1cc あたりに換算しても 20 個程度である。

（３）植物珪酸体分析

結果を表4、図4に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。

7層は植物珪酸体含量が少なく、約700個/gである。栽培植物であるイネ属が検出され、葉部の短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体が見られる。その含量は少なく、いずれも100個/g未満である。またタケ亜科等もわずかに見られる。

6 層～4 層は植物珪酸体含量が多く、6 層で約 2.3 万個/g、5 層で約 5.2 万個/g、4 層で約 10.3 万個/g と上位層準ほど含量密度が高くなる。産出分類群の構成は、いずれの層準も同様であり、栽培種のイネ属、ネザサ節を含むタケ亜科、ヨシ属、ススキ属を含むウ

表4. 植物珪酸体含量

| 種　類 | 地点・層名 | | | |
|---|---|---|---|---|
| | 224SD050 | | | |
| | 4層 | 5層 | 6層 | 7層 |
| イネ科葉部短細胞珪酸体 | | | | |
| イネ族イネ属 | 19,000 | 11,800 | 2,800 | <100 |
| キビ族チゴザサ属 | 600 | 100 | 200 | − |
| タケ亜科ネザサ節 | 7,700 | 4,200 | 1,400 | − |
| タケ亜科 | 17,700 | 9,500 | 3,600 | <100 |
| ヨシ属 | 600 | 500 | 700 | − |
| ウシクサ族ススキ属 | 2,300 | 1,600 | 800 | − |
| イチゴツナギ亜科 | 300 | 700 | 300 | − |
| 不明キビ型 | 11,900 | 5,100 | 2,900 | − |
| 不明ヒゲシバ型 | 600 | 700 | 200 | − |
| 不明ダンチク型 | 3,500 | 2,300 | 700 | 100 |
| イネ科葉身機動細胞珪酸体 | | | | |
| イネ族イネ属 | 10,300 | 3,700 | 1,900 | <100 |
| タケ亜科ネザサ節 | 8,400 | 2,500 | 900 | <100 |
| タケ亜科 | 1,900 | 2,000 | 400 | 200 |
| ヨシ属 | 1,900 | 700 | 1,600 | − |
| ウシクサ族 | 3,900 | 2,300 | 1,900 | − |
| 不明 | 9,000 | 2,900 | 2,400 | 300 |
| 珪化組織片 | | | | |
| イネ属穎珪酸体 | 2,600 | 1,100 | 200 | − |
| 合　計 | | | | |
| イネ科葉部短細胞珪酸体 | 64,500 | 36,400 | 13,500 | 200 |
| イネ科葉身機動細胞珪酸体 | 35,500 | 14,200 | 9,200 | 500 |
| 珪化組織片 | 2,600 | 1,100 | 200 | 0 |
| 総　計 | 102,600 | 51,700 | 22,800 | 700 |

数値は含量密度(個/g)を示す。含量密度値は、10の位で丸めて表示する。<100は100個/g未満を示す。

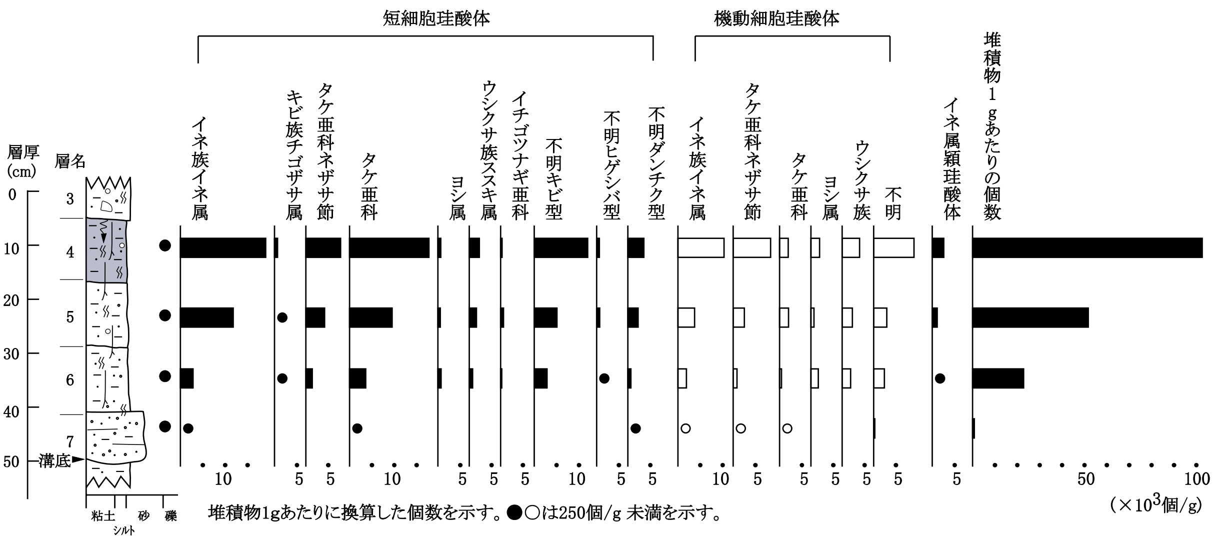



図4 植物珪酸体含量の層位分布

シクサ族、イチゴツナギ亜科等からなる。栽培種のイネ属には、葉部の他に穎(籾)に形成される穎珪酸体も認められる、栽培種のイネ属の産状が他の分類群に比較して目立つ。その含量密度は、6 層の短細胞珪酸体が約 2,800 個/g、機動細胞珪酸体が約 1,900 個/g、穎珪酸体が約 200 個/g、5 層の短細胞珪酸体が約 1.2 万個/g、機動細胞珪酸体が約 3,700 個/g、穎珪酸体が約 1,100 個/g、4 層の短細胞珪酸体が約 1.9 万個/g、機動細胞珪酸体が約 1.0 万個/g、穎珪酸体が約 2,600 個/g である。また各層準ではイネ属に次いで、ネザサ節を含むタケ亜科の産出が目立つ。

（4）種実遺体分析

結果を表５に示す。7層からは、草本2分類群(スベリヒユ科、アカザ科)18個の種実と、最大径3mmの炭化材0.01g未満が検出された。5層、4層は、種実は検出されず、炭化材が5層から0.03g(最大径5.3mm)、4層から0.02g(最大径3mm)検出されるのみであった。以下に、種実の形態的特徴を記す。

表5 種実分析結果

| 分類群 | 部位 | 状態 | 層名 | | |
|---|---|---|---|---|---|
| | | | 4層 | 5層 | 7層 |
| スベリヒユ科 | 種子 | 完形 | ― | ― | 12 |
| | | 破片 | ― | ― | 1 |
| アカザ科 | 種子 | 破片 | ― | ― | 5 |
| 炭化材 | | | 0.02g(3mm) | 0.03g(5.3mm) | <0.01g(3mm) |
| 昆虫 | | | ― | ― | 3 |
| 分析量 | | | 200cc<br>333.65g | 200cc<br>314.99g | 200cc<br>371.16g |

・スベリヒユ科(Portulacaceae)

種子が検出された。黒色、径0.7～0.9㎜程度のやや偏平な腎状円形。基部は凹み、臍がある。臍には種柄の一部が残る。種皮表面には鈍円錐状突起が臍から同心円状に配列する。

・アカザ科(Chenopodiaceae)

種子の破片が検出された。黒色、径 1.2㎜ 程度のやや偏平な円盤状。基部は凹み、臍がある。種皮表面には臍を取り囲むように微細な網目模様が放射状に配列し、光沢がある。

## 4　考察

（1）層相および珪藻化石からみた堆積環境

溝埋土最下位の 7 層は、部分的に葉理構造の認められる灰色を呈する泥・中粒砂混じり極細粒～細粒砂からなる。層相から水流の影響下で形成された堆積物であることが推定される。本層準の珪藻化石群

集は、*Nitzschia palea* など好汚濁性種を含む流水不定性種と、陸生珪藻の種が多産する。流水不定性種で最も多産した *Pinnularia subcapitata* var. *paucistriata* は、沼沢や水田に多く生育する付着生種で、水田では水のない冬季にも生存する耐乾性が高い種でもある。陸生珪藻では最も多産した *Pinnularia schoenfelderi* が水域にも陸域にも水中にも生育する陸生珪藻 B 群であり、このほか、分布がほぼ陸域に限られる耐乾性の高い陸生珪藻A群からなる。このように７層の珪藻化石群集は、水域に生育する珪藻と陸域に生育する珪藻が混在することが特徴であり、層相をふまえると、溝下部を充填した７層形成期の溝内は、水が流下する時期を挟在するものの、離水する時期も存在し、水質的には有機汚濁が進んでいたことが推定される。

6 層は褐灰色を呈する著しく擾乱された泥質砂からなり、初生の堆積構造は不明瞭となっている。本層の珪藻化石群集は直下の７層の群集に類似するが、陸生珪藻の割合が増加する点で異なる。特に６層では多少の湿り気のある土壌表面、岩の表面、コケなど常に大気に曝された好気的環境(陸域)に分布が限られる陸生珪藻 A 群が多産する。7 層で多産した耐乾性が高い *Pinnularia subcapitata* var. *paucistriata* も産出する。このような層相および珪藻化石群群集の特徴から、６層形成期には、溝内に定常的に水が存在していたのではなく、しばしば干上がり土壌発達する時期を挟在する湿った場所へと変化したことが考えられる。なお、本層準で認められた生育環境の異なる群集から構成された珪藻群集は混合群集といわれており､河川の氾濫などによって短期間に堆積した一過性の堆積物や、水田耕作土のような水域環境の変化が大きい堆積物などの珪藻群集に特徴的に認められることが指摘されている(堀内･高橋･橋本,1996)。今回の溝埋土の混合群集は、溝内に周辺の土壌などが流入することによって形成された可能性が高い。下記するように６層からは栽培植物のイネ属植物植物珪酸体が産出することもが著しく擾乱された土壌起源のものに由来することとも同調的である。

5 層・4 層は暗灰色～黒灰色を呈する擾乱された砂質泥からなる。上位の 4 層では擾乱が顕著であり、粒団などの土壌構造が確認される。5 層・4 層になると珪藻化石群集は多少変化する。多産する *Nitzschia umbonata* は、栄養塩類の豊富な富栄養の水域や汚濁の進んだ強腐水域からも産出するほか、塩類を豊富に含む温泉からも産出する(Krammer, K. & Lange-Bertalot, H.,1988)。また、流水不明種の *Navicula* cf. *tanakae* は、福島・小林・吉武(2002)によって群馬県内の温泉で新種記載された種で、塩分や塩類の豊富な水域を好む種である。このほか、陸生珪藻も産出する。このことから、５層～４層形成期も、しばしば離水する汚濁した沼沢～湿地のような場所であったことが推定される。特に４層形成期には溝内が植生に覆われるようになり、土壌発達する場所へ変化したことが推定される。放置されていた可能性がある。

（２）植物化石の産状からみた溝埋積期の植生

今回調査を行った平安時代末の溝埋土の花粉化石群集は、6 層で全体に占める草本花粉の割合が約80%と高いのが特徴であり、木本花粉の割合は 10%程度と著しく低い。6 層以外の層準も、傾向は類似するが、花粉化石の保存状態が悪い点や、産出数が少ないことから、それらの層準の結果の信頼度は低く、偏った可能性になっている可能性がある。花粉化石は好気的環境下における分解に弱く(中村,1967 等)、上記したように溝内の堆積環境は乾湿を繰り返しているこいとから、好気的条件になった時期などに花粉の風化が進行した可能性が高い。

6層のように草本花粉の割合が高い傾向は、大宰府に関連する古代の遺構の花粉分析結果に共通する傾向である(例えば、パリノ・サーヴェイ,2004,2005など)。ただし、6層てはイネ科が極端に多産するという特異な産状を示した。イネ科を主とする草本類がほとんどを占める傾向は、太宰府条坊跡第168

次調査SK475やSE470、120次調査SD061でもみられる。イネ科花粉は風媒花であり花粉生産量が多い種が多いことから、花粉化石群集では周辺植生の割合に比べて過大に評価される場合が多い。このため、実際には、花粉化石群集の産出率ほどイネ科草本類が周辺植生において優勢であったのではなく、他の随伴する種類であるアカザ科、ナデシコ科、アブラナ科、ヨモギ属等も多く生育していたものと思われる。一方、植物珪酸体ではネザサ節、ヨシ属、ススキ属、イチゴツナギ亜科等のイネ科植物が産出し、これらの生育も推測される。また、種実は検出数が少なかったが、アカザ科や人里植物であるスベリヒユ科が検出され、当時生育していたものに由来するとみられる。

これまでの調査によると、古墳時代以前の花粉化石群集は、アカガシ亜属、シイノキ属などの常緑樹や、ハンノキ属、エノキ属—ムクノキ属など湿地を好む樹木が多いことから、低地には湿地林が、丘陵地には常緑広葉樹林が覆っていたことが示唆される。その後、古代以降になると低地は開発が進んで草地化し、丘陵地は森林破壊によってマツなどの二次林がみられるようになったと推測されている。今回の結果も、これまでの傾向を追従するものであるが、草本花粉の検出が極端に多い。堆積機構の違いにより局地的な植生を反映したことも想定されるが、明確な理由は不明である。

木本の花粉化石に着目すると、スギ属やアカガシ亜属は丘陵地の植生を、マツ属やコナラ亜属は開発による破壊行為の後に生育した代償植生に由来する可能性がある。これまでの成果と矛盾しないが、木本花粉の産出数が少ないことから、各種類の産出率に基づく検討が困難である。

栽培植物に由来する花粉化石に着目すると、イネ属、ソバ属、ベニバナ属、カキ属が産出したことから、これらの栽培・利用が考えられる。いずれの種類も各地の古代の遺跡から検出例の多い種類である。一方、植物珪酸体では、全ての層位から栽培種のイネ属が産出する。これまでの分析調査においても、大宰府条坊第176次調査の平安時代末期とされる溝や、大宰府条坊跡第225次のSE002・020・036の9世紀後半～14世紀後半にわたる井戸跡でイネ属の産出が確認されている。今回の結果では、上位層準ほどイネ属の含量密度が高くなるが、他の種類も同様に増加することから、溝周辺での水田耕作が活発になったことを示しているのではなく、上記した堆積環境の変化により、植物珪酸体が蓄積されやすい状況になったことに起因するものと判断される。いずれにしても溝の周辺では稲作が行われていた可能性が高い。

一方、寄生虫卵分析の結果、寄生虫卵は鞭虫卵のみ検出され、含量密度は 20 個/cc 程度である。草本花粉が非常に多い点や、ベニバナ属など栽培種を含む点は、平城京の邸宅跡に伴う溝埋積物の組成に似るが(金原・金原,1995)、今回の場合検出数が非常に少ない。この程度の寄生虫卵の含量密度は、遺跡の分析調査事例では珍しくなく、当時の生活に伴う汚染の範囲内とされる(金原・金原,1992)。ただし、今回は保存状態が悪かったことから、本来多く含まれていたものが分解によって減少している可能性もある。

引用文献

安藤　一男,1990,淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用.東北地理,42,73-88.

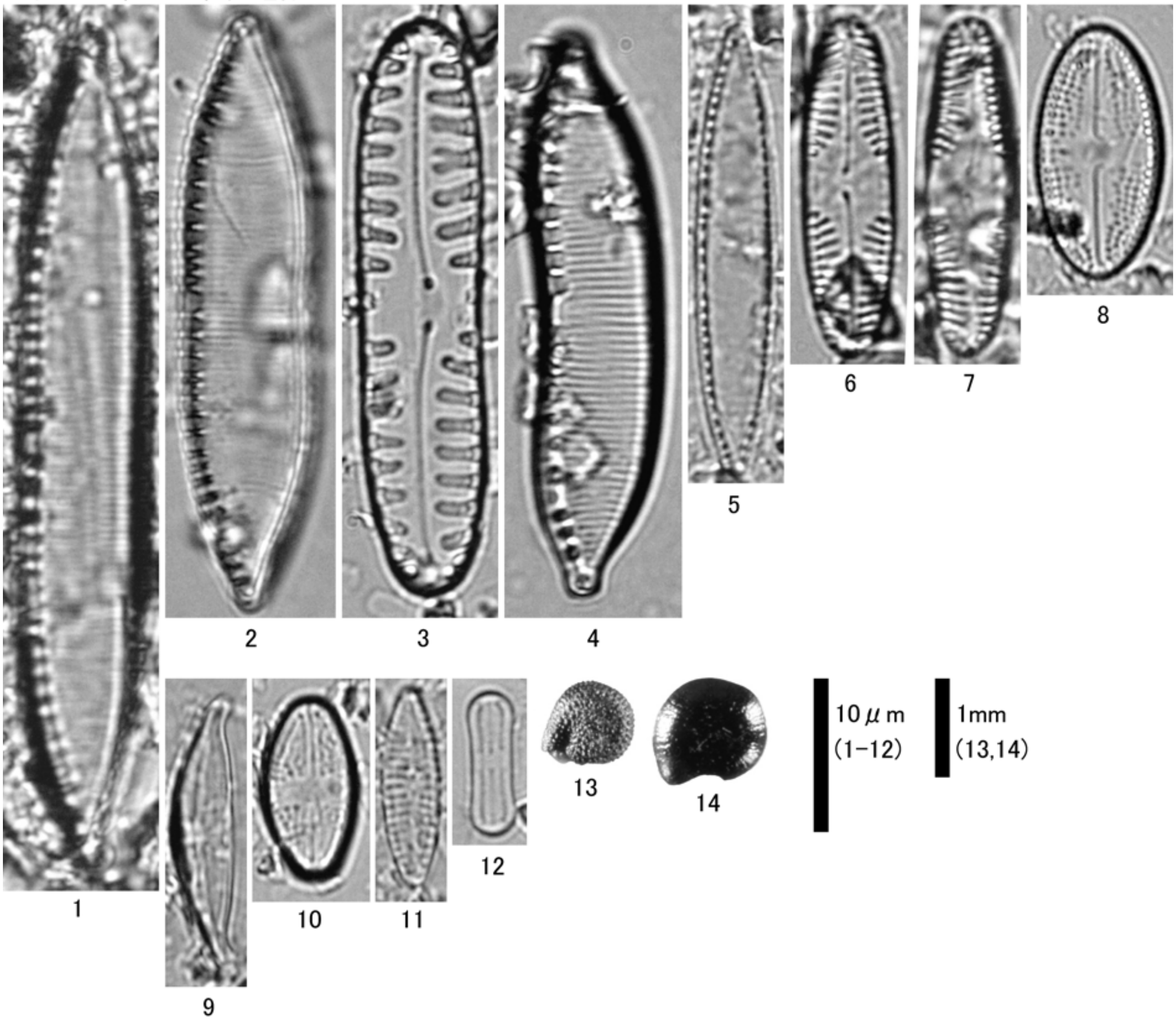
Asai, K. & Watanabe, T.,1995,Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution(2)Saprophilous and saproxenous taxa. *Diatom,10*, 35-47.

原口　和夫・三友　清史・小林　弘,1998,埼玉の藻類　珪藻類.埼玉県植物誌,埼玉県教育委員会,527-600.

福島 博・小林 艶子・吉武 佐紀子,2002,温泉産新種珪藻,Navicula tanakae Fukush.,Ts.Kobay. & Yoshit. nov. sp.について.珪藻学会誌,18,13-21.
Hustedt, F.,1937-1939,*Systematische und okologische Untersuchungen uber die Diatomeen-Flora von Java,, Bali und Sumatra.* Archiv fur Hydrobiology, Supplement,15:131-177,15:187-295,15:393-506,15:638-790, 16:1-155,16:274-394.
堀内誠示・高橋　敦・橋本真紀夫,1996,珪藻化石群集による低地堆積物の古環境推定について. －混合群集の認定と堆積環境の解釈－, 日本文化財科学会, 第13回大会研究発表要旨集, 62-63.
伊藤　良永・堀内　誠示,1991,陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用.珪藻学会誌,6,23-45.
石川　茂雄,1994,原色日本植物種子写真図鑑.石川茂雄図鑑刊行委員会,328p.
金原　正明・金原　正子,1992,花粉分析および寄生虫.藤原京跡の便所遺構　－右京七条一坊西北坪－,奈良国立文化財研究所,12-15.
金原正明・金原正子,1995,二条大路・東二坊坊間路側溝およびSD5100・5300における花粉分析と寄生虫卵分析.平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告一長屋王邸・藤原麻呂邸の調査,奈良国立文化財研究所学報,4,奈良国立文化財研究所.
近藤　錬三,2004,植物ケイ酸体研究.ペドロジスト,48,46-64.
小杉　正人,1988,珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用.第四紀研究,27,1-20.
小林 弘・出井 雅彦・真山 茂樹・南雲 保・長田 啓五,2006,小林弘珪藻図鑑.第1巻,㈱内田老鶴圃,531p.
Krammer, K.,1992,*PINNULARIA.eine Monographie der europaischen Taxa.BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND26.* J.CRAMER,353p.
Krammer, K. & Lange-Bertalot, H.,1986,*Bacillariophyceae.1.Teil: Naviculaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/1.* Gustav Fischer Verlag,876p.
Krammer, K. & Lange-Bertalot, H.,1988,*Bacillariophyceae.2.Teil: Epithemiaceae,Bacillariaceae, Surirellaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/2.* Gustav Fischer Verlag,536p.
Krammer, K. & Lange-Bertalot, H.,1991a,*Bacillariophyceae.3.Teil: Centrales,Fragilariaceae,Eunotiaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/3.* Gustav Fischer Verlag,230p.
Krammer, K. & Lange-Bertalot, H.,1991b,*Bacillariophyceae.4.Teil: Achnanthaceae,Kritsche Ergaenzungen zu Navicula(Lineolatae) und Gomphonema. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/4.* Gustav Fischer Verlag,248p.
Lowe, R.L,1974,*Environmental Requirements and pollution Tolerance of Fresh-water Diatoms.* 334p. In Environmental Monitoring Ser.EPA Report 670/4-74-005. Nat. Environmental Res. Center Office of Res. Develop., U.S. Environ. Protect. Agency, Cincinati.
中村　純,1967,花粉分析.古今書院,232p.
中山　至大・井之口希秀・南谷　忠志,2000,日本植物種子図鑑.東北大学出版会,642p.
Round, F. E.., Crawford, R. M. & Mann, D. G.1990,*The diatoms. Biology & morphology of the genera.* 747p. Cambridge University Press, Cambridge.
パリノ・サーヴェイ株式会社,,2004,自然科学分析.太宰府市の文化財第76集　大宰府条坊跡26-第225次調査-,太宰府市教育委員会,81-91.
パリノ・サーヴェイ株式会社,,2005,自然科学分析.太宰府市の文化財第81集　大宰府条坊跡27-第222・222-2次調査-,太宰府市教育委員会,207-209.

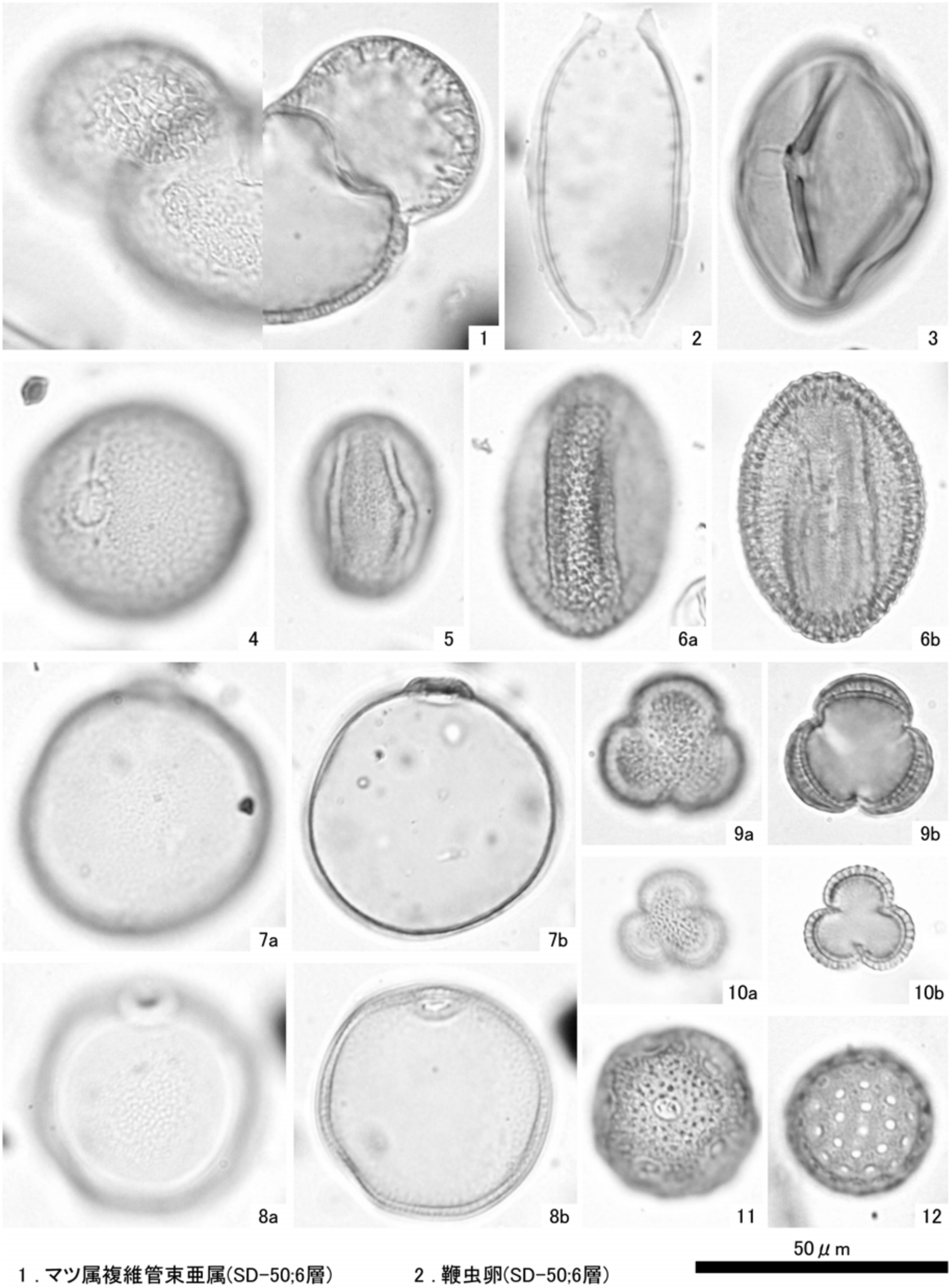
Vos, P.C. & H. de Wolf,1993,Diatoms as a tool for reconstructing sedimentary environments in coastal wetlands; methodological aspects. *Hydrobiologica*,269/270,285-296.
渡辺 仁治・浅井　一視・大塚　泰介・辻　彰洋・伯耆　晶子,2005,淡水珪藻生態図鑑.内田老鶴圃,666p.
柳沢　幸夫,2000,Ⅱ-1-3-2-(5)計数・同定.化石の研究法―採集から最新の解析法まで一,化石研究会,
共立出版株式会社,49-50.

図版1　珪藻化石・種実遺体




1 . *Nitzschia umbonata* (Ehr.)Lange-B.(SD-50;5層)
2 . *Nitzschia umbonata* (Ehr.)Lange-B.(SD-50;4層)
3 . *Pinnularia borealis* Ehrenberg(SD-50;7層)
4 . *Hantzschia amphioxys* (Ehr.)Grunow(SD-50;4層)
5 . *Nitzschia palea* (Kuetz.)W.Smith(SD-50;5層)
6 . *Pinnularia subcapitata* var. *paucistriata* (Grun.)Cleve(SD-50;4層)
7 . *Pinnularia schoenfelderi* Krammer(SD-50;4層)
8 . *Luticola saxophila* (Bock ex Hustedt)D.G.Mann(SD-50;6層)
9 . *Amphora montana* Krasske(SD-50;5層)
10 . *Luticola mutica* (Kuetz.)D.G.Mann(SD-50;6層)
11 . *Navicula* cf. *tanakae* Fukush.,Ts.Kobay. & Yoshit. nov. sp.(SD-50;5層)
12 . *Diadesmis biceps* Arnott ex Grunow in Van Heurck(SD-50;6層)
13 . スベリヒユ科 種子(SD-50;7層)
14 . アカザ科 種子(SD-50;7層)

図版2 花粉化石



1．マツ属複維管束亜属(SD-50;6層)
2．鞭虫卵(SD-50;6層)
3．カキノキ属(SD-50;6層)
4．ブナ属(SD-50;6層)
5．アカガシ亜属(SD-50;6層)
6．ソバ属(SD-50;6層)
7．イネ属(SD-50;6層)
8．他のイネ科(SD-50;6層)
9．ヨモギ属(SD-50;6層)
10．アブラナ科(SD-50;6層)
11．ナデシコ科(SD-50;6層)
12．アカザ科(SD-50;6層)